

(財)群馬文発掘調査事業団調査報告書第26集

上越新幹線関係報告書 第3集

埋蔵文化財発掘調査報告

第3集

熊野堂遺跡(1)

群馬郡群馬町井出字東下井
出・福島字熊野堂所在
熊野堂遺跡第1地区の調査

1984

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

熊野堂遺跡(1)正誤表

頁	訂正箇所
凡例 9.(3)	2.5万分の1迅速図 → 2万分の1迅速図
写真図版目次 5行目	13号住居址出土片口と → 13号住居址出土片口内の
" 11行目	(4区より北を望む) → (4区より南を望む)
第2図 赤枠	2.5mm左側へずれる
8頁	82K03地点 → 82K30地点
第209図 最上部	┌—┐ → — '
222頁 1行目	[第205・206図] → [第205・206図]
239頁 4行目	第210図では → 第220図では
" 17行目	やや北寄り存在する → やや北寄りに存在する
317頁 30行目	2号特殊井戸 → 1号特殊井戸
" 31行目	2号特殊井戸 → 1号特殊井戸
320頁 32行目	八王子中田遺跡 → 八王子中田遺跡
332頁 27行目	「あずま道」地 → 「あずま道」
335頁 8行目	同范関係 → 同范関係
" 9行目	同范復元 → 同范復元
337頁 2行目	寄木状をとどめ → 寄木状をとどめる
" 注2	上野国分寺縁辺地域 → 上野国分僧寺寺域周辺
338頁 10行目	竈管状の斑文が → 竈管状の斑紋が
341頁 20行目	井野川遺跡『高崎 → 井野川遺跡(『高崎
" 40行目	溜地と同義 → 溜池と同義
図版6 下段	炉址内遺物出土状態 → ビット内遺物出土状態
図版59	27号土坑遺物出土状態 → 27号土坑全景
全体図1	4号畠址 → 5号畠址
"	5号畠址 → 4号畠址

資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-310
	調査事業団保管	7
No. 1-2455	平成2年3月31日	(9)

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第3集

熊野堂遺跡(1)

群馬郡群馬町井出字東下井
出・福島字熊野堂所在
熊野堂遺跡第I地区の調査

1984

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本鉄道建設公団

推定東山道

熊野堂遺跡第1地区

猿府川

唐沢川

井野川

熊野堂遺跡

第3地区

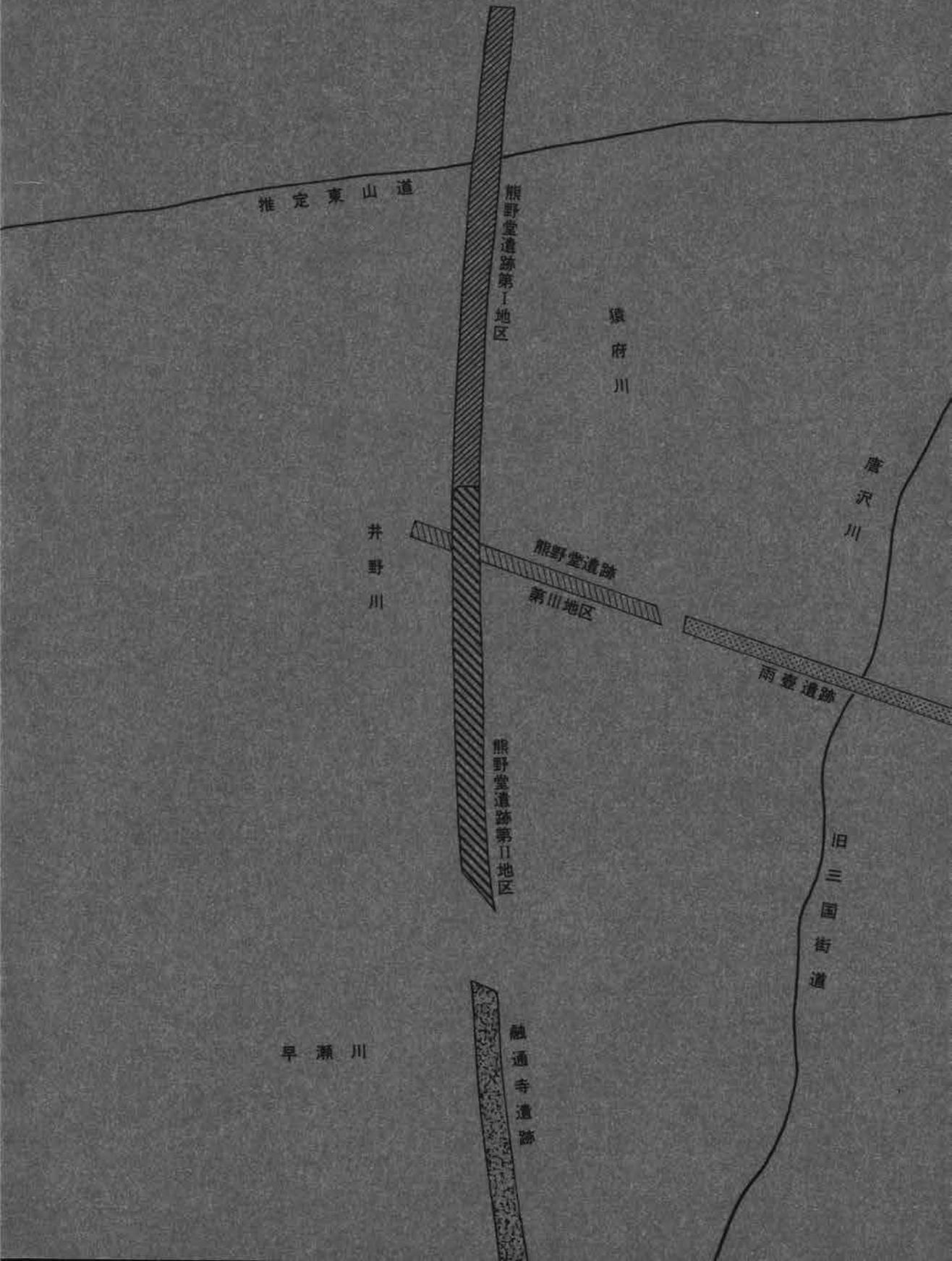
雨壺遺跡

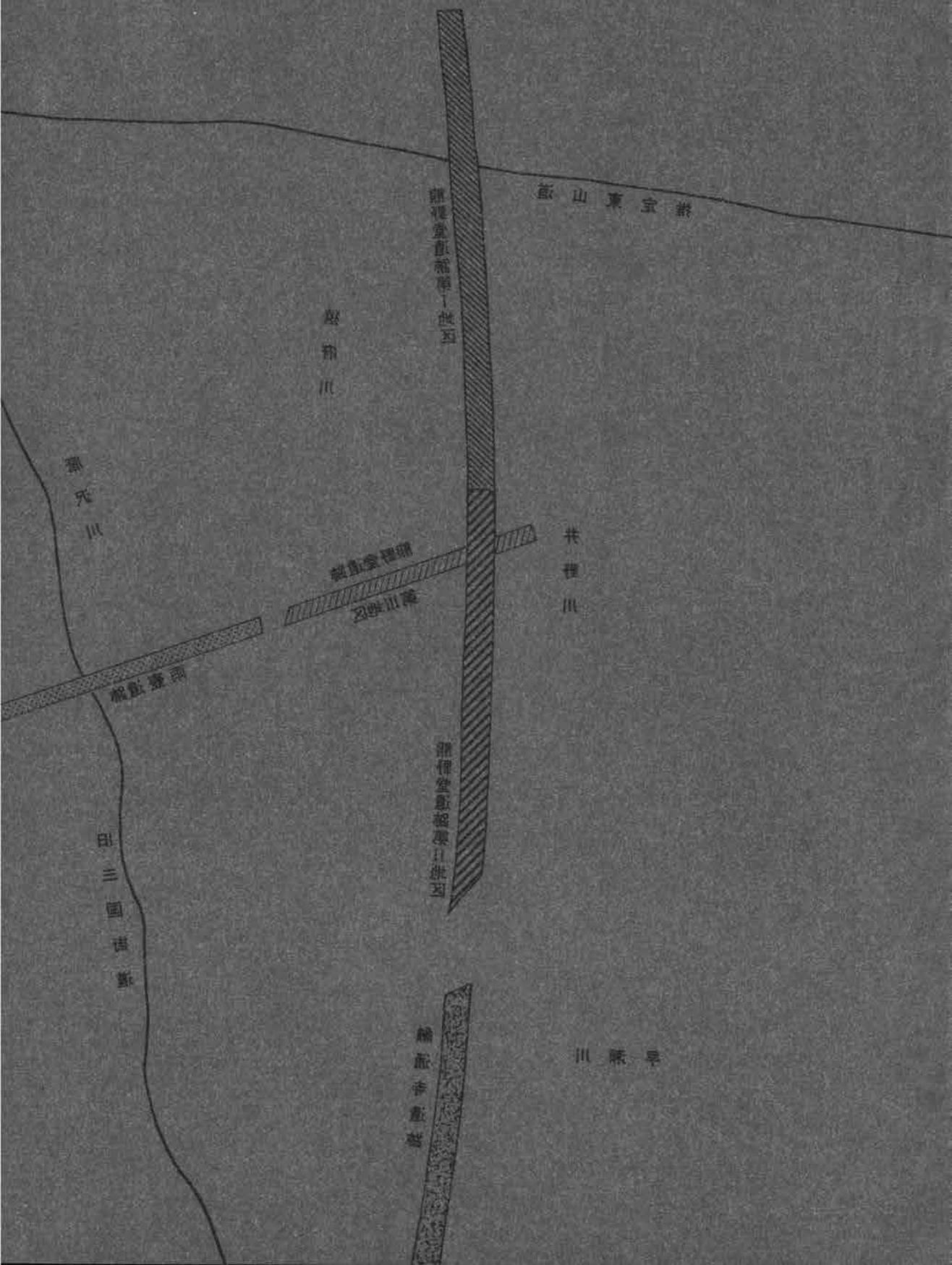
熊野堂遺跡第2地区

旧三国街道

早瀬川

融通寺遺跡





飯山東宝嶽

御禮堂御禮厚一世石

御天川

御天川

共持川

御禮堂御禮厚
二世石

御禮堂御禮厚

御禮堂御禮厚
二世石

田三國法峯

輪流寺遺跡

川原早





遺跡遠景（西方上空より）



13号住居址（弥生末～古墳時代）



3号畠址（古墳時代初頭）



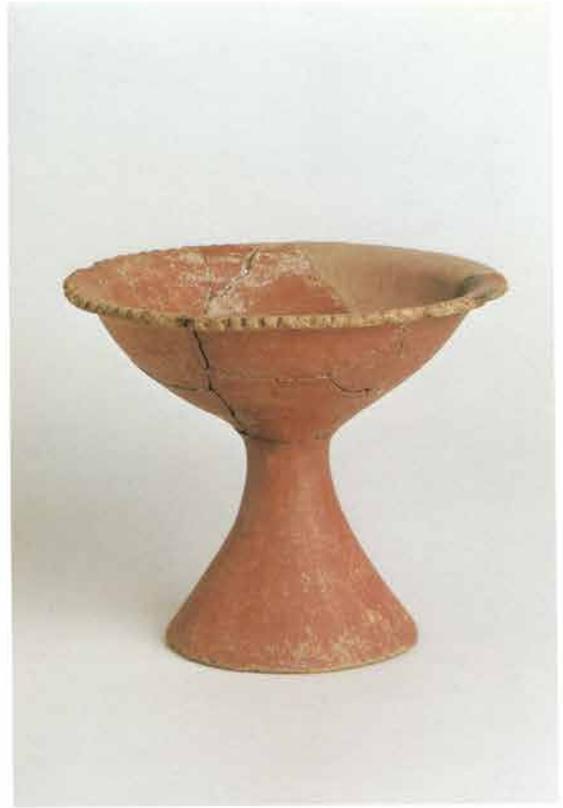
1号特殊井戸（古墳時代後期）



2号特殊井戸（古代）



道路状遺構（古代・推定東山道）



22号住居址出土高杯



13号住居址出土片口内の赤色顔料



16号住居址 貯蔵穴内の
赤色顔料





熊野堂遺跡

村島小上

村島小下

村鏡尻

村櫻並

村高棟

村泉中

村水八大

村水八大

村屍濱

村三島

村寺三

村田井

村野原

村田保

村川濱

村渡瀬南

村堤小上

村堤小下

村小下

村野原

道

北

南

河



984

1053

104

116.5

138.3

102.5

118

132

132

序

首都東京と新潟を結ぶ幹線鉄道として計画された上越新幹線も、昭和57年11月、大宮―新潟間が開通し多くの人々に利用されております。

この新幹線建設工事に伴って、埋蔵文化財の発掘調査も、昭和48年度以来、南は藤岡市から北は利根郡月夜野町にいたるまで、県内各地で実施され、昭和56年度には本線敷内の調査が終了、引き続き調査を継続した側道部分の調査も昭和59年2月に終了し、開始以来11年の歳月を経て、すべての発掘調査を完了させることができました。

ここに報告します熊野堂遺跡第1地区も、その中の一つで、昭和53年度に予備調査、昭和55・56年度に本線敷内調査、昭和57年度には側道敷内調査と4年度にわたる調査を実施したものです。その結果縄文時代から平安時代にいたる住居跡70軒余が調査され、各時期にわたる集落の一部であることが確認されました。本調査地区をとりまく周辺地域にあつては、古墳時代等の水田跡が発見された本遺跡第II地区、古墳時代の豪族の館跡として注目された三ツ寺I遺跡など、井野川中流域にあたるこの地域の古代史解明の上で貴重な資料が続々と発見されており、その中で、水田跡と館跡には含まれた集落地として発見された本遺跡の意義も大きいものといえましょう。

ここに報告書として刊行する運びとなりましたのも、日本鉄道建設公団東京支社の関係者の方々、直接現地でも調査にあたり、整理作業もすすめていただいた担当者をはじめとする多くの方々の厚い御協力と努力の結果であり、厚く感謝の意を表します。

願わくば、調査の成果を納めた本報告書が、広く多くの方々に有効に活用されることを念じ序といたします。

昭和59年3月24日

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水一郎

例 言

1. 本書は、上越新幹線建設工事の施行にともない事前調査された、群馬県群馬郡群馬町所在熊野堂遺跡第Ⅰ地区の発掘調査報告書である。
2. 熊野堂遺跡は、上越新幹線関係調査区域のうち、群馬町部分を第Ⅰ地区、高崎市部分を第Ⅱ地区とした。熊野堂遺跡第Ⅰ地区は、発掘調査段階における「東下井出遺跡」である。
3. 発掘調査段階においては、第Ⅱ地区は「熊野堂遺跡」、本地区は「東下井出遺跡」と呼称したが、これは新幹線用地買収事業との関連、およびその他の事情により、やむを得ない措置であったためである。しかし連続する一つの遺跡であれば、一つの遺跡名であるべきことは自明のことであり、昭和57年度の両地区の調査終了にあたり、「熊野堂遺跡」で統一した。
4. 発掘調査および整理は、昭和53・55・56・57・58年度にわたって、日本鉄道建設公団東京第3工事局と群馬県教育委員会および群馬県埋蔵文化財調査事業団との委託契約に基づいて行われた。委託契約の概要については、「上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告第1集」に、調査の概要については第1章第1節にまとめてある。
5. 各遺構の記述については、原則として実際にその遺構を調査した者が執筆した。なお、執筆分担については第Ⅲ章末に記したが、用語及び表現方法を変更した部分もある。
6. 調査成果のまとめについては、個々の問題点を一部明らかにする程度にとどめた。熊野堂遺跡の全体像の把握は、熊野堂遺跡第Ⅲ地区（県道柏木沢、高崎線改良に伴う発掘調査として、昭和56・57年度に発掘調査を実施）と合わせて、1991年刊行予定の「熊野堂遺跡（2）」（第Ⅱ地区・高崎市大八木町所在）の報告書で予定している。
7. 火山噴出物の識別は、群馬大学教育学部 新井房夫氏にお願いした。
8. 赤色顔料の分析は、群馬県工業試験場 花岡紘一氏と、早稲田大学教育学部 中村忠晴氏にお願いした。
9. プラント・オパール分析は、宮崎大学農学部 藤原宏志氏にお願いした。
10. 花粉分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社をお願いした。
11. 発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸氏に御協力、御助言をいただいた。記して感謝の意を表するものである。（敬称略・五十音順）

相京建史、新井房夫、飯田陽一、石塚久則、市毛勲、梅沢重昭、大江正行、木田光子、久保寺茂、小島敦子、坂本和俊、田口一郎、田部井功、能登健、春山秀幸、平野進一、藤原宏志、増田逸朗、宮沢良太郎、吉川国男
12. 発掘調査の実施にあたり、遺構実測図の作成・調査事務所用地の提供・発掘作業員の募集等、日本鉄道建設公団より全面的な御協力をいただいた。
13. 発掘調査の実施にあたっては、明治大学史学地理学科考古学専攻学生 春山秀幸氏ほか、地

元の多数の方々の御協力をいただいた。

14. 本遺跡の遺構実測図・遺構写真・出土遺物は、群馬県立群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。広く活用されることを希望する。

凡 例

1. 竪穴住居址・掘立柱建物址・井戸・土坑実測図は60分の1で統一した。また土器実測図は3分の1とした
2. 遺構実測図・遺物実測図の遺物番号と土器観察表の土器番号、および遺物写真図版の遺物番号は対応している。
3. 本文中の遺構見出しの後に付した図版番号は、遺構と遺物に分けたが、2ページ以上にわたる場合には、それぞれ最初の図版番号のみを掲載した。
4. 各遺構記述中の確認面は、第5層ローム層以外についてのみ記した。
5. 本文中の下記の火山噴出物は、次の降下時期が想定されている。
浅間A軽石——天明3年(1783)
浅間B軽石——天仁元年(1108)
榛名FP軽石——6世紀中葉～後半
榛名FA火山灰——6世紀前葉
浅間C軽石——4世紀中葉
6. 遺構出土遺物の掲載は、床面直上、覆土中・下層等の当該遺構に伴う可能性の強いものに限定した。
7. 土器観察表中の法量は、推定も含まれる。
8. 出土遺物の色調呼称については、「新版標準土色帖」(農林省農林水産技術会議事務局監修・1976年)に従った。
9. 本書中の地図は、下記発行のものを使用した。

(1) 巻頭図版・第268図	20万分の1地勢図(長野・宇都宮)	建設省国土地理院
(2) 第4図、第5図	5万分の1地形図(榛名山・前橋・富岡・高崎)	建設省国土地理院
(3) 巻頭図版	2.5万分の1迅速図(金古・高崎)	(旧)陸軍参謀本部
(4) 第1図	2.5万分の1群馬町都市計画図	群馬町
(5) 第269図	1万分の1都市計画区域図	群馬町
10. 20分の1遺構実測図の中で、床面下に存在する土坑、ピットは破線で示した。
11. 200分の1全体図の中で、重複する遺構のうち、新しいが浅いために最終的に当初の形が残らなかったものについては、破線で示した。
12. 土器観察表の中で、出土位置については、床面からの高さを記した。なお床面上に存在する

ものについては床面直上、調査の記録が残らなかったものについては、覆土とした。

13. 第IV章の依頼原稿のうち、「東下井出遺跡」という旧名称が使用されていたものについては、「能野堂遺跡第I地区」に変更した。
14. 本文中の方位は磁北である。
15. 土器の穿孔部分には、▲印をつけてその位置を明確にした。
16. 遺構・遺物実測図に用いたスクリーンパターンは、下記のとおりである。



地 山



灰 釉



焼 土



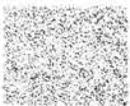
内 黒



灰・炭化物



釉



粘 土

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

第I章 発掘調査と遺跡の概要

- 第1節 調査の概要 1
- 第2節 遺跡の立地と周辺の遺跡 5
- 第3節 標準土層と遺跡の地形 7

第II章 検出された遺構と遺物

- 第1節 縄文時代の竪穴住居址 9
- 第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址 12
- 第3節 古墳時代の竪穴住居址 63
- 第4節 古代の竪穴住居址 103
- 第5節 古代の掘立柱建物址 175
- 第6節 畠 址 184
- 第7節 溝および道路状遺構 190
- 第8節 特殊井戸 226
- 第9節 井 戸 254
- 第10節 土 坑 266
- 第11節 遺構外出土の遺物 290

第III章 調査の成果と問題点

- 第1節 縄文時代の成果とまとめ 312
- 第2節 弥生時代および古墳時代移行期の遺構・遺物について 312
- 第3節 古墳時代の遺構・遺物について 315
- 第4節 古代の遺物・遺構について 321
- 第5節 道路状遺構と推定東山道について 327
- 第6節 出土古瓦について 335

第7節 特殊井戸について	338
--------------------	-----

第IV章 遺構および出土遺物の自然科学的分析

第1節 群馬・熊野堂遺跡第I地区におけるプラント・オパール分析	343
第2節 熊野堂遺跡第I地区花粉分析報告	347
第3節 群馬県熊野堂遺跡第I地区及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料について	355
第4節 原子吸光分析還元気化法による赤色顔料の分析	366

原稿執筆分担	342
--------------	-----

遺 構 索 引	巻末
---------------	----

遺 構 全 体 図	巻末折込み
-----------------	-------

写真図版目次

巻頭図版 1	遺跡周辺航空写真	図版 22	58号住居址全景、59号住居址全景 59号住居址カマド
巻頭図版 2	遺跡遠景 13号住居址	図版 23	61号住居址全景、61号住居址カマド断面 61号住居址カマド
巻頭図版 3	3号畠址 1号特殊井戸	図版 24	20号住居址全景、20号住居址カマド 23号住居址全景
巻頭図版 4	2号特殊井戸 道路状遺構	図版 25	24号址全景、24号址ピット断面 25・26・27号住居址全景
巻頭図版 5	22号住居址出土高杯 13号住居址出土片口と 赤色顔料 16号住居址貯蔵穴内の赤色顔料	図版 26	28・29号住居址全景、28号住居址遺物出土状 態 30号住居址全景
巻頭図版 6	遺跡位置図	図版 27	31号住居址全景、31号住居址遺物出土状態 31号住居址カマド断面
巻頭図版 7	遺跡周辺地形図（明治19年旧陸軍参謀本部作 成）	図版 28	32号住居址全景、33号住居址全景 34・35号住居址全景
図版 1	遺跡近景（調査区南端より北を望む） 遺跡 近景（4区より北を望む） 予備調査風景	図版 29	34号住居址遺物出土状態、38号住居址全景 39号住居址全景
図版 2	4区南下層全景（北より）1区全景（北より） 1区全景（南より）	図版 30	40号住居址全景、41号住居址全景 42号住居址全景
図版 3	17号住居址全景、17号住居址遺物出土状態 4号住居址全景	図版 31	43号住居址全景、43号住居址カマド断面 44号住居址全景
図版 4	4号住居址遺物出土状態、7号住居址全景 8号住居址全景	図版 32	45号住居址カマド、46号住居址全景 47号住居址
図版 5	9号住居址全景、10号住居址全景、10号住居 址遺物出土状態	図版 33	49号住居址全景、50号住居址全景 63号住居址全景
図版 6	11号住居址全景、12号住居址全景、12号住居 址炉址内遺物出土状態	図版 34	64号住居址全景、64号住居址カマド内遺物出 土状態、65号住居址全景
図版 7	13号住居址全景、13号住居址遺物出土状態 13号住居址遺物出土状態	図版 35	66号住居址全景、66号住居址遺物出土状態 66号住居址遺物出土状態
図版 8	15号住居址全景、15号住居址遺物出土状態 16号住居址全景	図版 36	68号住居址カマド、68・69号住居址断面 70号住居址遺物出土状態
図版 9	16号住居址炉址断面、16号住居址赤色顔料出 土の貯蔵穴、16号住居址磨製石鏃出土状態	図版 37	71号住居址カマド、72号住居址 72号住居址遺物出土状態
図版 10	16号住居址遺物出土状態、16号住居址遺物出 土状態、18号住居址全景	図版 38	73号住居址全景、73号住居址掘り方 73号住居址カマド内遺物出土状態
図版 11	18号住居址遺物出土状態、19号住居址炉址周 辺遺物出土状態、21号住居址全景	図版 39	1号掘立柱建物址、2号掘立柱建物址 3号掘立柱建物址
図版 12	22号住居址全景、22号住居址遺物出土状態 36号住居址全景	図版 40	4・5号掘立柱建物址、6号掘立柱建物址 7・8・9号掘立柱建物址
図版 13	36号住居址遺物出土状態、36号住居址炉址断 面 37号住居址全景	図版 41	1・2号畠址、3号畠址 3号畠址
図版 14	48号住居址全景、67号住居址全景、67号住居 址遺物出土状態	図版 42	3号畠址近景、3号畠址近景 3号畠址近景
図版 15	1号住居址全景、1号住居址遺物出土状態 1号住居址カマド断面	図版 43	3号畠址サク断面、4・5号畠址 4・5号畠址近景
図版 16	2号住居址全景、3号住居址全景 5号住居址全景	図版 44	9号溝、10号溝 10号溝東壁断面
図版 17	6号住居址全景、6号住居址遺物出土状態 51・52号住居址	図版 45	11号溝、道路状遺構 道路状遺構
図版 18	51号住居址全景、51号住居址遺物出土状態 51号住居址カマド断面	図版 46	道路状遺構断面、道路状遺構第3次路面 18号溝
図版 19	52号住居址カマド断面、53号住居址全景 53号住居址カマド断面	図版 47	4・5号溝、15号溝
図版 20	54号住居址全景、54号住居址カマド断面 55号住居址全景		
図版 21	56号住居址全景、56号住居址貯蔵穴内遺物出 土状態、57号住居址全景		

	21号溝	図版	78	22・36号住居址出土遺物
図版	48 17号溝、22号溝	図版	79	37号住居址出土遺物
	28・29号溝	図版	80	37・48・67号住居址出土遺物
図版	49 1・2号特殊井戸全景、1号特殊井戸	図版	81	1号住居址出土遺物
	1号特殊井戸源泉部・石敷部	図版	82	2・3号住居址出土遺物
図版	50 1号特殊井戸石敷部断面、1号特殊井戸溝部	図版	83	3号住居址出土遺物
	埋没状態、1号特殊井戸石敷除去後の状態	図版	84	51号住居址出土遺物
図版	51 2号特殊井戸、2号特殊井戸	図版	85	51号住居址出土遺物
	2号特殊井戸石敷北端部断面	図版	86	52号住居址出土遺物
図版	52 2号特殊井戸石敷状態、2号特殊井戸石敷部	図版	87	52・53号住居址出土遺物
	遺物出土状態、2号特殊井戸1号源泉部	図版	88	56号住居址出土遺物
図版	53 2号特殊井戸2号源泉部、2号特殊井戸溝部	図版	89	57・58・59号住居址出土遺物
	の状態、2号特殊井戸溝部東側張り出し	図版	90	59・60・61号住居址出土遺物
図版	54 1号井戸全景、4号井戸全景	図版	91	20・23・26号住居址出土遺物
	6号井戸埋没状態	図版	92	27・28・31号住居址出土遺物
図版	55 7号井戸遺物出土状態、8号井戸全景	図版	93	31・32号住居址出土遺物
	11号井戸全景	図版	94	32号住居址出土遺物
図版	56 13号井戸全景、14号井戸全景	図版	95	33・34・35号住居址出土遺物
	15号井戸埋没および遺物出土状態	図版	96	38・41・42号住居址出土遺物
図版	57 1号土坑全景、9号土坑全景	図版	97	45・50・64・66号住居址出土遺物
	11号土坑遺物出土状態	図版	98	66・68・70・71・72号住居址出土遺物
図版	58 17号土坑全景、20号土坑埋没状態	図版	99	2・10・15号溝出土遺物
	22号土坑遺物出土状態	図版	100	18・19・20号溝、道路状遺構出土遺物
図版	59 25号土坑遺物出土状態、27号土坑遺物出土状	図版	101	15・21号溝出土遺物
	態	図版	102	1号特殊井戸出土遺物
	31号土坑遺物出土状態	図版	103	1号特殊井戸出土遺物
図版	60 43号土坑全景、52号土坑全景	図版	104	1号特殊井戸出土遺物
	54号土坑全景	図版	105	2号特殊井戸出土遺物
図版	61 59号土坑全景、61号土坑全景	図版	106	2号特殊井戸出土遺物
	64・65号土坑全景	図版	107	2号特殊井戸出土遺物
図版	62 68号土坑全景、69号土坑全景	図版	108	2号特殊井戸出土遺物
	70号土坑遺物出土状態	図版	109	2号特殊井戸出土遺物
図版	63 調査風景(4区)調査風景(住居址埋没状態	図版	110	1・7・15号井戸出土遺物
	実測)	図版	111	1・5・7号井戸出土遺物
	調査風景(写真撮影準備)	図版	112	3・22号土坑出土遺物
図版	64 17号住居址出土遺物	図版	113	22・70号土坑出土遺物
図版	65 4号住居址出土遺物	図版	114	11号土坑出土遺物
図版	66 7・9・10号住居址出土遺物	図版	115	11号土坑出土遺物
図版	67 9号住居址出土遺物	図版	116	11・25・31号土坑出土遺物
図版	68 12・13号住居址出土遺物	図版	117	遺構外出土遺物(縄文)
図版	69 13号住居址出土遺物	図版	118	遺構外出土遺物(縄文)
図版	70 15号住居址出土遺物	図版	119	遺構外出土遺物(縄文)
図版	71 16号住居址出土遺物	図版	120	遺構外出土遺物(縄文)
図版	72 16号住居址出土遺物	図版	121	遺構外出土遺物(弥生)
図版	73 16号住居址出土遺物	図版	122	遺構外出土遺物(弥生)
図版	74 18・19号住居址出土遺物	図版	123	遺構外出土遺物(弥生)
図版	75 19・21号住居址出土遺物	図版	124	遺構外出土遺物(弥生・古墳)
図版	76 21・22号住居址出土遺物	図版	125	遺構外出土遺物(古墳・古代)
図版	77 22号住居址出土遺物			

熊野堂遺跡(1)

第I章 発掘調査と遺跡の概要

第1節 調査の概要

遺跡名 熊野堂（くまのどう）遺跡（第I地区）

所在地 群馬県群馬郡群馬町井出字東下井出・群馬町福島字熊野堂（地番については第2図）

調査主体 予備調査 群馬県教育委員会（文化財保護課）

1次調査 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

2次調査 （財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査期間 予備調査 昭和54年1月17日～昭和54年3月27日

1次調査 昭和56年1月12日～昭和56年8月31日

2次調査 昭和57年9月8日～昭和57年10月31日

調査地点 大宮基点82,000m～82,400m

調査面積 8,320㎡

調査担当者・調査員

予備調査

担当者 飯塚卓二 群馬県教育委員会文化財保護課文化財保護主事

調査員 外山政子（現：群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員）

1次調査

担当者 飯塚卓二 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員（県派遣）

〃 井川達雄 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員

〃 坂井隆 〃

調査員 三浦京子 群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員

2次調査

担当者 飯塚卓二 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員（県派遣）

〃 女屋和志雄 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員

〃 井川達雄 〃

調査員 宮下万喜子 群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員

〃 新井順二 〃

調査の方法

予備調査

新幹線建設の計画段階で、遺物分布調査が実施されている。それによると井野川北側の台地上

第I章 発掘調査と遺跡の概要

(高崎市大八木町) から、県道前橋・安中線付近(群馬町井出) までが遺物散布地とされていた(大宮基点81k640m～83k230m、全長1590m)。このうち82k000m以南の高崎市部分(熊野堂遺跡第II地区)については、昭和49年から発掘調査が実施され、遺跡の存在が確定していたが、以北の群馬町部分については、遺物散布の濃密な部分ときわめて希薄な部分とがあるため、遺跡範囲の確定と遺跡の性格を把握する必要から、予備調査を実施した。

調査の結果、遺跡は高崎市熊野堂遺跡に連続する82,000m～82,400m間と、82,850m～83,150m(井出村東遺跡)の2ヶ所となった。なお試掘方法は、左右の側道に幅1mのトレンチを主軸に平行して設定、遺構面近くまでパワーショベルで掘削した。またこの段階では、用地が未買収であったため、日本鉄道建設公団による借地で実施した。

1次調査

新幹線高架橋建設部分と東側道(幅16m、長さ400m、面積6,400m²)が調査の対象となった。新幹線開業を昭和57年10月に控え、高架橋の建設工事を昭和56年度中に完成という日本鉄道建設公団側の方針により、協議した結果、西側道(幅6.5m)の調査は高架橋建設後に残された。また今回の調査対象部分についても、約50mの間隔を置いて発掘調査と調査終了部分の高架橋建設工事は平行して実施された。

発掘調査は、予備調査の所見にもとづき、調査区全域を遺構確認面近くまでパワーショベルにて排土した。そして大宮基点82kmから82k400mまでを100m単位で南から1区、2区、3区、4区に分割し、各区に南から6mおきに基準杭を設定した。なお、この基準杭は3m×3mグリッドを基本として、1つおきに設定したものであるが、遺構実測図作成以外にはほとんど使用していない。比較的遺構の検出が容易であることから、平面的に少しづつ下げながら遺構を確認順に調査していったためである。出土遺物については遺構出土と包含層出土に分け、包含層出土の遺物は各区を2分し、たとえば1区北表土層中出土、3区南C軽石下黒褐色土層中出土というように、大きく捉えた。

発掘調査はきわめて順調に進行し、当初計画の7.5ヶ月間で終了した。なお基準杭設定・遺構平面図・断面図作成は、すべて日本鉄道建設公団の協力により実施した。

2次調査

西側道部分の調査である(幅6.5m、長さ400m、面積2,600m²)。予備調査・1次調査の所見にもとづき、遺構確認面までパワーショベルにて排土。2ヶ月足らずの調査期間ではあったが、検出遺構が比較的少なく、発掘作業は当初計画通りに進行した。

出土遺物の整理と報告書作成

出土遺物の整理・報告書作成作業は、昭和58年4月1日～昭和59年3月31日まで、群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。なお、作業は下記の者が担当した。

飯塚卓二(群馬県埋蔵文化財調査事業団調査研究員 整理作業・報告書編集の総括)

福田恭子(群馬県埋蔵文化財調査事業団嘱託員 整理作業・報告書編集全般)

福島恵理子 (// //)

関 邦一 (// 鉄製品の保存処理)

佐藤元彦 (// 遺物写真撮影)

坂庭常磐 中野秀子 金子吉江 高橋美津子 山崎由紀枝 金子典子 藤井輝子 生方久美子 (群馬県埋蔵文化財調査事業団 補助員 遺物復元・遺物実測・トレース・図版作成)

発見された遺構

竪穴住居址 74棟 縄文時代前期 1 弥生時代後期 20 古墳時代後期 16
古 代 37 (うち1棟は住居址と断定出来ない)

掘立柱建物址 9棟 古 代

畠 址 6面 古墳前期 2 古墳後期 1 中～近世 3

道路状遺構 1

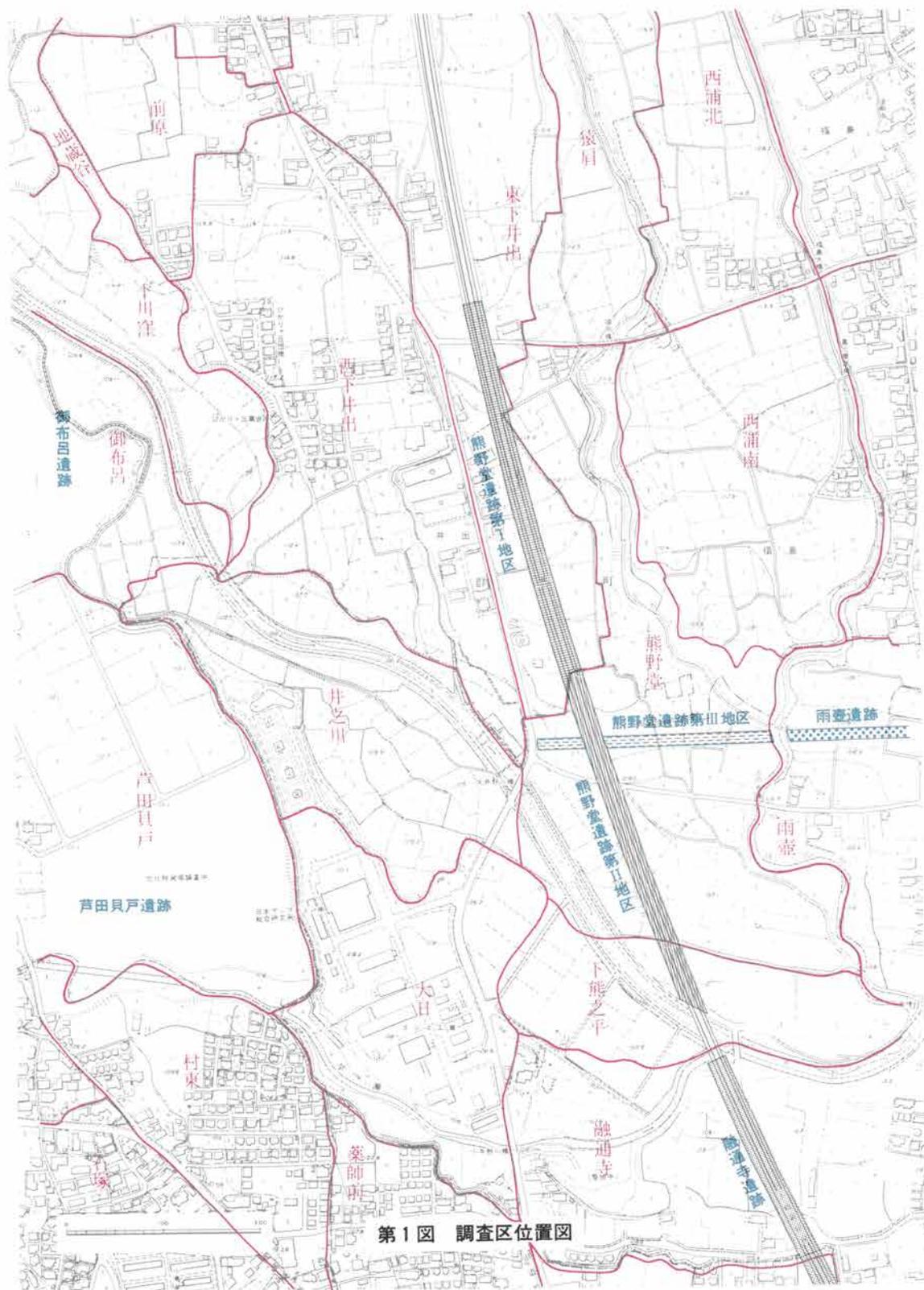
溝 29条 弥生後期 2 古墳時代 7 古代 12
不 明 8

特殊井戸 2基 古墳後期 1 古代 1

井 戸 15基 弥生後期 3 古墳後期 2 古代 6 不明 4

土 坑 59基 弥生後期 8 古墳時代 5 古代 1 中世 1 不明 44

第1章 発掘調査と遺跡の概要



第1図 調査区位置図



第2図 第1地区発掘調査区域図 縮尺1/750



第3図 調査区の地形と遺構1/1000

第2節 遺跡の立地と周辺の遺跡

群馬県は関東地方の西北部に位置し、浅間・榛名・赤城等の第四紀火山が連なっている。熊野堂遺跡は、これらの火山の一つである榛名山の東南麓、前橋台地との接点に位置している。

榛名山はカルデラ形成直前の噴火によって、白川火砕流と呼ばれる軽石・泥流を東南麓に流下させ、現在の扇状地形をほぼ完成させた。その末端附近に位置する本遺跡周辺は、かつては台地縁辺からの湧水が多く、集落址・水田址等の遺跡が密集している。

前橋台地には東から牛池川・染谷川・唐沢川・井野川・榛名白川などの中小河川が東南方向へと流れている。いずれも榛名山麓に水源を持ち、高崎市街地の東南で烏川に合流している。現在ではこれらの河川による洪水の被害はほとんど無くなったが、かつては井野川や榛名白川はたびたび氾濫し、附近の田畑に被害を及ぼすことも少なくはなかった。

旧石器時代の石器が箕郷町和田山と高崎市剣崎町の台地上で採集されているが、発掘調査例はない。縄文時代に入ると前期では黒浜・諸磯B、中期では阿玉台・勝坂・五領ヶ台式期の遺跡の一部が調査されている。後期では若田遺跡において敷石住居址2軒の発見例がある。いずれも低丘陵・低台地上に立地している。

榛名山東南麓の箕郷町中善地や金敷平では、弥生時代中期前半の岩櫃山式系土器が出土している。しかし、本遺跡周辺では、現在のところこの時期の遺跡は発見されていない。中期後半になると、利根川以西の北関東は中部高地千曲川流域に生成した栗林系土器が進出してくる。この時期の遺跡は、山間部やこれに接する平野の台地上に発見例がある。前橋市清里庚申塚遺跡においては、集落とそれをめぐる環濠が調査されている。後期になると遺跡数は増大し、発掘調査例も多く、低地に接する微高地上に比較的規模の大きな集落が形成される傾向が強い。

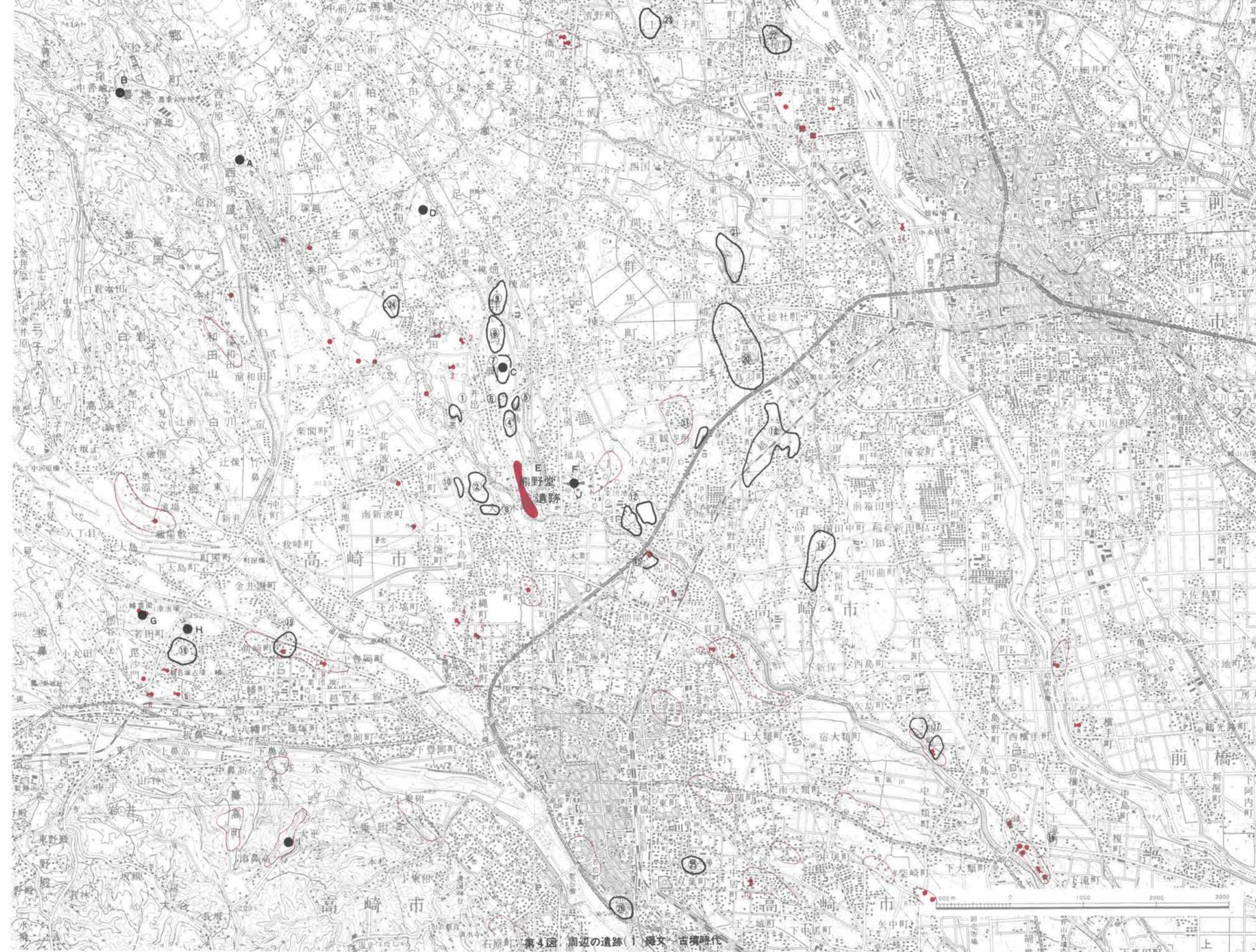
次の古墳時代になると、本遺跡周辺にも古墳がつくられてくる。本遺跡第II地区の小形前方後方墳または前方後方形周溝基と呼ばれる墳基は、4世紀半ば前後降下とされる浅間C軽石によって埋没している。井野川流域においては、現在のところ4世紀後半～5世紀半ば前後の古墳は確認されていないが、6世紀前半を中心とする時期には、井野川上流域に保渡田古墳群〔舟形石棺を持つ大形前方後円墳愛宕塚（93m）、八幡塚（102m）、薬師塚（70m）で構成〕が形成される。三ツ寺I遺跡において発見された豪族の居館址といわれる遺構も、また三ツ寺II・III、保渡田遺跡で調査されている鬼高期の住居址群も、保渡田古墳群と同時期であることから、強い関連性が指摘されている。

奈良時代に入ると中央集権体制が確立し、郡郷制が施された。倭名類聚抄によると、上野国群馬郡は長野・井出・八木・小野・佐沼・上郊・島名・畔切・群馬・桃井・有馬・利刈・白位の13郷が記されている。本遺跡周辺は、井出郷と八木郷の境界附近であった可能性もあり、井野川を境にして分かれていたのかもしれない。奈良時代から平安時代にかけての集落及び平安時代末に

第I章 発掘調査と遺跡の概要

降下したとされる浅間B軽石に埋没した水田址は、周辺での発見が相次いでいる。

延喜式には東山道と呼ばれる官道が通っていたことが記されているが、本遺跡で発見された道路状遺構は金坂清則氏によって東山道と推定されているものである。中世には関東管領上杉憲政の家臣であり、箕輪城を本拠とした長野業政の勢力範囲であった。本遺跡周辺には長野氏関連と推定される居館址・砦址が多く、矢島館址・寺ノ内館址等、発掘調査された居館址も少なくない。



縄文時代遺跡

- A 城山(箕郷町)群馬大:『群大教育学部尾崎研調査報告』第3輯,1961
- B 中善地(〃) 同上
- C 三ツ寺II(群馬町)県埋文事業団:『三ツ寺遺跡現地説明会資料』,1981
- D 保渡田II(〃)群馬町教委:『保渡田II遺跡』,1982
- E 熊野堂I(〃)県埋文事業団:『熊野堂遺跡第I地区』,1984
- F 大八木箱田池(高崎市)高崎市教委:『大八木箱田池遺跡』,1983
- G 若田(〃) 〃 :『高崎市の文化財』,1972
- H 大島原(〃)
- I 大平台(〃)県教委:『大平台遺跡調査概報』,1974
- J 雨壺(高崎市)県埋文事業団:『熊野堂遺跡第III地区、雨壺遺跡』,1984

主要古墳

- 1 薬師塚(群馬町)
- 2 八幡塚(〃)群馬県:『史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯,1932他
- 3 愛宕塚(〃)後藤守一:『上野国愛宕塚』、『考古学雑誌』,第39巻第1号,1953
- 4 小星山(高崎市)
- 5 稲荷山(〃)
- 6 平塚(〃)日本考古学協会:『年報10』,1963
- 7 観音塚(〃)県教委:『上野国八幡観音塚古墳』,1963
- 8 二子塚(〃)
- 9 天神山(〃)外山和夫:『石製模造品を出土した高崎市剣崎天神山古墳をめぐって』、『考古学雑誌』,第62巻第2号,1976
- 10 越後塚(〃)
- 11 天王山(〃)日本考古学協会:『年報8』,1959
- 12 五霊神社(〃)
- 13 将軍塚(〃)高崎市教委:『元島名将軍塚古墳』,1981
- 14 王山(前橋市)前橋市教委:『文化財調査報告書第5集』,1975
- 15 蛇穴山(〃) 〃 :『蛇穴山古墳調査概報』,1976
- 16 宝塔山(〃) 〃 :『宝塔山古墳調査概報』,1968
- 17 総社二子山(〃)日本古文化研究所:『報告第4』,1937

弥生・古墳時代遺跡

- 1 同道(群馬町)県埋文事業団:『同道遺跡』,1984
- 2 御布呂(高崎市)高崎市教委:『御布呂遺跡』,1980他
- 3 芦田貝戸(〃) 〃 :『芦田貝戸遺跡』,1979他
- 4 井出村東(群馬町)同道跡調査会:『井出村東遺跡』,1983
- 5 中林(〃)群馬町教委:『中林遺跡』,1982
- 6 三ツ寺I(〃)県埋文事業団:『三ツ寺遺跡現地説明会資料』,1981他
- 7 三ツ寺II(〃) 同上
- 8 三ツ寺III(〃)県教委:『上越新幹線概報VI』,1980
- 9 保渡田(〃) 同上
- 10 寺の内(高崎市)高崎市教委:『寺の内の遺跡』,1979
- 11 正観寺(〃) 〃 :『正観寺遺跡群』,1979他
- 12 小八木(〃) 〃 :『小八木遺跡』,1979
- 13 日高(〃) 〃 :『日高遺跡』,1979~82他
- 14 新保(〃)県教委:『関越道概報V』,1979
- 15 浜尻(〃)高崎市教委:『浜尻遺跡』,1981
- 16 元島名(〃) 〃 :『元島名遺跡』,1979
- 17 鈴ノ宮(〃) 〃 :『鈴ノ宮遺跡』,1978
- 18 八幡中原(〃) 〃 :『八幡中原遺跡』,1982
- 19 引間(〃) 〃 :『引間遺跡』,1979
- 20 鳥羽(前橋市)県埋文事業団:『年報2』,1983他
- 21 国分寺中間地域(群馬町) 〃 :『年報1』,1982他
- 22 桜ヶ丘(前橋市)尾崎喜左雄:『前橋市史』,第1巻,1971
- 23 清里庚神塚(〃)県埋文事業団:『清里庚神塚遺跡』,1981
- 24 保渡田III(群馬町)群馬町教委:『保渡田III遺跡』,1983
- 25 鏡馬場(高崎市)東京考古学会:『考古学』10巻10号,1939
- 26 竜見町(〃) 同上
- 27 雨壺(高崎市)県埋文事業団:『熊野堂遺跡第III地区、雨壺遺跡』,1984

第4図 周辺の遺跡(縄文・古墳時代)

古代遺跡

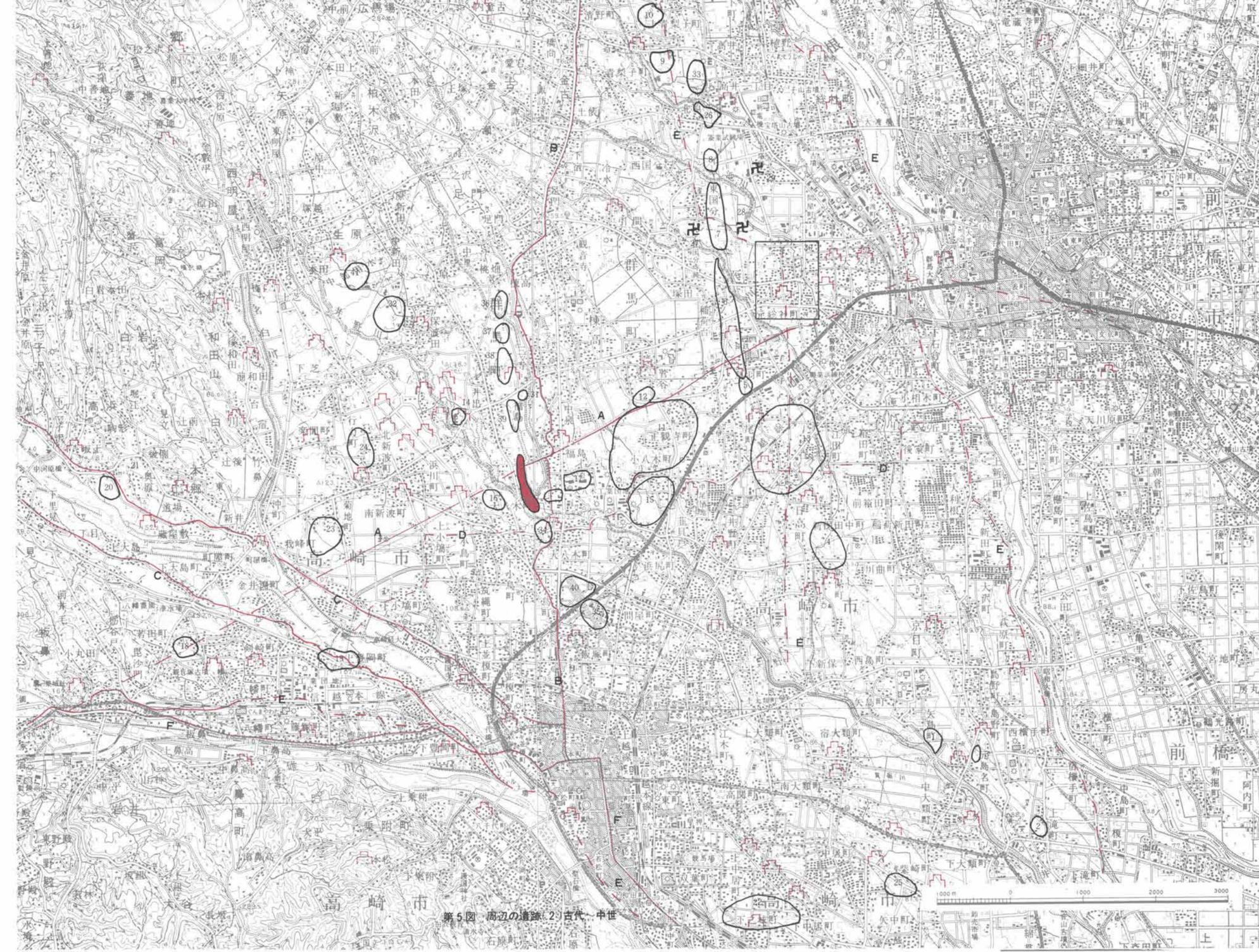
- 1 鈴の宮(高崎市)高崎市教委:『鈴の宮遺跡』,1978
- 2 上滝(〃)県埋文事業団:『八幡原A・B 上滝元島名A』,1981
- 3 元島名B(〃)県教委:『関越道概報IV』,1978
- 4 新保(〃)〃:『関越道概報V・VI』,1979'80
- 5 中尾(〃)県埋文事業団:『中尾遺構編』,1983
- 6 鳥羽(前橋市)〃:『鳥羽I現地説明会資料』,1982
- 7 国分寺中間地域(群馬町)県埋文事業団:『年報1・2』,1982'83
- 8 国分境(〃)同上
- 9 清里南部遺跡群(前橋市)前橋市教委:『富田・西大室・清里南部遺跡群』,1980他
- 10 清里庚神塚(〃)県埋文事業団:『清里庚神塚遺跡』,1982
- 11 正観寺遺跡群(高崎市)高崎市教委:『正観寺遺跡群』,1981
- 12 菅谷(群馬町)群馬町教委:『菅谷遺跡』,1980
- 13 日高(高崎市)高崎市教委:『日高遺跡』,1982他
- 14 同道(群馬町)県埋文事業団:『同道遺跡』,1984
- 15 小八木(高崎市)高崎市教委:『小八木遺跡』,1980他
- 16 芦田貝戸(〃)〃:『芦田貝戸遺跡』,1980他
- 17 大八木箱田池(〃)〃:『大八木箱田池遺跡』,1983
- 18 八幡中原(〃)〃:『八幡中原遺跡』,1982他
- 19 引間(〃)〃:『引間遺跡』,1979
- 20 奥原(榛名町)県埋文事業団:『奥原古墳群』,1983
- 21 榛名木戸神社鹿寺(〃)同上
- 22 下之城(高崎市)〃:『下之城条里遺構の調査』,1981
- 23 菊地(〃)高崎市教委:『菊地遺跡群』,1982他
- 24 北新波(〃)〃:『北新波遺跡群』,1982他
- 25 天王前(〃)〃:『天王前遺跡』,1982
- 26 北原A(群馬町)群馬町教委:『北原遺跡』,1983
- 27 上野国分僧寺址(〃)県教委:『史跡上野国分寺跡発掘調査報告1〜3』,1980〜82他
- 28 上野国分尼寺址(〃)県教委:『上野国分尼寺跡発掘調査報告書』,1970
- 29 山王廃寺(前橋市)前橋市教委:『山王廃寺発掘調査報告』,1982他
- 30 上野国府址(〃)〃:『上野国府跡発掘調査概報』,1968他
- 31 中林(群馬町)群馬町教委:『中林遺跡』,1983他
- 32 保渡田III(〃)〃:『保渡田III遺跡』,1983
- 33 下東西(〃)県埋文事業団:『下東西遺跡現地説明会資料』,1984
- 34 融通寺(高崎市)県埋文事業団:『年報2』,1983他
- 35 下小島(〃)県教委:『上越新幹線概報1』,1975
- 36 保渡田(群馬町)〃:『〃VI』,1980
- 37 三ツ寺III(〃)同上
- 38 三ツ寺II(〃)県埋文事業団:『年報1』,1982
- 39 井出村東(〃)同遺跡調査会:『井出村東遺跡』,1983
- 40 大八木水田(高崎市)高崎市教委:『大八木水田遺跡』,1979
- 41 生原飯森(箕郷町)箕郷町教委:『生原飯森遺跡』,1984
- 26 蒼海城址(前橋市)
- 27 石倉砦址(〃)
- 28 厨橋/前橋城址(〃)
- 29 村山館址(〃)
- 30 大友館址(〃)
- 31 青梨子砦址(〃)
- 32 勝山城址(〃)
- 33 総社城址(〃)
- 34 八日市場城址(〃)
- 35 桧田城址(〃)
- 36 和田/高崎城址(高崎市)
- 37 乗附城址(〃)
- 38 新井若狭屋敷址(〃)
- 39 与五右衛門屋敷址(〃)
- 40 井野屋敷址(〃)
- 41 上並榎城址(〃)
- 42 中尾城址(〃)県教委:『関越道概報V』,1979
- 43 鼻高砦址(〃)
- 44 福田屋敷址(〃)
- 45 剣崎小路城址(〃)
- 9 乙業館址(〃)
- 10 浜川館址(〃)
- 11 新波砦址(〃)
- 12 北爪砦址(〃)
- 13 寺の内館址(〃)高崎市教委:『寺の内遺跡』,1979
- 14 箕輪城址(箕郷町)県教委:『箕輪城跡』,1982
- 15 白川砦址(榛名町)
- 16 住吉城址(高崎市)
- 17 保渡田城址(群馬町)
- 18 高井屋敷址(高崎市)
- 19 反町屋敷址(〃)
- 20 中居砦址(〃)
- 21 下中居環濠宅址群(〃)
- 22 下之城城址(〃)県埋文事業団:『下之城条里遺構の調査』,1981
- 23 金尾城址(前橋市)〃:『中尾遺構編』,1983
- 24 三ツ寺II館址(群馬町)〃:『年報1』,1982
- 25 大八木融通寺館址(高崎市)県教委:『上越新幹線概報II』,1975
- 65 上日高屋敷址(高崎市)
- 66 湯浅屋敷址(〃)
- 67 青木屋敷址(〃)
- 68 与平屋敷址(〃)
- 69 高田屋敷址(〃)
- 70 長町屋敷址(〃)
- 71 上飯塚城址(〃)
- 72 下並榎砦址(〃)
- 73 根津陣屋址(〃)
- 74 井草屋敷址(〃)
- 75 串田屋敷址(〃)
- 76 深沢屋敷址(〃)
- 77 阿久沢屋敷址(〃)
- 78 青柳寄居址(前橋市)
- 79 鳥羽館址(〃)県埋文事業団:『鳥羽I遺跡現地説明会資料』,1982
- 80 花城寺館址(群馬町)
- 81 元井出館址(〃)
- 82 同道館址(〃)県埋文事業団:『同道遺跡』,1984

道路

- A 推定東山道 県教委:『歴史の道16東山道』,1983他
- B 三国街道 〃:『〃3三国街道』,1980
- C 信州街道 〃:『〃5信州街道』,1980
- D あづま道 〃:『〃16東山道』,1983他
- E 推定鎌倉街道 〃:『〃17鎌倉街道』,1983
- F 中山道 〃:『〃11中山道』,1982

中近世城館址(山崎一:『群馬県古城塁址の研究』,1979,80による。それ以外の文献あるもののみ併記)

- 1 萩原城址(高崎市)
- 2 元島名城館址(〃)高崎市教委:『元島名遺跡』,1979他
- 3 大類館址(〃)
- 4 大類城址(〃)
- 5 隼人屋敷址(〃)
- 6 大類寄居址(〃)
- 7 降照屋敷址(〃)
- 8 矢島館址(〃)高崎市教委:『矢島遺跡・御布呂



第5図 高辺の遺跡(2) 古代〜中世

第3節 標準土層と遺跡の地形

熊野堂遺跡は、東側を流れる猿府川と、西側を流れる井野川とに挟まれた洪積台地上に位置している。遺跡地は、北から南へと緩やかな傾斜があり、北端の第Ⅰ地区4区北側では海拔115mであるが、第Ⅰ地区と第Ⅱ地区の境界付近では海拔111mとなり、また第Ⅱ地区南端では海拔105mとなっている。すなわち第Ⅰ地区内に限れば、延長400mであるが、この間に4mの高低差があるわけである。

遺跡地自体に傾斜があり、また広範囲であるため、土層は一様ではないが、次のように標準土層を把握した。

第1層 耕作土 全体的に浅間A・B両軽石を多量に含んでいる。軽石は上部には少なく、下部には多くなるという傾向があるが、下部の軽石の多くはB軽石と考えられる。なお、B軽石の純層は確認されていない。後世の耕作が比較的深く及んでいるためであると考えられる。

第2層 暗褐色土 浅間B軽石を含まない層である。比較的固くしまっており、FAおよびFPの堆積がみられる部分も僅かに存在するが、大部分は全体に混合している。またC軽石が若干混入している。

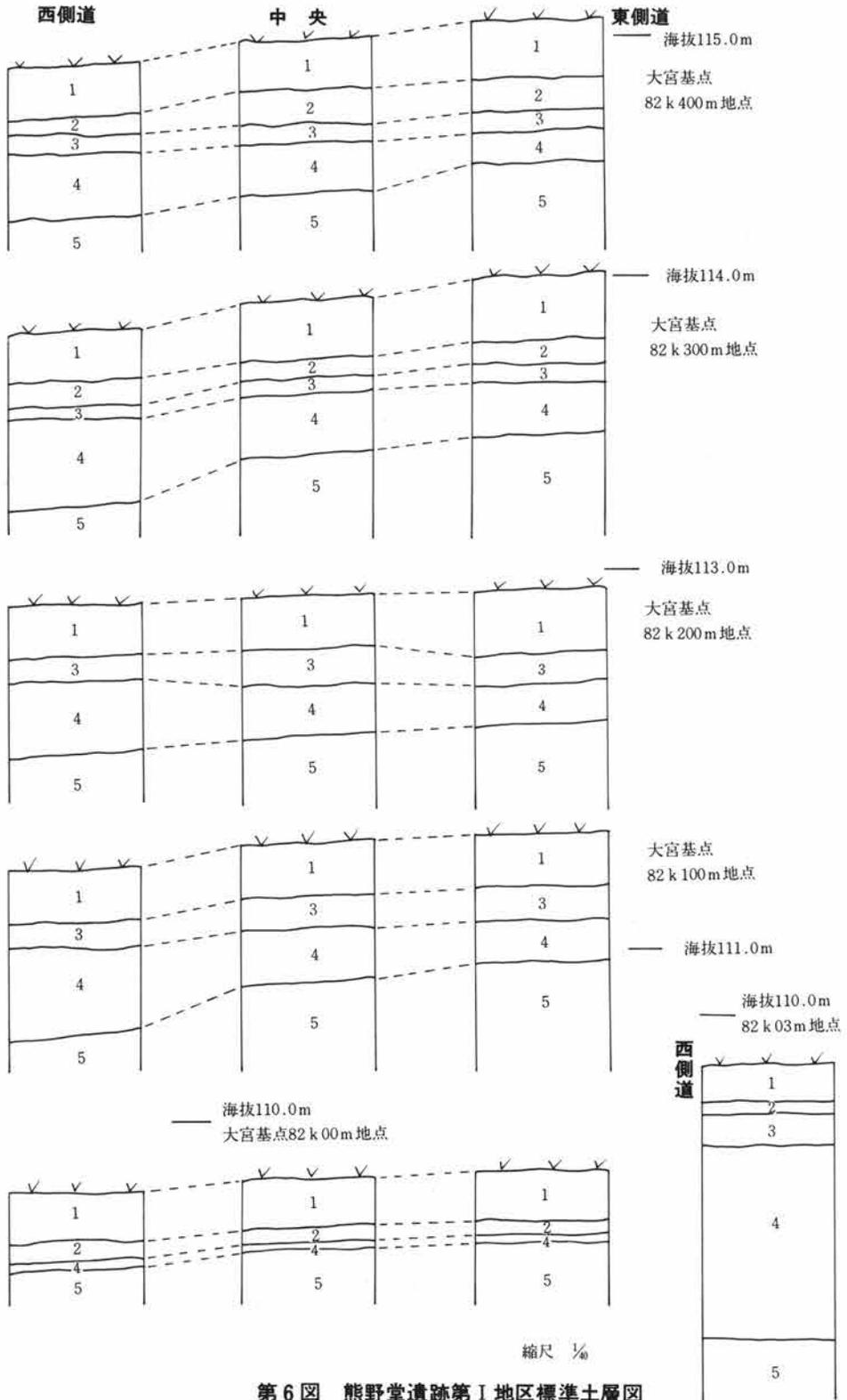
第3層 浅間C軽石を多く含む黒褐色土 1区西側の傾斜部分においては、C軽石は純層に近い堆積となっており、C軽石降下時に形成された層であることがわかる。なお、1区東南部古墳時代後期竪穴住居址群の存在する部分を除いて、粘質化している部分が多い。

第4層 黒褐色土 浅間C軽石を含まない層である。粒子細かく、しまっている。下部は黄褐色土となっている部分も多く、ローム漸移層としてとらえられる。第3層同様、1区東南部古墳時代後期竪穴住居址群の存在する部分を除いて、粘質化しており、強い粘性をもっている。この部分は東側が薄く、西側が厚くなっており、特に1・2号特殊井戸付近において顕著である。西側道部分においては、酸化鉄・酸化マンガンの斑紋がみられる部分も多く、これらは斑状・暈管状を呈している。なお4区および3区北半部において、縄文時代前期から後期にわたる土器破片が本層中より多量に発見されている。

第5層 ローム層

第Ⅰ地区の遺構は、弥生時代が第4層上部、古墳時代および古代は第2層から第3層上部で確認した。

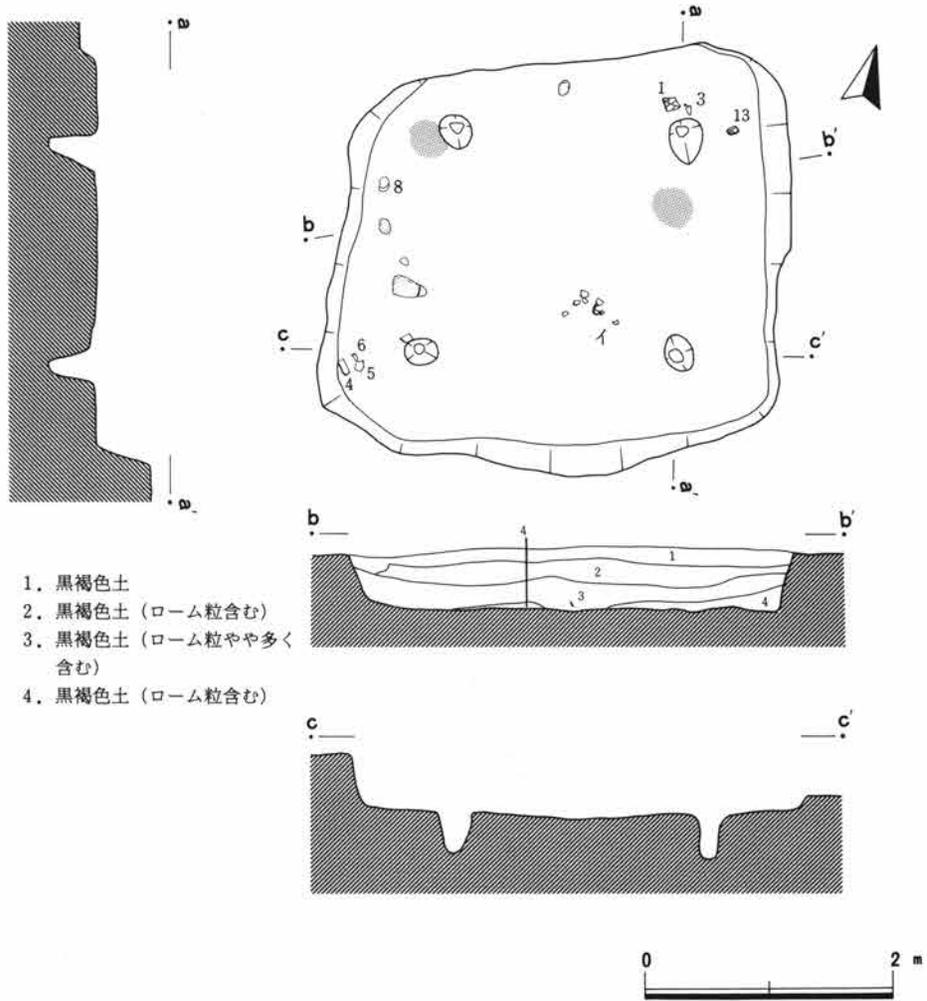
第I章 発掘調査と遺跡の概要



第6図 熊野堂遺跡第I地区標準土層図

第II章 検出された遺構と遺物

第1節 縄文時代の竪穴住居址

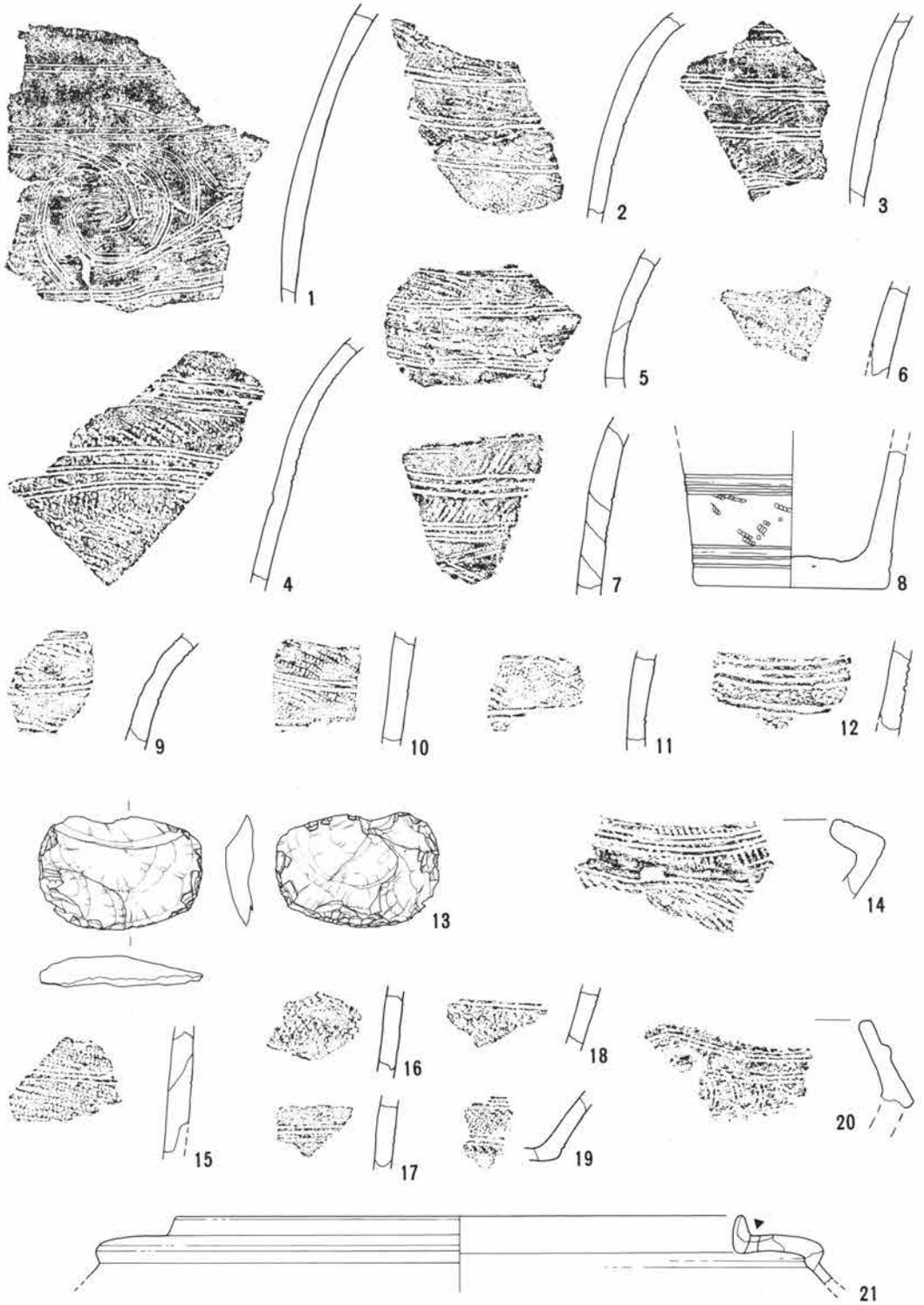


第7図 17号住居址

17号住居址 (4区) [第7・8図・図版3 (遺構)・図版64 (遺物)]

15号住居址、10号溝と重複している。覆土から15号住居址及び10号溝よりも古い。規模は一辺約3.5mで、ややびつな隅丸方形を呈するものと推定される。壁の残存状態は良好で約50cmの垂直に近い立ち上りを測るが、北側の壁は10号溝によって壊されており、南東コーナー付近は15号住

第II章 検出された遺構と遺物



第8図 17号住居址出土遺物



居址によって約40cmが壊されている。

床は、ローム層中に構築され、北壁部分を除き比較的硬く良好な状態であった。主柱穴は4本あり、床面からの深さは30cm～40cmである。床面直上の焼土分布を二ヶ所検出したが、炉と考えるには焼土も薄く、床面の掘り込みもない。周溝・貯蔵穴はないものと推定される。遺物は深鉢等が出土しているが、量は少ない。

17号住居址出土遺物

1～13までは生活面より出土した遺物であり、他は覆土内出土のものである。遺溝図中の土器Noイは(2・7・9・10・11・12)である。本土器群は沈線文を主体とし、地文が無文のもの、地文に縄文を施文したものとに大別される。

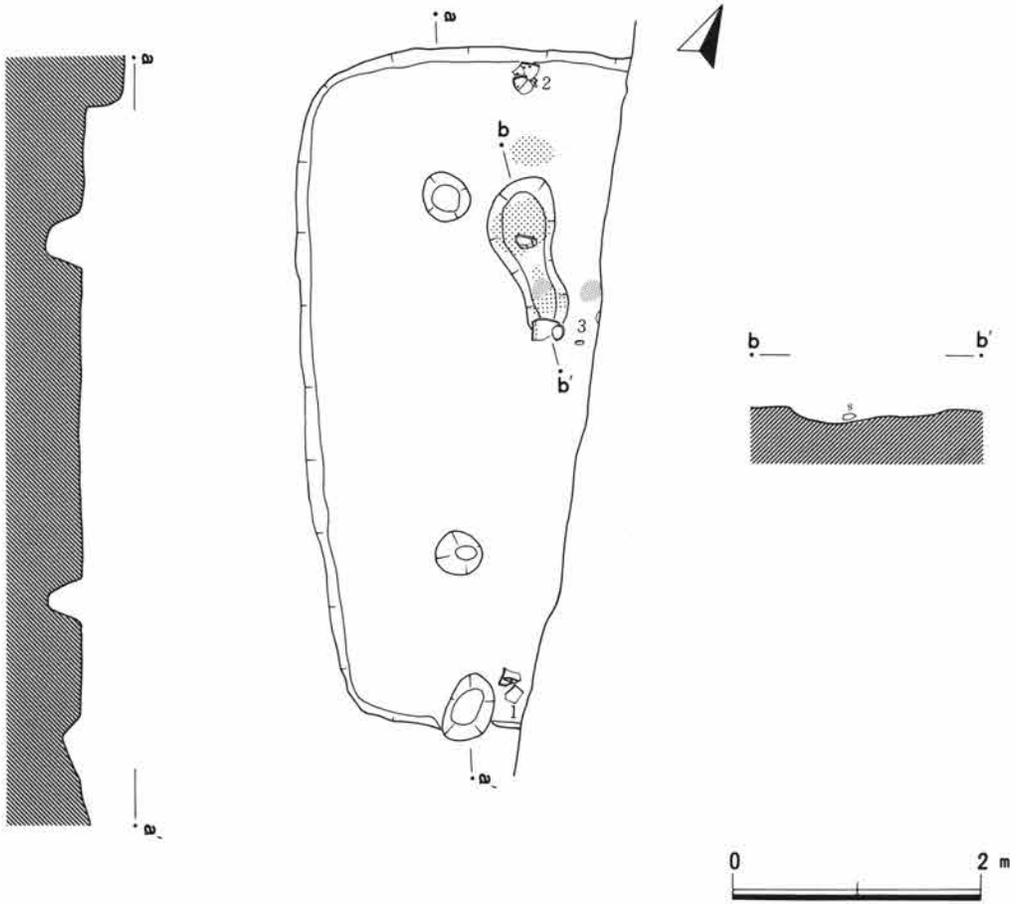
器形は、14・20・21は口縁部片で逆「く」の字状に屈曲して内反し、8・19は底部片、他はすべて胴部片でやや外反する。

1・17は3本を1単位とした平行沈線文を横位に施し、1は沈線文間に渦巻状の曲線文を施す。地文は、無文で17と同一個体である。2は2本を1単位とした平行沈線文を横位に施し、地文はRL縄文を施文する。3・5は4本を1単位とした平行沈線文を横位に施し、3は左下がり、5は右下がりの斜位に結節沈線文を施文する。3は地文にLR、5は地文にRL縄文を施文する。4・6・7は沈線文を主体とし、地文に縄文を施す一群で、4は6本を1単位、7は3本を1単位とした平行沈線文を横位に施し、4・6は地文にRL縄文、7は地文にLR縄文を施文する。8は胴部下半片で、4本を1単位とした平行沈線文を横位に施し、地文にRL縄文を施文する。9・10・11は2本を1単位とした平行沈線文を横位に施し、地文にRL縄文を施す。12は溝の深い沈線文を上端に4本を1単位、下端に2本1単位を横位に施し、地文にRL縄文を施文する。13は石器で搔器である。横長剝片を素材とし、片面加工により弧状に刃部を作出し、基部に打撃点を残す。14は口縁部片で、口縁には4本を一単位とした沈線文を施し、逆「く」の字状に屈曲する。下端には2本を1単位とした平行沈線文を横位と斜位に施す。地文はRL縄文を施文する。15・16・18は2本を1単位とした平行沈線文を横位に施し、地文にRL縄文を施文する。19は底部片で、底部より胴部方向に外へ開く形状を呈する。3本を1単位とした平行沈線文を横位に施し、地文にRL縄文を施文する。20は波状口縁部片で逆「く」の字状に屈曲する部分に3本を1単位とした沈線文を口縁に沿って施し、波頂部にボタン状貼り付け文を施す。それを中心に同心円状に弧状文を施文する。地文は無文である。21は口縁部片で逆「く」の字状に屈曲して内反し、口唇部が直立する。地文は無文で口縁下に両面穿孔の孔を有する。

色調は、20はにぶい黄橙色、21は赤橙色、他は褐色である。

以上本土器群は前期後半、諸磯b式に比定される。

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の堅穴住居址



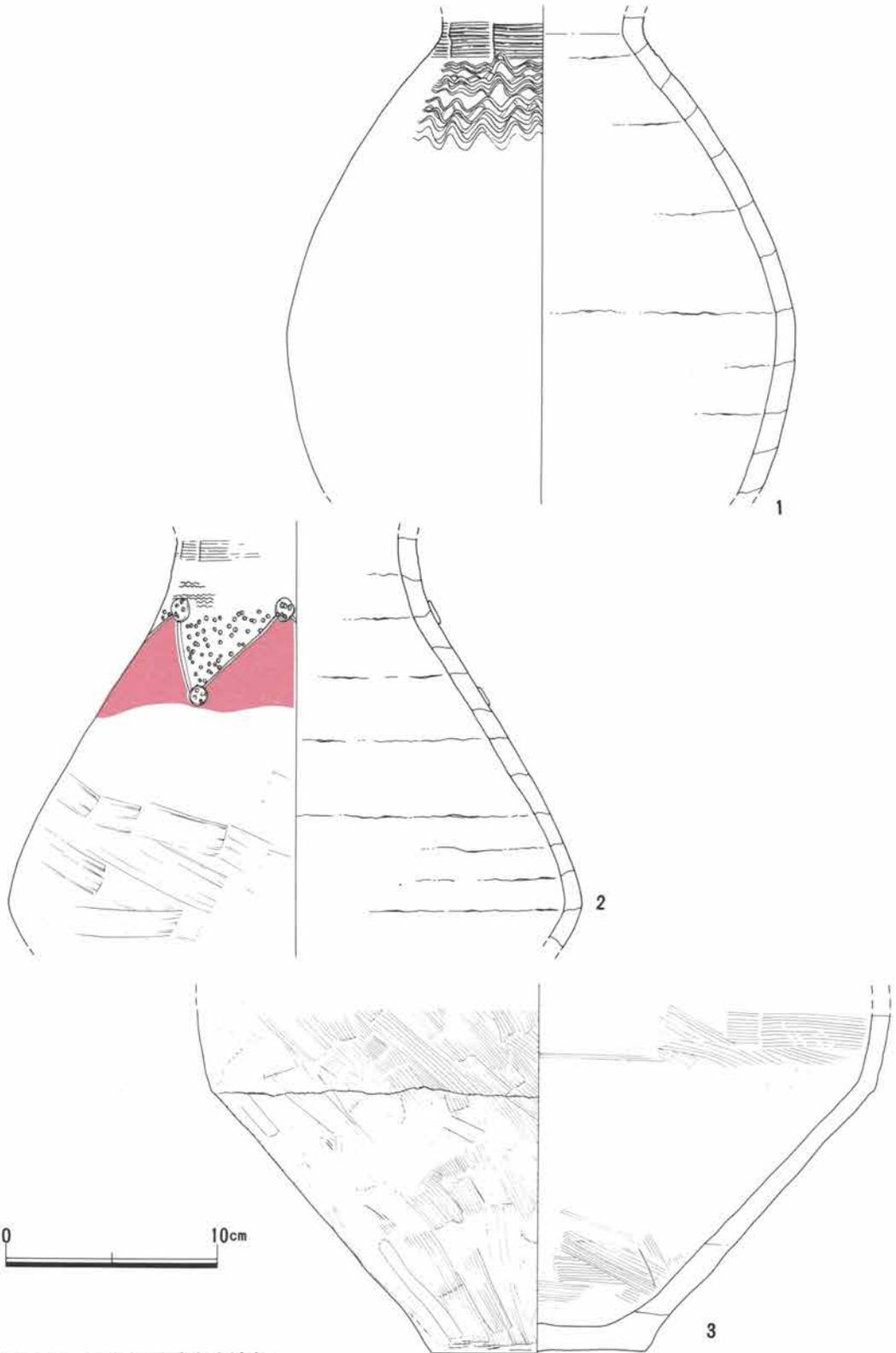
第9図 4号住居址

4号住居址（4区）〔第9・10図・図版3（遺構）・図版65（遺物）〕

本住居址は、3号住・6号住の下より確認された。東側は調査範囲外で、南では、2号住居址に切られている。

全体の形状は明確ではないが、西辺は約5m、北辺は2.5m以上あり、隅丸長方形を呈すると思われる。壁は、確認面まで約30cm、ほぼ垂直に立ち上がっている。床は、ローム面をたたいている。西壁より約1.1m、南北壁より約1.3m離れて、底径15~20cm、深さ30cmの柱穴が2ヶ所検出された。

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



第10図 4号住居址出土遺物

第II章 検出された遺構と遺物

炉址は、北西柱穴のやや東側に位置し、底面が1.1×0.3mの瓢箪形をしている。やや深く大きい北側の縁に円筒形の河原石が横に置かれ、南側の浅い掘りこみが続いている。南壁やや西寄りには、壁を少し切る形で、底径35cm、深さ約15cmの浅い掘りこみが見られた。

遺物は、比較的少く、炉址内より壺下半部 (3)、北壁際より壺頸部 (2)、南壁際より壺胴部 (1) が出土した程度である。

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	14cm上 胴部 $\frac{1}{4}$	1	胴径 24.0	胴最大径中位。	内面輪積痕。外面ヘラミガキ後、頸部右回り簾状文。胴上部波状文4段。内面ヨコヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成不良。褐灰色。外面黒斑。
壺	床面直上 胴上部 $\frac{1}{5}$	2	胴径 27.0	頸部ゆるやかにくびれる。	内面輪積痕。外面摩滅、頸部右回り簾状文痕・波状文。外面胴上部鋸歯文・ボタン状貼付文・鋸歯文内刺突文。外面胴部ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成普通。淡褐色。赤彩痕一部残存。
壺	2cm上 胴下半 $\frac{1}{2}$	3	底径 11.0	胴下半直線的に底部にいたる。	断面輪積痕。外面胴上部ナナメハケメ、胴下部タテハケメ、内面ナナメハケ後、胴下部タテ指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。橙色。底部外面黒斑。

4号住居址出土土器観察表

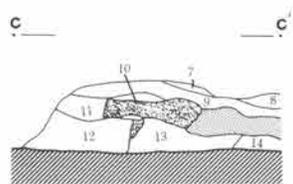
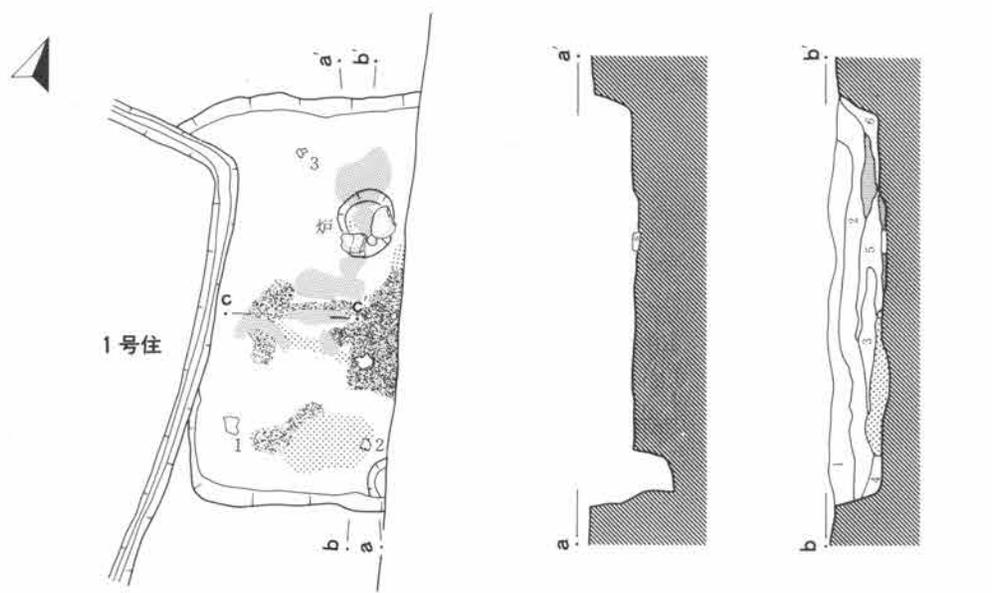
7号住居址 (4区) [第11・12図・図版4 (遺構)・図版66 (遺物)]

本住居址は、1号住居址北東角の第3層黒褐色土下面で確認された。西側を1号住居址に切られており、東側は調査範囲外になる。

南北方向は約3mを測るが、東西は不明。隅丸方形もしくは長方形のプランが想定される。覆土下層の床より約20cmまでには、焼土・砂質粘土・炭化物の混在がかなり広く認められた。特に粘土は厚く、火災住居とも考えにくく、性格は不明である。床より確認面までは、約30cmの高さで、急傾斜に立ち上がる。床は全体にローム面をたたっているが、北から南にかけて僅かな傾斜が見られた。南壁境界線際に、底径25cm、深さ30cmのピットがあり、形状は柱穴的である。

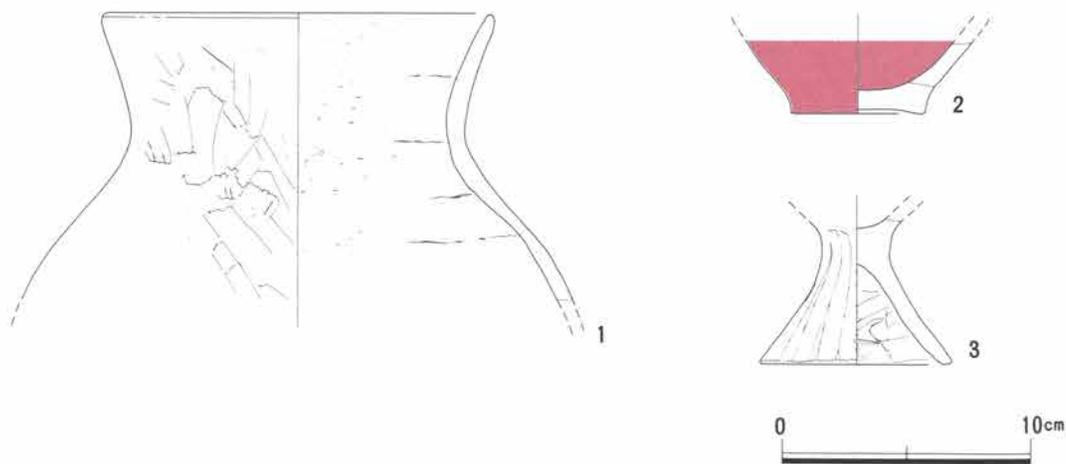
炉は、中央やや北寄りに設置され、直径約40cm、深さ2.50cmほどの浅い掘りこみをなしている。小児頭大の扁平な河原石2個と小礫1個を八字形に配している。

遺物は比較的少く、北壁近くで台部 (3)、ピット近くで底部 (2)、西壁近くで甕形土器片 (1) がいずれも床面近くより出土した程度である。



1. 暗褐色土 (C軽石含む)
2. 褐色土 (粒子細かい)
3. 淡褐色土 (粘土・焼土含む)
4. 暗褐色土 (粘性あり)
5. 褐色土 (ローム粒含む)
6. 3層に同じ
7. 暗褐色土 (粒子細かい)
8. 7層に同じ
9. 淡褐色土 (粘土・焼土混合)
10. 7層に同じ
11. 褐色土 (粒子細かい)
12. 褐色土 (焼土粒含む)
13. 褐色土 (焼土多量に含む)
14. 青褐色土 (炭化物多く含む)

第11図 7号住居址



第12図 7号住居址出土遺物

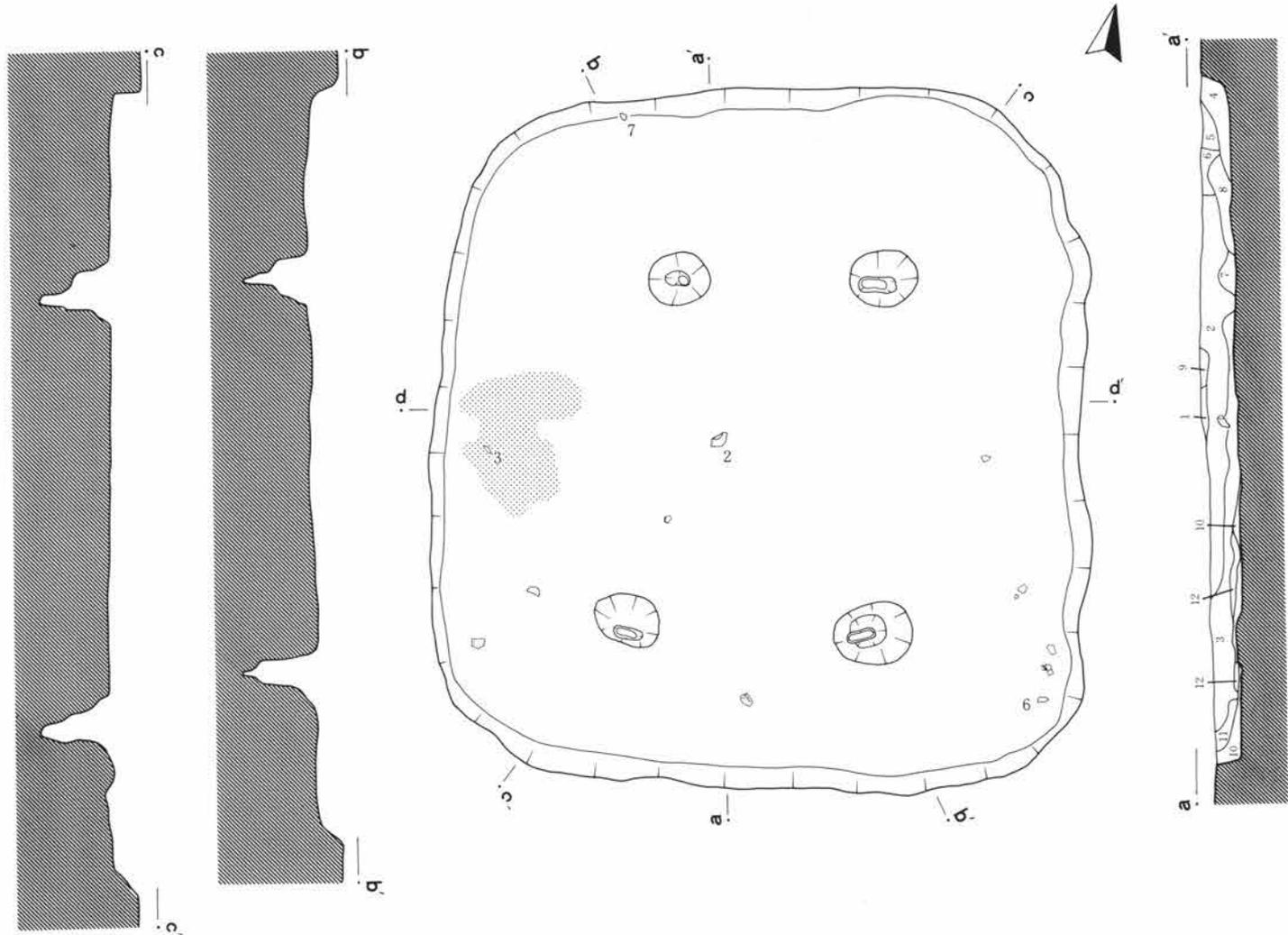
第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
甕	床面直上 上半部 $\frac{1}{4}$	1	口径 15.7	頸部ゆるやかにくびれる。	内面輪積痕。外面タテハケメ。内面ヨコヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成普通。褐色。外面スス付着。
壺	3cm上 底部のみ	2	底径 5.4		断面輪積痕。外面胴部最下部赤彩後、タテヘラミガキ。内面赤彩後、ヨコヘラミガキ。底面ヘラケズリ。	砂・小石含む。焼成普通。赤色。
台付甕	床面直上 上部のみ	3	底径 7.8	台部「八」の字状にひらく。	内面輪積痕。外面タテハケメ。内面ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成普通。灰褐色。

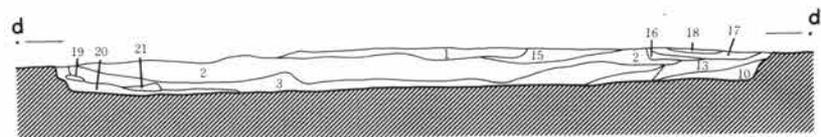
7号住居址出土土器観察表

8号住居址（4区）〔第13・14図・図版4（遺構）〕

東西5.7m・南北6mの規模で隅丸方形を呈するが、やや歪んでいる。壁は風倒木によって壊されている北東コーナー付近を除き、比較的明瞭に確認できた。壁の立ち上りの残存は20cm～25cmであり、上層部はなくなっている。ローム層中に築かれた床面は硬くしっかりしており、特に主柱穴の内側は硬い。床面からは4本の主柱穴が検出された。床面からの掘り込み約60cmの良好な柱穴であり、下部に柱痕と考えられる部分も明瞭に検出できた。周溝はなく、炉も検出できなかったが、西壁近くに炭化物層が確認できた。炭化物層は床面直上にあるが、掘り込みはない。出土遺物として、壺・甕等の小破片が床面付近より若干出土している。



1. 黄褐色粘土 (黒褐色土含む)
2. 黒褐色土 (黄褐色粘土含む)
3. 灰黄褐色土 (しまっている)
4. 灰黄褐色土 (黒褐色土含む)
5. 灰黄褐色土 (黄褐色粘土含む)
6. 黒褐色土
7. 黄灰褐色土 (黄褐色粘土含む)
8. 灰黄褐色土 (黒褐色土多く含む)
9. 黄褐色土 (粒子粗い)
10. 灰褐色土 (黒味を帯びる)
11. 灰褐色土 (黄褐色土を多量に含む)

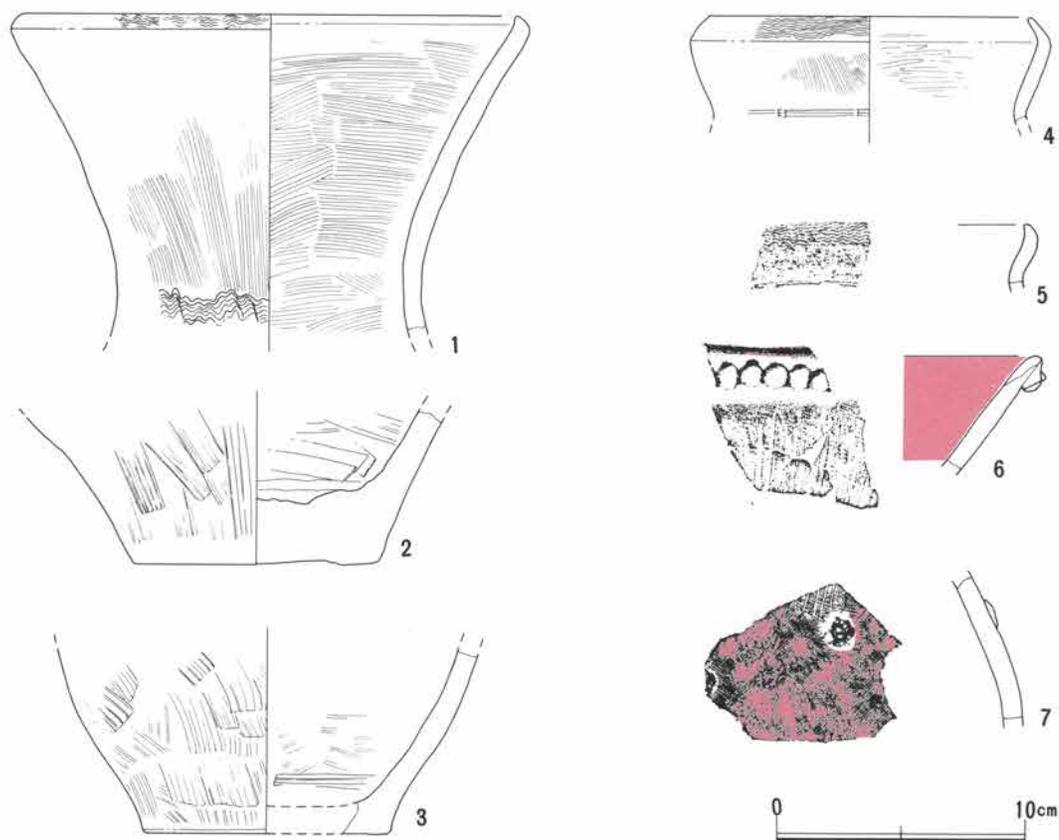


12. 黄褐色土と黒褐色土の混合
13. 褐色土
14. 灰黄褐色土 (黒味を帯びる)
15. 褐色土 (黄褐色土含む)
16. 灰黄褐色土 (砂質)
17. 黒褐色土 (やわらかい)
18. 黒褐色土
19. 黄褐色粘土
20. 灰褐色土
21. 灰白色土

0 2 m

第13図 8号住居址

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



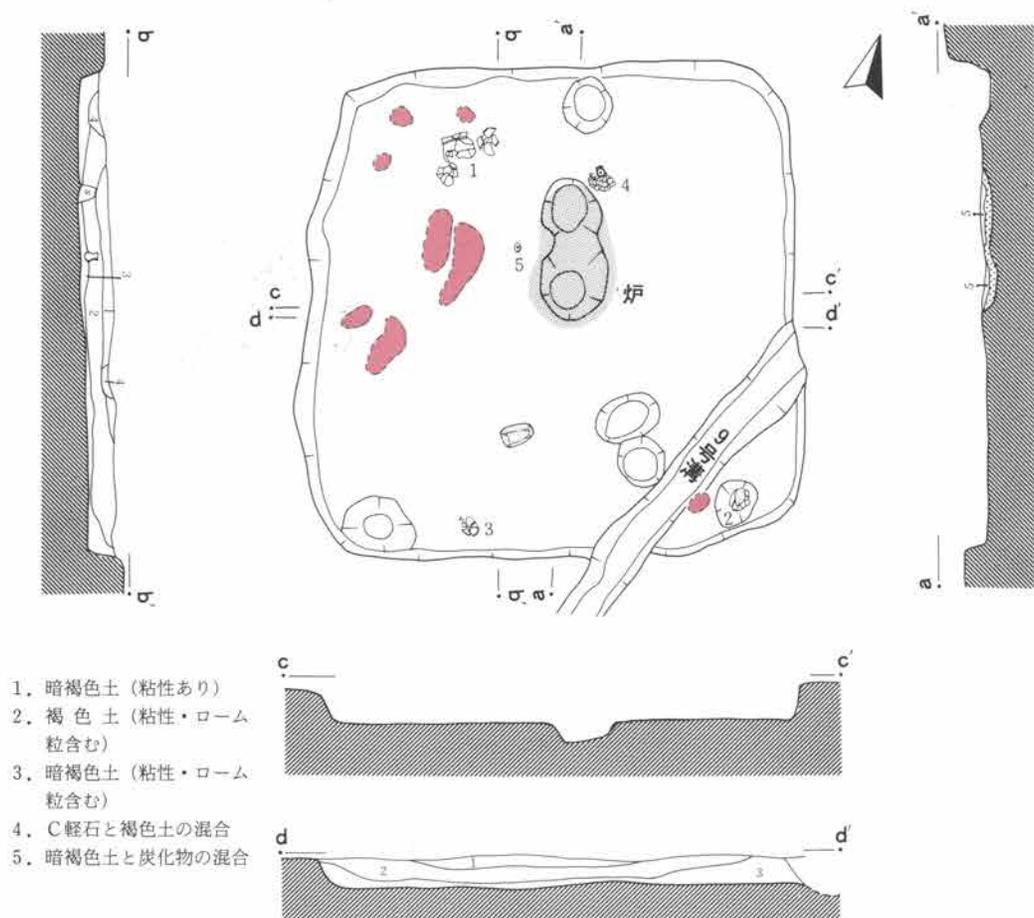
第14図 8号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$	1	口径 18.5	頸部ゆるやかにくびれる。	輪積痕。外面タテハケ後、頸部簾状文、口唇部波状文。内面ヨコハケメ。	砂粒多く含む。焼成良好。橙色。
壺	床上直上 底部のみ	2	口径 10.0		断面輪積痕。外面タテハケ後、ヨコ指ナデ、ナナメハケメ。内面ヨコ指ナデ。	砂、石を含む。焼成良好。にぶい橙色。
壺	柱穴 胴下部 $\frac{1}{2}$	3	底径 9.8	胴下部ややふくらみをもつ。	外面タテハケメ、内面ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。浅黄橙色。
甕	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$	4	口径 13.0	口縁部短かい、口唇部内傾。	成形不明。外面ヨコ指ナデ後、一部ナナメハケメ、口唇部波状文。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成良好。硬質。赤褐色。外面スス付着。
甕	覆土 口縁一部	5		口唇部内傾。	外面タテヘラミガキ後、口唇部波状文。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成普通。黒褐色。

第II章 検出された遺構と遺物

高 杯	4 cm上 口縁一部	6		外面口唇部凸帯貼りつけ。凸帯部分連続指圧痕。外面タテヘラミガキ。内面赤彩後、ヨコヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成良好。にぶい橙色。
壺	8 cm上 胴の一部	7		外面ナナメハケ後、鋸歯文、ボタン状貼付文、赤彩、ヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成良好。赤色。

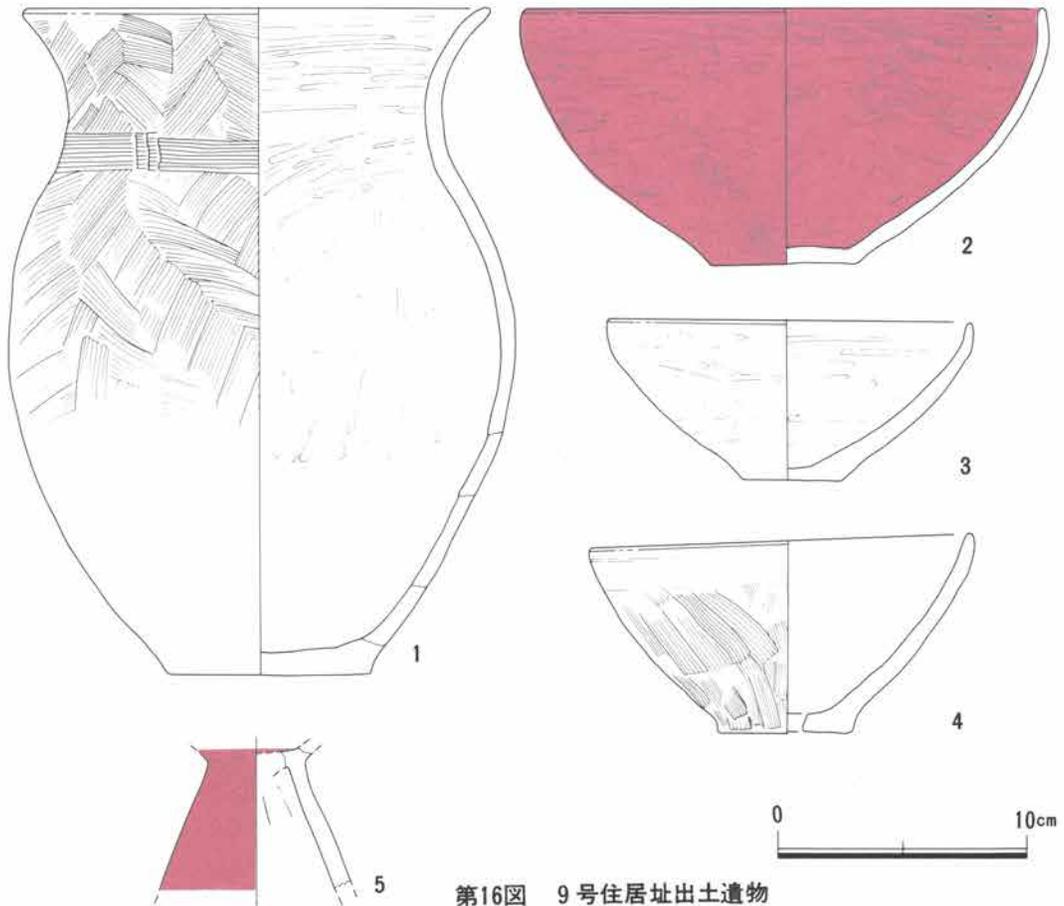
8号住居址出土土器観察表



第15図 9号住居址

9号住居址（4区）〔第15・16図・図版5（遺構）・図版66（遺物）〕

本住居址は、第4層黒褐色土面より確認された。南東部分で9号溝と重複している。新旧関係は覆土より9号溝の方が新しく、9号溝により一部壊されている。3.9m×3.9mの規模で隅丸方形を呈する。壁は垂直に近い立ち上りを持ち、約20cm～25cmである。床はローム層中に構築されており、硬く良好である。床面より数ヶ所のピットが検出されたが形態・位置等から柱穴と考えるのは難しい。炉は住居跡内やや北側より検出され、瓢箪形をしている。炉の凹みは南北二つで、床面よりそれぞれ約15cm・約10cmであり、南側の凹みより多量の炭化物・焼土が検出された。周溝・貯蔵穴はない。出土遺物として甕・鉢・甑・杯・高杯があり、床面上からは赤色顔料が確認された。



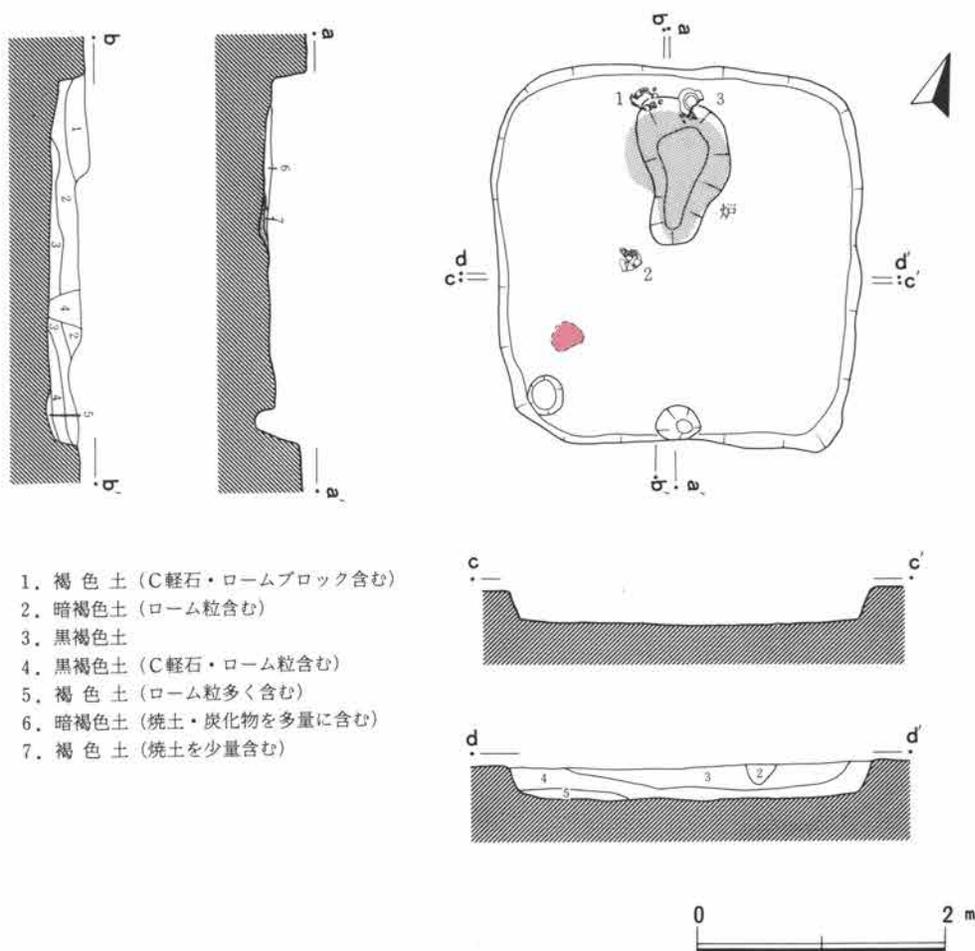
第16図 9号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
甕	床面直上 ほぼ完形	1	口径 19.8 胴径 20.3 底径 8.2	胴最大径中位やや上方、頸部ゆるやかにくびれる。	内面輪積痕。外面胴上部羽状ハケメ。外面胴下部タテヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成普通。にぶい橙色。

第II章 検出された遺構と遺物

鉢	ピット内 1/2	2	口径 20.9 底径 5.8 器高 10.3	内湾しながら立ちあがる。	成形不明。内外面赤彩後、ヨコヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成良好。硬質。赤色。
鉢	1cm上 ほぼ完形	3	口径 14.7 底径 3.9 器高 6.3	内湾しながら立ちあがり、口唇部直立。	成形不明。内外面ヨコヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成良好。にぶい橙色。内外面黒斑あり。
甌	2cm上 1/2	4	口径 15.3 底径 5.4 器高 7.8	内湾しながら立ちあがる。	成形不明。底部焼成前穿孔。外面ナメハケメ。内面ヨコ指ナデ。	砂粒多く含む。焼成良好。赤褐色。
高杯	床面直上 脚部の一部	5		脚部ハの字状にひろく。	内面輪積痕。外面赤彩後、タテヘラミガキ。内面指ナデ。	細砂粒含む。焼成良好。赤色。

9号住居址出土土器観察表

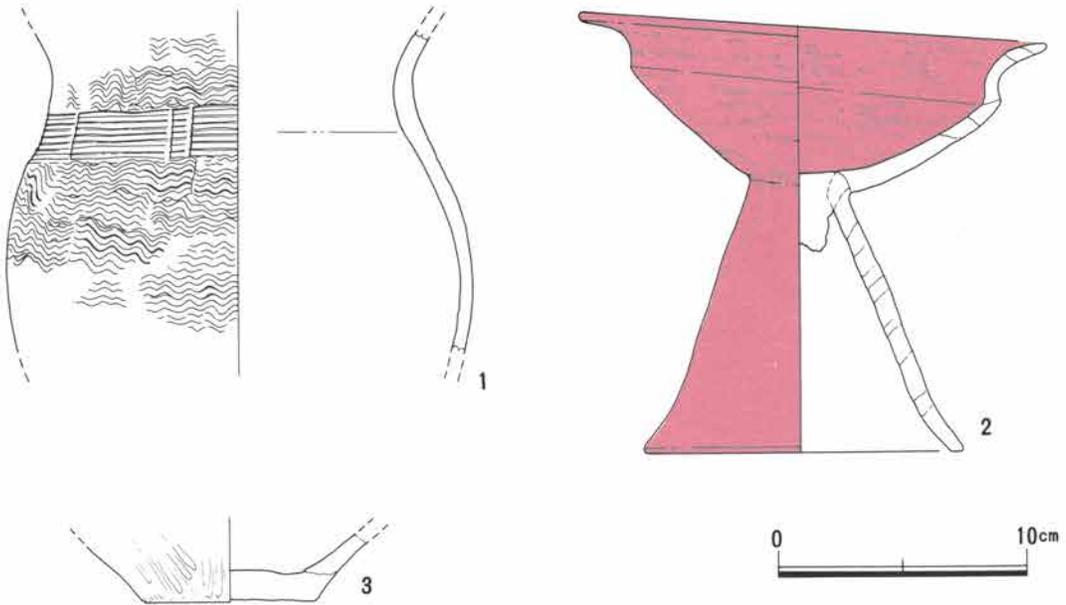


第17図 10号住居址

10号住居址（4区）〔第17・18図・図版5（遺構）・図版66（遺物）〕

3m×3mと規模は小形で、やや不整形な隅丸方形を呈する。

壁は垂直に近い立ち上りが約25cmで、残存状態も比較的良好である。床はローム層中に構築されており、硬く良好で北西側が相対的に高い。住居址内南側にピットが二つあるが、形態・位置等から柱穴と考えることはできない。炉は中央北寄りから検出され、瓢箪形をしている。床面からの掘り込みは約10cmであり、全体的に焼土を検出したが、南側には厚さ約3cmの焼土層がある。周溝・貯蔵穴はない。遺物には高杯・甕形土器があり、床面付近に赤色顔料の散布がみられた。



第18図 10号住居址出土遺物

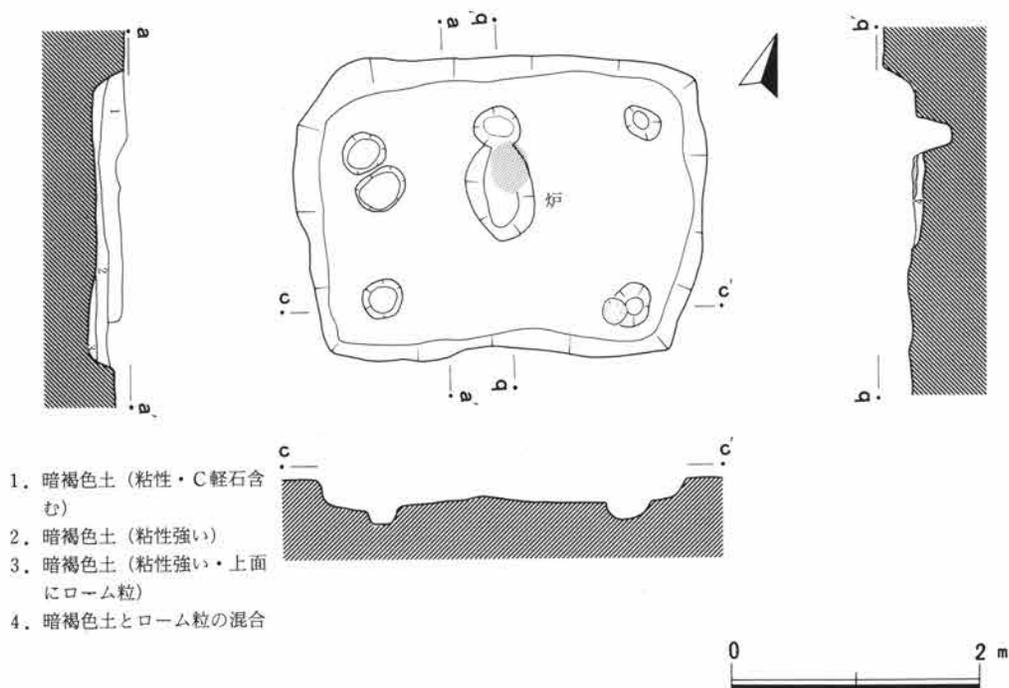
器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
甕	床面直上 胴上半 $\frac{1}{2}$	1	胴径 18.8	胴最大径上半部	内面輪積痕、外面ヨコヘラミガキ後、口縁部・胴部波状文、波状文施文後、頸部右回り簾状文。内面ヨコ指ナデ。	砂粒多く含む。焼成良好。にぶい橙色。
高杯	床面直上 ほぼ完形	2	口径 18.8 底径 12.8 器高 17.0	杯部口縁に稜をもち、直立後、大きく外反。脚部大きく、「八」の字状に開く。器形やや不整形。	内面輪積痕。杯部内外面赤彩後、ヨコヘラミガキ。脚部外面赤彩後、タテヘラミガキ。脚部内面ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。赤色。
壺	覆土 底部のみ	3	底径 7.0		輪積痕。胴最下部外面タテヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成良好。にぶい橙色。

10号住居址出土土器観察表

第II章 検出された遺構と遺物

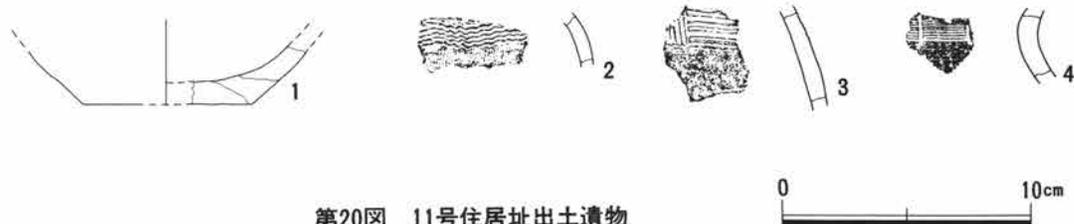
11号住居址（4区）〔第19・20図・図版6（遺構）〕

南壁で7号土坑と重複している。新旧関係は覆土から7号土坑の方が新しい。規模は3.3m×2.4mで、やや不整形な隅丸長方形を呈する。壁は北側の残りが比較的良く、約20cmの立ち上りで、南側では5cm～10cmの立ち上りが認められた。床は硬くしまっており、良好である。北西隅に2ヶ所、その他の隅に1ヶ所づつピットが確認できたが、床面からの深さは各々約10cmと浅く、柱穴とするには疑問が残る。炉は中央やや北寄りにあり、掘り込みの深さは床面から約7～8cmである。炉内北側に厚さ2cm～3cmの焼土層が確認できた。炉址のすぐ北側に床面からの深さ約30cmのピットがある。覆土中より土器片が少量出土している。



第19図 11号住居址

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



第20図 11号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
不明	覆土 底部	1	底径 5.9	底部薄い。	輪積痕。胴最下部ヘラケズリ。内面ヨコナデ。	砂粒含む。焼成良好。にぶい褐色。
甕	覆土 胴の一部	2			外面ヘラミガキ後、波状文。内面ヨコミガキ。	砂粒含む。焼成普通。褐色。外面スス附着。
壺	覆土 胴の一部	3			外面ヘラミガキ後、櫛描文。	砂粒含む。焼成良好。赤褐色。
壺	覆土 頸部一部	4			頸部T字文	砂粒含む。焼成不良。褐色

11号住居址出土土器観察表

12号住居址（4区）〔第21・22図・図版6（遺構）・図版68（遺物）〕

本住居址は、第4層の黒褐色土面より確認された。南側で14号住居址を切り、北西側で9号溝に切られる。また南側では、10号溝に近接している。

規模は東西3.2～3.3m、南北3.8mで、やや台形ぎみの隅丸方形を呈する。確認面まで10～20cmの急傾斜で、壁は立ち上がる。南東側の壁は14号住居址の覆土となり、明瞭には検出できなかった。床は炉の周辺を中心に、ローム面をたたいており極めて硬い。北西側の一部を除いて、底幅5cm、深さ5cm程度の周溝が壁際をまわる。南壁際では、やや幅広くなり底幅は15cm程度になる。

ほぼ床の中央に、50×30cmほどの長円形の炉があり、その北に接して底径約30cm、深さ約50cmの円形のピットがある。炉は深さ10cmほどの地床炉だが、ピットとは同時併存したと思われる。ピット覆土上層には、径1～2cmの赤色顔料が混在していた。南西コーナー近くの周溝に接して、40×40cmほどの大きさで、深さ20cm程度の半円形皿状の落ちこみがあつた。

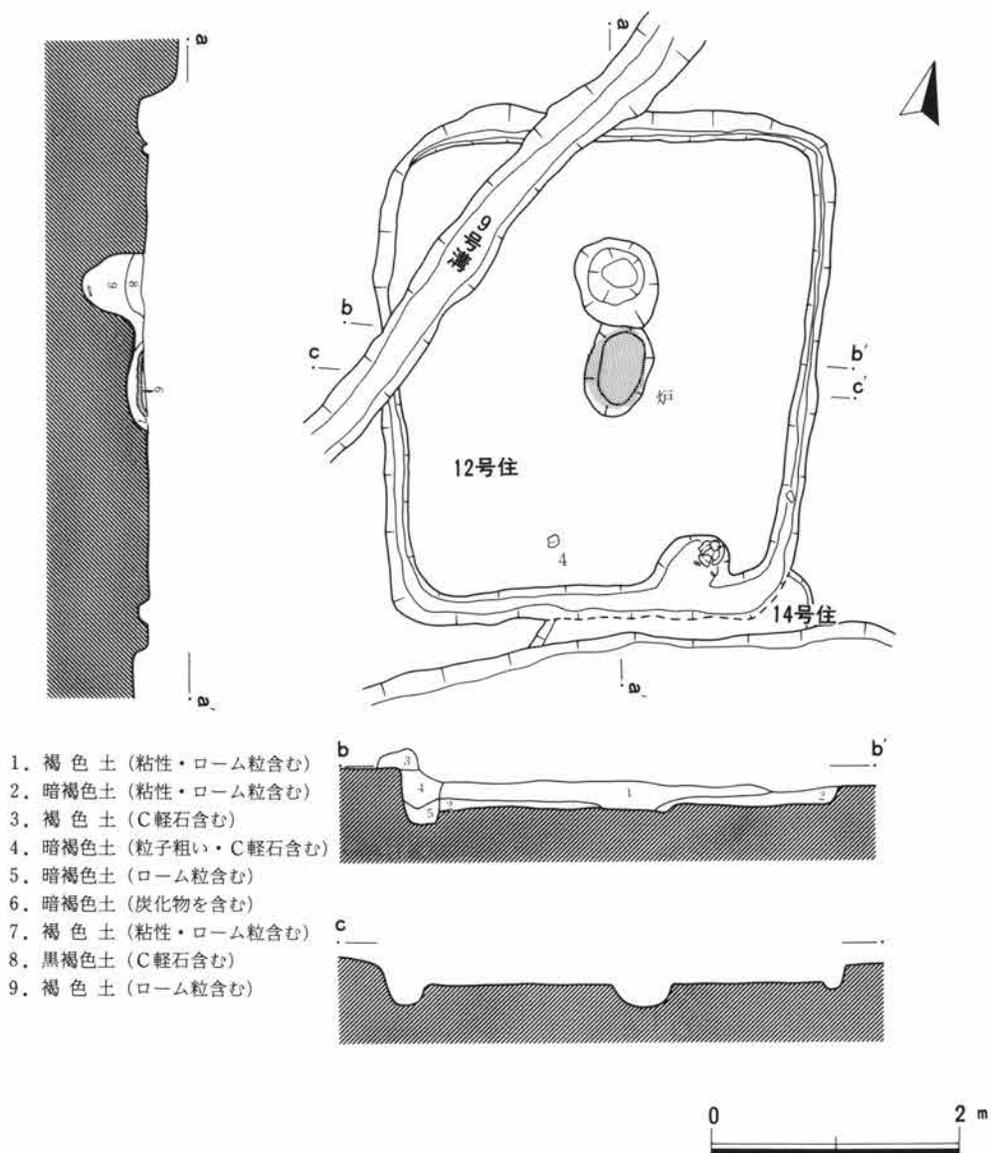
遺物は、床面の状態が良い割には少く、炉の北側ピット覆土下層より底部(3)・胴部(2)が出土し、南壁際からは壺口縁(1)、やや西寄りから頸部(4)が見られた程度である。赤色顔料は、炉址北側ピット覆土上層以外に、北壁周溝上面からも検出された。

第II章 検出された遺構と遺物

14号住居址（4区）〔第21図〕

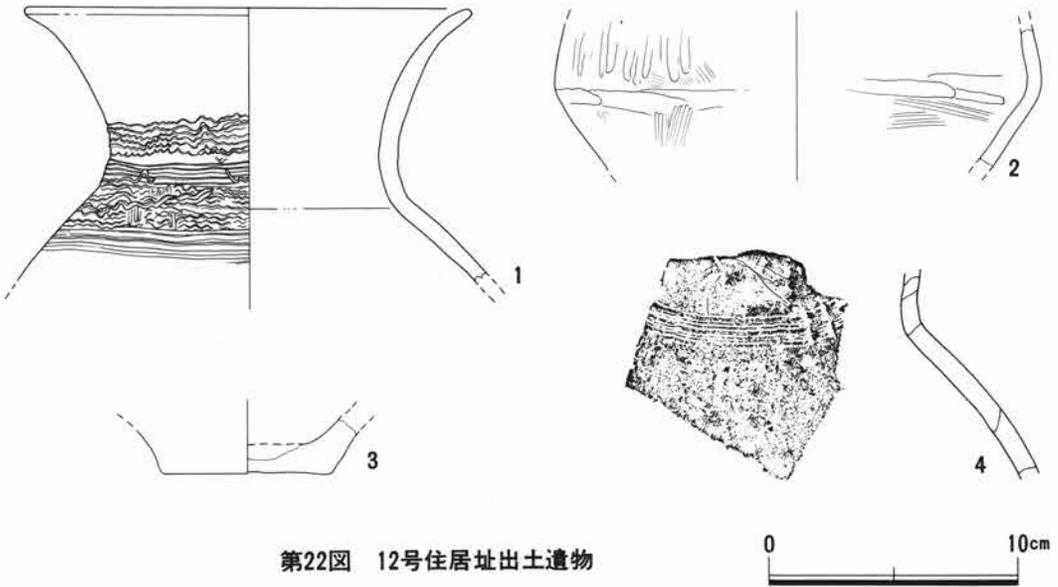
本住居址は、12号住居址の南東側壁面を調査中に確認された。東西2mほどを測るが、すぐ南側を10号溝に切られているため、全体の形状は全く不明である。

床はローム面をたたいているが、12号住居址ほどは硬くない。壁は東西とも確認面まで15cmほどで、遺物は全く見られなかった。住居址ではないことも考えられる。



第21図 12・14号住居址

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



第22図 12号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	床面直上 胴下半欠	1	口径 18.0	口縁部「く」の字状に 外反。	内面輪積痕。外面指ナデ後、波状文、 櫛描平行線文を交互に施文。内面ヨ コヘラミガキ。	砂粒含む。焼成普 通。にぶい黄橙色。
壺	炉 胴の一部	2	胴径 19.7		外面胴上部タテミガキ、下部ヨコ指 ナデ。内面ヨコ指ナデ。	砂、小石含む。焼 成良好。橙色。
甕	炉 底部のみ	3	底径 6.9		胴下部タテヘラミガキ。内面ヨコヘ ラミガキ。	粒子粗い。軟質。 灰黄色。外面スス 附着。
壺	床面直上 胴の一部	4			断面輪積痕。外面胴部タテハケ後、 頸部右回り簾状文。内面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成良 好。にぶい橙色。

12号住居址出土土器観察表

13号住居址（4区）〔第23・24図・図版7（遺構）・図版68（遺物）〕

本住居址は、第4層の黒褐色土下面で確認された。9・10号溝、8・9号土坑と重複するが、いずれも本住居址を切っている。

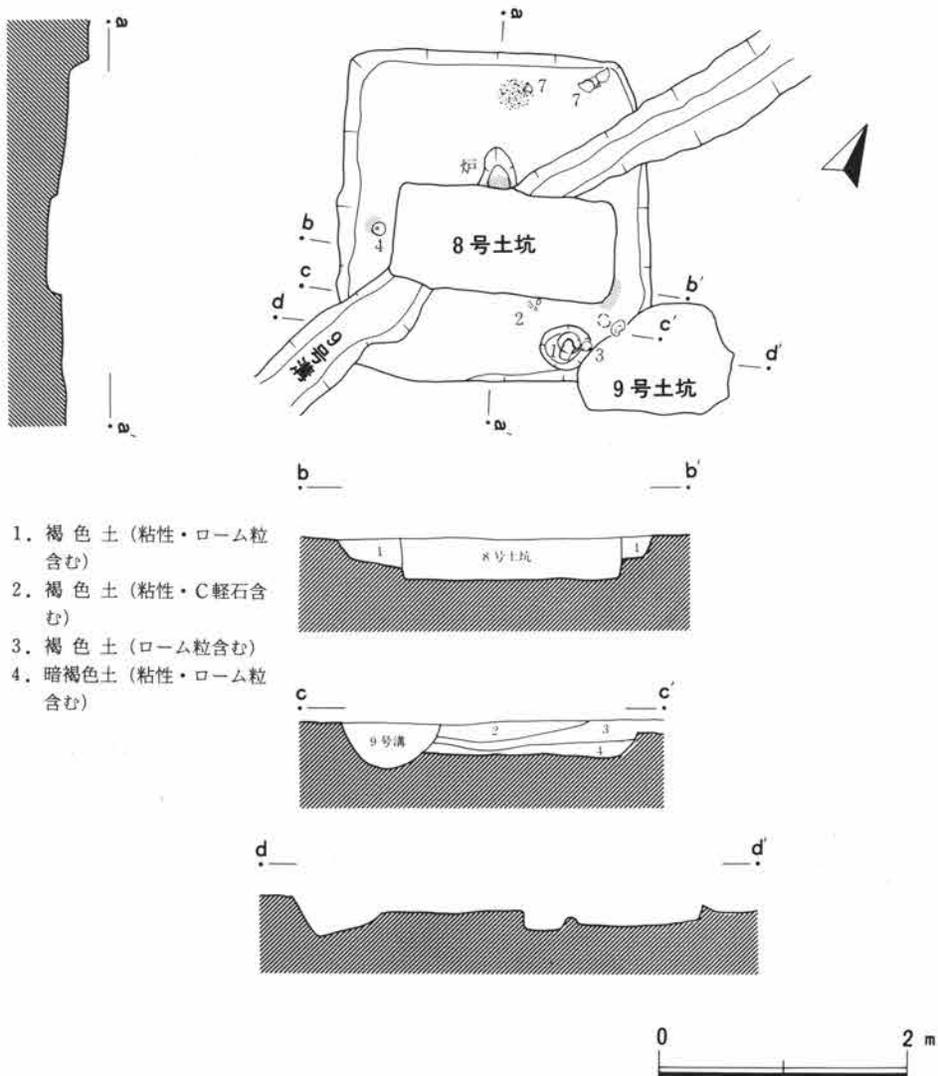
南北2.4~2.5m、東西2.1~2.4mで、やや台形ぎみの正方形に近い形を呈する。壁は確認面まで約20cm、特に西側はやや緩やかな立ち上がりを示す。床はローム面をたたっているが、2~3cmの凹凸があり、均一ではない。

残存する床面には、図のように3ヶ所焼土の堆積が見られた。このうち8号土坑に切られてい

第II章 検出された遺構と遺物

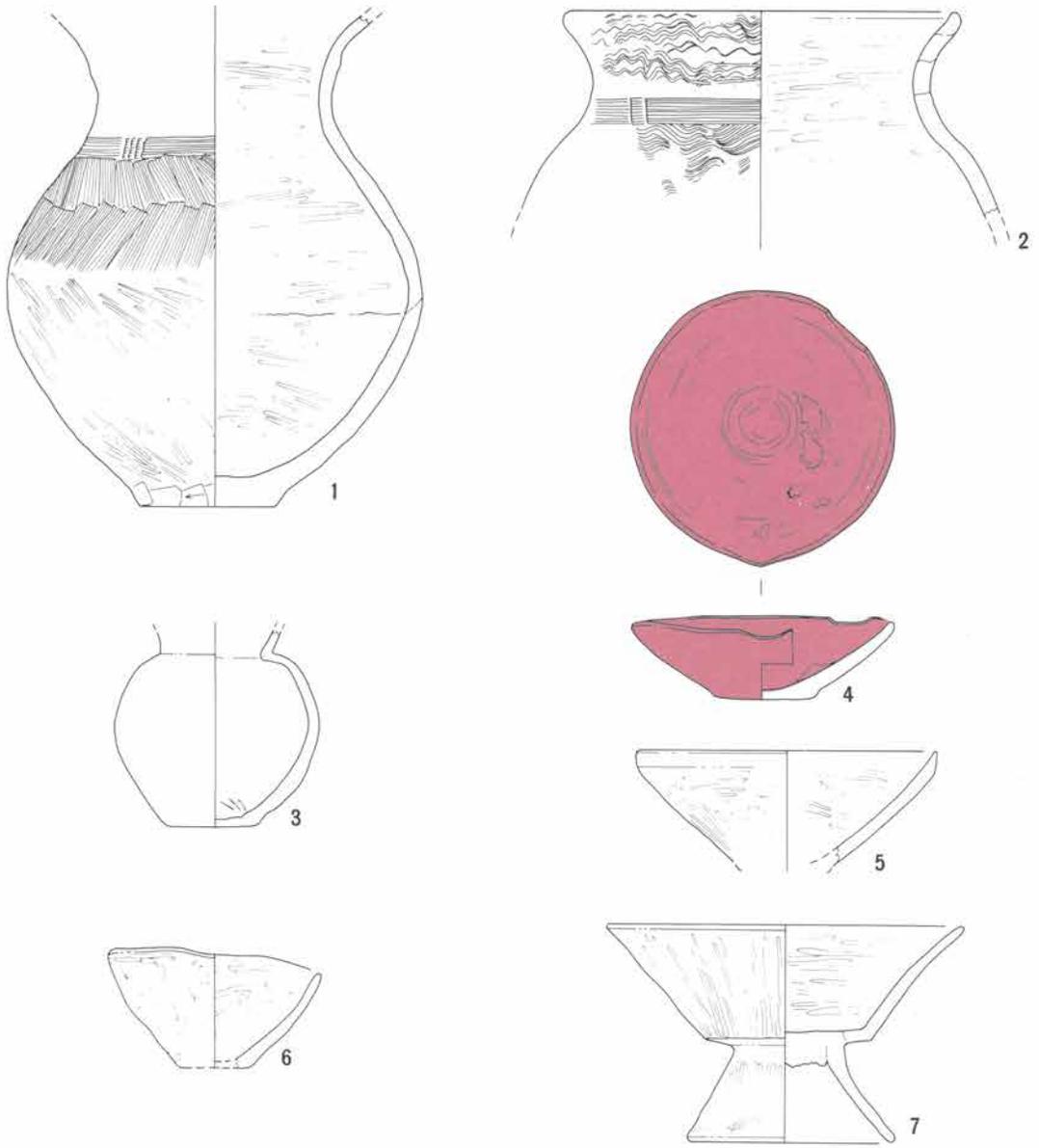
る中央やや北寄りのものは、炭化層の残存と浅い半長円形の掘りこみがあり、炉と考えられる。南東コーナー付近には、底径30cm、深さ15cmほどの浅いピットが検出されたが、性格は不明である。また、北壁際中央の床面には、粘土の堆積が見られた。

本住居址は、多くの新しい遺構に壊され、規模が小さなほどには、遺物の残存は良かった。南東側コーナー付近では、ピットの覆土上層で壺 (1)、小形壺 (3) そしてやや浮いて杯部 (5) が見られた。また8号土坑に切られた床面には、甕口縁 (2) が残っていた。北壁際近くでは、床面直上で高杯 (7) が出土し、西壁際の焼土面直上には、鉢 (4) が残っていた。なお、この鉢の内面には赤色顔料が付着しており、また南東側の焼土の近くの床面にも、赤色顔料の付着が見られた。



第23図 13号住居址

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



第24図 13号住居址出土遺物

0 10cm

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	ピット上面 口唇部・ 胴上部一部欠	1	胴径 17.3 底径 5.6	胴最大径中位で球形を呈す。口縁部大きく外反。	内面輪積痕。外面口縁・胴上部ヨコヘラミガキ後、頸部右回り簾状文、胴部羽状櫛描文。外面胴下半ナメヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。にぶい褐色。外面黒斑。口縁部スス附着。

第II章 検出された遺構と遺物

甕	床面直上 口縁～胴 上部 $\frac{3}{4}$	2	口径 16.2	口縁部比較的短かい。	輪積痕。外面波状文施文後、頸部右 回り簾状文。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良 好。軟質。橙色。
小形 壺	ピット上 面 口唇部欠	3	胴径 8.5 底径 3.6	胴部球形。頸部「く」 の字状にくびれる。	成形不明。外面ヨコヘラミガキ。内 面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成良 好。橙色。下半部 黒斑あり。
片口 鉢	床面直上 完形	4	口径 11.0 底径 4.0 器高 3.4	杯部浅い	成形不明。内外面赤彩後、ヨコヘラ ミガキ。	胎土・焼成不明。 赤色。内面に赤色 顔料残存。
杯	床面直上 杯部 $\frac{3}{4}$	5	口径 12.5	杯部内湾しながらひら く。	外面上部ヨコヘラミガキ。下部タテ ヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	粒子細かい。焼成 普通。にぶい橙色。
杯	覆土 $\frac{1}{2}$	6	口径 9.0 底径 3.0 器高 4.7	杯部深い。	手づくね成形。外面タテヘラケズリ 後、タテヘラミガキ。内面ヨコヘラ ミガキ。	砂粒含む。焼成良 好。にぶい橙色。
高 杯	床面直上 ほぼ完形	7	口径 14.9 底径 8.5 器高 9.0	杯部外反しながらひら く。脚部短かく「八」 の字状にひらく。	外面タテヘラミガキ。内面ヨコヘラ ミガキ。	砂粒を含む。焼成 良好。赤褐色。

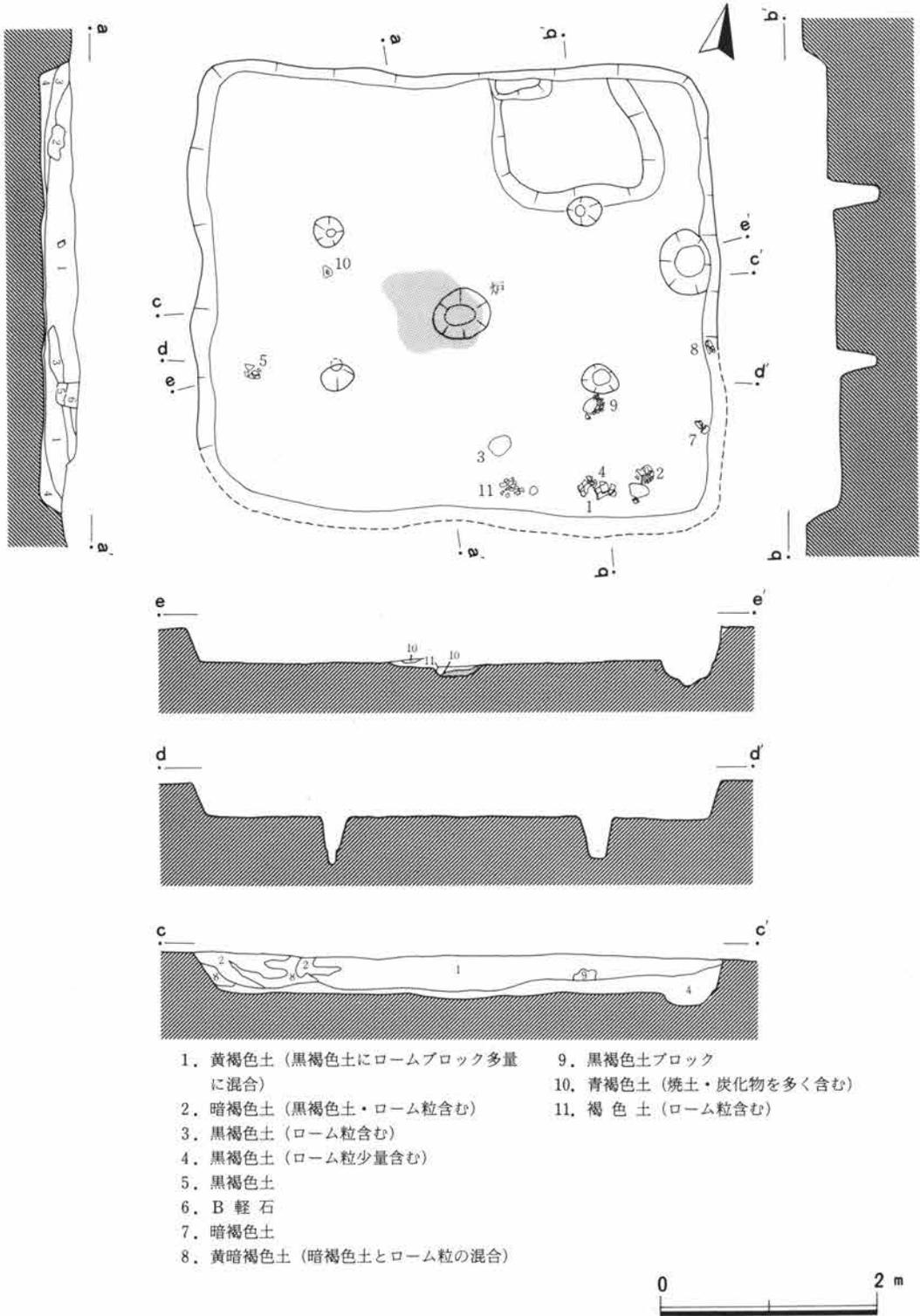
13号住居址出土土器観察表

15号住居址（4区）〔第25・26図・図版8（遺構）・図版70（遺物）〕

第4層黒褐色土面において確認された。16号住居址の埋没面上に一部重複しており、床面レベルは16号住居址と同一である。規模は4m×4.8mの長方形を呈する。壁は傾斜をもって立ちあがり、床面はローム面をたたいている。

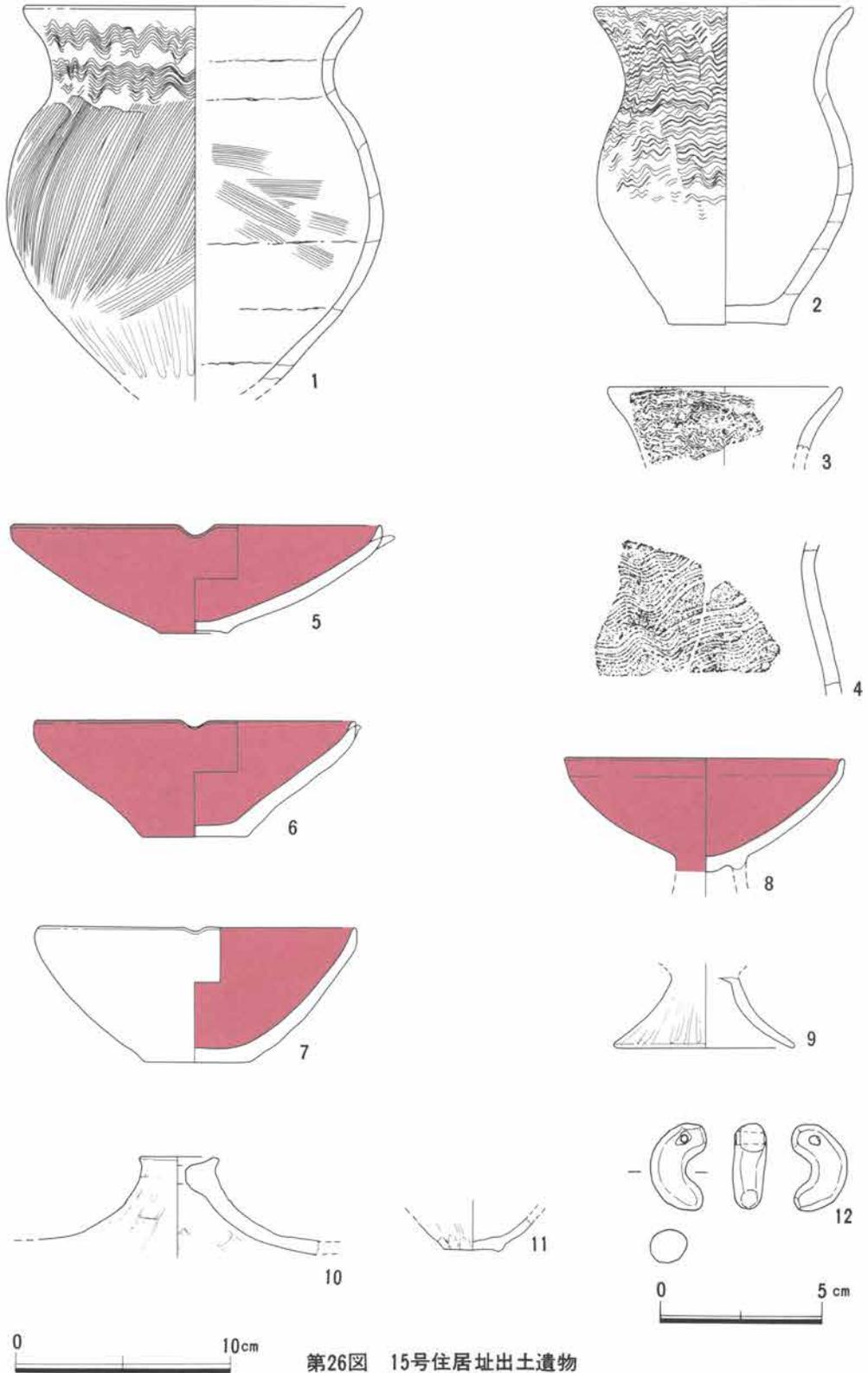
柱穴は4本が対置関係にあり、深さは床面から40cm～45cmの間である。壁周溝は無い。炉はほぼ中央にあり、直径約50cm、深さ約8cmの皿状を呈する。炉址内には焼土の堆積が認められ、周辺床面には灰・炭化物が拡がっていた。北東壁北寄りには、壁に接して1.3m、奥行き1.2mの不整隅丸方形を呈し、周辺床面より約1～5cm高い部分が存在する。またこの高い部分の南西端部、壁に接して幅約55cm、奥行き15cmのさらに10cmほど高くなった部分が存在する。北西壁中央付近に接しては、直径約50cm、深さ約25cmのピットがある。

出土遺物として、床面付近から高杯、片口鉢、甕形土器が発見され、炉址内からは土製勾玉が発見された。



第25図 15号住居址

第II章 検出された遺構と遺物



第26図 15号住居址出土遺物

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
甕	床面直上 底部欠	1	口径 15.7 胴径 17.5	胴最大径上半部。頸部 やや大きくくびれる。	内面輪積痕。外面口縁部波状文2段。 外面胴部ナナメハケメ。内面ヨコ指 ナデ。	砂粒少量含む。焼 成普通。にぶい橙 色。黒斑あり。外 面スス附着。
甕	床面直上 ほぼ完形	2	口径 12.0 胴径 12.0 底径 5.5 器高 14.6	胴最大径中位。頸部ゆ るやかにくびれる。口 径と胴径同じ。	輪積痕。外面ヘラミガキ後、波状文 内面ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成普 通。暗褐色。外面 スス附着。
甕	2cm上 口縁の一 部	3	口径 10.9		成形不明。外面波状文。内面ヨコヘ ラミガキ。	砂粒含む。焼成良 好。にぶい赤褐色。
甕	2cm上 胴の一部	4			外面指ナデ後、波状文。内面ヨコヘ ラミガキ。	砂粒多く含む。焼 成普通。にぶい赤 褐色。
片口鉢	床面直上 ほぼ完形	5	口径 17.2 底径 3.3 器高 5.0	浅く口唇部立ちあが る。	成形不明。内外面赤彩後、ヨコヘラ ミガキ。	細砂粒含む。粒子 細かい。焼成普通。 赤色。
片口鉢	覆土 1/3	6	口径 15.0 底径 5.0 器高 5.3	口唇部立ちあがる。	成形不明。内外面赤彩後、ヨコヘラ ミガキ。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。赤色。
片口鉢	床面直上 ほぼ完形	7	口径 14.8 底径 5.1 器高 6.2	やや内湾しながら開 き、口唇部立ちあがる。	成形不明。外面ヨコヘラミガキ（一 部赤彩）。内面赤彩後、ヨコヘラミガ キ。	細砂粒含む。焼成 普通。にぶい褐色。 内面赤色。
高杯	床面直上 脚部欠	8	口径 13.0	やや内湾しながら開 き、口唇部立ちあがる。	成形不明。内外面赤彩後、ヨコヘラ ミガキ。	細砂粒含む。粒子 細かい。焼成良好。 赤色。
高杯	床面直上	9	底径 8.3	脚部大きく開く。	輪積痕。外面タテヘラミガキ。内面 ヨコ指ナデ。	砂粒少量含む。硬 質。にぶい赤褐色。
蓋	床面直上 周辺部欠	10			つまみ中央に焼成後、穿孔し、外面ヨ コ、タテヘラミガキ。内面指ナデ後、 ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成普 通。灰褐色。外面 黒斑あり。
不明	2cm上 底部のみ	11	底径 2.6		手づくね	砂粒少量含む。硬 質。褐色。外面黒 斑。

15号住居址出土土器観察表

15号住居址出土土製勾玉〔第26図 12〕

炉址内より出土。長さ2.6cm、径約1.1cmの完形である。全体的に風化しており、調整技法は不明。胎土には小砂粒を含み、焼成良好、にぶい橙色を呈する。

第II章 検出された遺構と遺物

16号住居址（4区）〔第27～31図・図版8（遺構）・図版71（遺物）〕

第4層黒褐色土面で確認された。15号住居址に北西壁の中央部を切られている。規模は約10.5m×7.5mで、やや不整の長方形を呈する。壁は傾斜をもって立ちあがり、床面はローム面をたたいた直床である。

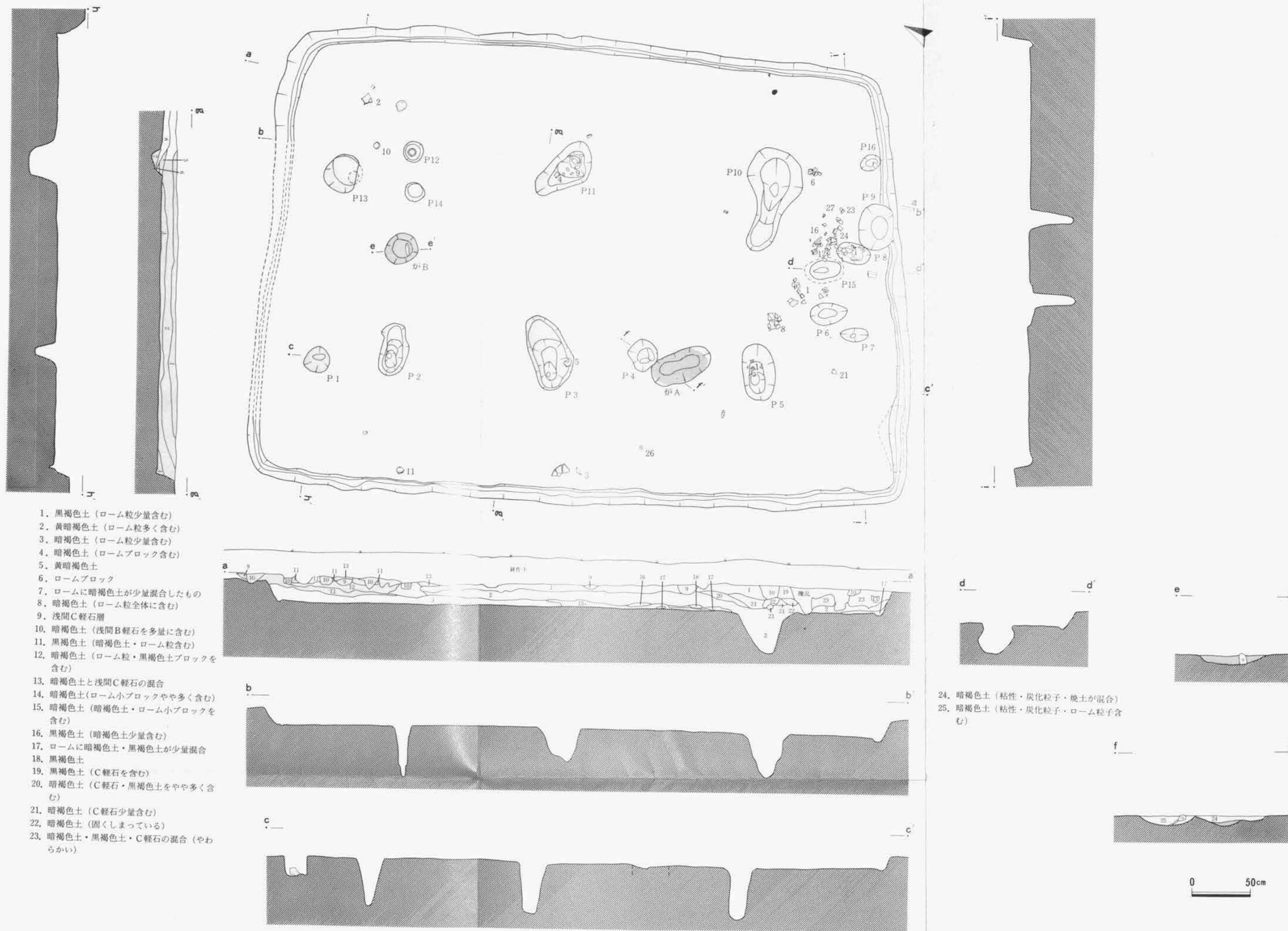
柱穴は支柱穴が6本（P2・P3・P5・P10・P11・P12）で、P1とP14は補助柱穴、P6・P7・P8・P15は出入口に付加された小柱と考えられる。壁周溝は全周すると考えられるが、15号住居址との重複部分では、15号住居址構築時に削られているためか、確認出来なかった。

炉はP3とP5のほぼ中間（炉A）、P2とP12のほぼ中間（炉B）の2ヶ所に存在する。炉Aは直径約50cm、深さ約8cmの皿状を呈する。南側に直角の角が位置するような形で、2個の長い河原石を置いており、底面には約5cmの厚さで焼土が堆積していた。炉Bは直径約50cm、深さ約8cmの皿状の掘り方をもち、炉Aと同規模である。炉址内南側に長さ23cmの河原石が置かれていた。

貯蔵穴状のピットは、P9とP13の2ヶ所存在する。P9は南東壁および出入口に付加されたP8にほぼ接して存在し、80cm×60cm、深さ52cmの規模を有する。P13は北西側柱列と北西壁のほぼ中間、北東壁寄りに存在する。掘り方は西側部分が袋状を呈し、直径は入り口部で約50cmの不整形、内部では直径約65cmとなる。底面には直径約15cm、厚さ約8cmの赤色顔料がみられた。なお、同様の顔料は住居址南部、東南壁に接して覆土下層中からも確認されている。

出土遺物は多い。壺・高杯・台付甕等が床面上から出土したが、その他に柱穴P5へ流れ込んだ状態で台付甕脚部片（14）が、またP8へは高杯片（20）、P9へは高杯片（15・22・25）、P11へは壺形土器片（4）がそれぞれ同様の状態で発見された。

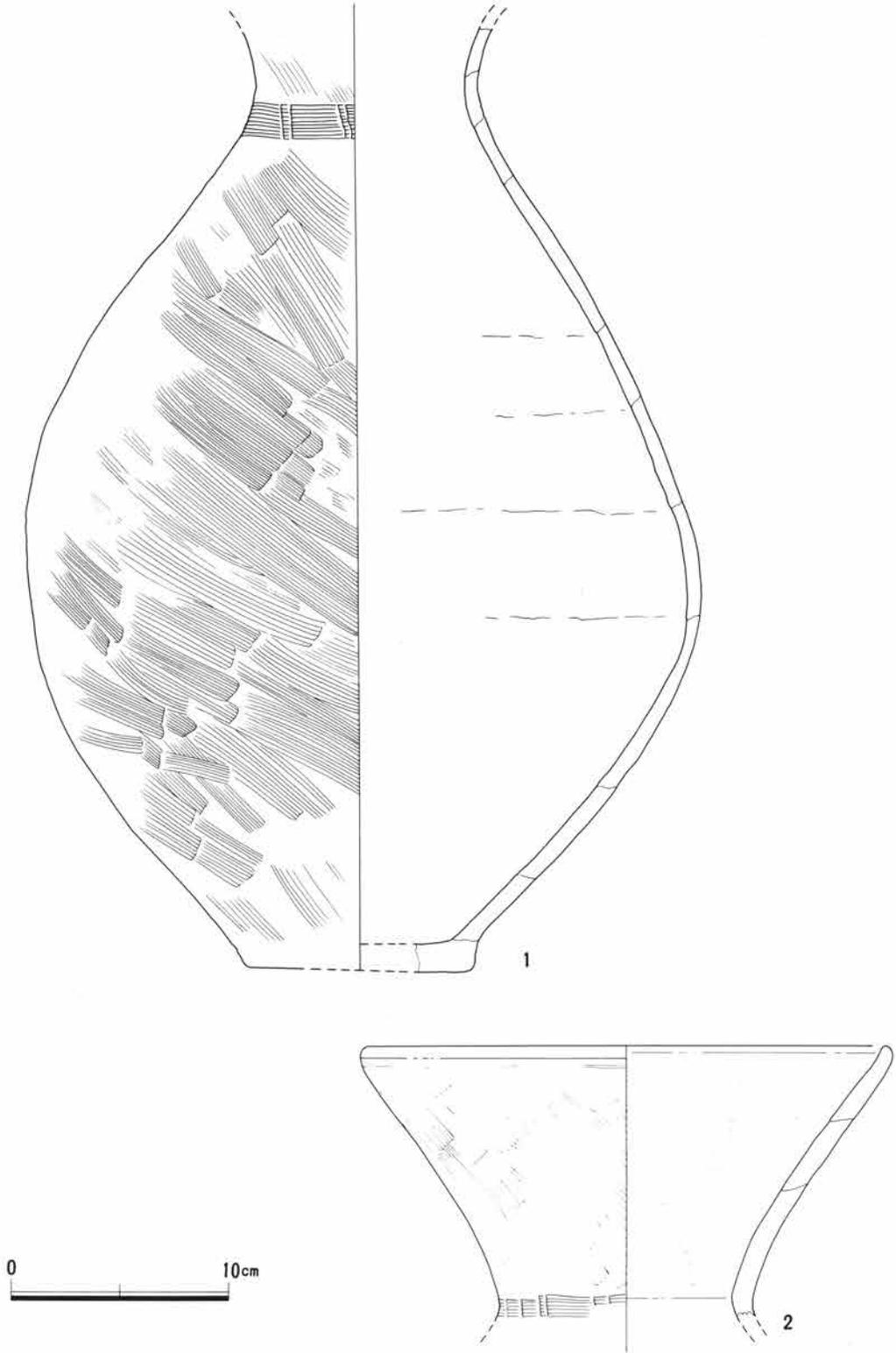
土器以外では、無茎の磨製石鏃がある。北東壁に接して床面から10cm上方（29）と、西南壁寄りの覆土中（28）、およびP14内（30）から出土している。



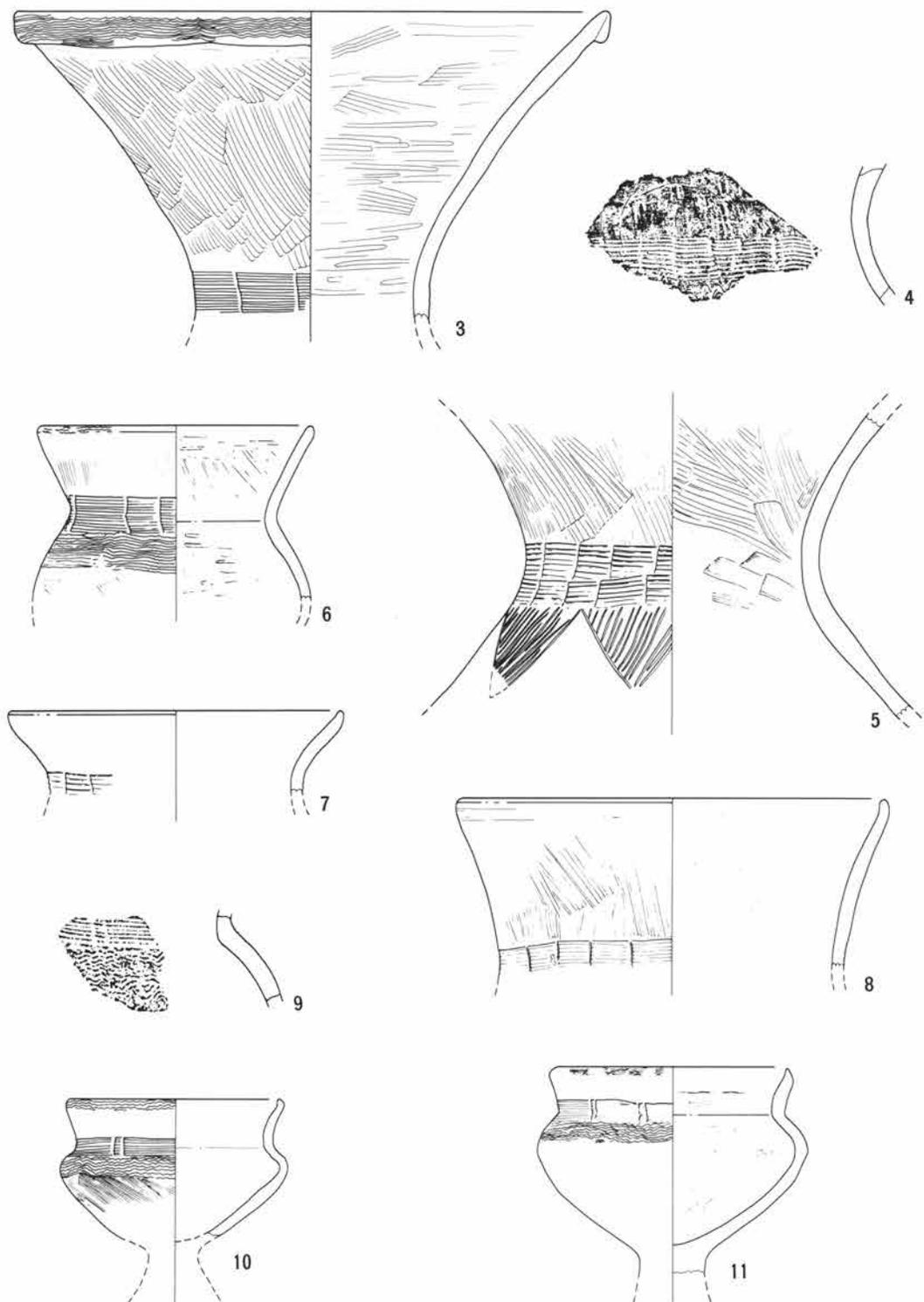
第27図 16号住居址

0 2 m

0 50cm

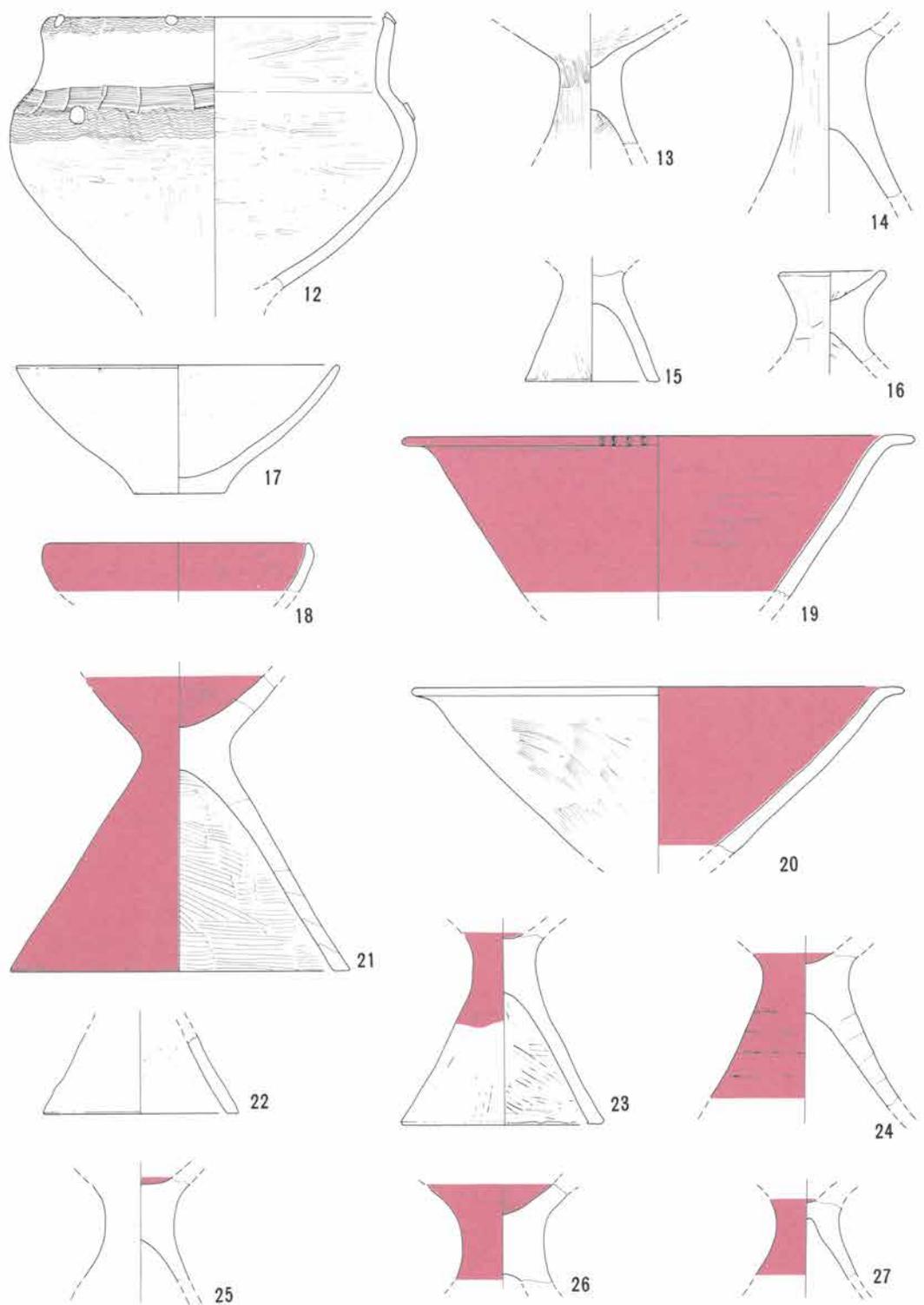


第28図 16号住居址出土遺物①



第29図 16号住居址出土遺物②

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



第30図 16号住居址出土遺物③

0 10cm

第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	4 cm上 口縁部欠	1	胴径 40.0 底径 10.3	胴最大径中央やや下方、底径と頸部の径が同じ。頸部なだらかにくびれる。	内面輪積痕。外面ナナメハケ後、頸部ヨコ指ナデ、右回り簾状文。内面磨滅。調整不明。	砂粒含む。焼成普通。淡黄色。胴部に黒斑。
壺	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$	2	口径 24.0	口縁部「く」の字状にくびれる。口唇部やや内傾。	外面輪積痕。外面ナナメハケ後、頸部ヨコ指ナデ、右回り簾状文施文。内面ヨコハケメ。口唇部ヨコ指ナデ。	砂粒多く含む。焼成良好。浅黄橙色。
壺	6 cm上 口縁部 $\frac{1}{2}$	3	口径 27.3	口縁部大きく外反	内面輪積痕。口唇部凸帯貼りつけ。外面ナナメハケ後、頸部ヨコ指ナデ、右回り簾状文。口唇部外面波状文。内面ナナメハケ後、ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。にぶい黄橙色。
壺	ピット11	4		頸部ゆるやかに外反	外面タテハケ後、タテ指ナデ。頸部右回り簾状文。胴上部波状文。外面ヨコハケ後、ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。硬質。焼成良好。にぶい橙色。
壺	床面直上 頸部 $\frac{1}{2}$	5		頸部大きくくびれる。	輪積痕。外面ナナメハケ後、右回り簾状文、鋸歯文の順に施文。胴部内面ヨコ指ナデ。口縁部外面ナナメハケメ。	砂粒、小石含む。焼成良好。浅黄橙。外面スス付着。
甕	床面直上 上半部	6	口径 12.4	頸部「く」の字状にくびれる。	成形不明。口縁部外面タテハケ、胴部外面ナナメハケ、頸部指ナデ後、右回り簾状文、胴上部波状文の順に施文。外面ナナメハケ後、ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成普通。褐色。内外面スス付着。
甕	覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$	7	口径 15.5	口縁部短かい。	成形不明。外面ヨコ指ナデ後、右回り簾状文施文。内面ヨコ指ナデ。	細砂粒含む。焼成良好。灰黄褐色。外面スス付着。
甕	2 cm上 口縁部 $\frac{1}{2}$	8	口径 19.9	口縁部ゆるやかに外反。口唇部垂直に立ちあがる。	内面輪積痕。外面タテハケ後、口唇部ヨコ指ナデ、頸部右回り簾状文。内面ヨコヘラミガキ。口唇部指ナデ。	砂粒殆んど含まず。焼成良好。にぶい橙色。黒斑あり。
甕	床面直上	9			外面頸部右回り簾状文。胴上部波状文。内面ヨコ指ナデ。	粒子粗い。砂粒多く含む。焼成良好。にぶい橙色。
台付甕	床面直上 台部欠	10	口径 9.9 胴径 10.5	最大径胴上部	内面輪積痕。外面ナナメハケ後、口縁部ヨコ指ナデ。口唇部波状文。頸部右回り簾状文。胴最上部波状文。	砂粒含み硬質。焼成良好。黒褐色。外面スス付着。
台付甕	床面直上 台部欠	11	口径 10.8 胴径 12.5	最大径胴上部	内面輪積痕。外面口縁部ヨコ指ナデ後、口唇部波状文、頸部右回り簾状文。胴部ヘラミガキ後、波状文。内面ヨコミガキ。	砂粒多く含む。焼成普通。黒褐色。外面スス付着。

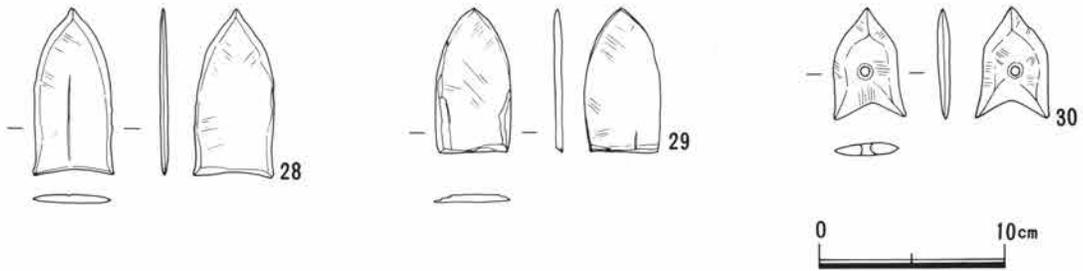
第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址

台付甕	床面直上 ⅔	12	口径 16.5 胴径 18.8	最大径胴上部。口縁ほぼ直立。	内面輪積痕。外面タテヘラミガキ後、口縁部ヨコ指ナデ。口唇部波状文。ボタン状貼付文6。頸部右回り簾状文施文後、波状文。ボタン状貼付文6。内面ヘラケズリ後、ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成普通。にぶい褐色。外面スス付着。
台付甕	床面直上	13			胴部内外面ヘラミガキ。上部外面タテハケメ。上部外面ナナメハケメ。	砂粒含む。焼成良好。赤褐色。
台付甕	ピット5 台部	14			成形不明。外面タテハケ後、タテヘラミガキ。内面指ナデ。	砂粒多く含む。焼成良好。褐色。
台付甕	ピット9 台部	15	底径 6.2	台部「ハ」の字状にひらく。	成形不明。外面タテヘラミガキ。内面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。硬質。焼成良好。にぶい褐色。
蓋	床面直上 把手のみ	16	径 5.0		手づくね成形。外面タテヘラケズリ。	砂粒含む。焼成普通。灰黄色。
鉢	覆土 ⅔	17	口径 14.9 底径 4.2 器高 5.9	やや内傾しながら大きくひらく。	成形不明。外面タテヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	粒子細かく硬質。焼成良好。
杯	ピット10 口縁⅔	18	口径 12.0		内外面赤彩後、ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。赤色。
高杯	覆土 杯部⅔	19	口径 23.7	ほぼ直線的に外反。端部は水平となる。	輪積成形。外面ヨコ指ナデ後、赤彩。タテヘラミガキ。口唇部きざみ目。内面赤彩後、ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成普通。内外面赤色。
高杯	床面直上 ピット 8・11 杯部のみ	20	口径 22.8	やや内傾しながら大きくひらく。口縁端部は水平となる。	外面ナナメヘラミガキ。内面赤彩後、ヨコヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成良好。にぶい黄灰橙色。内面赤色。
高杯	10cm上 脚部のみ	21	底径 15.7	脚部「ハ」の字状にひらく	成形不明。外面赤彩後、タテヘラミガキ。杯部内面赤彩後、ヨコヘラミガキ。脚部外面ヨコハケメ。	硬質。焼成普通。外面、杯部内面赤色。内面にぶい黄橙色。
高杯	ピット9	22	底径 9.0	底部「ハ」の字状にひらく。	外面タテヘラミガキ。内面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成不良。橙色。
高杯	床面直上 脚部のみ	23	底径 9.3	脚部「ハ」の字状にひらく。	成形不明。外面タテハケメ、一部赤彩後、タテヘラミガキ。	砂粒含む。焼成普通。外面上部赤色、下部にぶい黄褐色。
高杯	床面直上 杯部⅔	24			成形不明。外面赤彩後、タテヘラミガキ。杯部内面赤彩後、ヘラミガキ、杯部内面指ナデ。	砂粒含み、粒子粗い。焼成良好。赤色。内面黒色。
高杯	ピット9 脚上部	25			外面タテヘラミガキ。杯部内面ヘラミガキ後、赤彩。脚部内面ナナメハケ。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい褐色。

第II章 検出された遺構と遺物

高 杯	床面直上	26		外面赤彩後、タテヘラミガキ。杯部内面赤彩後、ヨコヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成良好。赤色。
高 杯	床面直上 脚部 $\frac{1}{2}$	27		外面、杯部内面赤彩後ヘラミガキ、内面指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。赤色。

16号住居址出土土器観察表



第31図 16号住居址出土遺物④

16号住居址出土無基式磨製石鏃 (第31図)

28： 住居址西南壁近くの覆土中より出土。長さ4.5cm、最大幅2.1cm、厚さ2mmで完形である。表面はよく研磨されており、なめらかである。一面の中央部に長さ2.2cm、深さ0.5mmの溝を有する。暗緑灰色。緑色準片岩。

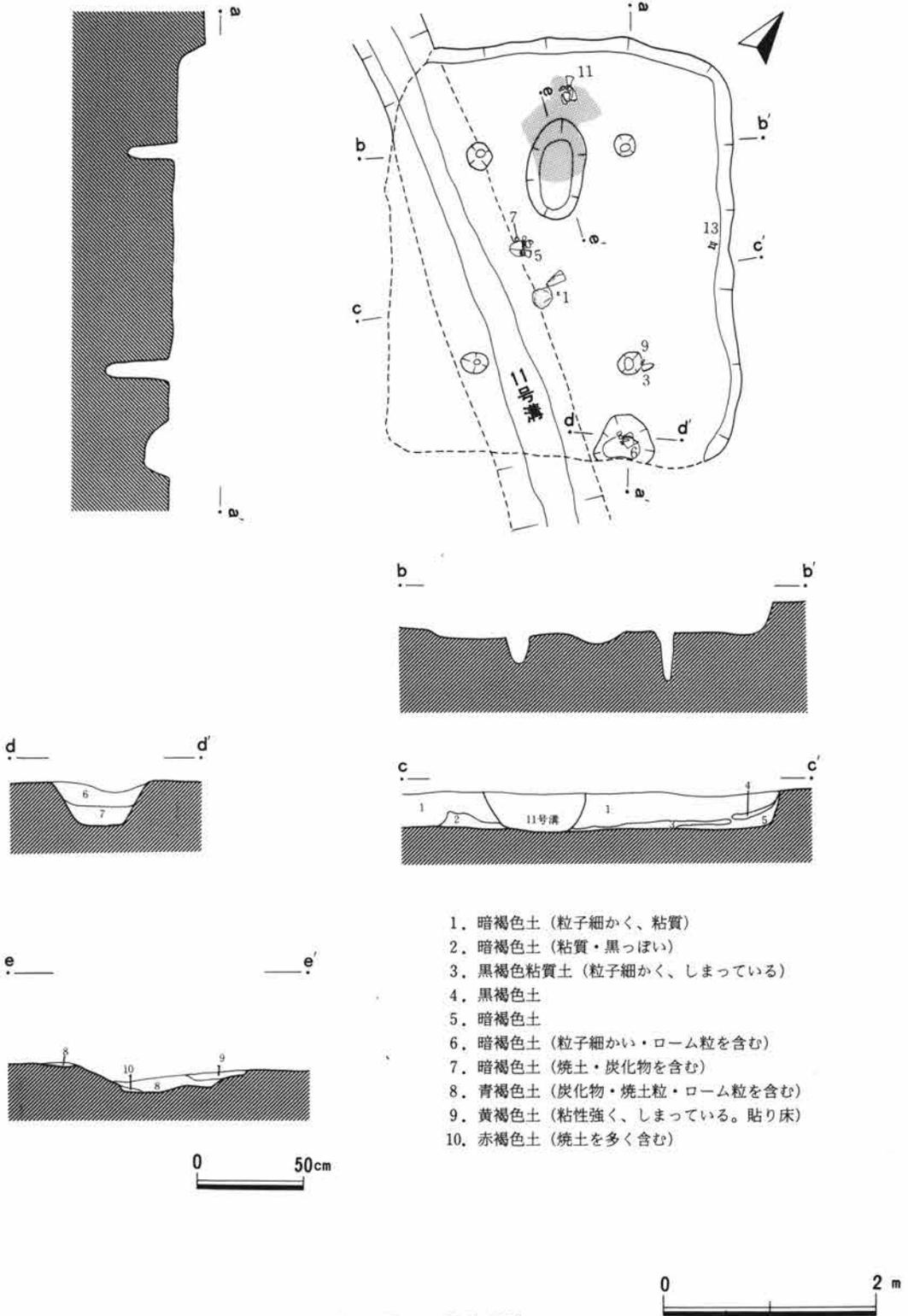
29： 住居址東北壁に接して出土した。床面より10cm上方である。長さ3.8cm、最大幅2cm、厚さ2mmで、周辺部がわずかに欠損している。一面の中央やや右寄りに、長さ6mm、深さ0.5mmの溝を有する。表面はよく研磨されており、なめらかであるが、部分的に製作時のものと考えられる擦痕を有する。暗緑灰色。緑色準片岩。

30： P14内出土。長さ3cm、最大幅2cm、厚さ3mmで完形である。中央部に直径3mmの小孔を有し、全体に製作時と考えられる擦痕がある。暗緑灰色。緑色準片岩。

18号住居址 (3区) [第32～34図・図版10 (遺構)・図版74 (遺物)]

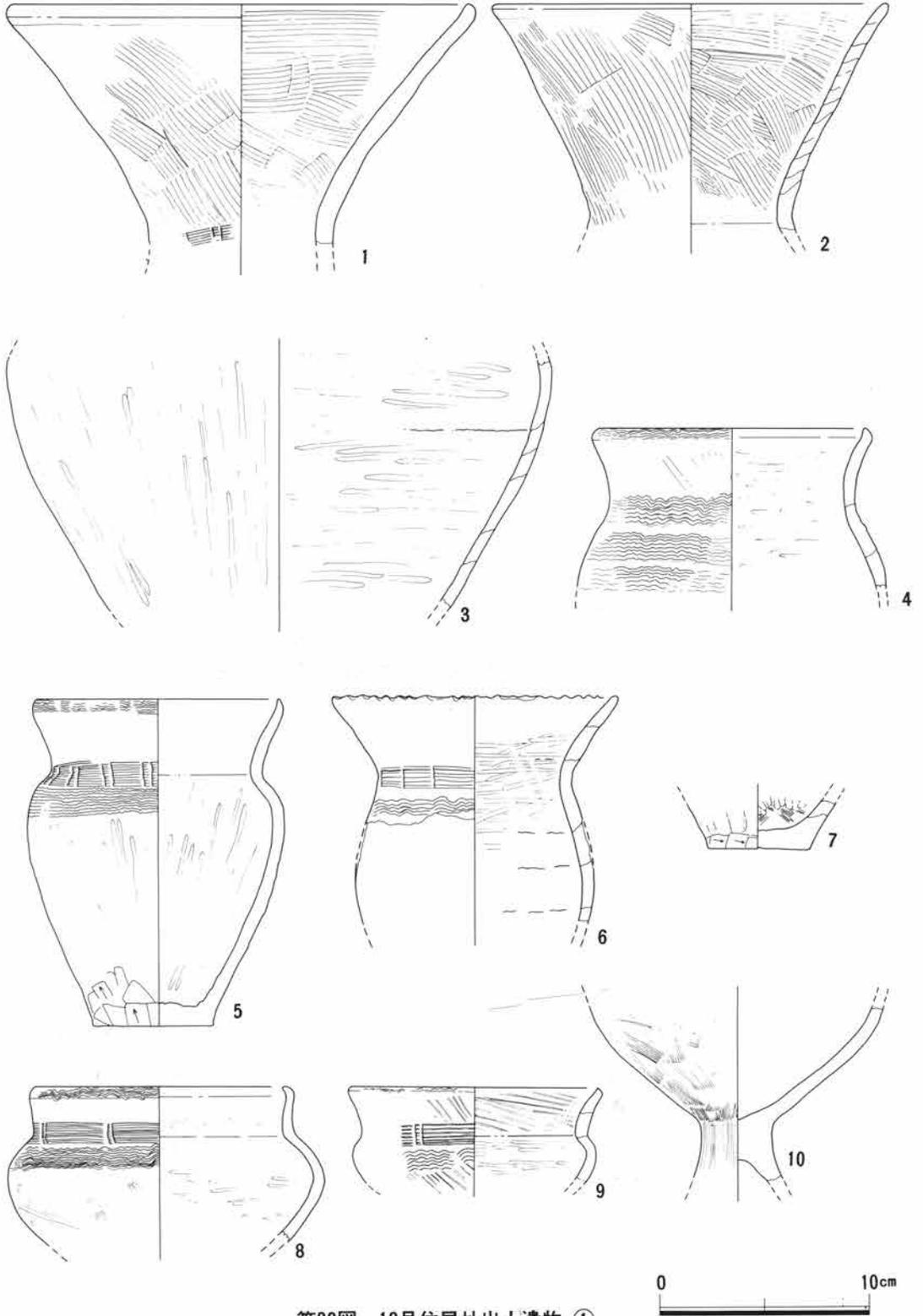
第4層黒褐色土層面において確認。11号溝によって切られている。規模は3.2m×3.9mの長方形と推定される。住居址南側の壁は、確認不可能であった。床面はロームの貼り床で、良く踏み固められている。柱穴は4本が対置関係にあり、円形でほぼ垂直に立ち上がる。壁周溝は確認されなかった。炉は北寄りの柱穴と柱穴の間に存在し、楕円形で皿状に掘り込まれている。炉の焼土は北側の床面へ広がっている。南壁に接して径約50cmの不整形のピットがあり、覆土下層より炭化材および石英片が検出された。出土遺物として床面直上からは、炉北側より台付甕形土器 (11) がつぶれた状態で、また中央付近より完形の甕形土器 (5) が検出された。

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



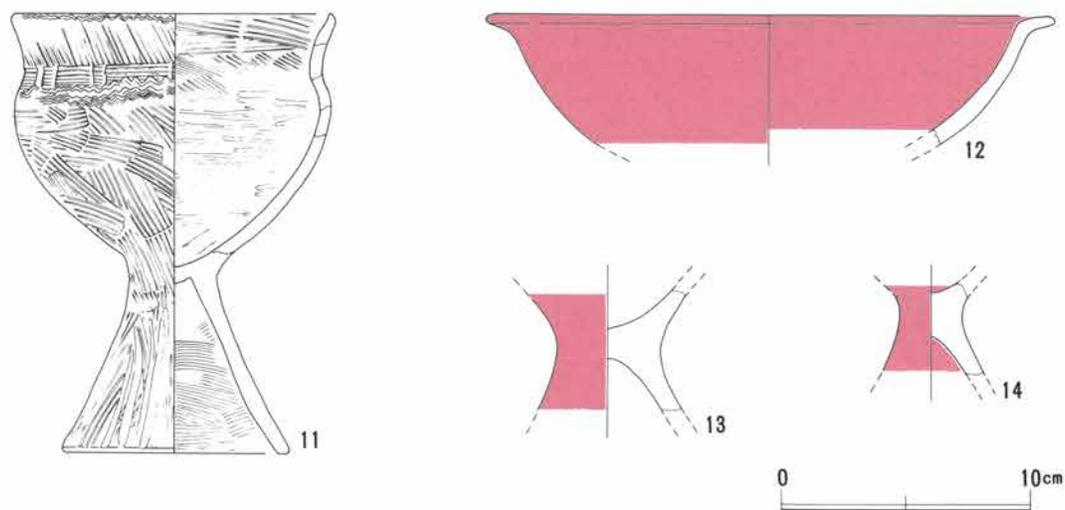
第32図 18号住居址

第II章 検出された遺構と遺物



第33図 18号住居址出土遺物 ①

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



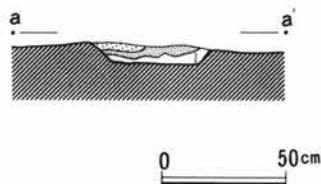
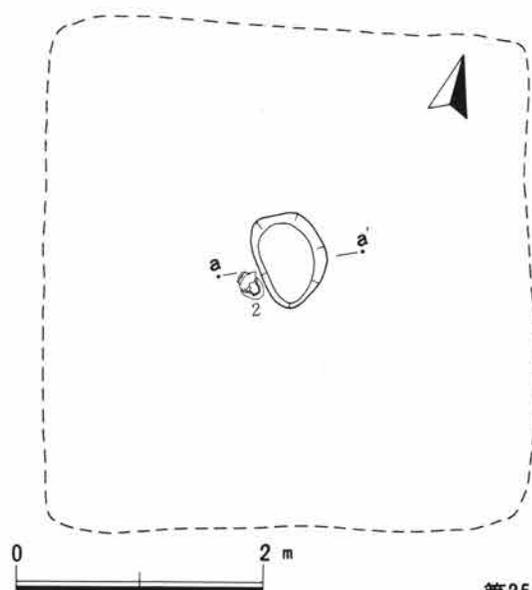
第34図 18号住居址出土遺物②

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	4cm上 口縁部 $\frac{1}{5}$	1	口径 22.3 ↓	口縁部大きく外反。	輪積成形。外面ナナメハケメ後、口唇部ヨコ指ナデ。頸部ヨコ指ナデ後、右回り簾状文。内面ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成良好。浅黄橙色。
壺	覆土 口縁部 $\frac{1}{5}$	2	口径 18.8	口縁部大きく外反。	成形不明。外面タテハケメ。内面ナナメハケメ。	砂粒を含む。焼成良好。浅黄橙色。
壺	覆土 胴部 $\frac{1}{5}$	3	胴径 26.0		内面輪積痕。外面タテヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成普通。にぶい黄褐色。外面スス附着。
甕	覆土 胴上部 $\frac{1}{5}$	4	口径 13.4	頸部ゆるやかにくびれる。	内面輪積痕。口縁部外面タテヘラミガキ。胴部ヨコヘラミガキ後、口唇部・頸部・胴部波状文。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。明赤褐色。
甕	床面直上 完形	5	口径 12.0 胴径 12.2 底径 5.7	胴最大径最上部、口径とほぼ同じ。	内面輪積痕。外面口縁部ヨコ指ナデ。外面タテヘラミガキ。口唇部波状文。頸部右回り簾状文。胴上部波状文。内面口縁部ヨコヘラミガキ。内面胴部ナナメヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成普通。にぶい赤褐色。外面スス附着。
甕	18cm上 口縁部 $\frac{1}{5}$	6	口径 13.6	頸部「く」の字状にくびれる。	内面輪積痕。外面指ナデ後、頸部右回り簾状文。内面ヨコヘラミガキ。口唇部きざみ目。	砂粒含む。焼成不良。黒褐色。外面スス附着。
甕	床面直上 底部のみ	7	底径 4.8		底面ヘラケズリ。外面タテヘラミガキ。内面タテヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。にぶい黄褐色。

第II章 検出された遺構と遺物

台付甕	覆土 上半部 $\frac{1}{2}$	8	口径 11.8 胴径 15.1	最大径胴上部。口縁短かく直立。口唇部内傾。	内面輪積痕。外面ヨコ指ナデ後、口唇部波状文。頸部右回り簾状文。胴上部波状文。内面ヘラケズリ、指ナデ後、胴部ヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成普通。にぶい橙色。外面スス付着。
台付甕	4 cm上 上半部 $\frac{1}{2}$	9	口径 12.8 胴径 11.6	胴最大径頸部直下。頸部「く」の字状にくびれる。	内外面輪積痕。外面ヨコ指ナデ後、胴部ナナメヘラケズリ。頸部右回り簾状文。内面ヨコヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成良好。硬質。褐色。外面スス付着。
台付甕	覆土 胴下半 $\frac{1}{2}$	10		胴下半ほぼ直線的に台部にいたる。	成形不明。外面ナナメハケメ。内面ヨコヘラミガキ。台部内面指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。橙色。外面スス付着。
台付甕	3 cm上 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	11	口径 12.6 胴径 12.7 底径 9.0 器高 17.5	胴最大径頸部直下。頸部ゆるやかにくびれ、口径と胴径ほぼ同じ。脚部「ハ」の字状にひらく。	内面輪積痕。外面口縁部タテハケ後、ヨコ指ナデ・口唇部波状文。胴部ナナメハケ後、頸部右回り簾状文。胴上部波状文。台部タテハケ後、タテヘラミガキ。内面ヨコハケ後、ヨコヘラミガキ。台部内面ヨコハケメ。	砂粒含む。粒子細かく硬質。焼成良好。褐色。橙色。胴部外面スス付着。
高杯	覆土	12	口径 22.8	杯部内湾しながら開き、口唇部水平となる。	成形不明。内外面赤彩後、ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む。粒子粗い。焼成良好。赤色。
高杯	6 cm上	13			成形不明。外面赤彩後、タテヘラミガキ。杯部内面ヨコヘラミガキ。脚部内面指ナデ。	粒子細かく硬質。焼成良好。外面赤色。杯部内面黒色。(赤色塗彩の可能性あり)
高杯	覆土	14		脚部「ハ」の字状に開く。	外面・杯部内面・脚部内面赤彩後、ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。赤色。

18号住居址出土土器観察表

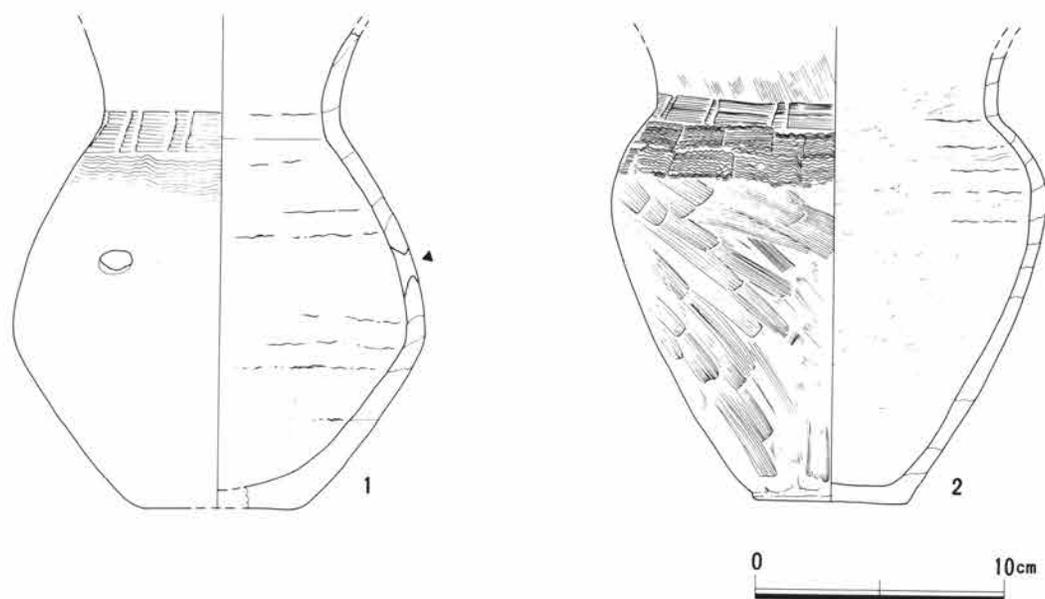


1. 暗褐色土(粘性・焼土少量混合)

第35図 19号住居址

19号住居址（3区）〔第35・36図・図版11（遺構）・図版74（遺物）〕

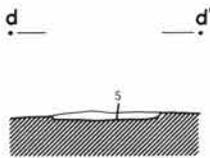
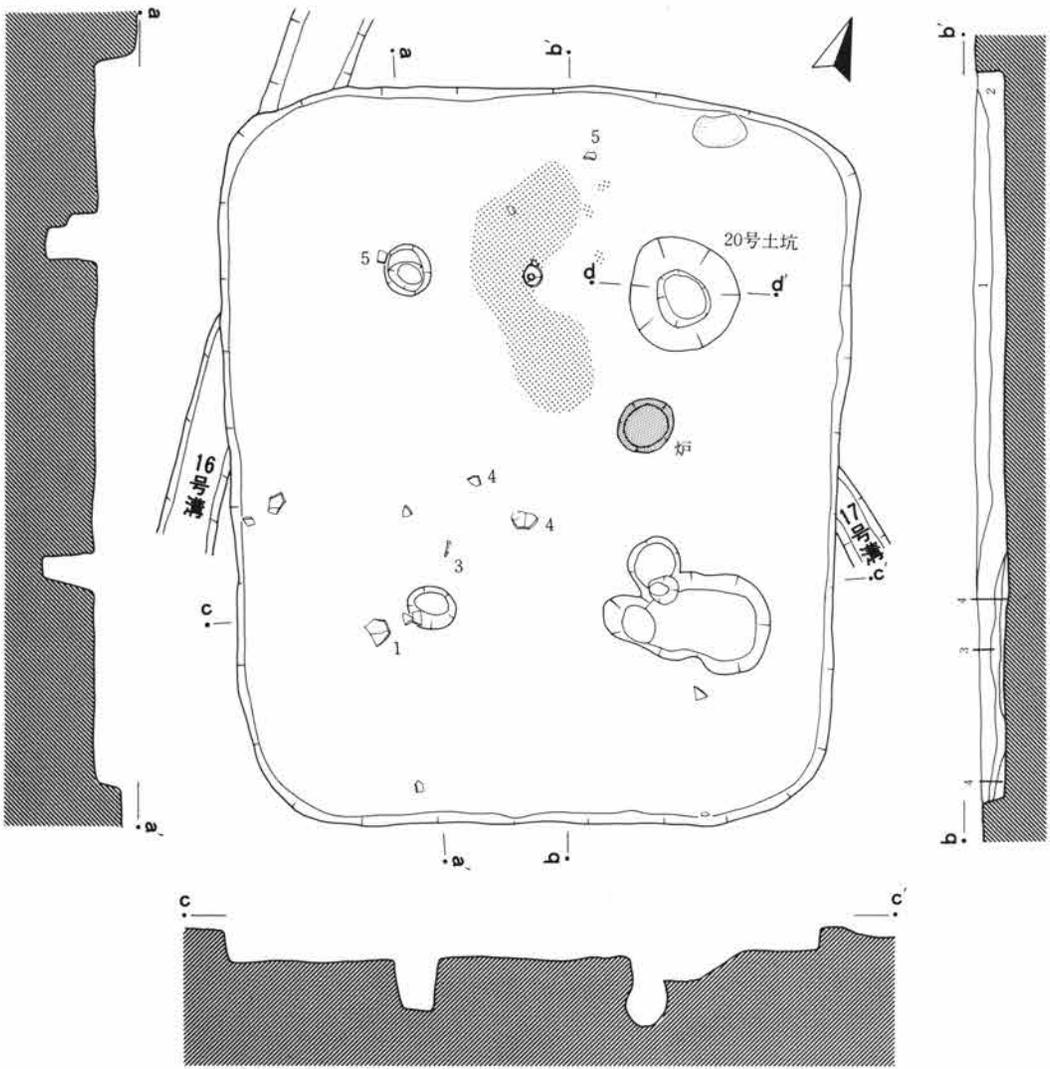
第4層黒褐色土層面において確認。一辺約4mの正方形に近い形態と考えられるが、確認が極めて難しく、焼土・炭化物の分布範囲で規模を推定した。床面は炉址周辺で貼床が一部確認されたが、柱穴、壁周溝、貯蔵穴は確認できなかった。炉址は皿状に掘りくぼめてあり、傍の床面直上より甕形土器(2)、炉址上方覆土中より壺形土器(1)が検出されている。



第36図 19号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	炉址上方 3/5	1	胴径 16.5 底径 6.5	最大径胴中位。口縁部短かくゆるやかに外反。	内外面輪積痕。外面摩滅のため調整不明。頸部に右回り簾状文。胴上部に波状文。内面上半ヘラナデ。内面下半ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成普通。にぶい黄橙色。胴中位に焼成後穿孔あり。黒斑あり。
甕	床面直上 口縁部欠	2	胴径 17.5 底径 6.2	最大径胴上位。頸部「く」の字状にくびれる。	輪積痕。外面口縁部タテハケメ。胴部ナナメハケメ。頸部ヨコ指ナデ後、右回り簾状文、波状文の順に施文。	砂粒含む。焼成良好。灰褐色。外面スス附着。

19号住居址出土土器観察表



1. 暗褐色土（粘質）
2. 暗黄褐色土（粘質・ロームブロック含む）
3. 暗褐色土（粘質・ロームブロック・ローム粒を多く含む）
4. 暗黄褐色土（粘質・ローム粒少量含む）
5. 焼土・炭化物の混合層

0 50cm

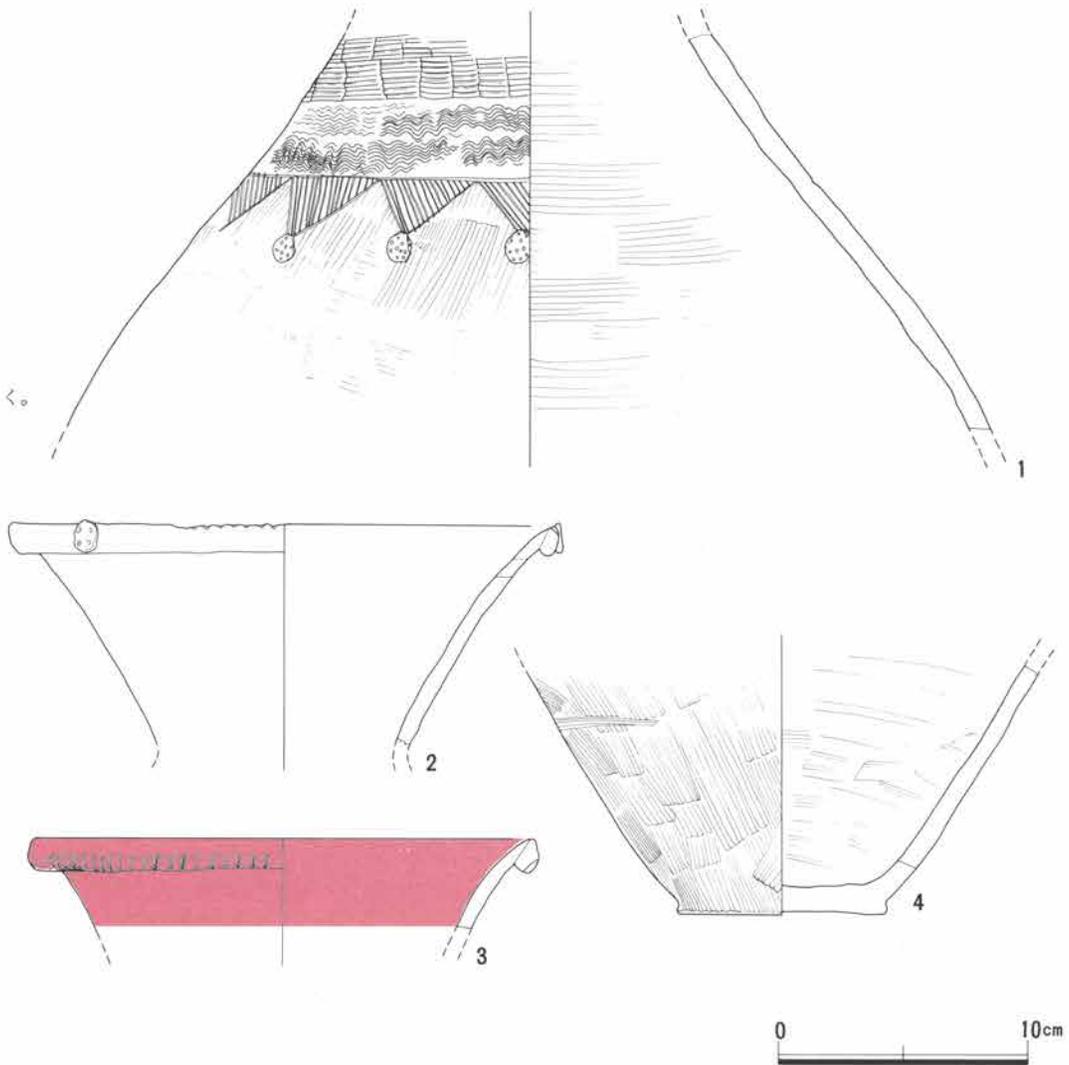
0 2 m

第37図 21号住居址

21号住居址（3区）〔第37～39図・図版11（遺構）・図版75（遺物）〕

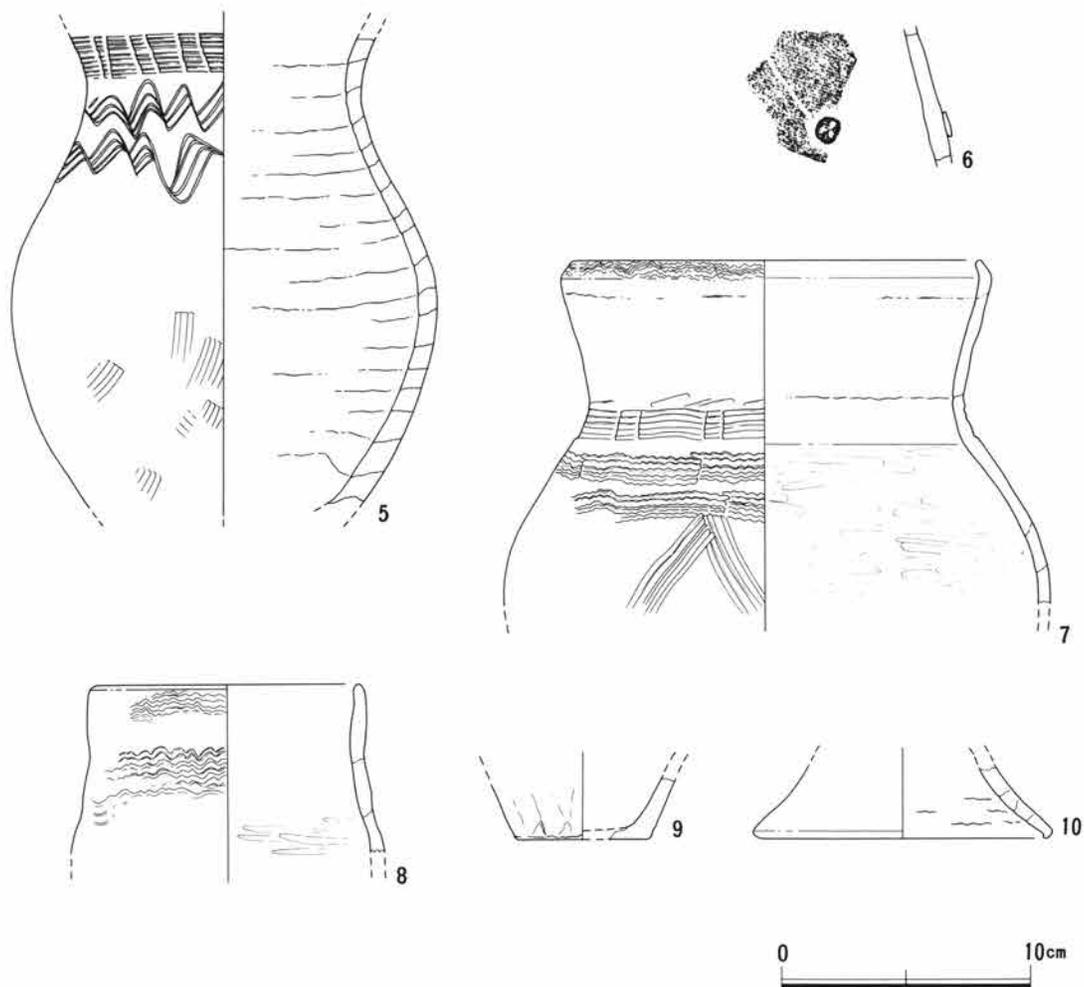
第4層黒褐色土面において確認された。浅い16号溝、17号溝に壁の上部を切られ、20号土坑に柱穴部分を切られている。規模は4.9m×5.9mで南北に長い長方形を呈し、壁はやや傾斜して立ち上がる。床面は粘質土を貼っているものの、炉周辺を除いて明瞭ではない。北側の柱穴と柱穴の間に焼土と灰、炭化物の堆積がみられた。柱穴は北東部分が20号土坑によって消滅しているものの、本来は不整ながら4本が対置関係にあったものと推定される。壁周溝はない。

炉は東側の柱穴と柱穴のほぼ中間に位置し、直径約40cmの浅い皿状に掘り込まれている。なお南東柱穴の周囲に床面から25～30cmの浅い掘り込みがあるが、埋没土が柱穴と同一であるため、ほぼ同時に掘られた可能性が強い。床面付近より壺・甕・高杯等が確認されたが、完形に近いものは無い。



第38図 21号住居址出土遺物 ①

第II章 検出された遺構と遺物



第39図 21号住居址出土遺物②

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	床面直上 胴上部 $\frac{1}{5}$	1		頸部ゆるやかにくびれる。	内面輪積痕。外面タテ・ナナメハケ後、タテヘラミガキ。頸部右回り簾状文二段、波状文、鋸歯文、ボタン状貼付文の順。内面ヨコハケメ。	砂粒・石粒含む。焼成普通。にぶい黄褐色。
壺	覆土 口縁部 $\frac{1}{5}$	2	口径 22.0	口縁部大きく外反。	口唇部凸帯貼りつけ後、ボタン状貼付文。口唇部きざみ目。内外面磨滅、調整不明。	砂粒含む。焼成良好。橙色。
壺	覆土 口縁 $\frac{1}{5}$	3	口径 20.5	口縁部大きく外反。	口唇部凸帯貼りつけ後、きざみ目。内外面赤彩。外面磨滅。	砂粒多く含む。焼成良好。赤色。
壺	床面直上 下部 $\frac{1}{2}$	4	底径 8.5	胴部直線的に立ちあがる。	成形不明。外面タテハケメ。内面ヨコハケ後、指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。黒色と灰白色。

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址

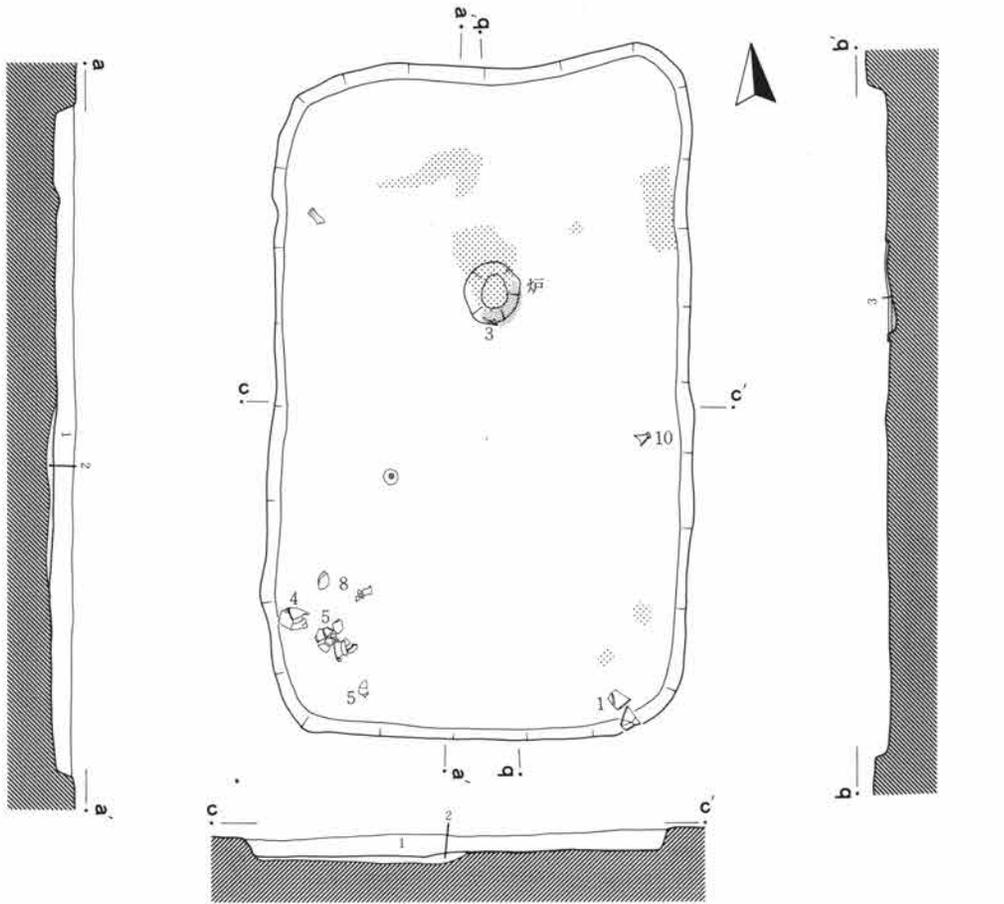
壺	床面直上 胴部 1/2	5	胴径 17.1	最大径胴中位。頸部ゆるやかにくびれる。	内面輪積痕。外面タテ・ナナメハケ後、ヘラミガキ。頸部右回り簾状文。胴上部波状文二段。内面磨滅。	砂粒・石粒多く含む。焼成普通。にぶい橙色。
壺	覆土 胴上部	6			外面指ナデ後、鋸歯文・ボタン状貼付文。内面磨滅。	小砂粒含む。焼成良好。にぶい橙色。
甕	覆土 胴上半1/2	7	口径 16.2	頸部ゆるやかな「く」の字状。口唇部内傾。	内面輪積痕。外面ヘラナデ後、口唇部波状文・頸部右回り簾状文。胴上部波状文二段。胴部斜行直状文。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。明赤色。外面スス附着。
甕	覆土 上部1/2	8	口径 11.0	口縁部やや内傾。	内面輪積痕。外面波状文。内面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成不良。にぶい褐色。内面モミ痕。
甕	床面直上 底部 1/2	9	底径 5.5	底部薄い。	成形不明。外面タテ指ナデ。内面ヘラケズリ。	砂粒含む。焼成普通。にぶい赤褐色。
高杯	床面直上 脚部 1/4	10	底径 11.8	脚部「ハ」の字にひらく。	内面輪積痕。外面磨滅。内面ヨコ指ナデ。	細砂粒含む。焼成普通。褐色。

21号住居址出土土器観察表

第II章 検出された遺構と遺物

22号住居址（3区）〔第40・41図・図版12（遺構）・図版76（遺物）〕

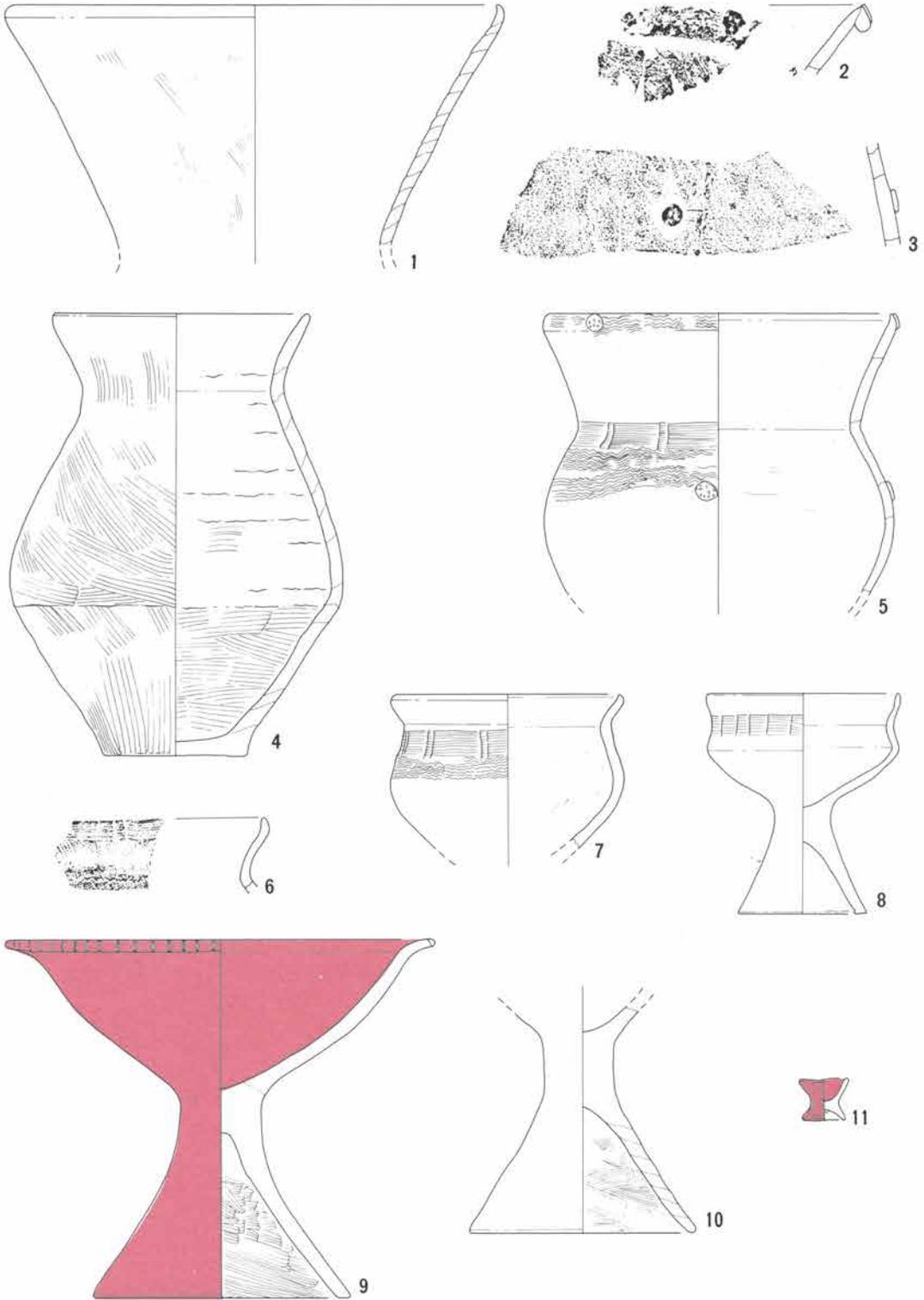
第4層黒褐色土層面で確認した。5.3m×3.4mの隅丸長方形を呈する。壁はやや不明瞭な部分もあるが、10cm～15cmの垂直に近い立ち上りが確認できた。床は、第4層黒褐色土中に構築されており、そのためか炉周辺を除きやや軟弱である。炉は中央やや北寄りに設置されており、瓢箪形をしている。炉の掘り込みは北側で3cm～4cm・南側で7cm～8cmと南側が深く、焼土層も南側で検出でき、焼土層の厚さは2cm～3cmである。遺物には甕・台付甕・壺・高杯・鉢などがあり、高杯には赤色顔料が塗布されている。



1. 暗褐色土（粘性）
2. 暗褐色土とローム粒の混合（掘り方）
3. 暗褐色土

第40図 22号住居址

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



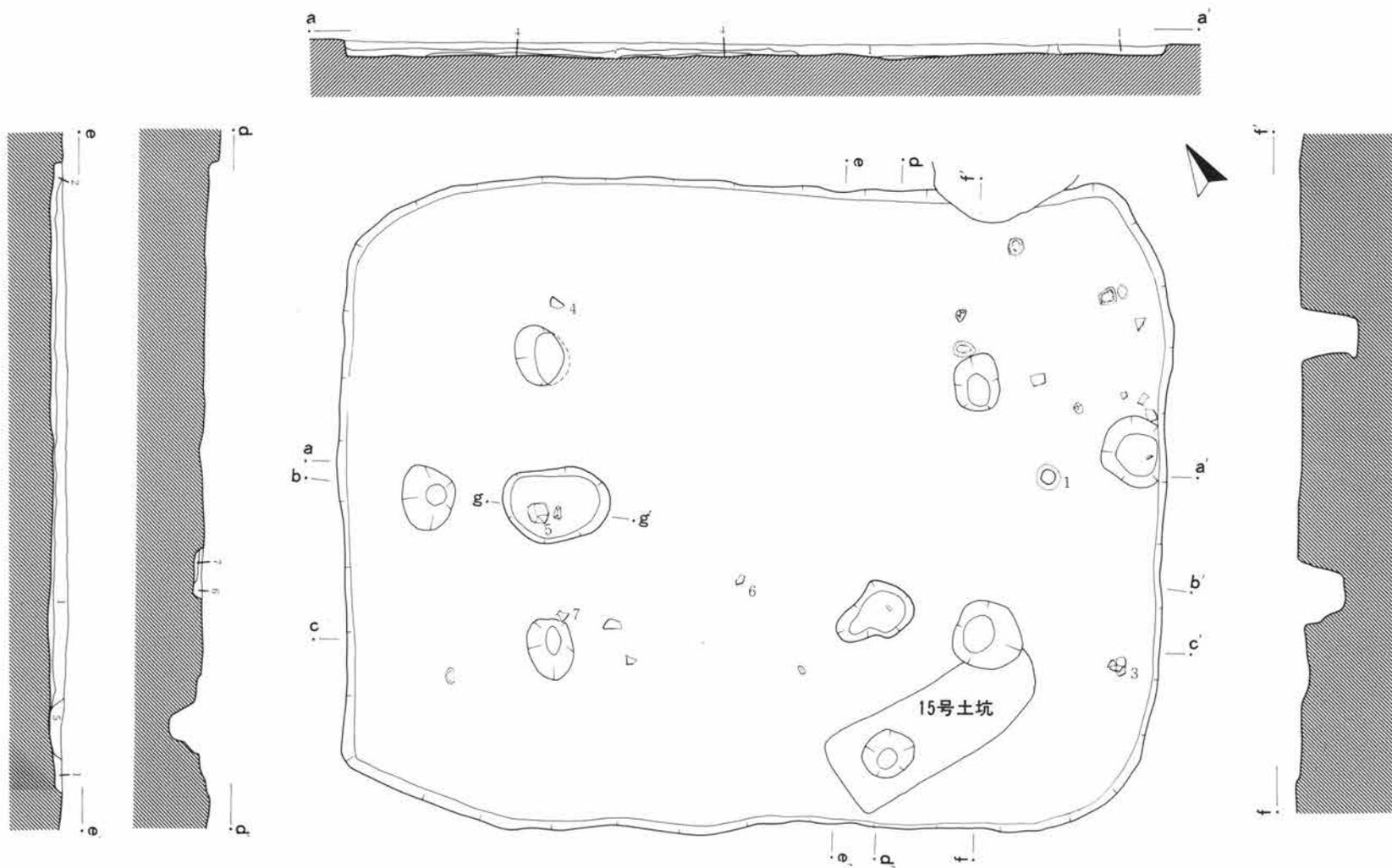
第41図 22号住居址出土遺物

0 10cm

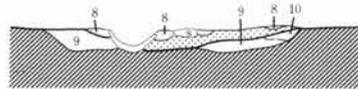
第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(m)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	床面直上 口縁 $\frac{1}{2}$	1	口径 23.0	ほぼ直線的にひらき、 口唇部内傾。	輪積痕。 内外面磨減。	砂粒含む。焼成良好。 浅黄橙色。
壺	覆土 口縁一部	2			口唇部貼りつけ。外面ナナメハケメ。 口唇部波状文施文後、ボタン状貼付文。 内面ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成普通。 にぶい橙色。
壺	炉址 胴部の一部	3			輪積痕。摩減のため、調整不明。鋸 歯文施文後、ボタン状貼付文。内面 ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成良好。 橙色。
甕	床面直上 $\frac{1}{2}$	4	口径 12.0 胴径 15.5 底径 6.7 器高 20.5	最大径胴中央やや下 方。胴下半直線的に底 部にいたる。頸部ゆる やかな「く」の字状。	内面・断面輪積痕。外面胴上半部粗 いナナメハケメ。外面胴下部粗いタ テハケメ。内面ヨコ指ナデ。	砂粒多く含む。焼成普通。 粒子細く粘性なし。軟質。 明灰褐色。
甕	床面直上 胴上部 $\frac{1}{2}$	5	口径 16.1 胴径 16.4	最大径胴中央やや上 方。頸部ゆるやかにく びれ、口唇部やや内傾。	内面輪積痕。外面口縁部タテヘラミ ガキ。外面胴部ヨコヘラミガキ。口 唇部外面波状文・ボタン状貼付文。 頸部右回り簾状文施文後、胴部波状 文2段、内面ヨコヘラミガキ。	細砂粒含む。焼成普通。 灰褐色。黒褐色。外面スス付 着。
甕	覆土	6	器高 2.0	頸部ゆるやかにくび れ、口唇部内傾。	輪積痕。外面タテハケ後、口唇部波 状文。頸部右回り簾状文。内面ヨコ ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成普通。 にぶい橙色。
台付甕	覆土 口縁～胴 部 $\frac{1}{4}$	7	口径 11.0 胴径 11.0	胴最大径中央やや上 方。頸部「く」の字状 にくびれる。	内面輪積痕。外面タテ・ナナメハケ メ。頸部右回り簾状文。胴上部波状 文。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。 にぶい褐色。外面黒斑あり。
台付甕	床面直上 体部 $\frac{1}{2}$ 欠	8	口径 9.1 胴径 9.0 底径 6.0 器高 10.2	胴最大径頸部直下。頸 部ゆるやかにくびれ口 縁部直立。	内面輪積痕。外面胴下半タテヘラミ ガキ。内外面磨減。頸部右回り簾状 文。	砂粒含む。焼成良好。 体部暗褐色。脚部赤褐色。
高杯	覆土 ほぼ完形	9	口径 20.2 底径 12.1 器高 16.5	杯部内湾しながら大き くひらき、口唇部は水 平となる。脚部「ハ」 の字状にひらく。	成形不明。外面赤彩後、タテヘラミ ガキ。杯部内面赤彩後、ヨコミガキ。 脚部内面ヨコハケメ。口唇部きざみ 目。	砂粒含む。焼成良好。 赤色。
高杯	床面直上 脚部 $\frac{1}{2}$	10	底径 10.5	脚部下半「ハ」の字状 にひらく。	内面輪積痕、外面タテハケ後、ヘラ ミガキ。内面指ナデ後、ヨコハケメ。	砂粒多く含む。焼成普通。 浅黄橙色。大黒斑あり。
ミニチュア 高杯	覆土 完形	11	口径 2.3 底径 2.0		手づくね成形。内外面赤彩。	粒子細かい。焼成良好。 浅黄橙色。 (赤彩残存部赤色)

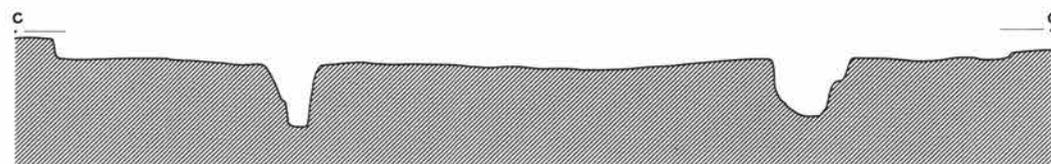
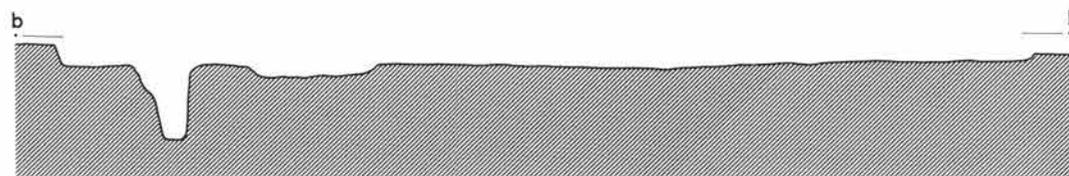
22号住居址出土土器観察表



1. 褐色土
2. 褐色土 (粘質)
3. 褐色土 (黄白色土ブロック含む)
4. 暗褐色土 (灰を多量に含む)
5. 褐色砂質土層 (15号土坑・C軽石を多く含む)
6. 暗褐色土 (灰・焼土を含む)
7. 暗褐色土



8. 暗褐色土 (灰・焼土ブロックを含む)
9. 暗褐色土 (褐色土ブロックを含む)
10. 褐色土



0 2 m

第42図 36号住居址

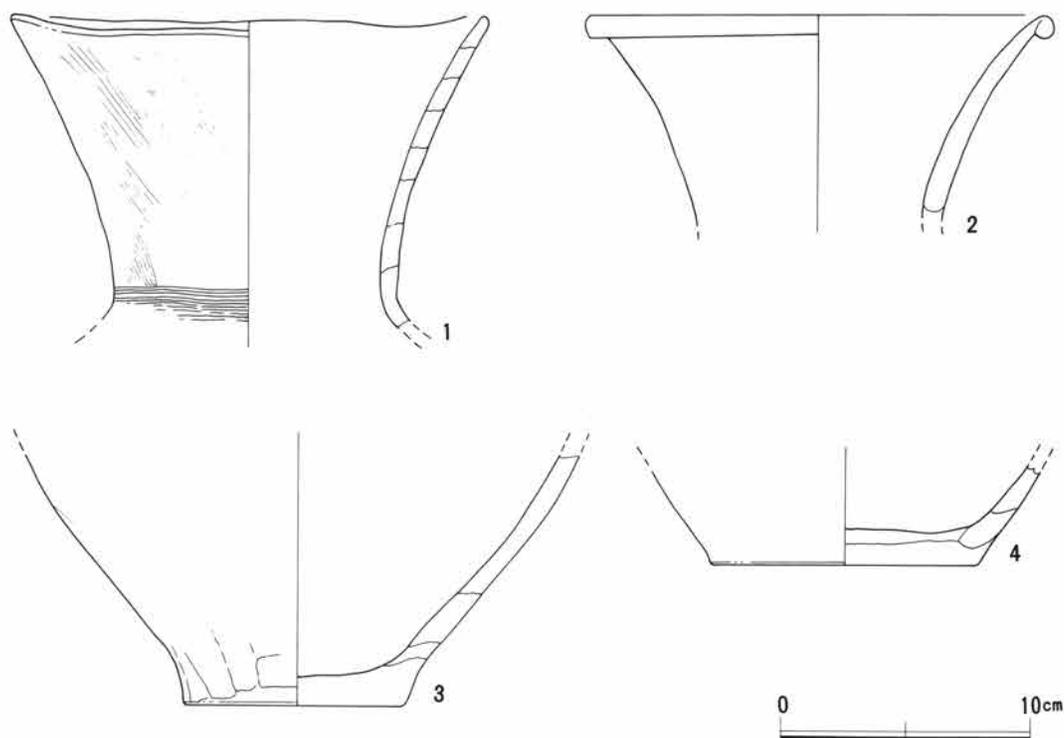
36号住居址（2区）〔第42～45図・図版12（遺構）・図版78（遺物）〕

第4層黒褐色土面で確認された。48号住居址・15号土坑・18号土坑と重複している。新旧関係は、48号住居址の覆土中に当住居址の床が構築されていることから、当住居址の方が新しい。なお、48号住居址とは時期の近接・四方のコーナーが同方向に比例している位置にあることから、48号住居址の拡大改築が当住居址であると推定できる。15号土坑・18号土坑との新旧は、覆土の相違により、当住居址の方が古い。

規模は長辺約7.7m・短辺約6mであり、隅丸長方形を呈する。床は炉周辺を中心に比較的硬く良好であるが、やや軟弱な部分もある。壁の残存状態は悪く、立ち上りは5cm（南東）～15cm（北西）である。柱穴は支柱穴が4本と、南東側・北東側各々の柱穴中間の壁寄りから、柱穴と推定可能な2基のピットが検出できた。

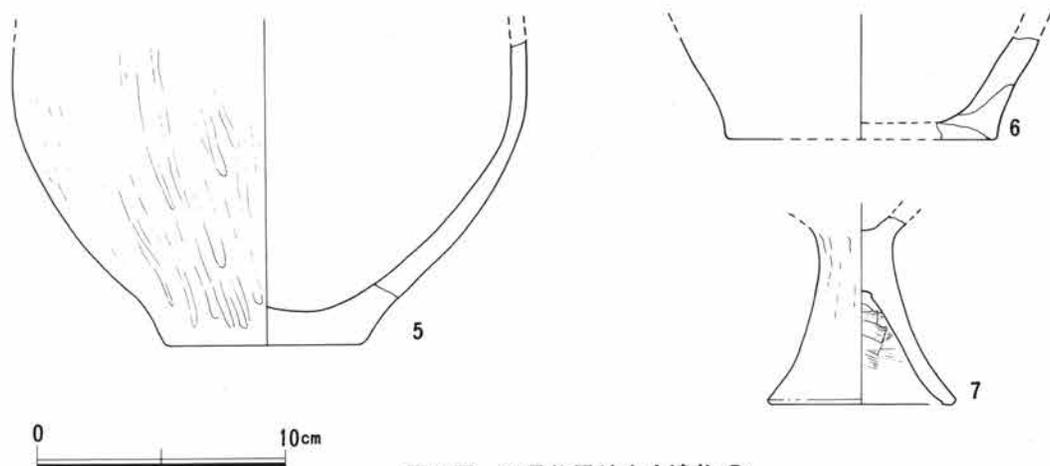
柱穴の深さは、床面から約40cm～60cmである。壁周溝は検出できなかった。炉は北東側柱穴の中間、やや中央寄りにある。規模は長軸約1m・短軸65cmで、平面形は長円形を呈する。炉には厚さ5～6cmの灰層・焼土層が確認でき、内部からは甕形土器が出土している。貯蔵穴はない。

住居址内からの遺物はやや少ないが、壺、台付甕等の破片が床面より確認され、また覆土中からは土製勾玉が発見された。



第43図 36号住居址出土遺物①

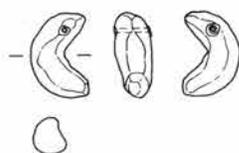
第II章 検出された遺構と遺物



第44図 36号住居址出土遺物②

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	床面直上 口縁のみ	1	口径 19.2	口縁部やや長く、ゆるやかに外反。	内外面輪積痕。外面ハケ調整後、指ナデ。内面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。にぶい黄橙色。
壺	覆土 口縁 1/5	2	口径 19.0	口縁部やや長く、ゆるやかに外反。	口縁端部折り返し。内外面磨減。調整不明。	砂粒含む。焼成良好。橙色。
壺	床面直上 胴下半 3/5	3	底径 9.0	胴下半ほぼ直線的に底部にいたる。	成形不明。外面ナナメハケメ。内面磨減。	砂粒含む。焼成良好。明褐色。
壺	3cm上 底部 1/2	4	底径 10.5		輪積痕。外面指ナデ。内面磨減。	砂粒含む。焼成普通。にぶい橙色。
壺	覆土 胴下半	5	底径 8.0	胴下半内湾しながら底部にいたる。	成形不明。外面タテヘラミガキ。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成不良。にぶい橙色。
壺	4cm上 底部 1/5	6	底径 11		内外面磨減。成形・調整不明。	砂粒含む。焼成良好。浅黄橙色。
台付甕	床面直上 台部のみ	7	底径 7.5		成形不明。外面タテヘラミガキ。内面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。橙色。

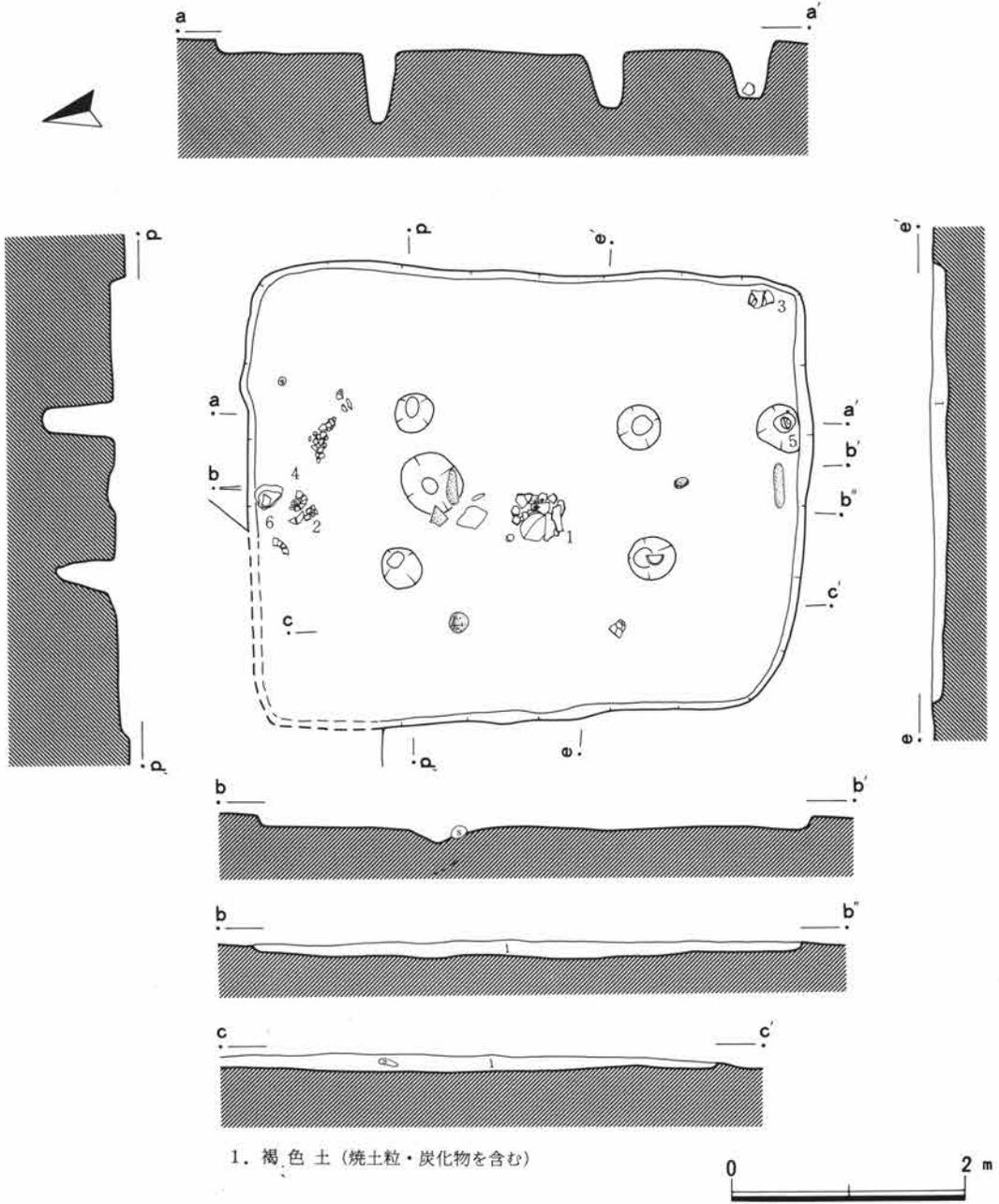
36号住居址出土土器観察表



36号住居址出土土製勾玉 (第45図)

住居址覆土中より出土。長さ2.3cm、直径約1cmの完形で、手づくね成形。表面には凹凸が多い。胎土には砂粒を含み、焼成良好、にぶい橙色を呈す。

第45図 36号住居址出土遺物③



第46図 37号住居址

37号住居址 (2区) [第46~48図・図版13 (遺構)・図版79 (遺物)]

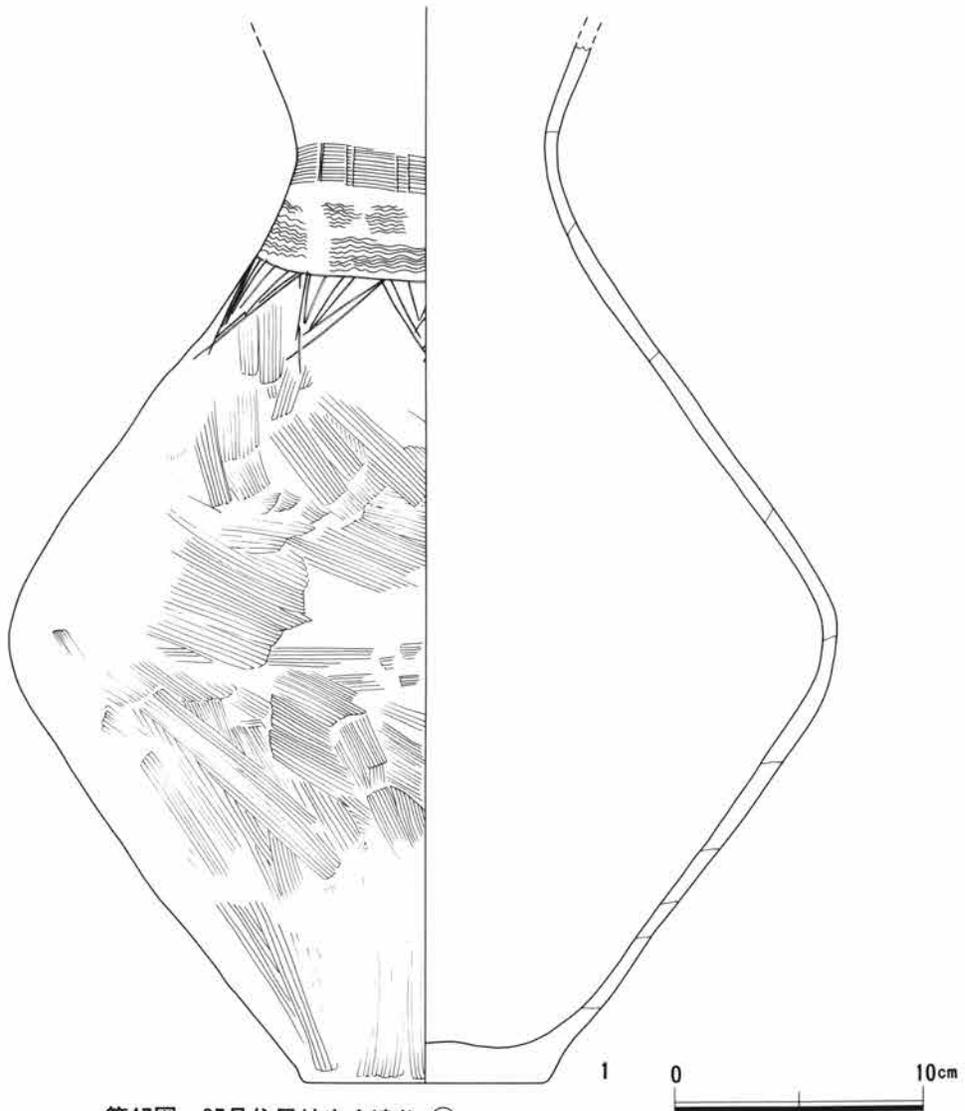
第4層黒褐色土面で確認された。21溝と重複するが、新旧関係についてはセクションによる土層の相違、21溝覆土中に当住居址の床が構築されていることから、当住居址の方が新しい。

規模は長辺約4.8m・短辺約3.8mで、平面形は隅丸長方形を呈する。床は炉を中心に比較的硬く

第II章 検出された遺構と遺物

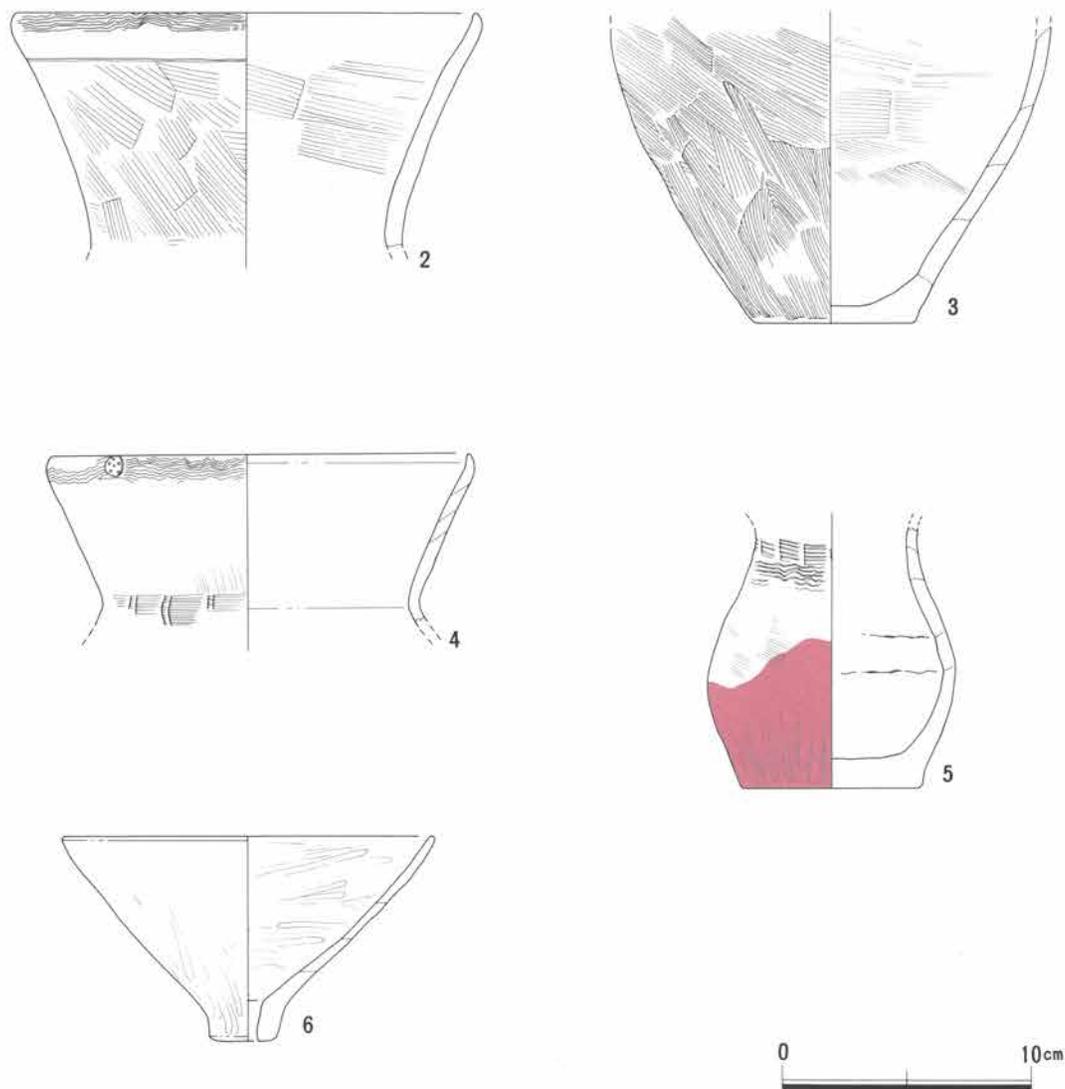
良好であるが、周辺部でやや軟弱な部分がある。壁の残存状態は悪く、立ち上りは約5cm～10cmである。柱穴は4本の支柱穴が検出できた。柱穴の規模は直径約30cm～40cm・床面からの深さ約45cm～60cmで、平面形は円形乃至楕円形を呈する。また、南西側壁に接して直径約45cm・床面からの深さ約40cmのピットが検出できた。壁周溝はない。

炉は北東側柱穴の中間やや中央寄りにある。規模は長軸約55cm・短軸約45cmで、平面形は楕円形を呈する。炉内南西部分からは、長さ30cm、幅10cmの河原石の炉石が確認された。貯蔵穴はない。床面付近からの出土として、壺・甑・甕形土器等がある。



第47図 37号住居址出土遺物 ①

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



第48図 37号住居址出土遺物②

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	2cm上 口縁部欠	1	胴径 33.2 底径 10.0	最大径胴中位。頸部なだらかに大きくくびれ、直線的に胴中央にいたる。胴下半直線的に底部にいたる。	断面に輪積痕。外面ナナメ・タテハケ後、胴上部文様帯付近指ナデ。口縁部・頸部タテハラミガキ。頸部から胴上部にかけて、右回り簾状文・波状文・鋸歯文、施文順序不明。内面ヨコハケ後、指ナデ。	砂粒・小石含む。焼成良好。橙色。胴部に小黑斑3。
壺	床面直上 口縁部欠	2	口径 19.0	口唇部内傾	輪積痕。外面ナナメハケメ。内面ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成良好。橙色。

第II章 検出された遺構と遺物

壺	床面直上 胴下半部	3	底径 6.5		内外面輪積痕。外面ナナメハケメ。 内面ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成良好。淡黄色。胴部黒斑。
甕	床面直上 口縁部 $\frac{1}{2}$	4	口径 17.0	口唇部内傾	成形不明。外面頸部タテヘラミガキ。 外面口唇部ヨコヘラミガキ後、波状文・ボタン状貼付文。頸部右回り簾状文。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒・小石含む。焼成良好。暗褐色。外面一部スス付着。
小形甕	ピット内 口縁部欠	5	胴径 10.0 底径 7.2	頸部ゆるやかにくびれる。底径大きい。	内面輪積痕。外面胴上部ナナメハケメ。外面胴下部タテ指ナデ。頸部右回り簾状文・波状文、施文順序不明。内面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成普通。にぶい橙色。内面黒色。胴部黒斑3。胴下半赤彩。
甕	床面直上 ほぼ完形	6	口径 15.0 底径 2.7 器高 8.2	下部突出。直線的に大きく開く。	内外面輪積痕。外面タテヘラミガキ。内面上部ヨコヘラミガキ。下部ヨコ指ナデ。	砂粒多く含む。焼成普通。灰褐色・黒褐色。

37号住居址出土土器観察表

39号住居址（2区）〔第49・50図・図版29（遺構）〕

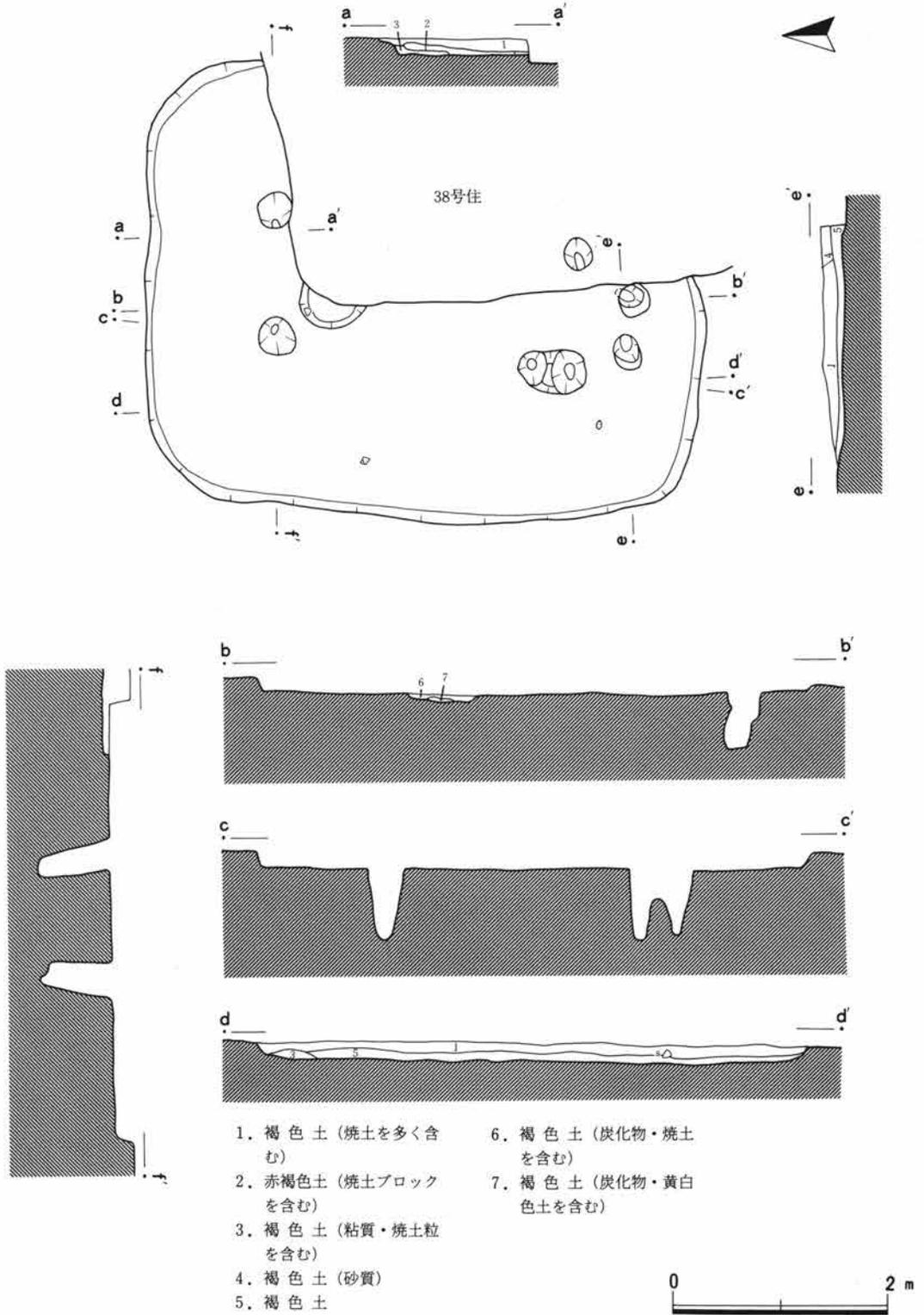
第4層黒褐色土面にて確認された。38号住居址と重複しており、新旧関係は覆土の相違・遺物の相違等から、当住居址の方が古い。

当住居址は約 $\frac{1}{3}$ が壊されているが、規模は長辺約5.3m・短辺4mで、平面形は隅丸長方形であると推定できる。床は炉周辺を中心に比較的硬く良好であるが、やや軟弱な部分もある。壁の残存状態は悪く、立ち上りは約5cm～10cmである。支柱穴は4本であり、規模は直径約30cm～40cm、床面からの深さ約60cmである。支柱穴の他、南西側柱穴に接して1基、南壁寄りに2基のピットが検出できた。南壁寄りのピットは出入口と推定している。壁周溝はない。

炉は北側柱穴の中間やや中央寄りにある。東側約 $\frac{2}{5}$ を壊されているが、規模は直径約60cmで、平面形は円形乃至楕円形を呈すると推定している。貯蔵穴はない。

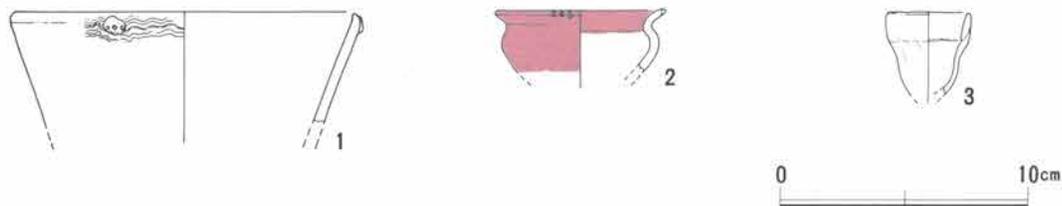
遺物は少なく、覆土中より甕・小形甕・ミニチュアの鉢等の小破片が出土しているのみである。

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



第49図 39号住居址

第II章 検出された遺構と遺物



第50図 39号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
甕	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$	1	口径 13.7	口唇部やや内傾。	成形不明。内外面ヨコヘラミガキ後、口唇部外面波状文、ボタン状貼付文。	砂粒を含む。焼成不良。にぶい橙色。外面スス付着。
小形甕	覆土 胴部 $\frac{1}{2}$	2	口径 7.0	胴最大径頸部直下。口縁部大きく外反。	成形不明。外面および口縁部内面赤彩後、ヨコヘラミガキ。口唇部きざみ目。	粒子細かい。焼成良好。赤色。
小形鉢	覆土 $\frac{1}{2}$	3	口径 3.3	最大径口縁部	手づくね。無文。全体に指圧痕。	小砂粒含む。焼成普通。褐色。

39号住居址出土土器観察表

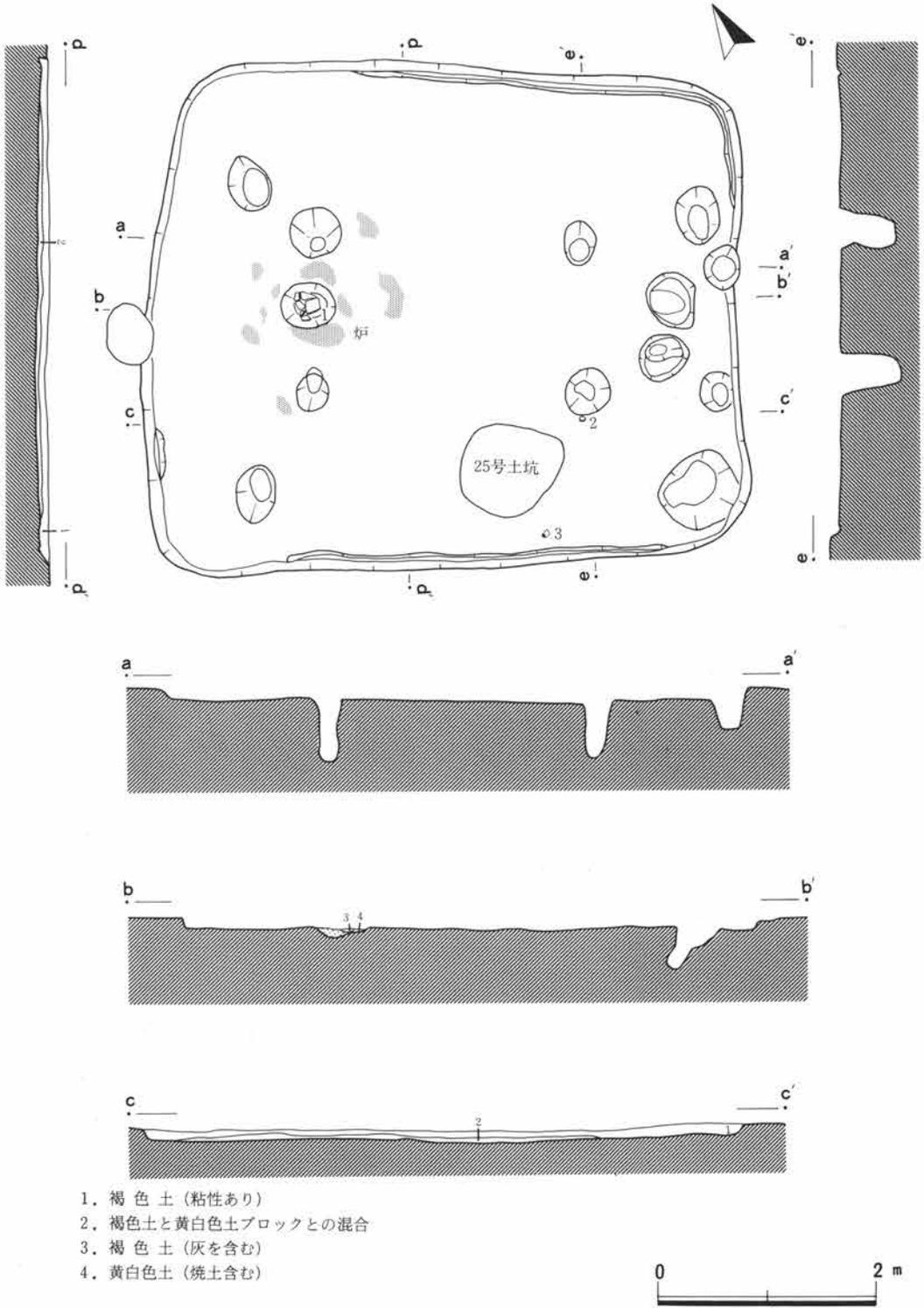
48号住居址（2区）〔第51・52図・図版14（遺構）・図版80（遺構）〕

当住居址は、36号住居址の底面精査の時に確認されたものである。36号住居址との関係は、同住居址の項記載の通りであり、同住居址は当住居址の拡張されたものと推定している。

規模は長辺約5.4m・短辺約4.5mで、平面形は隅丸長方形を呈する。床は炉を中心に比較的硬く良好であるが、壁近くでやや軟弱な部分がある。壁は大部分が36号住居址により壊されており、立ち上りは約10cmである。柱穴は主柱穴が4本と、南東側の壁付近に出入口と推定できる4本の柱穴がある。主柱穴は直径約40cm～50cm・床面からの深さ約50cm～60cmである。平面形は円形乃至楕円形をなす。出入口と推定している4本は、直径40cm～50cm・床面からの深さ約30cm～45cmである。壁周溝は東コーナー付近～北東壁・南西側壁から検出したが、全周しない。

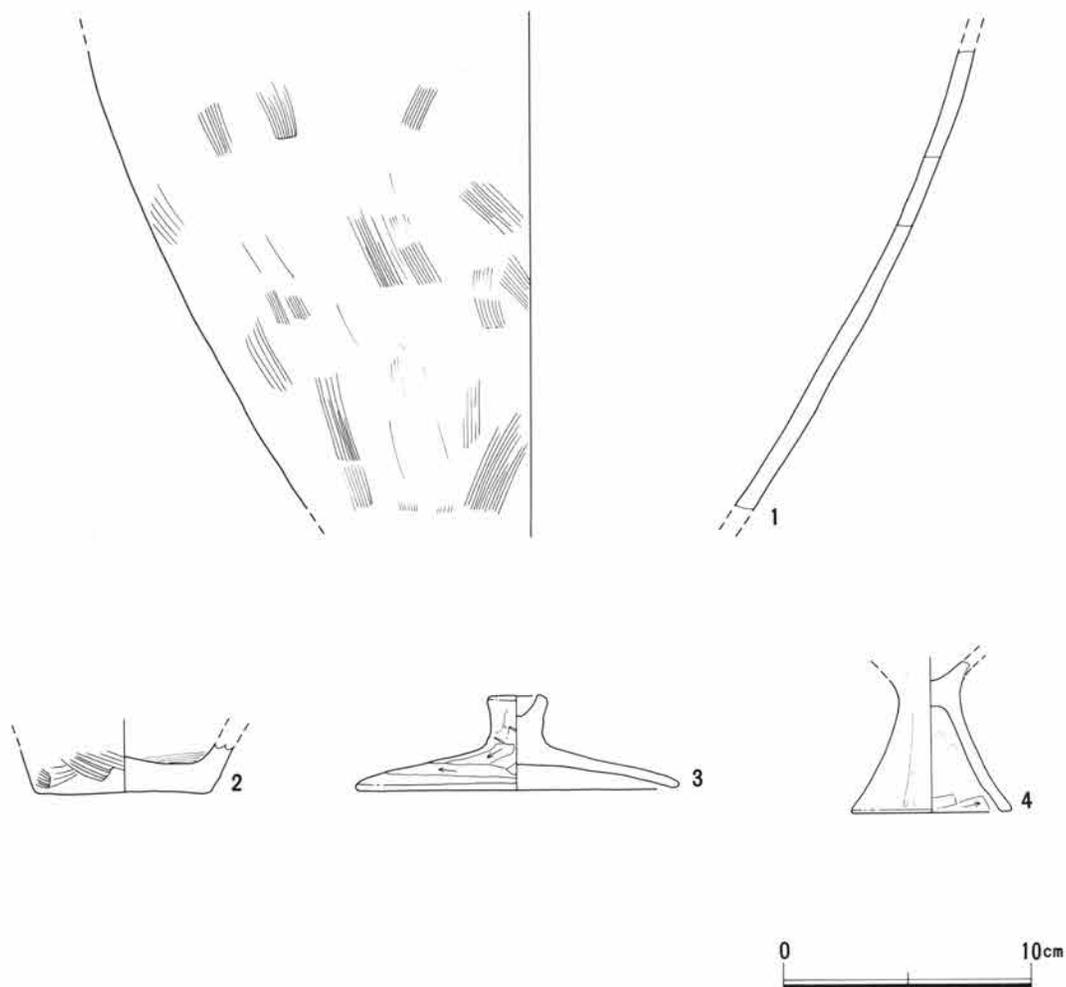
炉は北西側主柱穴の中間にある。規模は長軸約50cm・短軸約40cmで、平面形は楕円形を呈する。炉址内より厚さ約6～8cmの焼土・灰層が確認できた。遺物は炉址内および床面付近から少量出土しているが、すべて破片である。

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



第51図 48号住居址

第II章 検出された遺構と遺物

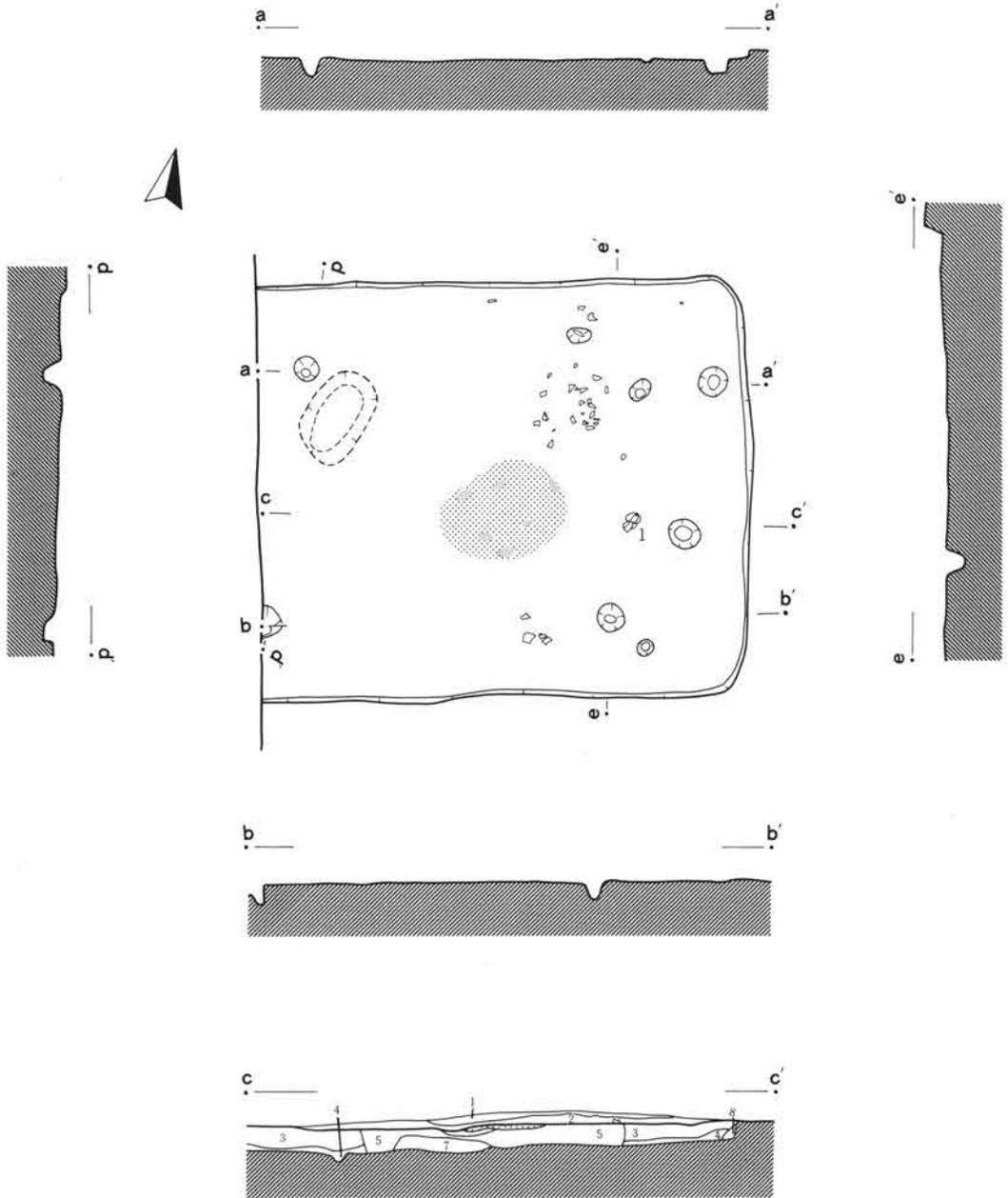


第52図 48号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	炉址内 胴下半 $\frac{1}{2}$	1		胴下半ゆるやかにつぼまる。	内面輪積痕。外面タテハケメ。内面磨減。	砂粒を含む。焼成良好。橙色。外面タール付着。
甕	床面直上 底部	2	底径 7.0		外面ナナメハケメ。内面ヨコハケメ。	砂粒多く含む。焼成普通。にぶい黄橙色。外面黒斑。
蓋	3cm上 $\frac{1}{3}$	3	径 13.0 高さ 3.7	つまみの中が凹む。	手づくね成形後、内外面凸部ヘラケズリ。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい黄橙色。端部スス付着。
台付甕	覆土 台部	4	底径 6.5	台部「ハ」の字状にひらく。	外面タテハケ後、タテヘラミガキ。内面ヨコハケ後、ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。

48号住居址出土土器観察表

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の竪穴住居址



- 1. 暗褐色土
- 2. 黒褐色土 (しまっている)

掘り方

- 3. 黒褐色土 (ローム粒を含む)
- 4. ロームに少量の黒褐色土混合
- 5. 黒褐色土 (ローム粒を含む)
- 6. 褐色土 (焼土粒を含む)
- 7. 黒褐色土 (固くしまっている)
- 8. ロームに黒褐色土少量混合

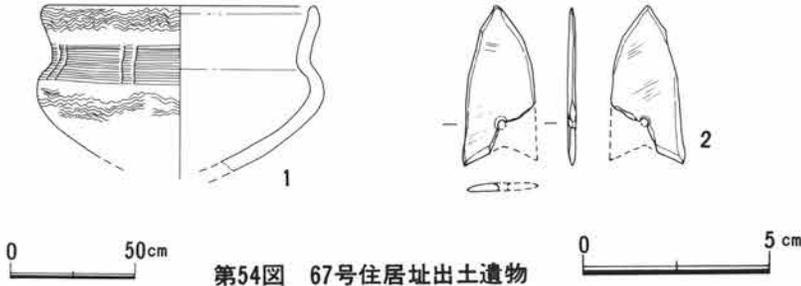
0 2 m

第53図 67号住居址

第II章 検出された遺構と遺物

67号住居址（2区）〔第53・54図・図版14（遺構）・図版80（遺物）〕

第4層の黒褐色土層中にて確認された。西側は調査区域外へと延びている。規模は短辺3.5m、深さ10cmで長方形を呈する。確認面にて床面を検出し、壁は床面を追って推定した。床面は貼床で堅緻である。柱穴は4本検出された。炉址は住居中央東寄に位置し、浅い凹部で長辺110cm、短辺80cmの楕円形を呈する。確認面にて焼土、灰が明瞭に残存していた。貯蔵穴以外のピットとしては、小円形のもの4本がある。遺物は炉の東側床面近くに台付甕が検出された。また覆土中からは、磨製石鏃が検出されている。



第54図 67号住居址出土遺物

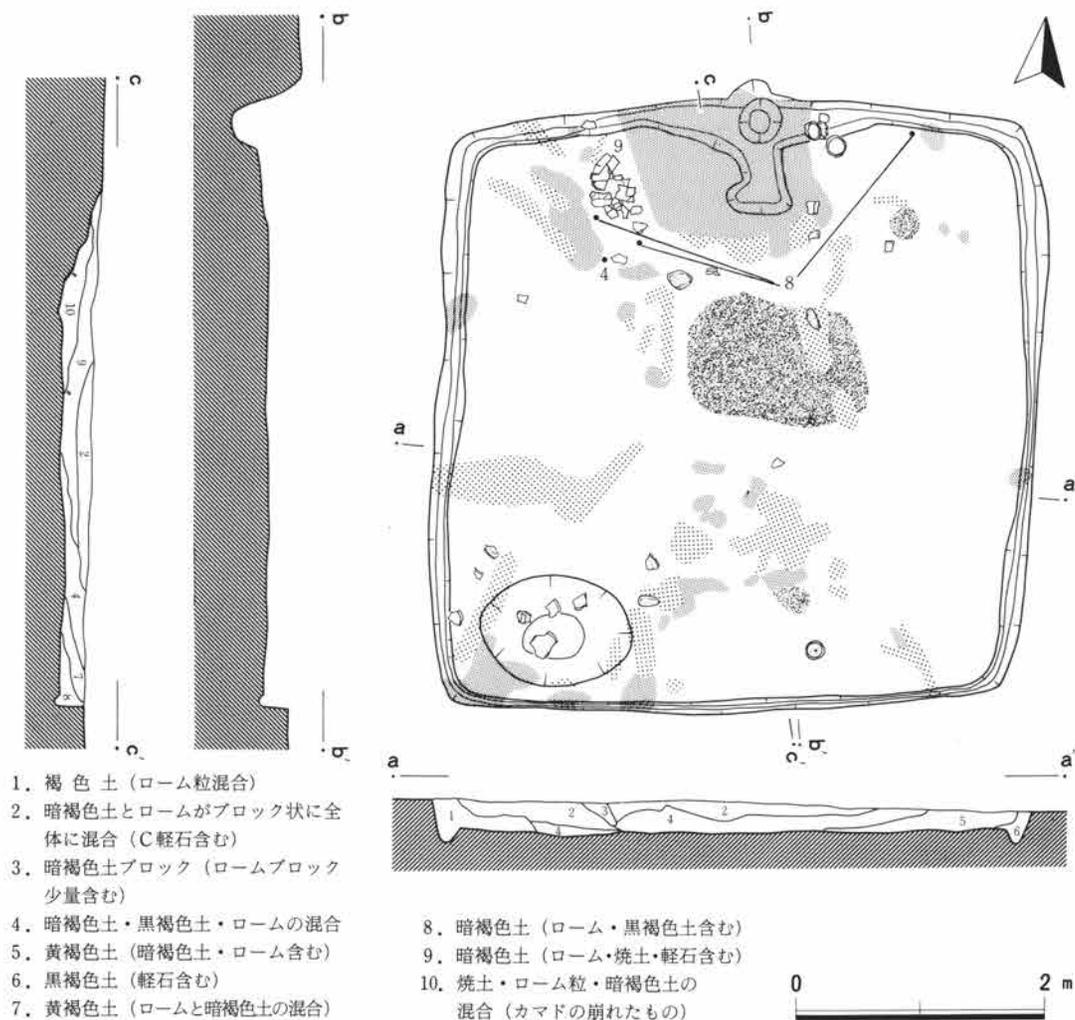
器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
台付甕	覆土 台部欠	1	口径 11.0 胴径 11.5	最大径胴上部。口唇部 やや内傾。	外面ヨコ指ナデ後、口唇部・胴部波 状文。頸部右回り簾状文。内面ヨコ ヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成 普通。黒褐色。外 面スス附着。

67号住居址出土土器観察表

67号住居址出土無茎式磨製石鏃（第54図2）

覆土中より出土。長さ4.3cm、幅2cm、厚さ2mmで一部欠損している。中央よりやや基部に近い部分に直径2mmの小孔を有する。また製作時と考えられる斜行する擦痕がある。にぶい褐色。結晶片岩。

第3節 古墳時代の竪穴住居址



第55図 1号住居址

1号住居址（4区）〔第55～58図・図版15（遺構）・図版81（遺物）〕

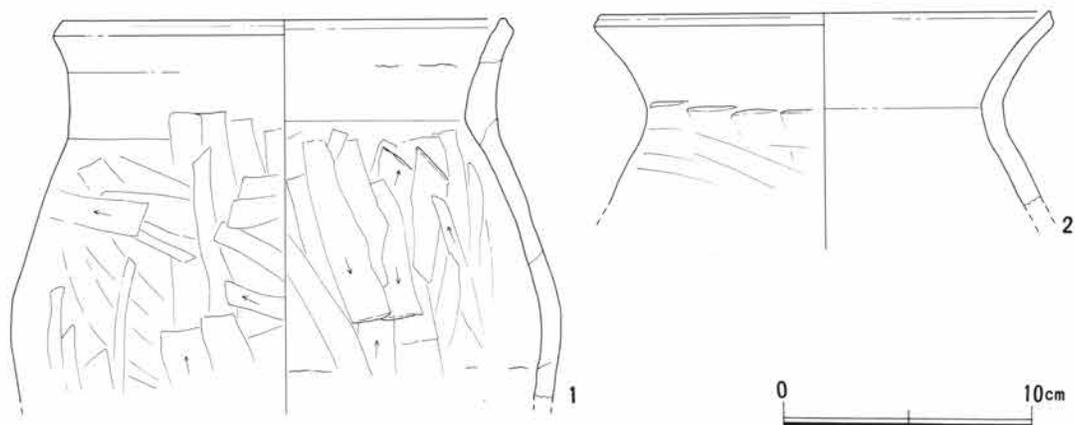
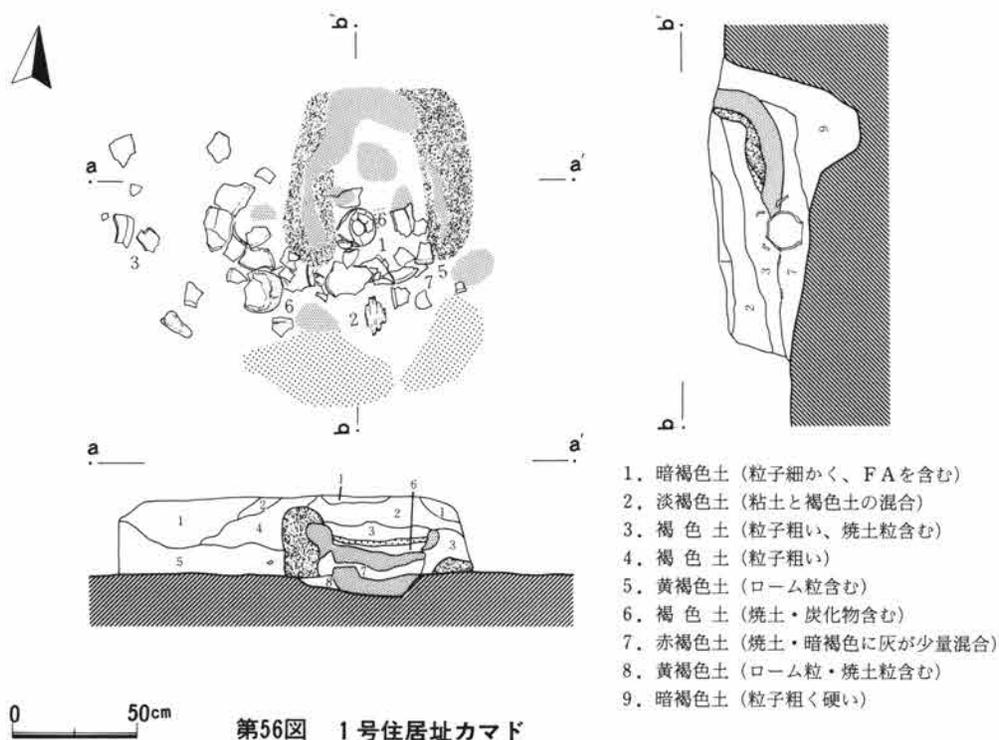
第2層暗褐色土中において確認された。7号住居址と重複関係にあり、7号住居址を切断して構築されている。規模は4.9m×4.9mの方形を呈する。壁の残存は25cm～35cmであり、東側が低く、西側が高い。全般的に壁の残りは良好であるが、北東コーナー付近は7号住居址との関係でやや不良である。床はローム層中に構築されており、良好である。また、床面には全面的に焼土・炭化物が散布している。柱穴は検出されなかった。周溝はカマド付近を除き、全面的に巡っている。

カマドは北壁に構築されているが、大部分が壊れている。粘土を用いた袖の一部分も、燃焼部

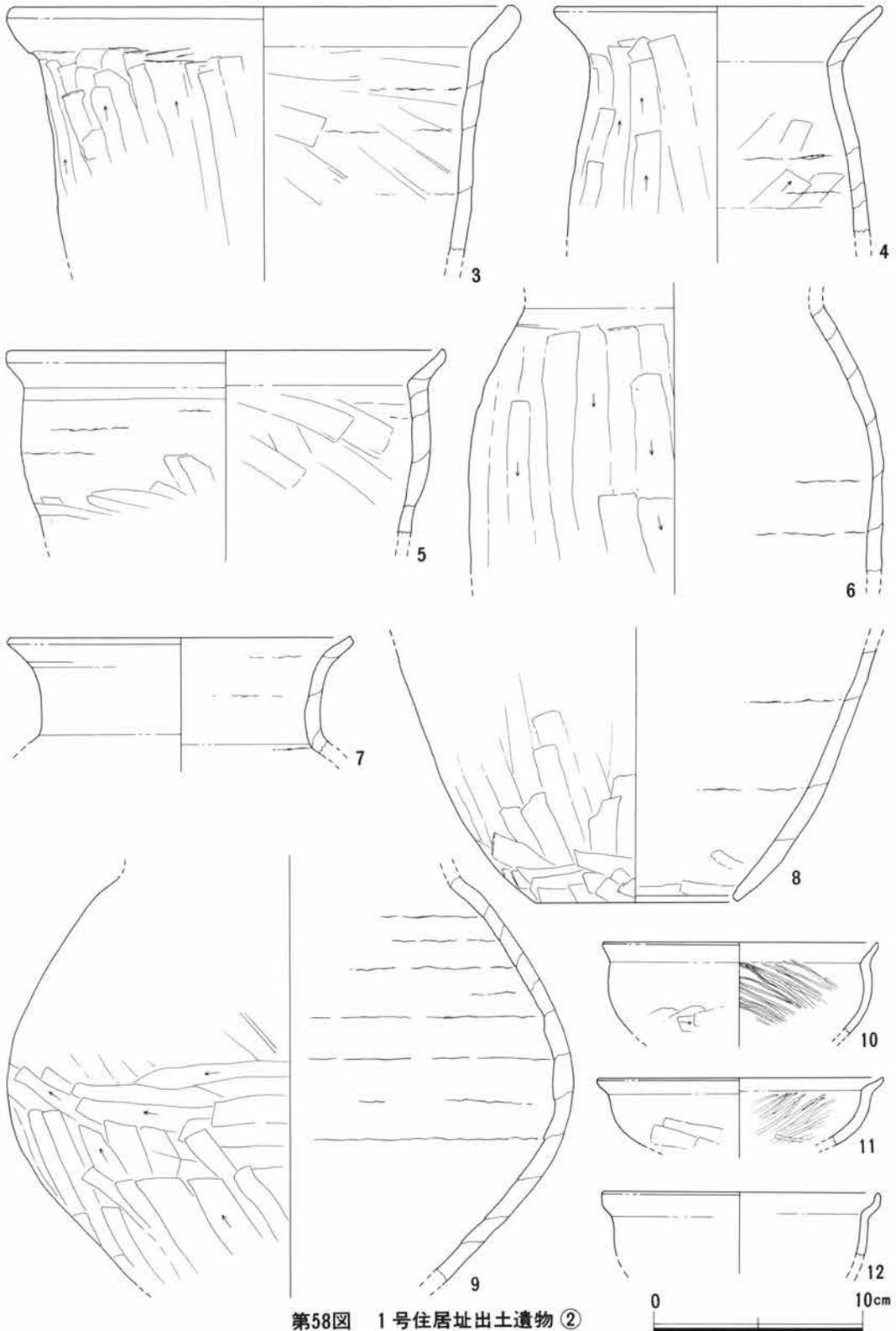
第II章 検出された遺構と遺物

に混った灰と焼土が確認できた。南西コーナー付近に長軸120cm・短軸90cm・床面からの深さ40cmで楕円形を呈する住居内土坑があり、貯蔵穴の可能性はある。

遺物はカマド及びその周辺に集中している。カマド内からは甕形土器片(1・2・6・7)・杯片(10・11・12)が存在した。なお中央やや左寄りの小形壺形土器は、盗難に遭った。カマド左側床面付近からの遺物としては、壺(9)、甕(4)、甑(8)があり、すべて破片で散乱していた。



第3節 古墳時代の竪穴住居址

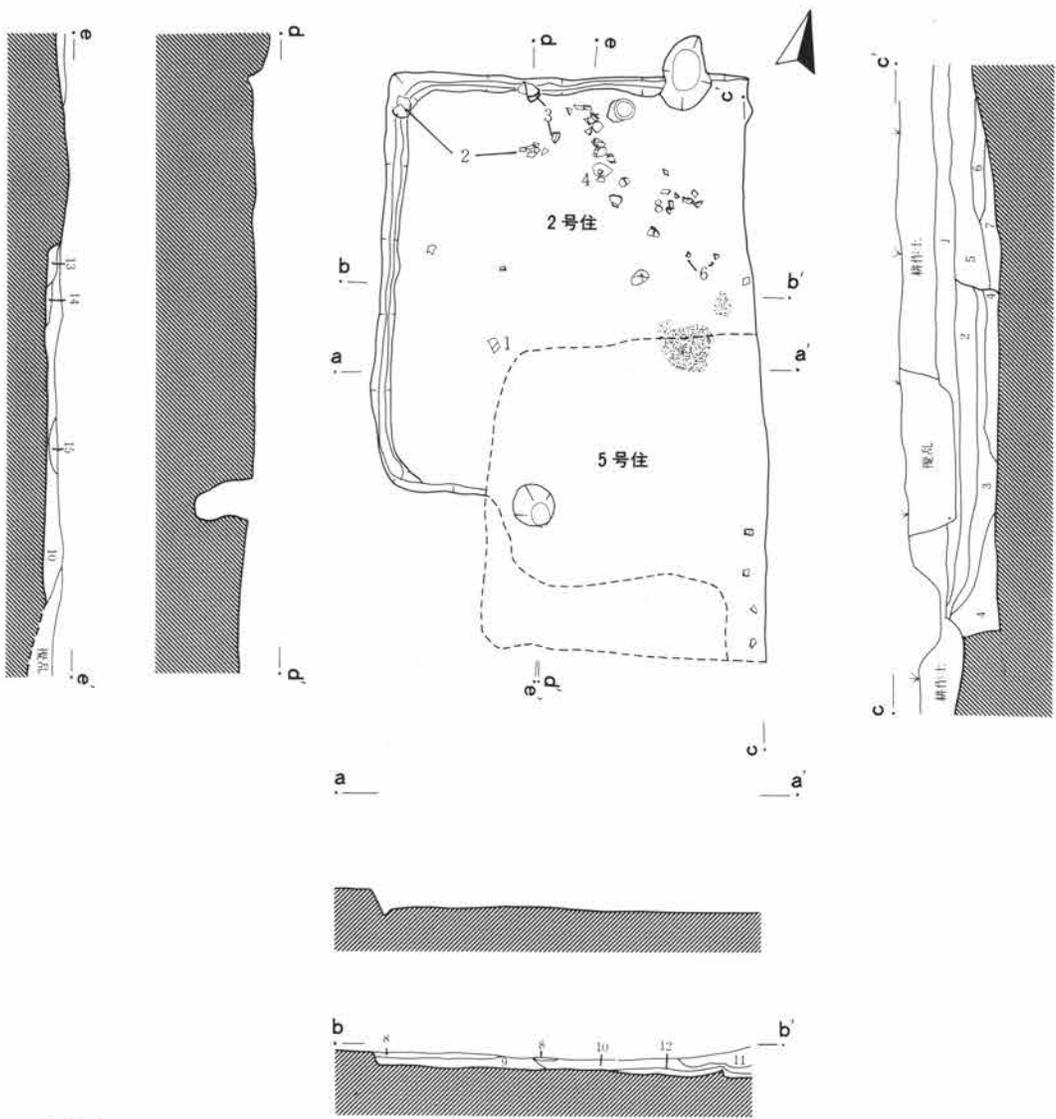


第58図 1号住居址出土遺物②

第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	カマド内 上半 $\frac{1}{2}$ 残	1	口径 16.0	胴部ゆるやかな膨らみをもつ。口縁部やや外反、口唇部内から外へ傾斜。	外面口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。明赤褐色。
甕 土師器	カマド内 上部 $\frac{1}{2}$ 残	2	口径 18.0	口縁部大きく外反。口唇部内から外へ傾斜。	輪積痕。外面口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリ後ナデ。内面口縁部横ナデ。胴部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。橙色。
甕 土師器	覆土 上部 $\frac{1}{2}$ 残	3	口径 24.8	口縁部外反。	外面口縁部横ナデ。頸部～胴部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。胴部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。胴部に黒斑。
甕 土師器	カマド付 近 上部 $\frac{1}{2}$ 残	4	口径 15.6	口縁部外反。胴部の膨らみは少ない。	輪積痕。外面口縁部横ナデ。頸部～胴部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色・にぶい赤褐色。
甕 土師器	床面直上 上部 $\frac{1}{2}$ 残	5	口径 20.0	口縁部外反。口唇部直立。	輪積痕。外面頸部～口縁部横ナデ。胴部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。胴部粗いナデ。	砂粒多量に含む。焼成良好。硬質。橙色。胴部に黒斑。
甕 土師器	カマド内 胴上半部	6	胴径 20.6	胴部の膨らみは少ない。	輪積痕。胴部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒多量に含む。焼成良好。硬質。橙色。
甕 土師器	カマド内 口縁部 $\frac{1}{2}$ 残	7	口径 15.6	口縁部立ち上ってやや外反し、口縁部で強く外反する。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒(大きいものは2~3mm)含む。焼成良好。硬質。明赤褐色。
甗 土師器	覆土 胴下半 $\frac{1}{2}$ 残	8	底径 9.5	胴部は底部から緩やかな膨らみをもちつつ立ちあがる。	輪積痕。胴部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。胴部に黒斑。
壺 土師器	床面直上 胴中部	9	胴径 27.9	胴中央部が大きく膨らむ。	輪積痕。外面胴部上半ケズリ+ナデ、下半ケズリ。内面胴部粗い仕上げ、上半は輪積痕が残り、下半は粗いナデ。	砂粒(大きいものは2~3mm)やや多量に含む。焼成良好。やや軟質。赤褐色。
杯 土師器	カマド内 口縁～体部小片	10	口径 13.3	口縁部「く」の字状に外反。口唇部やや内湾。	外面口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。体部ヘラミガキ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 口縁～体部小片	11	口径 13.8	口縁部「く」の字状に外反。口唇部やや内湾。体部はゆるやかな膨らみをもつ。	外面口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。体部ヘラミガキ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。橙色。
碗 土師器	カマド内 口縁～体部小片	12	口径 13.4	口縁部「く」の字状に外反。口唇部直立。	外面口縁部横ナデ。内面口縁部横ナデ。体部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。にぶい赤褐色。

1号住居址出土土器観察表



- | | |
|----------------------|--------------------------|
| 1. 褐色土 (B軽石含む) | 10. 暗褐色土 (ローム粒少量含む) |
| 2. 暗褐色土 (粒子粗く、FA含む) | 11. 暗褐色土 (ローム粒わずかに含む) |
| 3. 暗褐色土 (FA多く含む) | 12. 暗褐色土 (粘土粒・ローム粒含む) |
| 4. 暗褐色土 (粘性・ローム粒含む) | 13. 暗褐色土 (C軽石・ロームブロック含む) |
| 5. 暗褐色土 (粘性) | 14. 粘土・ローム粒・暗褐色土の混合 |
| 6. 黄褐色土 (粘性・ローム粒含む) | 15. 黒褐色土 (ロームブロック含む) |
| 7. 暗褐色土 (ローム粒・粘土粒含む) | |
| 8. 暗褐色土 (全体に軽石含む) | |
| 9. 暗褐色土 (ローム粒を全体に含む) | |

0 2 m

第59図 2・5号住居址

第II章 検出された遺構と遺物

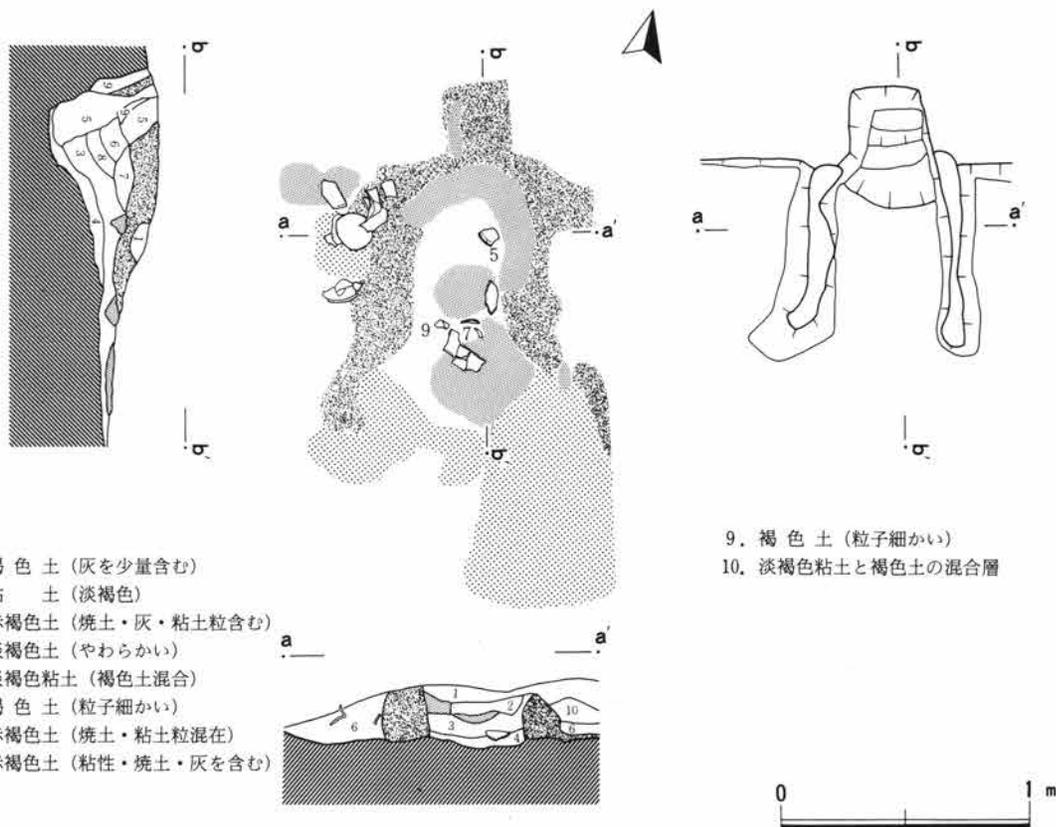
2号住居址（4区）〔第59～61図・図版16（遺構）・図版82（遺物）〕

第2層暗褐色土中より掘りこんでおり、4・5号住居址と重複する。カマドの残存状態より、4号住→2号住→5号住の新旧関係が認められる。東側は、調査範囲外である。

南北3.2m、東西は推定3mで、方形を呈する。確認面が低かったため、壁の残存は悪く、特に南側ではほとんど検出できなかった。床面は、ロームをたたいているが、周縁では薄い張り床が見られる。北壁と南壁に沿って、底幅4.5cm・深さ5cmほどの周溝が検出された。

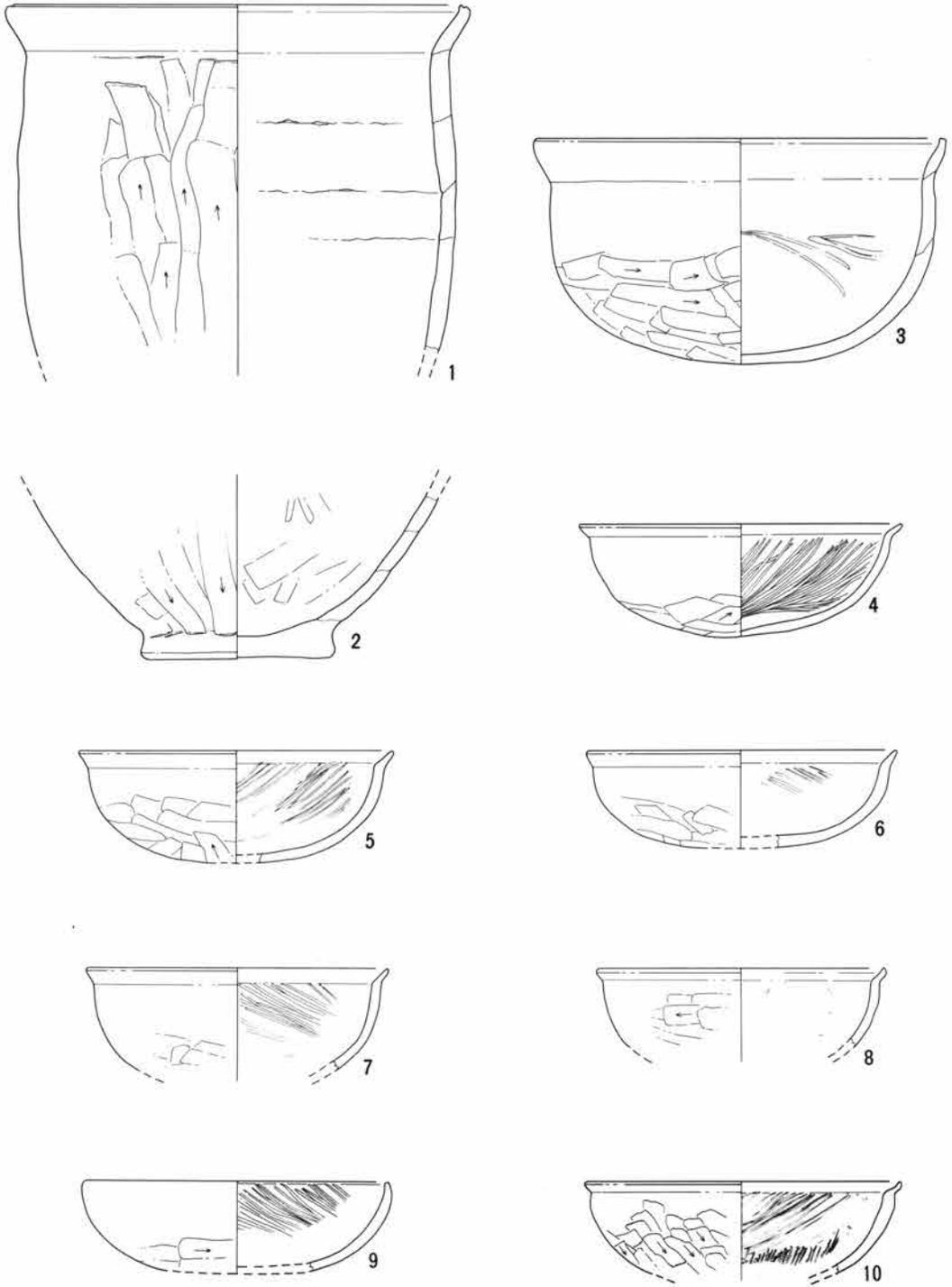
カマドは、北壁やや東寄りに設置されている。角柱状の白色粘土を壁より長くU字形に延ばして袖とする。焚口・燃烧部底は平坦だが、壁外の煙道部にかけて二段に掘りこまれ、煙道は最深部より垂直に上がっている。焚口前面の床には、灰・炭化層が拡がっている。

遺物は確認面が深かった割合には、残存状態が良く、カマド燃烧部内、カマド前面、カマド左袖外側に集中して土器片が見られた。カマド内では、杯（5・7・9・10）が見られ、前面には同じく、杯（6・8）があった。カマド左袖に接して甕底部（2）、椀（3）、杯（4）が散っていた。甕（1）は、位置的に5号住の遺物の可能性も考えられる。なおカマド左袖に接して正位状態で存在した甕形土器は盗難に遭った。



第60図 2号住居址カマド

第3節 古墳時代の竪穴住居址



第61図 2号住居址出土遺物



第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	3cm上 口縁～胴部 の一部	1	口径 20.6 胴径 19.8	胴部はわずかに膨らみ口縁部 外反。	輪積痕。外面口縁部横ナデ。 胴部ヘラケズリ、内面口縁部 横ナデ。胴部粗いナデ。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。明赤褐 色。外面に黒斑。
甕 土師器	2cm上 胴下半 $\frac{1}{2}$	2	底径 8.5	厚めの底部から、ゆるやかな 膨らみをもち、胴部へ立ちあ がる。	輪積痕。外面胴部ヘラケズリ。 内面胴部ヘラケズリ+粗いナ デ。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。内外面 橙色。黒斑あり。
碗 土師器	2cm上 $\frac{1}{4}$ 欠	3	口径 18.2 最大径18.5 器高 9.8	丸底。体部下半は丸みをおび、 上半はやや直線的、体部全体 は双曲線に近い。口縁部は外 反し、口唇部は直立。	輪積痕。外面口縁部横ナデ、 体部上半ケズリ+粗いナデ。 体部下半ヘラケズリ。内面口 縁横ナデ。体部はていねいな ナデ。一部暗文。	砂粒多く小石(2 ～3mm)を含む。 焼成良好。硬質。 明赤褐色。内外面 スス付着。
杯 土師器	2cm上 $\frac{3}{4}$ 残	4	口径 14.0 器高 5.0	底面～体部は双曲線的な丸み をもつ。口縁部は「く」の字 状に大きく外反。	外面口縁部横ナデ、体部上半 ケズリ+ナデ、体部下半ヘラ ケズリ。内面口縁部横ナデ体 部ナデ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良 好。橙色。外面底 部は黒色。
杯 土師器	カマド内 $\frac{1}{4}$ 弱残	5	口径 14.0 器高 5.0	底部～体部は双曲線的な丸み をもつ。口縁部は「く」の字 状に外反。	外面口縁部横ナデ。体部ミガ キ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。橙色。
杯 土師器	2cm上 口縁部～ 底部 $\frac{1}{4}$ 残	6	口径 13.9 器高 14.0	底部～体部は双曲線的な丸み をもつ。口縁部は「く」の字 状に外反。	外面口縁部～体部上端横ナ デ。体部中央はケズリ+ナデ、 体部下半～底部ヘラケズリ。 内面口縁部横ナデ、体部～底 部ミガキ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。にふい 橙色。内外面底部 明赤褐色。
杯 土師器	カマド内 口縁部～ 体部の一 部	7	口径 13.6	底部～体部は双曲線的な丸み をもつ。口縁部は「く」の字 状に外反。	外面口縁部～体部上端横ナ デ、体部ヘラケズリ、上半ナ デ。内面口縁部横ナデ、体部 ～底部ミガキ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。外面に ふい橙色。内面明 赤褐色。
杯 土師器	3cm上 口縁部小 片	8	口径 13.0	底部～体部は双曲線的な丸み をもつ。口縁部は「く」の字 状に外反。口唇部やや内湾。	外面口縁部横ナデ。体部ヘラ ケズリ。内面口縁部横ナデ。 体部はミガキ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。橙色。
杯 土師器	カマド $\frac{1}{4}$ 弱残	9	口径 13.7	体部は双曲線的な丸みをも つ。口縁部はやや内湾。	外面体部上半～口縁部横ナ デ、体部下半ヘラケズリ。内 面ミガキ、体部上半～口縁部 にかけて暗文斜行。	砂粒含む。焼成普 通。やや軟質。褐 色。黒斑あり。
杯 土師器	覆土 口縁～体 部 $\frac{1}{4}$ 残	10	口径 14.0	体部は双曲線的丸みをもつ。 口縁部は「く」の字に外反。 口唇部は内湾。	外面口縁部横ナデ、体部ヘラ ケズリ。内面口縁部横ナデ、 体部ミガキ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。外面橙 色。内面に黒斑。

2号住居址出土土器観察表

5号住居址（4区）〔第59・62図・図版16（遺構）〕

2号住居址の境界面断面検討中に掘りこみが見られたことにより確認された。2号住居址よりも本住居址が新しく、東側は調査範囲外である。掘りこみ面は、第2層の暗褐色土上面である。

確認面と床面がほぼ同一であったため、平面的には規模・形状は全く把握できなかった。しかし境界面の断面より、南北方向は約2.7mを測り、2号住居址の壁・床の状態から、東西方向は2.5m以上と思われる。

覆土堆積状況では、床面中央に接するように径5～10mmのFAを含む暗茶褐色土の堆積が見られた。壁は、高さ35cmほどの垂直に近い掘りこみ状況が、断面に見られる。床は、2号住居址とほぼ同一レベルで、ローム面をたたいている。推定西壁の中央近くでは、底径約20cm～深さ約40cmの外傾するピットが1基見られた。

カマドは、北辺中央やや東寄りに粘土の拡がりが見られたが、すでに確認面では、中心部が飛ばされていて、はっきりした構造を残していなかった。

遺物は、南東側床面で土師器片が数点検出されただけである。



第62図 5号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	覆土 口縁～頸 部小片	1	口径 19.0	口縁部は「く」の字状に外反し、頸部に沈線状の段あり。	口縁部は内外面共横ナデ。	砂粒含む。硬質。焼成良好。橙色。

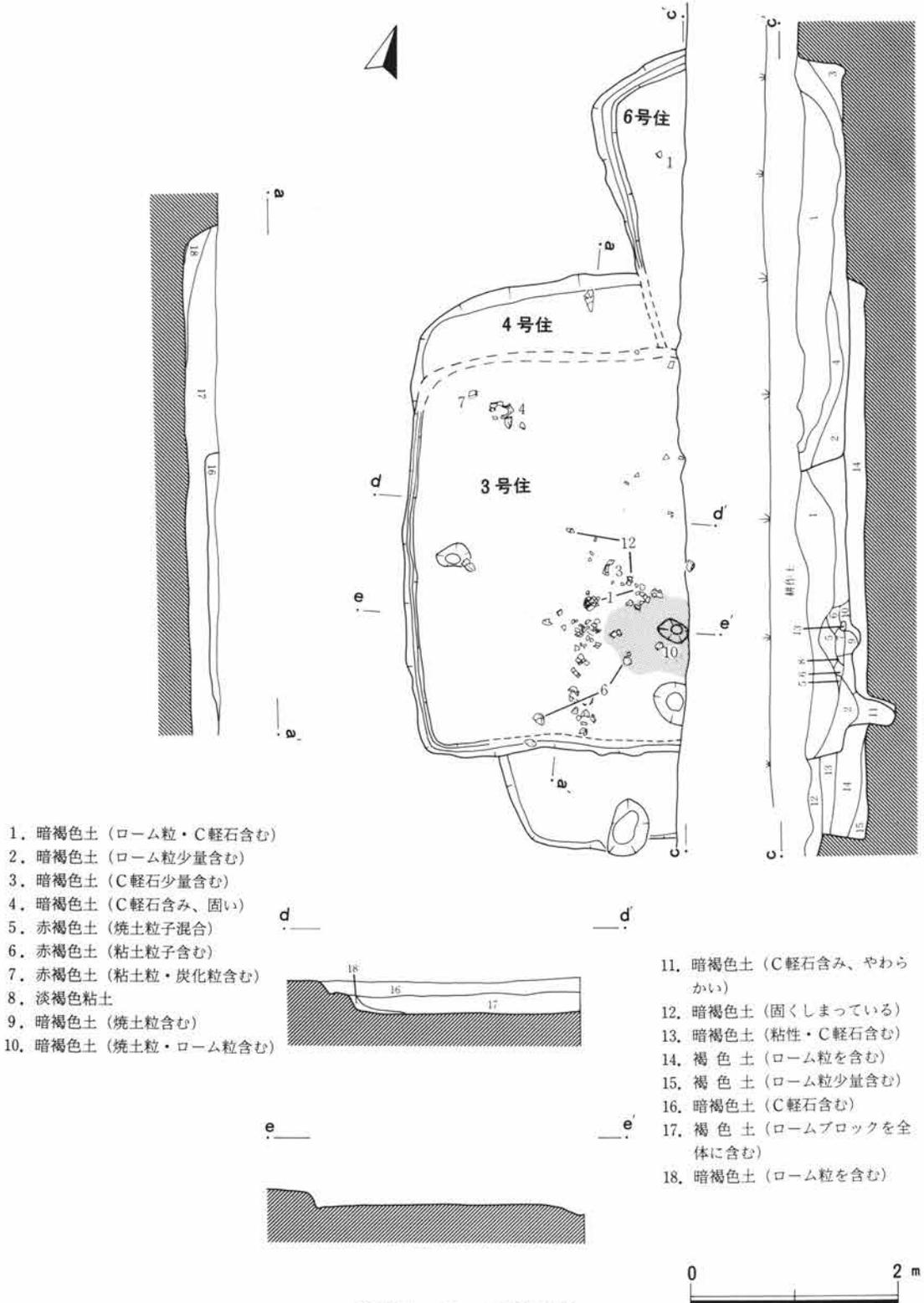
5号住居址出土土器観察表

3号住居址（4区）〔第63～66図・図版16（遺構）・図版82（遺物）〕

4号住居址の覆土中で確認された。掘りこみ面は、第2層の暗褐色土中である。4号住居址を切り、東側は、調査範囲外となる。

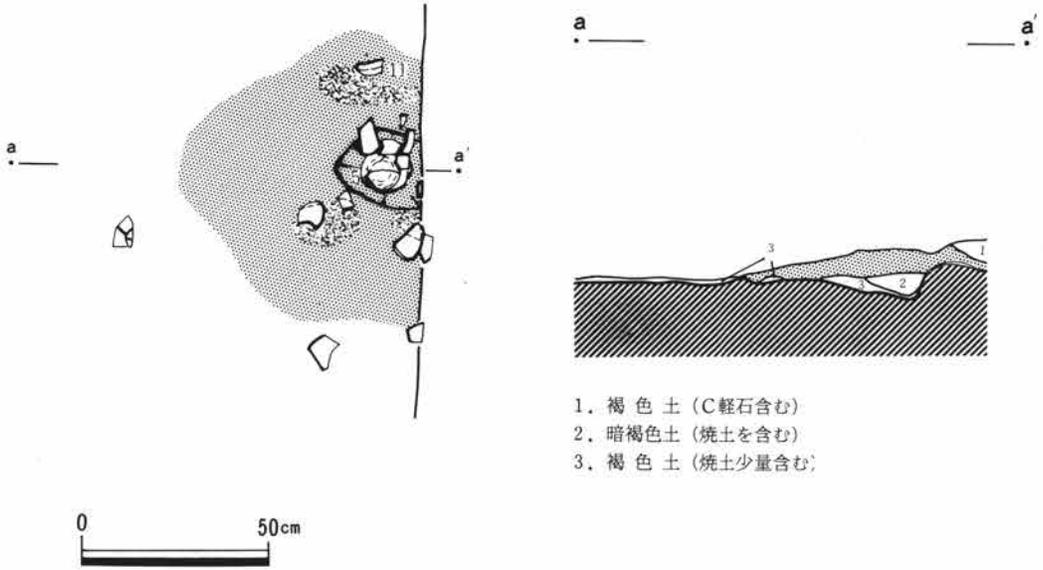
南北約2.6m、東西は2.5m以上と推定され、方形を呈すると思われる。壁は、西側では確認面まで10cmほど検出したが、断面では約40cmの立ち上がりが見られる。床は、大部分が4号住居址覆土の上に薄く焼土・炭化物を含む土を張ってたたいた張り床である。南東及び北西のコーナー附近に底径約20cm・深さ約40cmのピットがあり、形状より柱穴と思われる。また西壁際及び北壁断面に、深さ5cmほどの周溝が確認された。

カマドは、東壁やや南側に位置し、粘土をU字形に張って袖としている。燃焼部には、底径約10cm・深さ約5cmの浅い掘りこみが見られる。煙道部は、境界外で不明。

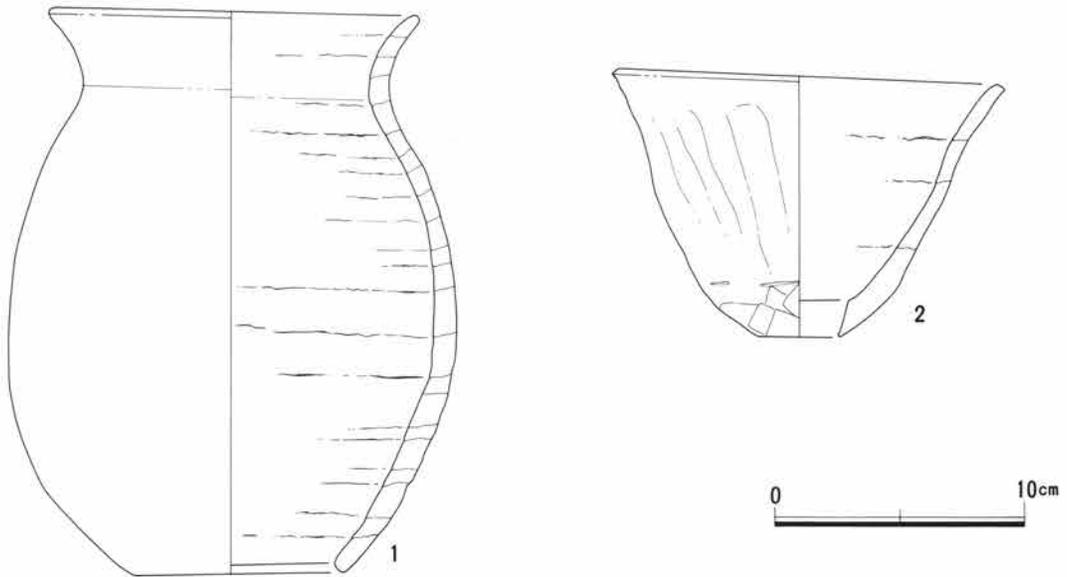


第3節 古墳時代の竪穴住居址

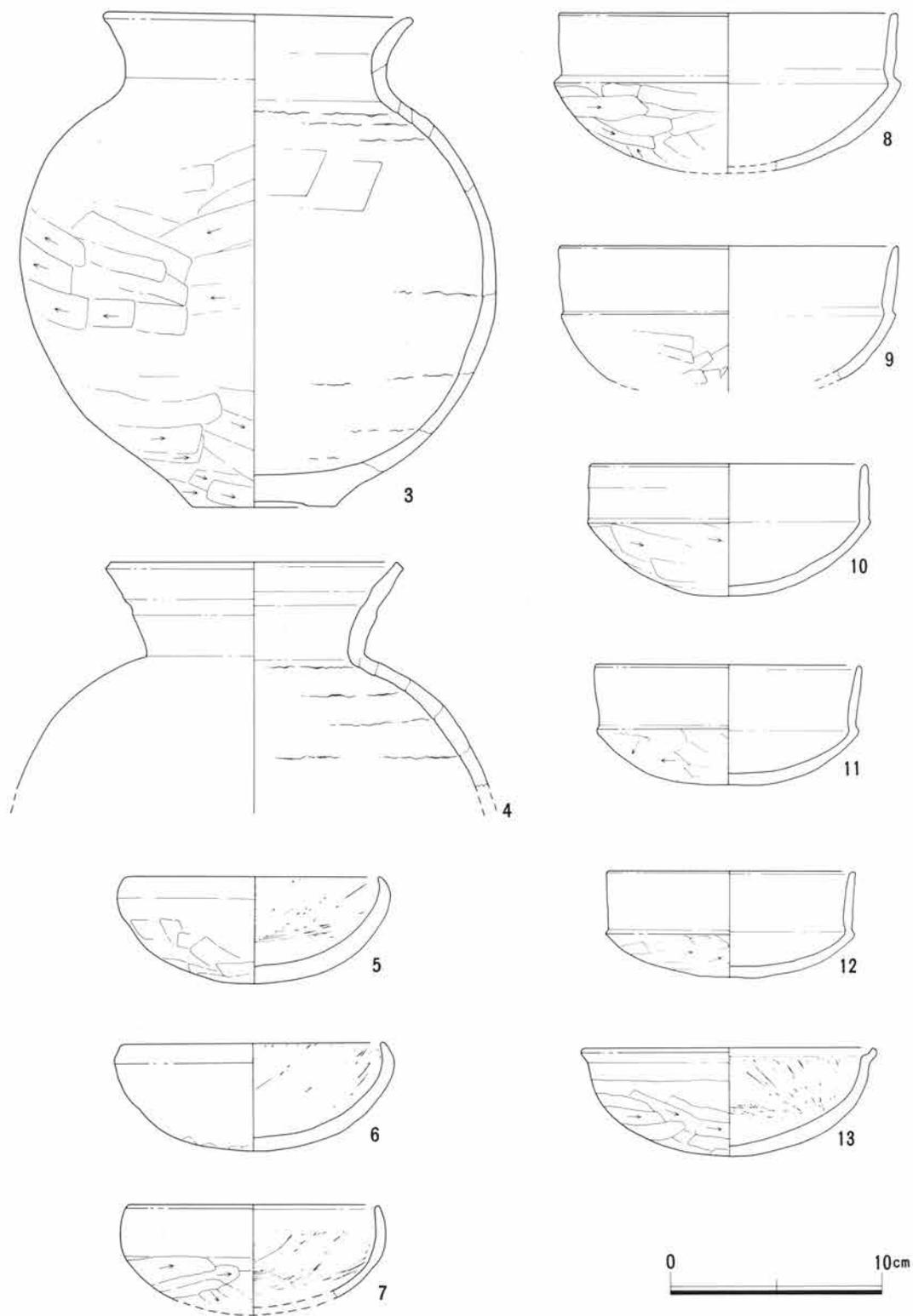
遺物は、カマド内及びカマド前面を中心に比較的多く土師器片が見られた。カマド内からは、小形甑(2)、杯(9・10)が検出された。(2)は、カマド右前の床面直上の破片類と接合する。カマド前面では、壺(3)、長胴甑(1)が小破片で散乱し、その他床面西側と南側では、杯(12・5)が見られた。また推定北壁より約1m北へずれた箇所で壺口縁(4)が出土している。レベルは本住居の床に近い、本住居に伴う可能性もある。そうならば、南北は約1m以上延びるが、断面ではそれを確認していない。



第64図 3号住居址カマド



第65図 3号住居址出土遺物①



第66図 3号住居址出土遺物②

第3節 古墳時代の堅穴住居址

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甗 土師器	床面直上 ほぼ完形	1	口径 14.5 最大径18.0 底径 8.5 器高 22.5	胴部はゆるやかな丸みをもち、口縁部はやや外反。	外面口縁部横ナデ。胴部ナデ。 内面口縁部横ナデ。胴部ナデ。	砂粒多く含む（大粒は2～3mm）。焼成良好。やや軟質。明黄褐色。黒色部分あり。
甗 土師器	カマド内 完形	2	口径 15.8 底径 3.3 器高 10.6	胴部は直線的であり、口縁部はやや外反。	輪積痕。外面口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ+粗いナデ。 内面口縁部横ナデ、胴部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。外面にふい橙色。内面赤褐色。黒色部分有。
壺 土師器	6cm上 1/2弱残	3	口径 14.5 最大径22.0 底径 6.7 器高 23.0	胴部は内形に近い丸みをもち、口縁部は外反。	輪積痕。外面頸部～口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ、底部には胴部との接合痕有。内面頸部～口縁部横ナデ、胴部～底部は粗いナデ。	砂粒多く含む。焼成良好。硬質。橙色。内外面黒斑あり。
壺 土師器	床面直上 口縁～胴部小片	4	口径 13.7	胴部上半は内形に近い丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反。内外面口縁部中央に沈線が走る。	輪積痕。外面口縁部横ナデ、胴部の調整は粗い。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 完形	5	口径 12.2 最大径13.0 器高 5.0	底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。口縁部は内湾。器壁が厚く丸底。	外面口縁部横ナデ。体部～底部ヘラケズリ。内面体部～口縁部まで暗文が斜行。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。内面黒斑。外面スス附着。
杯 土師器	床面直上 ほぼ完形	6	口径 12.5 器高 5.2	丸底。底部～体部は双曲線的な丸み。口縁部は内湾。	外面口縁部横ナデ。底部～体部はケズリ後ナデ。内面体部～口縁部ミガキ。暗文が斜行。	砂粒含む。焼成良好。硬質。にふい赤褐色。黒斑あり。
杯 土師器	床面直上 口縁～体部1/2残	7	口径 12.0	丸底。底部～体部は双曲線的な丸み。口縁部は内湾。	外面体部上半～口縁部横ナデ、底部～体部下半ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ、体部はミガキ。暗文が斜行。	砂粒含む。焼成良好。硬質。外面橙色。底部にふい橙色。内面にふい橙色。黒斑あり。
杯 土師器	カマド内 口縁～底部小片	8	口径 16.0	丸底。底部～体部は双曲線的な丸み。口縁部は強く屈曲し直立。体部と口縁部の接点に段をもつ。	外面口縁部横ナデ、底部～体部ヘラケズリ。内面体部上半～口縁部横ナデ、体部下半～底部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。内外面黒斑あり。
杯 土師器	覆土 口縁～体部1/2残	9	口径 16.0	丸底。底部～体部は双曲線的な丸み。口縁部は強く屈曲し直立、体部と口縁部の接点は段をもつ。	外面口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ。内面体部～口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。内外面黒斑。二次焼成の跡あり。
杯 土師器	カマド内 1/2弱残	10	口径 13.0 器高 7.0	丸底。底部～口縁部は双曲線的な丸みをもつ。口縁部は逆「く」の字状に屈曲し直立。	外面口縁部横ナデ、底部～体部ヘラケズリ。内面体部～口縁部横ナデ、底部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。内外面口縁部明赤褐色。内面体部浅黄褐色。

第II章 検出された遺構と遺物

杯 土師器	床面直上 1/2弱残	11	口径 13.0 器高 5.5	丸底。底部～口縁部は双曲線的な丸み。口縁部は逆「く」の字状に屈曲し直立。	外面口縁横ナデ。底部～体部ヘラケズリ。内面体部～口縁横ナデ。底部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。明赤褐色。黒斑あり。
杯 土師器	5cm上 ほぼ完形	12	口径 11.7 器高 5.0	丸底。底部～体部は双曲線的な丸み。口縁部は強く屈曲し直立。体部と口縁部の接点に段をもつ。	外面口縁部横ナデ。底部～体部ヘラケズリ。内面体部～口縁部横ナデ。底部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。明赤褐色。二次焼成の跡あり。
杯 土師器	床面直上 1/2弱残	13	口径 14.0 器高 5.0	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反。口唇部内湾。	外面体部上端～口縁部横ナデ、体部～底部ヘラズリ。内面口縁部横ナデ、体部はミガキ暗文が斜行。底部ナデ。ハケメ痕。	砂粒含む。焼成良好。硬質。外面橙色。黒斑あり。内面橙色。

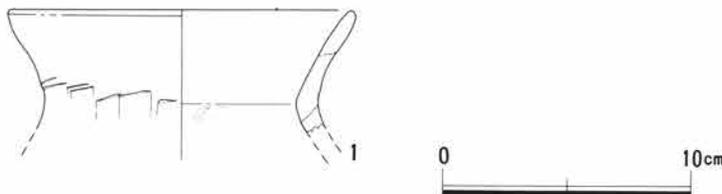
3号住居址出土土器観察表

6号住居址（4区）〔第63・67図・図版17（遺構）〕

4号住居址覆土中及びローム面で確認された。掘りこみ面は、第2層の暗褐色土中である。東側大部分は調査範囲外になる。本住居址は4号住を切っているが、3号住との関係は不明である。

規模・形状は、ほとんど不明だが、南北辺は3m以上あると思われる。壁は、40cmほどの垂直な立ち上がりがあり、断面に見られる。調査範囲内の北西コーナー付近では、深さ約5cmの周溝が確認されている。床面は、ロームをたたいているがややあまく、4号住居址覆土部分でも、はっきりした張り床は検出できなかった。

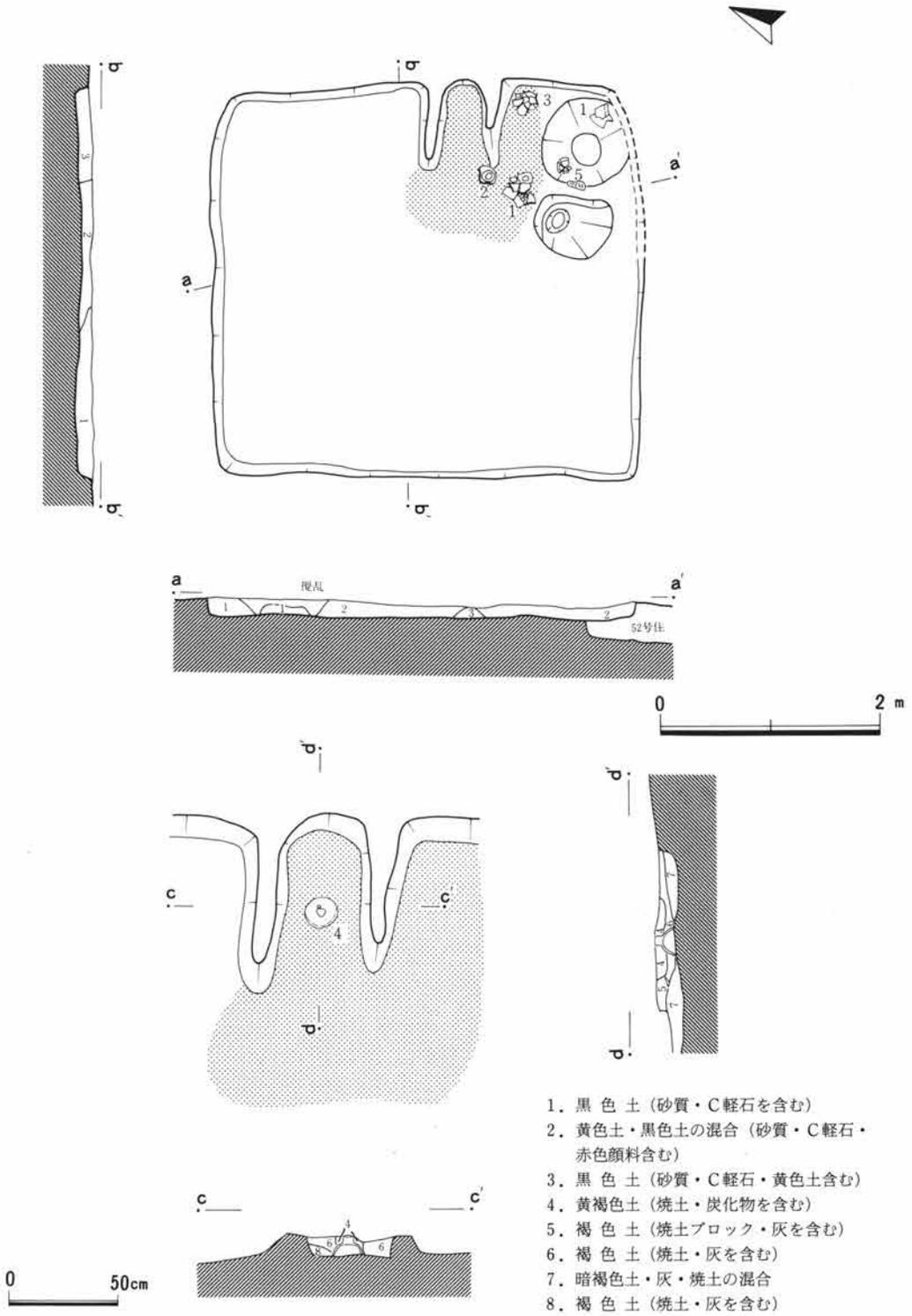
遺物は、甕口縁（1）が西壁際南側で見られた以外、顕著なものはない。



第67図 6号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	覆土 口縁小片	1	口径 13.8	口縁部は「く」の字状に外反。	外面口縁部横ナデ、頸部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ、ハケメ痕あり。	砂粒含む。焼成良好。硬質。にぶい赤褐色。

6号住居址出土土器観察表



第68図 51号住居址

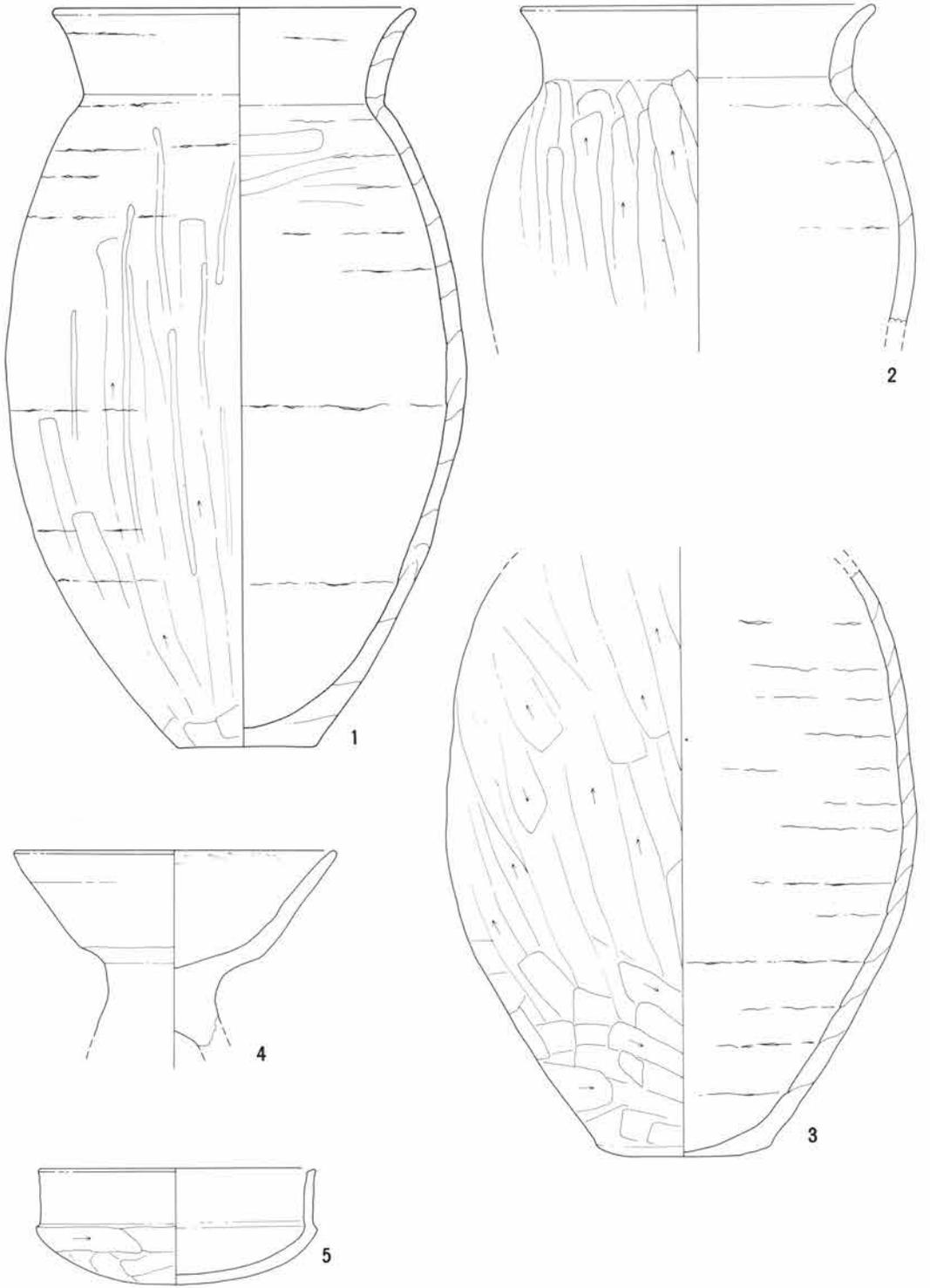
第II章 検出された遺構と遺物

51号住居址（1区）〔第68・69図・図版17（遺構）・図版84（遺物）〕

52号住居址と重複する。床面レベルは51号住居址が約20cm程高く、重複部分には貼床をしていることから51号住居址の方が新しいと考えられる。規模は3.9m×3.5mで、南北に長軸を持つ長方形を呈する。床面は黒色土とロームの混土であり、踏み固められて堅い。カマドは東壁やや南寄りに位置する。燃烧部は壁内にあり、煙道はつかない。袖部は非常に長く壁内に張り出して、構築材料には黄白色粘土を使用しているが、火熱のため著しく焼土化している。燃烧部中央には高杯の杯部(4)が逆立した形で置かれており、支脚として使用されていたと考えられる。貯蔵穴は南東隅にあり、直径80cmの円形プランで、壁は中心より緩やかな勾配で立ち上っている。貯蔵穴西側に幅70cm×50cm、深さ10cm程で西に向ってなだらかに立ち上る浅い掘り込みを検出した。覆土には焼土・灰が多量に含まれていた。遺物はカマド、貯蔵穴周辺に多く出土している。カマド内火床面に密着して高杯(4)、カマド右脇の壁近くで床面に密着して甕(3)、貯蔵穴上面から杯(5)が出土している。

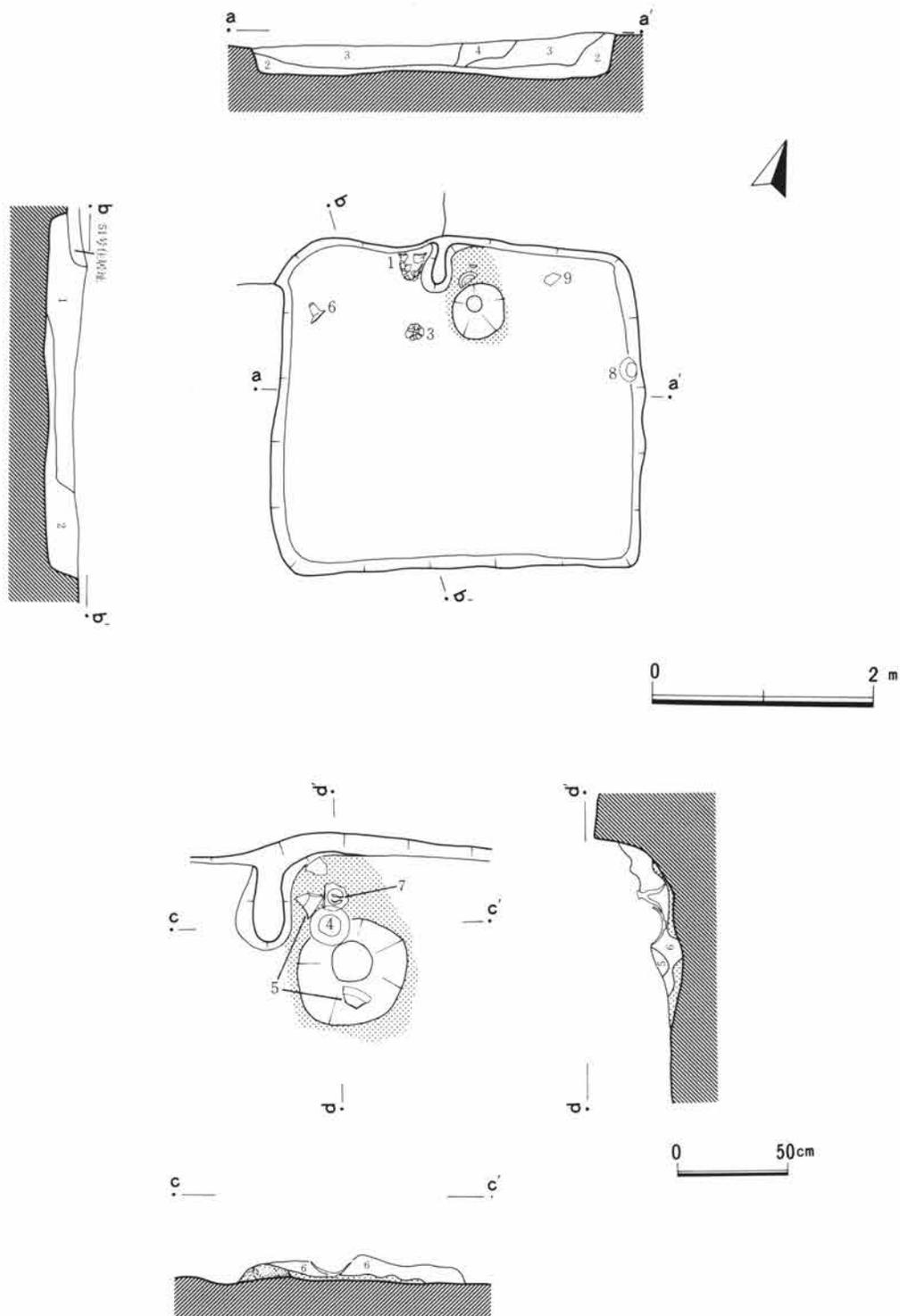
器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	床面直上 胴部の一部欠	1	口径 16.8 胴径 21.4 底径 6.5 器高 35.2	口縁部外反。胴部はわずかな丸みを持ち、やや長胴化。	輪積痕。外面口縁部横ナデ、胴部ヘラケズリ+粗いヘラミガキ。内面口縁部～頸部横ナデ。底部～胴部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。にぶい黄褐色。外面二次焼成による黒色部分、炭化物の付着あり。
甕 土師器	床面直上 胴下半欠	2	口径 16.4	口縁部外反。胴部はわずかな丸みをもつ。	輪積痕。外面口縁部～頸部横ナデ。胴部ヘラケズリ。内面口縁部～頸部横ナデ。胴部ナデ。	砂粒やや多く含む。焼成良好。比較的硬質。外面橙色・褐色。黒色部分あり、内面にぶい褐色。
甕 土師器	床面直上 胴部～底部	3	底径 8.0	胴部わずかな丸みを持ち、やや長胴化。	輪積痕。外面胴部～底部ヘラケズリ。内面胴部ナデ。	砂粒やや多く含む。焼成良好。比較的硬質。外面浅黄橙色。黒斑。二次焼成の黒色あり。内面にぶい黄褐色。底部黒色。
高杯 土師器	カマド内 脚部下半欠	4	口径 14.8	体部～口縁部直線的に広がる。	外面口縁部横ナデ、脚部上端～体部ナデ。内面風化、口縁部横ナデ、杯部ナデ、暗文斜行。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。橙色。
杯 土師器	床面直上 口縁一部欠	5	口径 12.6 器高 5.3	丸底。口縁部直立。口縁部と底部の間に段をもつ。	外面口縁部横ナデ、底部ヘラケズリ。内面口縁部～底部上端横ナデ。底部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。橙色。

51号住居址出土土器観察表



第69図 51号住居址出土遺物

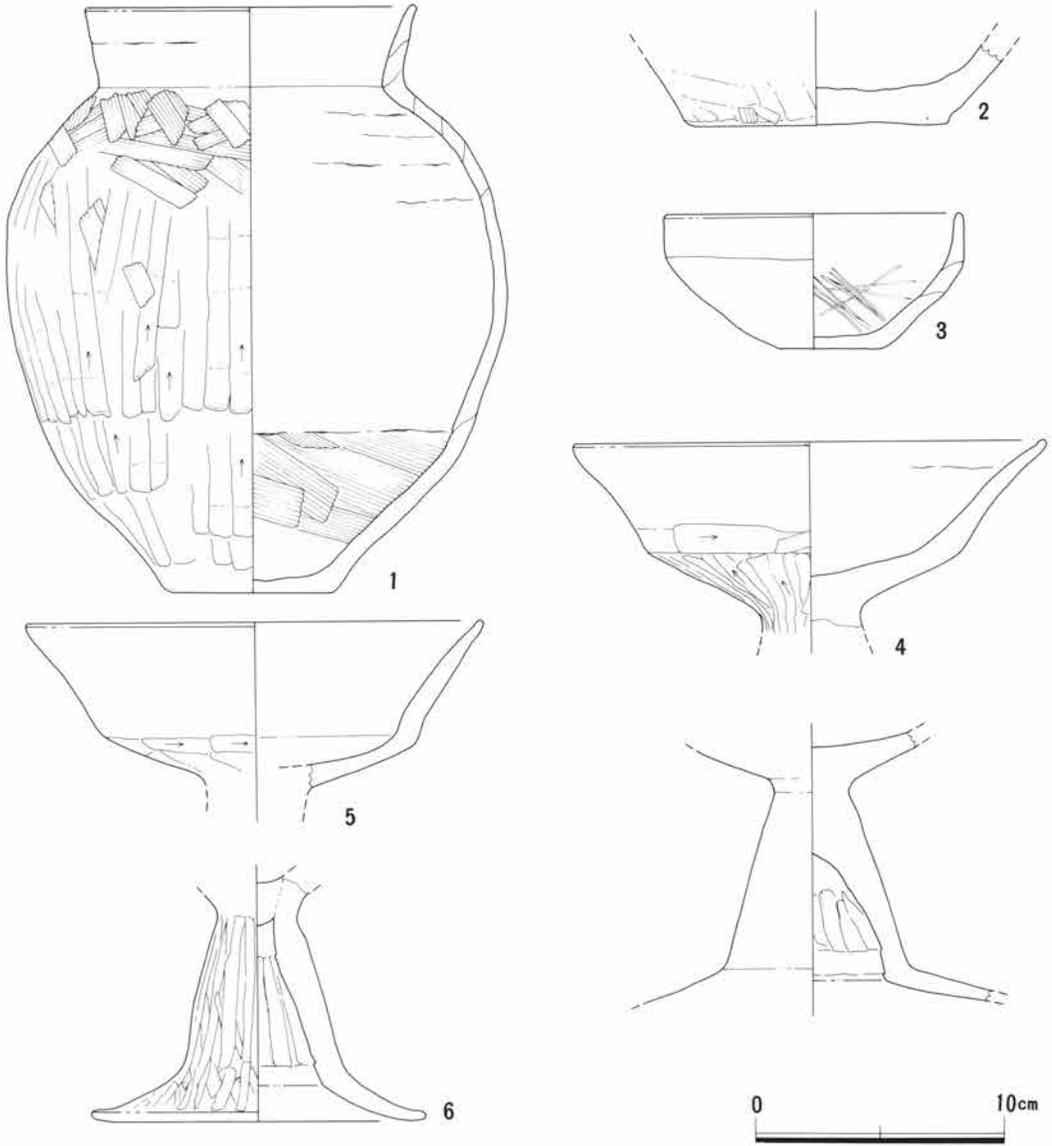
第II章 検出された遺構と遺物



第70図 52号住居址

52号住居址（1区）〔第70～72図・図版17（遺構）・図版86（遺物）〕

51号住居址と重複する。北西隅の重複部分は、51号住居址の床面として貼床されているので、52号住居の方が古いと判断した。規模は3.3m×2.9mの東西に長軸を持つ長方形を呈する。床面はロームの地床であるが、全体的にやわらかい。カマドは北壁中央に位置する。燃烧部は壁内にあり、袖部は短く、白色粘土で構築されている。右袖部分にも白色粘土が検出されたが、崩れていて形として捉えられなかった。遺物は、カマド左袖脇より床面に密着して甕（1）、カマド内より火床面に密着して高杯（5・4・7）、東壁中央から床面上5cmで高杯（8）が出土している。



第71図 52号住居址出土遺物①

第II章 検出された遺構と遺物

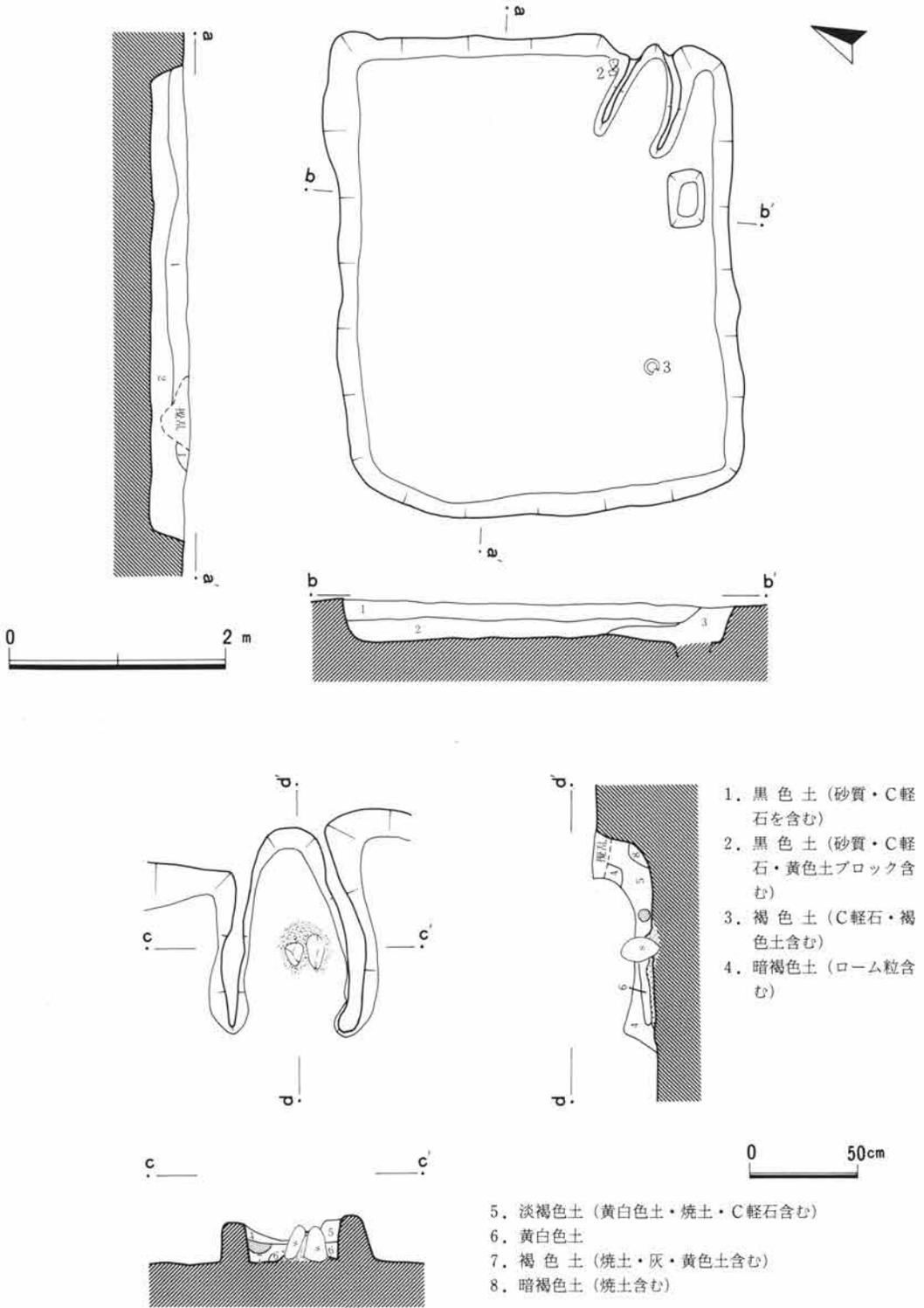


第72図 52号住居址出土遺物②

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	床面直上 口縁～胴部 1/4欠	1	口径 14.0 胴径 20.0 底径 6.8 器高 22.9	口縁部やや外反し、胴部はゆるやかな丸みをもつ。	輪積痕。外面口縁部横ナデ、肩部ハケメ、胴部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ、胴下部ハケメ、胴上半ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。外面にふい黄褐色。(二次焼成による黒色・赤褐色)。内面浅黄橙。
甕 土師器	底面直上 底部付近	2	底径 10.4		外面胴部ヘラケズリ、内面ナデ。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。外面浅黄褐色。黒色。内面灰白色。
鉢 土師器	床面直上 口縁部少々欠	3	口径 12.0 底径 4.2 器高 5.4	体部は直線的に広がり口縁部直立。底部平底。	内外面口縁部～底部ヘラケズリ+ナデ。内面ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。にふい橙色。
高杯 土師器	カマド内 杯部のみ	4	口径 19.0	体部は直線的に広がり、口縁部やや外反。	外面口縁部横ナデ、体部下端～底面ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。体部～底面ナデ。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。橙色。
高杯 土師器	カマド内 杯部1/4	5	口径 18.5	体部は直線的に広がり、口縁部やや外反。	外面口縁部横ナデ。体部ナデ。底面ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。体部～底部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。にふい黄橙色、橙色。
高杯 土師器	床面直上 脚部のみ	6	底径 13.5	脚部はラップ状に広がる。	外面ヘラケズリ。内面上半ヘラナデ、下半横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。にふい褐色。
高杯 土師器	カマド内 脚部のみ	7		脚部はラップ状に広がる。	外面ヘラケズリ。内面上半ヘラナデ、下半横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。橙色、浅黄橙色。
高杯 土師器	5cm上 杯部のみ	8	口径 20.5	体部は直線的に広がり、口縁部やや外反。	外面口縁部横ナデ。体部～口縁部ナデ後、ヘラミガキ暗文直行。底面ナデ。内面口縁部～体部横ナデ後、ヘラミガキ暗文直行。底面ヘラミガキ暗文。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。にふい黄橙色。
高杯 土師器	床面直上 杯部1/2残	9	口径 19.0	体部と底面の間に段をもつ。体部～口縁部直線的に広がる。	外面口縁部横ナデ、体部～底面ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ、体部ナデ+暗文。	砂粒含む。焼成良好。硬質。外面にふい橙色。内面橙。

52号住居址出土土器観察表

第3節 古墳時代の竪穴住居址

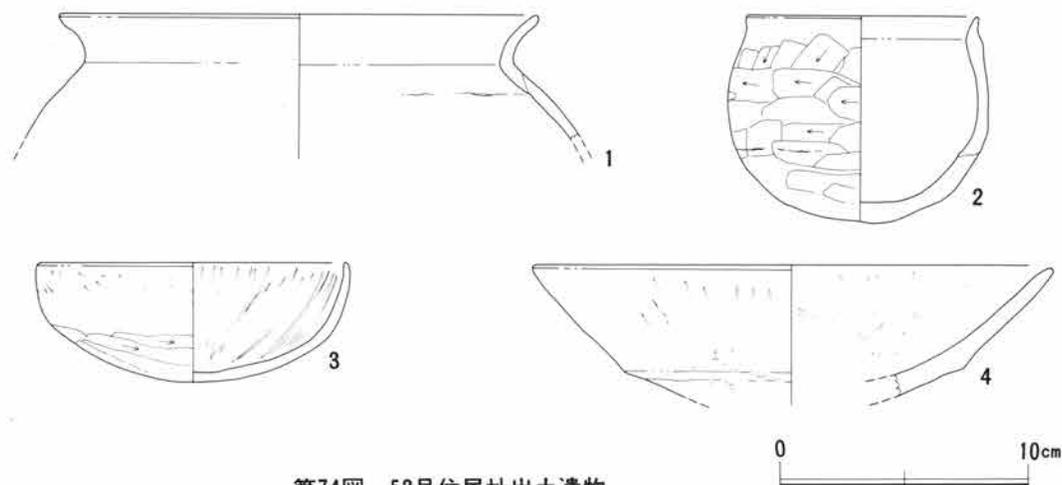


第73図 53号住居址

第II章 検出された遺構と遺物

53号住居址（1区）〔第73・74図・図版19（遺構）・図版87（遺物）〕

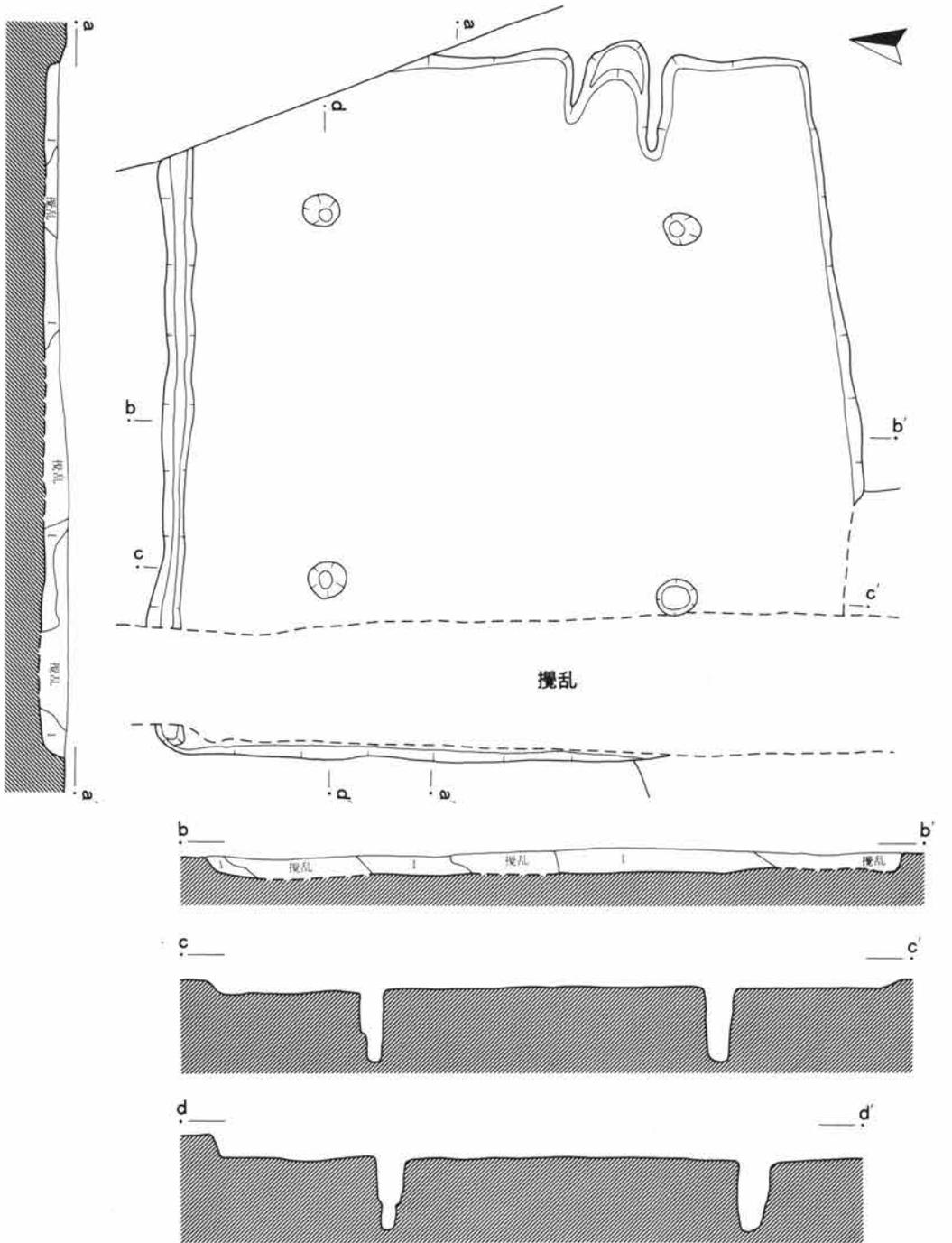
規模は4.3m×3.6mの東西に長軸を持つ長方形を呈す。床面は黒色土とロームの混土で、踏み固められて堅い。カマドは東壁南寄りに位置し、壁に対して北へ傾いて設置される。燃焼部は壁内にある。袖部は住居址内に長く張り出し、構築材料として白色粘土が使用されている。燃焼部中央は浅く掘り窪められ、河原石の支脚を2個並置し、回りを白色粘土で固めている。貯蔵穴はカマド手前の南壁際に幅50cm×30cm、深さ33cmの長方形プランで設ける。遺物は、カマド左側壁寄りに床面上15cmから椀（2）、南西部で床面に密着して杯（3）、覆土内より甕（1）、高杯（4）が出土している。



第74図 53号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	覆土 口縁部～ 肩部小片	1	口径 19.2	口縁部「く」の字状に外反。	輪積痕。内外面口縁部横ナデ。胴部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。にぶい褐色。内面部分的に橙色。
椀 土師器	15cm上 口縁部～ 体部1/2欠	2	口径 9.3 器高 8.2	丸底。底部～体部双曲線の丸みをもつ。口縁部やや外反。	外面口縁部横ナデ、口縁部下端～底部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ、底部～体部粗いナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色・黒色。(二次的なナスの附着)。
杯 土師器	床面直上 ほぼ完形	3	口径 12.5 器高 4.8	丸底。底部～口縁部双曲線の丸みをもつ。口唇部内湾。	外面口縁部～体部上半横ナデ+暗文斜行、体部下半～底部ヘラケズリ。内面全体ナデ+ミガキ、放射状の暗文。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。橙色。
高杯 土師器	覆土 口縁部～ 体部1/2残	4	口径 20.0	体部中間に段をもつ。口縁部直線的に広がり、やや丸みをもつ。	外面口縁部横ナデ。体部～口縁部ナデ+暗文直行。内面口縁部横ナデ、体部ナデ+ミガキ、暗文あり。	砂粒含む。焼成良好。比較的硬質。浅黄色。

53号住居址出土土器観察表

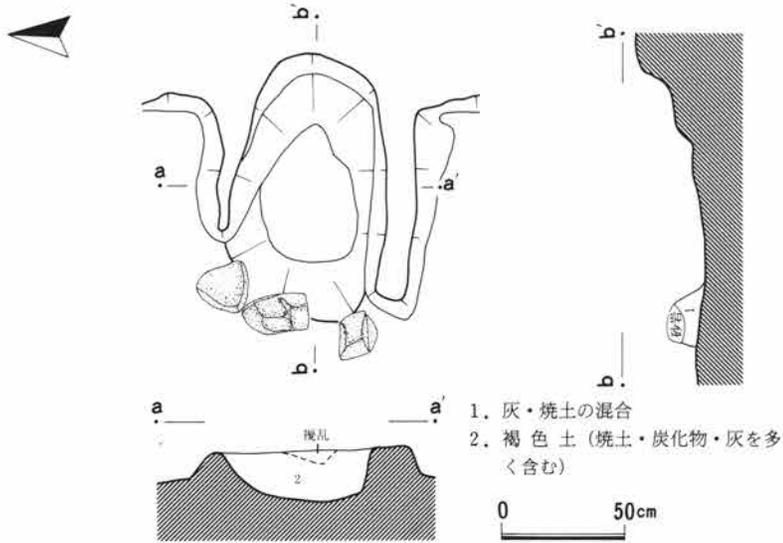


1. 褐色土 (多量のC軽石・黄色土・黒色土ブロックを含む)

0 2 m

第75図 54号住居址

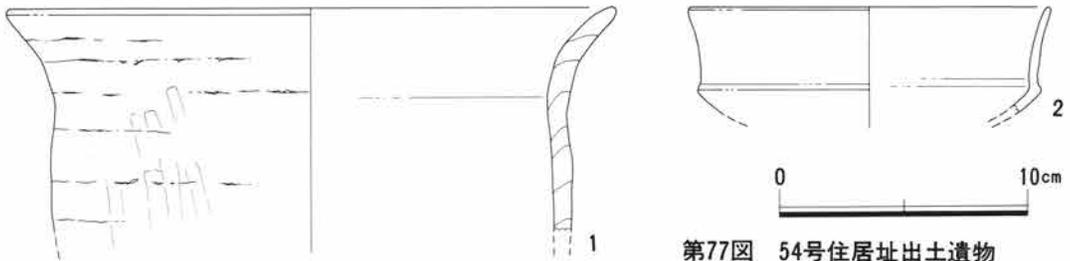
第II章 検出された遺構と遺物



第76図 54号住居址カマド

54号住居址（1区）〔第75～77図・図版20（遺構）〕

55号住居址と重複する。重複部分は耕作による攪乱、また新しい溝によって切られており、重複関係による55号住居址との新旧は不明である。規模は6.3m×6.1mで、東西に長軸をもつ長方形を呈する。床面は黒色土とロームの混土であり、やや堅い。主柱穴は4本で対置関係にある。壁溝は北壁のみに検出された。カマドは東壁南寄りに位置する。燃烧部は耕作による攪乱を受けており、左袖の一部は破壊されている。覆土には焼土・灰等が含まれるが、層には分けられず、耕作土も混入しているので攪乱を受けていると考えられる。焚口部右側には切石が据えられ、左側の切石は倒れた形で検出された。遺物は良好な状態での出土はないが、覆土内から甕・杯が出土している。



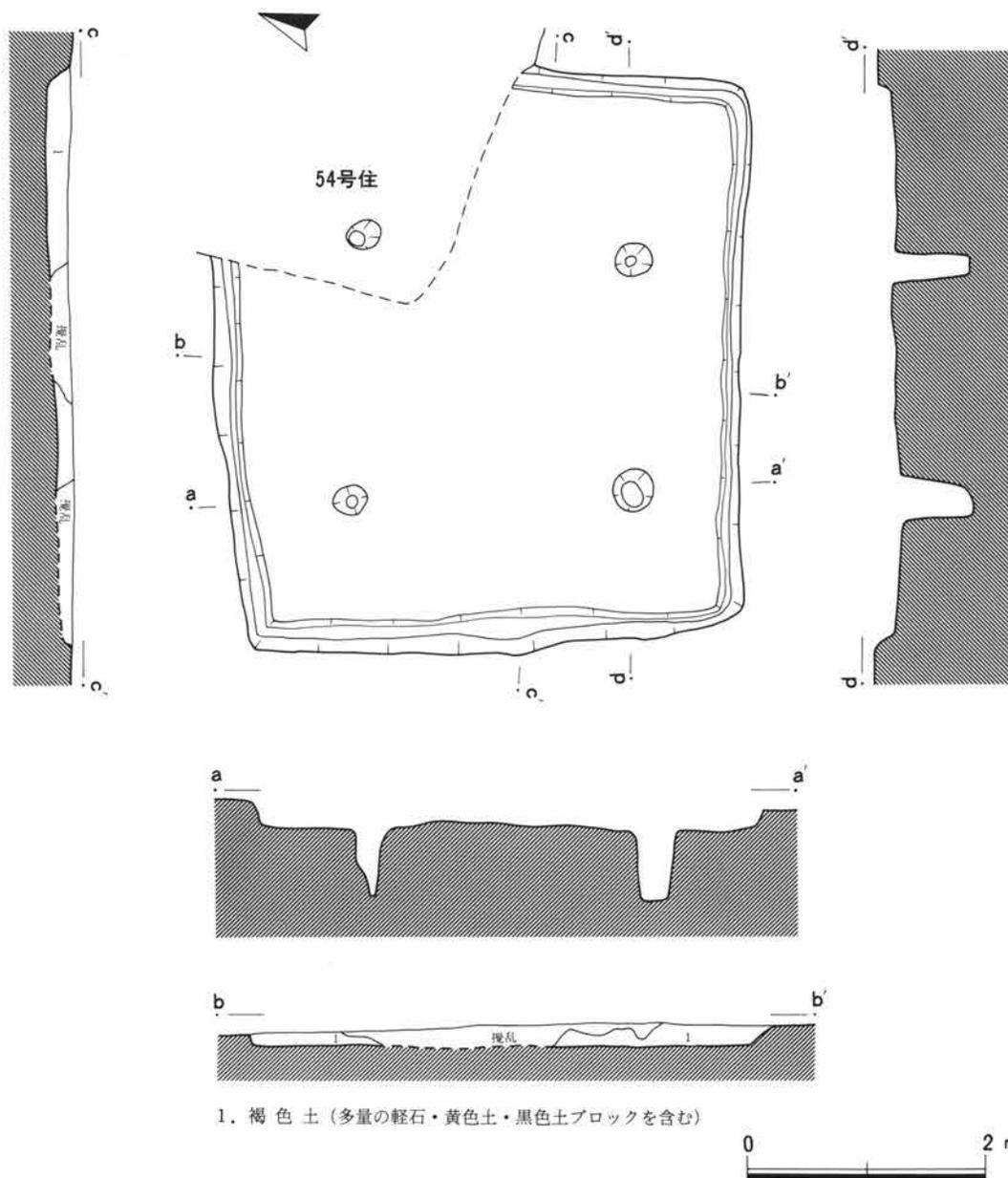
第77図 54号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	覆土 口縁部 残	1	口径 25.0	口縁部は外反する。	外面胴部～頸部ヘラケズリ+ナデ、口縁部横ナデ。内面胴部ナデ、頸部～口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。浅黄橙色。内外面黒斑あり。

第3節 古墳時代の竪穴住居址

杯 土師器	覆土 口縁部小 片	2	口径 19.5	体部と口縁部の間に段を有し、口縁部は直立する。	磨滅が激しい。外面体部ナデ、口縁部横ナデ。内面体部上端～口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成普通。やや軟質。橙色。
----------	-----------------	---	---------	-------------------------	-------------------------------------	--------------------

54号住居址出土土器観察表

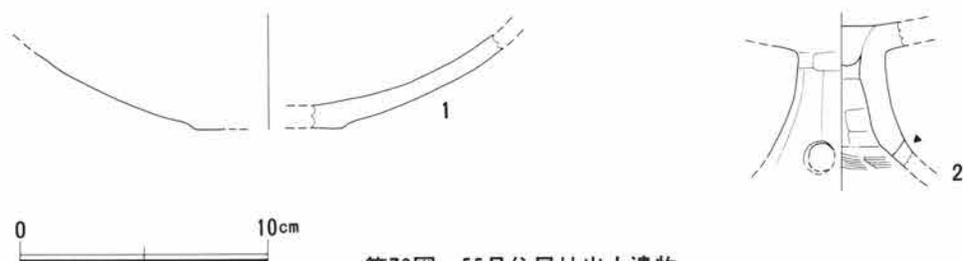


第78図 55号住居址

第II章 検出された遺構と遺物

55号住居址（1区）〔第78・79図・図版20（遺構）〕

54号住居址、49号土坑と重複する。54号住居址とは北東隅で重複しており、平・断面から新旧関係は判断できないが、出土遺物により55号住居址の方が古いと考えられる。規模は4.8m×4.5mで東西に長軸をもつ長方形を呈す。耕作面まで浅いため、壁の残存高は少ないが西壁は良好である。耕作による攪乱を受けており、床面はロームの直床であるが平坦な面は得られなかった。支柱穴は4本確認している。柱穴間は2.0～2.3mで長軸の方向がやや短い。周溝は重複部分を除いて全周する。炉・カマドの痕跡は確認できなかったが、出土した遺物から推定すると炉をもつ住居と思われる。良好な状態での遺物の出土はないが、覆土内より壺底部・高杯脚部が出土している。



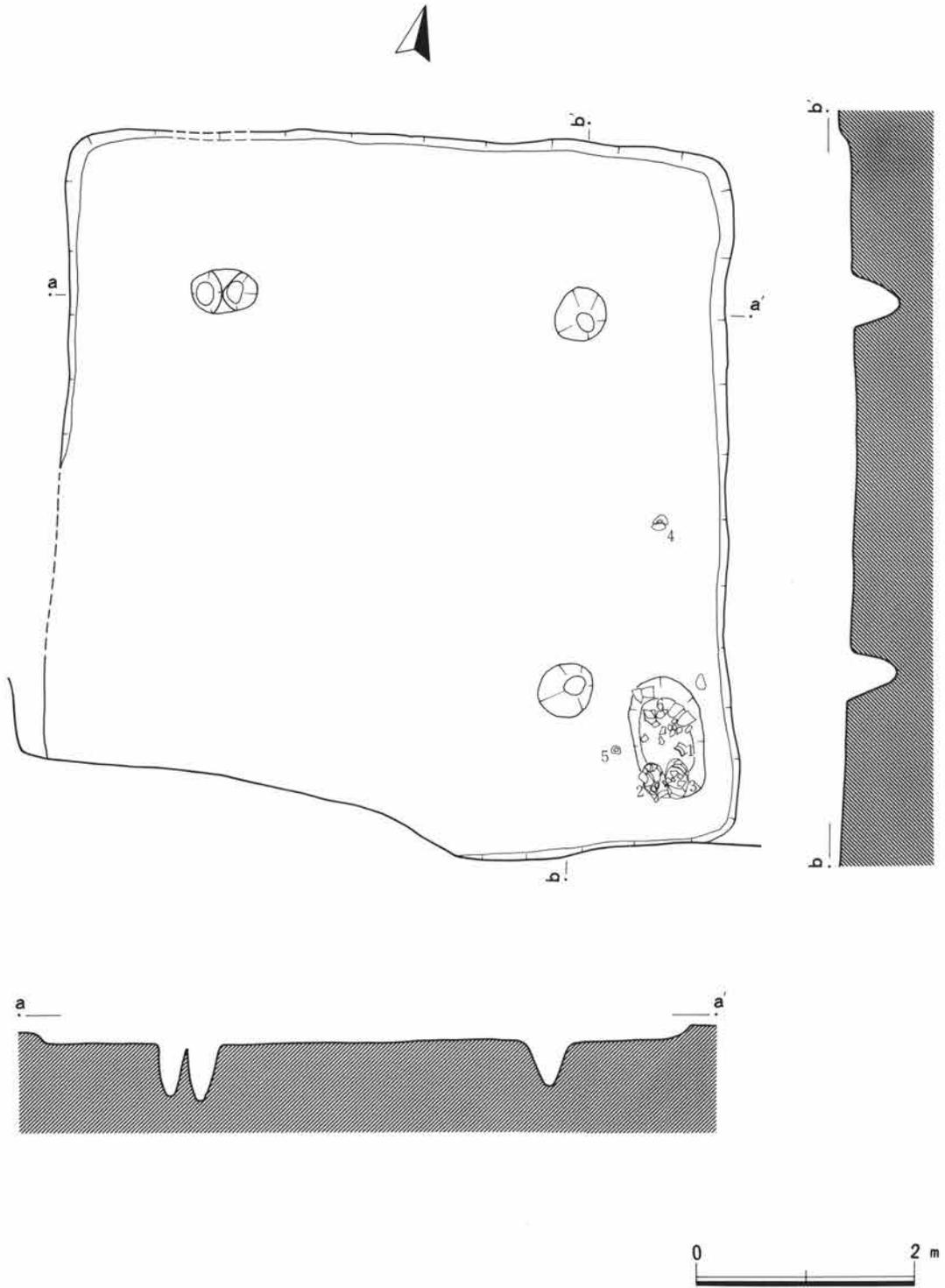
第79図 55号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(m)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺 土器	覆土 小片	1			外面粗いナデ。内面ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。外面にぶい橙色。内面橙色。
高杯 土器	覆土 脚部小片	2		脚部のみ。下半に円形の透しがある。	外面ヘラケズリ+ミガキ。内面上半ケズリ、下半粗いナデ。	砂粒少量含む。焼成良好。硬質。赤褐色。

55号住居址出土土器観察表

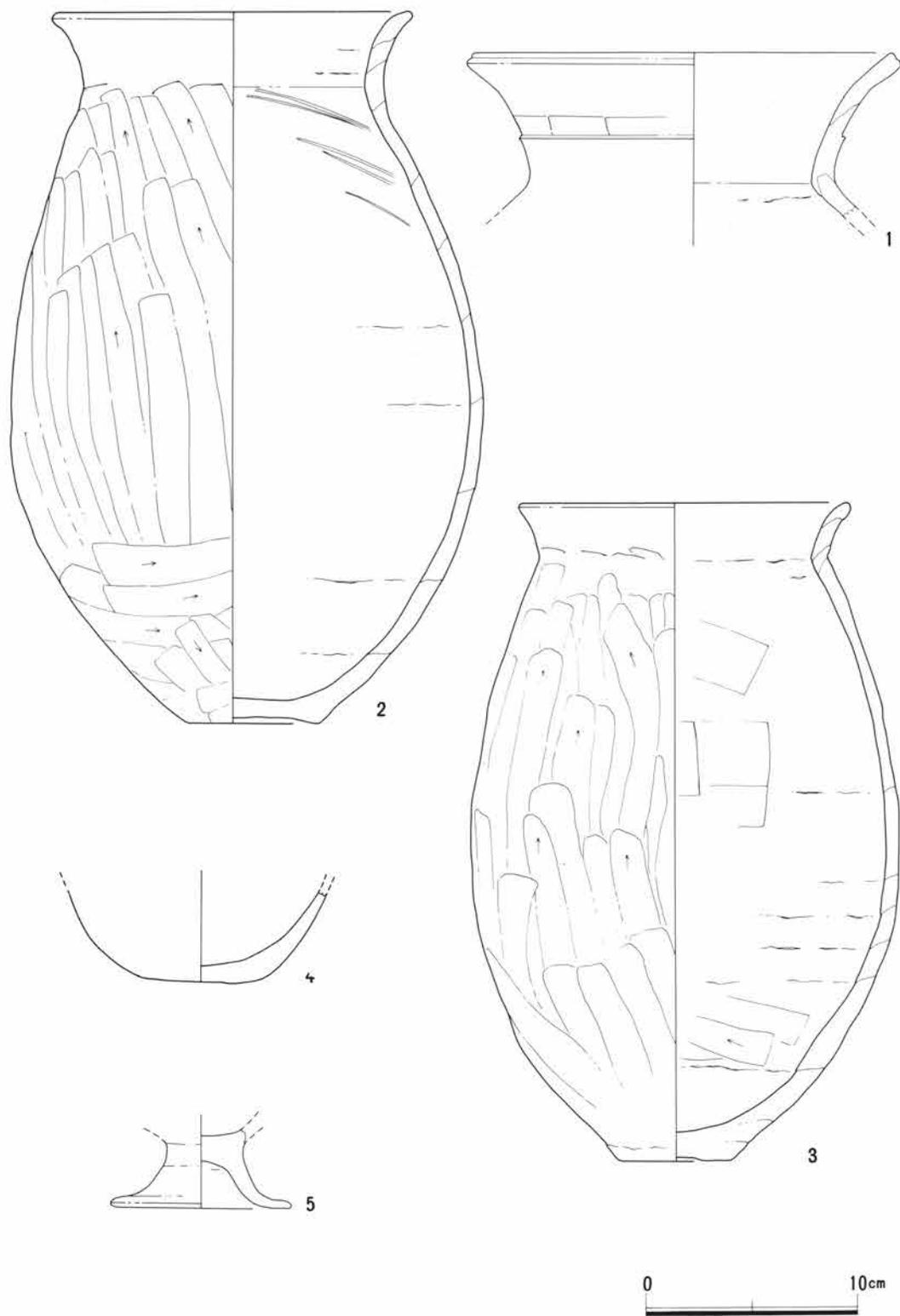
56号住居址（1区）〔第80～82図・図版21（遺構）・図版88（遺物）〕

耕作によって著しく攪乱を受けており、遺構確認時点では床面が露出している僅かに壁が残されていたのみであった。南西コーナーは不明であるが、一辺6.0mの正方形を呈する。壁は北壁と西壁の一部が10cm程、東壁は耕作時の攪乱によって破壊され所々残存する程度であり、南壁では一部分が確認できた。床面は黒色土の混入したロームで固められ非常に堅緻である。支柱穴は4本と考えられるが、南西部は攪乱を受けており検出できなかった。カマドは耕作によって壊されており形状・規模は把握し得なかったが、焼土・灰の散乱によって東壁中央南寄りに位置していたことは確定的である。貯蔵穴は南東隅に1.1m×0.66mの長楕円形プランで設置されている。遺物は貯蔵穴上面に横倒した形で2個体並んで甕（2・3）、貯蔵穴内より甕（6）、甕（1）、南東部床面密着で高杯（5）、覆土内より杯が出土している。



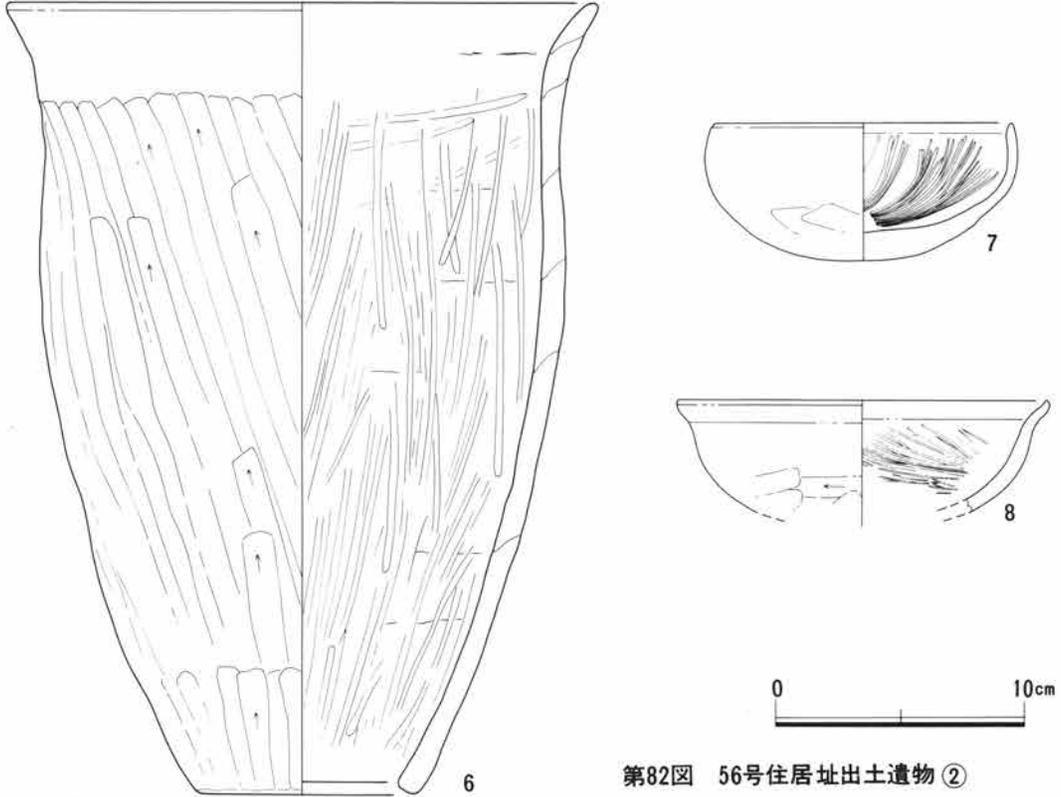
第80図 56号住居址

第II章 検出された遺構と遺物



第81図 56号住居址出土遺物 ①

第3節 古墳時代の竪穴住居址



第82図 56号住居址出土遺物②

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	貯蔵穴内 口縁部小片	1	口径 20.0	口縁部は中間に段を有し、外反する。	輪積痕。外面頸部～口縁部横ナデ、口縁部中間にハケメ状工具による条痕。内面口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。
甕 土師器	貯蔵穴上面 1/2強残	2	口径 17.0 最大径22.1 底径 6.2 器高 33.3	胴部は緩やかな丸みをもち、口縁部は外反する。	輪積痕。外面胴部ヘラケズリ、頸部～口縁部横ナデ。内面底部～胴部ナデ。頸部～口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。外面淡黄+黄灰+橙色。内面淡黄+黄灰色。炭化物付着。
甕 土師器	貯蔵穴上面 1/2残	3	口径 15.5 最大径20.1 底径 5.2 器高 30.7	胴部は緩やかな丸みをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。	輪積痕。外面胴部～頸部ヘラケズリ、口縁部横ナデ。内面底面～頸部ヘラナデ、口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。内外面灰黄色+黒褐色+橙色
甕 土師器	4cm上 底部～体部下位小片	4	底径 5.0		外面胴部ヘラケズリ。内面底部～胴部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。外面にぶい橙+橙色。内面にぶい黄橙+橙

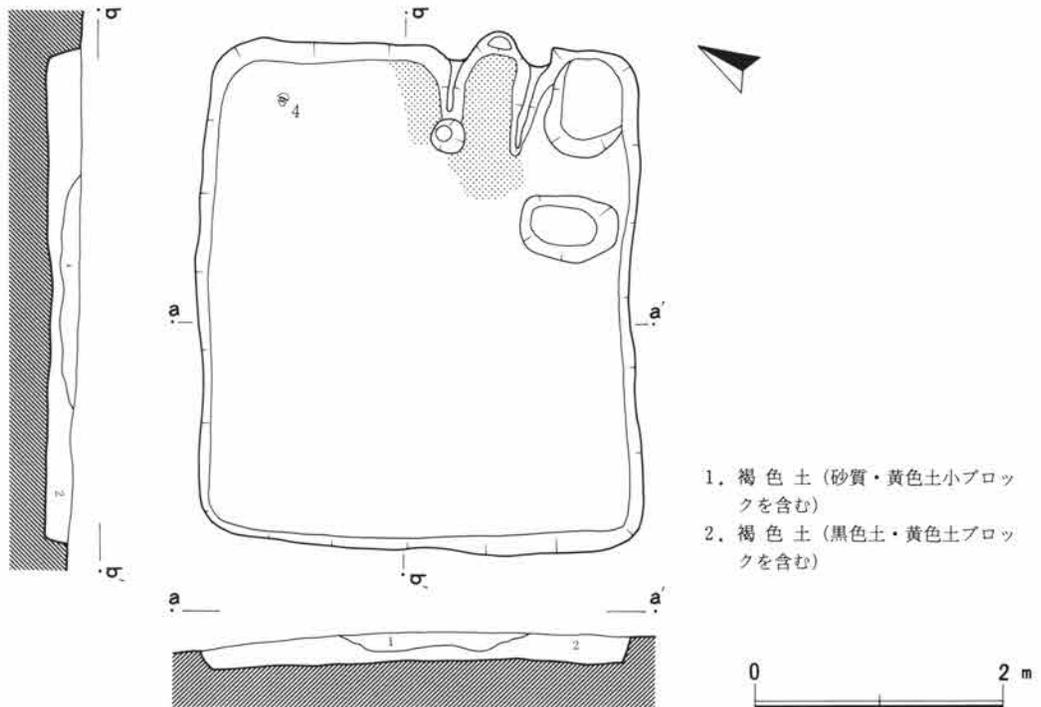
第II章 検出された遺構と遺物

高 土 師 器	杯 土 師 器	床面直上 脚部小片	5	底径 8.5	脚部短かく、ラップ状に開く。	内外面ていねいなナデ。端部横ナデ。	砂粒少量含む。焼成良好。硬質。橙色。内面タール付着。
甌 土 師 器	貯蔵穴内 1/2残存		6	口径 24.0 最大径24.0 底径 9.0 器高 31.5	胴部はやや丸みをもち、口縁部は外反する。	輪積痕。外面胴部ヘラケズリ。口縁部横ナデ。内面胴部ナデ+ミガキ。暗文あり。口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。内外面におい橙+におい黄橙+黒色。炭化物付着。
杯 土 師 器	覆土 口縁部1/2 欠		7	口径 12.2 器高 5.5	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもち、口縁部はやや内湾する。	底部厚い。外面底部～体部ヘラケズリ+ナデ。口縁部横ナデ。体部～口縁部ナデ+ミガキ。暗文斜行。口唇部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。外面底部黒色。
杯 土 師 器	覆土 1/2残存		8	口径 15.0	体部は緩やかな丸みをもち、口唇部は外反する。	外面体部指ナデ。口縁部横指ナデ。内面横ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。におい赤褐色。

56号住居址出土土器観察表

57号住居址（1区）〔第83～85図・図版21（遺構）・図版89（遺物）〕

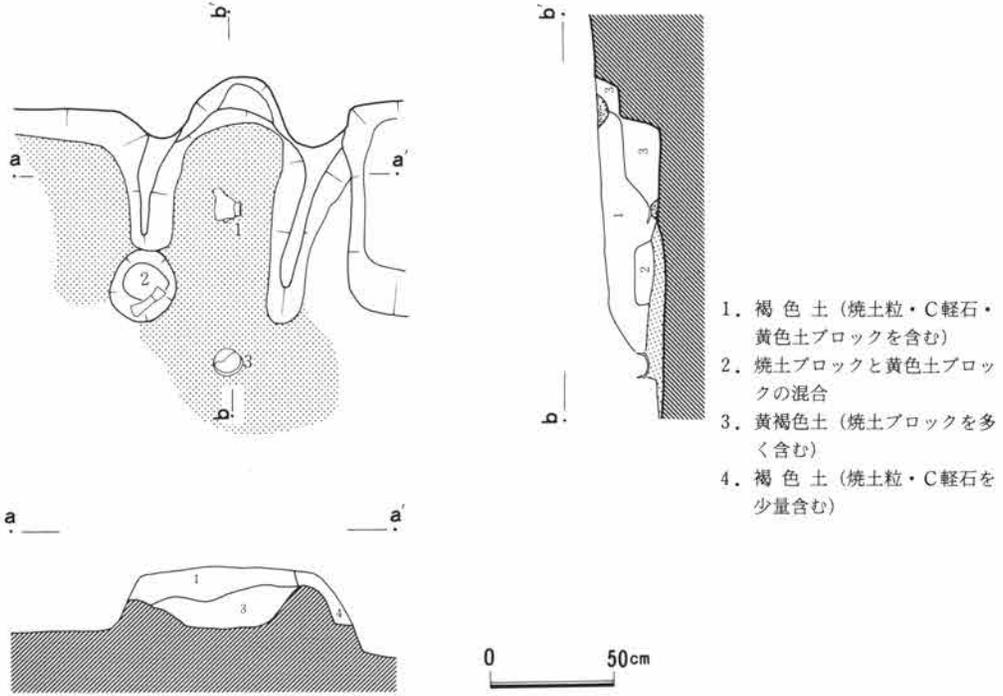
規模は4.0m×3.5mであり、東西に長軸をもつ長方形である。床面は黒色土とロームの混土で、やや堅い。カマドは東壁南寄りに位置する。燃焼部は壁内にあり、煙道が僅かに壁外に出る。袖は住居址内に長くのび、黄白色粘土が使用されている。左袖先端には直径25cm程の小ピットが検



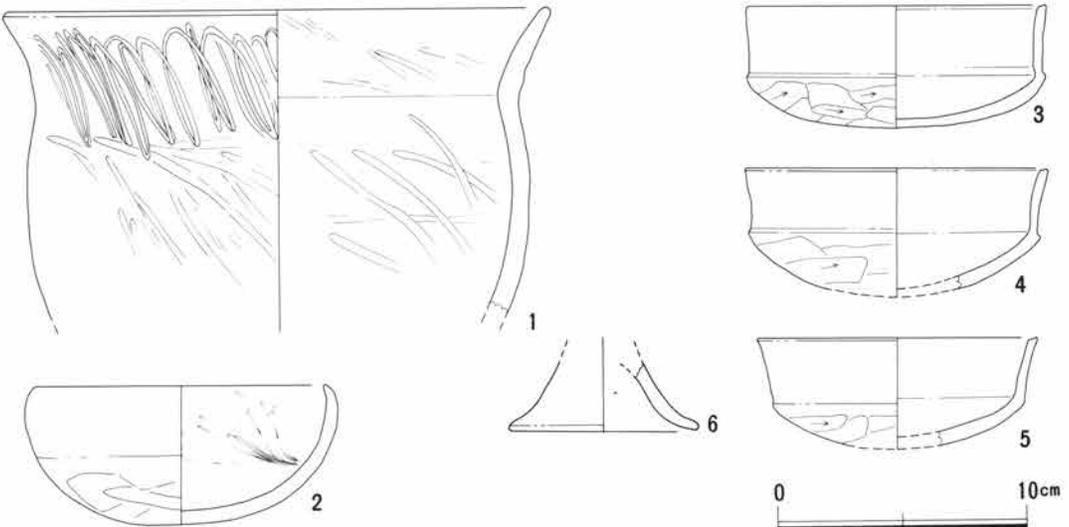
第83図 57号住居址

第3節 古墳時代の竪穴住居址

出されたが、これは袖石を据えたものであろう。燃焼部中央には火床に接して粘土塊が置かれ、その上に土器片をのせていることから支脚として使用したものと考えられる。貯蔵穴は南東隅にあり、幅85cm×60cmの長楕円形を呈する。貯蔵穴手前には幅80cm×50cmの長方形の浅いピットを検出した。覆土には焼土・灰が多量に含まれていた。遺物はカマド内より甕 (1)、杯 (3)、北東隅床面に密着して土師杯 (4)、覆土内より杯、高杯が出土している。



第84図 57号住居址カマド



第85図 57号住居址出土遺物

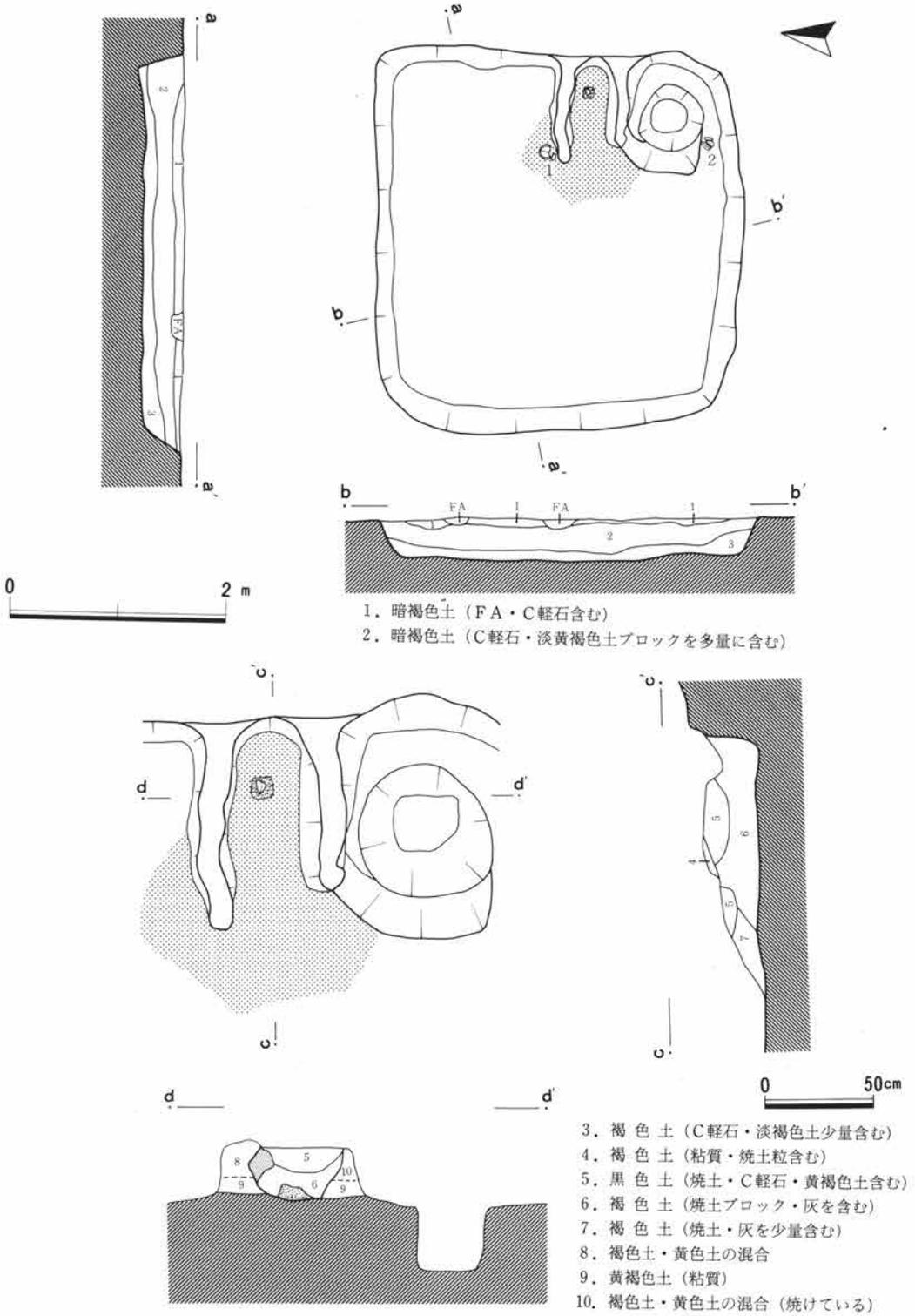
第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	カマド内 口縁～体 部上位 $\frac{1}{2}$	1	口径 22.0	口縁部は外反する。	輪積痕。胴部ナデ+ミガキ。 暗文斜行。口縁部横ナデ+ミ ガキ、巻きバネ状の暗文あり。 口縁部横ナデ+ミガキ、暗文 あり。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。外面浅 黄色+にぶい黄橙 色。内面浅黄橙 色+にぶい黄橙 色。内外面黒斑。
椀 土師器	カマド内 $\frac{1}{4}$ 残	2	口径 12.0 器高 5.5	丸底。底部～体部は双曲線的 な丸みをもち、口縁部は内湾 する。	外面底部～体部下 $\frac{1}{2}$ ヘラケ ズリ、体部上半～口縁部横ナ デ。内面底部～体部下 $\frac{1}{2}$ ナ デ。体部上半～口縁部ミガキ。暗 文斜行。	砂粒含む。焼成良 好。硬質、明赤褐 色。
杯 土師器	カマド内 口縁 $\frac{1}{4}$ 欠	3	口径 12.2 器高 4.9	丸底。底部～体部は緩やかな 丸みをもつ。体部と口縁部の 間に段を有し、口縁部は直立 する。	外面底部～体部ヘラケズリ。口 縁部横ナデ。内面底部～体部 ナデ。体部上端～口縁部横ナ デ。体部上端～口縁部横ナデ。	砂粒少量含む。焼 成良好。硬質。明 赤褐色。
杯 土師器	床面直上 口縁～体 部小片	4	口径 12.0	丸底。底部～体部は緩やかな 丸みをもつ。体部と口縁部の 間に段を有し、口縁部は直立 する。	外面底部～体部ヘラケズリ。 口縁部横ナデ。内面底部～体 部ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。明赤褐 色。
杯 土師器	覆土 口縁～体 部小片	5	口径 11.3	丸底。底部～体部は緩やかな 丸みをもつ。口縁部は直立し、 口唇部はやや外反する。	外面底部～体部ヘラケズリ。 口縁部横ナデ。内面底部～体 部ナデ。体部上端～口縁部横 ナデ。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。橙色。
高杯 土師器	覆土 脚部小片	6	底径 7.5	脚部ロート状に広がる。	内外面ナデ。	砂粒含む。焼成普 通やや軟質。橙色。

57号住居址出土土器観察表

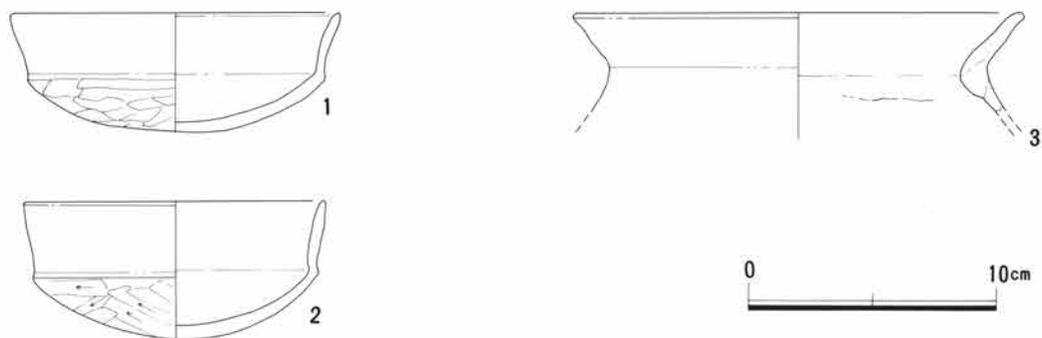
58号住居址（1区）〔第86・87図・図版22（遺構）・図版89（遺物）〕

確認面は第3層のC軽石混入の黒褐色土である。上面では本住居址の覆土を掘り込み、FPによって埋没した畠跡を検出している。東西壁は3.4m、北壁3.5m、南壁3.3mを測る不整形である。壁はゆるやかに立ち上っている。床面はロームをそのまま使用し比較的堅い。カマドは東壁中央よりやや南寄りに位置する。燃焼部は壁内にあり、袖部は長く、構築材料には黄褐色粘土を敷きその上にやや粘性に乏しい褐色土、黄色土の混土を使用している。火熱による焼土化が著しい。燃焼部中央には黄褐色粘質土を置き、その上に小礫を設置して支脚としている。貯蔵穴は南東隅に設けられており、直径60cm・深さ30cmを測る。遺物はカマド左袖脇に床面密着で杯(1)、南壁東寄り床面に密着して杯(2)が出土している。



第86図 58号住居址

第II章 検出された遺構と遺物



第87図 58号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	床面直上 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	1	口径 13.2 器高 4.7	丸底。底部～体部は緩やかな丸みをもつ。口縁部は直立し、口唇部はやや外反する。	外面底部～体部ヘラケズリ。口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ。体部上端～口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。明赤褐色。内外面炭化物付着。内面赤色顔料？
杯 土師器	床面直上 $\frac{3}{4}$ 残存	2	口径 12.1 器高 5.5	丸底。底部～体部は緩やかな丸みをもつ。体部と口縁部の間に段を有し、口縁部は直立する。	外面底部～体部ヘラケズリ。口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ。体部上端～口縁部横ナデ。	砂粒少量含む。焼成良好。硬質。橙色。
甕 土師器	覆土 口縁小片	3	口径 18.1	口縁部は「く」の字状に外反する。	輪積痕。外面頸部～口縁部下端ナデ。口縁部横ナデ。内面粗いナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。灰白色。

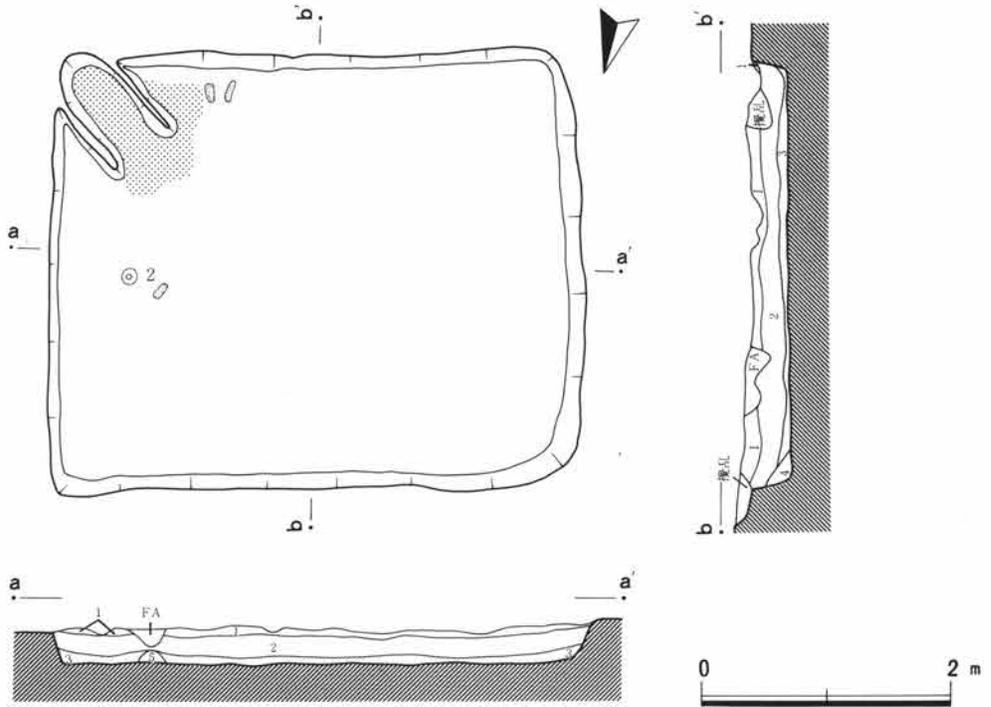
58号住居址出土土器観察表

59号住居址（1区）〔第88・89図・図版22（遺構）・図版89（遺物）〕

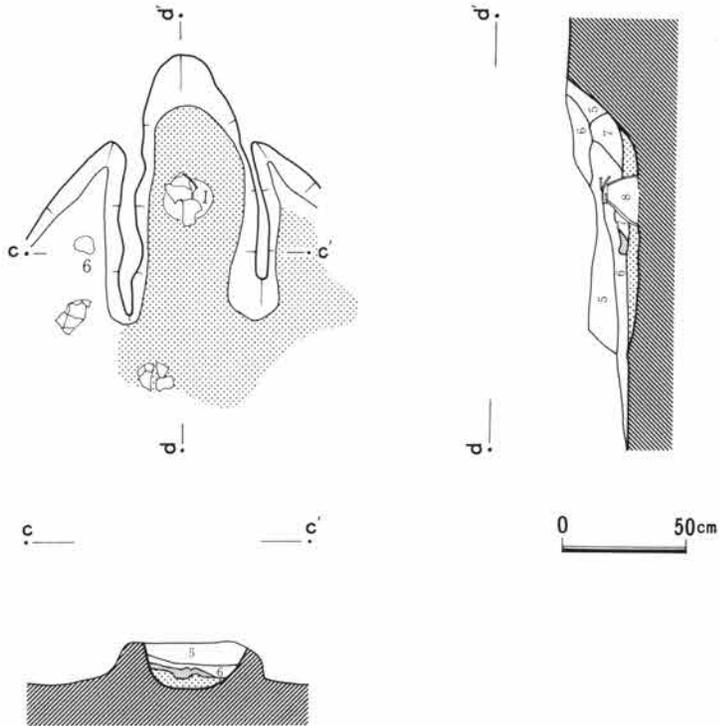
第4層黒褐色土面にて確認された。規模は長辺約4.3m・短辺約3.5mで、平面形は隅丸長方形を呈する。床は比較的硬く良好である。壁の残存状態は比較的良好であり、立ち上りは約30cm～40cmを計る。堅穴内に柱穴はなく、壁周溝もない。

カマドは南東側のコーナーに設置されており、袖は両軸が約20cm～25cm残存していた。カマド掘り込み部分中央には、支脚に使用されたと推定できる甕(1)が伏せて置いてあるのを検出した。また掘り込み部分では、厚さ4cm～5cmの灰層・3cm～4cmの焼土混合層を確認した。貯蔵穴はない。

出土遺物として、カマド右袖脇より高杯片(6)、床面近くより完形の杯(2)がある。

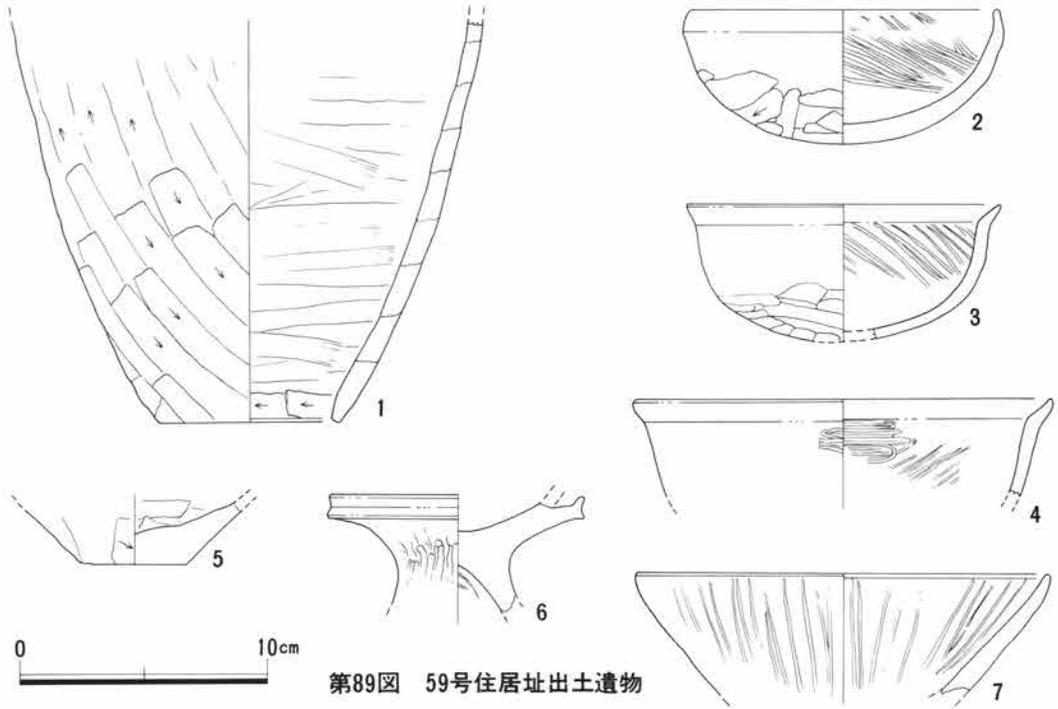


1. 黒色土と褐色土の混合 (FA・C軽石含む)
2. 黒色土と褐色土の混合 (C軽石多く含む)
3. 褐色土 (粘質)
4. 褐色土 (粘質・C軽石少量含む)
5. 黒色土・淡褐色粘質土の混合 (C軽石・焼土を少量含む)
6. 淡褐色土 (粘質・焼土ブロック・灰を含む)
7. 褐色土 (焼土ブロック・灰を含む)
8. 褐色土 (C軽石を含む)



第88図 59号住居址

第II章 検出された遺構と遺物



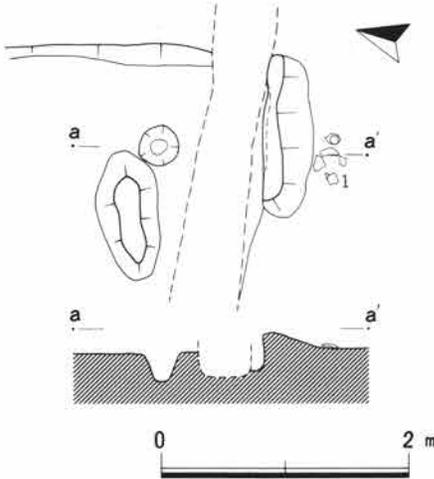
第89図 59号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
飯土師器	カマド内 胴下半部	1	底径 6.6	体部はわずかに丸味をもつ。	輪積痕。外面ナナメヘラケズリ。内面横指ナデ。内面最下部ヨコヘラケズリ。	砂粒多く含む。焼成良好。硬質。赤橙色。外面下部黒斑。
杯土師器	床面直上 完形	2	口径 12.4 器高 5.3	丸底。体部は緩やかな丸みをもち、口縁部は内傾する。	外面体部指ナデ後、ヘラケズリ。口縁部横指ナデ。内面横ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。褐色。外面赤彩。
杯土師器	覆土 1/2残存	3	口径 12.6	丸底。体部は緩やかな丸みをもち、口唇部外反。	外面底部ヘラケズリ。外面口唇部横ナデ。内面ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。明赤褐色。
杯土師器	カマド内 口縁～体部の一部	4	口径 17.0	口唇部外反。	外面横指ナデ。内面ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。赤褐色。
甕土師器	覆土 底部	5	底径 4.2		外面ヘラケズリ。内面指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。
高杯土師器	床面直上	6		杯部と脚部の接合部に突出部をもつ。	内外面指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。赤褐色。
高杯土師器	覆土 杯部1/2	7	口径 16.7	杯部直線的に外反。	外面指ナデ後、縦ヘラミガキ。内面横指ナデ後、縦ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成普通。硬質。橙色。

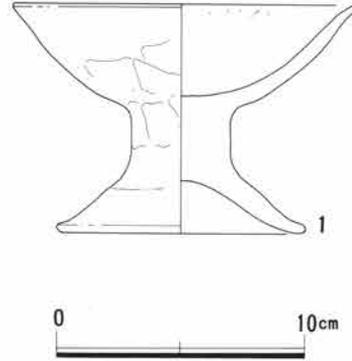
59号住居址出土土器観察表

60号住居址（1区）〔第90・91図・図版90（遺物）〕

耕作面までが非常に浅く、遺構確認の時点で床面まで掘り下げてしまっており、僅かに焼土の痕跡によってカマドを確認したのみで、住居の規模・形状は不明である。壁は東壁の一部が検出できた。床面はロームと黒色土の混土でやや堅い。カマドは攪乱を受けているが、壁内に張り出す袖の一部を確認している。遺物はカマド脇に床面密着で高杯（1）が出土している。



第90図 60号住居址



第91図 60号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
高杯 土師器	カマド内 %残存	1	口径 13.5 底径 10.0 器高 9.1	杯部の丸みは少なく、直線的に広がる。脚部は短かく、ロート状に広がる。	外面脚部下半横ナデ。脚部上半～杯部下半へラケズリ+ナデ。口縁部横ナデ。内面杯部ナデ。脚部ナデ+横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。赤褐色。内外面タール付着。

60号住居址出土土器観察表

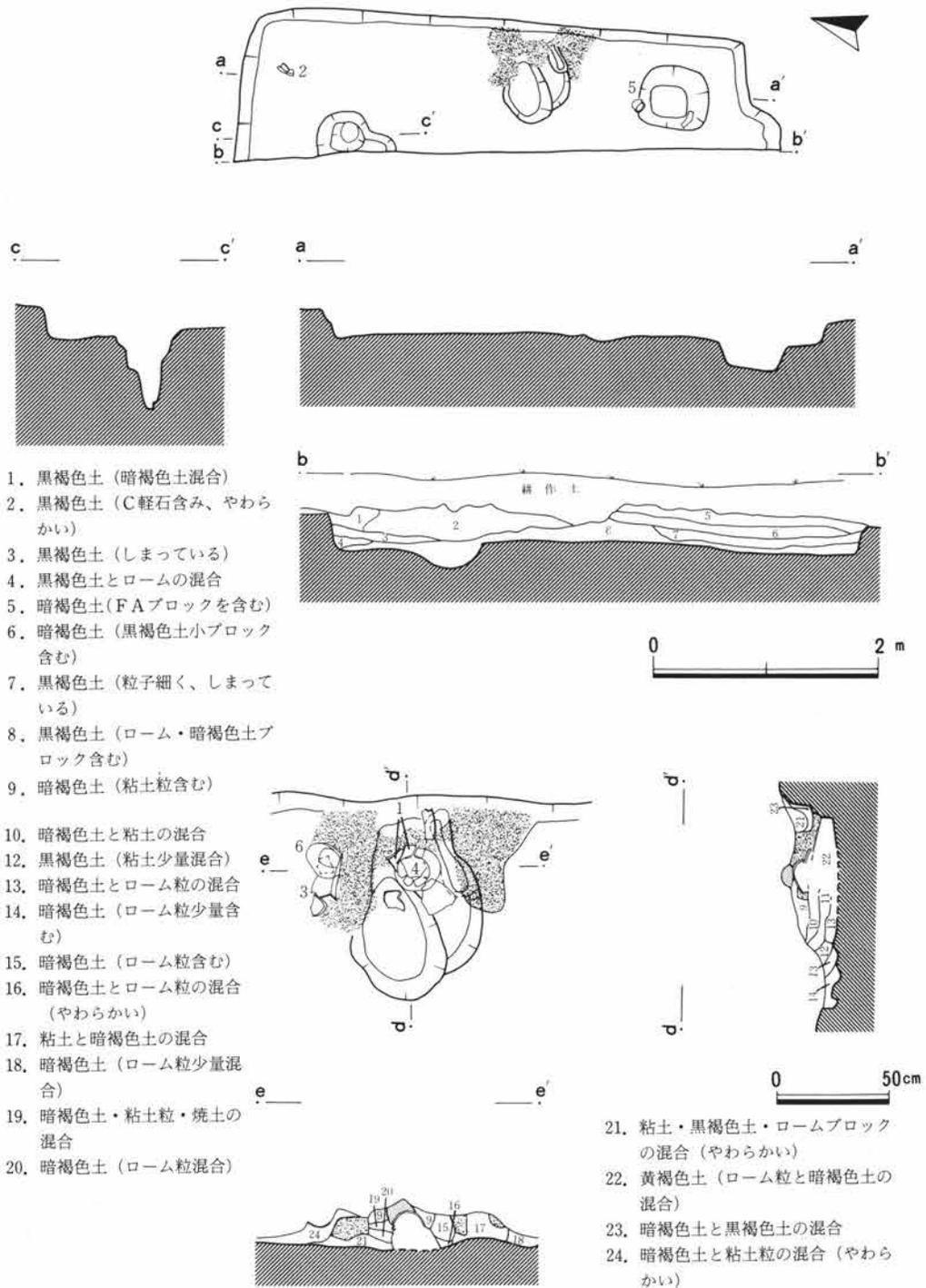
61号住居址（1区）〔第92・93図・図版23（遺構）〕

住居址全体の約 $\frac{2}{3}$ が調査区域外。東壁は4.5m、カマドに向かって右壁（南壁）に約30cmの張り出し部が存在する。床面より約30cm上方にFAのブロックを大量に含んだ暗褐色土層があり、下層にはFAを全く含まないことから、本住居址はFA降下前であることが推定できる。

壁はやや傾斜をもって立ちあがる。床面はロームの直床であり、特にカマド周辺部が固い。柱穴は1ヶ所のみ確認、他は調査区域外と考えられる。

カマドは東壁の中央よりやや南寄りに付設されている。壁直下に2度にわたり一部重複して皿状に掘りくぼめ、粘土・黒褐色土・ロームの混土で固めて基底部をつくり、中央部に高杯・壺・椀の破片を重ねて支脚としている。袖は粘土および粘土と暗褐色土の混土でつくられ、左袖には高杯・壺の破片が埋め込まれていた。貯蔵穴状のピットは隅丸方形を呈し、カマドの右側、コーナー部近くに存在する。

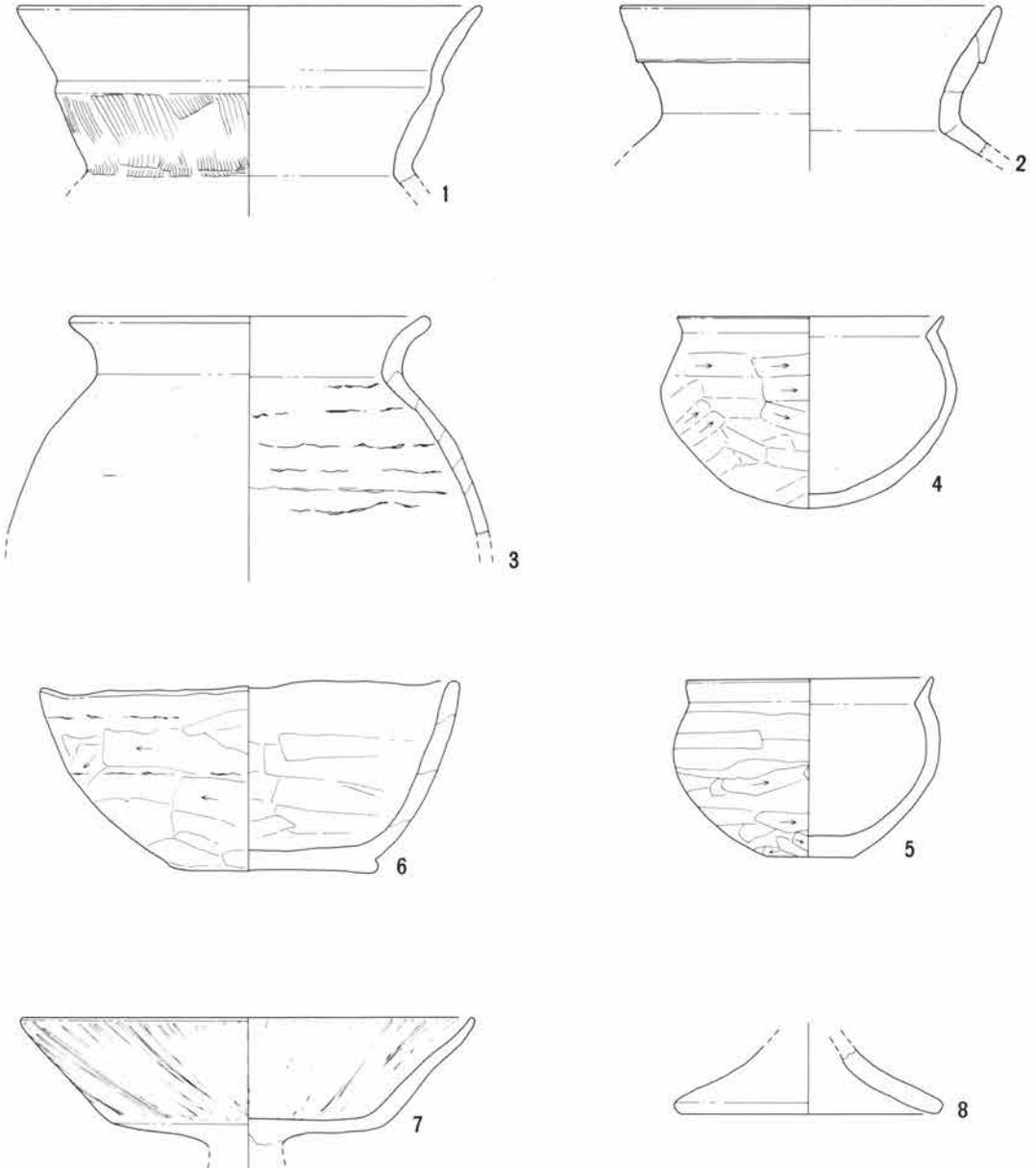
第II章 検出された遺構と遺物



第92図 61号住居址

第3節 古墳時代の竪穴住居址

出土遺物として、床面付近より小形甕 (5) と壺の口縁の一部 (2) がある。またカマド内からは支脚を形成していた椀 (4)・壺形土器口縁部 (1) や左袖に埋め込まれていた鉢 (6)・甕形土器口縁部 (6) がある。



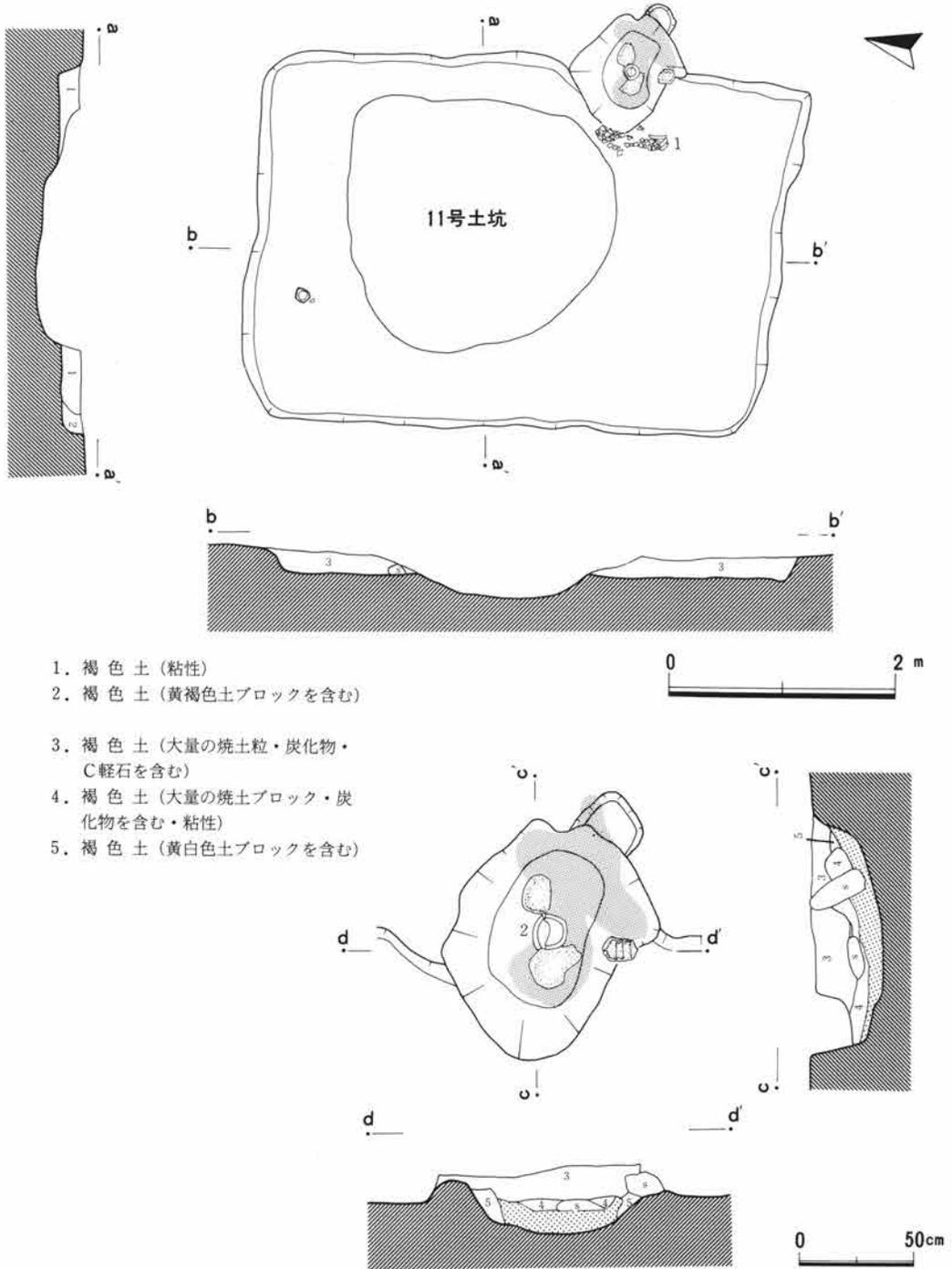
第93図 61号住居址出土遺物 

第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺 土師器	カマド内 口縁 1/2	1	口径 19.5	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部中間に段あり。	外面口縁部下半ハケメ。口縁部上半横ナデ。内面横ナデ。	砂粒少量含む。焼成良好。硬質。にぶい橙色。
壺 土師器	カマド内 口縁 1/2	2	口径 16.0	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部中間に段をもつ。	輪積痕。内外面口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。淡黄色。
甕 土師器	カマド内 口縁～体部 1/3	3	口径 15.0	胴部は緩やかな丸みをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。	輪積痕。外面胴部～頸部ハケナデ。口縁部横ナデ。内面胴部～頸部ナデ。頸部～口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。黒斑あり。
碗 土師器	カマド内 口縁欠	4	口径 11.2 最大径12.3	丸底。体部は双曲線的な丸みをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面底部～体部ヘラケズリ。体部上端～口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。明赤褐色。
小形甕 土師器	3cm上 ほぼ完形	5	口径 7.4 最大径11.2 底径 3.5 器高 10.2	体部は緩やかな丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反する。	外面体部ヘラケズリ+ナデ。体部上端～口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒含む。硬質。焼成良好。橙色。外面黒斑あり。
鉢 土師器	カマド内 2/3	6	口径 17.6 底径 8.4 器高 8.3	体部は緩やかな丸みをもつ。	輪積痕。外面体部ヘラケズリ。口唇部粗い横ナデ。内面体部ヘラナデ。口縁部横ナデ。	砂粒含む。硬質。焼成良好。外面赤褐色+にぶい褐色。黒斑あり、タール付着。内面にぶい褐色。黒斑。
高杯 土師器	カマド内 杯部のみ	7	口径 18.5	脚部欠損。平らな杯部底面～体部は45°の角度で直線的に外反。口唇部はわずかに内湾。	外面杯部底部ナデ。体部～口縁部横ナデ+ミガキ。暗文斜行。杯部外面ナデ。底部上端～口縁部横ナデ+ミガキ。暗文斜行。	砂粒少量含む。焼成良好。硬質。橙色。
高杯 土師器	カマド内 脚部小片	8	底径 11.0	脚部下半ラッパ状に広がる。	外面ナデ。内面端部横ナデ、その他ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。硬質。外面にぶい黄橙色。

61号住居址出土土器観察表

第4節 古代の竪穴住居址

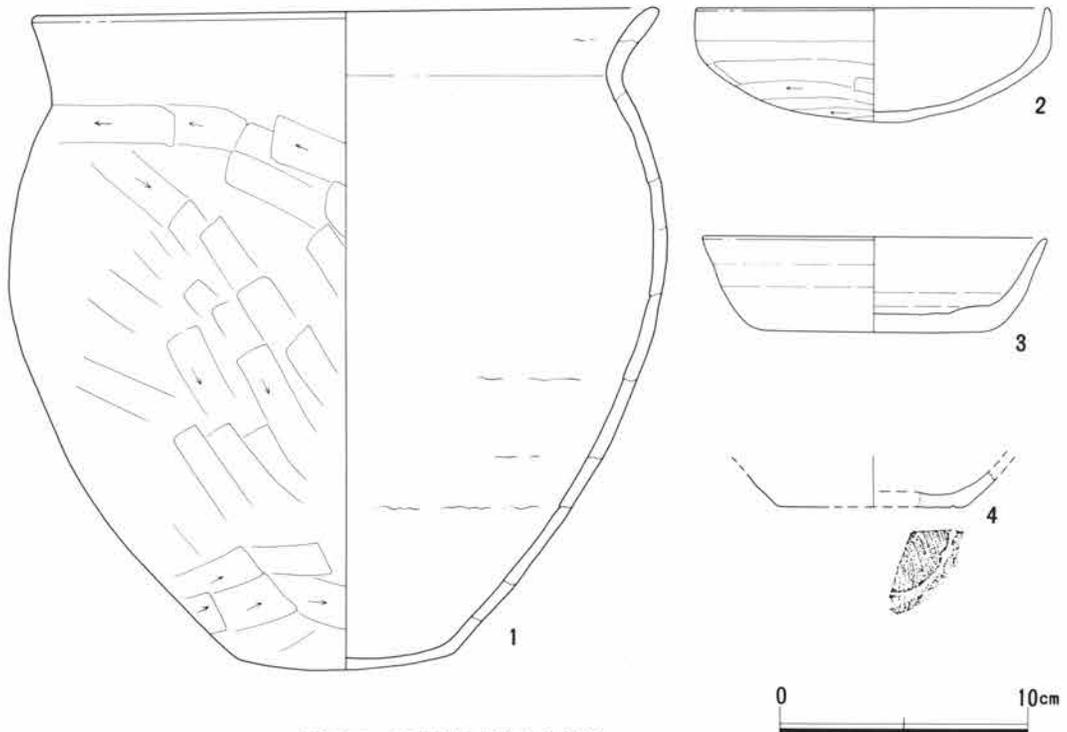


第94図 20号住居址

第II章 検出された遺構と遺物

20号住居址（3区）〔第94・95図・図版24（遺構）・図版91（遺物）〕

第2層暗褐色土中において確認。11号土坑によって中央部を切られている。規模は4.7m×3.2mの長方形を呈する。壁は垂直に近く立ち上がる部分とややゆるやかな部分とがある。床は貼床されており、カマド付近でよく踏み固められている。柱穴、壁周溝は確認されなかった。カマドは床面および壁を皿状に掘りくぼめ、基底部に軽石を立てて支脚としている。カマド内より完形の土師器杯(2)が、カマド焚口手前の床面直上より完形の長甕(1)がつぶれた状態で検出された。



第95図 20号住居址出土遺物

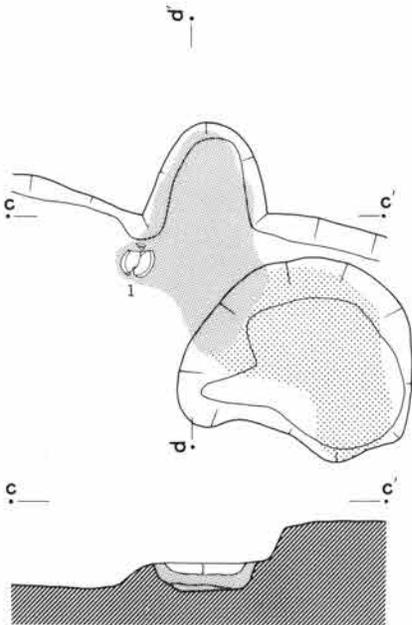
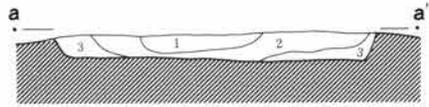
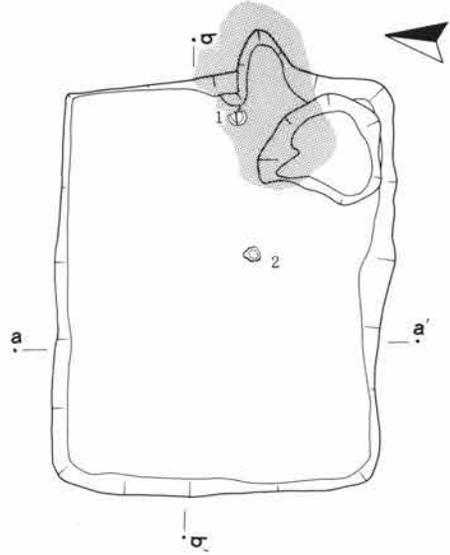
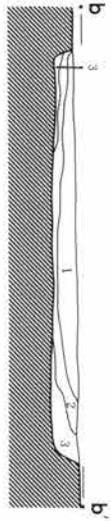
器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	床面直上 ほぼ完形	1	口径 25.2 胴径 25.8 底径 8.8 器高 26.5	口縁部僅か外反、頸部「く」の字状胴部上位に最大径。球形ぎみ。丸底。	外面口縁部指押さえ後、横ナデ。頸部へ、胴部へへラケズリ。内面胴部に輪積痕。全体軽いナデ。	砂粒含む。酸化、軟質。橙色。胴部外面スス附着。底部外面黒斑。
杯 土師器	カマド内 完形	2	口径 14.3 器高 4.6	口縁部直立、口縁体部緩い稜。丸底。	口縁部内外面横ナデ、体部横底部不定へラケズリ。	砂粒含む。酸化、硬質。にぶい褐色。底部一部スス附着。
杯 須恵器	23cm上 1/2残存	3	口径 13.9 底径 9.2 器高 3.8	口縁部僅かに外反ぎみで、体部内反ぎみに底部に移る。底部稜なし、平底だが不均一。	口縁体部内外面回転横ナデ、底部回転糸切り後、粗いへラナデ。	砂粒含む。還元、硬質。灰色。

第4節 古代の竪穴住居址

杯 須恵器	覆土 底部ノ残	4	体部直線上に外傾、底部周縁に環状沈線。	内外面回転横ナデ、底部回転糸切り後、沈線外側ナデ。	砂粒含む。還元、硬質。灰色。
----------	------------	---	---------------------	---------------------------	----------------

20号住居址出土土器観察表

1. 暗褐色土 (C軽石を含む)
2. 暗褐色土 (C軽石を多く含む)
3. 暗褐色土 (C軽石を多く含み、暗い)
4. 暗褐色土 (焼土少量混合)
5. 暗褐色土
6. 暗褐色土と炭化物・焼土の混合
7. 暗褐色土 (焼土を少量含む)



第96図 23号住居址

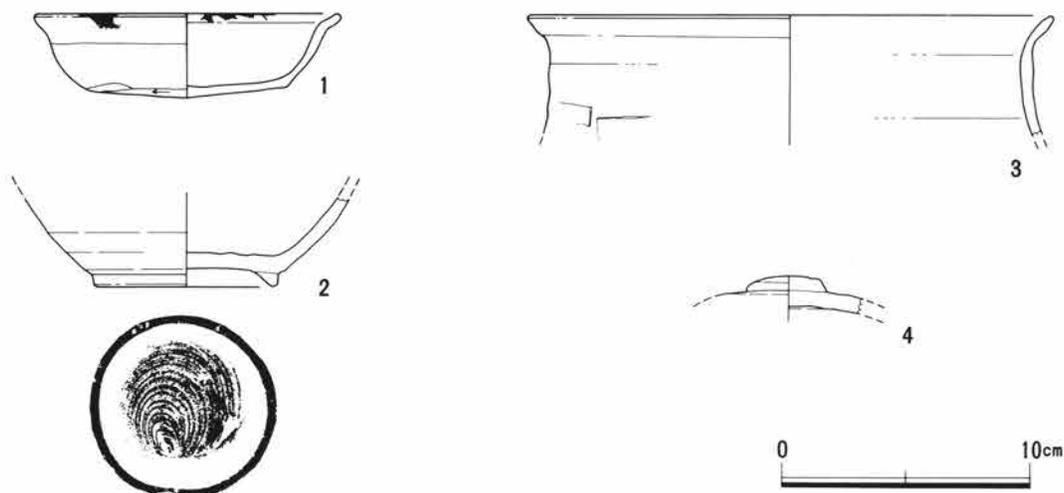
第II章 検出された遺構と遺物

23号住居址（3区）〔第96・97図・図版24（遺構）・図版91（遺物）〕

第4層黒褐色土面にて確認された。規模は長辺3.3m、短辺2.6mで、長方形を呈する。壁は傾斜をもって立ちあがっており、傾斜の大きい部分と小さい部分とがある。床面は第4層暗褐色土中に造られているが、中央部およびカマド附近を除いて比較的軟弱である。柱穴および壁周溝は無い。

カマドは東壁の中央やや南寄りに位置し、壁および床面を皿状に掘りくぼめており、底面には焼土が残存していた。貯蔵穴状のピットは、カマド焚口部右脇に壁に接して存在する。不整形を呈し、規模はやや大きい。覆土中には焼土を含み、灰・炭化物の混合したものが上層に存在した。

出土遺物として、カマド焚口部左脇より土師器杯(1)が潰れた状態で、また住居址中央ややカマド寄りから須恵器碗(2)の底部が発見されている。



第97図 23号住居址出土遺物

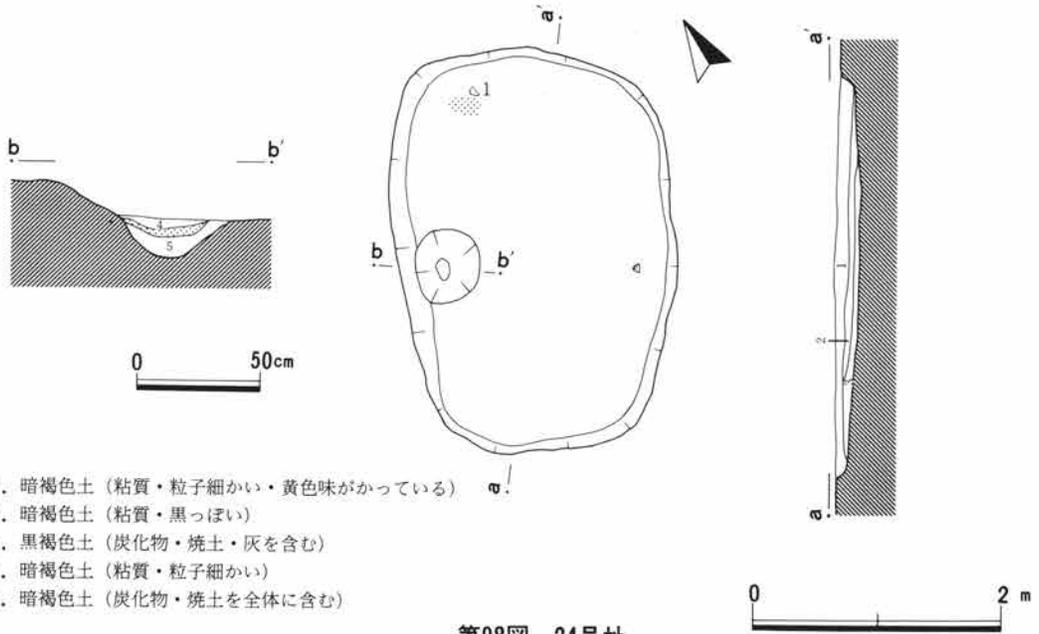
器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	カマド前 完形	1	口径 12.4 底径 8.2 器高 3.3	口唇部波状に歪み、口縁外反。体部歪んで内反。平底。体部・底部間稜。	口縁部内外面横ナデ。体部指ナデ後、底部不定ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化、やや硬質。橙色。口唇部スス付着。
碗 須恵器	18cm上 底部のみ	2	底径 7.5	体部緩く内反。高台断面三角形状外向き。	口縁体部内外面回転横ナデ。底部右回転糸切り後高台貼付。	砂粒気泡含む。還元やや軟質。灰色。
甕 土師器	覆土 口縁小片	3	口径 21.2	口縁部強く外傾。頸部直立。胴部緩く外傾。器壁薄い。	外面口縁部頸部横ナデ、胴部横ヘラケズリ。内面横ナデ。	砂粒少量。酸化、硬質。におい赤褐色。
蓋 須恵器	覆土 つまみ部	4	つまみ径 3.4	扁平なボタン状つまみ。	外面 つまみ接合痕。 内面 右回転ロクロ痕。	砂粒含む。還元、硬質。灰色。

23号住居址出土土器観察表

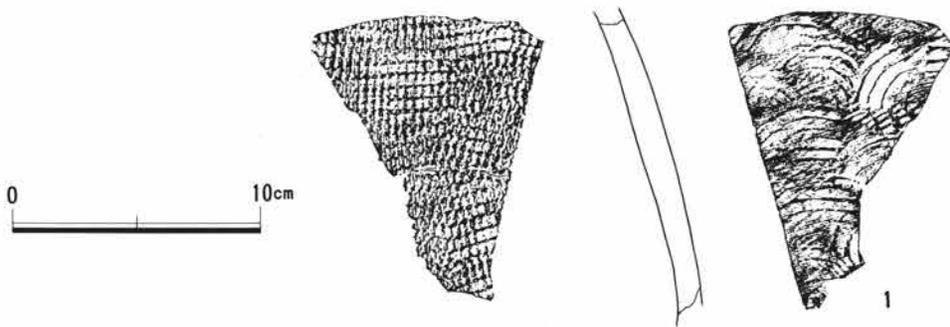
24号址（3区）〔第98・99図・図版25（遺構）〕

第4層黒褐色土層中において確認。長軸3.2m、短軸2.25m、深さ20cmの不整隅丸長方形を呈す。壁は傾斜をもって立ちあがる。底面は第4層黒褐色土を掘り込んでいるが、住居址床面にみられるような貼り床は存在しない。また底面は、中央部が壁周辺よりも5～10cm深くなっており、周辺部から中央部へと緩やかに傾斜している。

東壁に接して60cm×55cm、深さ15cmのピットがある。ピット底面には、炭化物、焼土粒を包む暗褐色土の上に白色の灰層が覆っていた。底面直上より須恵器甕の小片が1点出土しているが、他に出土遺物はみられなかった。



第98図 24号址



第99図 24号址出土遺物

第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 須恵器	底面直上	1		器壁厚く、緩く内反。	外面格子状叩き痕。内面格子状後、青海波状アテ痕。	砂粒少ない。還元、硬質。灰白色。

24号址出土土器観察表

25号住居址（3区）〔第100図・図版25（遺構）〕

第4層黒褐色土面において確認された。26号住居址の埋没面上に造られている。本住居址の西壁は推定3.1mであり、隅丸方形と考えられる。壁は傾斜をもって立ち上がっており、床面は暗褐色粘質土の貼り床であった。柱穴、壁周溝は確認されていない。カマドは調査区域外と考えられる。

遺物は、土師器の小破片が覆土中より僅かに出土しているが、住居廃棄後の流入であるとみられる。

26号住居址（3区）〔第100・101図・図版25（遺構）・図版91（遺物）〕

26号住居址は、25号住居址の床面下で確認された。住居全体の半分以上が調査区域外と考えられる。規模は不明であるが、西壁約3.4mのやや隅の丸い方形を呈する。床面は第4層下部で、ローム漸移層近くまで掘り込み、そのまま床面としている。壁周溝は無く、カマドは調査区域外と推定される。西北コーナー部近くに直径30cm、深さ25cmのピットが存在するが、性格は不明である。

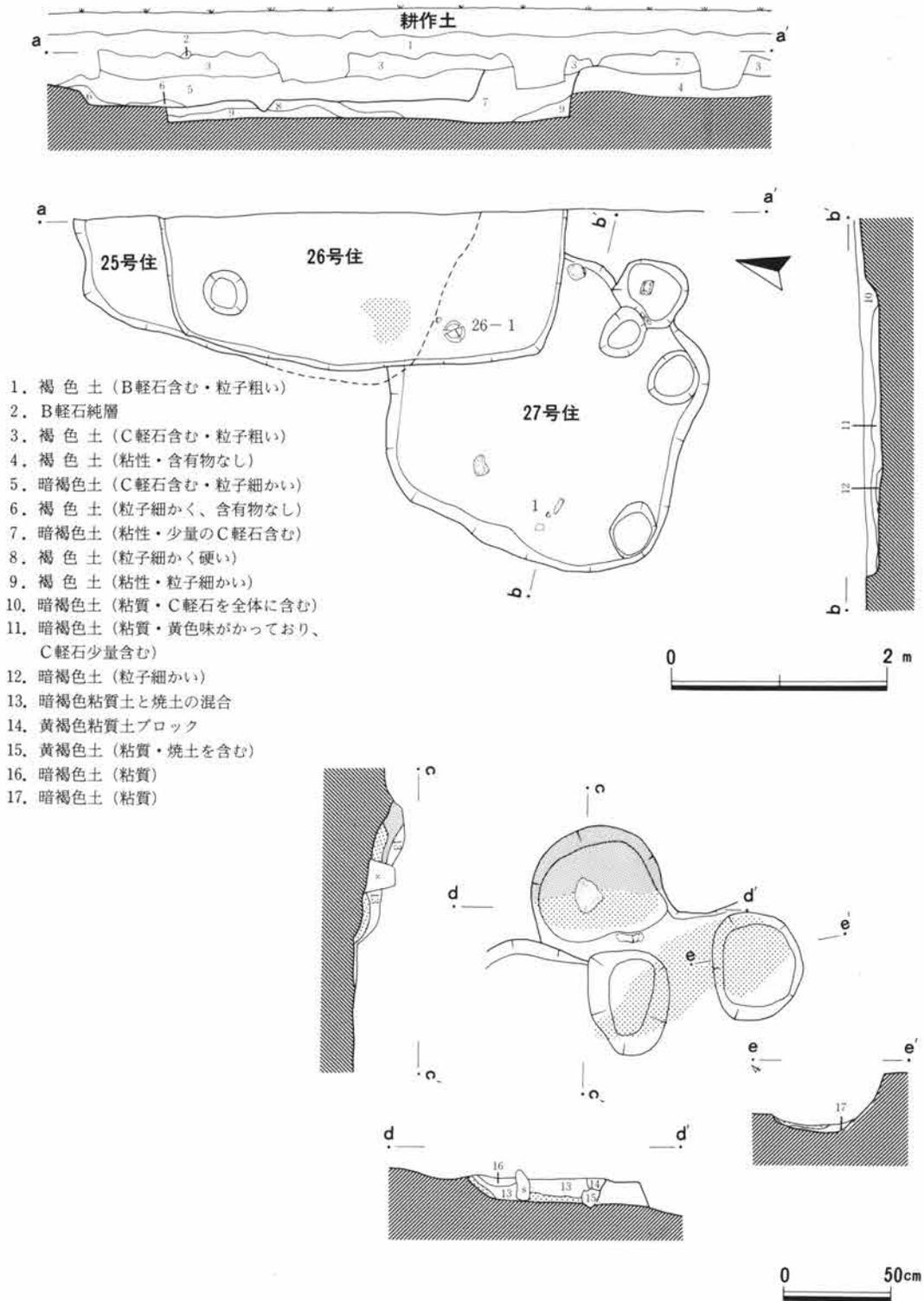
出土遺物として、西壁近くの床面直上より、土師器杯が発見されている。

27号住居址（3区）〔第100・102図・図版25（遺構）・図版92（遺物）〕

第4層黒褐色土面において確認された。北側の一部を26号住居址に切られている。規模は東西2.6m、南北2.8mで、やや隅丸長方形を呈する。壁は傾斜をもって立ち上がっており、また床面は粘質土で貼り床しているものの全体に軟弱で、カマド付近においてのみやや堅いという状況であった。

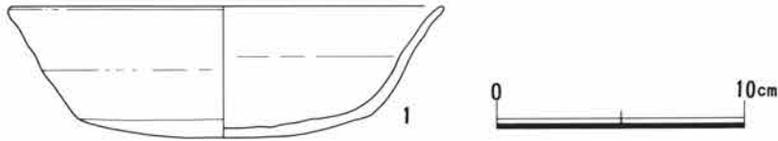
柱穴および壁周溝は確認されていない。カマドは東壁中央よりやや南寄りにあり、床面および壁を皿状に掘りくぼめ、底部部に方柱状に面取りした軽石を立てて支脚としていた。焚口は床面を約20cmほど掘り込んでおり、焼土、炭化物が若干存在した。また焚口付近の床面上には、炭化物が堆積していた。

カマド内より鉄製鎌、覆土中より土師器杯片が若干出土している。



第100図 25・26・27号住居址

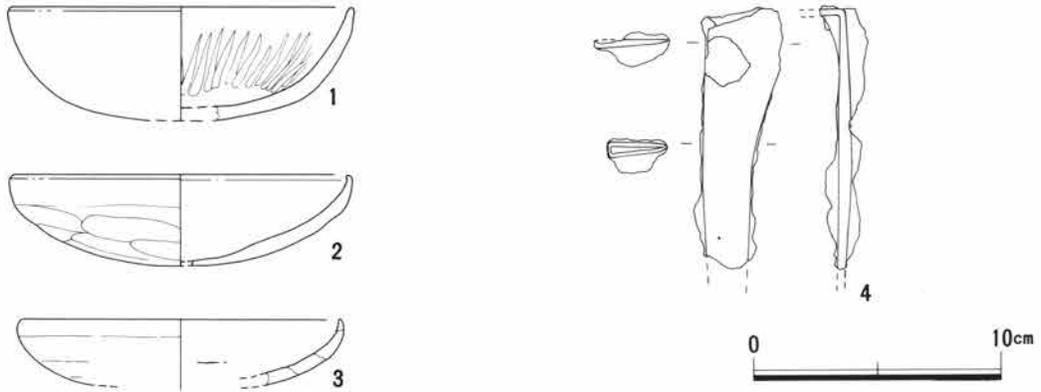
第II章 検出された遺構と遺物



第101図 26号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	2cm上 完形	1	口径 17.3 底径 10.8 器高 5.3	口縁へ体部緩やかに外傾。口縁一部歪んで外反。底部の稜緩く丸みをもった平底。	口縁部内外面横ナデ。体部横底部不定ヘラケズリ、磨滅。内面ヘラナデ。	砂粒含む。還元後、酸化、やや軟質。橙色。

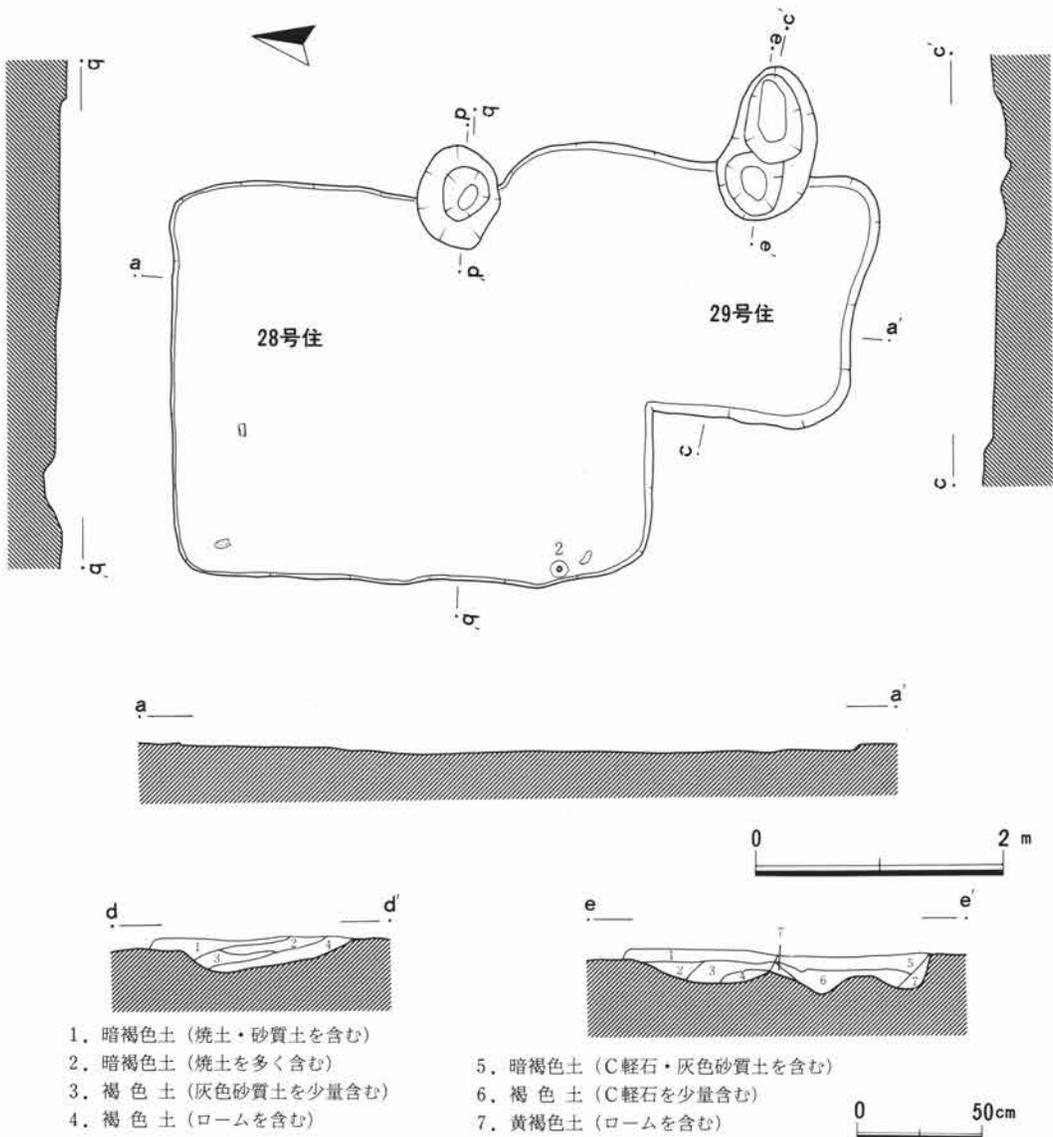
26号住居址出土土器観察表



第102図 27号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	5cm上 1/2残存	1	口径 13.8 器高 4.7	口縁部僅かに内反ぎみに直立。体部内反。極めて緩い稜をもって底部さらに内反、丸底。	口縁体部内外面横ナデ。底部不定ヘラケズリ、磨滅。内面放射状ヘラミガキ暗文。	砂粒少ない。中性炎、硬質。灰黄色。
杯 土師器	覆土 1/2残存	2	口径 13.1	口縁部僅かに内反ぎみに直立。稜なし。体部へ底部大きく内反。丸底。	口縁部内面横ナデ。体部指ナデ。底部不定ヘラケズリ、磨滅。内面指頭痕。	砂粒気泡含む。酸化、やや硬質。にぶい橙色。
杯 土師器	覆土 1/2以下残存	3	口径 13.0	口縁部内反ぎみに直立、稜なし。体部へ底部大きく内反。	口縁部内外面横ナデ。体部ナデ、底部不定ヘラケズリ。外面黒斑。	砂粒含む。酸化、硬質。にぶい橙色。
鎌 鉄製	カマド内	4	長さ 10.8 幅 3.3 厚さ 1.6	断面三角形。片側先端を短かく折り曲げ、刃部は孤状傾向。中空。	刃部先端サビ多いが、欠損と思われる。	

27号住居址出土遺物観察表



第103図 28・29号住居址

28号住居址（2区）〔第103・104図・図版26（遺構）・図版92（遺物）〕

第4層黒褐色土面にて確認された。29号住居址との重複関係による新旧は不明である。

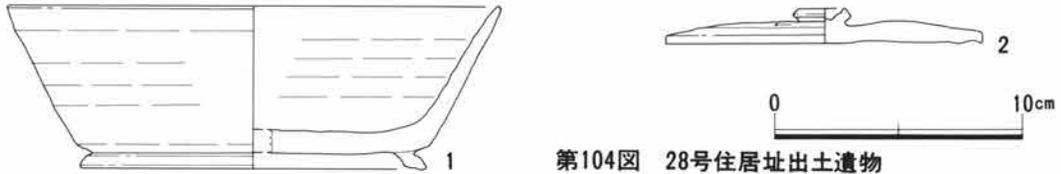
規模は南北約3.9m・東西3.1mで、平面形は隅丸長方形を呈すると推定できる。壁の残りは悪く、立ち上りは約5cm、床面レベルも29号住居址とほぼ同じであり、重複する南東コーナー付近は確認できなかった。床面は黒褐色土中に構築されており、やや軟弱である。竪穴内に柱穴はなく、

第II章 検出された遺構と遺物

壁周溝も確認できなかった。

カマドは東壁に設置されており、確認面での張り出しは約45cmである。残存状態は非常に悪く、袖は確認できず、床から約10cmの掘り込みと焼土層が確認できただけである。貯蔵穴はない。

遺物は少ないが、須恵器の高台付椀・蓋が床面上より出土している。



第104図 28号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
椀 須恵器	床面直上 1/2残存	1	口径 20.0 底径 14.0 器高 6.5	体部直線状に外傾。高台断面外傾する菱形で、下面平坦。	体部内外面回転横ナデ。底部右回転ヘラ切り後、高台貼付。接合部横ナデ。	砂粒石英含む。還元、硬質。灰色。
蓋 須恵器	床面直上 完形	2	口径 13.0 つまみ径 2.4 器高 1.4	ボタン状つまみ。上面僅かに膨らみ、端部稜明瞭。下面水平。身受け微小。	上面回転横ナデ後、左回転ヘラケズリ。つまみ接合部回転横ナデ。下面左回転横ナデ。	砂粒含む。還元、硬質。灰色。

28号住居址出土土器観察表

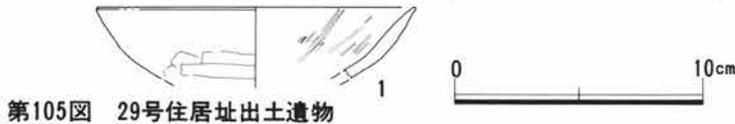
29号住居址（2区）〔第103・105図・図版26（遺構）〕

第4層黒褐色土面において確認された。28号住居址との重複関係による新旧は不明である。

残存状態は非常に悪く、特に28号住居址も重複する北東部分は確認できなかったが、南北約3m・東西約2mの規模になるものと推定できる。平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。壁の残りは悪く、立ち上りは約5cmであり、重複部分は確認できなかった。床面は黒色粘質土中に構築されており、やや軟弱である。竪穴内に柱穴はなく、壁周溝もない。

カマドは東壁に設置されており、残存状態は非常に悪い。袖は確認できず、僅か焼土を含む層が、煙道部と推定される部分から検出できただけである。カマドの落ち込みが二ヶ所あることから、作り換えの可能性がある。

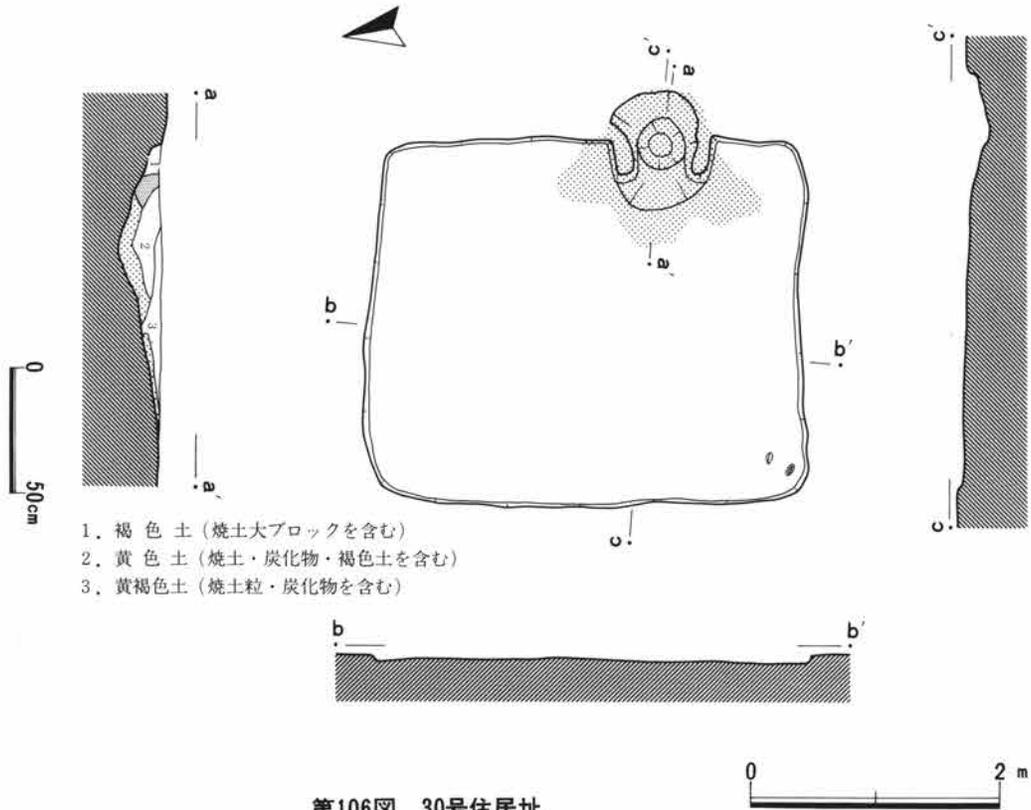
出土遺物は少なく、土師器の杯片が覆土中より発見されているのみである。



第105図 29号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	覆土 口縁小片	1	口径 12.8	口唇部鋭く、体部緩く内反。口縁部、体部間緩い稜。	外面体部下位ヘラケズリ。内面横ナデ後、放射状ミガキ暗文。	砂粒少量。酸化、硬質。にぶい橙色。

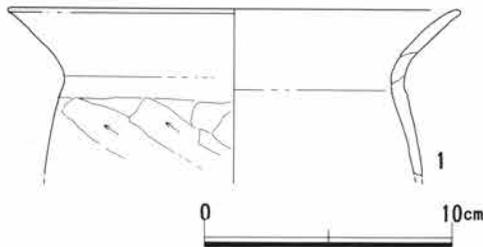
29号住居址出土土器観察表



第106図 30号住居址

30号住居址（2区）〔第106.107図・図版26（遺構）〕

第4層黒褐色土面において確認された。規模は南北約3.5m、東西約2.9mで、平面形は隅丸長方形を呈する。壁の残存状態は悪く、約5cmの立ち上りが確認できただけである。床面は黒褐色粘質土中に構築されており、やや軟弱である。竪穴内に柱穴はなく、壁周溝もない。



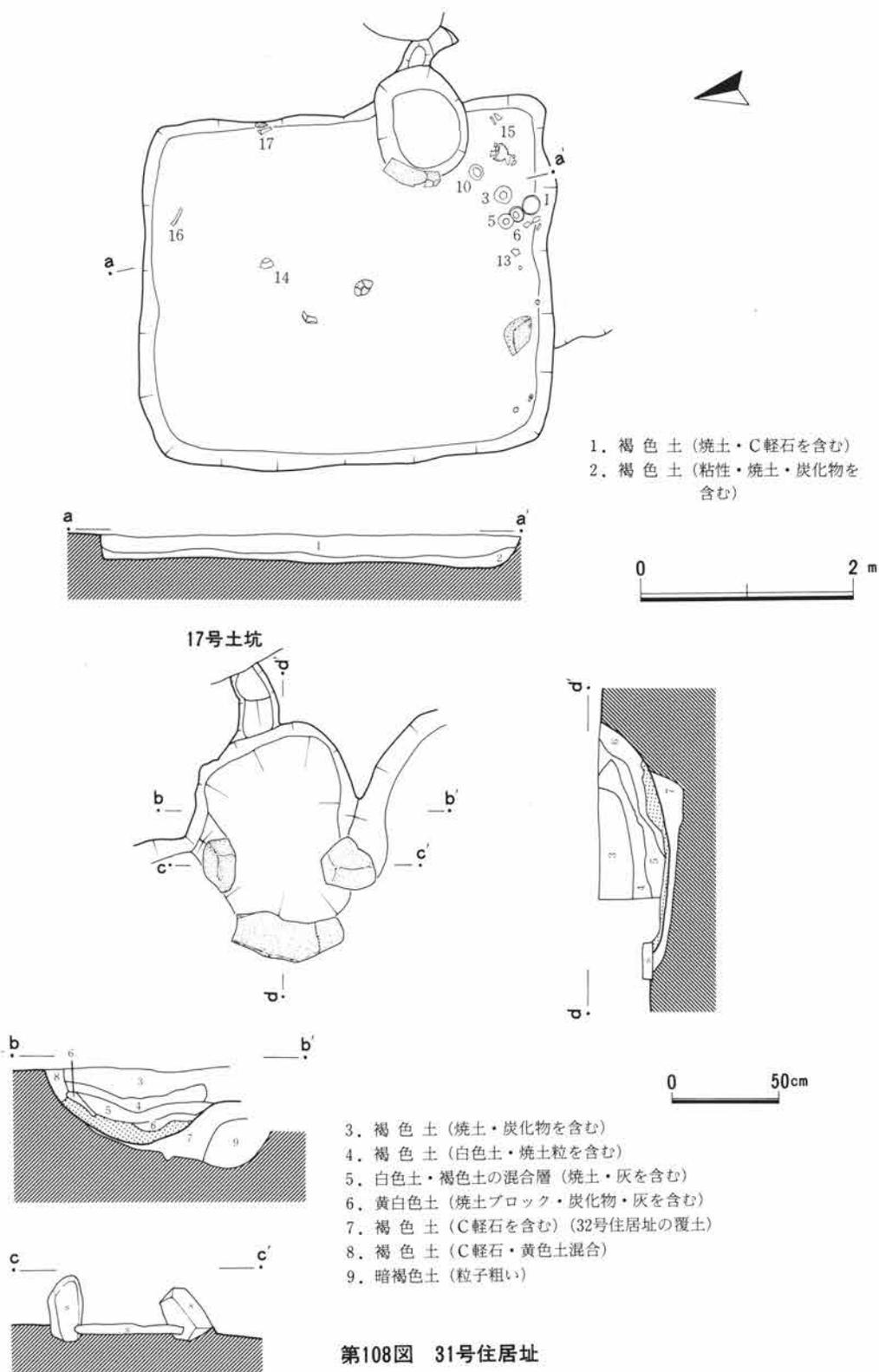
第107図 30号住居址出土遺物

カマドは東壁に設置されており、張り出しは約45cmである。残存状態は悪いが、袖の痕跡、掘り込み及び焼土層・炭火物層が確認できた。貯蔵穴はない。

遺物は非常に少なく、カマド内より、土師器甕片が発見されているだけである。

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	カマド内 口縁部	1	口径 13.2	口縁大きく外傾、頸部くびれ 体部僅か膨らむ。器内は薄い。	外面口縁・頸部横ナデ。体部 へへら削り。内面体部へら当。	砂粒含む。酸化、硬 質。橙色。

30号住居址出土土器観察表



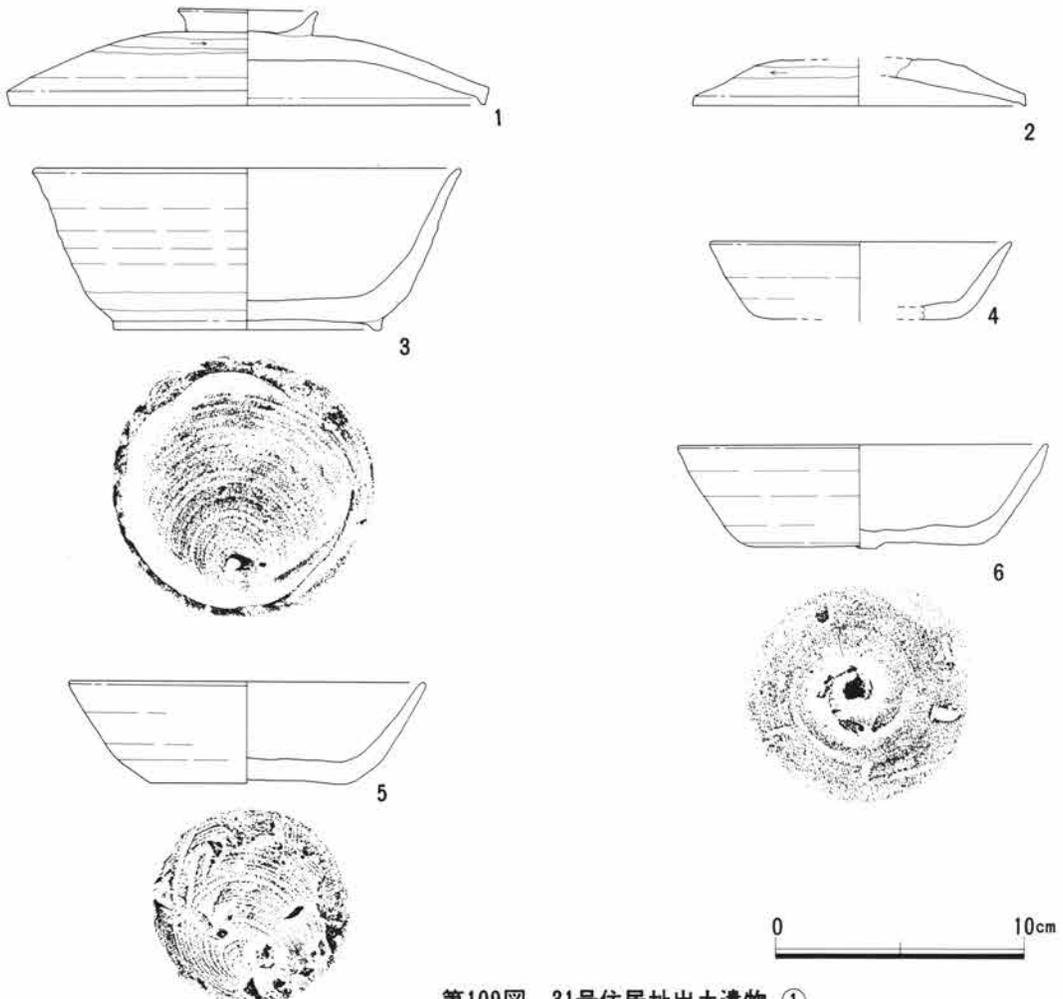
31号住居址（2区）〔第108～110図・図版27（遺構）・図版92（遺物）〕

第4層黒褐色土面において確認された。32号住居址と重複する。新旧関係は、セクションによる土層の相違から当住居址の方が新しいが、大きな時間差はないものと推定できる。

規模は南北約3.8m・東西約3.5mで、平面形は隅丸長方形を呈する。壁の残存状態は比較的良好であり、立ち上りは約20cm～30cmである。床面は黒褐色粘質土中に構築されており、カマド付近を除き、やや軟弱である。竪穴内に柱穴はなく、壁周溝もない。

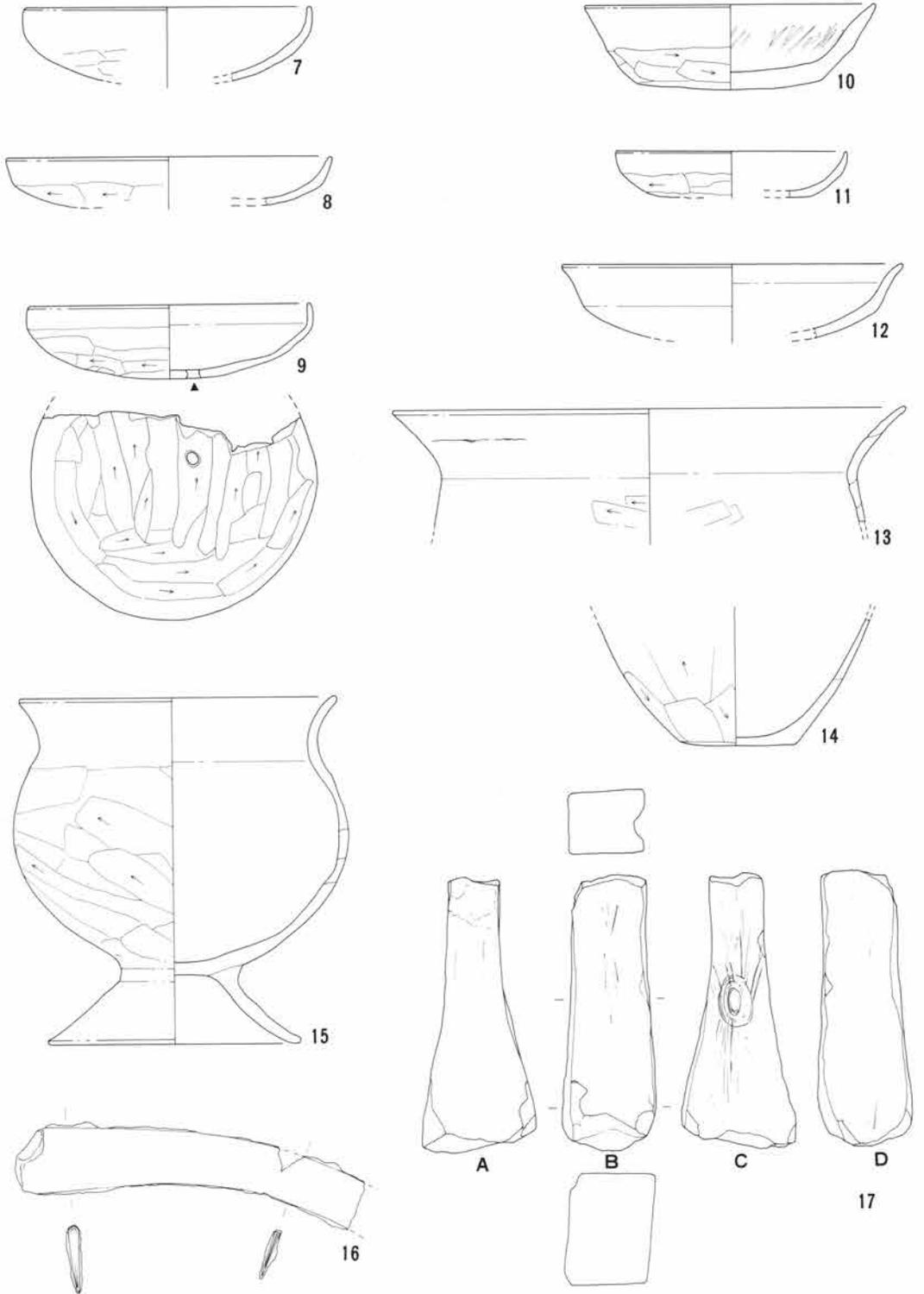
カマドは東壁に構築されており、張り出しは約50cmである。残存状態はやや悪いが、袖の一部及び掘り込み部分が確認できた。袖は袖石と粘質土を組み合わせで構築しており、壁際の両袖石が確認できた。また、カマド落ち込み部分の西端から、天井に使用されたと推定できる石が検出できた。また、掘り込み部分からは、焼土層・灰層を確認した。貯蔵穴はない。

遺物は、土師器の台付甕・甕・杯・須恵器の高台付椀・椀・杯・蓋等が、カマドおよび床面付近より出土している。



第109図 31号住居址出土遺物 ①

第II章 検出された遺構と遺物



第110図 31号住居址出土遺物②

0 10cm

第4節 古代の竪穴住居址

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
蓋 須恵器	床面直上 ほぼ完形	1	鈕径 5.6 口径 19.0 器高 3.8	鈕扁平凹形。端部稜明瞭やや内傾、断面三角形状で身受けになる。体部下位軽い稜。	外面体部上位右回転ヘラケズリ。下位回転横ナデ。つまみ貼付。内面右回転横ナデ。	微砂粒含む。還元、硬質。灰色。
蓋 須恵器	覆土 1/2残存	2	口径 13.4	体部上位水平。端部直立し稜明瞭。内面凹部により身受け。	外面体部上位回転ヘラケズリ。下位、内面回転横ナデ。	微砂粒含む。還元やや硬質。灰色。
椀 須恵器	床面直上 完形	3	口径 17.2 底径 10.6 器高 6.5	口縁部僅かに外反。体部直線状。高台小さく断面台形。体部下位、底部器壁厚い。	口縁部、体部内外面回転横ナデ。底部右回転糸切り後、未調整。高台貼付。	微砂粒含む。還元、硬質。灰色。
杯 須恵器	覆土 小片	4	器高 3.1	体部直線状外傾。中位に軽い稜。平底。	口縁部、体部内外面回転横ナデ。底部ヘラナデ調整。	微砂粒含む。還元、硬質。灰色。
杯 須恵器	床面直上 完形	5	口径 14.4 底径 7.9 器高 4.1	口縁部～体部上位直線状外傾下位内湾。平底。底部器壁厚い。	口縁部、体部内外面回転横ナデ。底部右回転糸切り後、未調整。底部、体部外面に自然釉。	微砂粒雲母含む。還元、硬質。灰色。
杯 須恵器	床面直上 完形	6	口径 14.8 底径 9.4 器高 4.0	体部大きく外傾。平底。器壁厚い。	口縁部・体部内外面右回転横ナデ。底部回転ヘラ切り後、ナデ調整。切り離し痕残る。	砂粒少量。還元、硬質。灰色。
杯 土師器	床下 小片	7	口径 13.3	口縁部内湾ぎみに直立。口縁部、体部間緩い稜。丸底。	口縁部内外面横ナデ。体部外面横ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒多量。酸化、軟質。橙色。
杯 土師器	カマド内 小片	8	口径 15.1	口縁部外傾ぎみに直立。口縁部体部間緩い稜。浅い丸底。	口縁部内外面、体部内面横ナデ。体部外面横ヘラケズリ。	砂粒多量。酸化、軟質。にぶい橙色。
杯 土師器	カマド内 1/2残存	9	口径 13.5 器高 3.4	口縁部内湾ぎみに直立。口縁部体部間緩い稜。丸底中央焼成後穿孔。内面やや凹凸。	口縁部内外面横ナデ。外面体部、底部一定方向ヘラケズリ。内面指当て後、横ナデ。	砂粒少量。酸化、軟質。橙色。蓋等に転用か？
杯 土師器	床面直上 完形	10	口径 13.7 底径 8.4 器高 3.9	体部直線状で中位に軽い稜。底部稜明瞭で平底。口縁部内側でやや外反。底部器壁厚い。	口縁部内外面回転横ナデ。外面体部横方向ヘラケズリ、底部不定ヘラケズリ。内面横ナデ後、放射状ミガキの暗文。	砂粒・石英含む。酸化、硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 小片	11	口径 10.7	体部緩いカーブで短く直立し口縁部に至る。口縁部体部間緩い稜。	口縁部内外面、体部内面横ナデ、体部外面横ヘラケズリ。	砂粒少量。酸化、硬質。褐色。
杯 土師器	覆土 小片	12	口径 16.0	口縁部外反。体部緩いカーブで丸底。	口縁部内外面、体部内面横ナデ。体部外面横ヘラケズリ。	砂粒多量。酸化後、中性軟質。にぶい橙色。
甕 土師器	床面直上 口縁小片	13	口径 24.0	口縁部外反。胴部膨らみ傾向。器壁薄い。	口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラケズリ。輪積。	砂粒雲母含む。酸化、軟質。橙色。
甕 土師器	床面直上 底部1/2残	14	底径 6.1	体部内湾ぎみに外傾。底部やや丸底平面多角形。器壁薄い。	体部ヘラケズリ。底部一定方向ヘラケズリ。内面ヘラ調整。	微砂粒含む。酸化、軟質。褐灰色。

第II章 検出された遺構と遺物

台付甕 土師器	床面 %残存	15	胴径 15.6 器高 16.0	口縁部緩く外反。胴部球形。 台部「八」の字状に開く。	口縁部頸部内外面横ナデ。胴部へラケズリ。台部接合部横ナデ。内面へラ調整。	砂粒含む。酸化、軟質。にぶい赤褐色胴部外面黒斑。
鎌 鉄製	覆土	16	長さ 16.3 幅 3.3 厚さ 1.9	断面三角形。片側先端やや折り曲がり全体に内反。内側に刃部。中空。		片側欠損。基部の形状不明。サビ多い。
砥石 流紋岩	覆土	17	長さ 12.7 幅5.2×3.9	A、B、D各面は使用により外反しており、C面はほぼ平坦で中央に2×1.5cm、深さ0.5cmの小孔があく。B・D面は極めて平滑で、継続的な使用が見られるが、A面はやや粗面。C面には線状の接地痕残る。		A面使用の後に、B・D面の使用が行われたと考えられる。

31号住居址出土遺物観察表

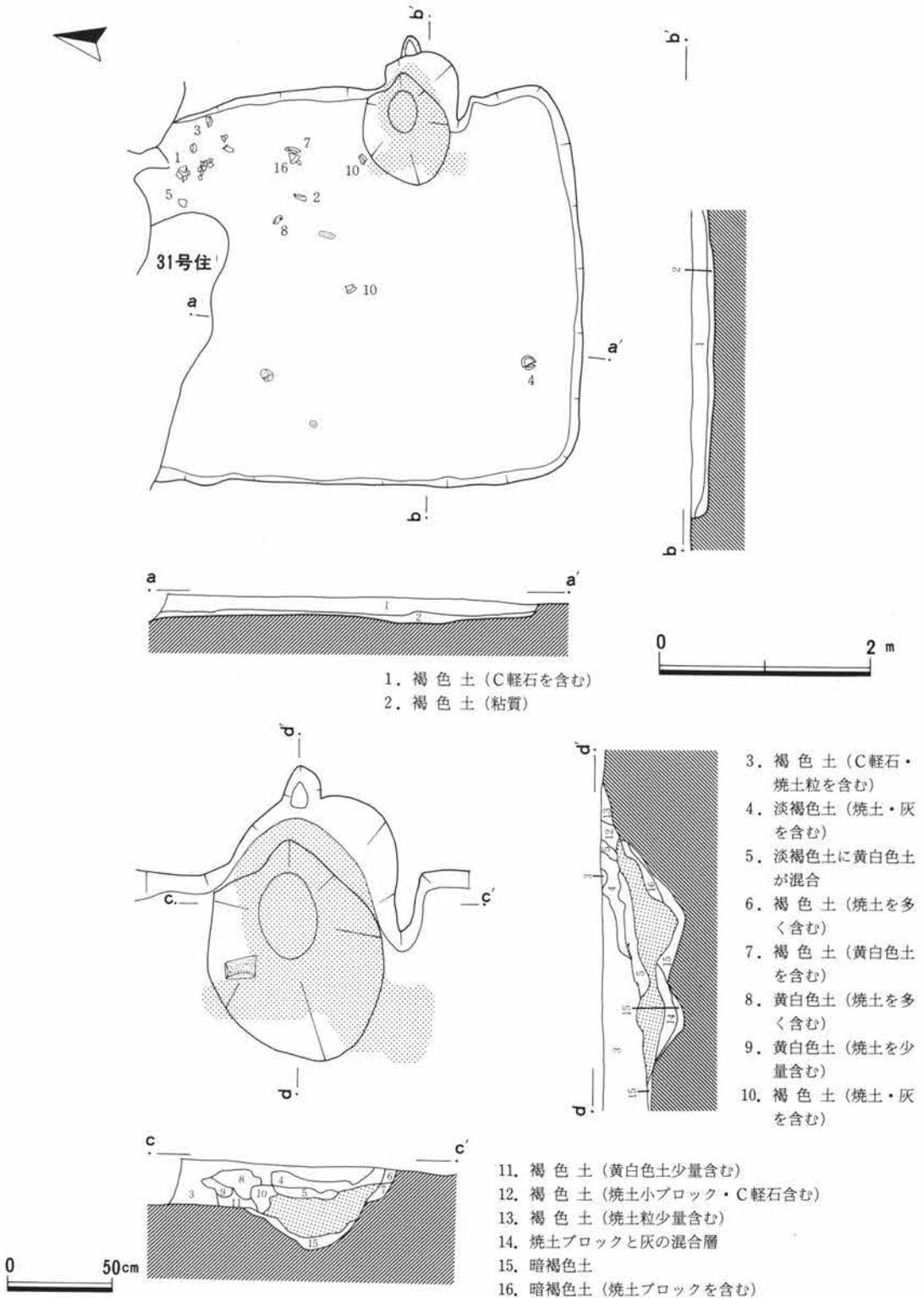
32号住居址（2区）〔第111・112図・図版28（遺構）・図版93（遺物）〕

第4層黒褐色土面において確認された。31号住居址と重複している。新旧関係はセクションによる土層の相違から、当住居址の方が古いと推定しているが、大きな時間差はない。

規模は、北壁部分で重複しているので南北は推定になるが約4m・東西は約3.6mで、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。壁の残存状態は重複する北壁部分を除いて、やや不良であるが確認でき、立ち上りは約15cm～20cmである。床は黒褐色粘質土中に構築されており、やや軟弱である。竪穴内に柱穴はなく、壁周溝もない。

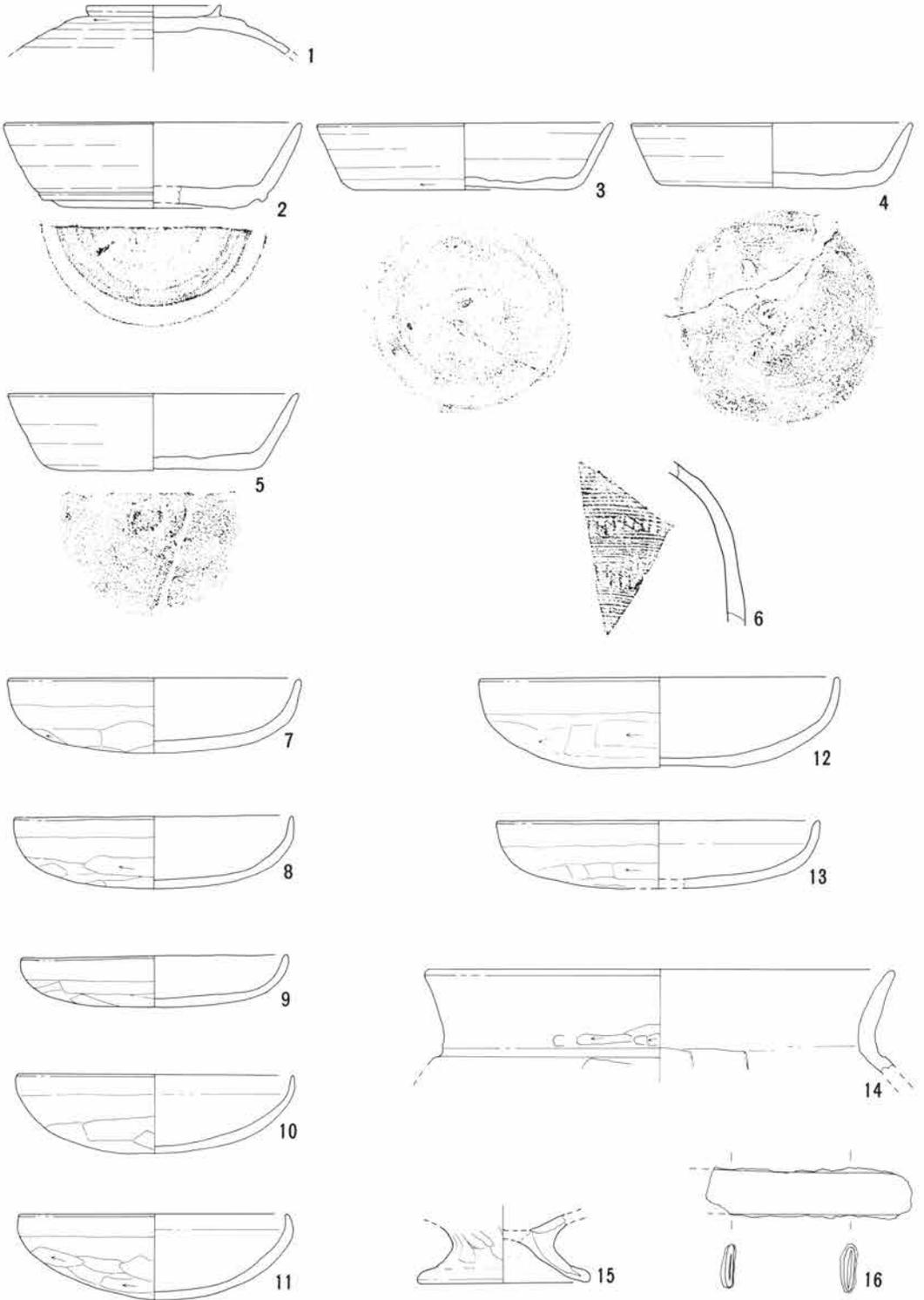
カマドは東壁に設置されており、張り出しは約40cmである。カマドの残存状態は悪く、袖は右側の痕跡が確認できただけであった。また、掘り込み部分からは灰層・焼土層及び袖の崩れたものと推定できる黄白色土が確認できた。

遺物は土師器の台付甕・甕・杯・須恵器の高台付杯・杯・蓋・提瓶等がカマド内および床面附近より出土している。また覆土中には、性格不明の鉄製品の破片が存在した。



第111図 32号住居址

第II章 検出された遺構と遺物



第112図 32号住居址出土遺物



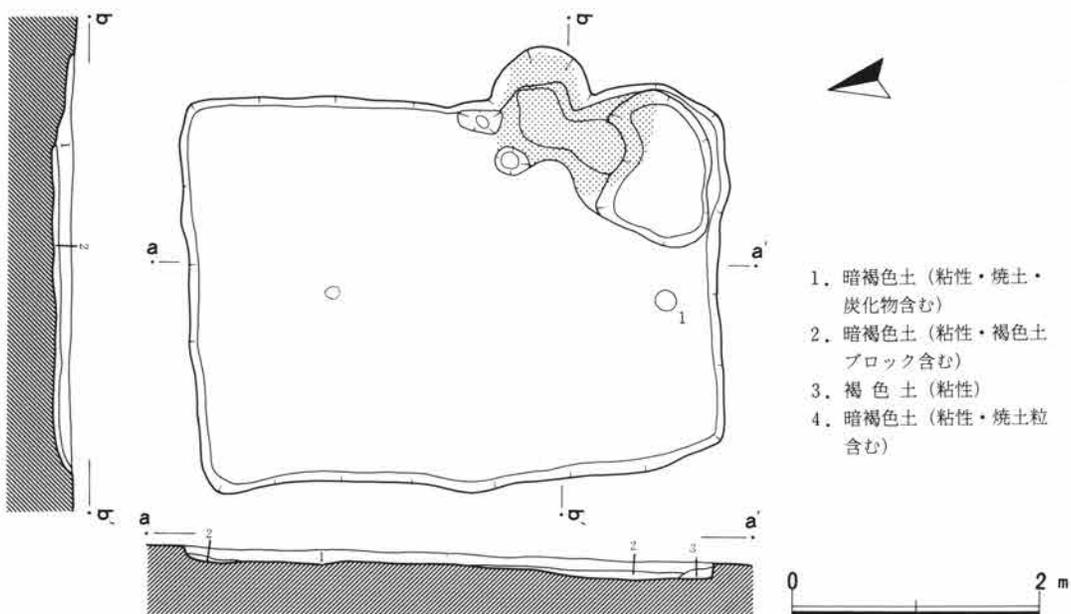
第4節 古代の竪穴住居址

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
蓋 須恵器	床面直上 1/2残存	1	つまみ径 5.8	つまみ偏平凹形で形骸化。体 部内反傾向で器高は高い。	体部上面回転横ナデ後、一部 回転ヘラケズリ、内面回転横 ナデ。	砂粒少ない。還元、 硬質。灰色。
杯 須恵器	床面直上 1/3残存	2	口径 13.9 底径 8.7 器高 4.0	体部僅かに直線状に外傾。体 部下位突帯。平底で厚い。	体部内外面・底部内面回転横 ナデ。底部回転ヘラ切り後、 周縁・体部下擬高台削り出す。	砂粒少なく気泡多 い。還元、硬質。 外面灰色、自然釉。 内面灰黄褐色。
杯 須恵器	床面下 ほぼ完形	3	口径 13.7 底径 10.0 器高 3.1	体部直線状に外傾。底部との 境稜なし。器壁厚い。平底。 浅い。	体部内外面・底部内面右回転 横ナデ。底部右回転ヘラ切り 後、周縁回転ヘラケズリ調整。	砂粒少ない。還元 やや硬質。灰色。
杯 須恵器	床面直上 1/3残存	4	口径 13.2 底径 10.2 器高 3.0	体部直線状に外傾。底部との 境稜なし。平底。浅い。	体部内外面・底部内面右回転 横ナデ。底部回転ヘラ切り後、 手持ちヘラケズリ・ナデ調整。	微砂粒・気泡含む。 還元やや軟質。灰 白色。
杯 須恵器	床面直上 1/2残存	5	口径 13.4 底径 10.0 器高 3.5	体部直線状に外傾。底部との 境稜なし。平底。浅い。	体部内外面・底部内面右回転 横ナデ。底部回転ヘラ切り後、 ナデ調整。	砂粒少なく気泡多 い。還元やや軟質。 灰白色。
提 瓶 須恵器	カマド内 小片	6		器壁厚く、緩く内反。	外面カキ目。内面回転横ナデ。	砂粒少量。酸化や や硬質。にぶい橙。
杯 土師器	床面直上 1/3残存	7	口径 13.5 器高 3.4	口縁部やや外傾、ゆるい稜。 やや器壁厚い。平底。	口縁部内外面横ナデ。体部・ 底部横ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化、 硬質。にぶい褐色。
杯 土師器	床面直上 1/4残存	8	口径 12.9 器高 3.3	口縁部内反ぎみに、やや外傾。 口唇部歪む。平底ぎみ。	口縁部内外面横ナデ。体部、 底部不定ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒含む。酸化や や軟質。橙色。
杯 土師器	カマド内 1/2残存	9	口径 12.3 器高 2.3	口縁部外傾。口縁体部稜。口 唇部歪む。平底。浅い。	口縁部内外面横ナデ。体部横 底部縦横ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒少量。酸化や や硬質。にぶい橙。
杯 土師器	床面直上 ほぼ完形	10	口径 12.8 器高 3.6	口縁部僅かに内反ぎみ直立。稜 なく平底ぎみ。楕円形。	口縁部横ナデ。体部・底部ヘ ラ削り。内面ナデ。ヘラ調整。	砂粒含む。酸化や や硬質。明褐色。
杯 土師器	覆土 1/3残存	11	口径 12.6 器高 3.9	口縁部短かく内傾。口縁体部 緩い稜。丸底。深い。	口縁部横ナデ。体部横・底部 不定ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒含む。酸化や や軟質。橙色。
杯 土師器	床面直上 1/3残存	12	口径 16.5 器高4.1	口縁部内反ぎみに直立。口縁 体部緩い稜。平底ぎみ。	口縁部横ナデ。体部横・底部 不定ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒石英含む。酸 化やや軟質。橙色。
杯 土師器	覆土 1/4残存	13	口径 14.9	口縁部直線状やや外傾。口唇 やや歪む。平底ぎみ。	口縁部横ナデ。体部横・底部 不定ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒含む。酸化や や硬質。にぶい橙。
甕 土師器	カマド内 口縁小片	14	口径 21.6	口縁部外反ぎみ。頸部稜明瞭。 体部外傾ぎみ。器壁やや厚い。	口縁部横ナデ。体部外面横ヘ ラケズリ。	微砂粒含む。酸化、 硬質。赤褐色。
台付甕 土師器	カマド内 台部1/2残	15	底径 80	短かく「八」の字状に開き、 端部厚い。	断面に胴部との接合痕。端部 折り返し。内外面横ナデ。	砂粒少量。酸化、硬 質。褐灰色。黒斑。

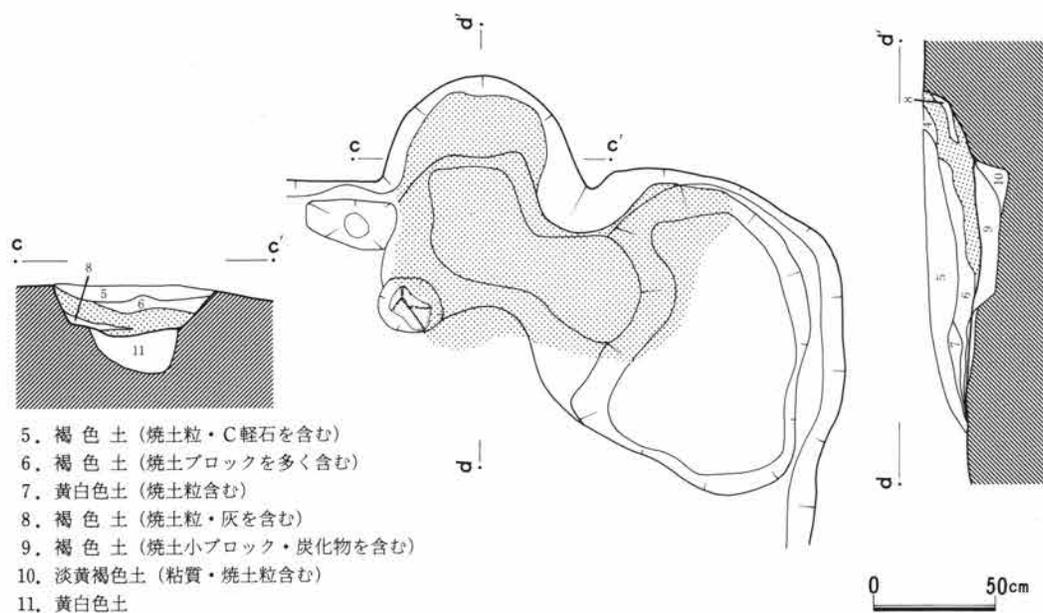
第II章 検出された遺構と遺物

不明鉄製 品	覆土	16	長さ 9.5 幅 2.2 厚さ 1.0	断面楕円形状で先端丸く扁平な長方形形状。中空。片側欠損。		
-----------	----	----	---------------------------	------------------------------	--	--

32号住居址出土土器観察表



1. 暗褐色土（粘性・焼土・炭化物含む）
2. 暗褐色土（粘性・褐色土ブロック含む）
3. 褐色土（粘性）
4. 暗褐色土（粘性・焼土粒含む）



5. 褐色土（焼土粒・C軽石を含む）
6. 褐色土（焼土ブロックを多く含む）
7. 黄白色土（焼土粒含む）
8. 褐色土（焼土粒・灰を含む）
9. 褐色土（焼土小ブロック・炭化物を含む）
10. 淡黄褐色土（粘質・焼土粒含む）
11. 黄白色土

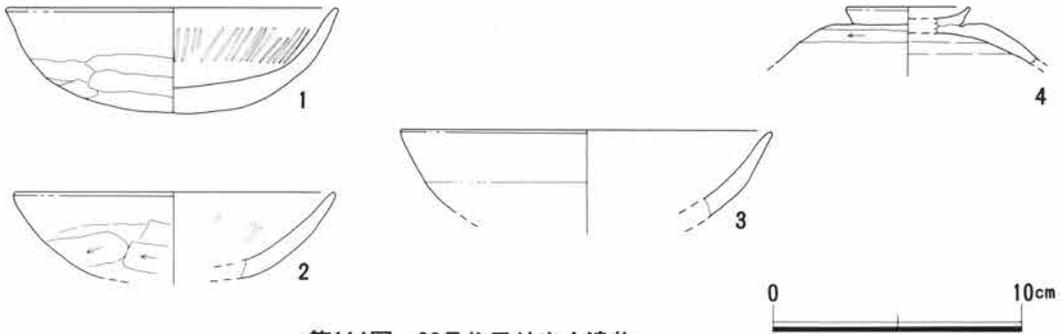
第113図 33号住居址

33号住居址（2区）〔第113・114図・図版28（遺構）・図版95（遺物）〕

第4層黒褐色土面において確認された。規模は南北約4.3m・東西約3mで、平面形は隅丸長方形を呈する。残存状態は悪く、四方の壁を確認することはできたが、立ち上りは約10cm～15cmである。床面は、黒褐色粘質土中に構築されており、やや軟弱である。竪穴内に柱穴はなく、壁周溝もない。

カマドは東壁に設置されており、張り出しは約40cmである。残存状態は非常に悪い。袖は右袖の痕跡と、袖に使用されたと考えられる石が、推定左袖先端部から検出されたただけである。掘り込み部分からは、焼土層・灰層を確認している。カマド右側、南東コーナー付近には、長軸約1m・短軸約0.7m・深さ約15cmのピットがあり、貯蔵穴と推定している。

遺物は土師器の杯(1)が床面付近より、また覆土中からは土師器杯片、須恵器蓋片が出土している。

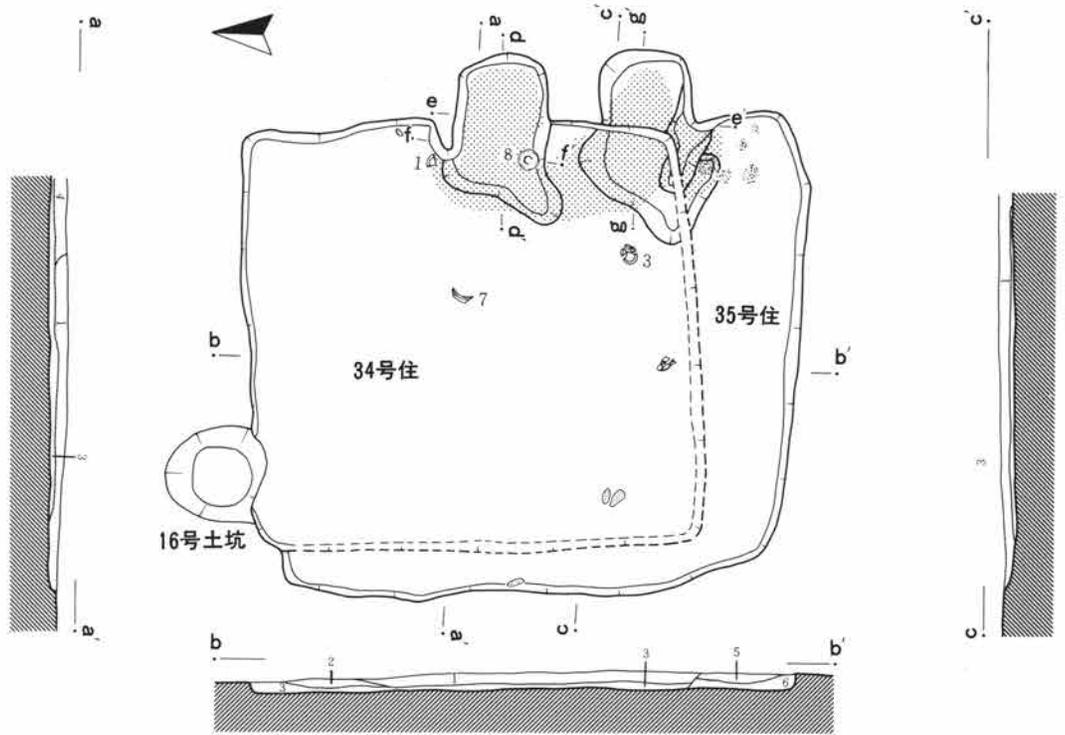


第114図 33号住居址出土遺物

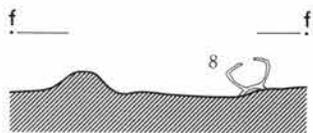
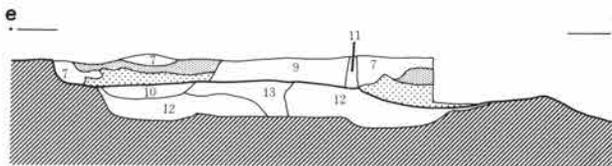
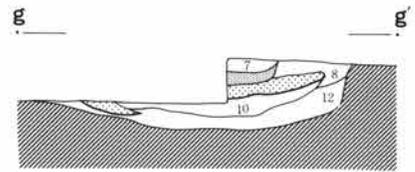
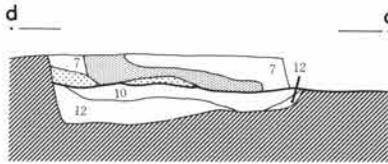
器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	10cm上 完形	1	口径 13.4 器高 4.2	口唇部外面軽い稜。体部直線状外傾。稜なし。器壁厚い。丸底。	体部内外面横ナデ。底部横ヘラケズリ後、軽いナデ。内面横ナデ後、放射状ミガキ暗文。	砂粒、気泡含む。酸化やや硬質。橙色。
碗 土師器	覆土 小片	2	口径 12.9	口縁部・体部緩く内反。	口縁部横ナデ。体部外面横ヘラケズリ。内面ナデ、ミガキ。	砂粒含む。酸化やや軟質。におい橙。
杯 土師器	覆土 小片	3	口径 15.6	体部直線状外傾。丸底ぎみ。	体部内外面横ナデ。底部外面横ヘラケズリ。暗文、ミガキ。	砂粒含む。酸化やや軟質。褐色。
蓋 須恵器	覆土 1/2残存	4	つまみ径 4.9	つまみ偏平凹形。局部大きく張り、体部下位薄い。	つまみ部接合痕。内外面回転横ナデ後、肩部回転ヘラ削り。	砂粒少ない。還元やや硬質。灰白色。

33号住居址出土土器観察表

第II章 検出された遺構と遺物



1. 褐色土 (焼土・炭化物・C軽石を含む)
2. 褐色土 (焼土・灰・炭化物を大量に含む)
3. 褐色土 (焼土粒・C軽石を少量含む)
4. 褐色土 (焼土ブロック・C軽石を多量に含む)
5. 褐色土 (C軽石を少量含む)
6. 褐色土 (黄褐色粘土ブロックを含む)



7. 褐色土 (焼土粒・炭化物を含む)
8. 褐色土 (焼土大ブロック・黄白色土ブロックを含む)
9. 褐色土 (焼土粒を含む)
10. 褐色土 (灰・焼土を含む)
11. 黄白色土
12. 褐色土 (焼土粒・炭化物を少量含む)
13. 褐色土 (焼土粒・大粒のC軽石を含む)

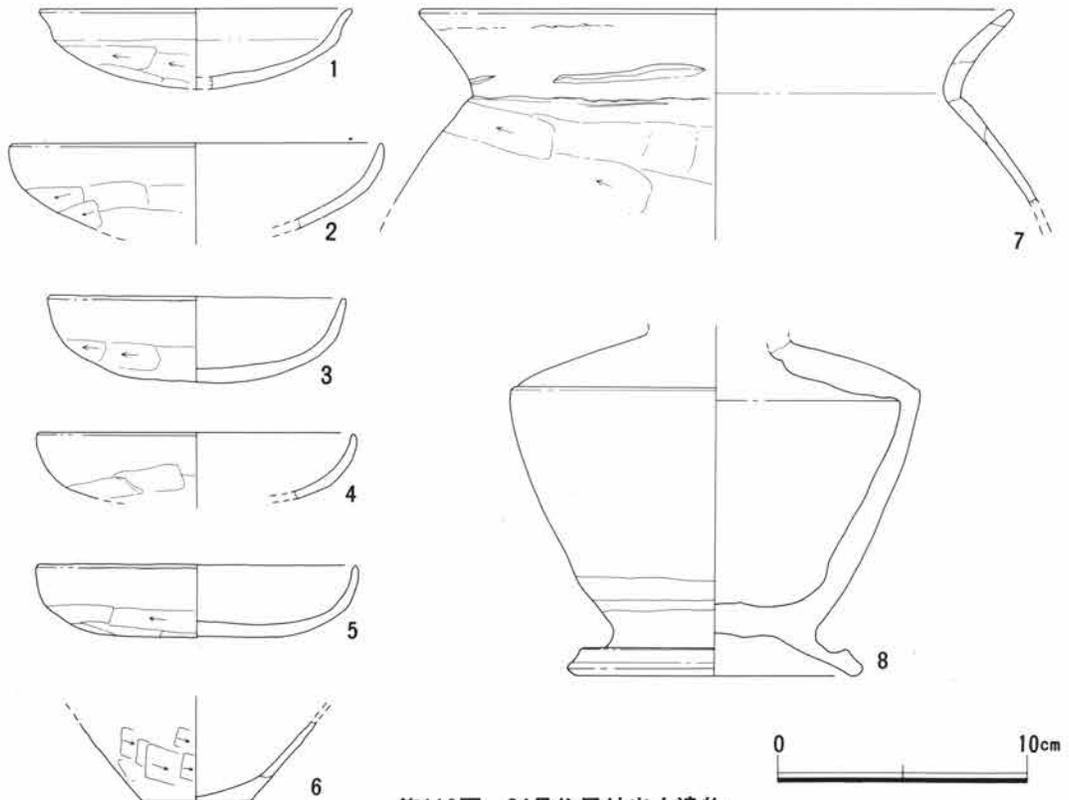
第115図 34・35号住居址

34号住居址（2区）〔第115・116図・図版28（遺構）・図版95（遺物）〕

土層断面により、35号住居址の覆土を切って34号住居址が構築されていたことを確認した。南、西壁は上からの確認が困難であったため図示し得なかったが、35号住居址のカマドの焼土、灰等を切って東南コーナーが残存していたので、一辺3mの正方形を呈することが確定できた。床面はロームをそのまま使用しており、35号住居址との間にレベル差はなかった。カマドは東壁中央やや南寄りに位置する。燃烧部は壁外に幅70cm、奥行き50cmの方形に掘り込まれ、袖部は住居内に30cm程張り出している。袖部の構築材料としては、褐色土を混じた黄白色粘質土が使用されていた。右袖は確認できなかったが、その位置に灰の分布がみられないので存在したものと考えられる。右側焚口部には、破損した須恵器の長頸瓶が使用されている。カマド周辺より土師器杯(1)、住居址中央より床面密着で土師器甕(2)、南壁東寄りから土師器杯(3)が出土している。

35号住居址（2区）〔第115・117図・図版28（遺構）・図版95（遺物）〕

34号住居址によって切断されている。規模は4.1m×3.7mの南北に長軸をもつ長方形を呈する。住居址の大半が34号住居址と重複しており、北壁は壊されているが、東壁は共有するものと思われる。床面はロームをそのまま使用し堅い。カマドは東壁南寄りに位置する。燃烧部は壁外に幅70cm、奥行き60cmの方形に掘り込み、壁に褐色土混じりの黄白色土を貼っている。焚口部分は34号住居址に切られていてその構造は不明である。遺物は床下より土師器甕が出土している。

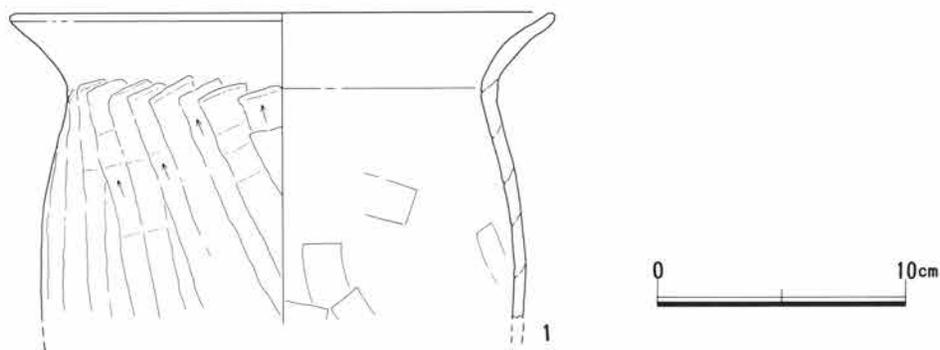


第116図 34号住居址出土遺物

第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	床面直上 1/2残存	1	口径 12.6 器高 3.2	口唇部外反、歪む。口縁部外傾。稜もって丸底。	口縁部内外面横ナデ。底部横ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化、軟質。橙色。
杯 土師器	カマド内 小片	2	口径 15.0	口縁部内反ぎみに直立。体部内傾。深い。稜なし。	口縁部内外面横ナデ。体部外面横ヘラケズリ。内面ナデ。	微砂粒含む。酸化やや硬質。橙色。
杯 土師器	8cm上 完形	3	口径 12.0 器高 3.4	口縁部内反ぎみに僅か外傾。口縁部稜不鮮明。丸底。	口縁部内外面横ナデ。体部横底部不定ヘラケズリ。内面ナデ。	微砂粒多く含む。酸化やや硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 小片	4	口径 12.8	口縁部内反ぎみに外傾。体部大きく内反。口縁部稜なし。	口縁部内外面横ナデ体部横ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化やや硬質。にぶい橙。
杯 土師器	覆土 1/2残存	5	口径 13.1 器高 2.9	口縁部内反ぎみに外傾。口縁部、体部境緩い稜。平底。	口縁部内外面横ナデ。体部横底部不定ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒含む。酸化やや軟質。褐色。
甕 土師器	覆土 底部小片	6	底径 4.3	器壁薄く平底。底部多角形状。	体部外面へラケズリ。底部ヘラケズリ。内面へラ調整痕。	砂粒含む。酸化、硬質。褐色。底部黒斑。
甕 土師器	床面直上 口縁1/2残	7	口径 24.0	口縁部・頸部「く」の字状に外反。胴部球形傾向。	口縁部内外面輪積痕・横ナデ。胴部へラケズリ。	微砂粒多く含む。酸化やや硬質。橙
長頸 須恵器	カマド内 胴部・高台1/2残存	8	胴径 16.5 底径 11.3	肩部強く稜あり。稜直上に浅い沈線。高台拡がり、接合部広い凹帯。上端部顕著な稜。	内外面輪積痕。頸部・高台部接合痕。胴部下位回転ヘラケズリ後、全面回転横ナデ調整。	砂粒石英含む。還元、硬質。肩部上面自然釉。灰色。

34号住居址出土土器観察表

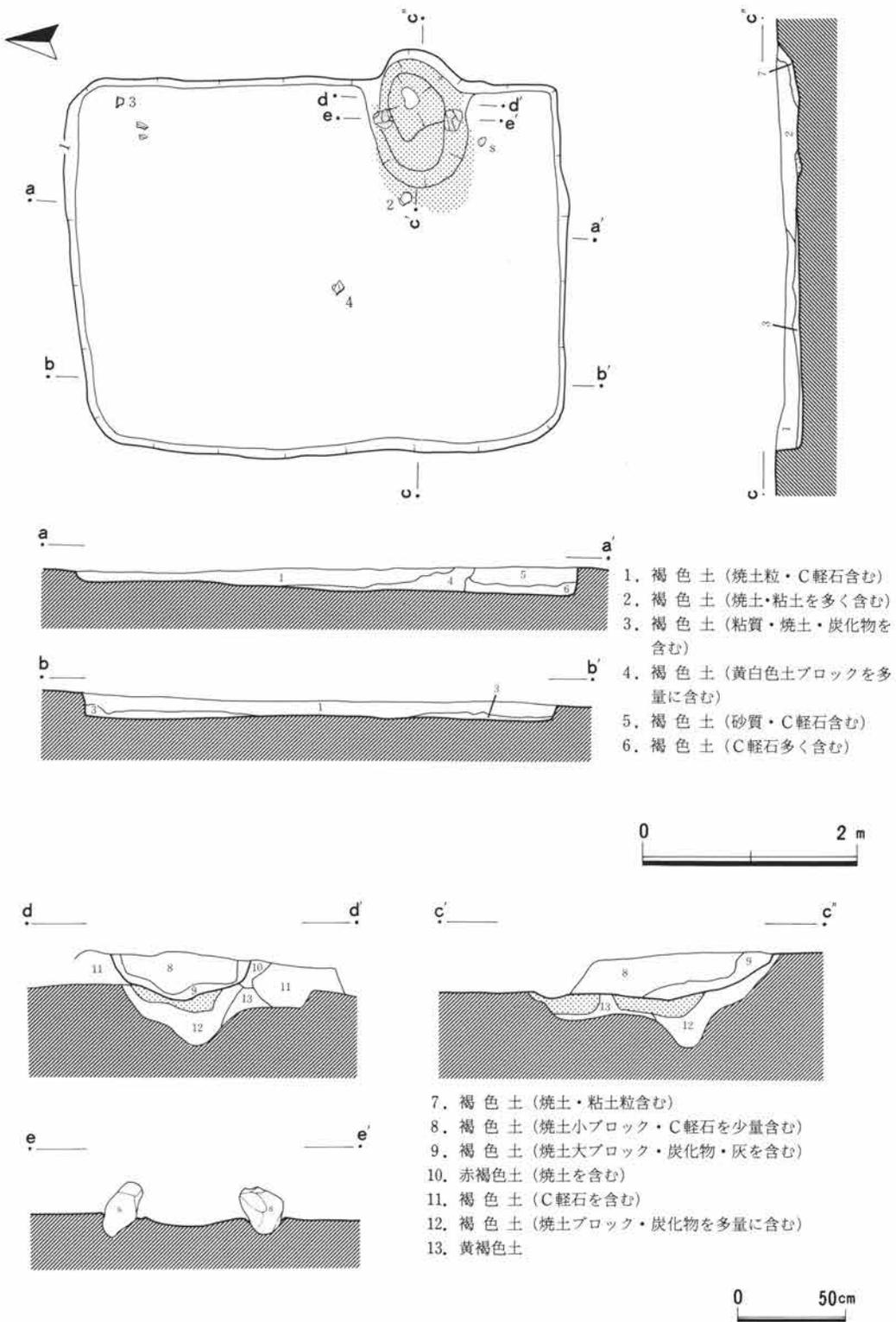


第117図 35号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	床下 口縁・胴部1/2残存	1	口径 21.8	口縁部やや大きく外反。胴部緩く膨らみ、上位に最大径。器壁薄い。	口縁部内外面横ナデ。頸部へラケズリ。内面輪積痕。へラ調整痕。	砂粒多く含む。酸化、軟質。外面明赤褐色。内面暗褐色。

35号住居址出土土器観察表

第4節 古代の竪穴住居址



第118図 38号住居址

第II章 検出された遺構と遺物

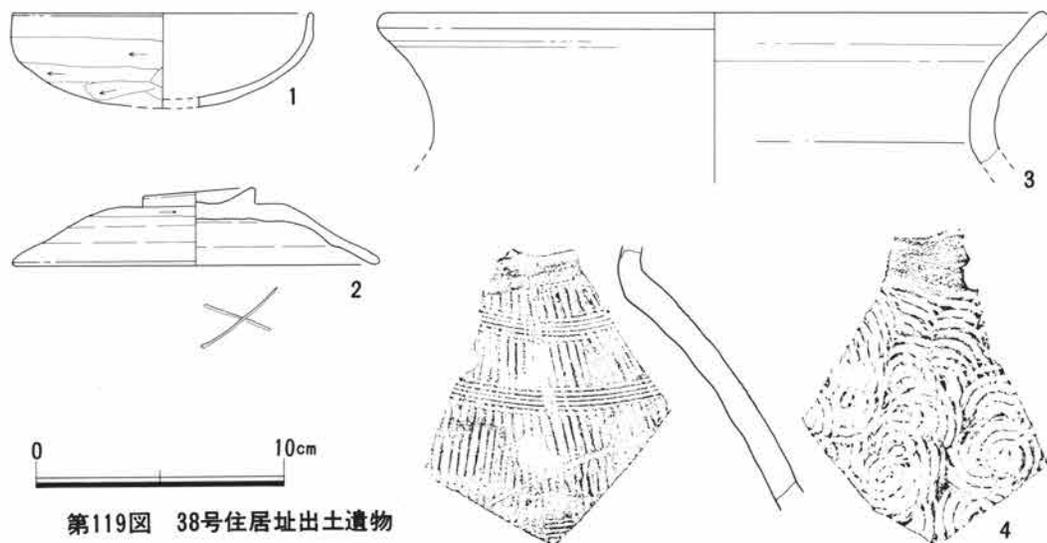
38号住居址（2区）〔第118・119図・図版29（遺構）・図版96（遺物）〕

第4層黒褐色土面において確認された。39号住居址・21号溝と重複する。39号住居址との新旧関係は、覆土の相違・遺物の相違等から当住居址の方が新しく、21号溝との新旧関係も覆土の相違から当住居址の方が新しい。

規模は長辺約4.5m・短辺約3.5mで、平面形は隅丸長方形を呈する。床は比較的硬く良好であるが、やや軟弱な部分もある。壁の残存状態はやや悪く、立ち上りは約15cm～25cmである。竪穴内に柱穴はなく、壁周溝もない。

カマドは東壁に設置されており、張り出しは約30cmである。袖の残存状態は悪く、大部分は壊れているが、両袖から芯に使用されたと推定できる石（二ツ岳軽石）が検出できた。掘り込み部分からは、厚さ約6cm～7cmの焼土・灰層を検出した。貯蔵穴はない。

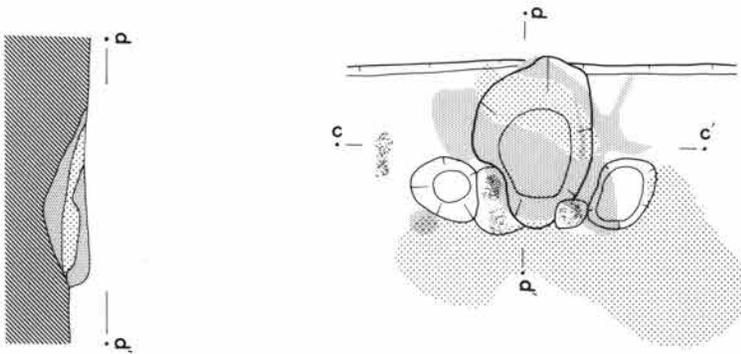
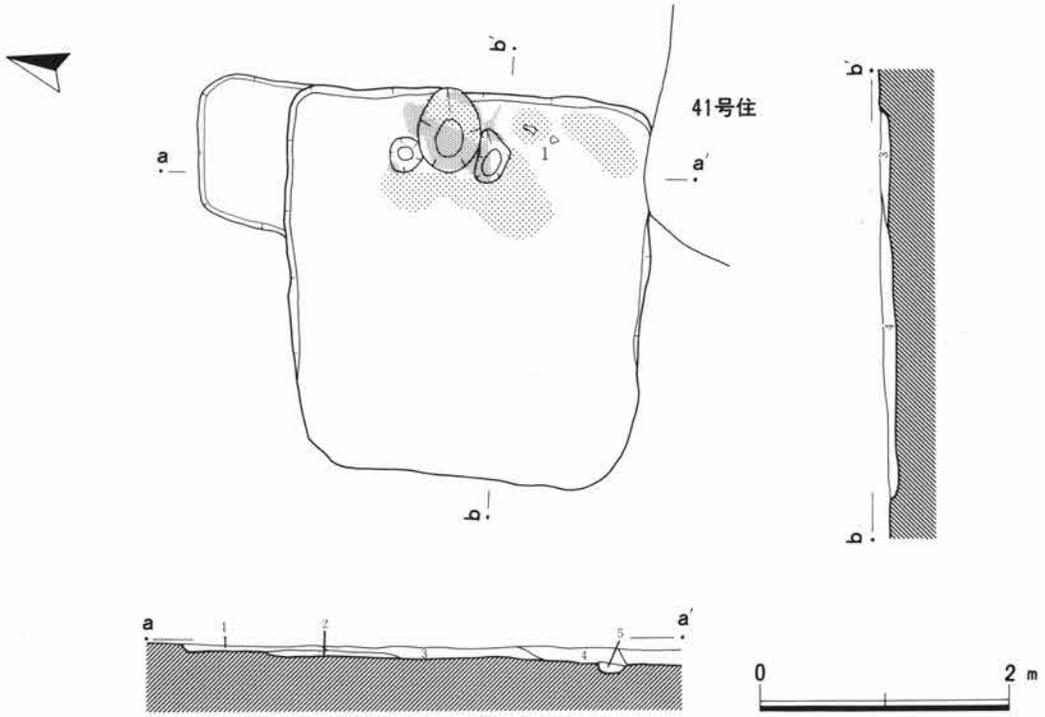
遺物は少ないが、土師器の杯・須恵器の甕・蓋等が覆土中より出土している。



第119図 38号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	16cm上 1/2残存	1	口径 12.1 器高 3.8	口縁部直立。底部やや薄い丸底。	口縁部内外面横ナデ。体部底部不定ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒含む。酸化やや硬質。にぶい橙色。
蓋 須恵器	10cm上 1/2残存	2	つまみ径 4.5 口径 14.8	つまみ扁平凹形。やや歪む。肩部水平で体部外面直線状。内面中位身受けの稜。	つまみ接合痕。全面右回転横ナデ後、肩部回転ヘラケズリ。頂部内面ヘラ描×印記号。	微砂粒含む。還元やや軟質。灰白色。
甕 須恵器	4cm上 口縁小片	3	口径 26.5	器壁厚く、大きく外反。	内外面回転横ナデ。	砂粒含む。還元、軟質。灰白色。
甕 須恵器	覆土 肩部小片	4		器壁厚い。	外面平行叩き痕後、櫛描横線3条。内面青海波当て痕。	砂粒少量。還元、硬質。灰色。

38号住居址出土土器観察表



1. 灰褐色土 (粘性・B軽石含む)
2. 暗褐色土 (粘性)
3. 褐色土 (焼土・炭化物を多く含む)
4. 灰褐色土 (B軽石少量含む)
5. 褐色土 (粘性・ローム粒含む)
6. 暗褐色土 (粘性・粒子細かい)
7. 褐色土 (粒子細かい)

第120図 40号住居址

第II章 検出された遺構と遺物

40号住居址（2区）〔第120・121図・図版30（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。南東側で41号住居址と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模は東西約3m、南北約2.9mの隅丸長方形で、北東隅に幅1.2m、長さ0.7mの方形の張り出しが付く。残存状態は極めて悪く、南東隅付近は10cm程度の壁が検出されたが、他の部分は西壁を中心に僅か1cmほどの壁しか見られなかった。床は、カマド周辺と南東隅付近は灰の堆積があり硬い粘質土の床が見られたが、他の部分は薄い覆土から軟弱な床を飛ばしてしまい、土層断面からの確認である。張り出し部分は、周辺より2～3cmレベルが高く床は硬い。あるいは新しい土坑の可能性も考えられる。柱穴・壁周溝は、検出されなかった。

カマドは東壁中央に設け、燃烧部として径0.7×0.5cmの楕円形状に掘りこんでいる。確認面では、煙道はほとんど壁外へ出ていない。袖には、僅かにコブシ大の粘土の残存が見られ、また左右の残存粘土の外側に、径5cm、深さ10cmの浅いピットが見られた。

遺物は、カマド右側から土師器甕片(1)が出土した他、覆土中から須恵器甕(2)が見られただけである。



第121図 40号住居址出土遺物

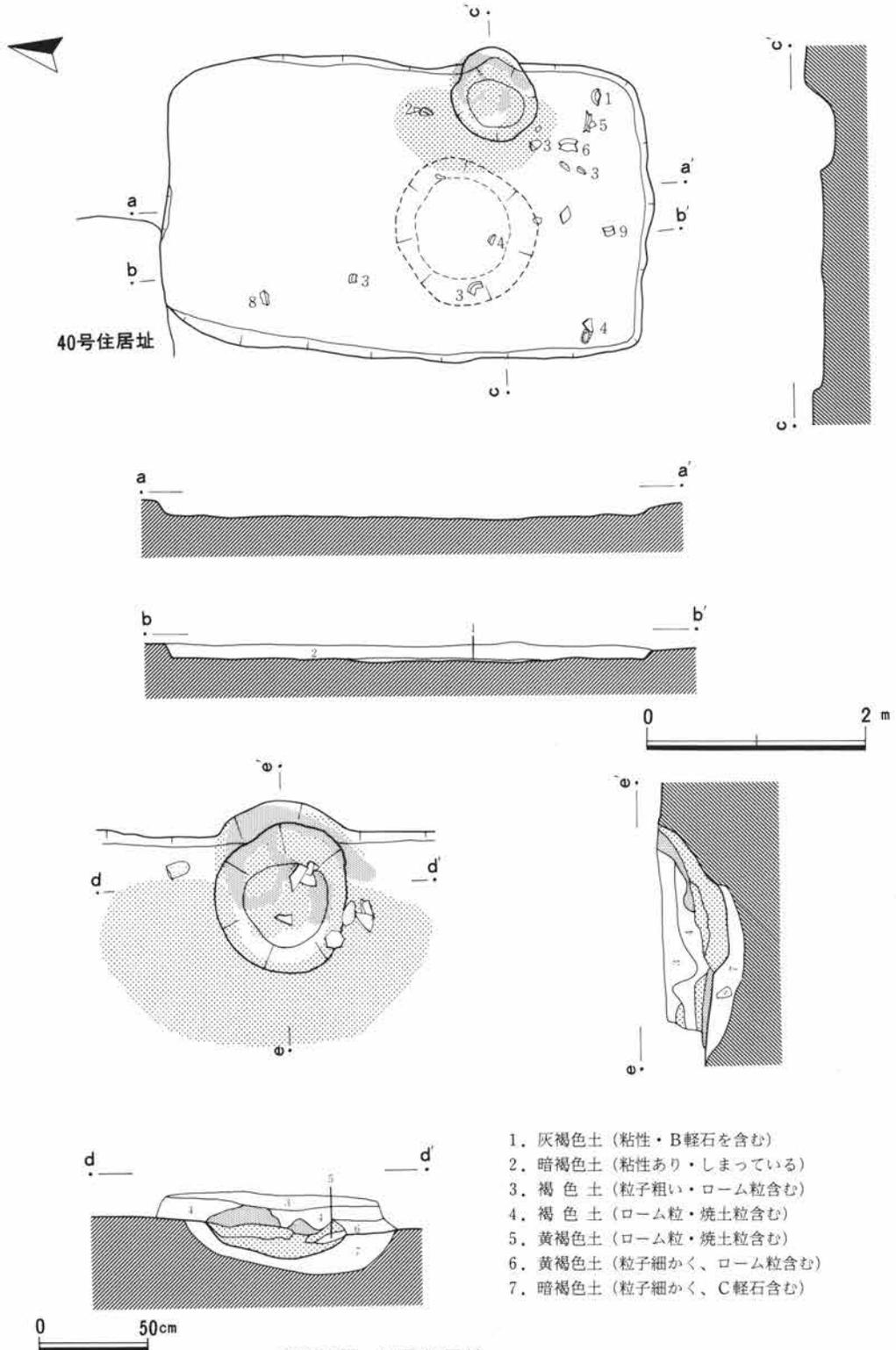
器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	床面直上 口縁小片	1		口縁部大きく外反。胴部直線状傾向。	口縁部内外面横ナデ。頸部へラケズリ。	微砂粒含む。酸化やや硬質。外面褐色。
甕 須恵器	覆土 口縁小片	2	口径 14.0	口唇部面取り、内外面に顕著な稜。口縁部外面中位膨らんで外傾。	内外面回転横ナデ。	砂粒少量。還元やや硬質。灰色。

40号住居址出土土器観察表

41号住居址（2区）〔第122・123図・図版30（遺構）・図版96（遺物）〕

第4層黒褐色土面で確認された。北側で40号住居址と重複しているが、新旧関係は不明である。北東隅部で不明の落ちこみと重複するが、新旧関係は不明である。また、南側で23号溝に近接する。

規模は、東西約2.6m・南北約4.5mの南北に長い長方形を呈する確認面から床面までは3～4cmと浅いが、北側を除いて、ほぼ全体に壁を検出した。床は、基本的に地山の暗褐色粘質土をたたいているが、カマド付近では、2～3層で3cm程度の灰・焼土の張り床がある。また、ほぼ全面に指頭大の焼土が散っている。柱穴・周溝は検出されなかった。



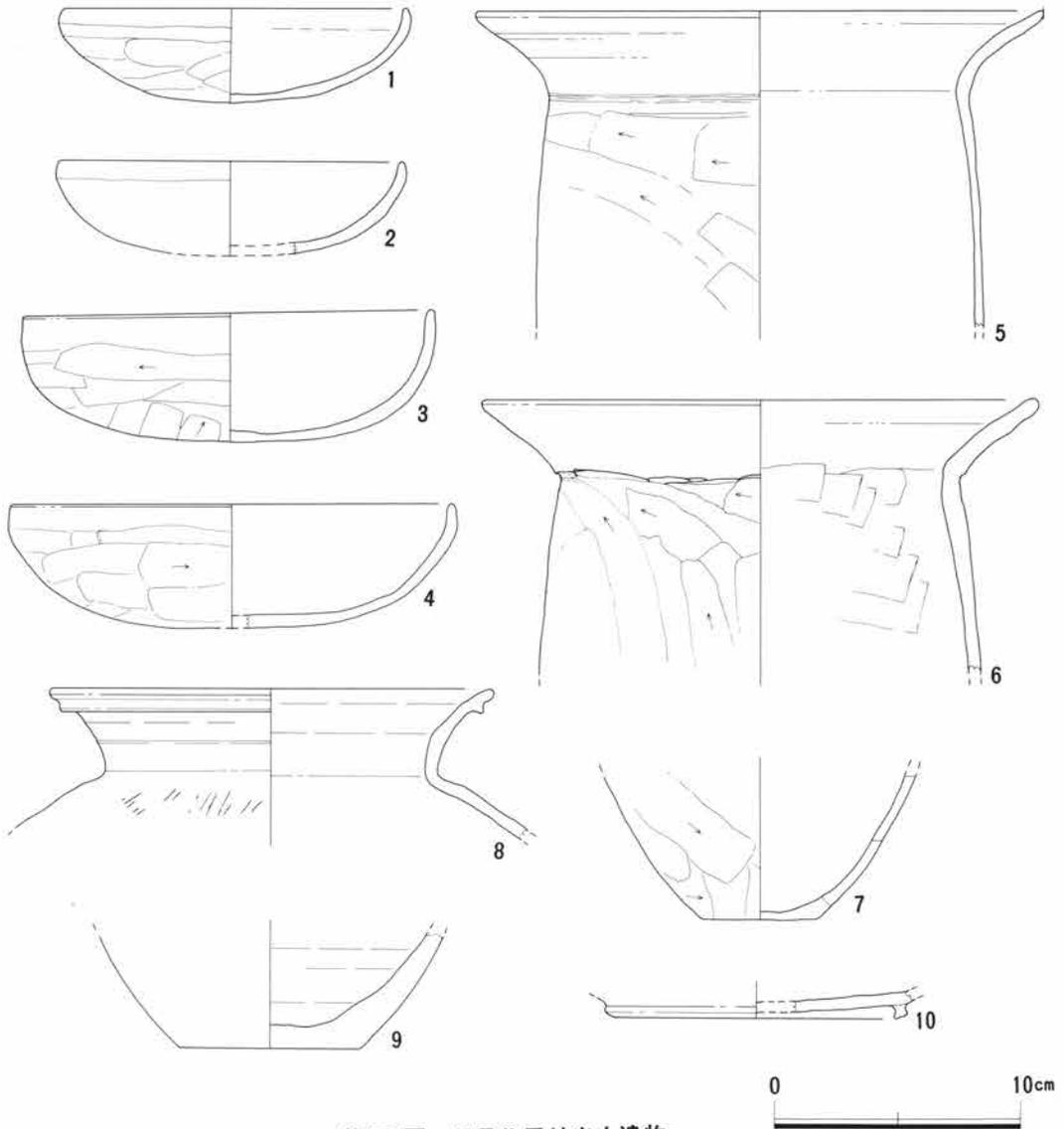
第122図 41号住居址

第II章 検出された遺構と遺物

カマドは、東壁南寄りに設けられ、燃焼部として径70×60cmの楕円形の掘りこみを作っている。煙道は、確認面においては、ほとんど壁外に出ていない。また袖はほとんど痕跡を残していない。カマドのほぼ前面の中央に、径1.3m、深さ13cmの皿状の大形土坑が張り床の下に見られた。

遺物は比較的多く、カマド右側を中心に、多くの土器片が散っていた。カマド右側ほぼ床面直上で土師器甕(5・6)、同杯(1)が見られ、同椀(3)の接合破片は床下土坑覆土中にも見られた。また、南西側では、土師器椀(4)、須恵器甕(9)がやや浮いて、カマド左側では床面直上で土師器杯(2)が出土した。北西側ではやや浮いて須恵器壺(8)が検出された。

床下の土坑は、遺物出土状態より考えて、居住の当初段階には張り床がなされていなかったと思われる。



第123図 41号住居址出土遺物

第4節 古代の竪穴住居址

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	床面直上 ほぼ完形	1	口径 14.0 器高 3.8	口縁部短く内反ぎみ。口縁体部緩い稜。丸底状。	口縁部横ナデ。体部・底部不定ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒含む。酸化、軟質。橙色。
杯 土師器	床面直上 1/2残存	2	口径 14.0	口縁部短く内反ぎみ。口縁体部緩い稜。丸底状。	口縁部横ナデ。体部横ヘラケズリ、磨減。内面ナデ。	砂粒多く含む。酸化、軟質。橙色。
椀 土師器	床面直上 ほぼ完形	3	口径 16.7 器高 3.8	口縁部僅か内反ぎみ直立。深みあり。器壁薄く歪み大きい。口縁体部稜。平底状。	口縁部横ナデ。体部・底部縦横ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒含む。酸化やや軟質。橙色。底部外面黒斑。
杯 土師器	床面直上 1/2残存	4	口径 17.9 器高 4.9	口縁部短く直立。口縁体部稜。底部半球形状。	口縁部横ナデ。体部→、底部不定ヘラケズリ。内面ナデ。	微砂粒含む。酸化、硬質。にぶい橙。
甕 土師器	床面直上 口縁1/2残	5	口径 23.1	口縁部大きく外反。胴部大きく外反。胴部直線状に下がる。器壁薄い。	口縁部横ナデ。胴上位↑、中位へヘラケズリ。内面ヘラ痕。	砂粒含む。酸化やや軟質。にぶい橙。
甕 土師器	床面直上 口縁1/2残	6	口径 22.6	口縁部直線上に外傾。胴部直線状に下がる。器壁やや厚い。	口縁部横ナデ。胴上位へ、中位↑ヘラケズリ。内面ヘラ痕。	砂粒含む。酸化やや硬質。橙色。
甕 土師器	床下 底部1/2残	7	底径 4.5	小さな平底。多角形状。器壁やや薄い。	胴部↓後、へヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面ヘラ調整。	砂粒含む。酸化やや硬質。にぶい橙。
壺 須恵器	5cm上 口縁1/2残	8	口径 17.8	口縁部「く」の字状に外反。口唇部直下外面断面三角形の凸帯。胴部球形傾向。	口縁部回転横ナデ。頸部外面押さえ痕。内面接合痕。胴部外面平行叩き痕。	微砂粒石英含む。還元、硬質。肩部上面自然釉。灰白色。
壺 / 甕 須恵器	4cm上 底部1/2残	9	底径 7.3	器壁厚く、平底。	胴部外面回転ヘラ削り後、ナデ。底部ヘラ痕。内面回転横ナデ。	砂粒気泡含む。還元、硬質。灰色。
椀 須恵器	覆土 底部1/2残	10	底径 11.4	器壁薄く、高台断面台形状。底部中心下がる。	外面回転ヘラ切り後、高台貼付ナデ。内面回転横ナデ。	砂粒少ない。還元、硬質。灰色。

42号住居址（2区）〔第124・125図・図版30（遺構）・図版96（遺物）〕

41号住居址出土土器観察表

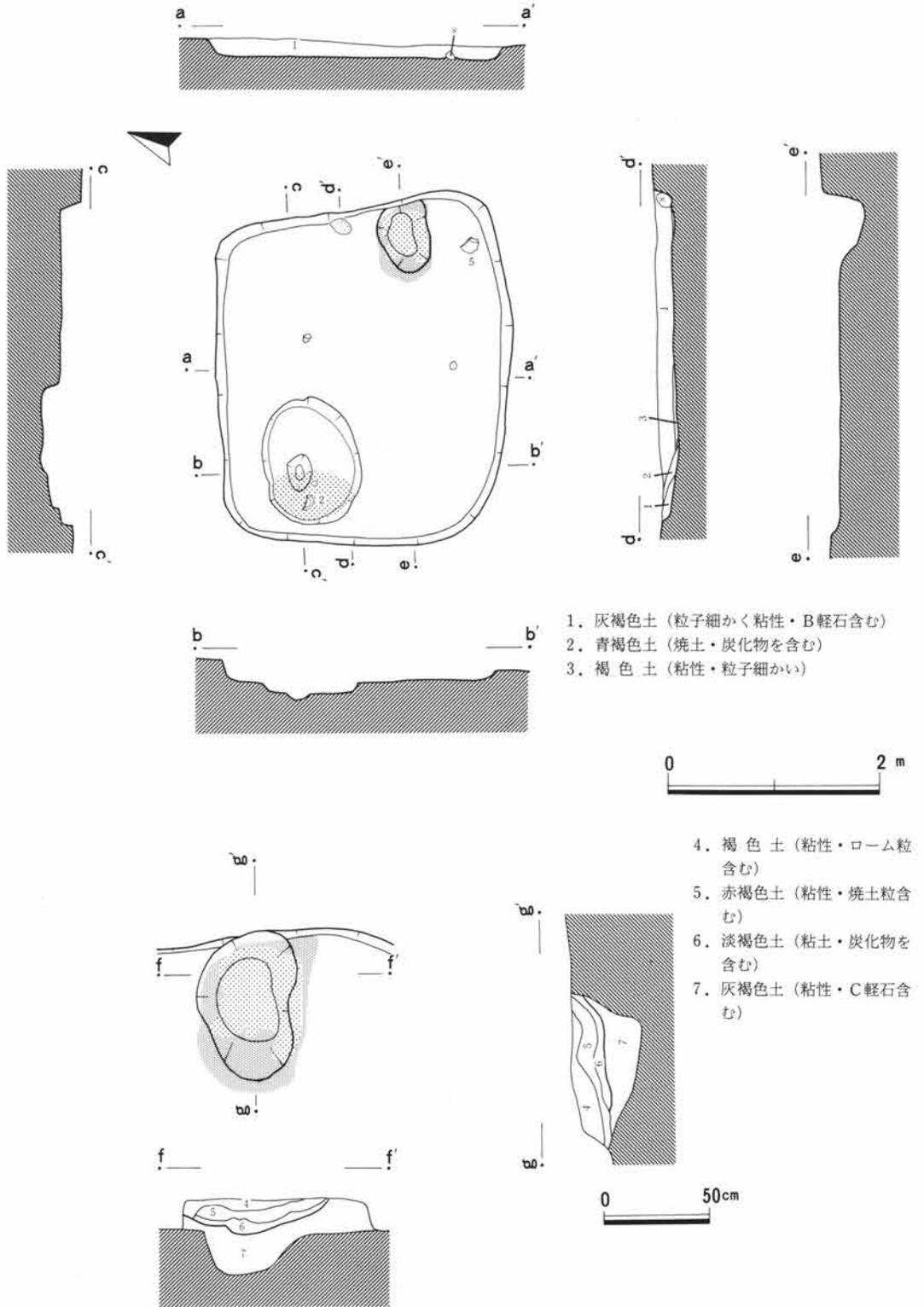
第4層黒褐色土面で確認された。東側で4・5号掘立と重複するが、両掘立柱穴上に本住居址のカマドが構築されて焼土が残っていたため、本住居址の方が新しい。

規模は、東西約3.2m、南北約2.7mの隅丸方形で、東西がやや長い。壁は、確認面から床面まで5～20cmほどの急傾斜な立ち上がりを見せる。床面は、全体に地山の暗褐色粘質土をたたいており硬い。柱穴・周溝は確認されていない。

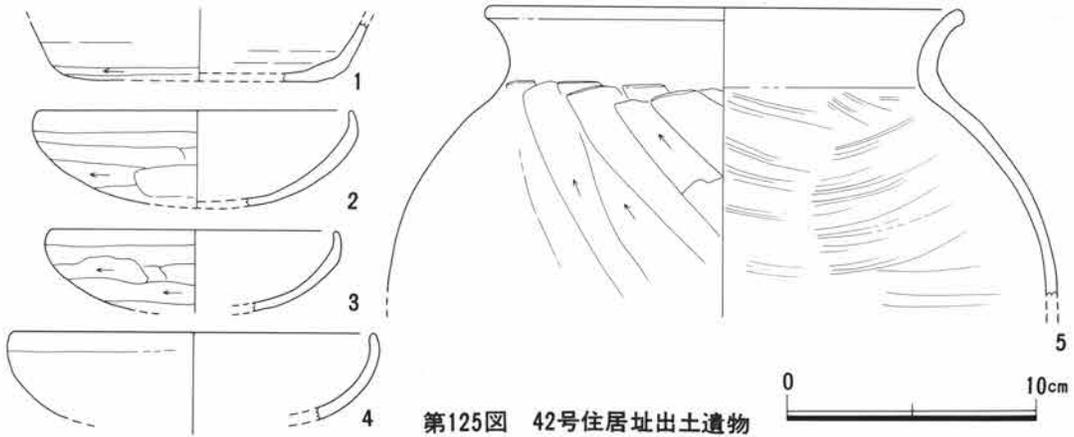
カマドは、東壁やや南寄りに設けられるが、径65cm×45cmの楕円形の掘りこみを燃焼部とする。煙道は確認面では、壁外へほとんど出ていない。袖の痕跡は、全く見られなかった。北西側に、径1.2×0.9m、深さ10cmの楕円形土坑があり、底中央に径30cmの浅いピットを持つ。覆土は炭化粒子が主体で、上面に張り床は見られなかった。

遺物は、カマド右の床面近くから土師器壺(5)が出土し、土坑覆土上面には土師器杯(2)、同覆土中には須恵器杯(1)が見られた。

第II章 検出された遺構と遺物



第124図 42号住居址



第125図 42号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 須恵器	土坑 底部片残	1	底径 10.7	底部中央器壁薄い。体部底部境の稜なし。	体部内外面回転横ナデ。底部手持ちヘラケズリ調整。	砂粒少量。還元、硬質。灰色。
杯 土師器	土坑上面 ほぼ完形	2	口径 12.7 器高 3.9	口縁部短く内反。口縁部体部間緩い稜。丸底。	口縁部内外面横ナデ。体部底部不定ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒・石粒含む。酸化、軟質。橙色。
杯 土師器	覆土 小片	3	口径 11.5	口縁部短く内反。口縁部体部間緩い稜。丸底傾向。	口縁部内外面横ナデ。体部底部横ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒少量。酸化やや硬質。にぶい褐色。
杯 土師器	覆土 小片	4	口径 14.6	口縁部短く内反。口縁部体部間稜。丸底傾向。	内外面口縁部横ナデ。体部横ヘラケズリ。磨滅、内面ナデ。	砂粒含む。酸化軟質。にぶい褐色。
壺 土師器	6cm上 口縁小片	5	口径 19.0	口縁部外反。口唇部稜顕著。胴部球形傾向。器壁厚い。	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒・石粒多量に含む。酸化、硬質。褐色。

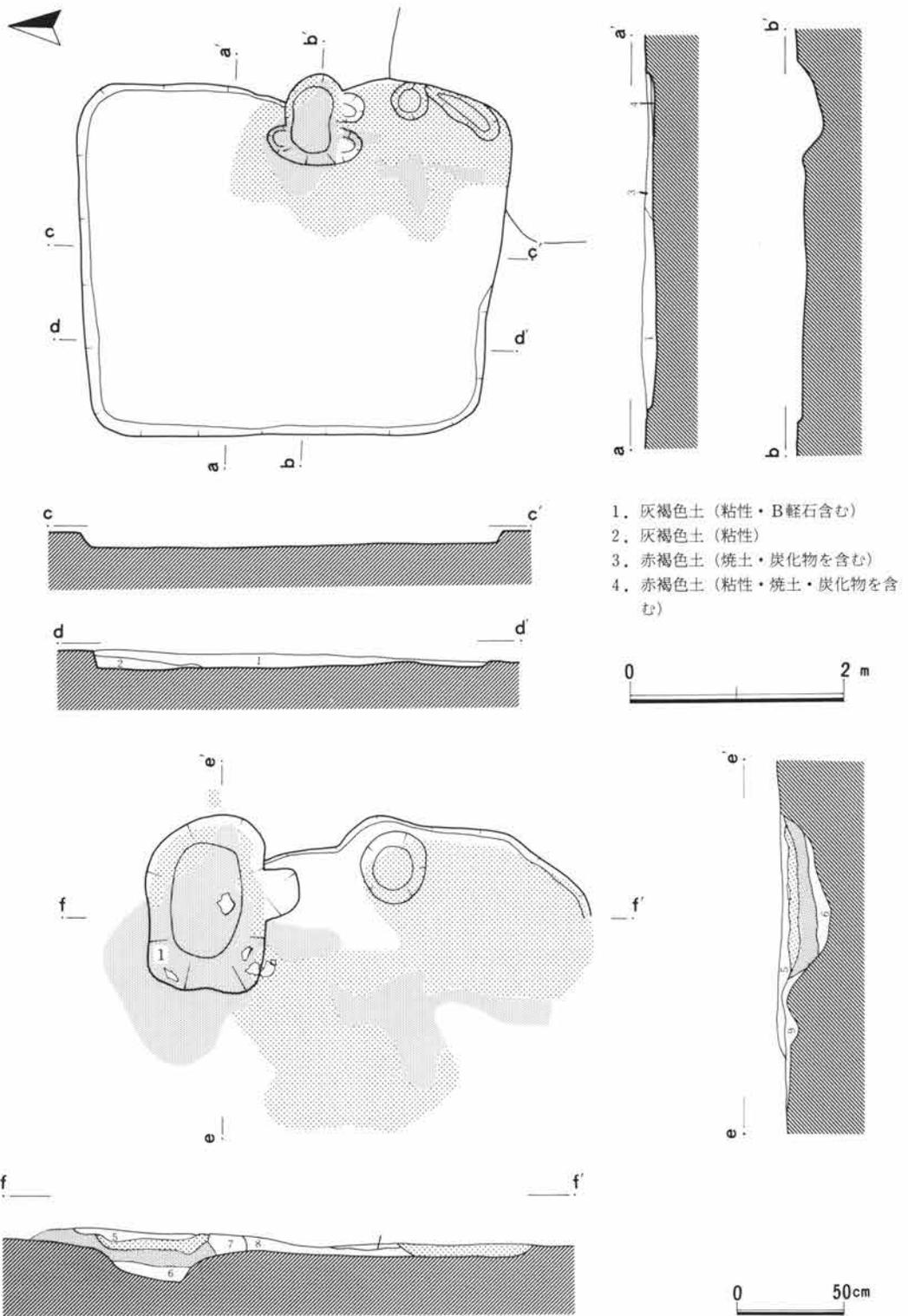
42号住居址出土土器観察表

43号住居址（2区）〔第126・127図・図版31（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。南東側で44号住居址と重複するが、44号住居址覆土の上に本住居址の炭化粒子層が広がっているため、本住居址の方が新しい。

規模は東西約3.2m、南北約3.9mで、南北が僅かに長い隅丸ぎみの長方形である。壁は、北側で確認面より床面まで最高15cmほど検出されたが、南側は確認面が低いため2～3cmで、全く残っていない部分もあった。床は、地山の暗褐色粘質土をたたいているが、部分的には緩やかな凹凸が見られる。カマド前面から南東隅にかけては、炭化粒子と焼土による2～3cm程度の張り床が見られた。柱穴・周溝は確認されていない。

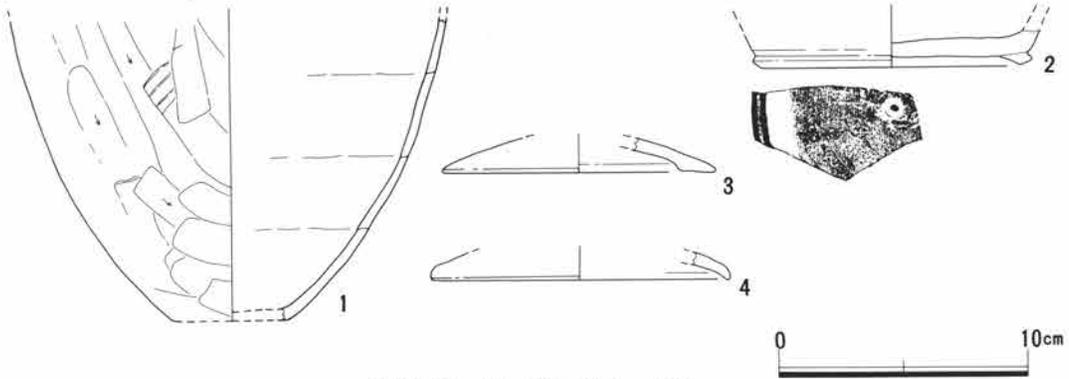
カマドは、東壁中央に設けられ、径85×50cmの燃焼部掘りこみが造られる。煙道部は壁外へ25cmほど突出している。燃焼部両側には、袖部の基礎掘りこみと思われる径30cm、深さ10cmのピツ



第126図 43号住居址

トが見られた。また北西隅部には、円形及び長円形の浅い掘りこみがあるが、性格は不明である。

遺物は少なく、カマド内より出土の土師器甕(1)以外には、覆土中より須恵器蓋・壺小片が見られただけである。



第127図 43号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	カマド内 胴部 $\frac{1}{2}$ 残	1		器壁薄い。	外面へラケズリ。内面輪積痕有り。後、横ナデ。	砂粒含む。酸化、硬質。にぶい橙色。
碗 須恵器	覆土 底部小片	2	底径 11.0	器壁厚い。高台断面菱形大きく外傾。	外面回転へラケズリ後、高台貼付。内面回転横ナデ。	砂粒含む。還元、硬質。灰色。
蓋 須恵器	覆土 小片	3		内面端部幅広く水平で段をなして身受けとする。	外面回転へラケズリ後、ナデ。内面回転横ナデ。身受け磨滅。	微砂粒含む。還元やや軟質。灰色。
蓋 須恵器	覆土 小片	4		端部稜をなしてやや外傾。内面かすかな身受け。	内外面回転横ナデ。	微砂粒含む。還元、硬質。灰色。

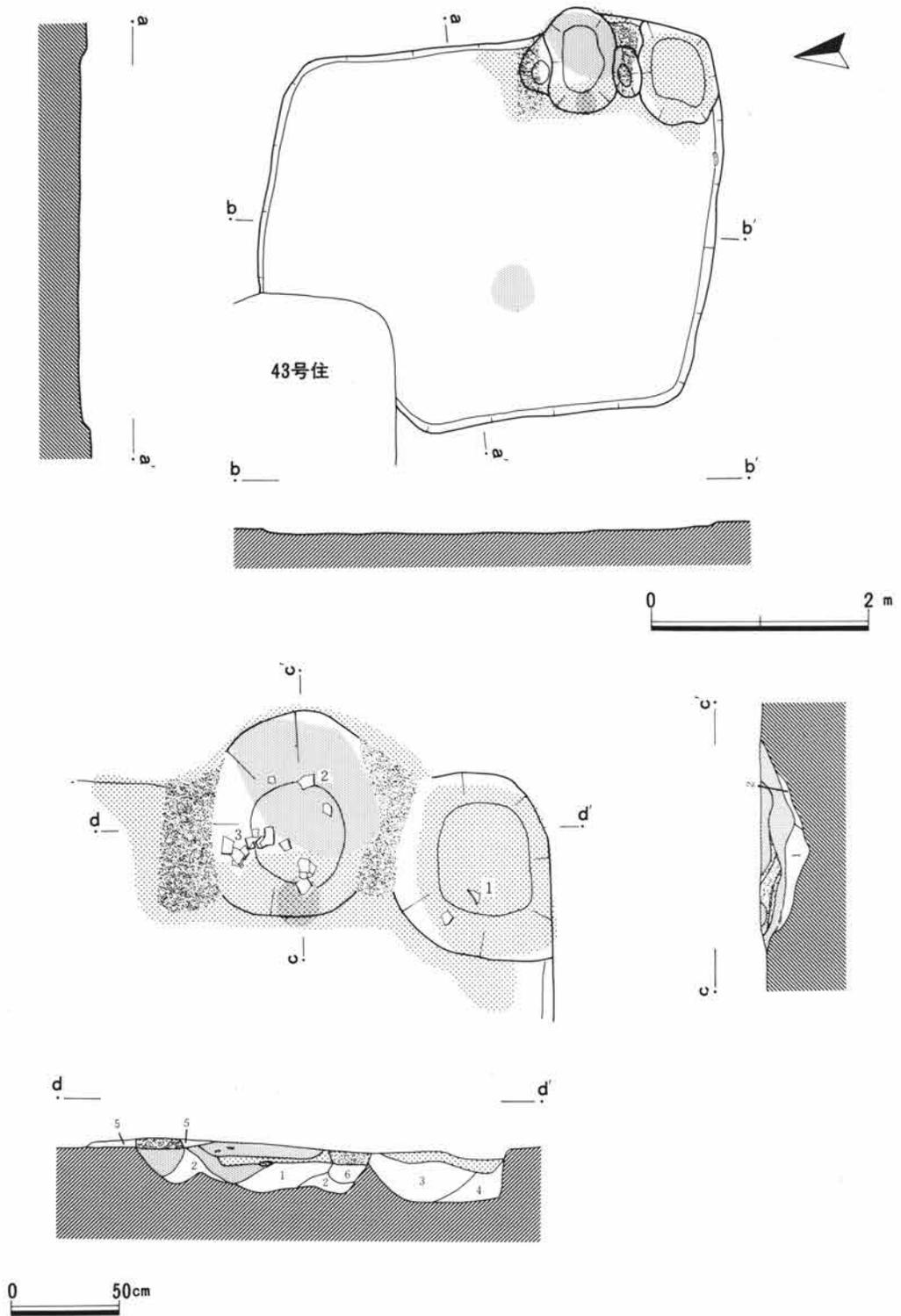
43号住居址出土土器観察表

44号住居址(2区)〔第128・129図・図版31(遺構)〕

第4層黒褐色土面で確認された。北西側で43号住居址と重複しているが、43号住居址で既述のように本住居址の方が古い。また12号井戸と重複するが、床の状態より本住居址の方が新しい。

規模は、東西約3.5m、南北約4.1mの僅かに南北が長く平行四辺形ぎみの長方形である。確認面が低かったため壁の残りは悪く、北側で5cm見られた以外は、ほとんど1~2cm程度しか検出できなかった。床は、地山の暗褐色粘質土をたたき、カマド周辺にはかなり広く粘土・焼土・炭化粒子及び灰による厚さ2~3cmの張り床が見られた。柱穴・周溝は検出されていない。

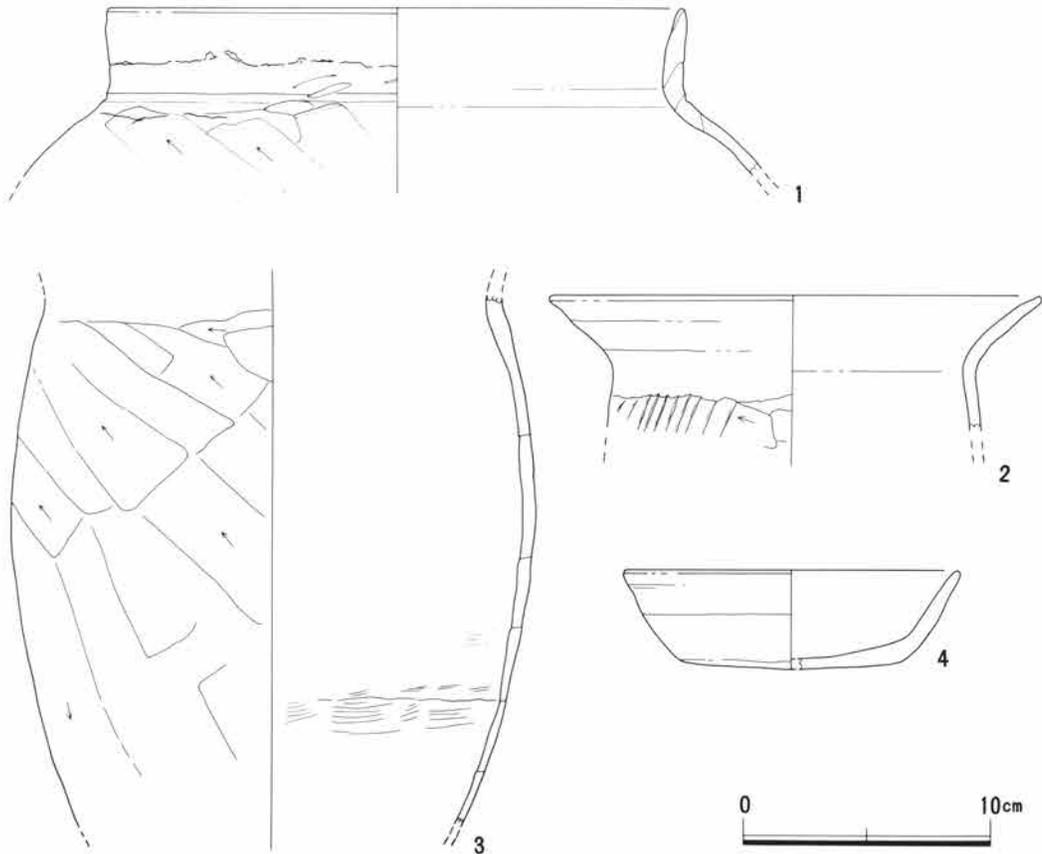
カマドは東壁南寄りに設けられ、径100×60cmの楕円形の燃焼部を造る。その先端は、壁外へ25cmほど突出して煙道となる。燃焼部両側には、袖の基部である厚さ10cmほどの粘土が残る。また燃焼部覆土には天井部と思われる粘土が残っており、周辺の粘土も崩壊によって飛散したものであろう。カマド左側の南東隅には、径90×65cm、深さ50cmの方形状の掘りこみがあり、覆土上層は炭化粒子層、下層は焼土を含む暗褐色土で、貯蔵穴と思われる。



第128図 44号住居址

第4節 古代の竪穴住居址

遺物は、カマド内を中心に見られた。カマド内からは、土師器甕(2・3)が出土し、貯蔵穴内からは同壺(1)が検出された。また覆土中には同杯(4)が見られた。

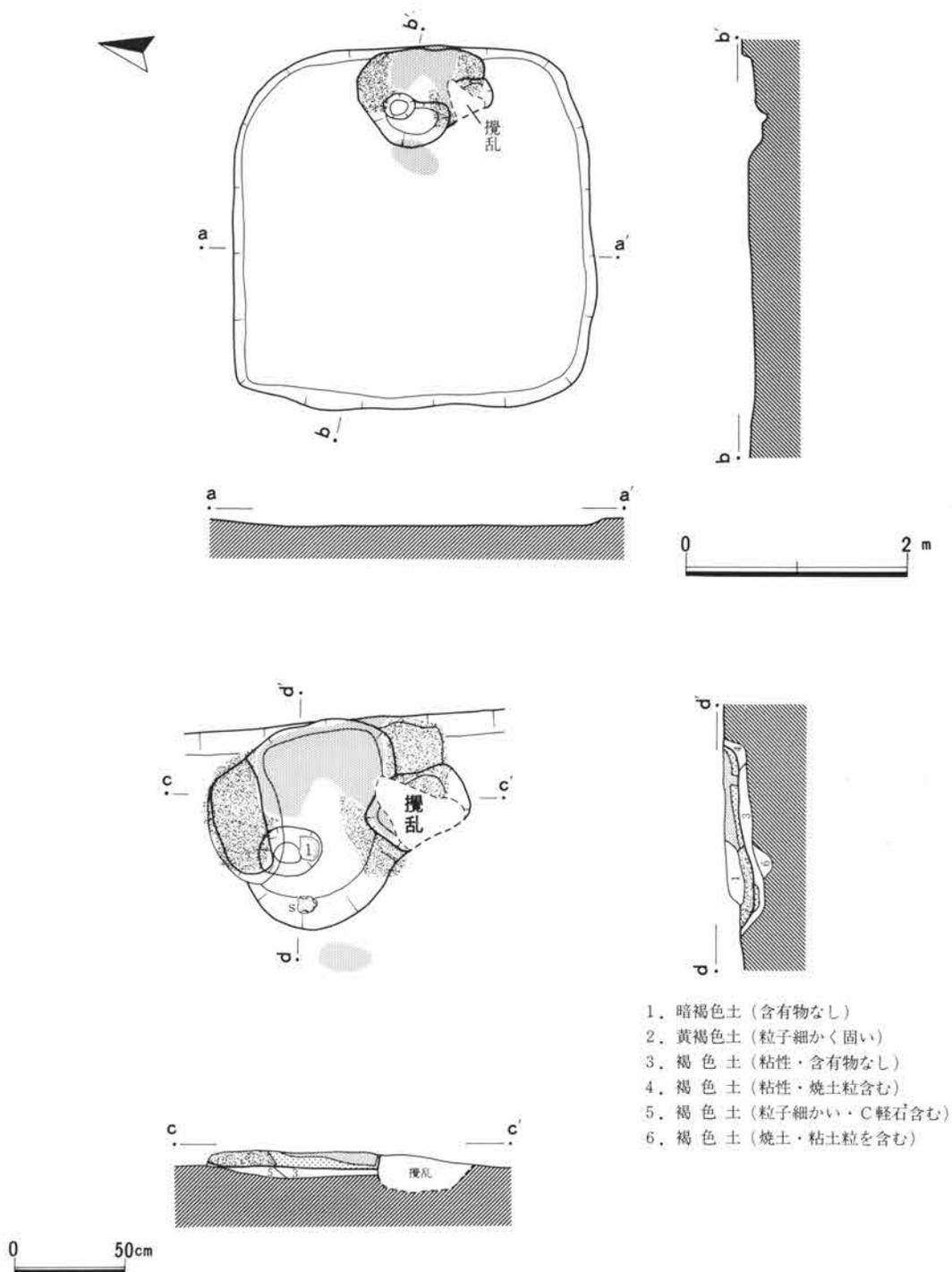


第129図 44号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺 土師器	貯蔵穴内 口縁 $\frac{1}{2}$ 残	1	口径 23.2	口縁部直立。頸部凹帯。胴部球形傾向。胴部器壁やや薄い。	口縁部外面輪積痕残。内外面横ナデ。肩部斜ヘラケズリ。	砂粒気泡含む。酸化やや軟質。にぶい黄橙色。
甕 土師器	カマド内 口縁小片	2	口径 19.6	口縁部大きく外傾。頸部僅か凹む。胴部直立きみ。	口縁部内外面横ナデ。胴部ヘラケズリ後、頸部指ナデ。	砂粒含む。酸化、硬質。にぶい橙色。
甕 土師器	カマド内 胴部 $\frac{1}{2}$ 残	3	胴径 21.2	器壁薄く、緩く内反。最大径中位やや上。	外面ヘラケズリ後、頸部指ナデ。内面輪積痕、横ナデ。	微砂粒含む。酸化、硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{4}$ 残存	4	口径 13.5 底径 9.0 器高 4.0	口縁部僅か凹むが体部直線状大きく外傾。底部平底状。器壁やや厚い。稜やや緩い。	口縁部内外面横ナデ。体部底部不定ヘラケズリ。内面ナデ。全体に磨滅。	微砂粒含む。酸化やや軟質。にぶい橙色。

44号住居址出土土器観察表

第II章 検出された遺構と遺物



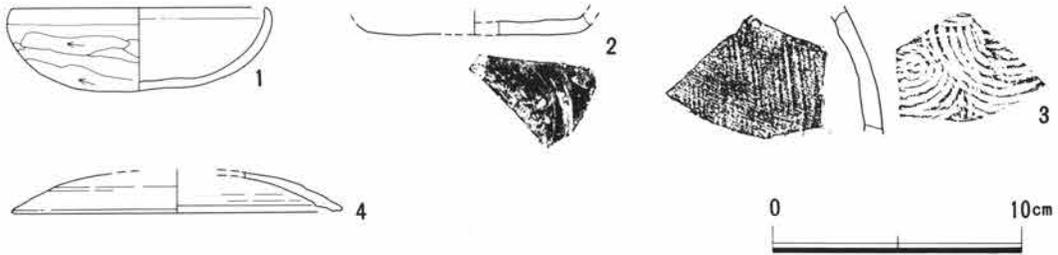
第130図 45号住居址

45号住居址（2区）〔第130・131図・図版32（遺構）・図版97（遺物）〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は、推定東西約3.2m、南北約3.2mで、隅丸方形と考えられる。確認面が床面とほぼ同一のため、壁は全く検出できなかった。床は地山の暗褐色土をたたいたものであるが、調査時に全てとばしてしまったため、状態は不明である。柱穴・周溝は検出できていない。

カマドは、東壁中央部分に設けられたと思われ、径93cm×80cmの楕円形状の掘りこみにより燃焼部を造っている。煙道と壁の関係は明瞭ではないが、ほとんど突出はしていないと考えられる。燃焼部両側には、幅55cm、厚さ15cmの袖の基部の粘土が残っていたが、右側のものは攪乱により残りが悪い。また、燃焼部西側ではコブシ大の角閃石安山岩が見られ、支脚の可能性も考えられる。

遺物は、カマド内より土師器（1）、須恵器杯の小片が出土した。



第131図 45号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	カマド 1/2残存	1	口径 10.6 器高 3.3	口唇鋭く、口縁短かく内反ぎみ、口縁体部緩い稜平底ぎみ。	口縁内外面横ナデ。体部一底部不定ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化やや硬質。橙色。
杯 須恵器	カマド内 底部小片	2	底径 8.8	平底。器壁薄い。	外面回転ヘラケズリ。内面回転横ナデ。	砂粒少ない。還元、硬質。灰色。
甕 須恵器	覆土 小片	3		器壁やや厚い。	外面平行叩キ痕。内面青海波状アテ痕。	微砂粒、気泡含む還元、硬質。灰色。
蓋 須恵器	覆土 小片	4	径 13.4	体部中位浅い凹帯。内面端部平坦。浅い段による身受け。	外面手持ちヘラケズリ後、ナデ。内面回転横ナデで身受け作る。	砂粒少ない。還元、硬質。灰色。

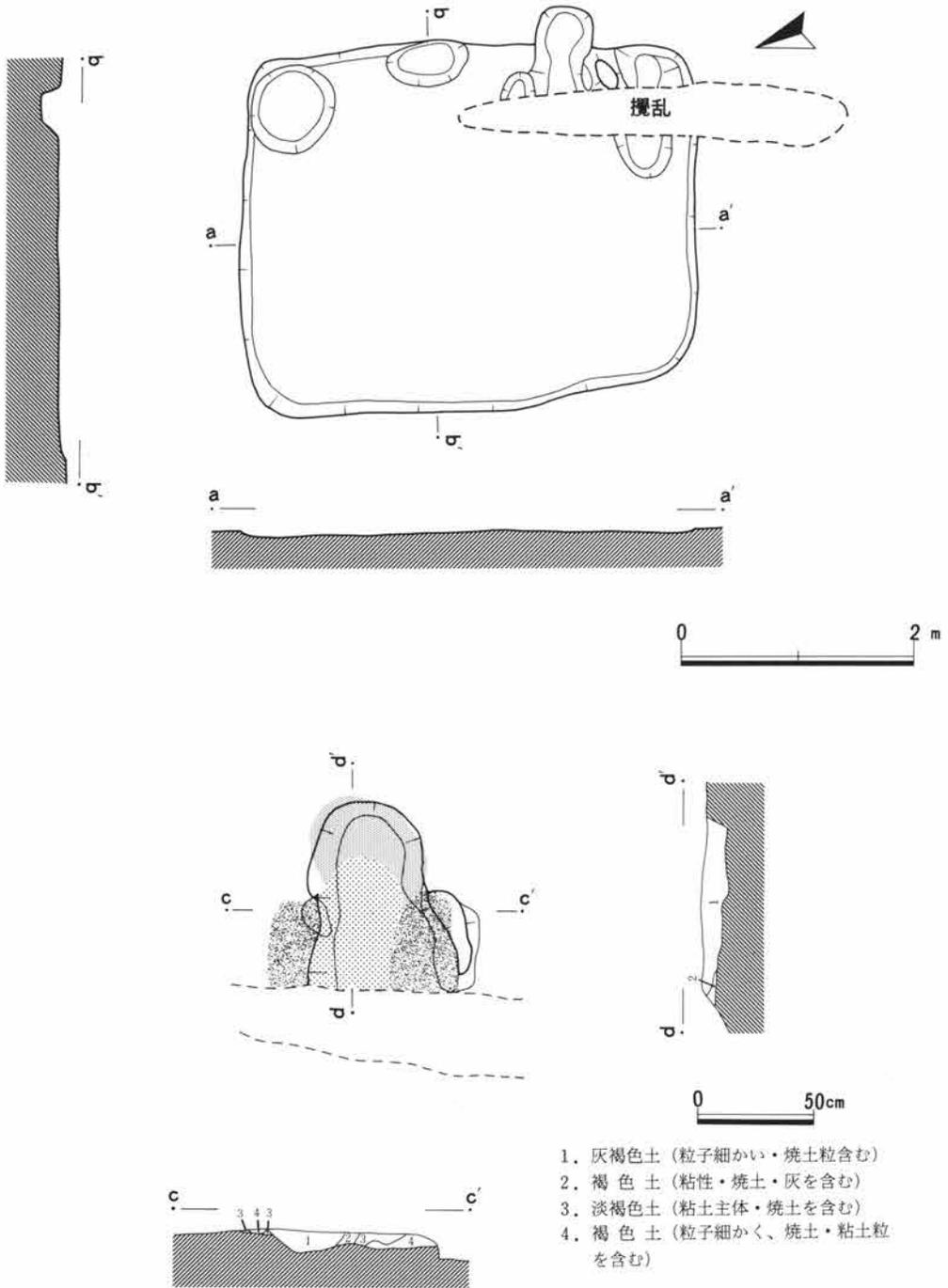
45号住居址出土土器観察表

46号住居址（2区）〔第132・133図・図版32（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は、東西約3.1m、南北約3.9mの南北が長い隅丸長方形である。確認面と床面の差がほとんどなかったため、壁は1cm程度しか検出できなかった。床は、地山の暗褐色粘質土をたたいているが、カマド付近には薄く粘土、焼土の張り床が見られた。柱穴・周溝は確認されていない。

カマドは東壁南寄りに設けられ、短径4.7cmの楕円形の掘りこみにより燃焼部が造られる。燃焼

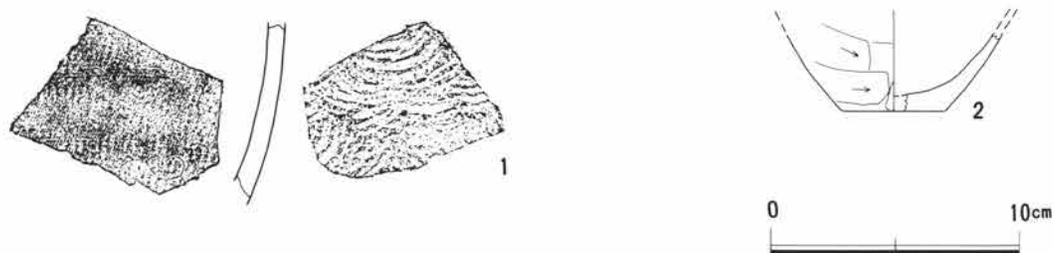
第II章 検出された遺構と遺物



第132図 46号住居址

部先端は、煙道として壁外へ突出する。燃烧部両側には、袖基部の粘土が残っていた。燃烧部、袖、共に西側を攪乱溝によって壊されている。カマド右側には、径約110cm×50cm、深さ約10cmの掘りこみがあり、焼土・炭化物を含む覆土をもっていた。貯蔵穴とも考えられるが、中央を攪乱によって切断されており、詳細は不明である。東壁北寄り及び北東隅には、楕円形と円形の掘りこみがあるが、本住居址よりは新しい。

遺物は、床面付近及び覆土中より、土師器・須恵器の小片が若干みられただけである。



第133図 46号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 須恵器	床面直上 小片	1		やや器壁厚い。	外面平行叩き痕。内面青海波 アテ痕。	微砂粒含む。還元、 硬質。灰色。
甕 土師器	覆土 底部小片	2	底径 4.0	底部小さな平底状。	外面胴部、底部不定ヘラケズ リ。内面ナデ。	砂粒含む。酸化や や軟質。灰黄褐色。

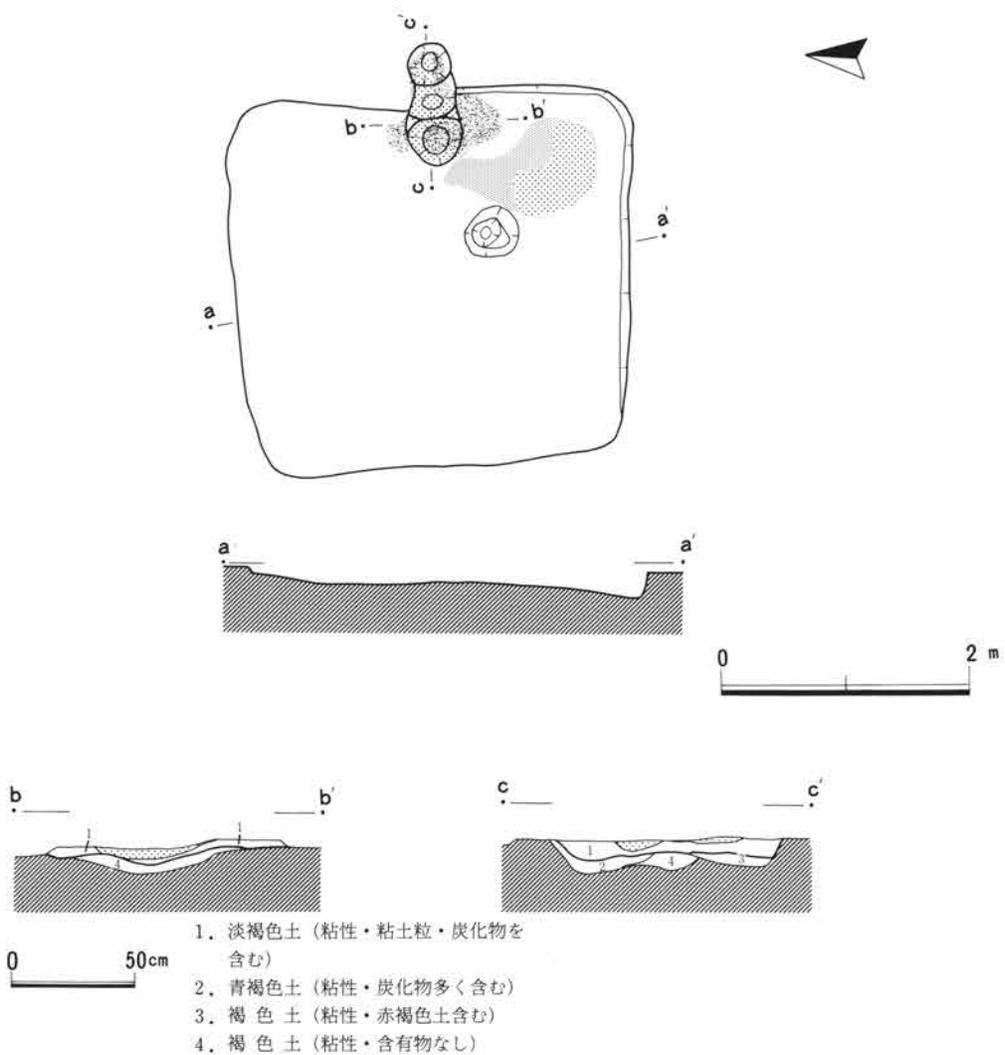
46号住居址出土土器観察表

47号住居址（2区）〔第134図・図版32（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模、平面形は不明である。確認面と床面の差がほとんどなく、検出された床は南東隅と南辺の高さ2～3cmだけである。床は、地山の暗褐色粘質土をたたいたと思われるが、南東部分を除いて確認段階ですでにとぼしてしまった。カマド右前面には、焼土・粘土の薄い張り床が見られた。カマドの南西に、径40cm×45cm、深さ28cmのピットがあり、形状・位置より柱穴と考えられるが、対応する位置には何らピットは検出されなかった。周溝は確認されていない。

カマドは東壁に設けられ、径40cm×40cmで3ヶ所の底が一行に並ぶ長円形の燃烧部を造る。全体の約 $\frac{1}{2}$ は、壁外へ突出して煙道となる。袖は、僅かに燃烧部左右に若干の基部粘土が残るのみである。

遺物は、確実なものは検出されなかった。



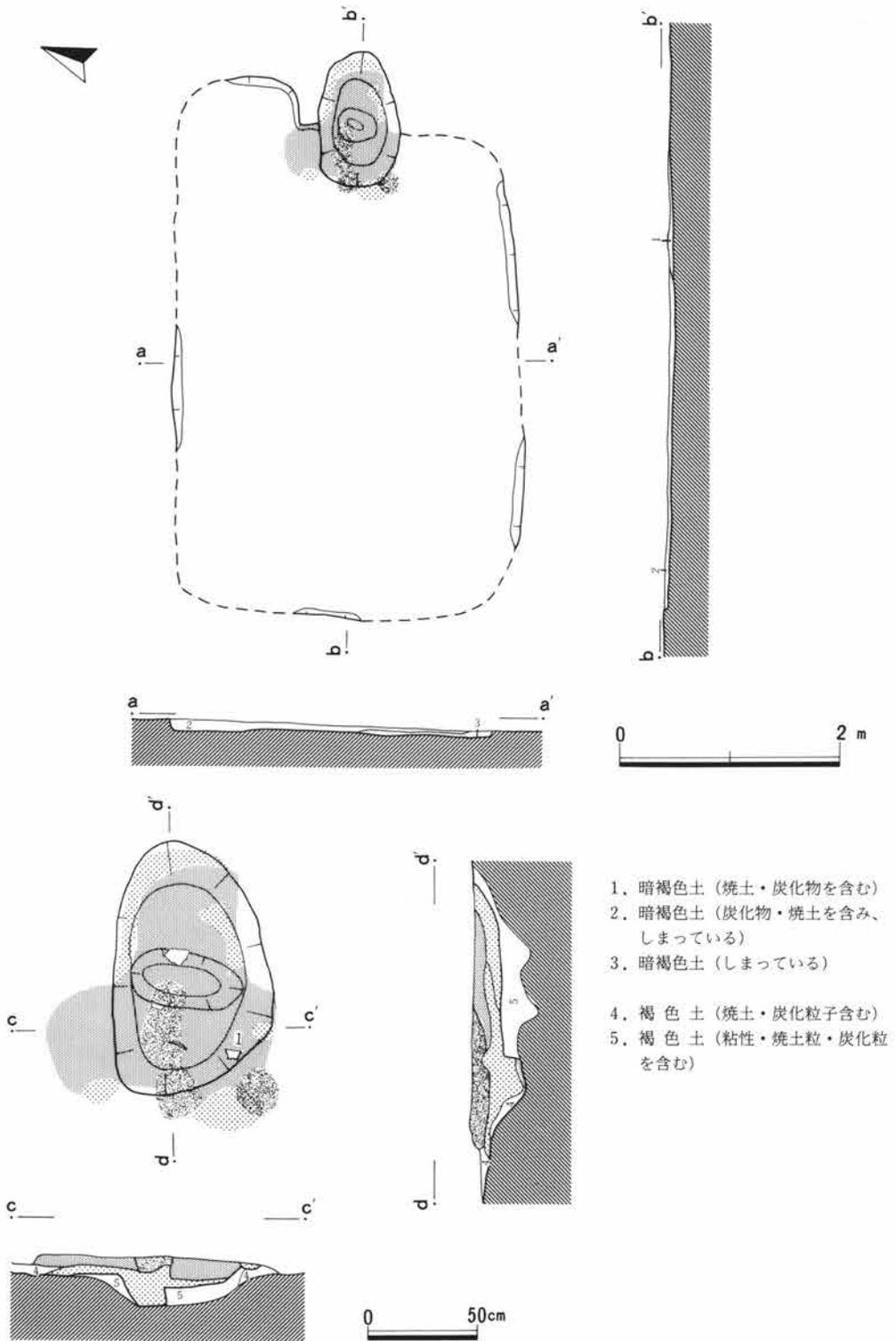
第134図 47号住居址

49号住居址 (1区)〔第135・第136図・図版33 (遺構)〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は4.3m×3.1mで長方形を呈するが、カマドに向かって左壁が4.8mと長くなっている。プラン確認段階で全体的に下げ過ぎ、壁は一部確認したにすぎない。床面は第4層黒褐色土層中につくられており、黄褐色粘質土で貼り床されているものの、カマド付近を除いて軟弱である。柱穴および壁周溝は確認されていない。

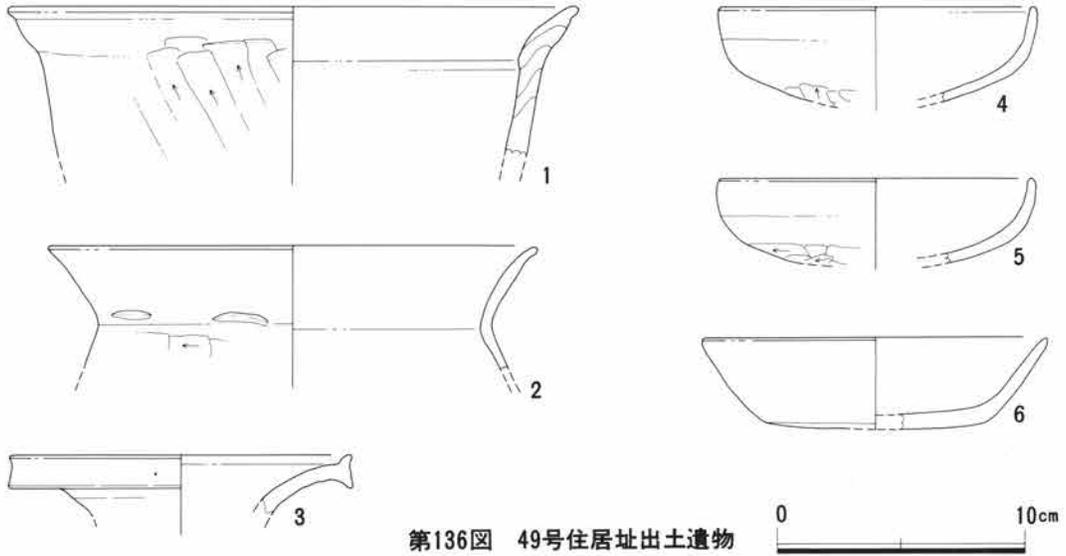
カマドは、東壁を楕円形の皿状に掘りくぼめ、基底部に粘質土を敷き、黄褐色粘土で袖部をつくっている。

出土遺物は、カマド内から土師器甑・甕口縁部片 (1・2) があるが、その他に住居址覆土中より土師器杯、須恵器長頸壺の破片が確認されている。



第135図 49号住居址

第II章 検出された遺構と遺物



第136図 49号住居址出土遺物

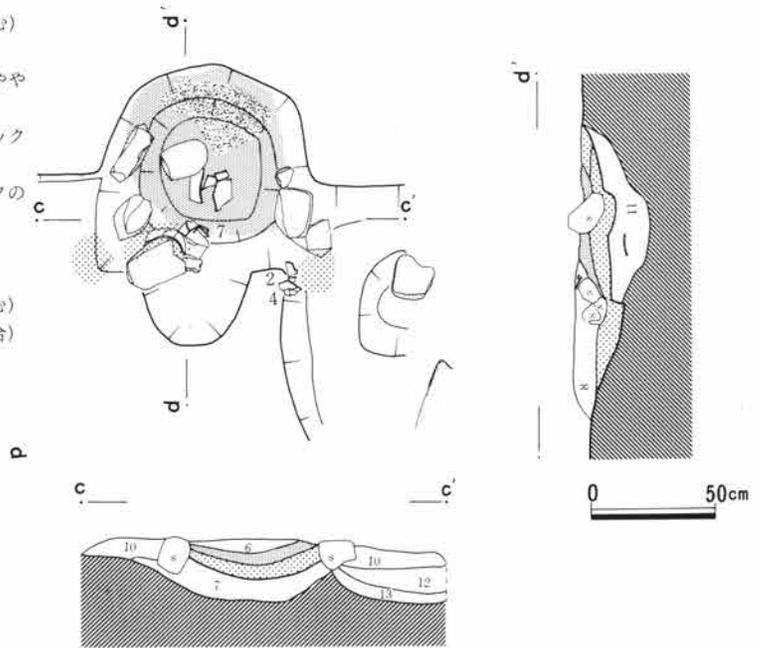
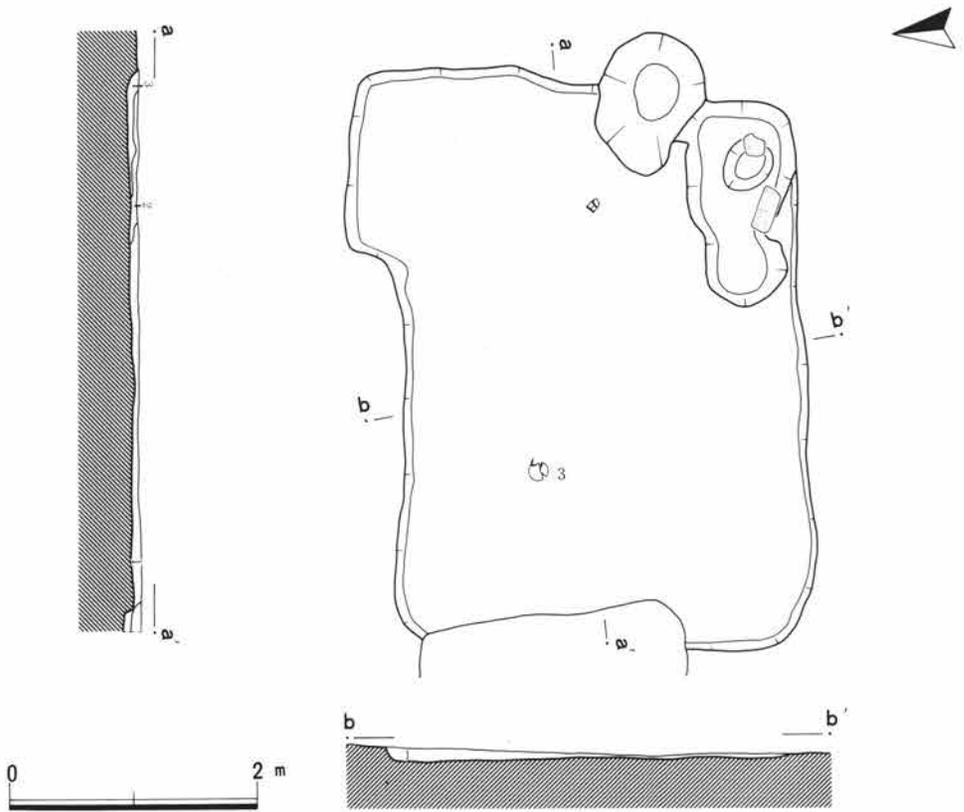
器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
飯 土師器	カマド内 口縁小片	1	口径 22.6	口縁部厚く、口唇部薄い。口唇部下外面凹帯。口縁部外傾。頸部内面稜。	口縁部内外面・胴部内面横ナデ。胴部外面へラケズリ。	砂粒石英含む。酸化、硬質。にぶい赤褐色。
甕 土師器	床下 口縁部 $\frac{1}{2}$	2	口径 17.8	口縁部外傾、口唇部外反。器壁薄い。	口縁部内外面横ナデ。	砂粒含む。酸化、硬質。褐色。
壺 須恵器	覆土 口縁小片	3	口径 13.6	口縁部外傾し断面台形状、上下内面下に稜。頸部強く外反。	内外面回転横ナデ。	微砂粒気泡含む。還元、硬質。灰色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	4	口径 12.6	口縁部内反。丸底状傾向。	口縁部内外面横ナデ。体部底部不定へラケズリ。内面ナデ。	微砂粒含む。酸化、硬質。にぶい褐色
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	5	口径 12.6	口縁部内反。平底状傾向。	全面磨減、口縁部内外面横ナデ。体部底部へラケズリ。	砂粒含む。酸化、硬質。にぶい橙色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	6	口径 14.0 器高 3.6	口縁部体部間稜なく外傾。体部底部間緩い稜。平底。	全面磨減。口縁部内外面横ナデ。体部底部へラケズリ。	砂粒含む。酸化やや軟質。にぶい黄褐色。

49号住居址出土土器観察表

50号住居址（1区）〔第137・138図・図版33（遺構）・図版97（遺物）〕

第4層黒褐色土面において確認された。本住居址埋没後に28号土坑によって、西壁および床面の一部が切られている。規模は4.4m×3.2mで長方形を呈するが、カマドに向って左壁に1.4m×0.4mの張り出し部が存在する。壁はやや傾斜をもって立ちあがっているが、プラン確認段階で全体的に下げすぎたため、5～10cmと浅い。

床面はやや粘性をもつ第4層黒褐色土中につくられており、この面をたたいて床面としているが、カマドおよび中央部を除いて軟弱であり確認は容易ではなかった。柱穴および壁周溝はない。

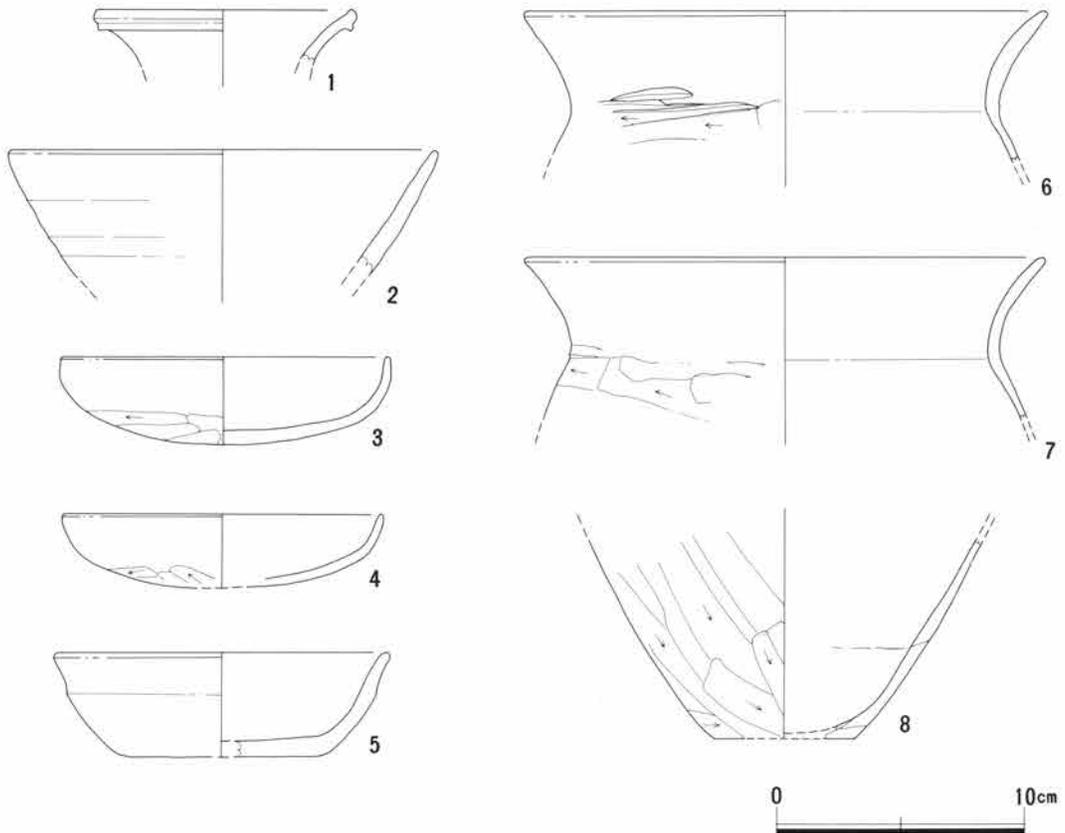


第137図 50号住居址

第II章 検出された遺構と遺物

カマドは東壁の中央やや右寄りに付設され、壁および床面を皿状に掘りくぼめた後に、暗褐色土で固めて基底部をつくる。その際、砂岩質の截石を埋め込んで袖部の芯としている。カマドの右側、壁に接して80cm×160cm、深さ約10cmの掘り込みがあり、中央部には径15cm、深さ20cmのピットがある。覆土は焼土および炭化粒子が混合した灰褐色土であるが、その位置、形態から貯蔵穴と考えられる。

出土遺物としては、床面直上から土師器杯(3)、カマド内より土師器杯(4・5)・須恵器杯(2)と長甕の口縁部(7)がある。また覆土・床下からも若干遺物が出土している。



第138図 50号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
壺 須恵器	床下 口縁小片	1	口径 10.2	口縁外面の断面は三角形の凸帯。頸部大きく外反。	内外面回転横ナデ。	砂粒少量。還元、硬質。内外面灰色。
杯 須恵器	カマド内 小片	2	口径 17.0	口唇鋭く、体部直線状に外傾。	内外面回転横ナデ。	砂粒含む。還元、軟質。内外面灰色。
杯 土師器	床面直上 1/2残存	3	口径 13.2 器高 3.6	口縁やや鋭く、口縁ほぼ直立。口縁体部稜なし、底部丸底状。	口縁内外面横ナデ。体部磨滅。底部縦横ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化やや硬質。明赤褐色。

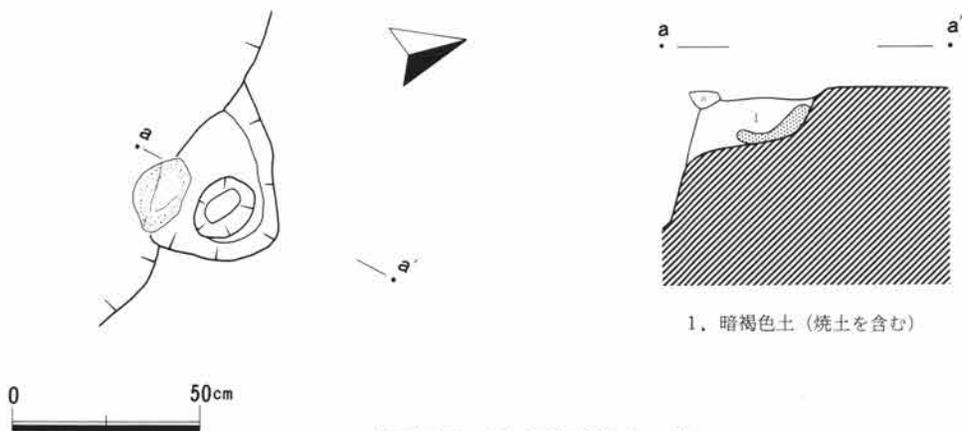
第4節 古代の竪穴住居址

杯 土師器	カマド内 小片	4		口縁やや外傾、口縁部稜なく、 底部丸底状。	口縁内外面横ナデ。体部磨減。 底部不定ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化や や硬質。にぶい橙。
杯 土師器	カマド内 1/2残存	5	器高 4.1	口唇僅かに内反。口縁外傾、 稜もって体部内反。平底。	口縁内外面横ナデ。体部底部 磨減、ヘラケズリか。内面ナ デ。	砂粒含む。酸化軟 質。にぶい橙色。
甕 土師器	床下 口縁小片	6	口径 20.8	口縁外反。胴部やや外傾。口 縁器壁やや厚い。	口縁内外面横ナデ。頸部横へ ラケズリ後、指ナデ。	微砂粒含む。酸化 やや硬質。にぶい 褐色。
甕 土師器	カマド内 口縁1/2	7	口径 21.0	口縁大きく外反。胴部やや外 傾。器壁薄い。	口縁内外面横ナデ。頸部へ ラケズリ後、指ナデ。	微砂粒多く含む。 酸化やや硬質。褐 色。
甕 土師器	覆土 底部1/2	8	底径 4.6	器壁薄い。底部平底で多角形 状。	胴部外面へラケズリ、底部 ヘラケズリ。内面輪積痕、ナ デ調整。	微砂粒多く含む。 酸化やや硬質。に ぶい黄褐色。

50号住居址出土土器観察表

62号住居址（1区）〔第139図〕

第4層暗褐色土面で確認された。2号特殊井戸によって切られており、カマド先端部が残存しているに過ぎない。底面には炭化物層が発見されたが、遺物は皆無であった。

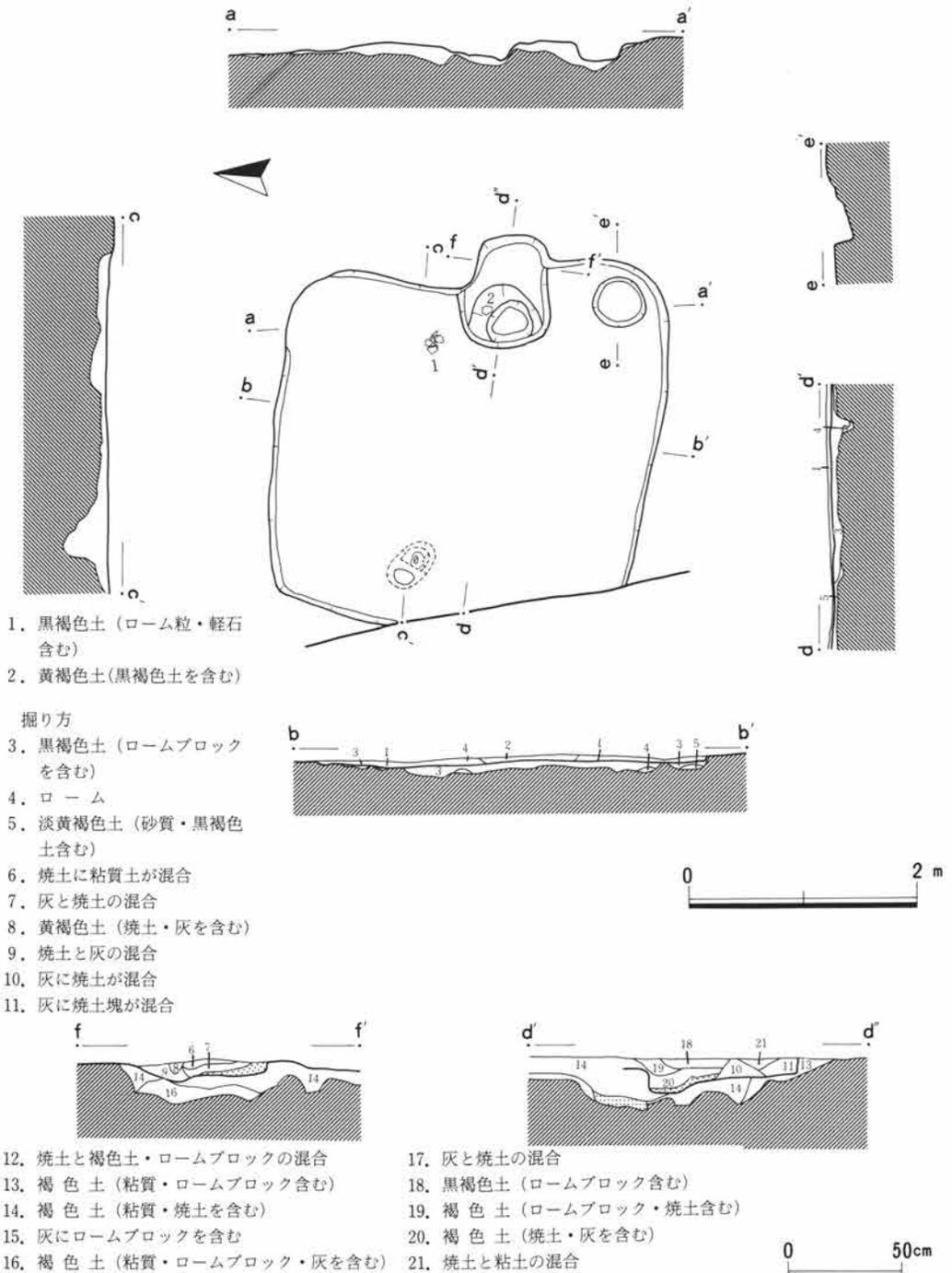


第139図 62号住居址(カマド)

63号住居址（2区）〔第140・141図・図版33（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は長辺3.5m、短辺3.0m、深さ4cmの隅丸方形を呈する。確認面にて床面が露出した部分もあり床面を追って壁を検出した。壁は直立に近く、床面は平坦で軟弱である。柱穴は検出できなかった。カマドは東壁南寄に位置し、確認面にて灰・焼土を検出したが、分布が著しい。カマド手前に浅い落ち込みがある。貯蔵穴はかまどの南側、住居址内南東隅に位置し、長辺50cm、短辺45cm、深さ12cmの円形を呈する。遺物はカマドに集中しており、

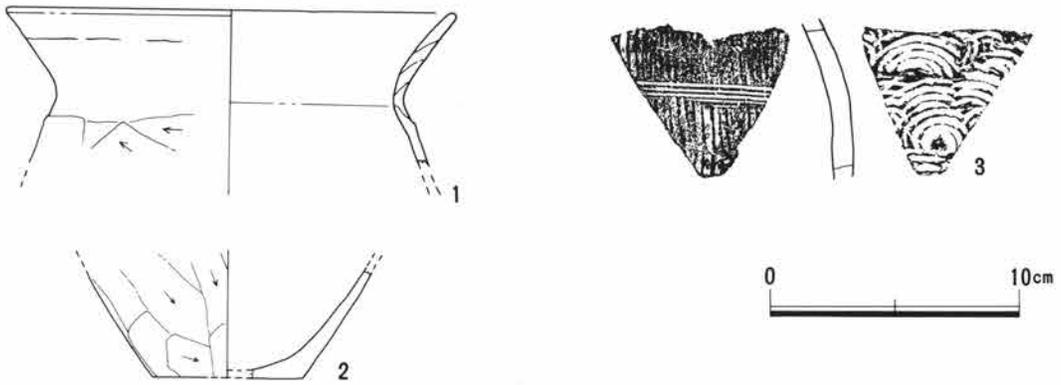
第II章 検出された遺構と遺物



第140図 63号住居址

第4節 古代の竪穴住居址

土師器甕(2)が底面近くより発見された。また床面直上からは土師器甕片(1)が、覆土中からは須恵器小破片が出土している。



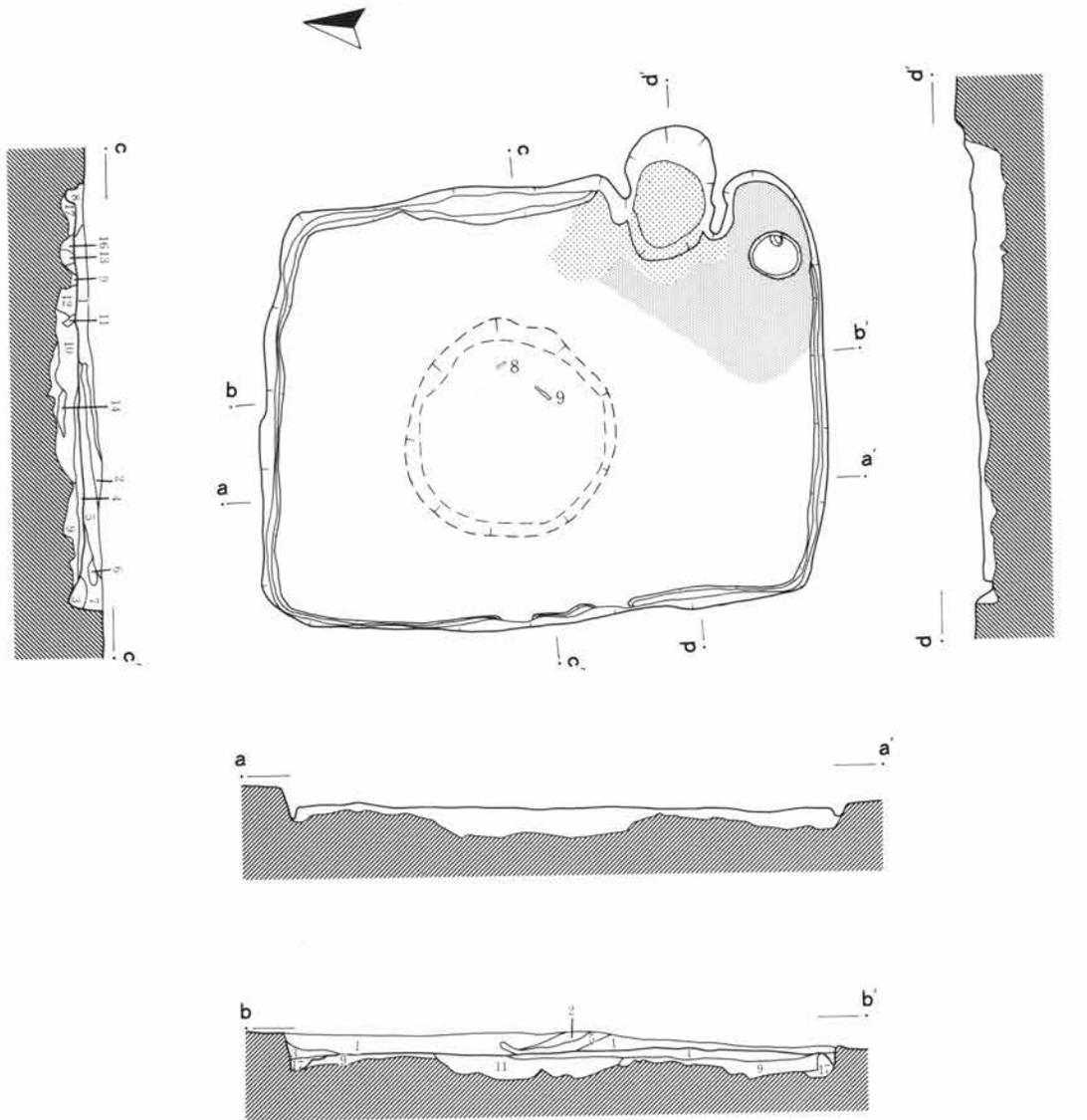
第141図 63号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	床面直上 口縁小片	1	口径 18.0	口縁大きく外傾。胴部やや外傾。器壁薄い。	口縁内外面横ナデ。頸部横ヘラケズリ後、指ナデ。	微砂粒含む。酸化やや硬質。明赤褐色。
甕 土師器	カマド 底部小片	2	底径 6.0	器壁薄い。平底で多角形状。	胴部ヘラケズリ。底部不定ヘラケズリ。内面ヘラ調整痕。	砂粒含む。酸化やや硬質。赤褐色。
甕 須恵器	覆土 小片	3		器壁厚く、内反。	外面平行叩キ痕後、櫛描平行線文、内面青海波状アテ痕。	砂粒少量。還元、硬質。灰色。

63号住居址出土土器観察表

64号住居址(2区)〔第142~144図・図版34(遺構)・図版97(遺物)〕

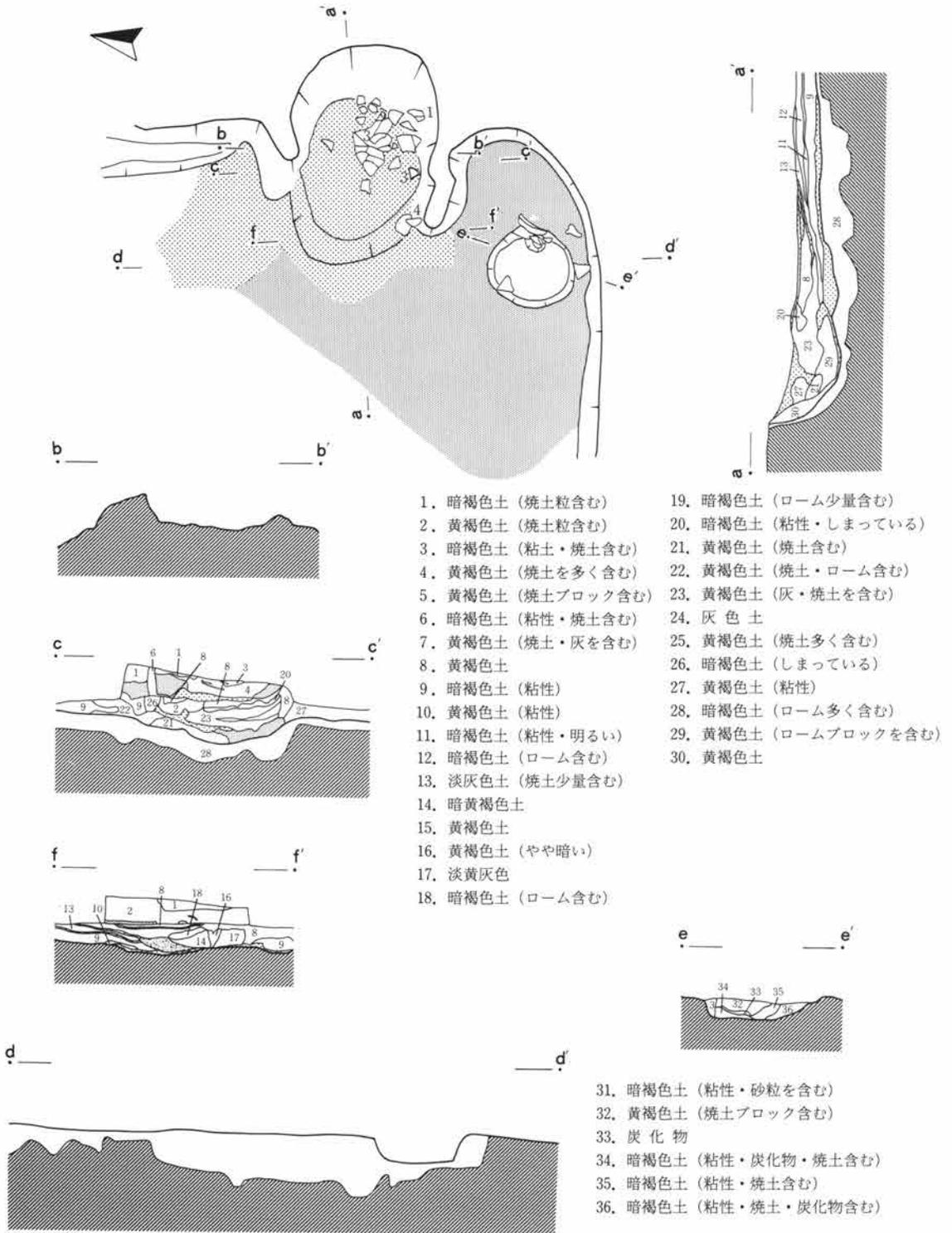
第4層黒褐色土面にて確認された。長辺4.4m、短辺3.5m、深さ15cmの長方形を呈する。壁は直立し、床面は平坦で貼床され堅緻である。柱穴は検出できず、周溝は狭い部分と広い部分とあるが全周する。カマドは東壁南寄に位置し、焼土・炭化物が焚口部手前に広く分布する。袖材は角閃石安山岩を使用している。カマド手前には、灰層を含む円形の落ち込みがある。貯蔵穴はカマドの南側、住居東南隅に位置する。直径約40cm、深さ8cmの円形プランを呈する。遺物は、住居址中央部床面直上から刀子2点(8・9)、カマド内には土師器甕(1・2・3)が散在していた。また覆土中より土師器甕、須恵器杯、同甕の破片が出土している。



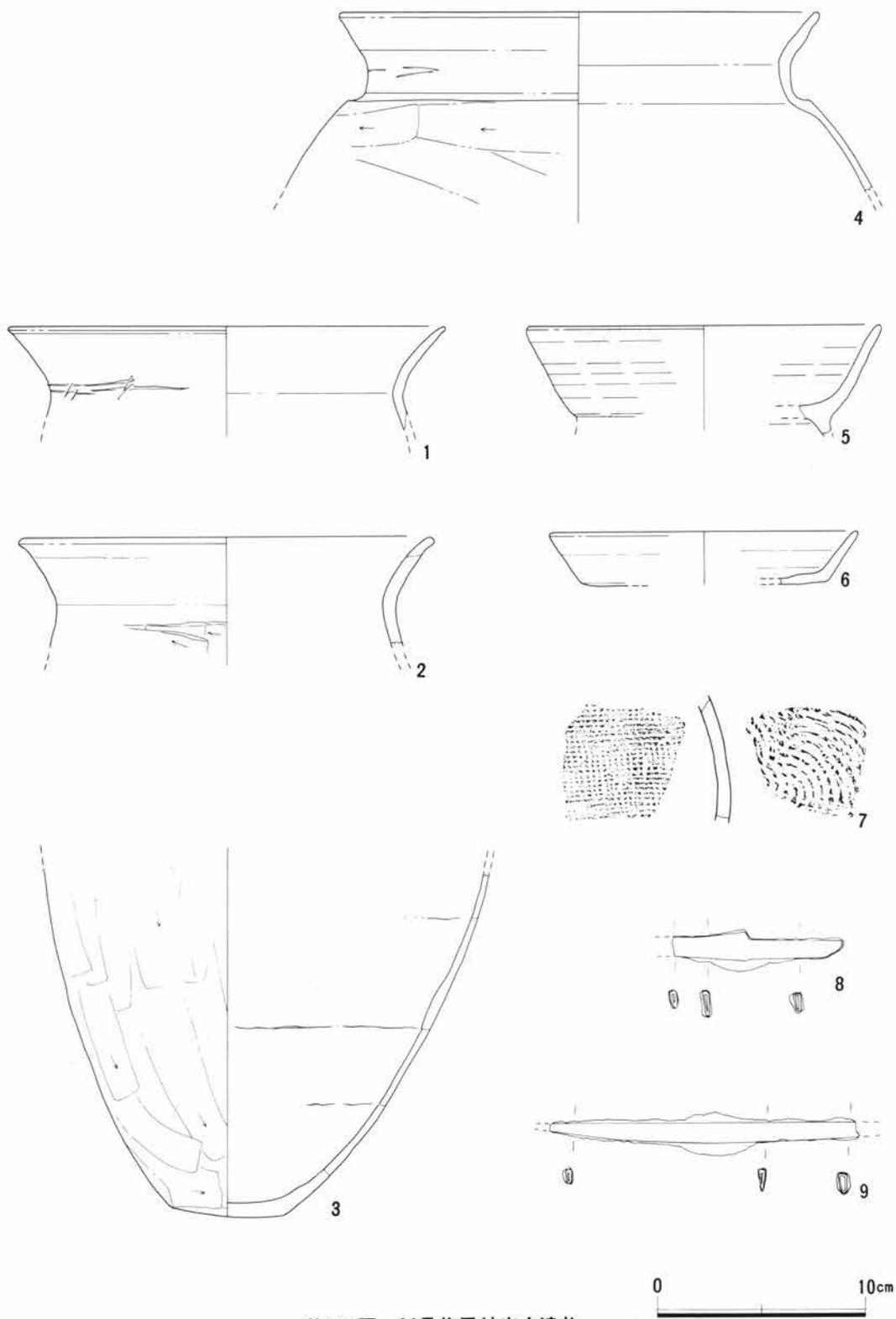
- | | |
|----------------------------|-------------------------|
| 1. 暗褐色土 (多量のC軽石含む) | 10. 暗褐色土 (ローム小ブロックを含む) |
| 2. 暗褐色土 (焼土ブロック・ロームブロック含む) | 11. 暗褐色土 (軽石を含む) |
| 3. 暗褐色土 (多量のロームブロック含む) | 12. 暗褐色土 (ロームブロックを含む) |
| 4. 暗褐色土 (粘性・軽石・ローム粒含む) | 13. 暗褐色土 (やわらかい) |
| 5. 暗褐色土 (ローム粒・焼土含む) | 14. 暗褐色土 (軽石を含み、しまっている) |
| 6. 暗褐色土 (粘性) | 15. 黄褐色土 (ローム・暗褐色土を含む) |
| 7. 暗褐色土 (粘性・ローム・焼土含む) | 16. 暗褐色土 (しまっている) |
| 8. 暗褐色土 (ローム・炭化物含む) | 17. 黄暗褐色土 (暗褐色粘土粒を含む) |
| 9. 暗褐色土 (多量のロームブロック含む) | |



第142図 64号住居址



第143図 64号住居址カマド



第144図 64号住居址出土遺物

第4節 古代の竪穴住居址

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	カマド内 口縁 $\frac{1}{2}$	1	口径 21.0	口縁外傾。胴部直立傾向。器壁薄い。	口縁内外面横ナデ。頸部横ヘラケズリ。	微砂粒含む。酸化やや硬質。外面橙色。内面褐色。
甕 土師器	カマド内 口縁小片	2	口径 19.6	口唇外反。口縁外傾。胴部直立傾向。器壁薄い。	口縁内外面横ナデ。頸部ヘラケズリ	微砂粒含む。酸化、硬質。明赤褐色。
甕 土師器	カマド内 胴部 $\frac{1}{2}$	3	底径 5.5	胴部緩く直線状に内反。底部やや丸底ぎみ。器壁薄い。	胴部 \downarrow ヘラケズリ。底部ヘラケズリ。内面輪積痕。ナデ調整。	微砂粒含む。酸化、硬質。明赤褐色。
壺 土師器	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$	4	口径 23.0	口縁外傾。頸部直立し断面「コ」の字形、下端顕著な稜。胴部大きく内反し、球形傾向。	口縁内外面横ナデ、胴部ヘラケズリ後、頸部ヘラナデ・指ナデ。内面ヘラ調整痕。	微砂粒含む。酸化やや軟質。外面にぶい橙色。内面灰褐色。
高台付椀 須恵器	覆土 口縁小片	5	口径 17.0	体部内反ぎみに外傾。高台断面三角形状で外傾。	内外面回転横ナデ。口縁外面自然釉。	砂粒・石含む。還元、硬質。灰色。
小形杯 須恵器	覆土 口縁小片	6	口径 19.6 器高 2.4	体部直線状外傾。稜をもって底部平底状。	体部内外面回転横ナデ。底部手持ちヘラケズリ調整。	砂粒少ない。還元、硬質。灰色。
甕 須恵器	覆土 小片	7		内反。	外面縦横平行タキ痕。内面青海波状アテ痕。	砂粒含む。還元やや軟質。灰色。
鉄製刀子	覆土	8	長さ 8.2 幅 2.0 厚さ 0.8	断面三角形の刃部と断面直方形の柄部。いずれも中空。刃部先欠損。		刃部形成あまい。
鉄製刀子	覆土	9	長さ 14.9 幅 1.9 厚さ 1.5	断面三角形の長大な刃部。中空。先端と柄部欠損。		64住-8と同一個体か？

64号住居址出土遺物観察表

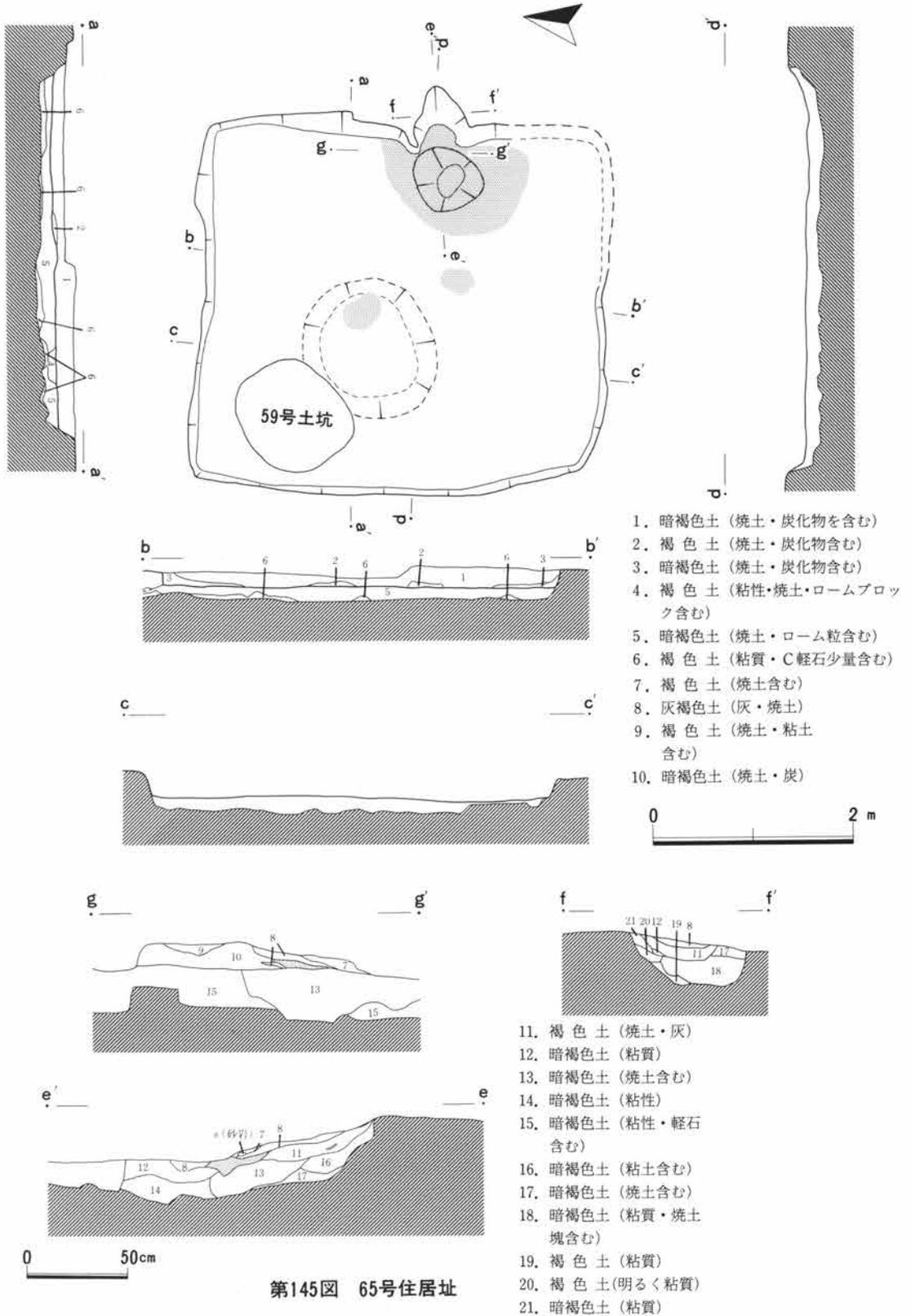
65号住居址（2区）〔第145・146図・図版34（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。66号住居址と北壁で一部重複しているが、新旧関係は不明である。また59号土坑が本住居址廃棄後に構築されている。本住居址の規模は3.7m×4.0mで、方形を呈する。壁はやや傾斜をもって立ちあがっているが、東南コーナー部付近では攪乱のため検出できなかった。

壁はやや傾斜をもって立ちあがり、床面はローム層を掘り込み、ロームブロック・褐色粘質土の混土で貼床している。柱穴および壁周溝はない。カマドは東壁中央やや南寄りに位置し、壁を幅40cm、奥行き50cmの円頂形に掘り込んでいる。遺物は、カマド周辺より少量出土した。

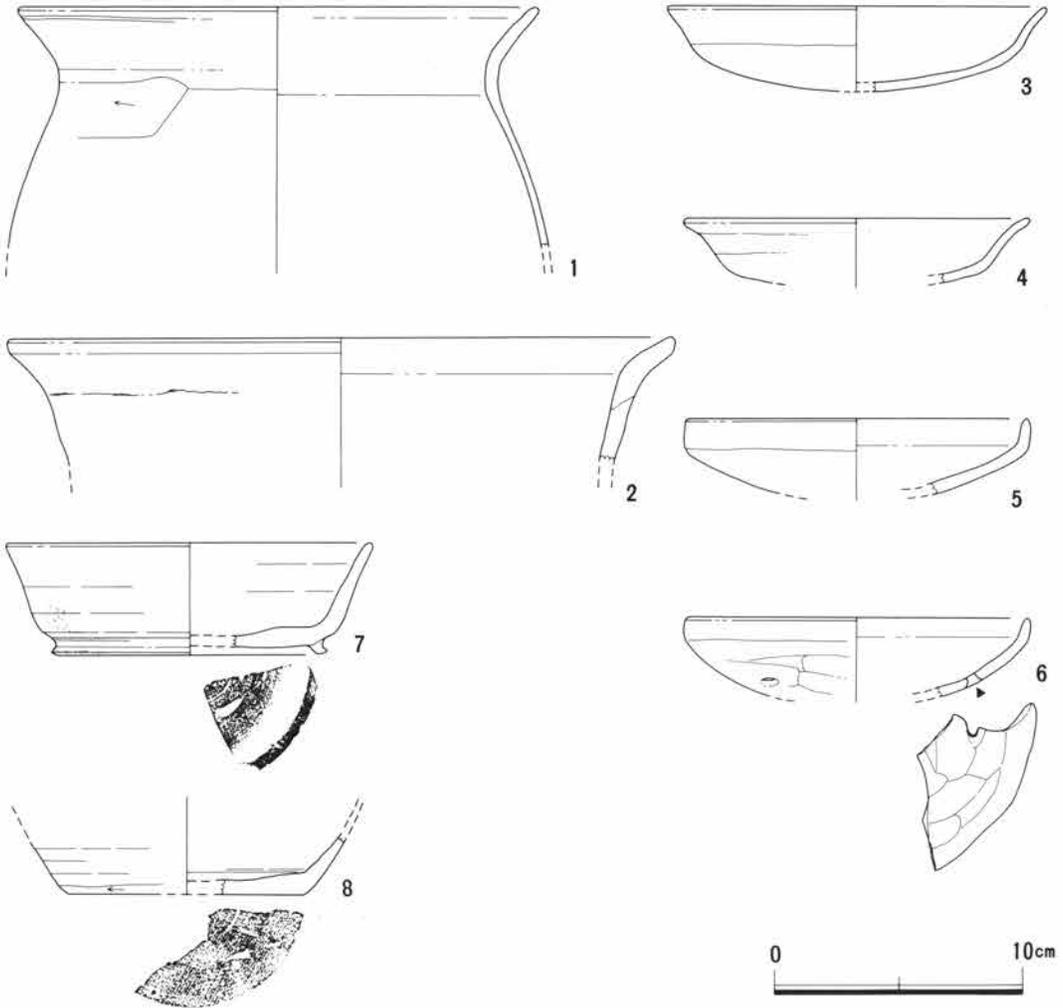
なお床下より、直径約1.3m、深さ約5cmの円形土坑が確認された。

第II章 検出された遺構と遺物



第145図 65号住居址

第4節 古代の竪穴住居址



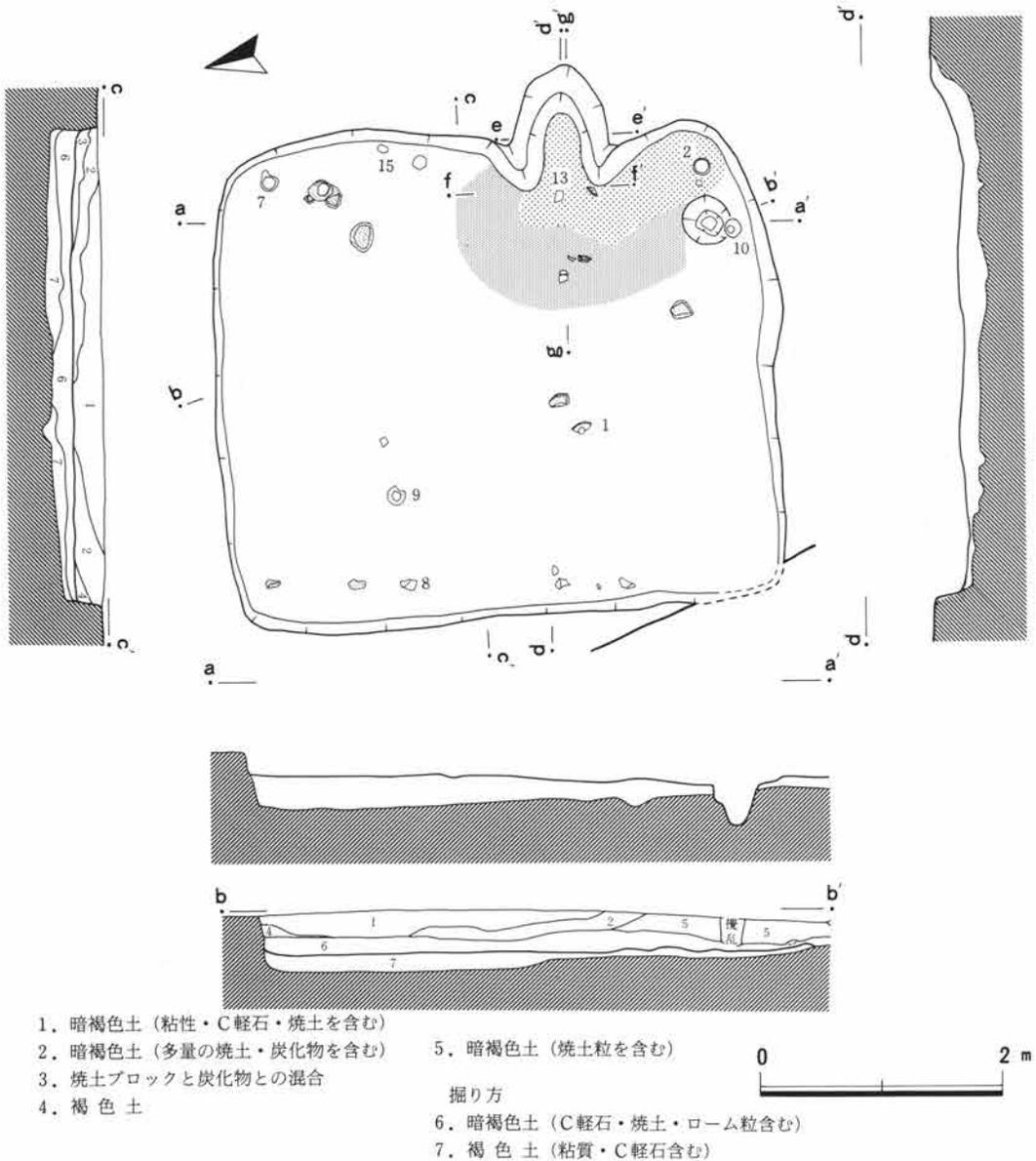
第146図 65号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	カマド内 口縁小片	1	口径 21.0	口縁短かく外傾。胴部内反きみ。最大径胴部中位。薄い。	口縁内外面横ナデ。頸部横方向にヘラケズリ後、指ナデ。	砂粒含む。酸化やや軟質。明褐色。
甕 土師器	覆土 口縁小片	2	口径 26.8	口縁短かく外傾。胴部直線状にやや内傾。器壁厚い。	口縁内外面横ナデ。頸部外面輪積痕、ナナメヘラケズリ。	砂粒含む。酸化やや硬質。明褐色。
杯 土師器	掘方覆土 1/3残存	3	口径 15.2 器高 3.4	口唇外反。口縁大きく外傾。緩い稜をもって体部丸底。	口縁内外面横ナデ。体部底部ヘラケズリ、磨滅。内面ナデ。	砂粒含む。酸化やや軟質。橙色。
杯 土師器	覆土 口縁小片	4	口径 13.8	口唇外反。口縁大きく外傾。緩い稜をもって底部浅い丸底。	口縁内外面横ナデ。体部底部ヘラケズリ。磨滅。内面ナデ。	砂粒含む。酸化やや軟質。橙色。
杯 土師器	覆土 口縁小片	5	口径 13.7	口縁短かく直立。口縁体部緩い稜。浅く、器壁やや厚い。	口縁内外面横ナデ。体部不定ヘラケズリ。内面ナデ。	砂粒含む。酸化やや硬質。におい橙。

第II章 検出された遺構と遺物

杯 土師器	覆土 口縁小片	6		口縁短かく外傾ぎみに直立。 口縁部稜なし。底部穿孔孔。	口縁内外面横ナデ。体部横へ ラ削り。穿孔焼成後、内面ナ デ。	砂粒含む。酸化や や硬質。にぶい橙。
椀 須恵器	覆土 1/2残存	7	底径 11.1 器高 4.5	口縁僅かに外反。体部緩く外 傾。高台断面菱形で外傾。	口縁体部内外面回転横ナデ。 底部右回転へラ削り。付高台。	砂粒含む。還元、硬 質。灰色。自然釉。
杯 須恵器	覆土 底部1/2	8	底径 9.5	底部平底。体部外傾。	体部内外面回転横ナデ。底部 右回転へラ削り。周縁削り。	砂粒含む。還元や や軟質。灰白色。

65号住居址出土土器観察表



- 1. 暗褐色土 (粘性・C軽石・焼土を含む)
- 2. 暗褐色土 (多量の焼土・炭化物を含む)
- 3. 焼土ブロックと炭化物との混合
- 4. 褐色土
- 5. 暗褐色土 (焼土粒を含む)
- 掘り方
- 6. 暗褐色土 (C軽石・焼土・ローム粒含む)
- 7. 褐色土 (粘質・C軽石含む)

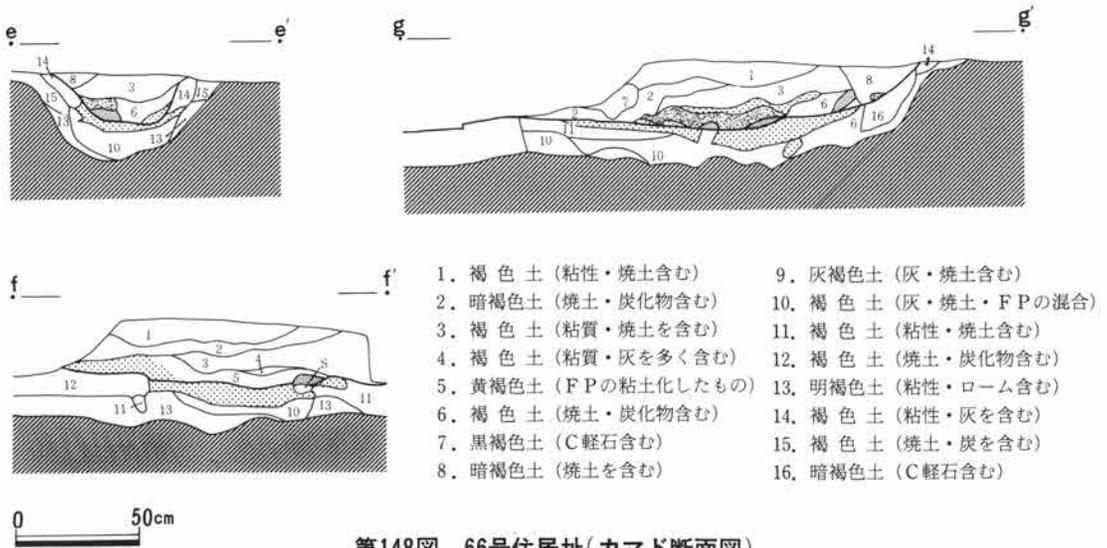
第147図 66号住居址

66号住居址（2区）〔第147～150図・図版35（遺構）・図版97（遺物）〕

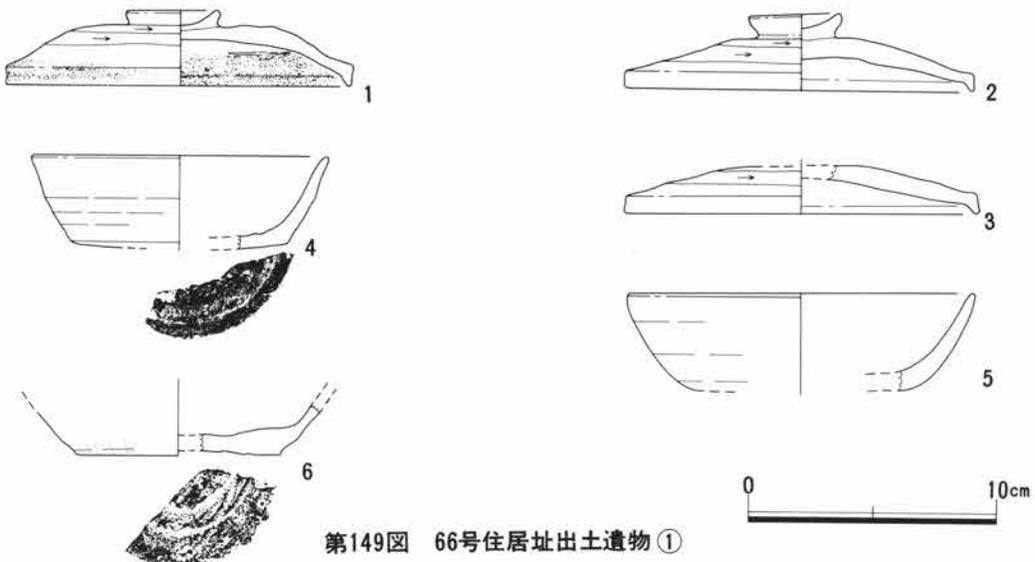
第4層黒褐色土面で確認された。65号住居址と南壁が一部重複しているが、新旧関係は明らかにすることは出来なかった。規模は4.0m×4.6mで、やや隅丸の長方形を呈する。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、床面はローム層を掘り込み、褐色粘質土とC軽石を含む粘質土の混土で貼床をしている。

カマドは東壁の中央やや南側に位置し、壁を幅60cm、奥行き70cmの円頂形に掘り込み、燃焼部は壁外に造り出している。貯蔵穴は東南隅に位置し、径40cm、深さ30cmの円形を呈する。

出土遺物は、床面付近から須恵器杯蓋（1・2）、カマド内から土師器杯（13）、土師器甕口縁部（19）があるが、その他覆土中からの出土も少なくない。

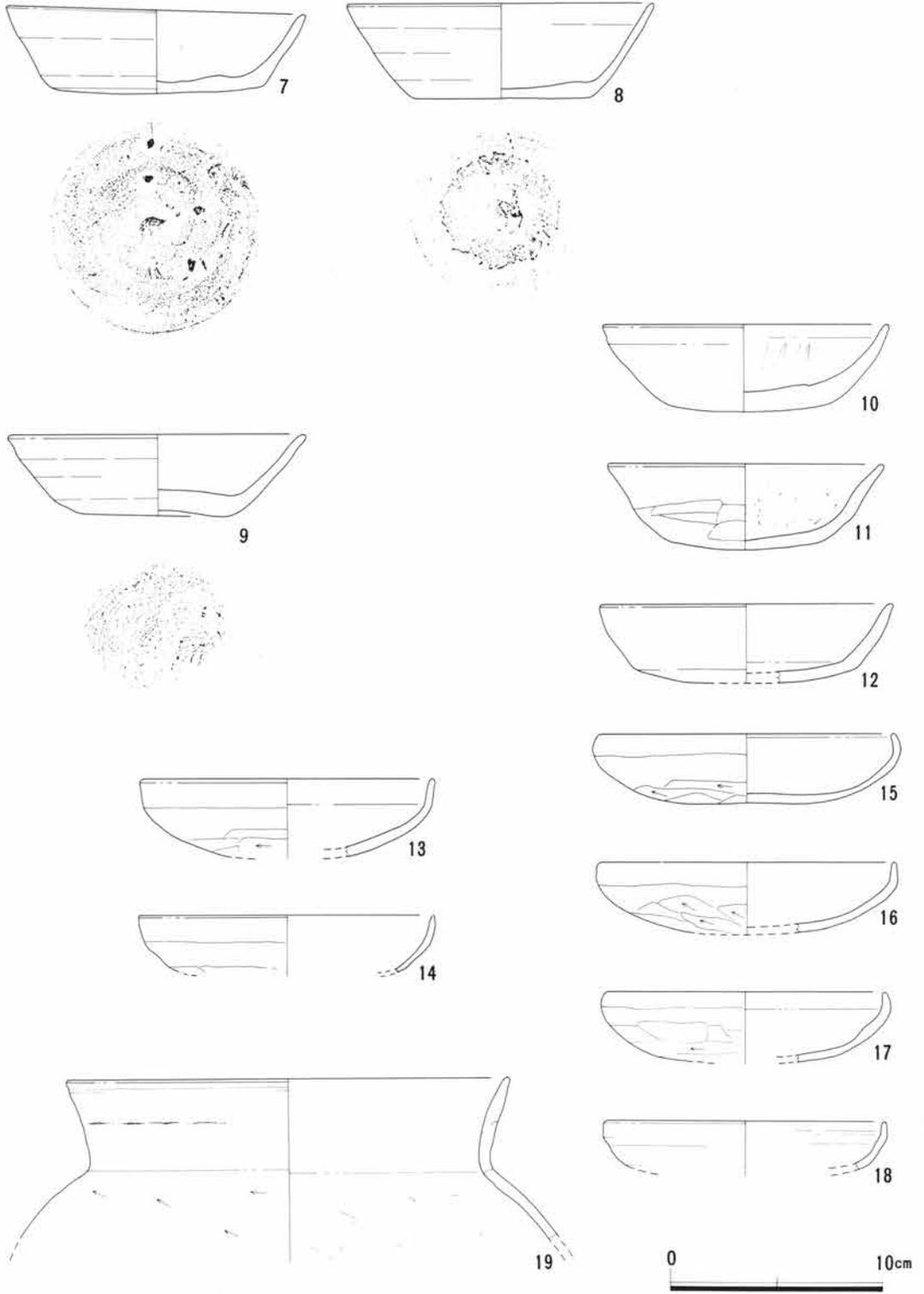


第148図 66号住居址(カマド断面図)



第149図 66号住居址出土遺物①

第II章 検出された遺構と遺物



第150図 66号住居址出土遺物②

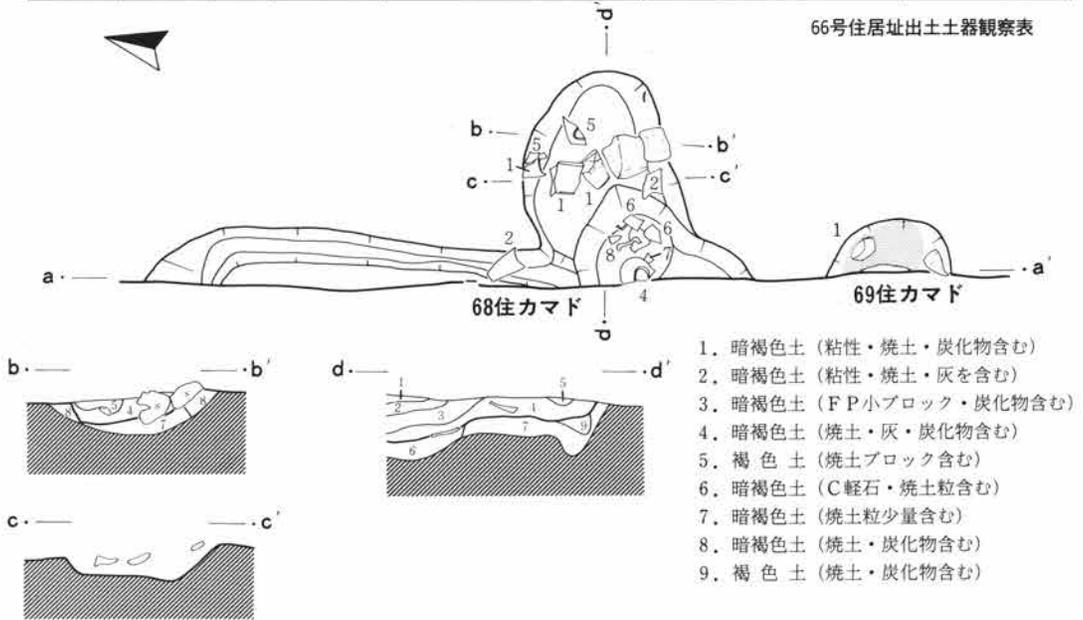
第4節 古代の竪穴住居址

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
蓋 須恵器	4cm上 ほぼ完形	1	鈕径 3.8 口径 13.8 器高 3.0	鈕扁平凹形。頂部僅か凹む。 端部稜明瞭で直立。端部下身 受けとなり断面三角形。	外面肩部右回転ヘラケズリ。 内外面回転横ナデ調整、内外 面重ね焼き痕状に自然釉付 着。	微砂粒含む。還元 やや硬質。灰色。 粘土粒付着。
蓋 須恵器	床面直上 完形	2	鈕径 3.8 口径 14.2 器高 3.1	鈕扁平凹形。頂部水平。端部 稜明瞭で直立。径歪む。端部 下身受けとなり断面三角形。	外面肩部回転ヘラケズリ。内 外面右回転ナデ調整。	微砂粒気泡含む。 還元硬質。灰色。
蓋 須恵器	覆土 1/3残存	3	口径 14.3	端部稜明瞭でやや外傾。端部 下身受けとなり断面三角形。	外面肩部右回転ヘラケズリ。 内外面回転横ナデ調整。	微砂粒気泡含む。 還元やや硬質。灰 色。
杯 須恵器	覆土 1/3残存	4	底径 8.8	口縁僅かに外反。体部内反ぎ みに外傾。底部平底。浅い。	口縁体部内外面回転横ナデ。 底部回転ヘラ切り後ナデ調整	微砂粒含む。還元 やや硬質。灰色。
杯 須恵器	覆土 1/3残存	5	口径14.1	口縁体部稜なく内反して外 傾。器壁やや厚い。	内外面回転横ナデ。	砂粒石含む。還元 やや硬質。灰色。
杯 須恵器	覆土 底部1/3	6	底径 9.2	体部大きく外傾。底部平底。 内面に粘土粒残る。	底部回転ヘラ切り後、粗いナ デ調整。体部内面調整粗雑。	微砂粒含む。還元 硬質。自然釉。灰 色。
杯 須恵器	8cm上 ほぼ完形	7	口径 14.1 底径 10.1 器高 3.9	口縁体部緩い稜をもち直線状 に外傾。底部やや丸底ぎみ。 やや歪む。	口縁体部右回転横ナデ。底部 回転ヘラ切り後ナデ調整。	微砂粒含む。還元 やや硬質。灰色。
杯 須恵器	22cm上 1/3残存	8	口径 14.5 底径 8.3 器高 4.4	口縁体部稜なくやや内反ぎ み。直線状に外傾。底部平底。	口縁体部右回転横ナデ。底部 回転ヘラ切り後粗いナデ調 整。	微砂粒気泡含む。 還元やや硬質。灰 白色。
杯 須恵器	20cm上 ほぼ完形	9	口径 14.0 底径 6.9 器高 3.8	口縁体部浅い凹帯。体部直線 状に外傾。底部やや上げ底ぎ み。	体部内外面右回転横ナデ。底 部右回転糸切り後、周縁僅か にヘラナデ調整。	砂粒含む。還元や や硬質。灰色。
杯 土師器	床面直上 ほぼ完形	10	口径 13.5 器高 4.1	口唇部僅かに外反。口縁短か く外傾。稜緩く、底部平底状。 器壁やや厚い。	口縁内外面回転横ナデ。体部 底部ヘラケズリ後ナデ調整。 体部内面ナデ後放射状ミガキ 暗文。	砂粒石含む。酸化 やや軟質。におい 橙色。
杯 土師器	覆土 1/3残存	11	口径 12.9 器高 4.0	口唇外反。口縁外傾。僅かな 稜で体部内反。底部平底。	口縁内外面横ナデ。体部・底 部不定ヘラケズリ。内面ナデ 後放射状ヘラミガキ暗文。	微砂粒含む。酸化 やや硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 1/3残存	12	口径 13.7 器高 3.6	口縁外傾。稜緩く体部内傾。 底部平底状。	口縁内外面横ナデ。体部底部 ヘラ削り後ナデ調整。内ナデ	砂粒含む。酸化軟 質。におい橙色
杯 土師器	カマド内 1/3残存	13	口径 13.7	口縁短かく直立。口縁と体部 の間に稜なく、底部丸底状。	口縁内外面横ナデ。体部・底 部不定ヘラズリ。内面ナデ。	砂粒含む。酸化硬 質。褐色。
杯 土師器	覆土 口縁小片	14	口径 13.9	口縁短かく内反ぎみやや外 傾。緩い稜で体部底部に分か れる。	口縁内外面横ナデ。体部ヘラ ケズリ後、指ナデ。	微砂粒含む。酸化 硬質。褐色。

第II章 検出された遺構と遺物

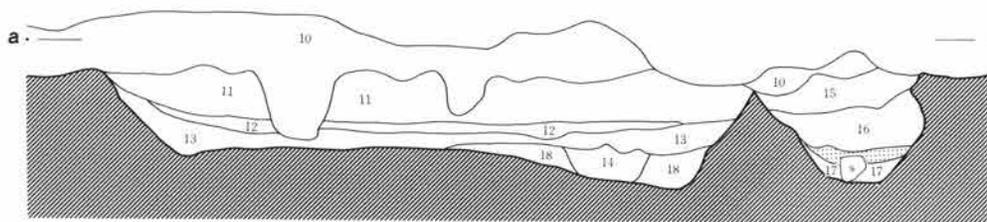
杯 土師器	10cm上 1/2残存	15	器高 3.2	口縁短かく内反ぎみに直立。 口縁体部稜なく平底状。	口縁内外面横ナデ。体部底部 不定ヘラケズリ。内面ナデ。	微砂粒含む。酸化、 硬質。にぶい橙色。
杯 土師器	覆土 1/2残存	16	口径 13.8	口縁短かく内反ぎみに直立。 口縁体部稜なく丸底。	口縁内外面横ナデ。体部底部 縦横ヘラケズリ。内面ナデ。	微砂粒含む。酸化、 硬質。にぶい橙色。
杯 土師器	覆土 1/2残存	17	口径 13.1	口縁短かく内反ぎみに直立。 口縁体部稜なく丸底傾向。	口縁内外面横ナデ。体部底部 不定ヘラケズリ。内面指ナデ。	微砂粒含む。酸化、 硬質。にぶい橙色。
杯 土師器	覆土 口縁小片	18		口縁短かく直立。口縁と体部 の間に緩い稜をもつ。	口縁内外面横ナデ。体部ヘラ ケズリ後、指ナデ。	微砂粒含む。酸化 やや硬質。明赤褐 色。
甕 土師器	カマド内 口縁1/2	19	口径 20.8	口縁直線状にやや外傾。胴部 球形傾向。器壁薄い。	口縁内面輪積痕。内外面指ナ デ。下位櫛描模様。胴部ヘ ラケズリ。内面ヘラ調整痕。	微砂粒含む。酸化 やや硬質。橙色。

66号住居址出土土器観察表



1. 暗褐色土 (粘性・焼土・炭化物含む)
2. 暗褐色土 (粘性・焼土・灰を含む)
3. 暗褐色土 (FP小ブロック・炭化物含む)
4. 暗褐色土 (焼土・灰・炭化物含む)
5. 褐色土 (焼土ブロック含む)
6. 暗褐色土 (C軽石・焼土粒含む)
7. 暗褐色土 (焼土粒少量含む)
8. 暗褐色土 (焼土・炭化物含む)
9. 褐色土 (焼土・炭化物含む)

耕作土



10. 灰褐色土 (旧耕作土)
11. 暗褐色土 (粘質・C軽石・焼土含む)
12. 暗褐色土 (粘質・灰を多く含む)
13. 暗褐色土 (粘質・焼土・炭化物含む)
14. 褐色土 (焼土・炭化物多く含む)
15. 暗褐色土 (焼土・炭化物少量含む)
16. 暗褐色土 (焼土・ローム粒多く含む)
17. 褐色土 (焼土ブロック・FP含む)
18. 褐色土 (粘土粒・FP小ブロック・ローム粒含む)

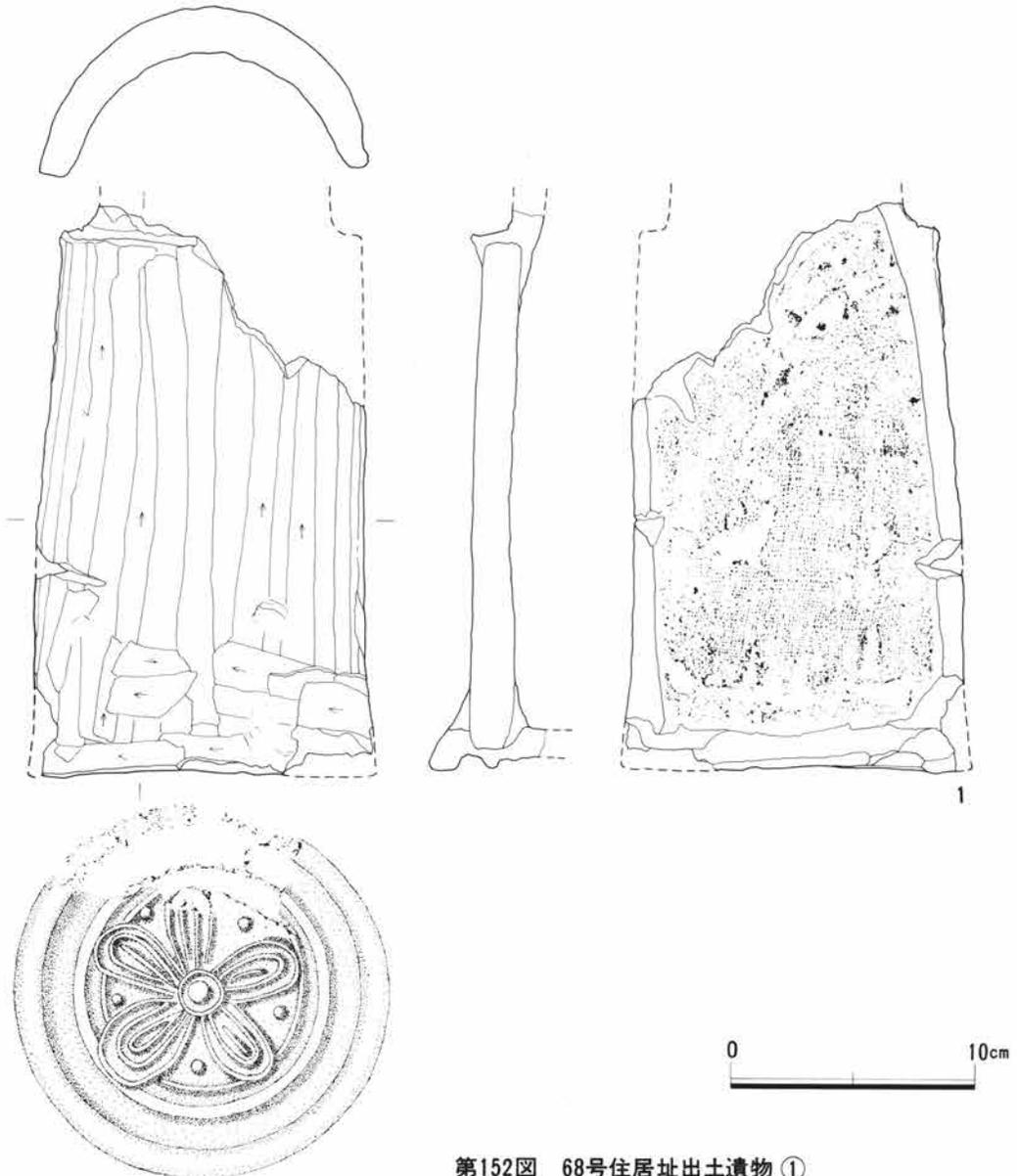
第151図 68・69号住居址

68号住居址（2区）〔第151～153図・図版36（遺構）・図版98（遺物）〕

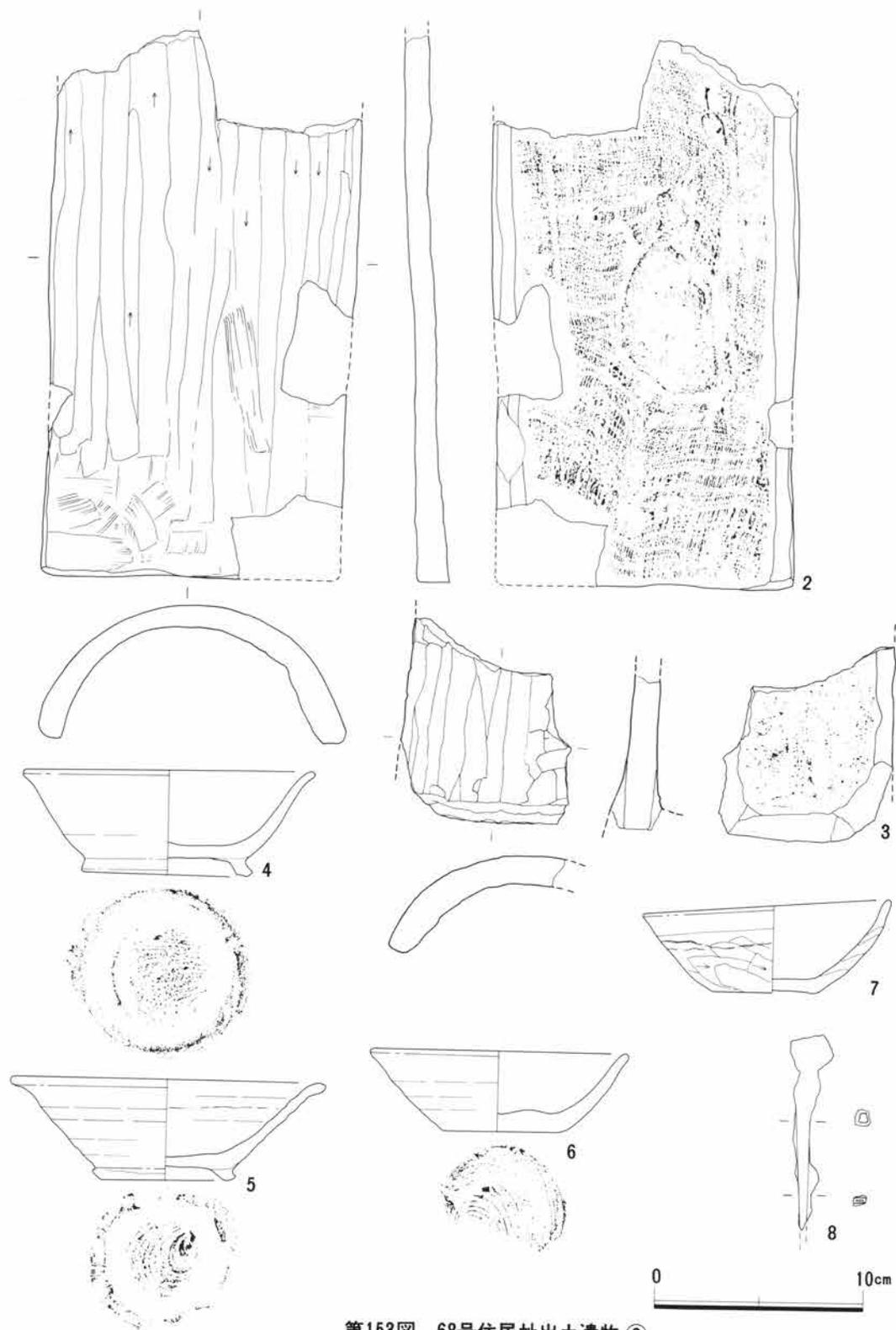
第4層黒褐色土面にて確認。カマドおよび東壁の一部のみの調査である。規模・平面形ともに不明。壁は傾斜をもって立ちあがっているが、傾斜の大きい部分と小さい部分とがある。床面はローム面に構築された直床であり、壁周溝は東壁の一部に確認された。

カマドは東壁の南寄りに位置し、幅60cm、奥行き80cmの円頂形に掘り込んで、燃烧部を壁外に造り出している。白色粘土が一部残存していたことから、主体部は白色粘土で構築されていたものと考えられる。

出土遺物としては、カマド内より須恵器椀・土師器椀・瓦・鉄釘がある。



第152図 68号住居址出土遺物 ①

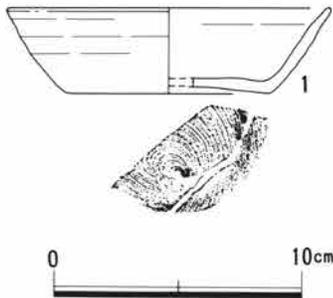


第153図 68号住居址出土遺物②

第4節 古代の竪穴住居址

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
軒丸瓦	カマド 1/2残存	1	身部長22.0 身部径13.6 瓦当径14.5	瓦当部凸帯幅不均一で歪む。 身部断面半円筒形、端部粗雑な面取り。	身部外面縦ヘラケズリ。内面布目痕後、粗いナデ。粘土板、鈕貼付し粗いナデにより瓦当部、基部接合。	砂粒石気泡極めて多い。還元やや軟質。灰白色。浅黄色。
丸瓦	カマド 1/2残存	2	現存長25.7 幅 14.4	断面やや歪んだ半円筒形。側端部稜緩く幅不均一。下端部面取り、稜鮮明。	外面縦ヘラケズリ後、側部ナデ。内面歪んだ布目痕後、側部ナデ。下源部金属製ヘラ切り。	砂粒石気泡極めて多い。還元やや軟質。灰白色。
軒丸瓦	カマド内 身部小片	3		身部断面半円筒形。瓦当部欠損。側端部不均一。	外面縦ヘラケズリ、接合部粘土鈕貼付後、ナデ。内面布目痕後、ナデ。	砂粒石気泡極めて多い。還元、硬質。灰色。
椀 須恵器	カマド 1/2残存	4	口径 13.9 底径 8.2 器高 4.8	口縁大きく外反。体部緩く内反。高台断面菱形で、端部一部外側へ突出。粗雑。	内外面回転横ナデ。底部右回転糸切り後、高台粗雑なナデにより貼付。	砂粒多く含む。還元一部中性、軟質。灰色。におい橙色。
椀 須恵器	カマド 1/2残存	5	口径 15.1 底径 6.8 器高 4.9	口縁肥厚し大きく外反。体部凹凸をもち内傾。高台極めて粗雑で断面方形に近い。	体部内外面輪積痕。回転横ナデ調整。底部右回転糸切り後、粗雑なナデにより高台貼付。	砂粒気泡含む。中性ぎみ還元、軟質。におい橙色。灰色。
杯 須恵器	カマド ほぼ完形	6	口径 12.4 底径 5.2 器高 4.0	口縁僅かに外反。緩い稜をもって体部直線状に内傾。底部平底。	内外面回転横ナデ。底部右回転糸切り痕、無調整。	砂粒石含む。還元やや軟質。灰白色
杯 土師器	カマド内 1/2残存	7	口径 12.0 底径 4.8 器高 4.3	口縁体部稜なく緩く内反。底部平底。全体に歪む。	輪積痕。口縁内外面・体部内面横ナデ。体部外面、底部一定ヘラケズリ後、粗いナデ調整。	砂粒気泡石多く含む。酸化、硬質。赤褐色。
鉄釘	カマド 先端欠損	8	全長 9.3 厚さ 2.0 幅 1.8	断面方形。頂部扁平な角釘と思われるがサビ著しい。中空。		

68号住居址出土遺物観察表



第154図 69号住居址出土遺物

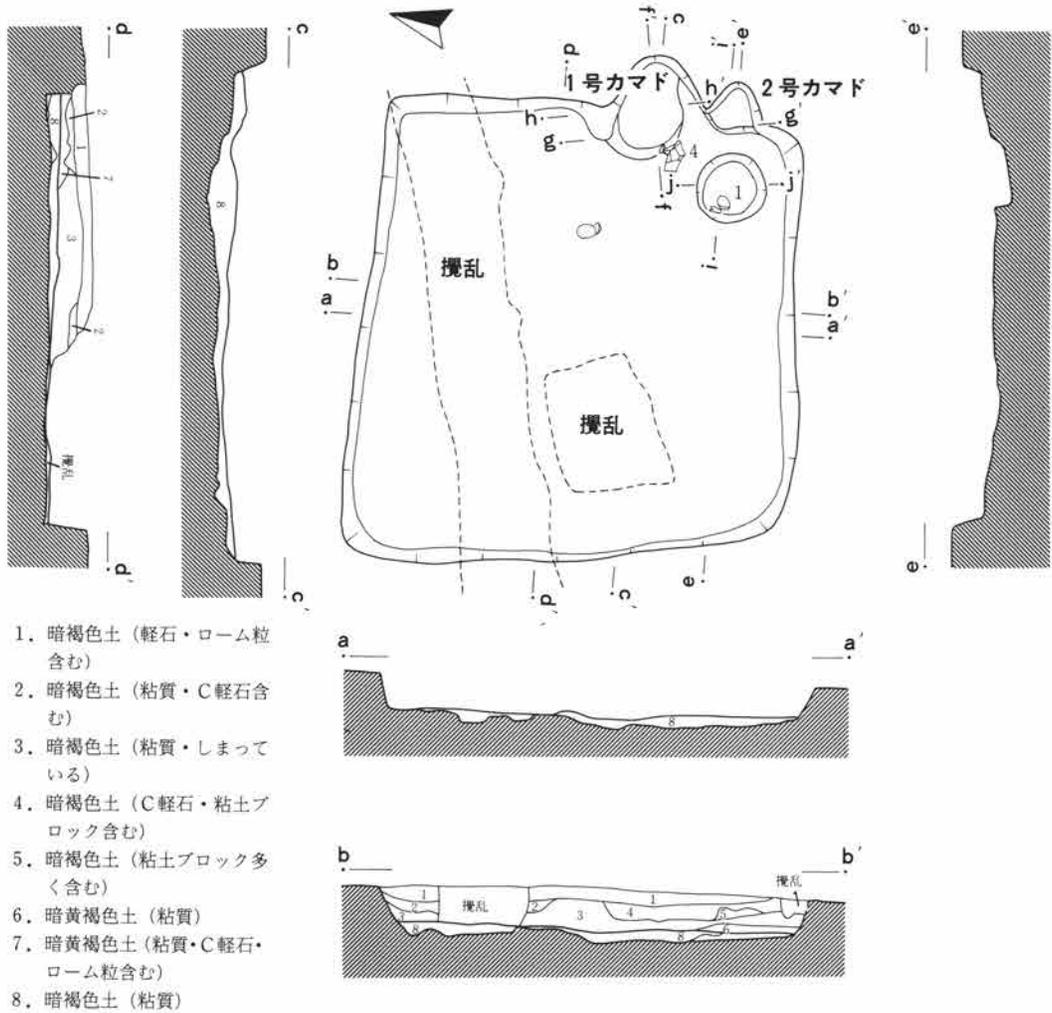
69号住居址(2区)〔第151・154図・図版36(遺構)〕
 第4層黒褐色土面において確認された。カマド先端部分のみの検出である。68号住居址と重複しているが、重複部分に攪乱が入っており、断面図による新旧関係は不明である。カマドの形態から、東壁に付設されているものと考えられる。

カマド内からは、須恵器杯が検出された。

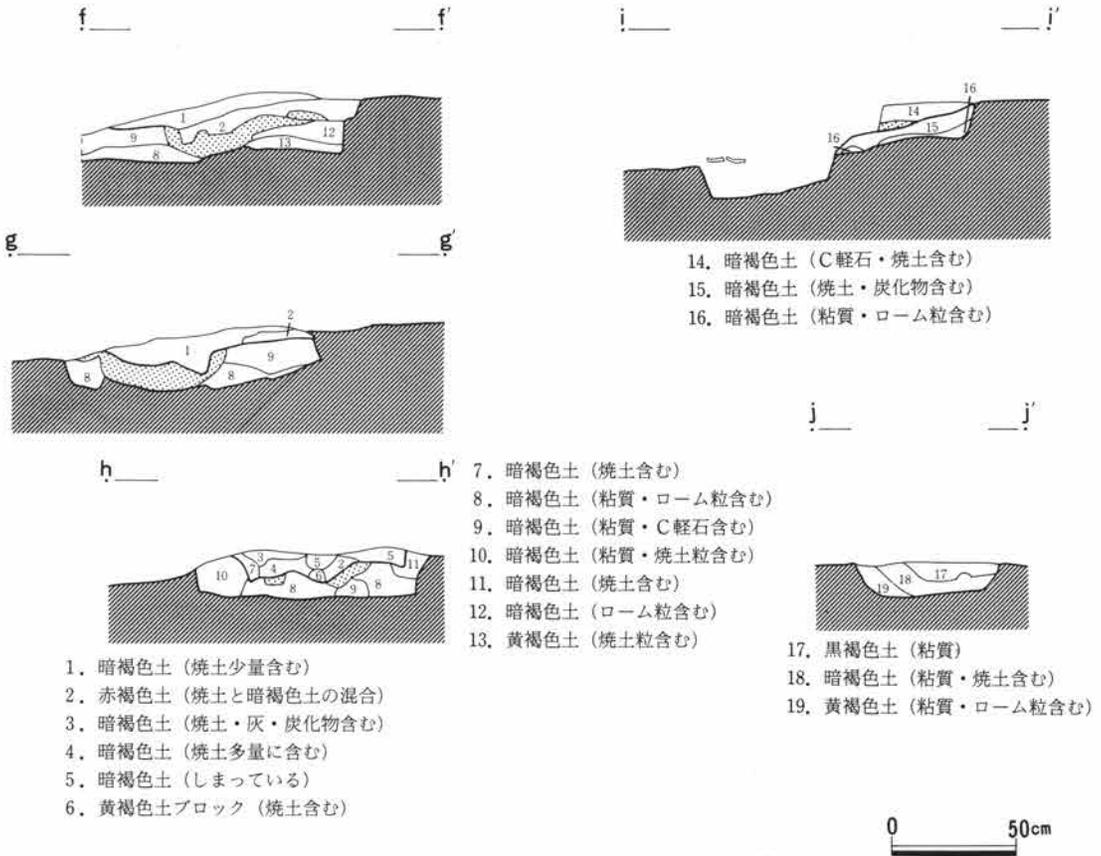
第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 須恵器	カマド内 ノ残存	1	口径 13.0 底径 8.4 器高 3.3	口縁部僅かに稜あるが全体に直線状外傾。底部やや上げ底。器壁薄い。	体部内外面回転横ナデ。底部右回転糸切り後、無調整。	砂粒少ない。還元硬質。灰色。

69号住居址出土土器観察表



第155図 70号住居址



第156図 70号住居址カマド・貯蔵穴断面図

70号住居址 (3区) [第155~157図・図版36 (遺構)・図版98 (遺物)]

第4層黒褐色土中において確認された。東西3.5m×南北3.6m、深さ30cmの規模をもつ。平面形は不整形を呈する。壁はやや傾斜をもって立ちあがっているが、西壁は傾斜が小さい。

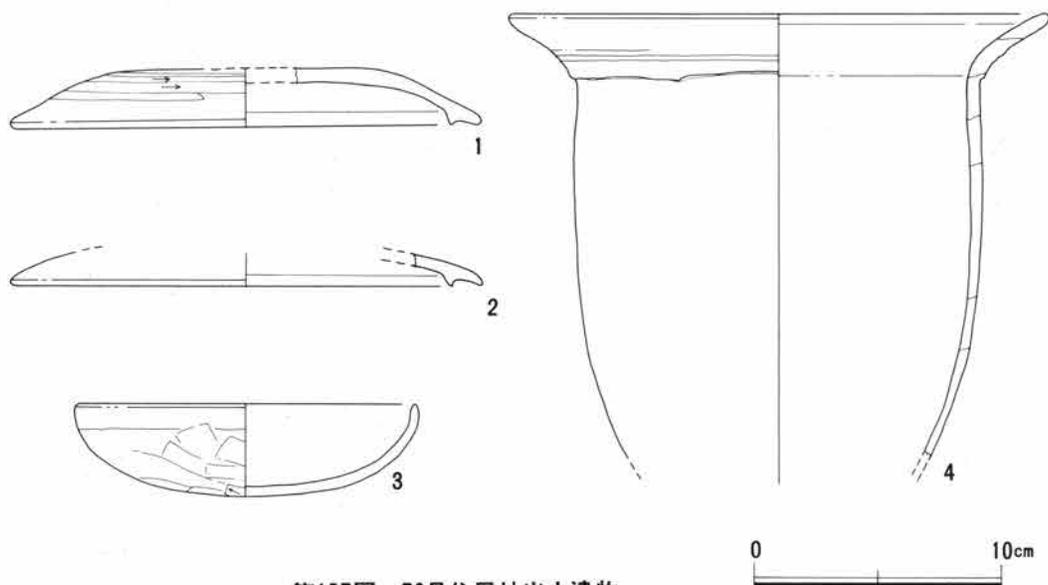
床面は、ローム層上面付近まで掘り抜き、凹凸部分をローム混じりの黒褐色土で埋めて平坦にした後、黄褐色粘質土で貼り床している。床面は住居址中央部とカマド付近を除いて軟弱である。柱穴および壁周溝はない。

カマドは東壁中央やや南側と、これに接してコーナー部との間の2ヶ所に認められた。前者を1号カマド、後者を2号カマドとする。1号カマドは壁および床面を皿状に掘りくぼめた後、黒色の粘質土で固めて基底部をつくっている。2号カマドは前面に存在する貯蔵穴状のピットが、2号カマドからの灰・焼土の流れを切っており、また1号カマドからの焼土・灰が2号カマドの焚口付近および貯蔵穴状のピットを一部覆っていることから、2号カマドは1号カマド構築以前に使用されていたものと考えられる。

貯蔵穴状のピットは、2号旧カマドの前面に存在する。直径約55cm、深さ13cmの規模をもち、1号カマドからの焼土・灰が流れ込んでいた。

第II章 検出された遺構と遺物

出土遺物として、貯蔵穴内から須恵器蓋 (1)、住居址覆土中より須恵器蓋・土師器杯・土師器長甕がある。



第157図 70号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
蓋 須恵器	貯蔵穴内 1/2	1	口径 18.8	頂部平坦。端部稜なく丸い。 内面断面三角形身受け凸帯 両側段差あり。	内外面回転横ナデ後、外面回 転ヘラケズリ調整。身受け削 り出し後ナデ調整。	砂粒少い。還元硬 質。灰色。廃棄後 にスス付着。
蓋 須恵器	覆土 小片	2		端部稜なく丸い。内面断面三 角形状身受け凸帯。段差少い。	内外面回転横ナデ後、外面回 転ヘラ削り。身受け削り出し。	砂粒少い。還元硬 質。灰白色。
杯 土師器	覆土 ほぼ完形	3	口径 13.8 器高 3.7	口縁短かく直立。緩い稜を もって底部丸底状。	口縁内外面横ナデ。体部・底 部不定ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化や や硬質。にぶい橙 色。
長甕 土師器	8 cm上 口縁～胴 部1/2	4	口径 21.8	口縁強く外反し最大径。口縁 下部浅い沈線。頸部ケズリに よる明瞭な稜。胴部緩く内反。	外面口縁ヘラ描沈線後横ナデ 頸部～胴部↓ヘラズリ。磨減、 内面口縁横ナデ、胴部ヘラ調 整痕。	砂粒多く含む。酸 化やや硬質。にぶ い褐色。外面スス 付着。

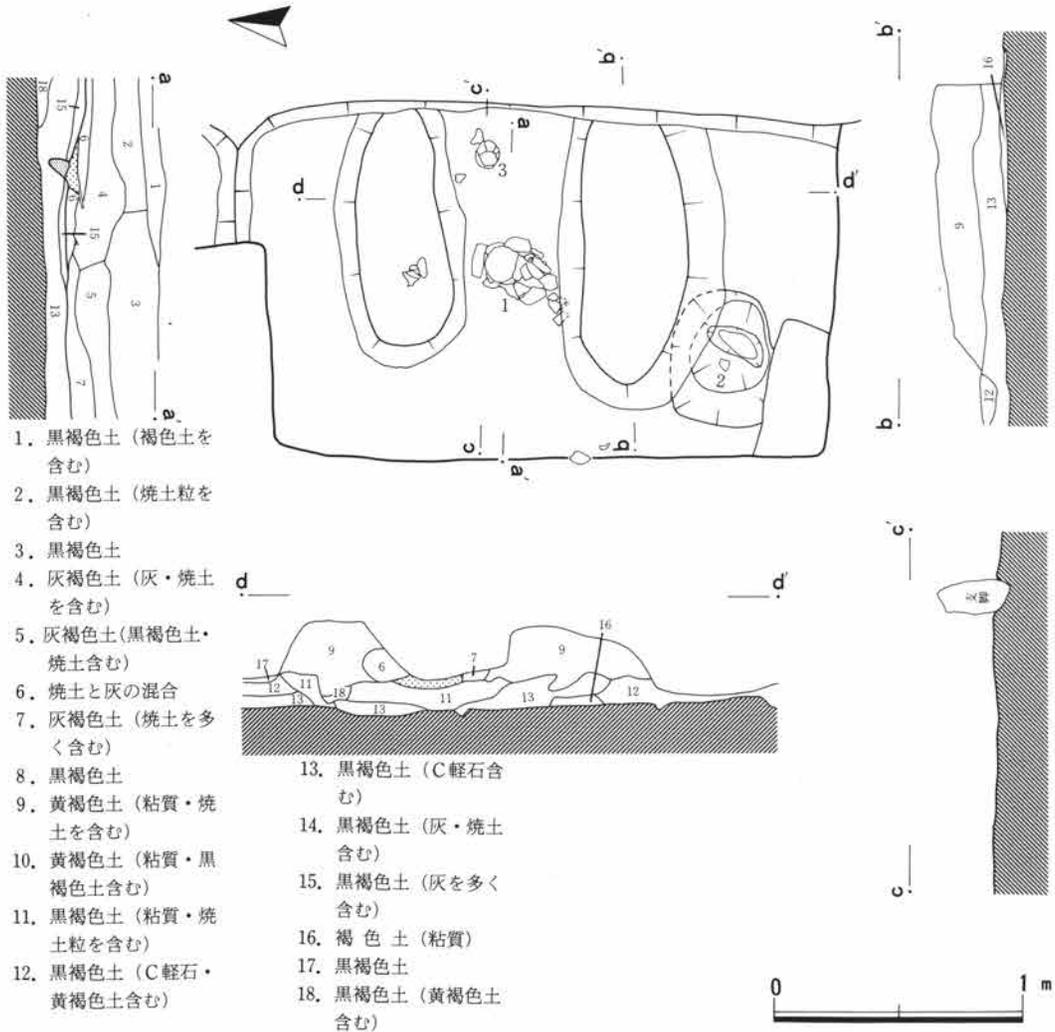
70号住居址出土土器観察表

71号住居址（2区）〔第158・159図・図版37（遺構）・図版98（遺物）〕

第4層黒褐色土面にて確認された。72号住居址の南壁を一部切っている。カマドとその周辺部
のみの検出で、大部分は西側調査区域外へと延びている。規模については不明であるが、北東コー
ナ一部においてはやや隅丸を呈する。

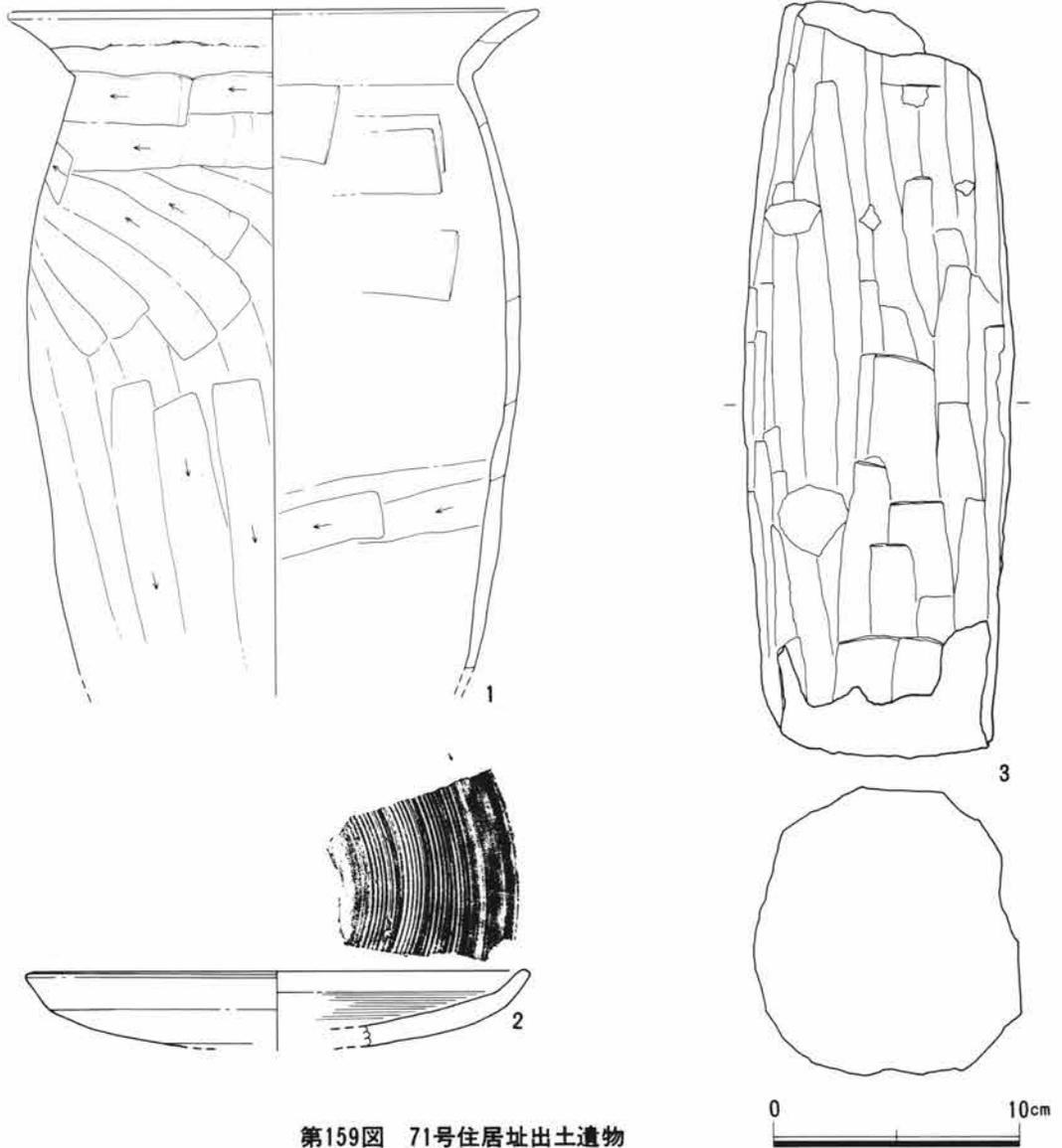
カマドは東壁に位置するが、先端部は確認段階で消滅した。袖材には二ツ岳軽石を含んだ粘質
土を使用し、支脚には面とりした角閃石安山岩を底面に押し込み直立させている。貯蔵穴状のピッ
トは、直径40~50cm、深さ16cmでカマド南側に位置するが、埋没後に袖の粘質土が一部上面を覆っ
ていた。

遺物は、カマド内より土師器甕（1）が出土している。



第158図 71号住居址

第II章 検出された遺構と遺物



第159図 71号住居址出土遺物

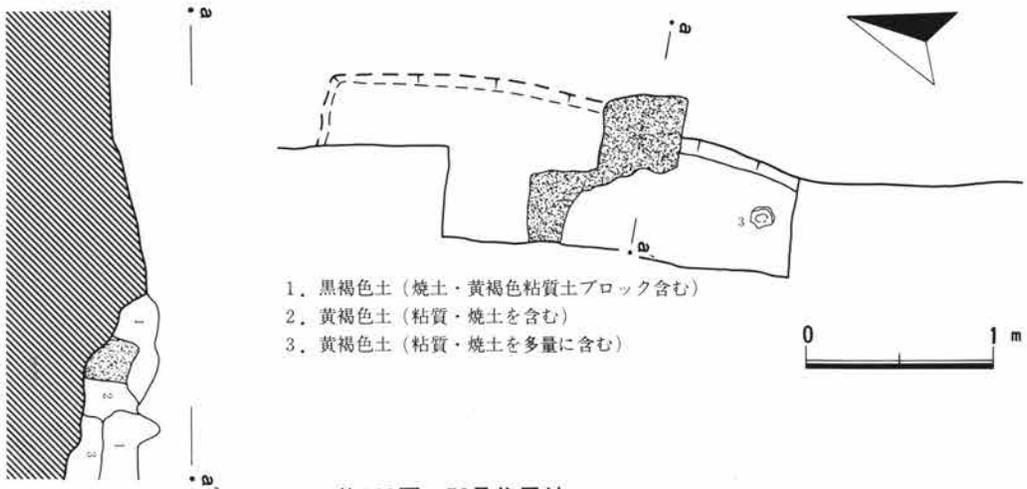
器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	カマド内 残存	1	口径 21.4 胴径 19.8	口縁やや厚く大きく外反。胴部緩く内反し円筒状、最大径中位やや上。	輪積痕。口縁内外面横ナデ。胴部上・下へ↓ヘラ削り。内面ナデ・ヘラ調整。	砂粒含む。酸化やや硬質。にぶい橙・褐色。
盤 須恵器	ピット内 口縁小片	2	口径 20.4	口縁外傾。稜緩く、底部内反し丸底状。器壁やや厚い。	外面回転横ナデ後、底部ナデ。内面回転横ナデ後、カキ目。	微砂粒気泡含み還元やや軟質、灰色
支脚石	カマド内	3	現存長約31 最大幅約12	やや尖頭形ぎみの多角柱状。上下両端欠損。	角閃石安山岩軽石を金属製ナタ状道具で削る。	灰白色。

71号住居址出土遺物観察表

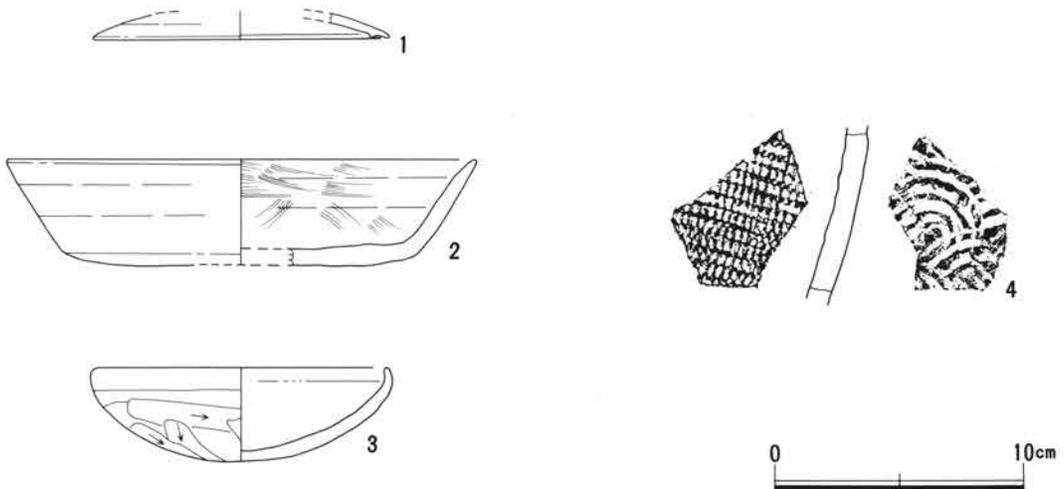
72号住居址（2区）〔第160・161図・図版37（遺構）・図版98（遺物）〕

第4層黒褐色土面にて確認された。カマドおよび周辺部のみを検出である。71号住居址に南側を切られており、また73号住居址が北側の本住居址の覆土を一部切って存在した。さらにカマドの先端は、掘り込みが浅かったため確認時に消滅した。

カマドは東壁に位置し、袖材の粘土が部分的に存在する。遺物は、カマド内から須恵器甕形土器の小破片と、住居址床面付近および覆土中より土師器杯・須恵器杯・須恵器蓋の破片が出土している。



第160図 72号住居址



第161図 72号住居址出土遺物

第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
蓋 須恵器	覆土 端部小片	1		器壁薄く径小さい。身受け断面三角状の凸帯。	外面右回転ヘラ削り調整。内面身受け削り出し後回転ナデ。	砂粒含む。還元やや硬質。灰色。
杯 須恵器	6cm上 1/2残存	2	口径 19.0 底径 14.0 器高 4.3	口縁体部稜なく直線状外傾。体部と底部の間の稜緩く、底部やや丸底さみ。	ロクロ成形後、体部内外面回転横ナデとナデ。底部手持ちヘラケズリ後ヘラナデ調整。	砂粒気泡含む。還元硬質・底部僅かに中性。灰色。
杯 土師器	2cm上 1/2残存	3	口径 11.8 器高 3.7	口縁短かく内反さみ。稜なく底部やや歪んだ丸底。	口縁内外面横ナデ。胴底部指押え後不定ヘラケズリ。	砂粒気泡多い。酸化やや軟質。橙色。
甕 須恵器	カマド内 小片	4		器壁やや厚く、緩く内反。	外面格子状叩キ痕、内面青海波状アテ痕。	砂粒含む。還元やや硬質。暗青灰色。

72号住居址出土土器観察表

73号住居址（2区）〔第162・163図・図版38（遺構）〕

第4層黒褐色土面において確認された。72号住居址の北側を切っており、また74号住居址のカマドが本住居址埋没後まもなく構築されている。なお西側は調査区域外へと延びている。規模は東壁3.2mで、北側コーナー部は隅丸を呈する。壁は直立に近く、約9cm残存している。床面は貼床で平坦であり、やや堅緻である。柱穴および壁周溝はない。

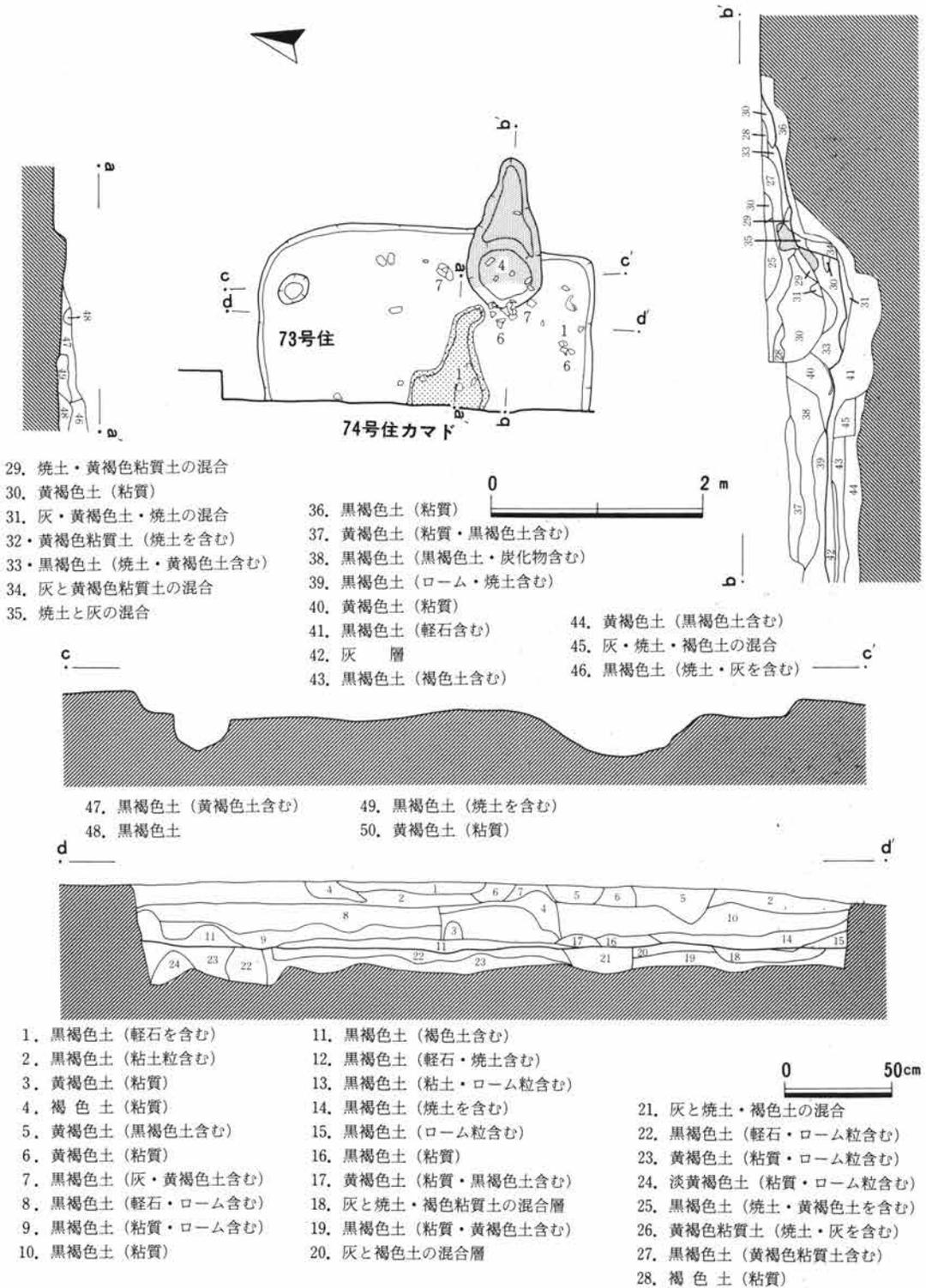
カマドは東壁南寄りに位置し、幅60cm、奥行き70cmほど壁を掘り込み、焚口部は床面を掘りくぼめている。なおカマド内には多量の焼土が残存していた。

出土遺物として、床面付近から土師器甕（6・7）、土師器杯（1・2）があり、またカマド内からは土師器甕（4）が発見されている。

74号住居址（2区）〔第162・164図・図版38（遺構）〕

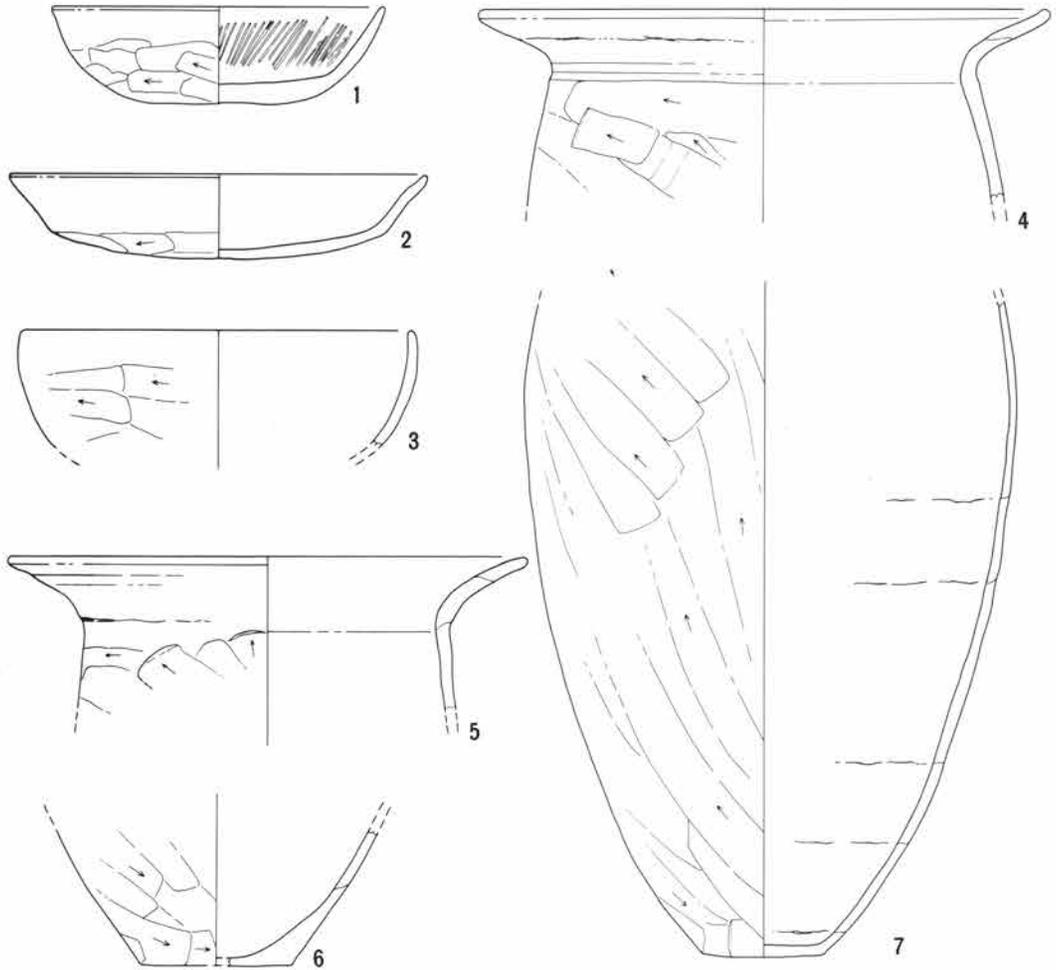
第4層黒褐色土面において、73号住居址と同時に確認された。カマドの一部が検出出来たが、他は調査区域外となっている。新旧関係は、73号住居址の覆土内に存在することから、本住居址の方が新しい。

73号住居址の床面よりやや上面で、灰がつまっており、粘土も部分的に存在した。なお内部より、土師器碗の小片が発見されている。



第162図 73・74号住居址

第II章 検出された遺構と遺物



第163図 73号住居址出土遺物

0 10cm

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	床面直上 1/2残存	1	口径 13.4 器高 3.9	口縁体部稜なく外傾。底部稜なく器壁厚く丸底。	口縁部内外面横ナデ。体部・底部不定ヘラズリ。内面放射状ミガキによる暗文。	砂粒小石含む。酸化やや軟質。橙色。
杯 土師器	5cm上 1/2残存	2	口径 17.0 底径 13.6 器高 3.4	口唇部やや内反し鋭い。口縁体部緩い凹みをもって外傾。顕著な稜により丸底。	口縁体部内外面横ナデ。底部外面不定ヘラケズリ。内面指頭圧痕。	砂粒含む。酸化硬質。にぶい橙色。
碗 土師器	床下 口縁小片	3	口径 15.6	口縁部短く直立きみ。体部稜なく緩く内反し深い。	口縁部内外面横ナデ。体部外面横ヘラケズリ、磨滅。	砂粒含む。酸化やや硬質。橙色。
甕 土師器	カマド内 口縁1/2残	4	口径 23.0	口縁部直線状に強く外傾。胴部緩く膨らむ。器壁やや厚い。	口縁部横ナデ、輪積痕。胴部ヘラケズリ。頸部ヘラナデ。	砂粒含む。酸化硬質。にぶい赤褐色。

73号住居址出土土器観察表

第5節 古代の掘立柱建物址

甕 土師器	床下 口縁小片	5	口径 20.8	口縁部大きく外反。胴部直線状に垂下。器壁やや厚い。	口縁部横ナデ。輪積痕。頸部へラケズリ。	砂粒多く含む。酸化やや硬質。にぶい橙色。内面黒斑。
甕 土師器	床面直上 底部 $\frac{1}{2}$ 残	6	底径 6.2	底部中央器壁薄い。他は厚い。平底多角形状。	外面へ底部不定へラケズリ。内面へラナデ。	砂粒含む。酸化硬質。にぶい橙色。
甕 土師器	床面直上 胴部 $\frac{1}{2}$ 残	7	胴径 19.7 底径 5.2	器壁薄く胴部緩く内反。最大径上位。平底多角形状。	外面上位へ中位↓下位へ底部一定へラケズリ。内面輪積痕。	砂粒含む。酸化やや軟質。にぶい橙。

73号住居址出土土器観察表



第164図 74号住居址出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
碗 土師器	カマド内 口縁小片	1	口径 13.8	口縁部短く僅か外反。体部緩く内反さみ。	口縁内外面横ナデ。体部内外面指ナデ。	砂粒含む。酸化やや軟質。にぶい橙。

74号住居址出土土器観察表

第5節 古代の掘立柱建物址

1号掘立柱建物址（2区）〔165図・図版39（遺構）〕

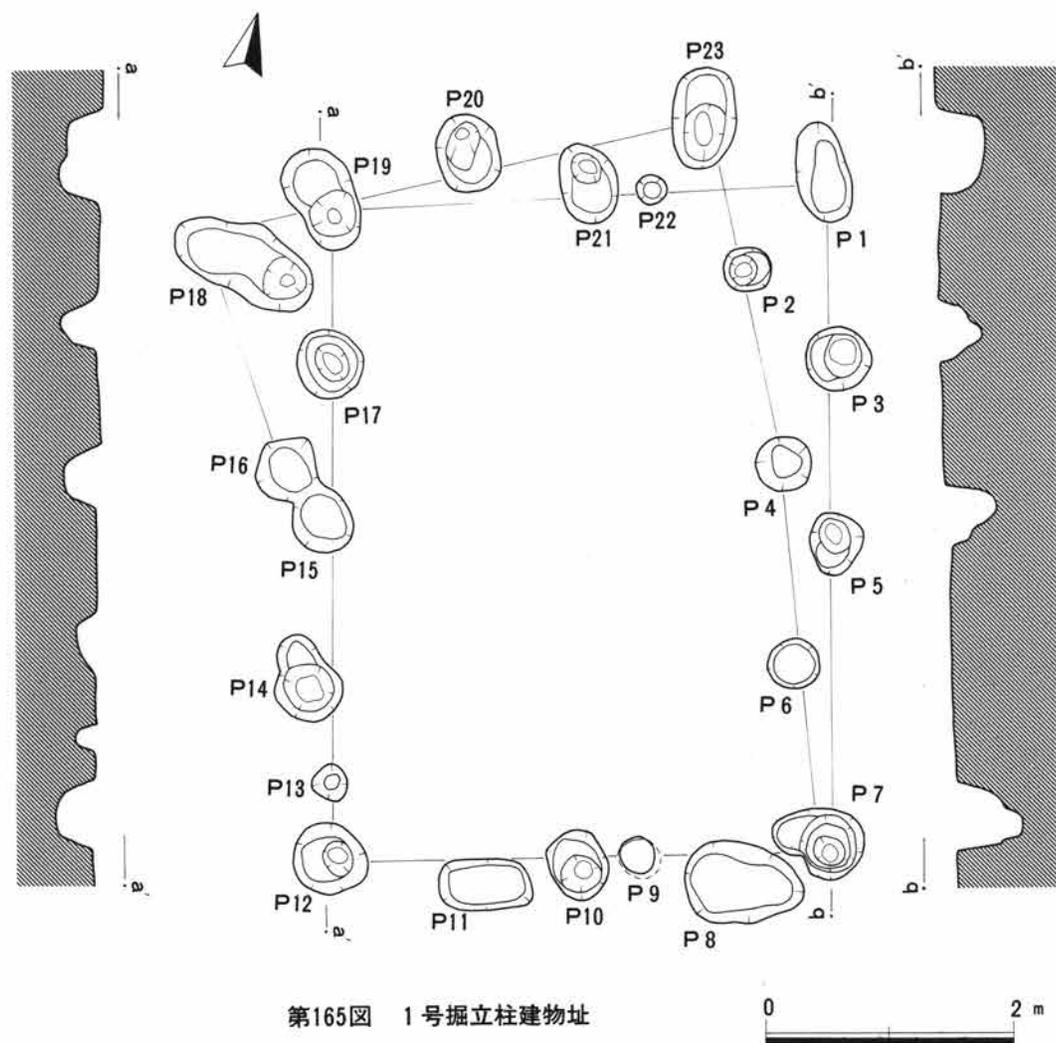
第4層下層のローム漸移層面で確認された。

規模は、南北4間・東西2間で、辺長は南北5.2m、東西4.0mを測る長方形の南北棟である。主軸は、N15°Wを示す。

柱穴の径は、東辺40～80cm、南辺40～95cm、西辺30～120cm、北辺25～80cmで、確認面直上の海拔111.10mからの深さは、東辺50～80cm、南辺42～80cm、西辺38～55cm、北辺48～90cmである。柱穴は、東辺のピット5とピット7の間が確認されていないが、東・西辺の柱穴間距離は平均約0.67m、南・北辺は約0.78mで、南・北辺が長い。

なお図に見られるように、他にも多くのピットが検出されたが、東辺をピット7・6・4・2・23を結ぶ線とし、北辺をピット23・20・18を結ぶ線とし、西辺をピット18・16を結ぶ線とする4×2間の建物の重複も考えられる。しかしこの建物は未完成である。

遺物は、全く検出されなかった。



第165図 1号掘立柱建物址

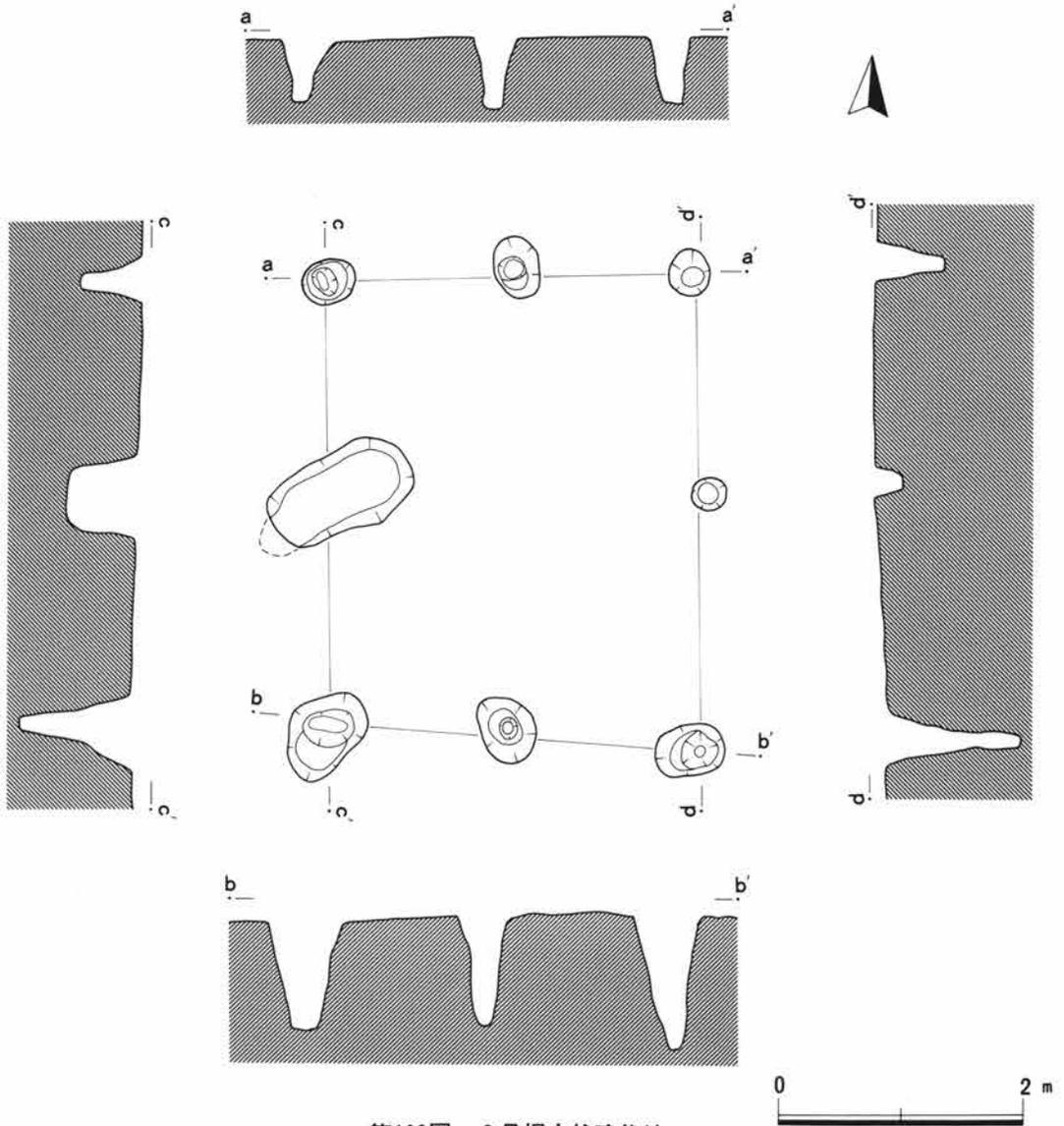
2号掘立柱建物址（2区）〔第166図・図版39（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。

規模は、東西2間・南北2間で、辺長は東・西辺約3.0m、南・北辺約3.8mの長方形の南北棟である。主軸はN5°Eを測る。

柱穴は、西辺中央のものが他の柱穴と重複して形状は不明であるが、その他は径約30~75cm、確認面直上の海拔111.10mからの深さ50~80cmを測る。柱穴間距離は、東・西辺が約1m、南・北辺が約1.5mで、南・北辺が大きい。

遺物は、全く見られなかった。



第166図 2号掘立柱建物址

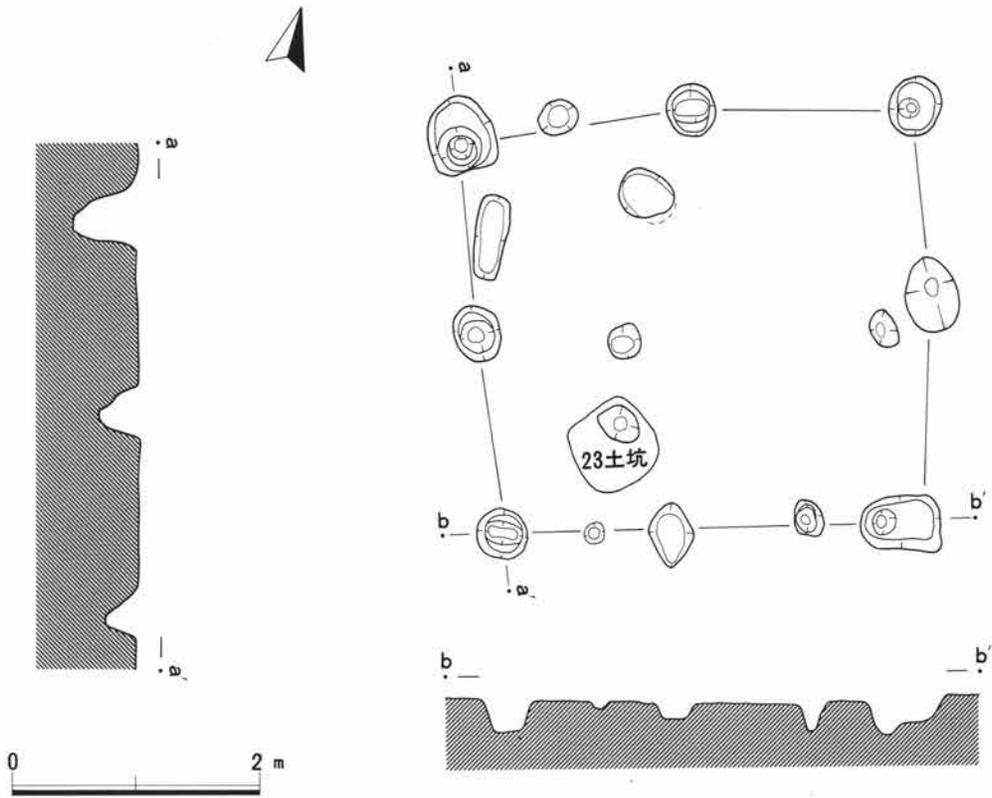
3号掘立柱建物址（2区）〔第167図・図版39（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。23号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

規模は、東西・南北各2間と思われるが、南辺では中央の柱穴が不明である。辺長は、東西3.35～3.65m、南北約3.2mで、やや台形ぎみの正方形である。南・北辺の走向は、N22°Wを測る。

柱穴は、径19～67cm、確認面直上の海拔111.10mからの深さ27～69cmを示し、北側のものが深い。柱穴間距離は、東辺3.3m、北辺3.65m、西辺3.1mである。

遺物は、検出されなかった。



第167図 3号掘立柱建物址

4・5号掘立柱建物址（2区）〔第168図・図版40（遺構）〕

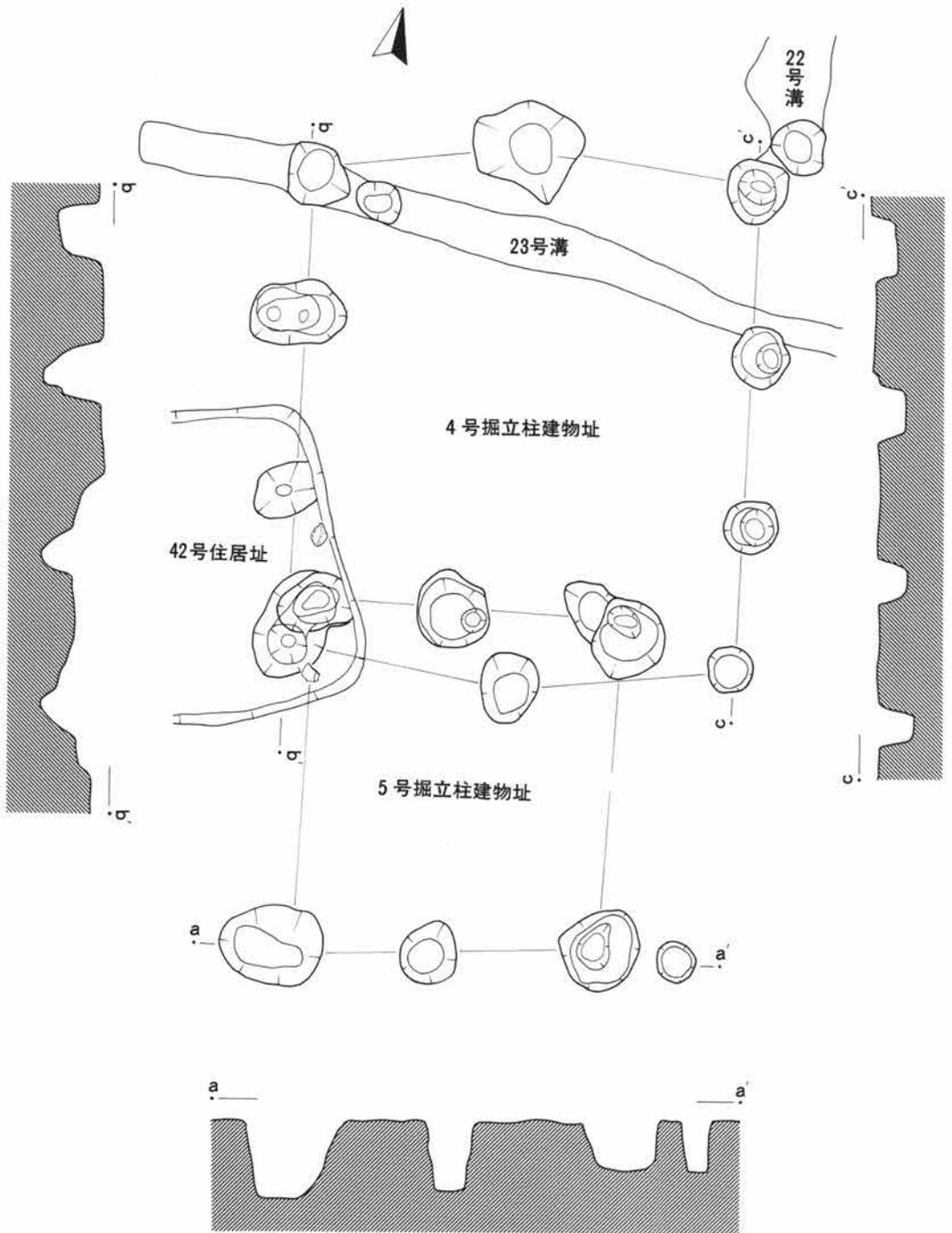
第4層黒褐色土面で確認された。両掘立とも西側で42号住居址と重複し、同住居址欄既述のように、本掘立群が古い。また4号掘立は、北側で23号溝と重複しているが、4号掘立柱穴が23号溝確認時には検出されなかったため、23号溝が新しい。同じく北東側で22号溝とも重複すると思われるが、新旧関係は不明である。

規模は、4号掘立が南北3間・東西2間、5号掘立が南北1間・東西2間である。辺長は、4号掘立が南北4.25m・東西4.05m、5号掘立が南北3.18m・東西2.77mである。形状は、4号掘立は南・北辺の中央がやや外側に出ており、やや六角形ぎみの長方形南北棟である。5号掘立は、やや南北が長い長方形を呈する。主軸は、4号掘立がN12°E、5号掘立がN10°Eである。

柱穴は、4号掘立が径40～100cm、確認面直上の海拔111.30mからの深さ28～75.5cmを測り、5号掘立では径50～95cm、同じく深さ43～84cmを示す。柱穴間距離は、4号掘立では東・西辺約4m南・北辺約4.3mで、5号掘立では東・西辺約2.8m、南・北辺約3.1mである。

両掘立とも、遺物は全く出土していない。

本両掘立の新旧関係は、層位的には確認できなかったが、主軸方位は近似しているため比較的近い時期に存在したと思われる。



第168図 4・5号掘立柱建物址



第II章 検出された遺構と遺物

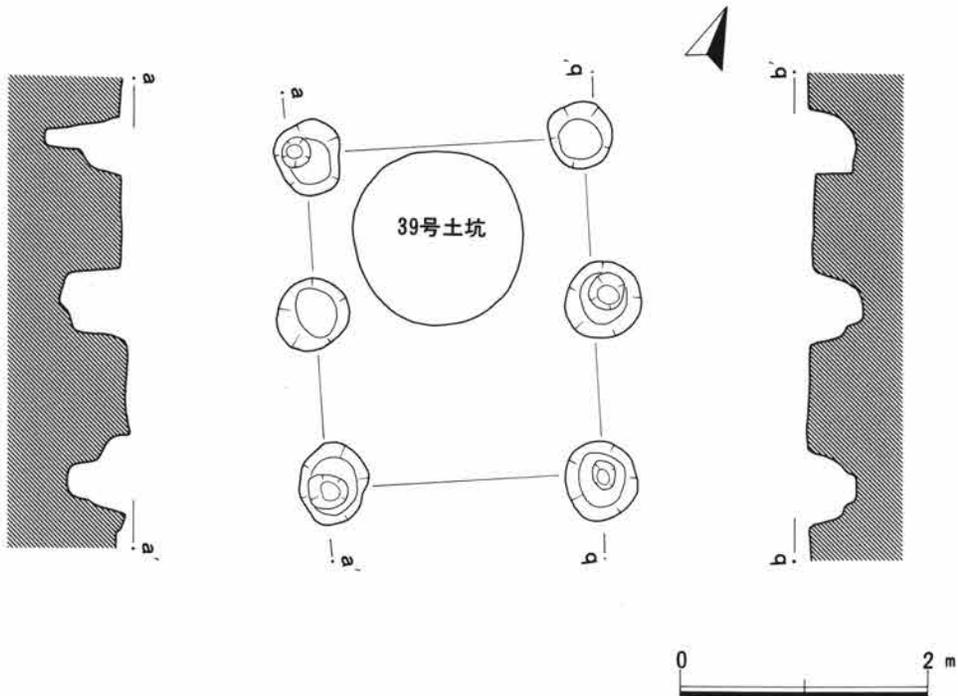
6号掘立柱建物址（1区）〔第169図・図版40（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。38・39号土坑と重複するが、確認時の覆土の相違により、38号土坑は本掘立より新しい。39号土坑とは直接の層位的新旧関係はないが、覆土の差より本掘立の方が新しい。

規模は、南北2間・東西1間で、辺長は南北2.7m・東西2.2mを測る。主軸をN25°Eにとる長方形の南北棟である。

柱穴は、浅間C軽石を含む暗褐色砂質土を覆土とし、円筒形状の径35cmの掘り方に約10cmの柱痕を有す。確認面直上の海拔110.50mからの深さは50~70cmである。柱穴間距離は、南・北辺が1.6m、東・西辺が0.7mである。

遺物は、全く見られなかった。



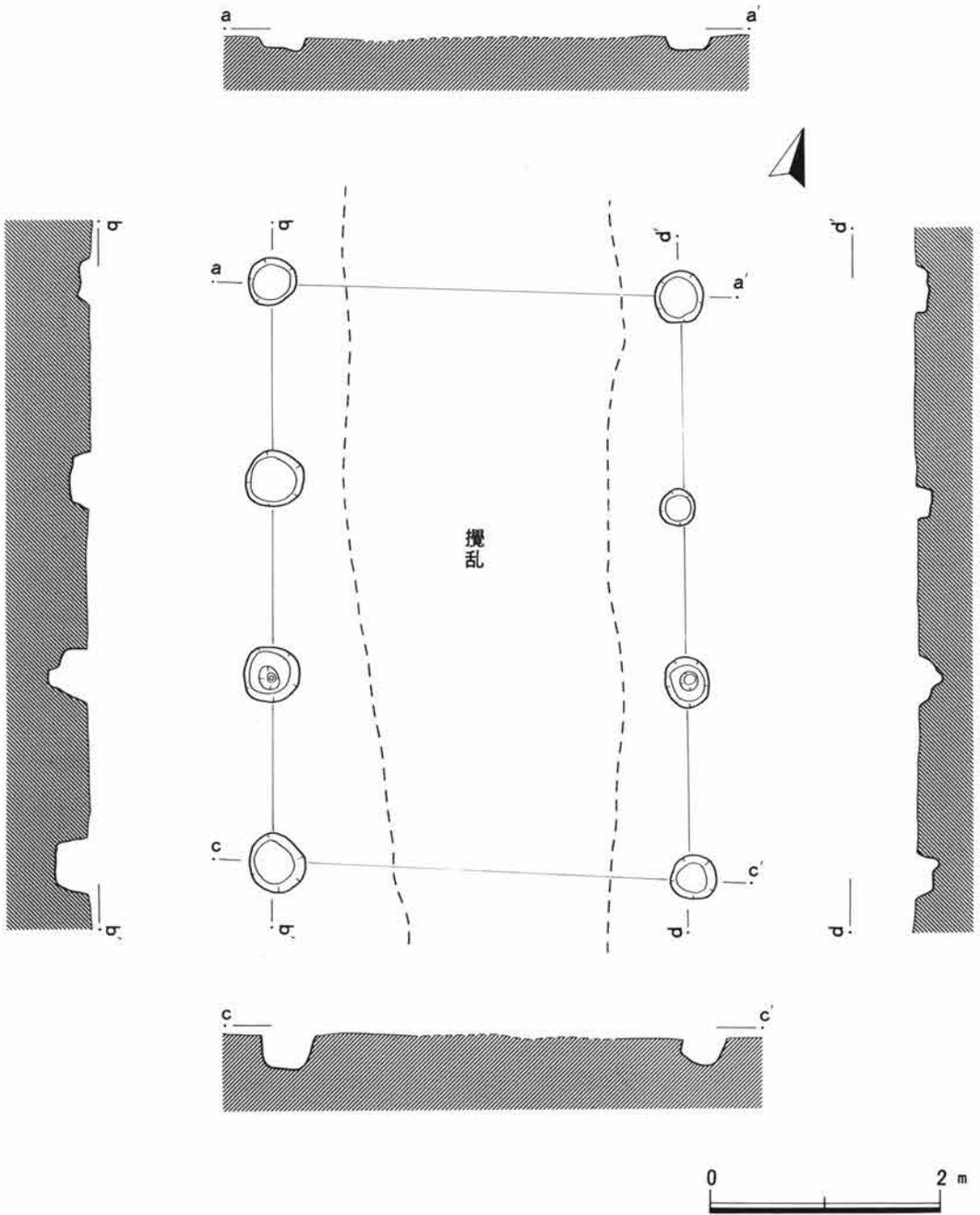
第169図 6号掘立柱建物址

7号掘立柱建物址（2区）〔第170図・図版40（遺構）〕

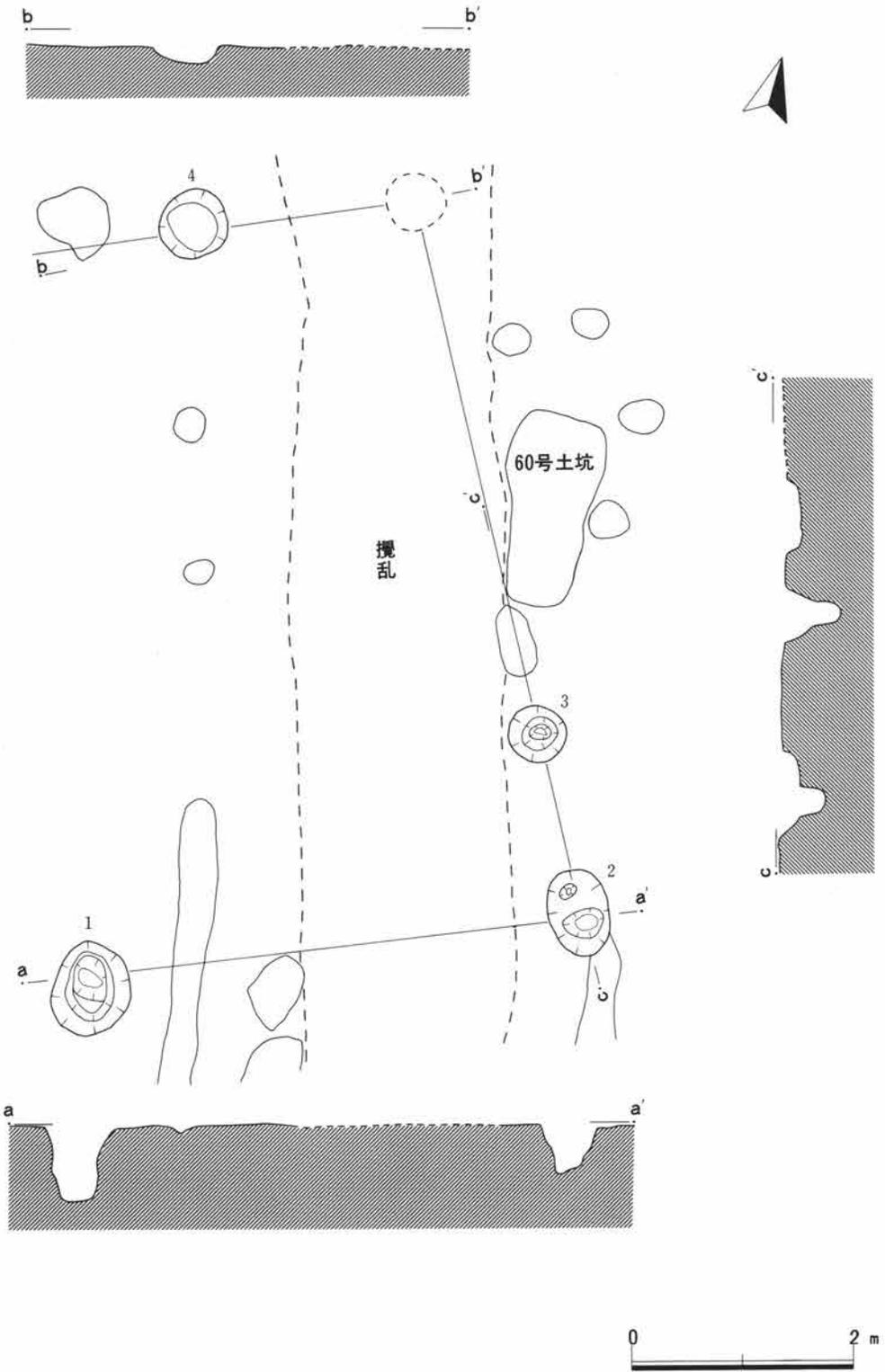
第4層黒褐色土面にて確認された。8号掘立柱建物址と近接する。規模は南北5.0m、東西3.5mの3間×2間で、長方形の南北棟である。主軸はN18°Eを示す。中央部北から南にかけては、攪乱のため中央の柱穴は検出出来なかった。

柱穴はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦に近い。柱穴の径は、東辺30~45cm、南辺40~50cm、西辺40~50cm、北辺30~45cmである。

遺物は、全く検出されなかった。



第170図 7号掘立柱建物址



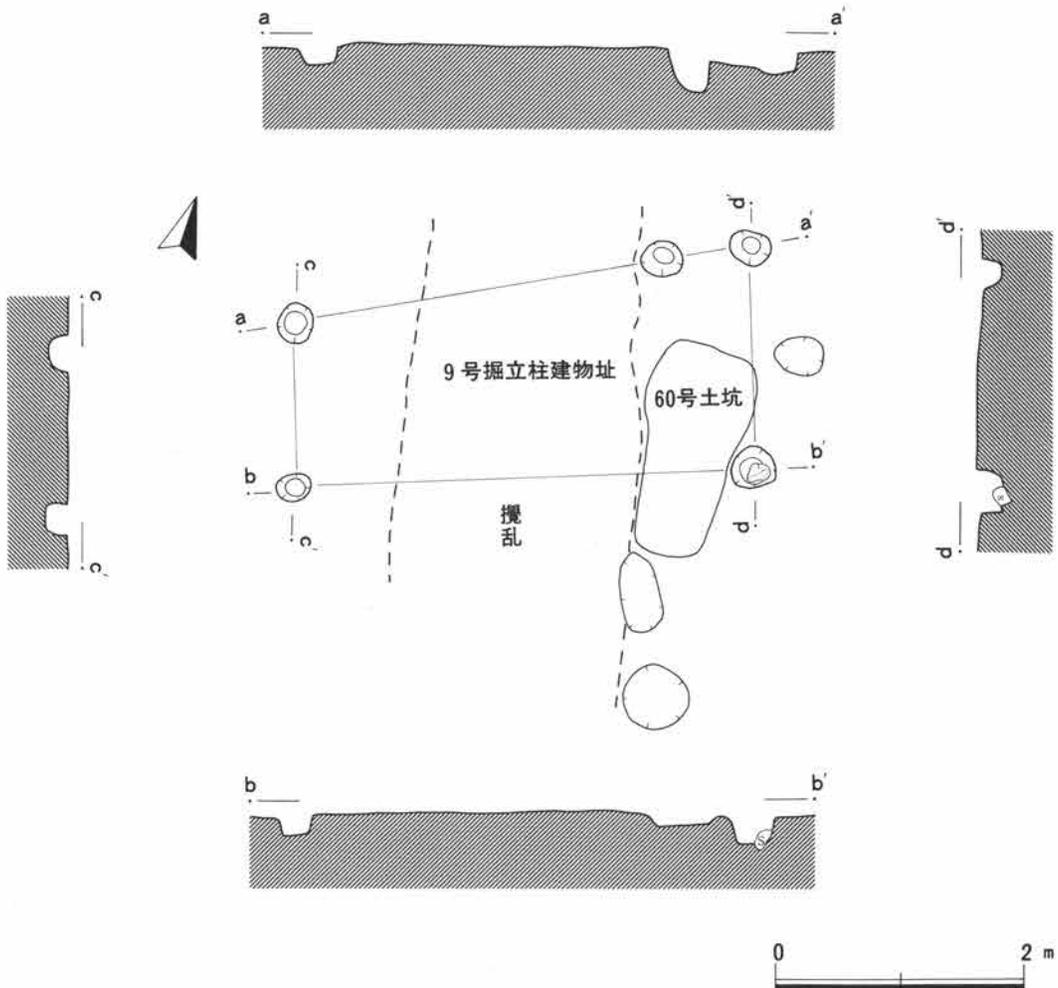
第171図 8号掘立柱建物址

8号掘立柱建物址（2区）〔第171図・図版40（遺構）〕

第4層黒褐色土面にて確認された。9号掘立柱建物址と重複し、7号掘立柱建物址と近接する。また西側は調査区域外へ延びており、全容は不明である。

柱穴は大型不整形円形で、4本を検出したが攪乱が南北に入っており、不明な点が多い。柱穴1は径70～80cm、深さ70cmでほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦である。2は径55～80cm、深さ45cm、3は径52～55cm、深さ50cmでいずれもやや傾斜をもって掘り込まれ、底面はやや丸くなっている。また4は径60～65cm、深さ16cmで、ほぼ垂直に掘り込まれ底面は平坦である。

遺物は、全く検出されなかった。



第172図 9号掘立柱建物址

9号掘立柱建物址（2区）〔第172図・図版40（遺構）〕

第4層黒褐色土面において確認された。8号掘立柱建物址と重複関係にある。中央部を南北へと攪乱が入っており、この間の柱穴は確認出来なかった。

第II章 検出された遺構と遺物

規模は、長辺3.8m、東側短辺1.8m、西側短辺1.3mで不整列な東西棟である。主軸はN21°Wを示す。なお南辺から東辺および西辺へのコーナー部は、いずれも直角である。

柱穴の径は、東辺25～35cm、南辺20～35cm、西辺20～35cm、北辺25～35cmであり、いずれもほぼ垂直に掘り込まれている。

遺物は、全く出土しなかった。

第6節 畠 址

1号畠址（4区）〔第173・174図・図版41（遺構）〕

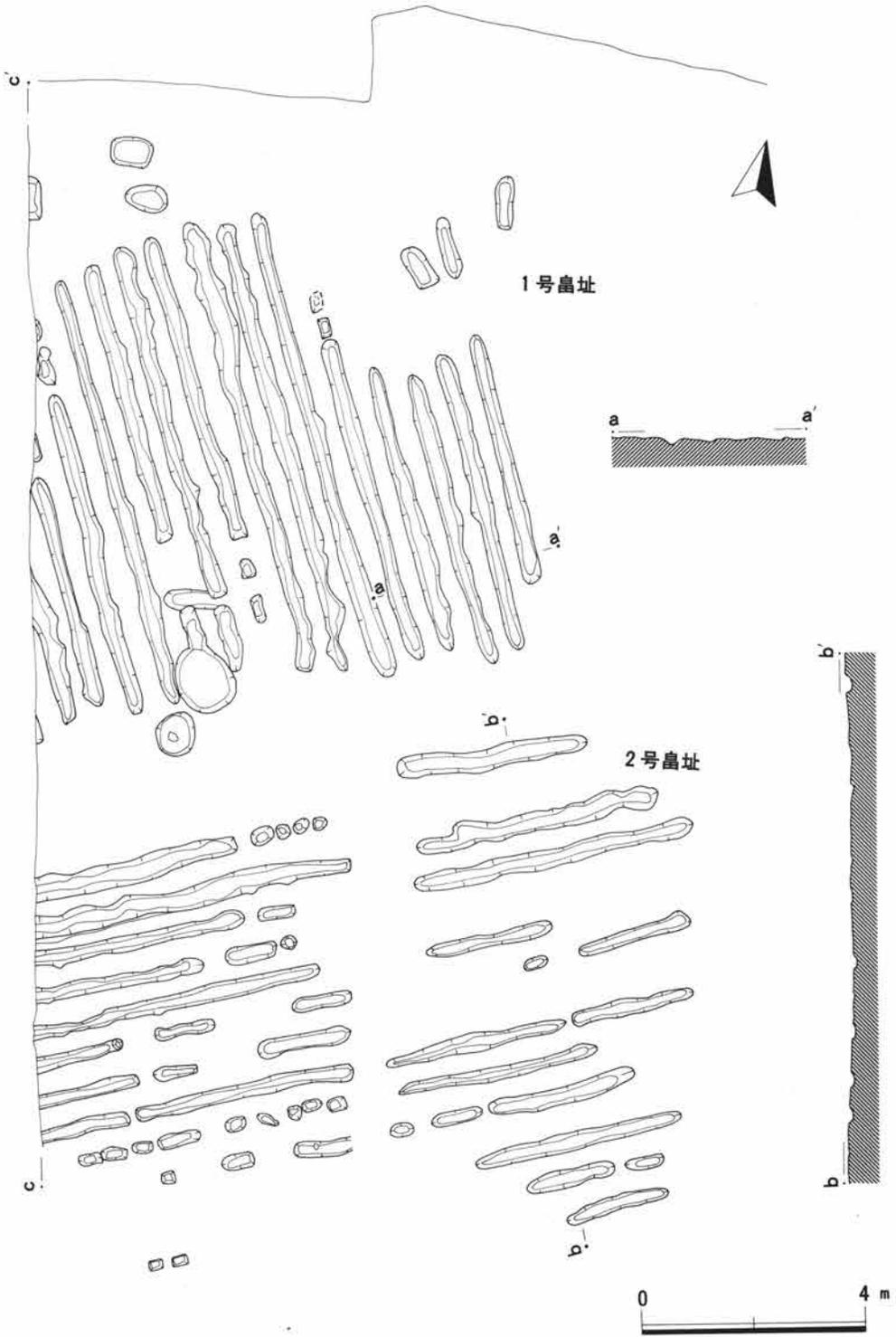
第4層黒褐色土面下方において検出された。暗褐色土の覆土中にB軽石がやや多く含まれており、B軽石降下後の遺構であると考えられる。検出面においては幅約30～40cm・深さ10～20cmであるが、西壁断面によると当初は50cm前後の深さがあったことがわかる。

サクは途中で途切れている部分もあるが、これは確認面まで掘削が及んでいなかったためであると考えられる。本遺構のサクの走行は、現在の桑畑の走行と直交する。覆土が現耕作土に近似し、B軽石の含有量がやや多いという点にのみ相違が認められるという点から、比較的新しい遺構であると推定される。

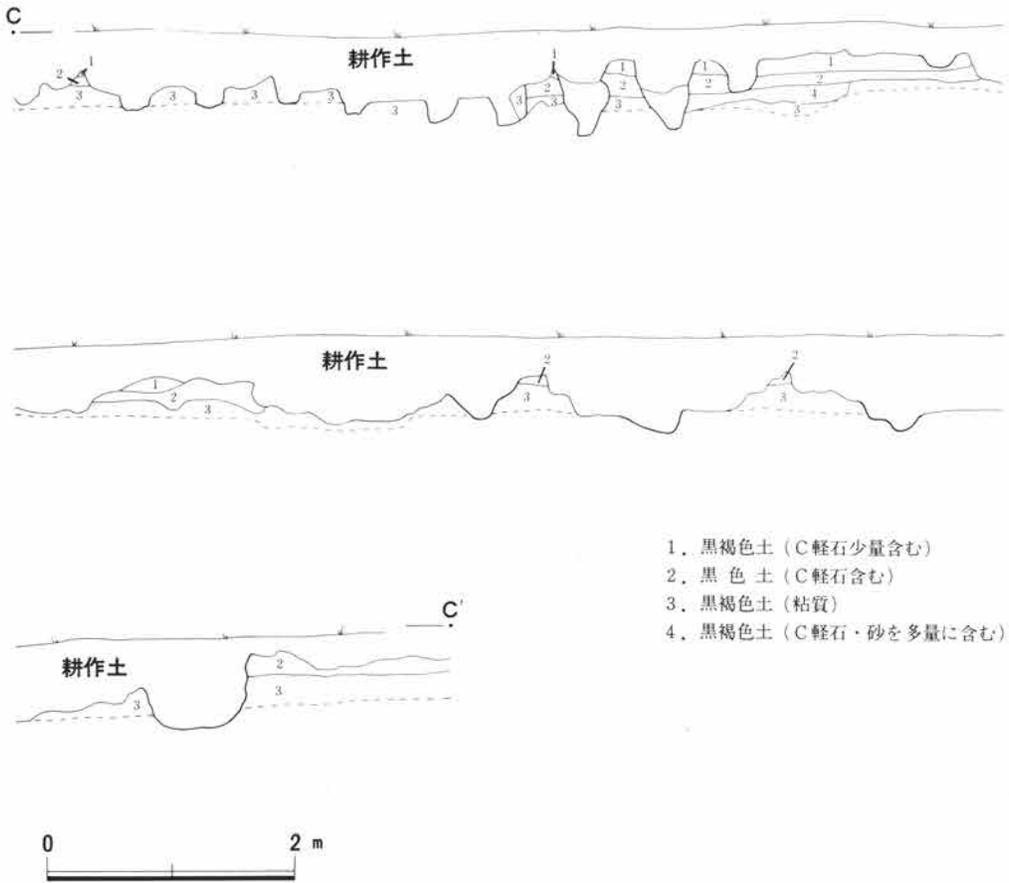
遺物は、全く出土しなかった。

2号畠址（4区）〔第173・174図・図版41（遺構）〕

内容は1号畠址と同様である。走行のみ異なり、現在の桑畑の走行と平行する。



第173图 1・2号畠址



第174図 1・2号畠址

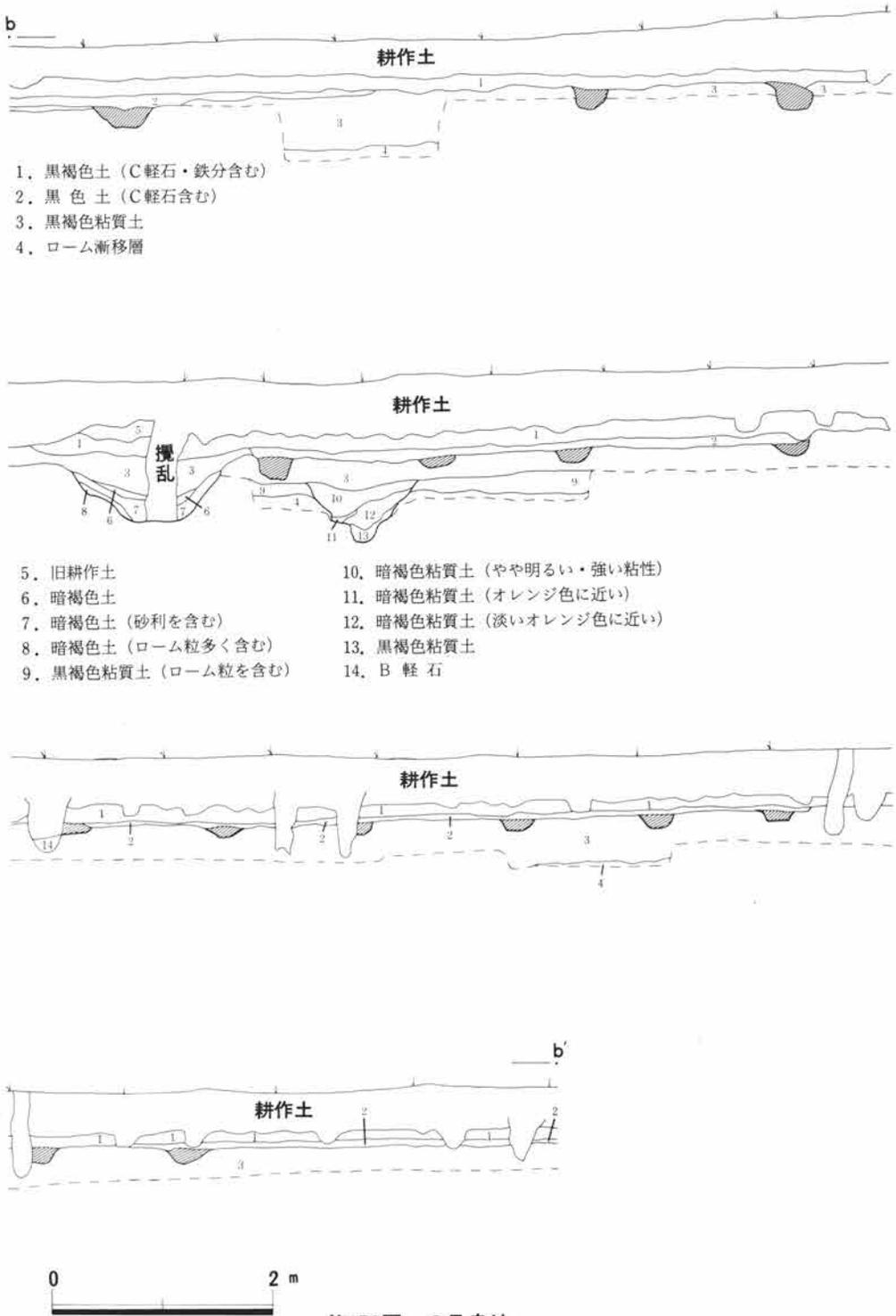
3号畠址 (4区) [第175・176図・図版41 (遺構)]

やや粘質をもった第4層黒褐色土中に検出され、5号畠と南東部分で重複関係にあるが、新旧関係は不明である。覆土(浅間C軽石)から、時間差はほとんどないものと考えられる。幅約50cm・確認面からの深さ約30cmのサク20本が東西方向に切られている。サク間は約80cmであり、乱れている部分もあるが、全体的に規則正しく配列されている。全体的規模は不明であるが、南北方向は約25mである。サクは間層なしの浅間C軽石純層で埋められており、軽石の年代から古墳時代初頭の遺構であることがわかる。

なおサクの直下及び畝の部分から採取した土壌による花粉分析からは、イネ科植物が検出され、同様のプラント・オパール分析からはイネが検出されている。



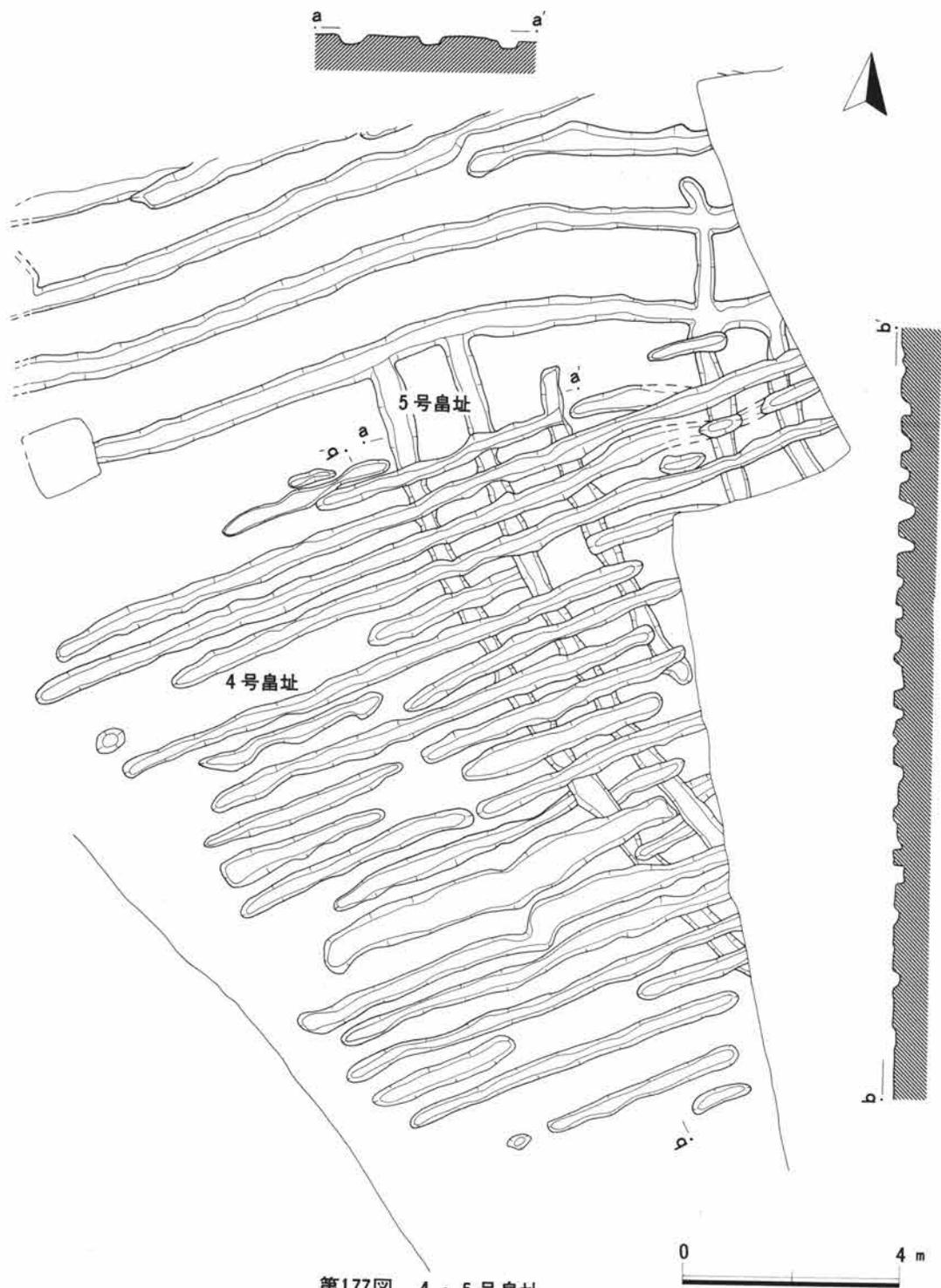
第175图 3号畠址



- 1. 黒褐色土 (C 軽石・鉄分含む)
- 2. 黒色土 (C 軽石含む)
- 3. 黒褐色粘質土
- 4. ローム漸移層

- 5. 旧耕作土
- 6. 暗褐色土
- 7. 暗褐色土 (砂利を含む)
- 8. 暗褐色土 (ローム粒多く含む)
- 9. 黒褐色粘質土 (ローム粒を含む)
- 10. 暗褐色粘質土 (やや明るい・強い粘性)
- 11. 暗褐色粘質土 (オレンジ色に近い)
- 12. 暗褐色粘質土 (淡いオレンジ色に近い)
- 13. 黒褐色粘質土
- 14. B 軽石

第176図 3号島址



第177図 4・5号畠址

4号畠址（3区）〔第177図・図版43（遺構）〕

やや粘性を持つ第4層黒褐色土中から検出され、5号畠と重複関係にあるが、覆土（浅間C軽石と浅間B軽石混合土）の相違から4号畠の方が新しい。幅約30cm～50cm確認面からの深さ約10cm～20cmのサク約20本が3号畠と同じく東西方向に切られているが、遺構の残存状態が悪いためか断続的部分も多く、サク一本の規模や全体的配列も不規則な部分が多い。サク間は約20cm～30cmで、確認された全体規模は南北方向で約13mであるが、更に広がっていた可能性を持つ。サクは浅間B軽石が多量に混合する土で埋められており、平安時代末期以降の遺構である。

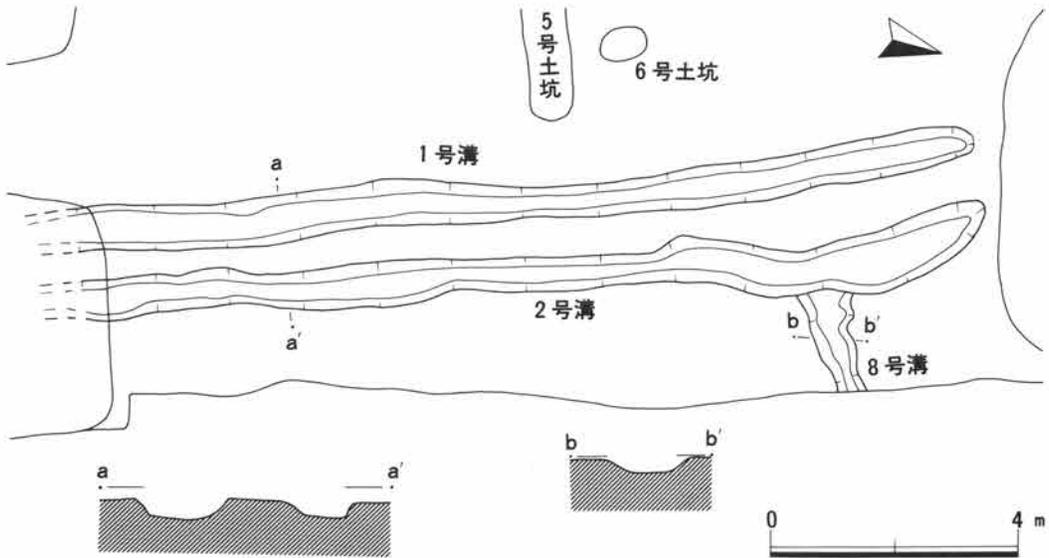
5号畠址（3区）〔第177図・図版43（遺構）〕

3号畠址・4号畠址と重複関係にある。4号畠址との新旧関係は、覆土により5号畠址の方が古い。3号畠址とは北端の部分で一部重複しているが、新旧関係は不明であり、覆土の関係からほぼ同時期であると推定している。サクの覆土は、3号畠址と同じ浅間C軽石の純層で埋められている。サクの規模は1条が幅約50cm、確認面からの深さ30～40cmである。サクは南北方向に走り、5本を確認したが、大部分は東側の調査区域外になる。

6号畠址（1区）

1区58号住居址の覆土上層（第3層C軽石を含む暗褐色土と同レベル）で、僅かに検出された。東西方向に走向をもち、サク内には榛名山二ツ岳 FP が埋没していた（実測図なし）。

第7節 溝および道路状遺構



第178図 1・2・8号溝

1号溝（4区）〔第178・179図〕

第4層黒褐色土下面で確認された。2号溝と平行する。南側は9号住居址の覆土上へと延びているが、住居址南側では確認出来ず、また住居覆土内での確認も困難であった。

溝は上幅50～70cm、底幅20～50cmで、確認面からの深さは約10cmである。底面のレベルは、北側部分の方が南側部分よりも、約7cm高くなっている。遺物は比較的多く、覆土中より壺・甕・高杯等が出土しているが、いずれも破片で散乱していた。

2号溝（4区）〔第178図・180図・図版99（遺物）〕

第4層黒褐色土下面で確認された。1号溝と平行する。南側は9号住居址の覆土上へと延びているが、住居址南側では確認出来ず、また住居覆土内での確認も困難であった。

溝は上幅40～120cm、底幅12～87cmで、確認面からの深さは10～20cmである。底面のレベルは、北側部分も南側部分もほぼ同一である。

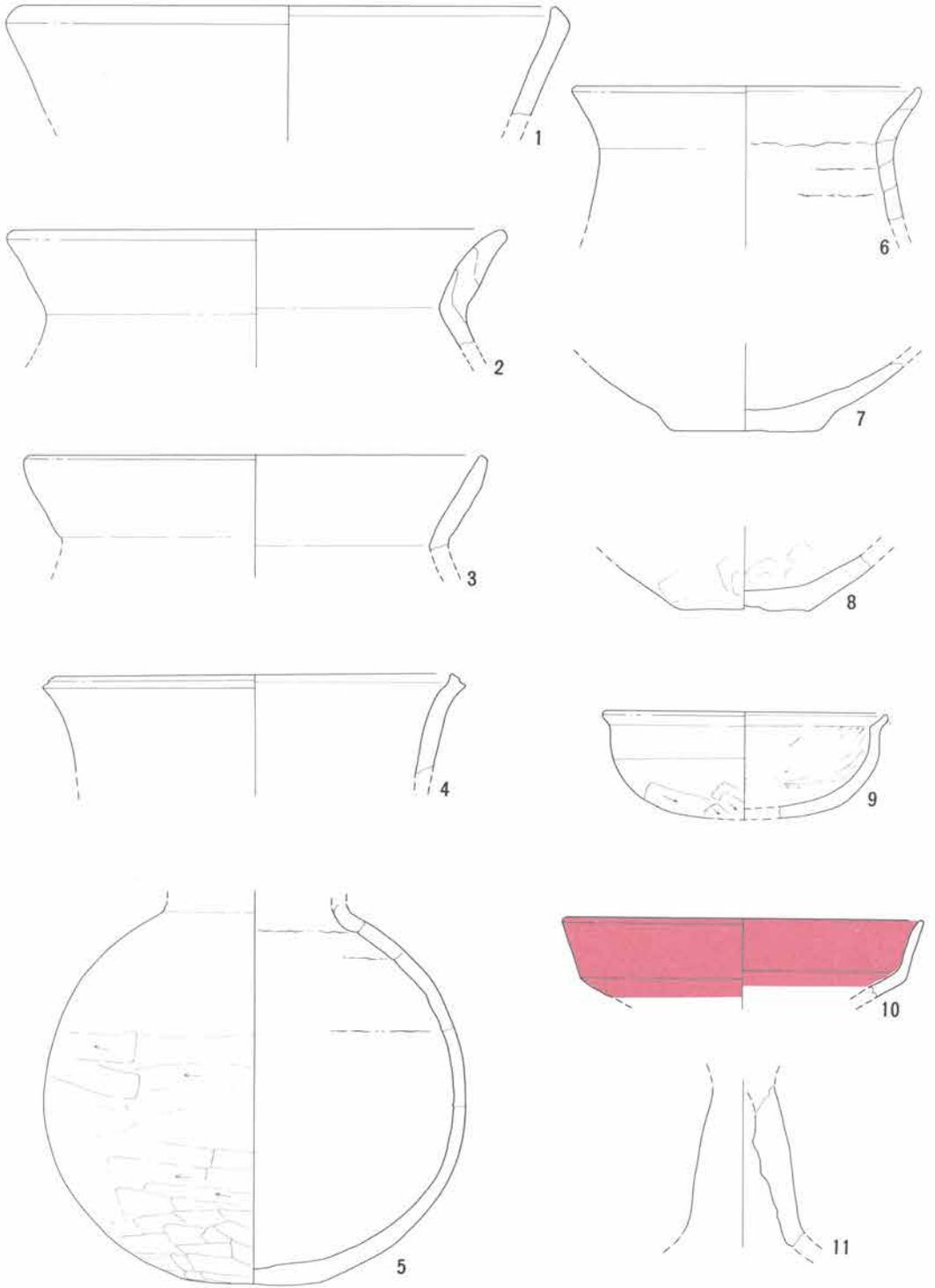
遺物は、覆土中より杯、高杯が出土している。

8号溝（4区）〔第178図〕

第4層の黒褐色土下面で確認された。2号溝と重複するが、覆土が同一なため、同時期に併存した可能性がある。

上幅30～70cm、底幅20～60cmで、2号溝に対し直角に近い角度で東に向っている。確認面からの深さは約7cmで、2号溝の底のレベルの方が低く、断面は皿状を呈する。覆土は、C軽石含有の黒褐色土である。

第7節 溝および道路状遺構



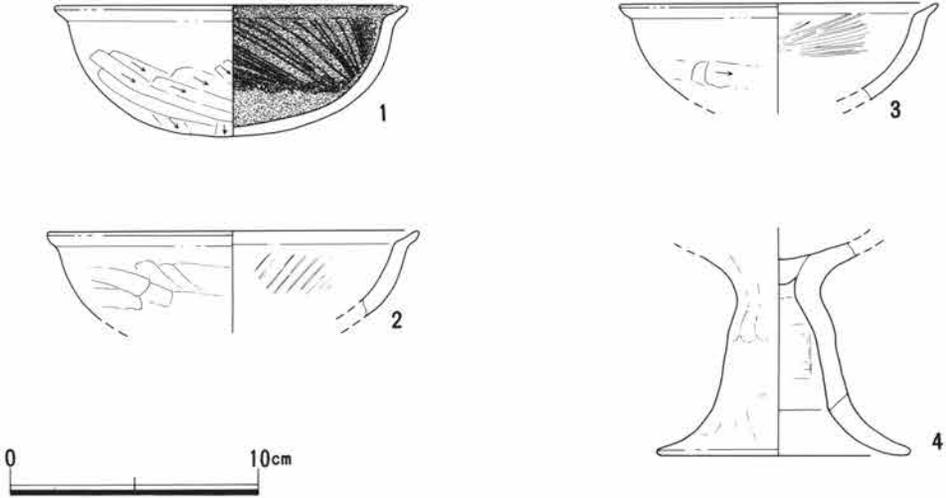
0 10cm

第179図 1号溝出土遺物

第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 土師器	覆土 口縁部小片	1	口径 25.0		内外面口縁部粗いナデ。	砂粒多く含む。焼成普通やや軟質。外面暗黄褐色。内面にぶい黄橙色。
甕 土師器	覆土 口縁部 $\frac{1}{4}$	2	口径 22.6	口縁部は「く」の字状に外反。	輪積成形。内外面横ナデ。	砂粒多く含む。焼成良好比較的硬質。浅黄橙色。外面黒斑あり。
甕 土師器	覆土 口縁小片	3	口径 20.8	口縁部は「く」の字状に外反するものと推定される。	内外面口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。明赤褐色。
甕 土師器	覆土 口縁部小片	4	口径 18.2	口縁部はやや外反し、口唇部は平らに切られている。	内外面横ナデ。ロクロまたは回転台使用か？	砂粒含む。焼成良好硬質。内面黒色。外面にぶい赤褐色。
壺 土師器	覆土 体部 $\frac{1}{2}$	5	底径 6.0	胴部は円形に近い丸形をもち底部は丸底に近い。	胴上半ナデ、底部～胴部下半ヘラケズリ。	砂粒多く含む。焼成良好硬質。明赤褐色。
甕 土師器	覆土 口縁部小片	6	口径 15.7	口縁部は「く」の字状に外反。	輪積成形。外面口縁部横ナデ、胴部は粗いナデ。内面口縁部横ナデ、胴部粗いナデ。	砂粒多く含む。焼成良好硬質。浅黄橙色。外面黒斑あり。
甕 土師器	覆土 底部	7	底径 6.5		風化により観察不能、外面ナデ？	砂粒含む。焼成良好硬質。外面にぶい赤褐色。淡黄色黒斑。内面橙色。
甕 土師器	覆土 底部 $\frac{1}{4}$	8	底径 6.0		外面底部～胴部ヘラケズリ、内面粗いナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。外面赤褐色。外面にぶい橙。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{3}$	9	口径 13.0	丸底。底部～体部は双曲線的な丸形をもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部はやや内湾。	外面体部上半～口縁部横ナデ、底部～体部ヘラケズリ、内面口縁部横ナデ、体部はミガキ暗文が斜行。	砂粒含む。焼成良好硬質。褐色。
高杯 土師器	覆土 口縁部小片	10	口径 16.2	口縁部は逆「く」の字状に内湾し口唇部はやや外反。	外面口縁部横ナデ。体部ナデ内面横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。にぶい橙色。赤色塗彩。
高杯 土師器	覆土 脚部(柱部)のみ	11			外面ヘラケズリ後ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。外面橙色。内面にぶい橙色。

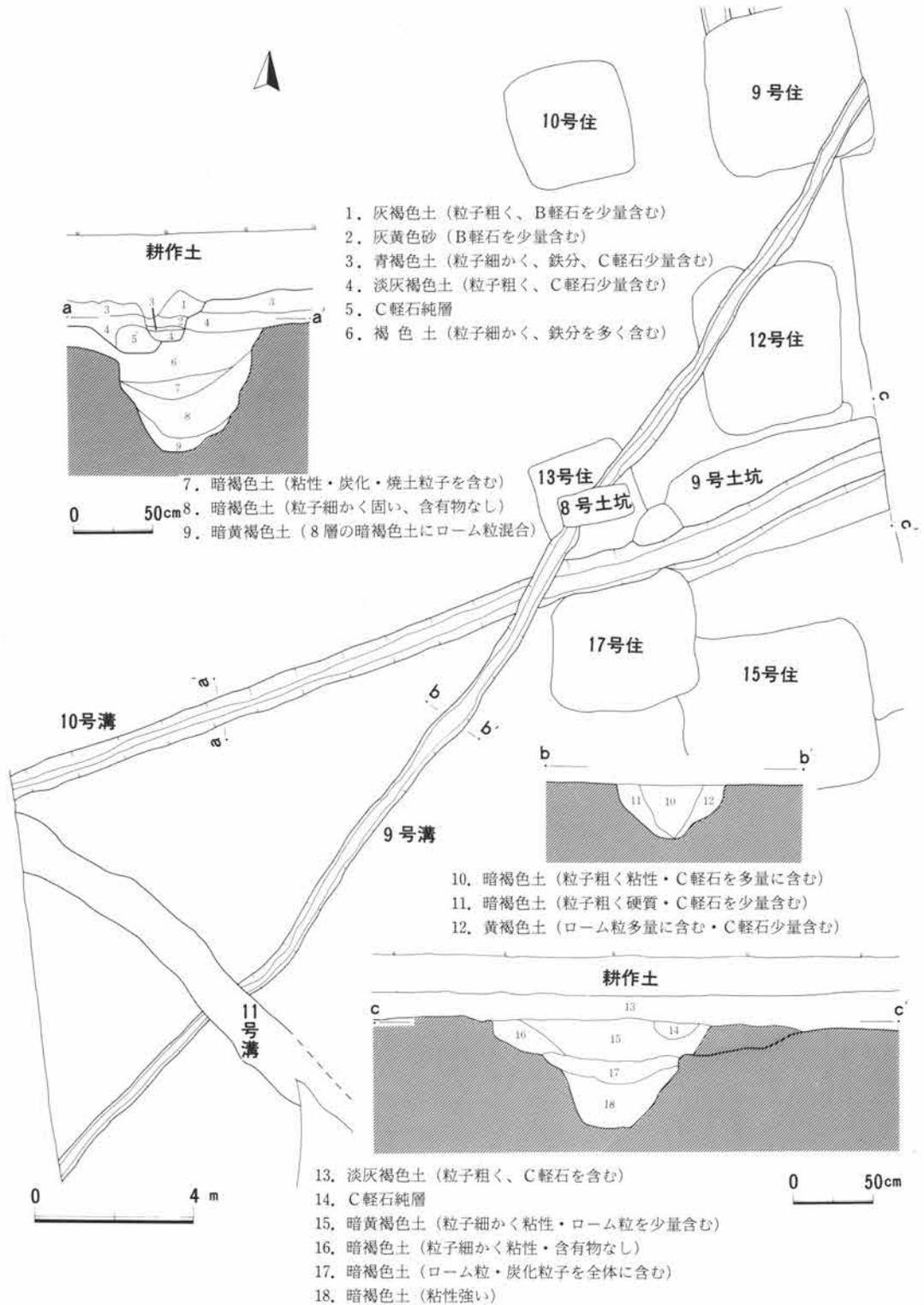
1号 溝出土土器観察表



第180図 2号溝出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	覆土 完形	1	口径 14.1 器高 5.2	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反。	外面体部上半～口縁部横ナデ、底部～体部下半ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ、体部ミガキ、暗文が斜行。底部ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。明赤褐色。黒斑あり。
杯 土師器	覆土 口縁部小片	2	口径 14.8	体部は丸みもち、口縁部は「く」の字状に外反。丸底と推定される。	外面体部上半～口縁部横ナデ。体部下半ケズリ+ナデ。内面口縁部横ナデ。体部ミガキ、暗文が斜行。	砂粒含む。焼成良好硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 口縁部小片	3	口径 12.7	体部は丸みもち、口縁部は「く」の字状に外反。丸底と推定される。	外面体部上半～口縁部横ナデ、体部下半ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ、体部はミガキ暗文が斜行。ミガキが強く暗文が沈線のようなものである。	砂粒を含む。焼成良好、比較的硬質。外面に濃い褐色。内面黒色。
高杯 土師器	覆土 脚部	4	底径 10.2	脚部はロート状。	外面脚部上半はケズリ+ナデ、下半横ナデ。内面脚部上半は粗いナデ。下半横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。橙色。

2号溝出土土器観察表



第181図 9・10号溝

9号溝（4区）〔第181・182図・図版44（遺構）〕

第4層の黒褐色土中で確認された。9・12・13号各住居址及び10号溝を切っており、11号溝と8号土坑に切られている。

北東から南西にかけてほぼ直線的に延びており、上幅40～60cm、底幅20～40cmを測る。確認面からの深さは約30cmで、断面形は、V字形を示す。

覆土中には、径3～8mmのC軽石を大量に含んでおり、3号畠址の覆土と似ている。調査時には、3号畠址の下層で検出されたが、層位的な新旧関係は捉えられていない。

遺物は、底面に密着した状態のものではなく、全て覆土中の出土である。土師器杯は、本溝の下限を決定するものと考えられる。他に弥生土器の破片もかなりみられた。

10号溝（4区）〔第181・183図・図版44（遺構）〕

第4層の黒褐色土中で確認された。掘りこみ面も、同層中である。13・17号住居址を切り、9号溝に切られている。9号土坑との新旧関係は不明である。

東西方向にほぼ直線的に延びており、上幅は約80cm、底幅は30～40cmを測る。深さは約80cmで、断面形はU字形を呈する。ただし、調査範囲の東側では、上面にやや平坦なテラス状の部分が外側に広がっている。この部分と本溝の関係は、明確には判明出来なかった。

覆土中層には、レンズ状に微小の焼土・炭化粒子含有層が見られた。また西側の覆土は、鉄分の含有が全体に見られ、粘性も強い。ただしこの状態は、調査範囲の西側の土層に一般的に見られる現象である。

遺物は、底面に密着して検出されたものではなく、全て覆土中のものばかりである。各種弥生土器の破片が見られたが、他の遺構との重複関係を見れば、これらの遺物と本溝の時期は、それほど離れてはいないであろう。

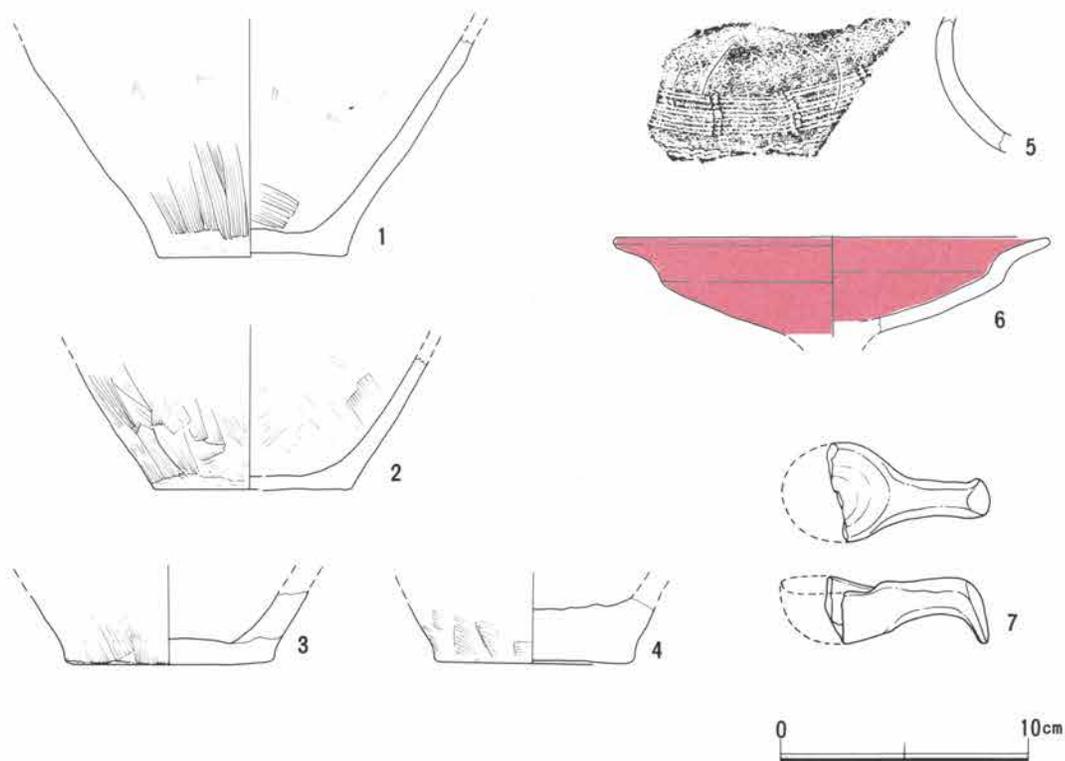


第182図 9号溝出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯	覆土	1	口径: 13.0	口縁部やや外反	口縁内外面ヨコ指ナデ 底面ヘラケズリ	砂粒少量含む。焼成良好。にぶい橙色。

9号溝出土土器観察表

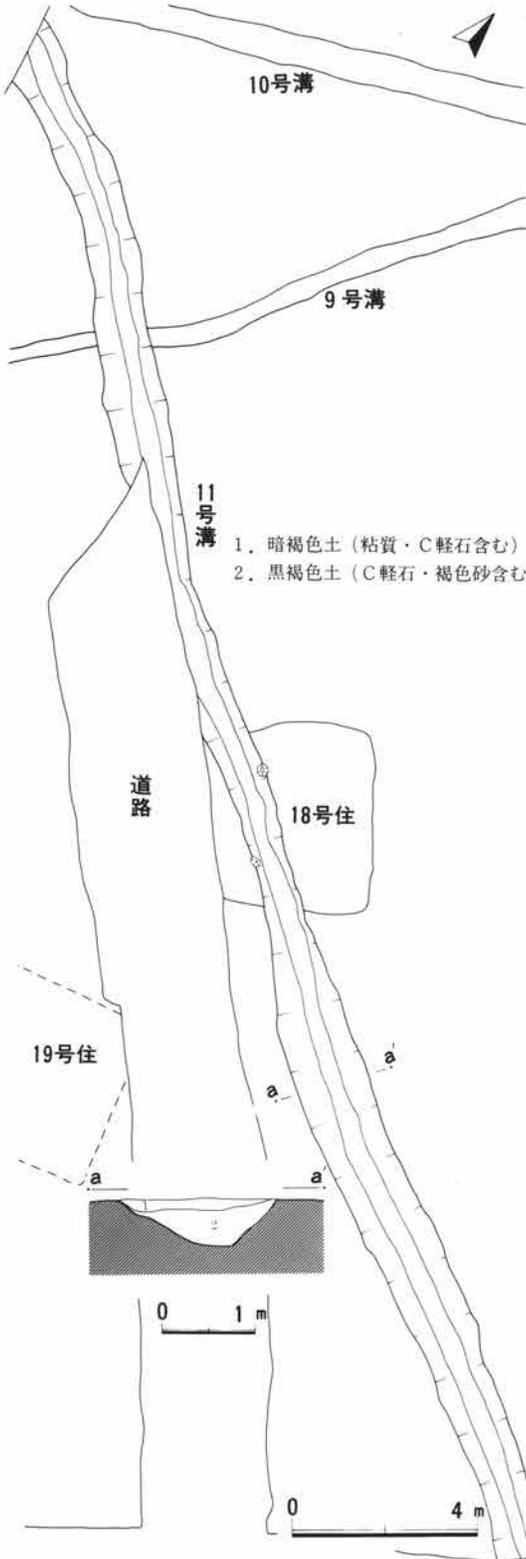
第II章 検出された遺構と遺物



第183図 10号溝出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	覆土 胴下部 $\frac{1}{3}$	1	底径 7.5	胴下部直線的にふくらむ。	成形不明。内外面ナメハケメ。	砂粒含む。焼成良好。橙色。
壺	覆土 胴下部 $\frac{1}{4}$	2	底径 8.0	胴下部ゆるやかな丸みをもつ。	成形不明。外面タテハケメ、内面ナメハケ後、指ナデ。	小砂粒含む。焼成良好。浅黄色。内外面スス付着。
壺	覆土 底部のみ	3	底径 8.3		断面輪積痕。胴最下部タテハケメ、底部内面指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。灰黄褐色。
壺	覆土 底部のみ	4	底径 7.0	底部厚い。	輪積痕。胴最下部ヨコハケメ、底部内面指ナデ。	砂粒含む。焼成普通。灰白色。
壺	覆土	5		頸部ゆるやかにくびれる。	成形不明。外面頸部上段波状文、下段右回り簾状文、内面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。橙色。
高杯	覆土 杯部 $\frac{1}{2}$	6	口径 17.6	口縁部大きく外反、内外面とも稜を有す。	成形不明。内外面赤彩後ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成良好。赤色。
スプーン状土製品	覆土 $\frac{1}{2}$	7	推定全長 8.5		手づくね。全面でいねいに指ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい橙色。

10号溝出土土器観察表



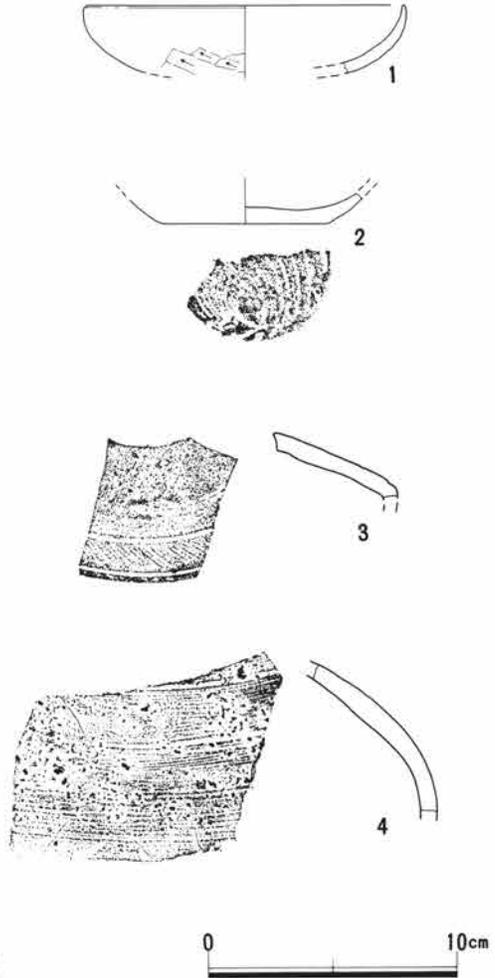
第184図 11号溝

11号溝 (3区) [第184・185図・図版45 (遺構)]

第4層黒褐色土面で確認された。9号溝、18号住居址と重複関係にあり、本溝の方が新しい。西北端および東南端で調査区域外へと延びている。

規模は上幅1~1.5m、底幅30~50cmで、底面は南東端の方が約20cm高くなっている。掘り方は逆台形であるが、側面の傾斜、底面の状態は一様ではない。

出土遺物としては、覆土内より土師器杯、須恵器壺の破片がある。



第185図 11号溝出土遺物

第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(m)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	覆土 1/2以下	1	口径 12.9	口縁短かく内反ぎみに直立。 稜緩く体部内反。	口縁内外面回転横ナデ。体部 底部横ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化や や硬質。橙色。
杯 土師質 土器	覆土 底部1/2	2	底径 6.8	体部内反ぎみに緩く立ちあが る。底部平底。	外面底部右回転糸切り無調整 内面黒色処理後、ミガキ。	砂粒含む。酸化、 やや軟質。にぶい 橙色。
壺・甕 須恵器	覆土 肩部小片	3		肩部～胴部緩く内外。	輪積後内外面回転横ナデ。外 面櫛状工具のカキメ調整。	砂粒小石含む。還元 硬質。灰色。外面 自然釉。
長頸壺 須恵器	覆土 肩部小片	4		全体に緩く内反。上端頸部接 合部焼成前剥離。	外面剥離部ヘラナデ、上端自 然釉、下端2本の浅い沈線区 画内に9本単位櫛描斜行刺突 文帯、内面回転横ナデ。	雲母含む。還元硬 質灰色、外面自然 釉。

11号溝出土土器観察表

〈道路状遺構と周辺の溝状遺構〉

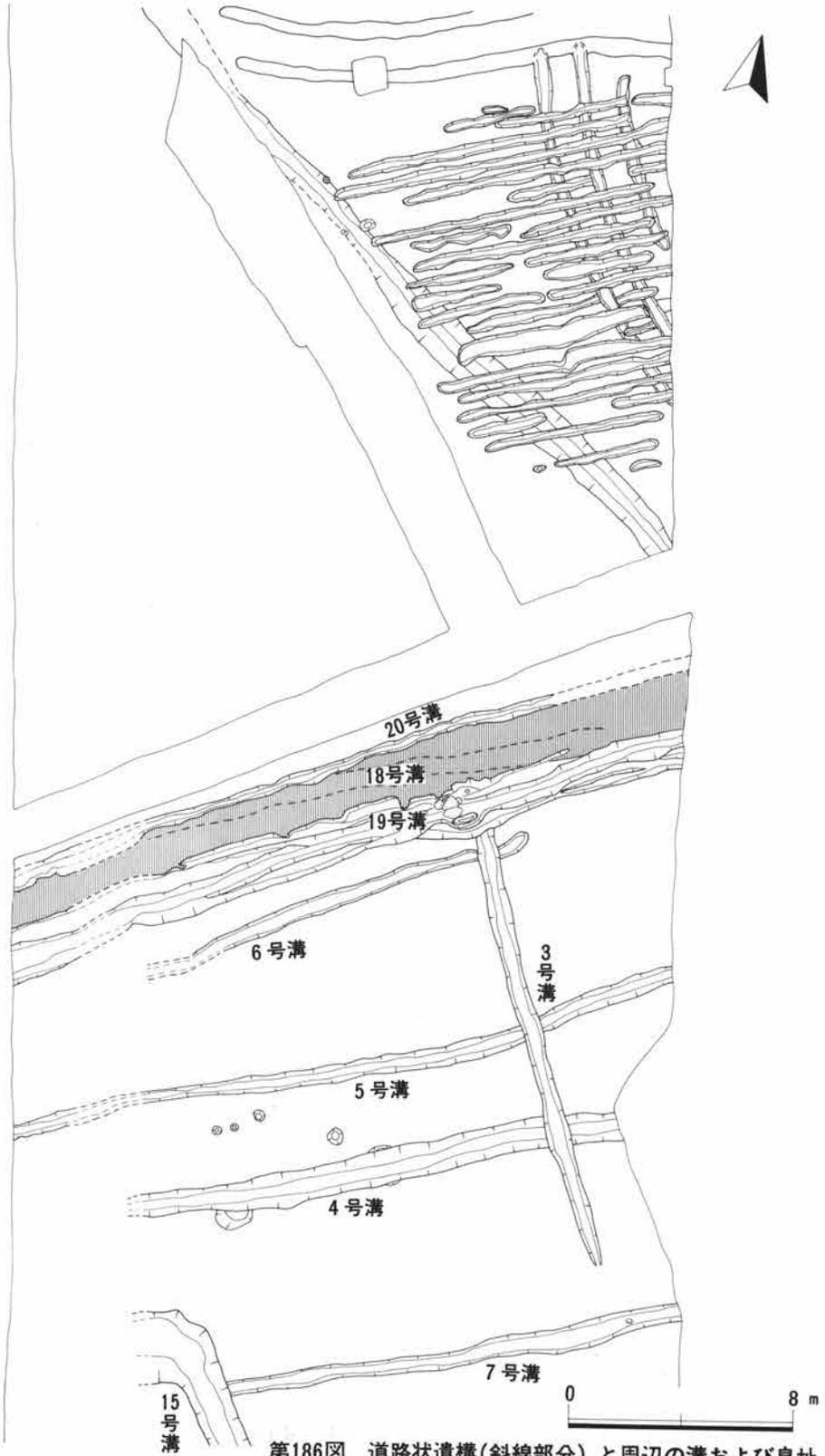
3区北側には、調査範囲を東北東から西南西に横切る幅2mほどの農道があり、この農道のすぐ南側から平行して走る道路状遺構が検出された。道路状遺構の前後約50mの間に3・4・5・6・7・11・18・19・20各号の計9条の溝が検出された。これらの溝は、道路状遺構と有機的な関係があるか、また時期決定をする資料たりうるので、一括して報告する。

道路状遺構（3区）〔第186図～188図・図版45（遺構）・図版100（遺物）〕

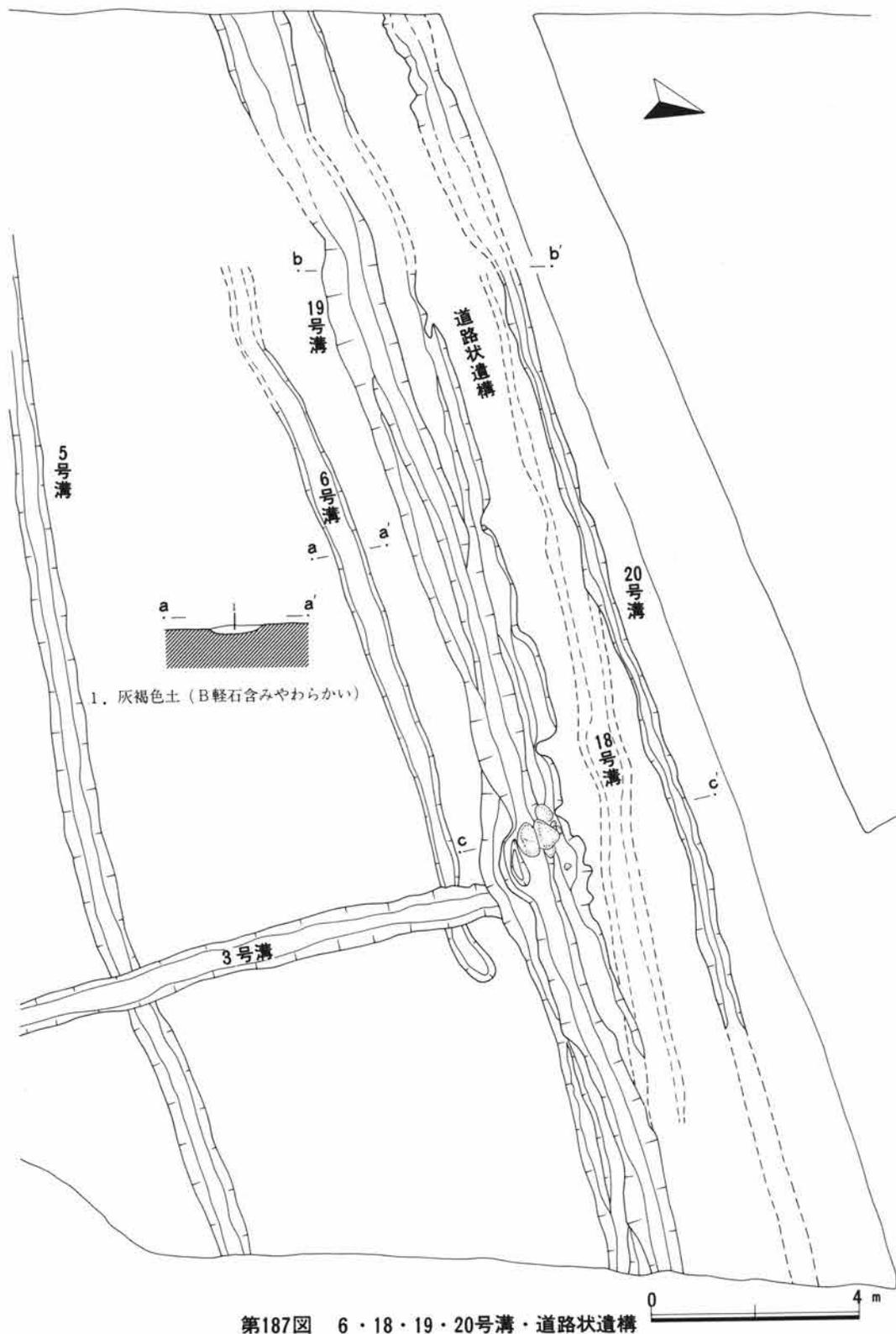
第2層の暗褐色土上面で確認された。18号溝の上に構築されており、20号溝に切られている。19号溝とは、同時期と思われる。

20号溝と19号溝にはさまれて幅1.6～2mのほぼ平坦な硬化面が、直線的に続いている。しかし特に19号溝側は、板状に硬化土がはがれた箇所も多く、遺構面の南端は必ずしも明瞭ではない。また、確認した路面幅の中央部でも、路面方向に平行して幅20～30cm以上の不定幅で上面の硬化土がなく、砂粒状の軽石がやわらかく覆っている部分もあった。

土層断面からは、少なくとも3層の上面が平坦で極めて硬化した層が確認された。いずれも厚さは5～10cmで、版築状の水平な互層堆積が見られた。上層は粗粒砂質浅間B軽石が主体であり、中間層は高純度浅間B軽石が主体、そして下層は、浅間C軽石を含む暗褐色凝固粘質土である。

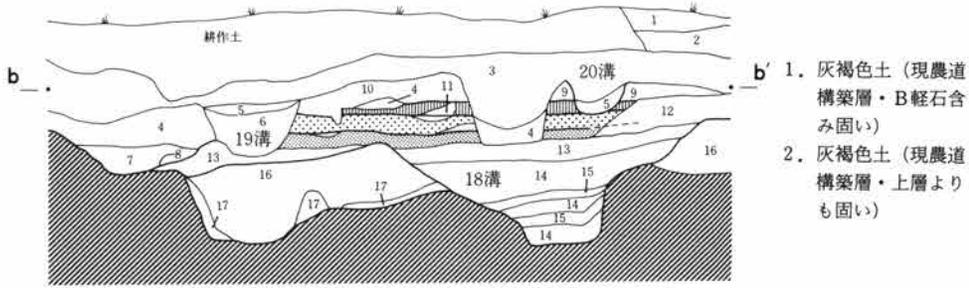


第186図 道路状遺構(斜線部分)と周辺の溝および畠址

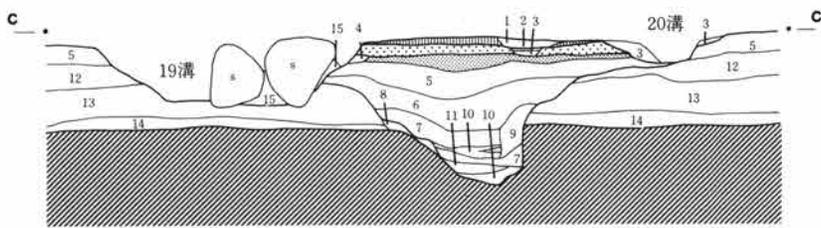


第187図 6・18・19・20号溝・道路状遺構

第7節 溝および道路状遺構



- | | |
|----------------------------|----------------------------|
| 3. 灰青褐色土 (B軽石含む・やわらかい) | 11. 灰褐色砂層 (C軽石を含み固い・粒子粗い) |
| 4. 灰青褐色土 (B軽石・鉄分含む・粒子細かい) | 12. 暗褐色土 (粒子細かく、少量のB軽石含む) |
| 5. 灰青褐色土 (大粒のB軽石・鉄分含む) | 13. 灰青褐色土 (C軽石・鉄分含む) |
| 6. 灰青褐色土 (粒子細かく、B軽石含む) | 14. 灰青褐色土 (粒子細かく、C軽石含む) |
| 7. 灰青褐色土 (粒子粗く、水平状に砂層を含む) | 15. 暗褐色砂層 (鉄分を含む・粒子細かい) |
| 8. 灰青褐色土 (4層中に多量のB軽石を含む) | 16. 灰青褐色土 (粒子細かい・C軽石・鉄分含む) |
| 9. 暗青灰色土 (粒子粗く固い) | 17. 褐色土 (粒子細かく、C軽石含む) |
| 10. 暗青褐色砂層 (細かくやわらかい・鉄分含む) | |



- | | | |
|--|-------------------------------|------------|
| | 青白色砂層 (粒子粗く固い・C軽石・鉄分が班状に混じる) | (第3次路面構築層) |
| | 青白色砂層 (上層に似ているが、暗褐色土の混入がみられる) | (第2次路面構築層) |
| | 暗褐色土層 (粘質・硬質・C軽石を全体に含む) | (第1次路面形成層) |

- | | |
|---|--------------------------------|
| 1. B軽石純層 | 9. 暗褐色土 (粘質・粒子細かい) |
| 2. 褐色砂層 (粒子細かく、固い) | 10. 暗褐色土 (粘質・鉄分含む) |
| 3. 灰青色砂層 (粒子粗く、やわらかい・C軽石少量含む) | 11. 暗褐色砂層 (ほぼ水平に堆積・C軽石少量含む) |
| 4. 灰褐色砂層 (粒子細かいが、やわらかい・褐色砂と灰色砂の互層がややみられる・C軽石含む)
(第1次路面側溝跡) | 12. 暗褐色土 (粒子細かくしまっている) |
| 5. 暗褐色土 (粒子細かく粘質) | 13. 暗褐色土 (粒子細かくしまっており、鉄分を多く含む) |
| 6. 暗褐色土 (粒子細かく粘質・砂層の帯を含む) | 14. 褐色土 (粒子細かく、ローム粒含む) |
| 7. 暗褐色砂層 (暗褐色土・C軽石含む) | 15. 青灰色土 (粒子やや粗く、B軽石を含む) |
| 8. 暗褐色土 (粘質・鉄分・砂を含む) | |



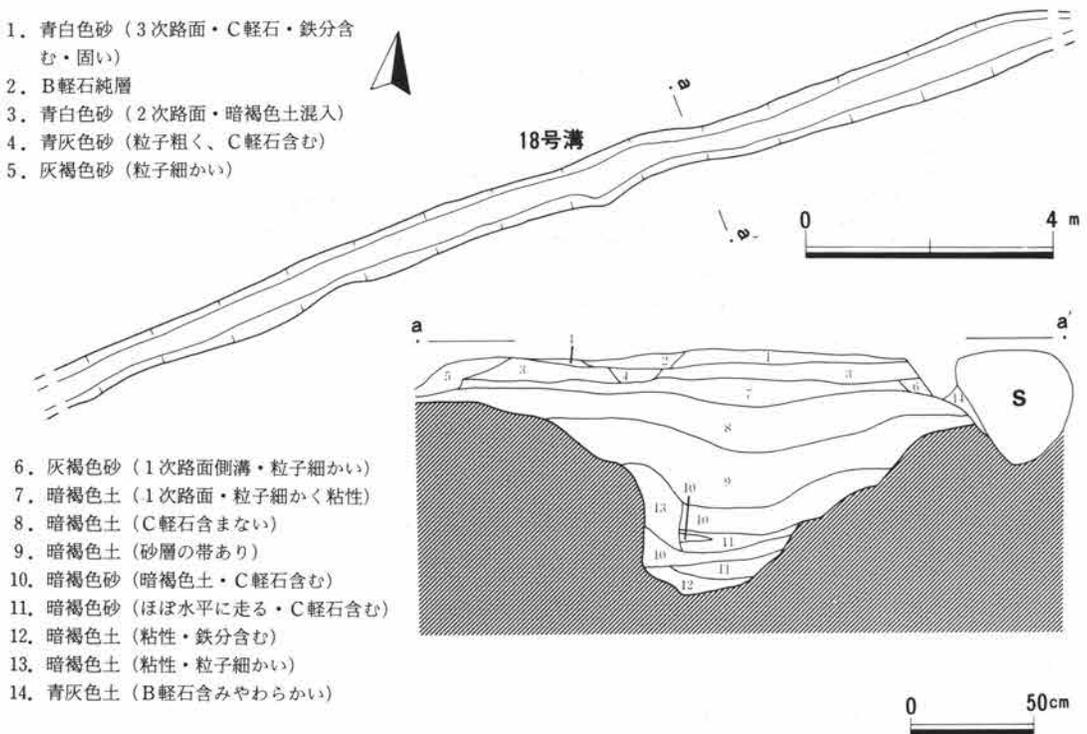
第188図 18・19・20号溝・道路状遺構断面図

第II章 検出された遺構と遺物

これらは、それぞれ第3次・第2次・第1次の路面構築層と考えられる。また西側の断面では、第3次路面構築層の上に、やはり硬化した浅間B軽石含有黒色凝固砂質土（第9層）が中心をやや北側に移して認められた。この層の上面は必ずしも平坦ではなかったが、硬化状態を考えれば、第4次路面構築層の可能性もある。さらにこの層より北側にずれた位置に、20cmほどの間層をはさんで、現農道の構築層（第1・2層）が存在する。なお、各路面構築層の幅は、後の攪乱等のため明瞭には当初の状態が現れていないが、少なくとも1.8~2.0m以上はあったことが、うかがえる。

以上の土層状況より、浅間B軽石降下以前に第1次路面が構築され、降下中に第2次路面が、降下後に第3次路面が構築されたことが、判明する。さらにやや北側に第4次路面が造られた可能性もある。各路面構築土からは、全く遺物は検出できなかった。

（軽石の同定及び土質については、群馬大学新井房夫教授の鑑定による。以下18・19・20号溝の土層についても同じ。なお各路面の硬化度については、正確な計測を行わなかったが、移植ゴテでたたくと金属質の音が響き、移植ゴテでは全く刃を入れることのできない硬さである。現農道の構築土も同様の状況であった。）



第189図 18号溝

18号溝（3区）〔第186~189・192図・図版46（遺構）・図版100（遺物）〕

本溝は、道路状遺構の第1次路面構築層の下面で確認された。掘りこみ面は、第4層の黒褐色土上面である。

上幅2.2m以上、底幅約0.4mを測り、道路状遺構の走向に比べると、角度をやや東西方向に偏し、全体に南側に緩く曲がる走向を示している。推定掘りこみ面からの深さは約80cmで、下部は断面U字形を呈するが、上部では基本的に逆八字形になり、さらに南側は緩く、北側は急である。

土層断面では、下部は30cm以上砂の互層水平堆積が見られ、上部はレンズ状に浅間C軽石含有の暗褐色粘質土が厚く堆積している。

遺物は、比較的多数の土器片・瓦片等が見られたが、底面密着のものではなく、全て覆土最上層の暗褐色土（第8層）のものばかりである。瓦類は、投棄後の鉄分附着が見られる。

本溝の掘削時期は不明だが、図示した遺物が示す最も新しい時期には、本溝は確実に埋没していた。また本溝覆土最上層と道路状遺構第1次路面構築層とは、基本的に同一の土質である。

6号溝（3区）〔第186・187図〕

第4層の黒褐色土面で確認された。3号溝と重複するが、覆土が同一なため、同時期に併存していた可能性がある。

上幅約60cm、底幅約30cmで、19号溝・道路状遺構とほぼ平行して直線的に走っている。確認面からの深さは約10cmで、断面形は皿状を呈する。

遺物は、全く出土していない。

19号溝（3区）〔第186～188・193図・図版100（遺物）〕

第2層の暗褐色土上面で確認された。3号溝と重複しているが、覆土は同じなため、ほぼ同時期と思われる。

道路状遺構に平行して直線的に延びており、検出時には、上幅は約1.8m、底幅は約0.5m、確認面からの深さは0.4m前後である。立ち上がり面の状況はかなり複雑に検出されたが、基本的には逆八字状の断面形を持つと考えられる。北側の数段のテラス状の部分は、道路状遺構の下面が部分的に現れたものである。3号溝と交差するあたりに、大小7個の河原石が見られた。これらの石は、いずれも底に密着しており、特に大きな石2個は、上面が道路状遺構の第3次路面とほぼ同一のレベルである。覆土の下層は、浅間B軽石水成混入の黒色砂質土である。

遺物は、底密着のものではなく、覆土下層より丸瓦片（8）須恵器甕片（10）が出土している。

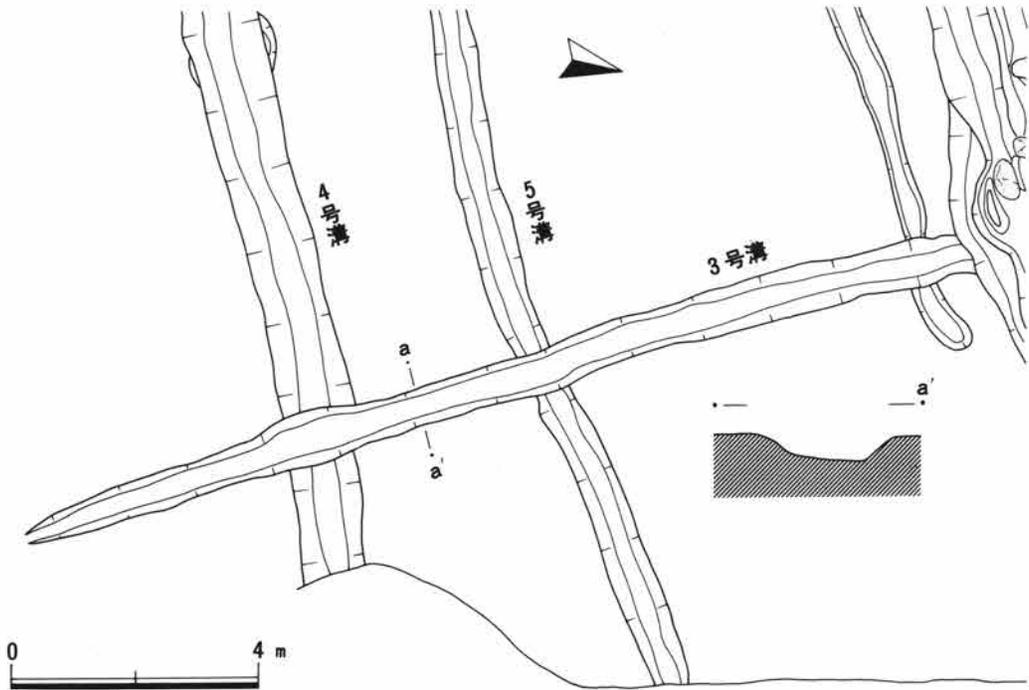
本溝と道路状遺構の新旧関係は明瞭ではないが、同一の覆土で覆われていることや、石の設置状況から考え、第3次路面使用時から推定第4次路面使用時には、同時に存在していた可能性が高い。

20号溝（3区）〔第186～188・193図・図版100（遺物）〕

道路状遺構の第3次路面において確認された。

上幅約40cm、下幅約20cmで、道路状遺構と平行して走っている。掘りこみ面は、推定第4次路面の上であり、少くも20cm以上の深さを持ち、U字形の断面形を呈する。覆土は、推定第4次路面及び19号溝上層と同一である。

遺物は、中央やや東寄りの底に密着して、常滑甕口縁片（12）が出土している。



第190図 3号溝

3号溝 (3区)〔第190図〕

第4層の黒褐色土面で確認された。4・5・6各号溝及び19号溝と重複している。4号溝は、本溝に切られるが、他の溝とは、覆土は同一で、同時期に併存していた可能性がある。

上幅約80cm、底幅約40cmで、19号溝及び道路状遺構に対しほぼ直角の方向に直線的に走っている。確認面からの深さは、約10cm強で、断面形は皿状を呈する。重複する各溝と本溝の底のレベルは、本溝より浅いものが5・6号溝で、深いものが4・19号溝である。

遺物は、全く出土していない。

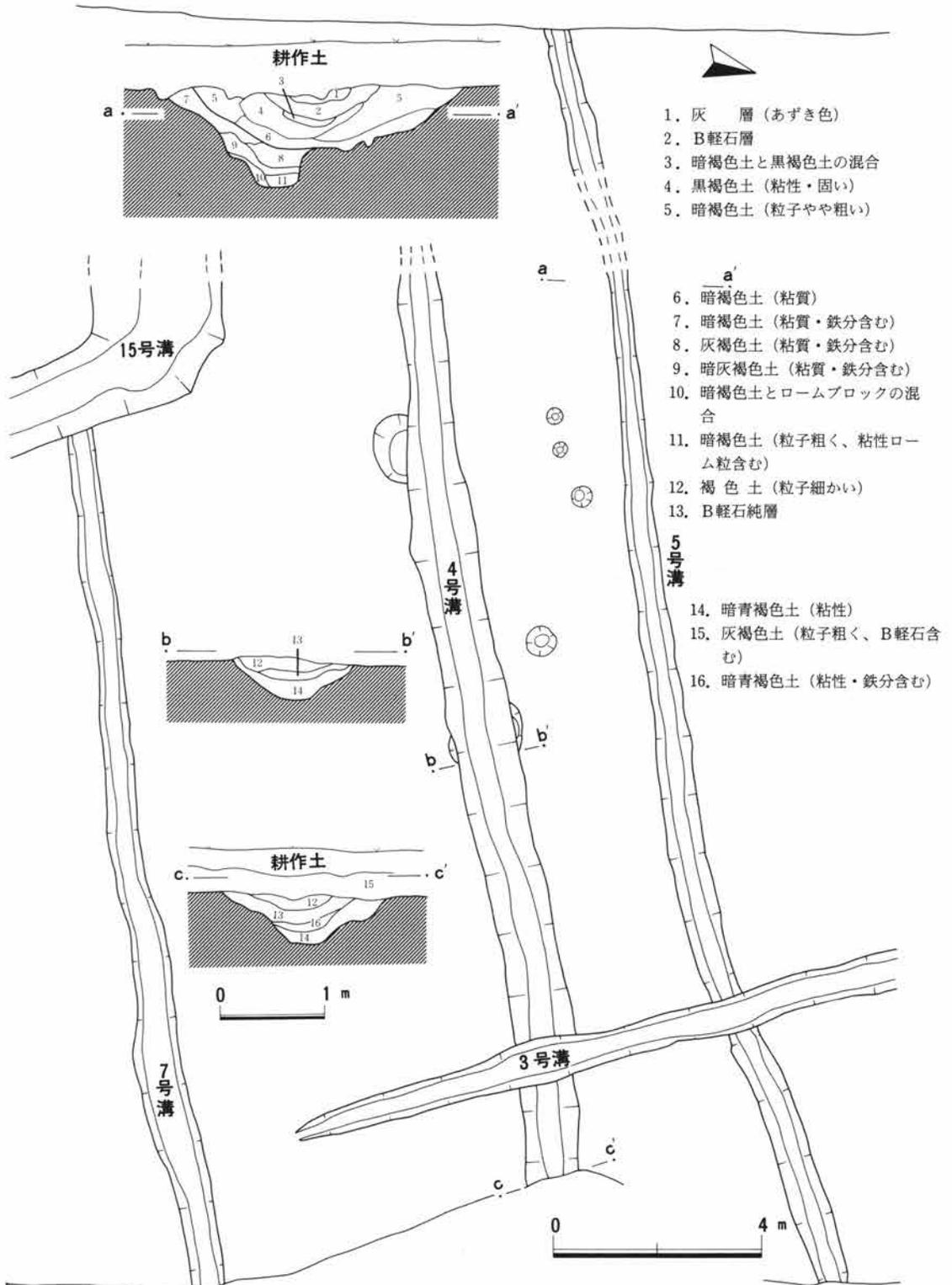
4号溝 (3区)〔第191・193図・図版47 (遺構)〕

第4層の黒褐色土面で確認された。しかし掘りこみ面は、第2層の暗褐色土の上面からである。3号溝と重複するが、3号溝が本溝を切っている。また8・10号井戸を切っている。

本溝は、新旧2条の溝が重なっており、新しいものは上幅2.6m、底幅0.8m、掘りこみ面からの深さ0.5mを測り、断面は大きく皿状を呈する。古いものは、底幅0.4m、掘りこみ面からの深さ0.8mで、断面は逆ハ字形を呈する。いずれも直線的に、19号溝・道路状遺構とほぼ平行して走っている。新しい溝は、覆土上層に厚さ20cmに達する浅間B軽石の純層のレンズ状堆積が見られる。また古い溝の覆土の多くには、鉄分の沈着が認められる。

遺物は、図示したもの(II)が新しい溝の覆土上層(B純層より上)より発見されている。

第7節 溝および道路状遺構



第191図 4・5号溝

第II章 検出された遺構と遺物

5号溝（3区）〔第191図・図版47（遺構）〕

第4層の黒褐色土面で確認された。3号溝と重複するが、覆土が同一なため、同時期に併存していた可能性がある。

上幅40～70cm、底幅15～30cmで、西側でやや湾曲ぎみになるが、基本的には19号溝・道路状遺構と平行している。確認面からの深さは約10cmで、断面形は皿状を呈する。

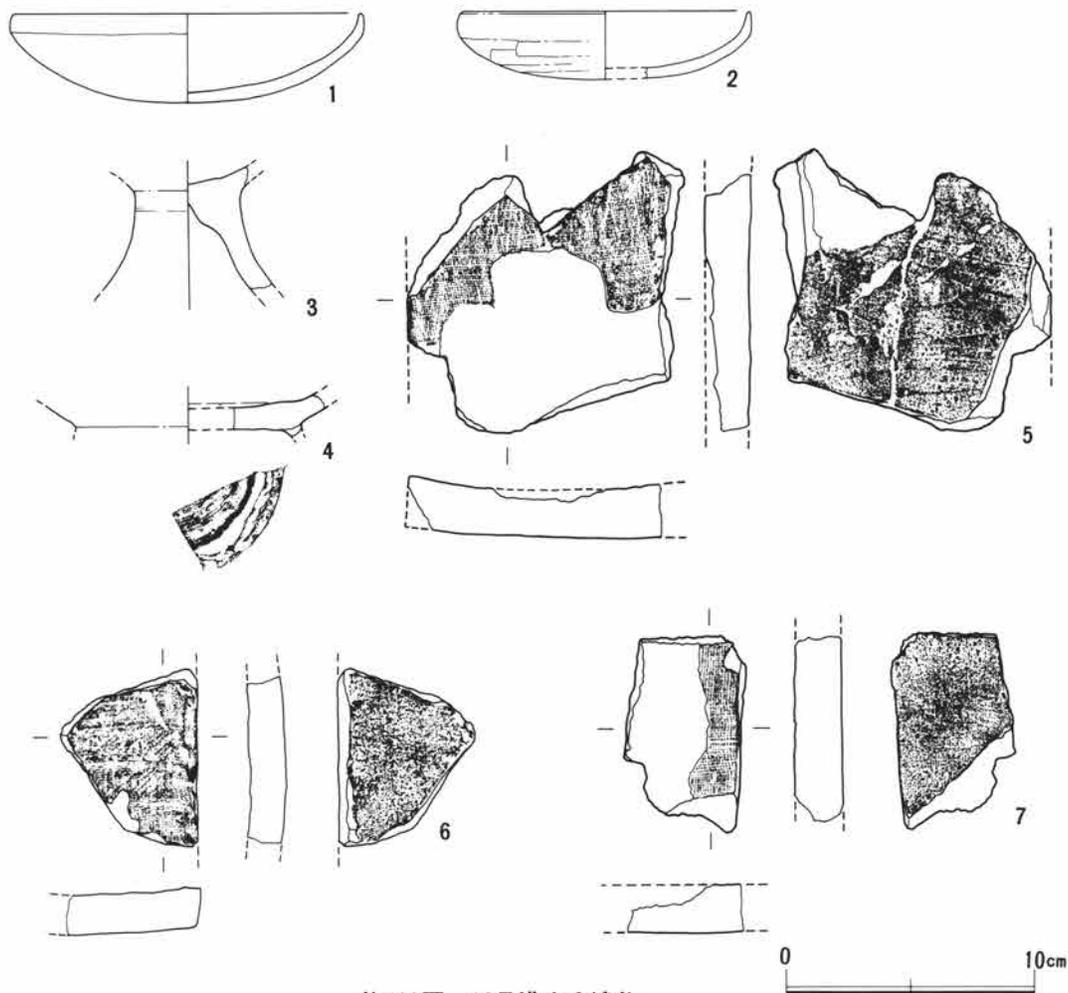
遺物は、全く出土していない。

7号溝（3区）〔第193・194図〕

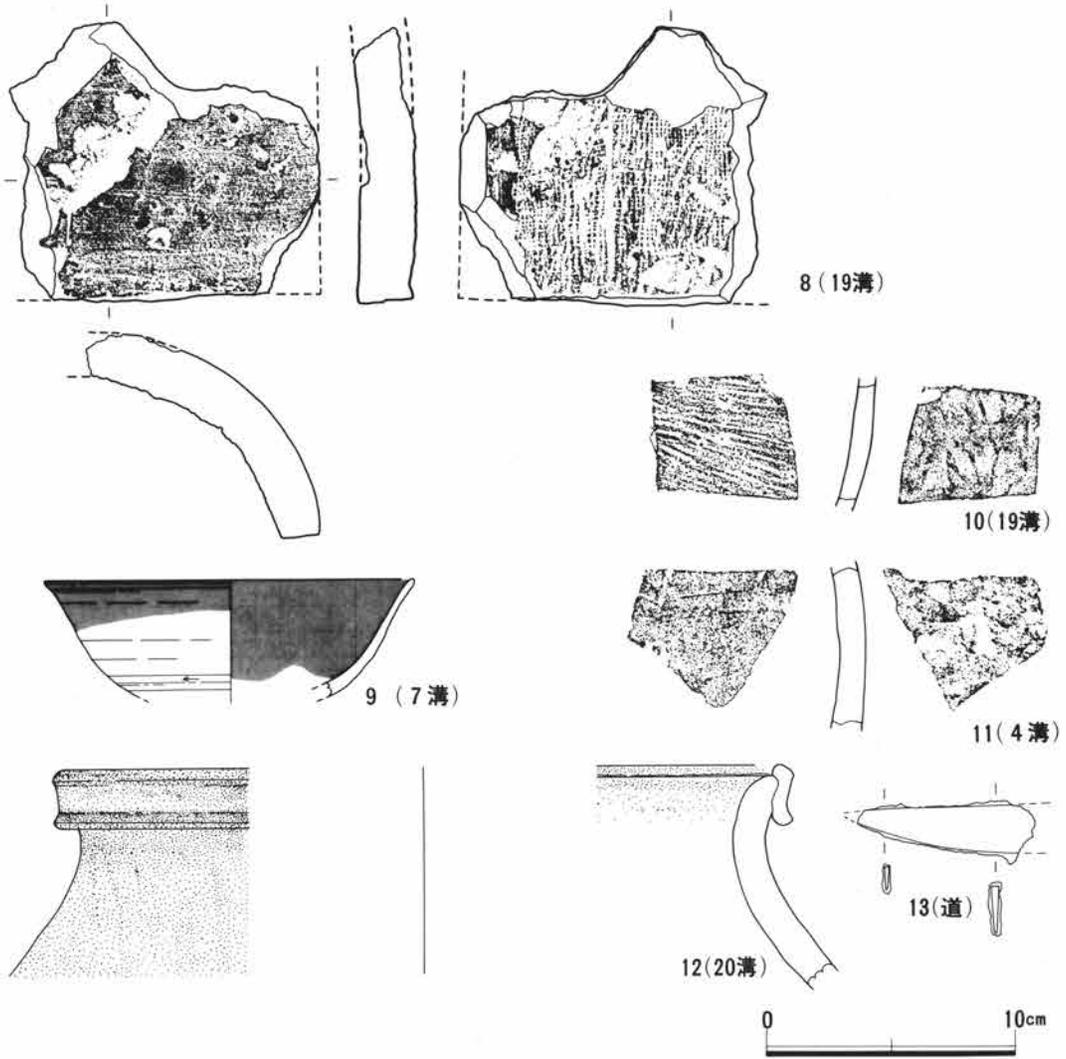
第4層の黒褐色土面で確認された。西側で15号溝と重複するが、覆土・遺物より本溝が新しいと思われる。

上幅40～90cm、底幅30～60cmで、19号溝・道路状遺構の走向に近く直線的に走っている。確認面からの深さは10cm以下で、断面皿状を呈する。覆土は、3・5・6・19号溝と同一である。

遺物は、灰釉碗片が覆土中より発見されている。



第192図 18号溝出土遺物



第193図 道路状遺構周辺の出土遺物（道路状遺構・19・20・4・7号溝）

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	18溝覆土 1/2残存	1	口径 14.0 器高 3.6	口縁部僅か内反ぎみに直立。 体部との境緩い稜。丸底状。	口縁部内外面横ナデ。体部、 底部不定ヘラケズリ、磨滅。	砂粒含む。酸化、 やや軟質。橙色。
杯 土師器	18溝覆土 1/2以下残	2	口径 11.5 器高 2.7	口縁部僅か内反ぎみに直立。 稜なく丸底状。	口縁部内外面横ナデ。体部指 ナデ。底部不定ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化や や軟質。橙色。
台付甕 土師器	18溝覆土 台部1/2残	3		外面外反。下端でさらに外反 強まる。	外面横ナデ。内面指ナデ。指 押さえ痕。	砂粒含む。酸化、 硬質。明赤褐色。
壺 須恵器	18溝覆土 底部小片	4		体部器壁厚く、内反ぎみ。 底部器壁厚い。高台外傾ぎみ。	外面底部回転糸切り後、高台 貼付ナデ調整。内面回転横ナ デ。	砂粒少ない。内面 弱く外面強い還元、硬質。灰色。

第II章 検出された遺構と遺物

平瓦	18溝覆土 1/2以下残	5		下面ほぼ水平。上面横断面、 外反。器壁厚い。	上面布目痕。下面ヘラナデ。 投棄後、全面鉄分付着。	砂粒気泡少ない。 酸化後還元。硬質 灰白色。
平瓦	18溝覆土 1/2以下残	6		横断面より縦断面の外反強 い。側面平滑。稜鮮明。	上面布目痕後、端部ヘラ切り。 下面軽いナデ。側面金属製ヘ ラ切り。投棄後、鉄分付着。	砂粒気泡少ない。 還元、硬質。灰白 色。
平瓦	18溝覆土	7		横断面僅かに外反。	上面布目痕。下面ヘラナデ。 投棄後、全面鉄分付着。	砂粒気泡少量。還 元、硬質。灰白色。
丸瓦	19溝下 1/2残存	8		横断面半円形。側面平滑。稜 顕著。	上面横ナデ。下面布目痕後、 口縁部ヘラ切り。側面金属製 ヘラ切り。	砂粒小石含む。酸 化後還元、硬質。 灰色。
椀 灰釉陶器	7溝覆土 1/2以下	9	口径 19.9	口唇部丸く外面に内稜。口縁 部僅か外反。体部緩く内反。	内外面回転横ナデ。外面下位 回転ヘラケズリ調整。外面上 位内面全面施釉、ハケ塗り。	砂粒気泡少ない。 還元、硬質。 灰白色。
甕 須恵器	19溝下 胴部少片	10		全体緩く内反。	外面平行叩き痕。内面青海波 状アテ痕。	砂粒少量。中性後 還元、硬質。灰色。
甕 常滑	4溝覆土 胴部小片	11		器壁厚い。	外面縦刷け目後、横ナデ調整 で格子状。内面指ナデ。	砂粒小石含む。酸 化硬質。外にぶい 褐色。内灰褐色。
甕 常滑	20溝覆土 口縁小片	12	口径 29.0	口唇部断面半円形。内面に折 り返す。口縁部外面緩くS字 状。稜強く下端を円側に巻き こむ。頸部～肩部外反。	内外面輪積後、右回転横ナデ。 口縁部貼付。内外面自然釉。 投棄後、鉄分付着。	砂粒小石含む。 還元、硬質。 釉灰オリーブ色。 素地は灰赤色。
鉄 刀子	道路状遺 構下層 両端欠 損。	13	長さ 7.0 幅 2.5 厚さ 0.5	断面三角形状、平面直角三角 形状で扁平。		刀子の基部。

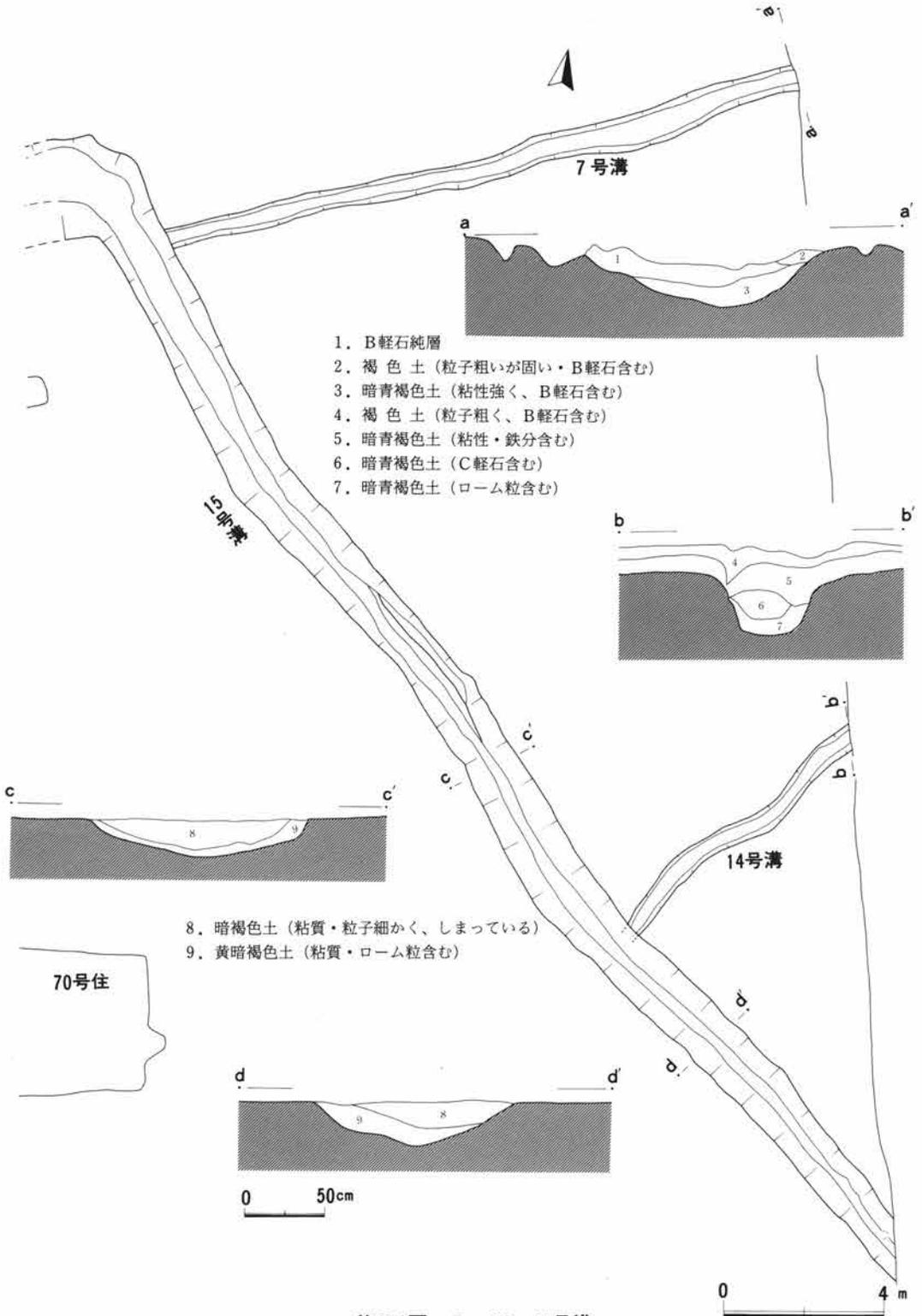
18・7・19・4・20溝及び道路状遺構出土遺物観察表

14号溝（3区）〔194図〕

第4層黒褐色土面において確認された。15号溝と直交するが、15号溝西側では精査したにもか
かわらず確認出来なかった。深さは、東側境界壁では約40cm（確認面では25cm）であるが、西側
15号溝との接点付近では約10cmと浅くなっており、15号溝西側では確認面まで掘り込まれていな
かった可能性が強い。なお、15号溝との重複関係は明確ではないが、15号溝の覆土にC軽石が全
く含まれていないのに対して、本溝には覆土にC軽石を含んでいるため、本溝の方が新しいと考
えられる。

規模は、上幅20～30cm、底幅15～20cmである。遺物は全く出土しなかった。

第7節 溝および道路状遺構



第194図 7・14・15号溝

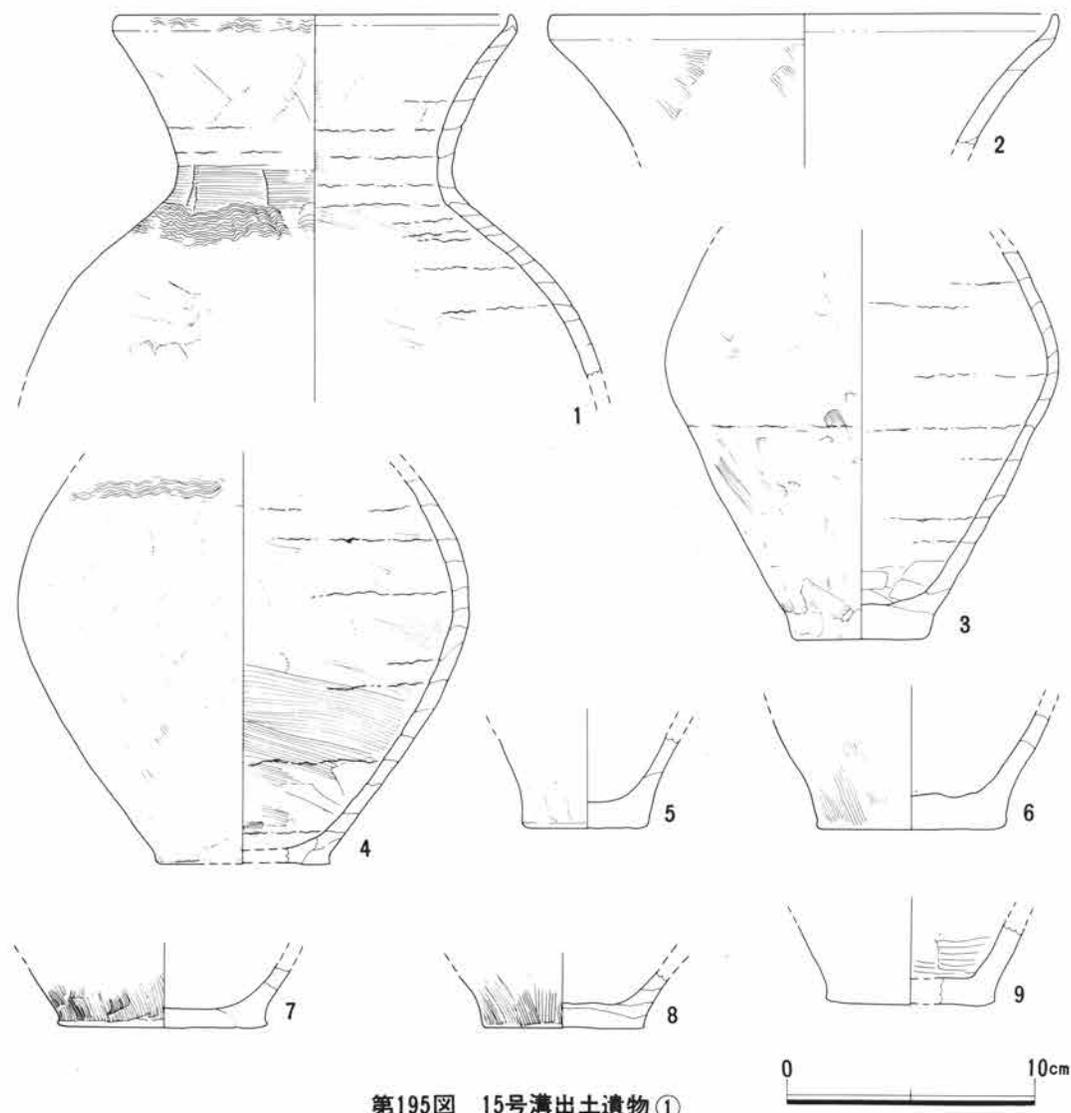
第II章 検出された遺構と遺物

15号溝（3区）〔第194～196図・図版47（遺構）・図版99・101（遺物）〕

第4層黒褐色土面において確認された。14号溝と重複関係にあるが、既述のように本溝の方が古いと推定される。

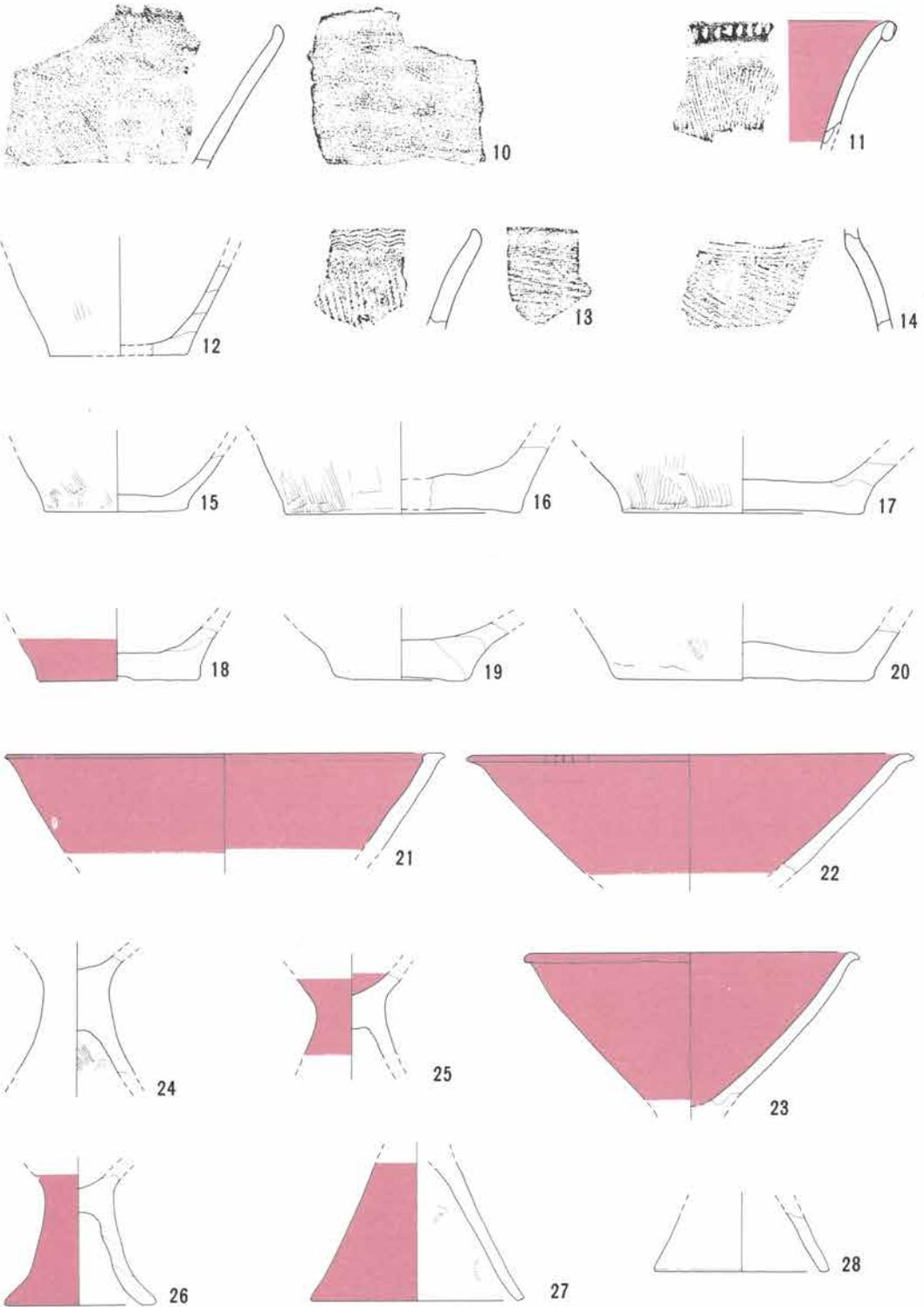
規模は上幅60～80cm、底幅15～30cm、深さ20～30cmである。東側部分では幅がやや狭く、また西側ではやや広がっており、底面は東側も西側もほぼ同レベルである。溝は皿状の断面形をもつが、部分的には凹凸も多い。なお、西側部分ではカーブしているが、このあたりから地山と覆土との見分けは不可能となった。

遺物は、覆土中より壺・甕・高杯等がやや多く出土した。いずれも破片で、溝全体に散乱していたが、東側部分では多く、西側にいくにしたがい少くなっている。また大部分は、底面より5～10cm上方の上層中からのもので、下層（8層）中からはほとんど出土していない。



第195図 15号溝出土遺物①

第7節 溝および道路状遺構



第196図 15号溝出土遺物②

0 10cm

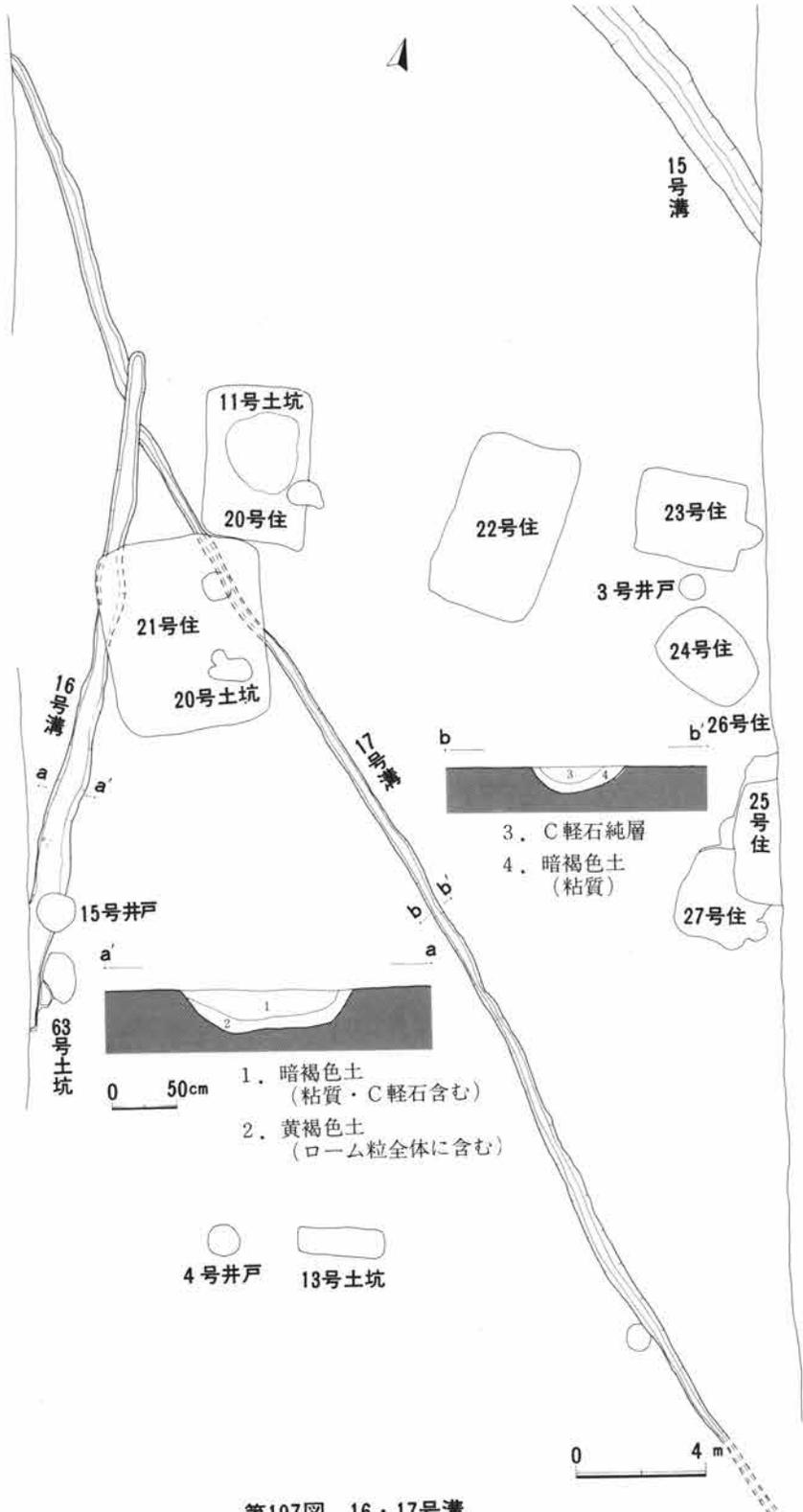
第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
壺	覆土 胴上半 $\frac{1}{2}$	1	口径 16.0	頸部大きくくびれる。 口唇部直立。	内面輪積痕。外面口縁タテハケ後、 頸部右回り簾状文、胴上部波状文、 内面ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成良 好。橙色。
壺	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$	2	口径 20.5	口縁部大きくひらき、 口唇部直立。	断面輪積痕。外面ナナメハケ後、ナ ナメヘラミガキ、内面ヨコヘラミガ キ。	砂粒含む。焼成普 通。にぶい橙色。
壺	覆土 胴部 $\frac{1}{2}$	3	胴径 15.8	最大径胴中位。	内面輪積痕。外面タテハケメ、内面 ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成良 好。橙色。胴下半 黒斑。
壺	覆土 胴以下 $\frac{1}{2}$	4	胴径 18.2	最大径胴中位。	内面輪積痕。外面胴上半ヨコハケメ 外面胴下半ナナメハケメ、内面ヨコ ハケメ。	砂粒含む。焼成良 好。橙色。
壺	覆土 底部のみ	5	底径 4.9		輪積痕。外面指ナデ後、タテヘラミ ガキ、内面磨滅。	粒子細かい。砂粒 含む。焼成良好。 浅黄橙色。
壺	覆土 底部のみ	6	底径 7.5		断面輪積痕。胴下半内面ナナメハケ メ、内面指ナデ。	砂粒含む。焼成良 好。橙色。
壺	覆土 底部のみ	7	底径 8.5		胴最下部外面タテハケメ。内面ヨコ ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良 好。にぶい褐色。
甕	覆土 底部のみ	8	底径 6.5		輪積痕。胴最下部外面タテハケメ。 内面ヨコ指ナデ。	砂粒・小石含む。 焼成良好。にぶい 褐色。
壺	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	9	底径 6.7		成形不明。外面タテハケメ。内面ヨ コハケメ。	砂粒含む。焼成良 好。橙色。
壺	覆土	10			外面口唇部波状文、口縁部ナナメハ ケメ。内面ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成良 好。浅黄橙色。内 面黒斑あり。
高杯	覆土 杯上部 $\frac{1}{4}$	11		杯部大きく外反。	口唇部外面凸帯貼りつけ。外面タテ ハケ後一部ヨコ指ナデ。内面赤彩後 ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良 好。にぶい黄橙色。 内面赤色。
甕	覆土 胴下部 $\frac{1}{2}$	12	底径 6.3		輪積痕。外面タテハケメ。内面ヨコ ヘラミガキ。底部ヘラケズリ。	砂粒含む。焼成普 通。黒褐色。外面 スス附着。
甕	覆土	13			成形不明。外面ヨコ指ナデ後、口唇 部波状文、口縁部粗いタテハケメ。 内面粗いヨコハケ後、口唇部ヨコ指 ナデ。	砂粒・石粒含む。 焼成良好。褐灰色。
甕	覆土	14			外面波状文施文後、右回り簾状文。 内面ヨコヘラミガキ。	砂粒・石粒含む。 焼成良好。にぶい 橙色。

第7節 溝および道路状遺構

壺	覆土 底部のみ	15	底径 6.5	底部薄い。	胴最下部タテハケ後、タテ指ナデ。 内面ヨコヘラミガキ。	砂粒多く含む。焼成良好。にぶい赤褐色。
壺	覆土 底部 $\frac{1}{4}$	16	底径 10.9		胴最下部タテハケメ。内面指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。橙色。
壺	覆土 底部のみ	17	底径 11.0		胴最下部タテハケメ。内面指ナデ。	砂粒・小石含む。焼成良好。灰白色。
壺	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	18	底径 7.5		輪積痕。外面赤彩。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒多く含む。粒子細かい。にぶい黄橙色。外面赤色。
壺	覆土 底部のみ	19	底径 6.0	底部厚い。	輪積痕。内外面ヨコ指ナデ。	粒子粗く、砂粒含む。焼成良好。橙色。底部黒斑あり。
壺	覆土 底部 $\frac{3}{4}$	20	底径 11.5		胴最下部タテハケメ。内面指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。橙色。
高杯	覆土 杯部 $\frac{1}{4}$	21	口径 20.5		成形不明。外面赤彩後タテヘラミガキ。内面赤彩後ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成普通。内外面赤色。
高杯	覆土	22	口径 20.6	杯部ほぼ直線的にひらき、口唇部は水半となる。	成形不明。外面タテハケ後ヘラミガキ。内面赤彩後ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。橙色。内面赤色。
高杯	覆土 杯部 $\frac{3}{4}$	23	口径 15.5	外面やや内湾しながらひらく。口唇部外反。	成形不明。外面赤彩後タテヘラミガキ。内面赤彩後ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。赤色。内面橙色。
高杯	覆土	24			成形不明。外面タテハケ後タテヘラミガキ。杯部内面ヘラミガキ、脚部内面ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成良好。にぶい橙色。
高杯	覆土	25			成形不明。外面赤彩後タテヘラミガキ。杯部内面赤彩後ヨコヘラミガキ、脚部内面指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。赤色。
高杯	覆土 脚部 $\frac{3}{4}$	26	底径 7.0		内面輪積痕。外面赤彩後タテヘラミガキ。内面ヨコ指ナデ。	砂粒少量含む。焼成良好。外面赤色。
高杯	覆土 脚部 $\frac{1}{4}$	27	底径 9.8	脚部「ハ」の字状にひらく。	成形不明。外面タテハケ後赤彩、タテヘラミガキ。内面ヨコハケ後指ナデ。	砂粒含む。焼成普通。硬質。にぶい橙色(赤彩痕のみ)。
高杯	覆土 脚部 $\frac{1}{2}$	28	底径 8.0	脚部「ハ」の字状にひらく。	輪積痕。外面タテハケ後タテヘラミガキ。内面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成良好。赤褐色。

15号溝出土土器観察表

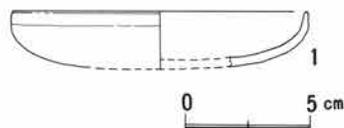


第197図 16・17号溝

16号溝（3区）〔第197・198図〕

第4層黒褐色土面にて確認された。17号溝、21号住居址、15号井戸の覆土を切って造られている。溝の走向はほぼ南北で、北側部分では17号溝付近以北は確認出来なかった。また南側は調査区域外へと延びている。

規模は上幅50cm～1m、底幅30～80cmで、北側は狭く南側はやや広がっている。深さは約30cm、底面のレベルは北側と南側はほぼ同一である。側面は傾斜の大きい部分と小さい部分とがあり、底面は皿状の傾斜をもっている。遺物は、覆土下層から土師器杯片が発見されているにすぎない。



第198図 16号溝出土遺物

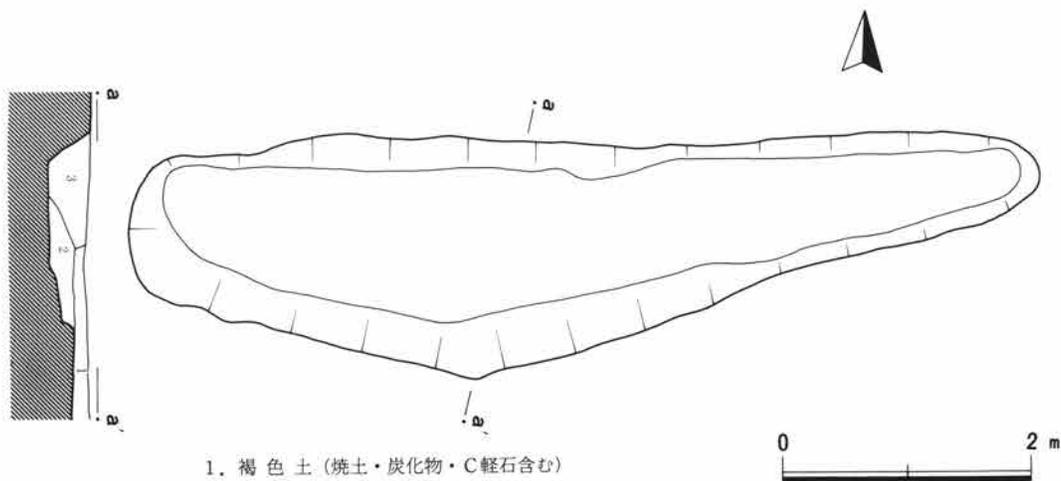
器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	覆土 1/2以下	1		口縁短かく直立。稜なく、体部～底部大きく内反。	口縁内外面横ナデ。体部指ナデ、底部不定ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化やや軟質。橙色。

16号溝出土土器観察表

17号溝（2・3区）〔第197図・図版48（遺構）〕

第4層黒褐色土下面で確認された。21号住居址の埋没面上に造られ、16号溝に一部切られている。溝の走行は直線的であるが、16号溝との重複部分から北寄りへと方向を変え、さらに調査区域外へと延びている。また南側部分においては、調査区域内で消滅しているが、南側にいくにしたがい底面が上昇していることから、溝の底面が確認面まで掘り込まれていなかった可能性が強い。

溝は皿状に掘り込まれている。暗褐色粘質土が底面から約5cm堆積しており、その上は浅間C軽石の純粋層となっている。なお遺物は出土しなかった。



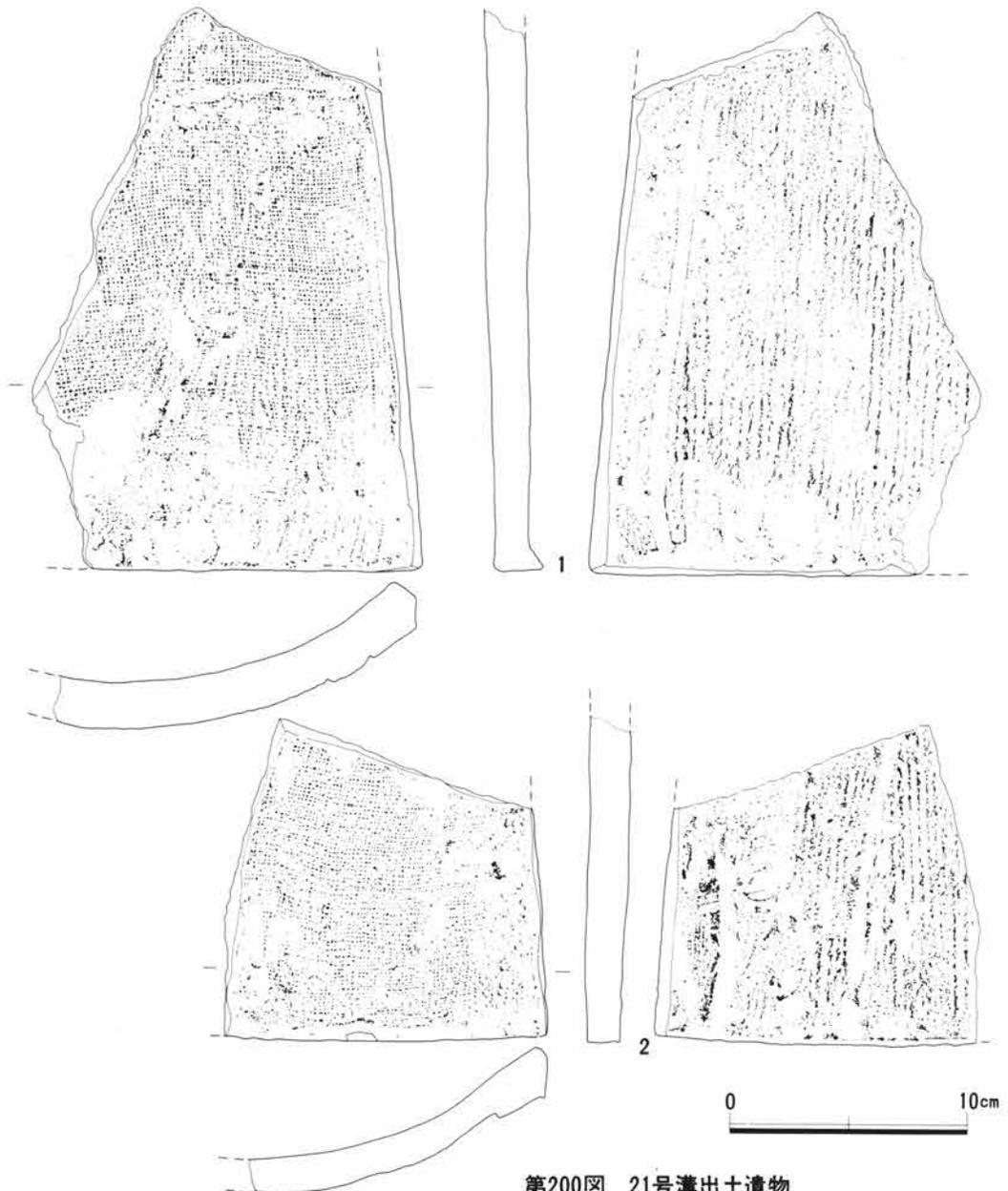
第199図 21号溝

第II章 検出された遺構と遺物

21号溝（2区）〔第199・200図・図版101（遺物）〕

第4層黒褐色土面で確認された。37号住居址、38号住居址と重複する。37号住居址との新旧関係は、本溝の覆土中に37号住居址が構築されていることから、本溝の方が古い。38号住居址との関係は不明である。

溝は東西方向に走っているが、長さ約6.5mで止まり、水が流れた形跡がないことから、細長い土坑と考えることもできる。深さは、確認面から約2～30cmである。覆土中より布目瓦片が出土している。



第200図 21号溝出土遺物

第7節 溝および道路状遺構

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(m)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
平瓦	覆土 1/4残存	1	側端部幅 2.0	下端部内稜せり出る。側端部中央に稜、器壁厚い。	外面布目痕後側方ヘラナデ。内面縄目状叩キ痕後側方ヘラナデ。端部金属製ヘラ切り。	砂粒小石気泡多い。やや中性硬質。灰白色。
平瓦	覆土 端部1/2	2	側端部幅 2.0	下端部薄く、中央部、側端部厚い。下端部稜明瞭。	外面布目痕後側方ヘラナデ。内面縄目状叩キ痕。端部金属製ヘラ切り。	砂粒多く含む。還元硬質。灰色。

21号溝出土遺物観察表

22号溝（2区）〔第201図・図版48（遺構）〕

第4層下位のローム層漸移層面で確認された。23号溝・4号掘立と重複するが、新旧関係は不明である。

ほぼ直線状に約14m走る。確認面までの断面形は、U字形を呈する。確認面直上の海拔111.40mからの深さは5～20cmで、南側がやや深い。上幅40cm、底幅20cmを測る。

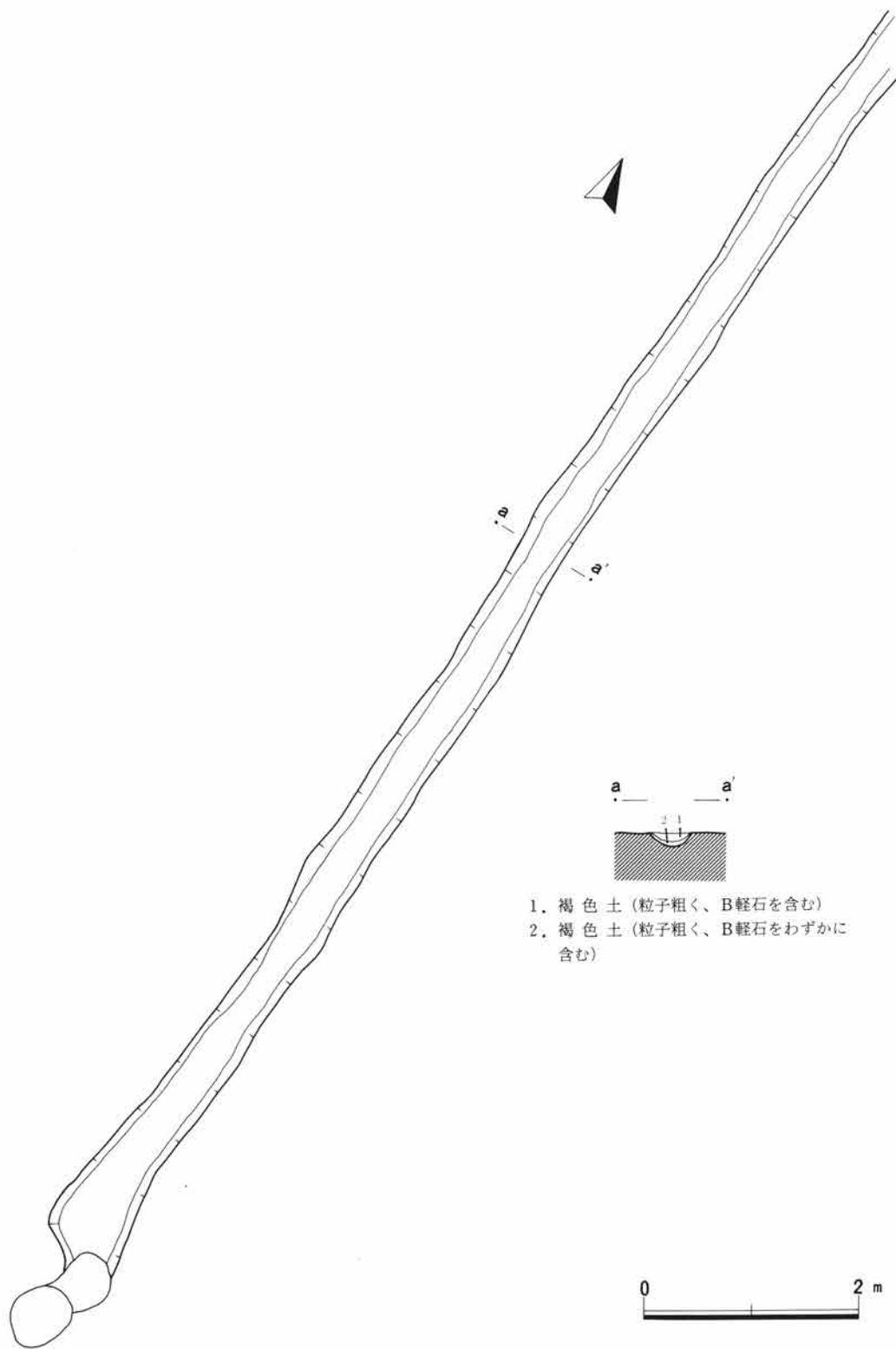
遺物は、全く見られなかった。

23号溝（2区）〔第202図〕

第4層黒褐色土面から下位のローム層漸移層で確認された。4号掘立と重複するが本溝の方が新しい。22号溝との重複関係は不明である。

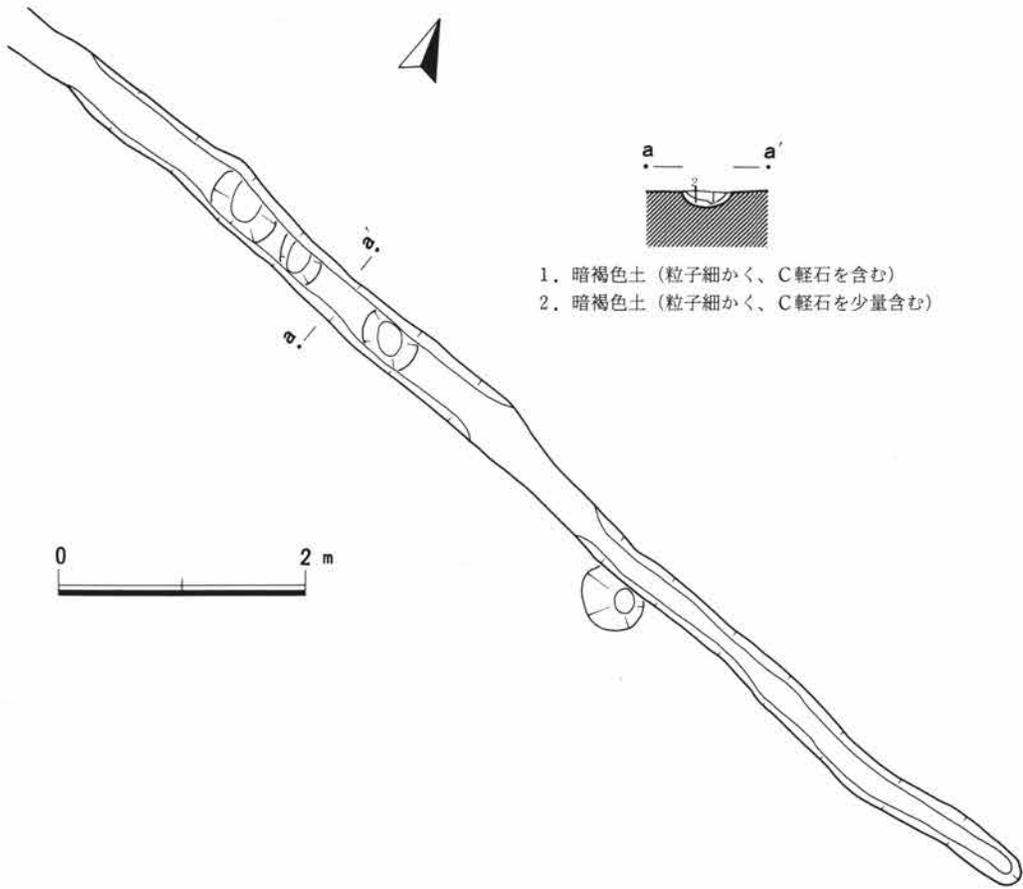
ほぼ直線状の走向をもち、平面的には約16mを検出した。しかし西側では断面のみ確認しているため、西方向にはまだ延びる。西断面では、第3層浅間C軽石混じり黒褐色土上面より掘りこまれており、上幅40m・底幅20mを測る。断面形は幅広のU字形の掘り方が埋没した後、ややV字形に近い掘りこみがなされている。

遺物は、全く見られなかった。



1. 褐色土 (粒子粗く、B軽石を含む)
2. 褐色土 (粒子粗く、B軽石をわずかに含む)

第201図 22号溝



第202図 23号溝

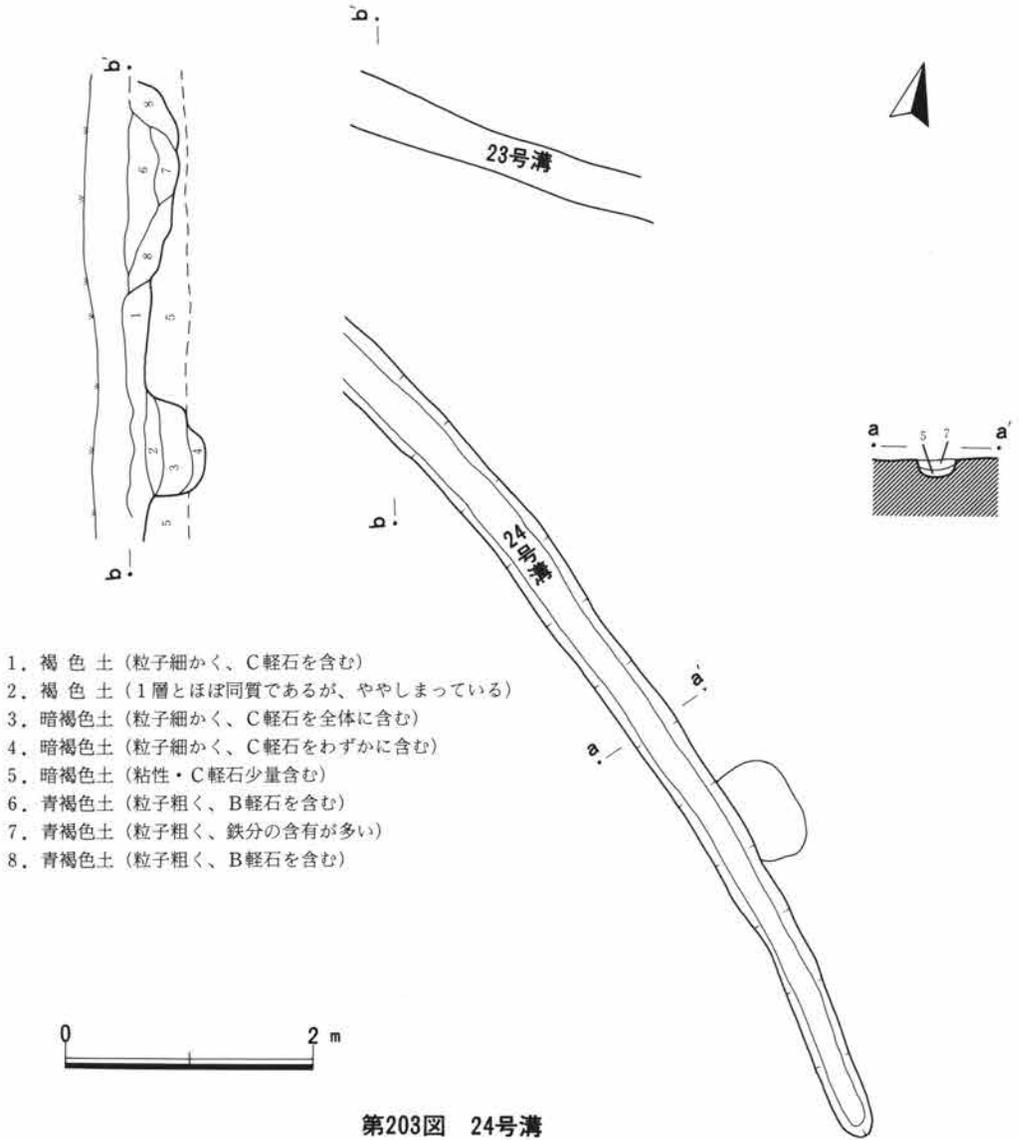
24号溝（2区）〔第203・204図〕

第4層黒褐色土面で確認された。

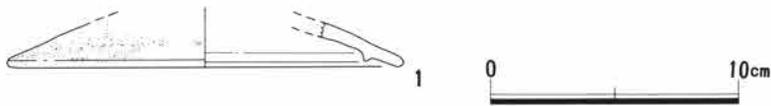
僅かに弧状ぎみの走向をもって約7m検出された。掘りこみ面は、第4層黒褐色土上面で、上幅60cm・底幅25cmのU字形の断面形を呈する。西側断面での深さは、約40cmである。

遺物は、覆土中より須恵器蓋が検出された。

第II章 検出された遺構と遺物



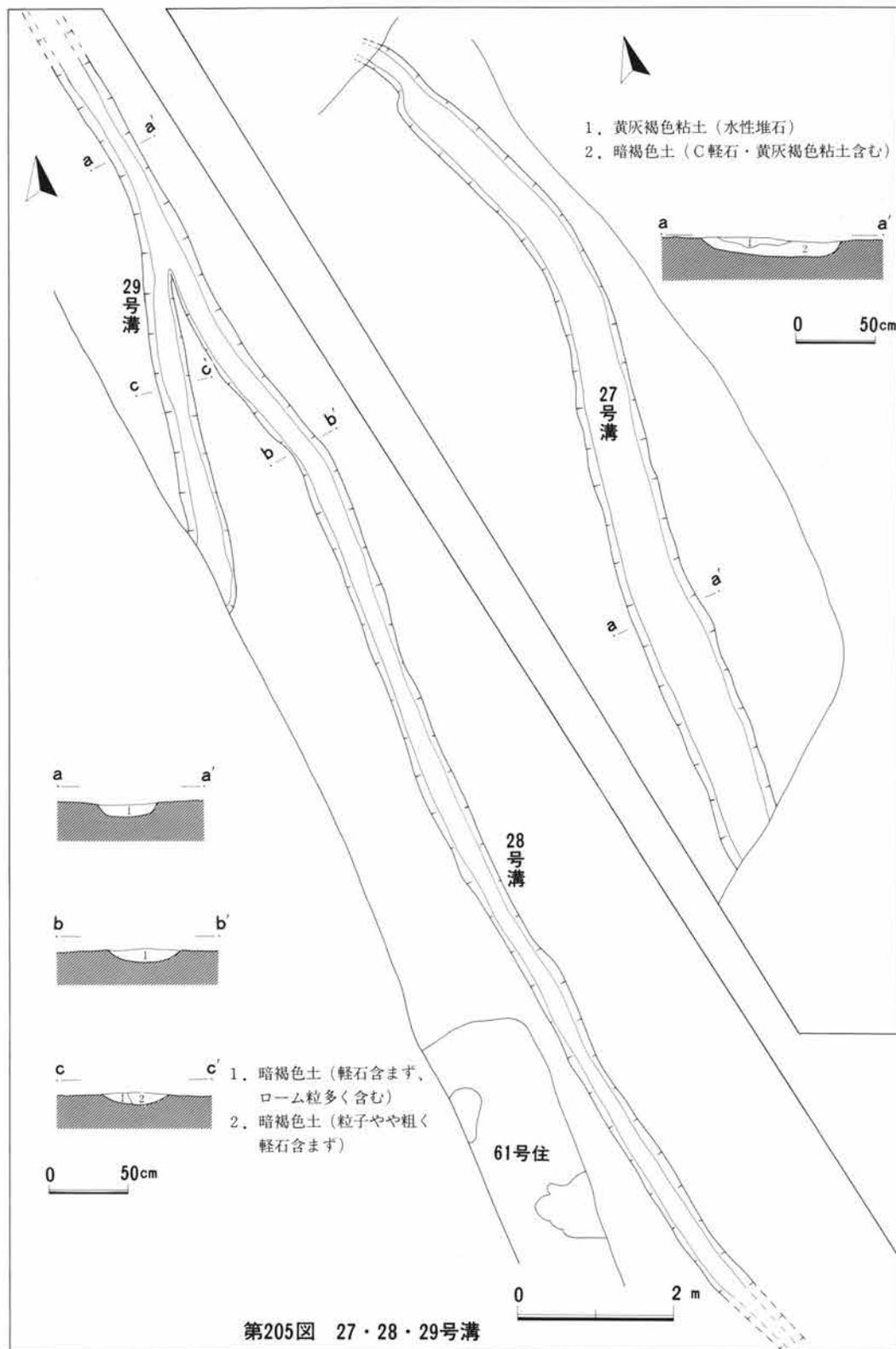
第203図 24号溝



第204図 24号溝出土遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
蓋 須恵器	覆土 端部小片	1		器壁やや厚い。端部丸い。身受け断面三角形の凸帯。	内外面回転横ナデ。身受け削り出し。上面自然釉。	砂粒小石含む。還元硬質。灰色。

24号溝出土土器観察表



第II章 検出された遺構と遺物

27号溝（1区）〔第205・206団〕

第3層C軽石を含む黒褐色土面で確認された。走向はほぼ南北であるが、検出部分の中央部よりやや北側で西方向へカーブしている。1号特殊井戸・2号特殊井戸と重複関係にある。2号特殊井戸の溝部によって切られており、1号特殊井戸溝部の覆土を一部切っている。なお本溝は、1号特殊井戸の溝部北側へ延びていた可能性が強いが、溝の掘り込みが確認面まで及んでいなかったため、検出できなかったものと考えられる。

溝の幅は80cm～90cmであるが、西方向へカーブしている部分から約60cmと狭くなり、1号特殊井戸溝部の近くで更に狭くなっている。また深さは、中央やや南寄りでは約10cmであるが、北方向へいくにしたがい浅くなり、1号特殊井戸との重複部分付近では約3cmとなっている。掘り方は皿状で、底面はほぼ平坦に近い。覆土上層で、水性堆積の黄灰褐色粘土が一部みられた。

出土遺物として土師器甕片、土師器羽釜片があり、覆土中より出土している。

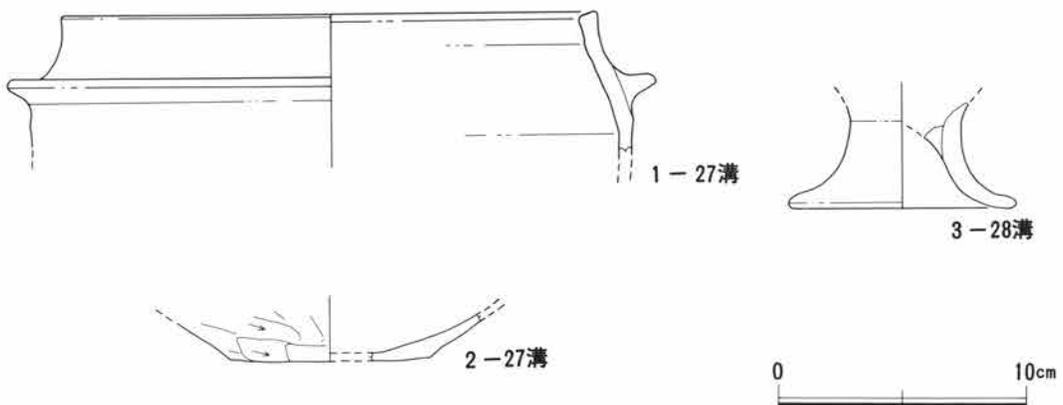
28号溝・29号溝（1区）〔第205・206団・図版48（遺構）〕

28号溝と29号溝は連結しており、本来一つの遺構である可能性が強い。便宜上、29号溝は28号溝の途中から枝分れしているものとする。

28号溝の確認部分の北側は、南側よりも約5cm高くなっている。北側部分はさらに北方向へ続くものと考えられるが、溝の底面が第4層黒褐色土中へと上昇しており、またその付近まで攪乱が入っているため、確認は不可能であった。また、溝の南側は熊野堂遺跡第II地区の住居址上に重複しており、途中で確認が難しくなる。

28号溝の規模は、幅30～45cm、長さ17.6mであり、また確認面からの深さは、15～20cmである。壁は緩かに立ちあがっており、断面が皿状を呈する部分が多く、凹凸はほとんどない。覆土中より高杯の脚部(3)が出土している。

29号溝は走行が南北に近く、形態は28号溝と同様である。



第206図 27・28号溝出土遺物

第7節 溝および道路状遺構

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
羽釜 土師器	27溝覆土 小片	1	口径 21.5	羽部分の突出は13mm。	内外面横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。羽より上オリーブ黒、羽より下灰オリーブ。
甕 土師器	27溝覆土 底部小片	2	底径 8.0		外面底部～胴部ヘラケズリ。 内面底部～胴部ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。外面にぶい黄橙色。黒斑あり。内面橙色。
高杯 土師器	28溝覆土	3	底径 9.2	脚部は比較的短かくラッパ状に広がる。	内外面横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。明赤褐色にぶい褐色。黒斑あり。

27・28号溝出土土器観察表

34号溝（4区）〔第207図〕

第4層黒褐色土面で確認された。幅20cm、深さ10cmを測り、南北に走向する。覆土はC軽石を多く含む黒色土である。

35号溝（4区）〔第207図〕

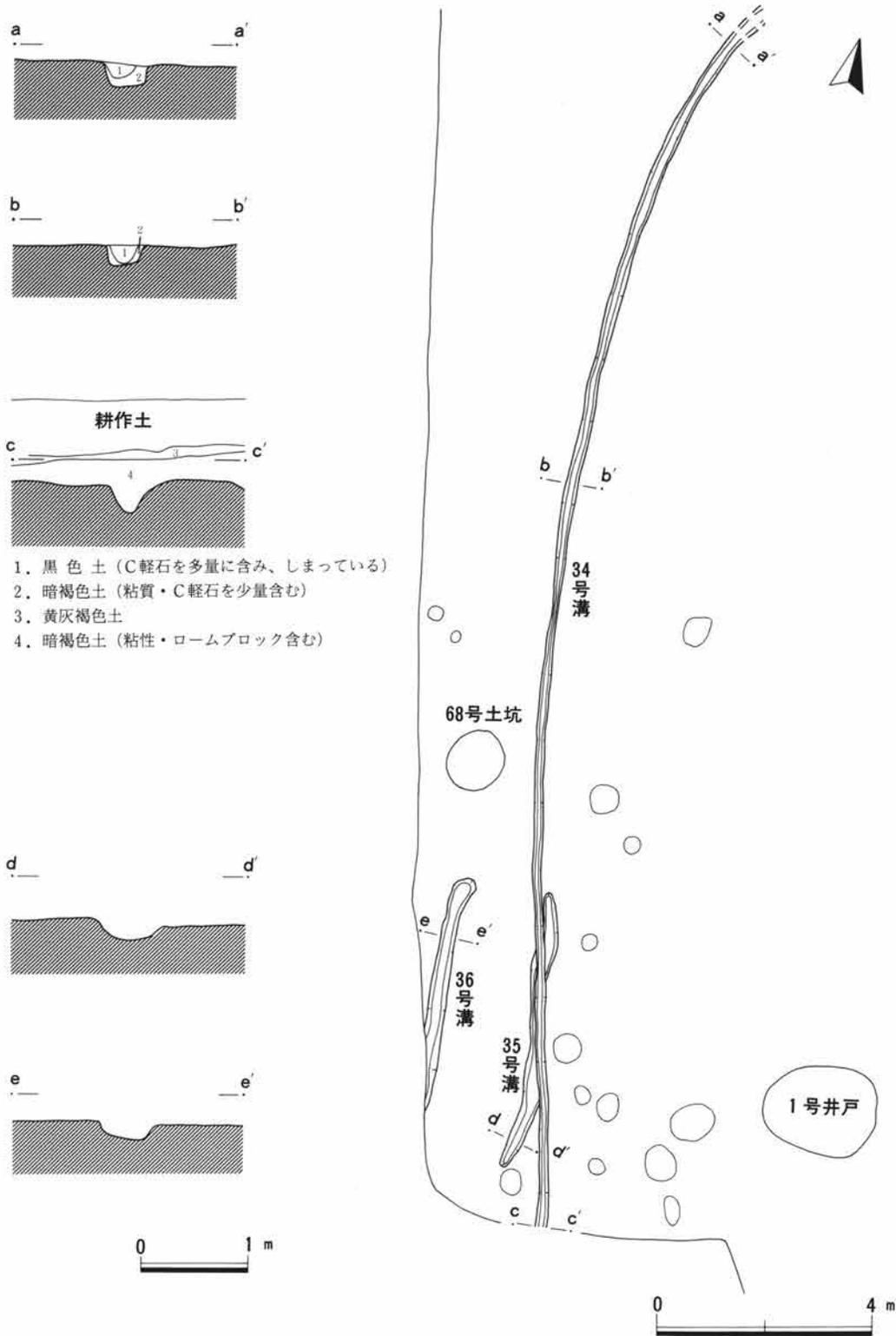
第4層黒褐色土面で確認された。上面で34号溝に切られている。幅30cm、深さ10cmを測り、南北に走向する。覆土はC軽石を多く含む暗褐色土である。

36号溝（4区）〔第207図〕

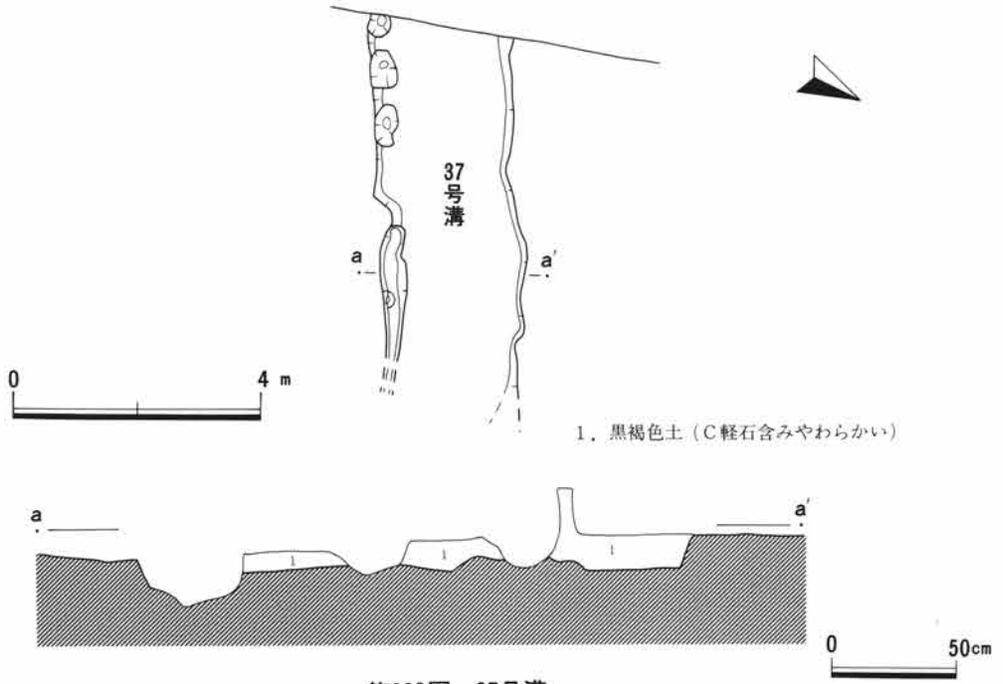
第4層黒褐色土面で確認された。幅30cm、深さ7cmを測り、南北に走向する。覆土はC軽石を多く含む暗褐色土である。

37号溝（4区）〔第208図〕

第4層黒褐色土面で確認された。上面で中・近世の畑跡と重複しており、幅2.2m、深さ15cmを測り、東西に走向する。覆土は、C軽石を多く含む暗褐色土でC軽石の上下に砂質土のラミナ状の堆積が認められる。



第207図 34・35・36号溝



第208図 37号溝

第8節 特殊井戸

1号特殊井戸（1区）〔第209～218図・図版49（遺構）・図版102（遺物）〕

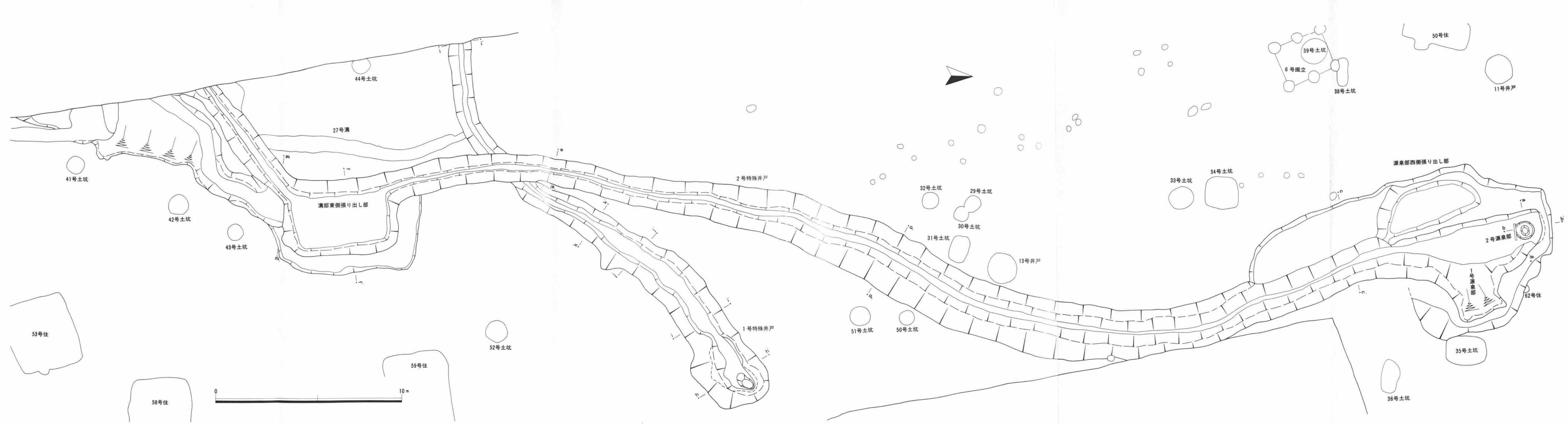
第4層黒褐色土面で確認された。2号特殊井戸・27号溝と重複する。2号特殊井戸との新旧関係は、覆土・遺物の相違等により当特殊井戸の方が古く、27号溝との新旧関係も覆土の相違（27号溝の覆土は二次堆積のFPであり、当特殊井戸の覆土中には基盤層から間層を挟みFAの一次堆積層が入り、更に間層を挟み27号溝と同様の二次堆積のFPが堆積している）により当特殊井戸の方が古い。当特殊井戸は、大きく井戸部と溝部に分けることができ、更に、井戸部は井筒部と石敷部（井戸端部）に分けることができる。

井筒部は確認面からの深さ約1.8m・石敷部からの深さ約1.2mであり、井筒部だけの平面形は不整形円形を呈する。井筒部だけを取り上げれば、所謂井戸であるが、石敷部の存在状態・溝部の規模等から、水を汲み上げていたのではなく、自然湧水していたものと推測している。井筒部は当特殊井戸の湧水源と考えることができる。

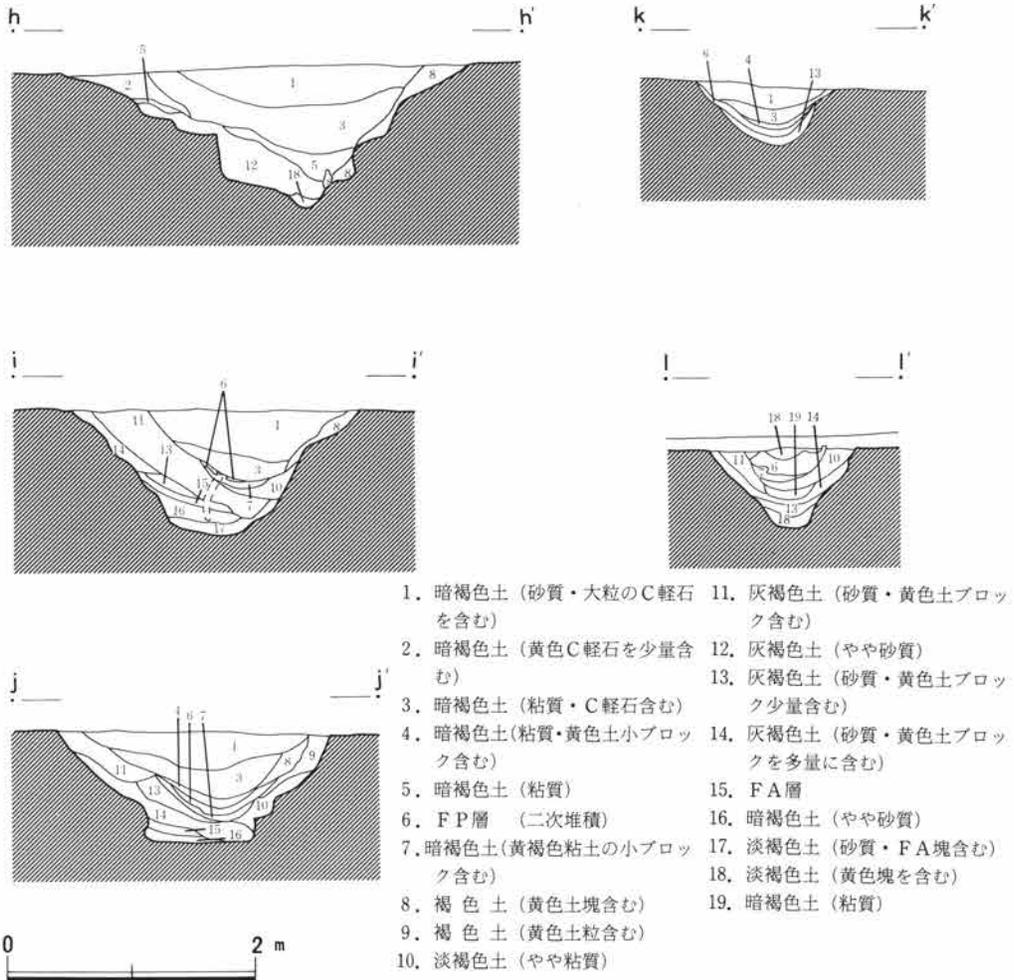
石敷部は基盤層の上に細かい砂利を敷き詰め、その上に拳大前後の石を敷き詰めて構築されている。石敷は2時期に分けることができる。下層の石敷部の上に、更に細かい細利を敷き詰め、更に拳大の石を敷き詰めている。上層の細かい砂利層中にはFAが混入している。石敷部の規模は、下層が溝部と平行方向で約0.8m～1.3m、溝部と直交方向で約0.8m～1.4m、上層が溝部と水平方向で約0.7m～0.9m・溝部と直交方向で約1.5m～1.6mである。石敷部からは多量の土師器が出土しており、水汲みや食器洗い等に使用された、井戸端的な場所であると推定している。

溝部覆土中には間層を挟み純層のFAが堆積しており、当遺構の構築された年代がFA以前であることを示している。また、FA層は部分的に削られており、FA堆積後も当特殊井戸が使用されていたことをも示している。この事実は、石敷部の構築状態とも一致する。尚、FA層は溝部下流へ行く程薄くなり、 $k-k'$ ・ $l \sim l'$ では確認できなくなるが、溝が $k-k'$ 付近から挟まる状態を考えると、流されてしまったと推測できる。これは上層に堆積しているFPとは逆の状態である。FPは二次堆積であり、井野川の洪水によるものと推測でき、当特殊井戸上流へ行く程薄くなり確認できなくなる。溝部の規模は上流で幅約0.8m～1.0m、確認面からの深さ約0.4m～0.5m、下流で幅約0.5m～0.6m確認面からの深さ約0.3m～0.35mである。断面形は全体としてV字形に近いが、底面から15cm～20cmの点で角度が変わり、箱形に近くなる。

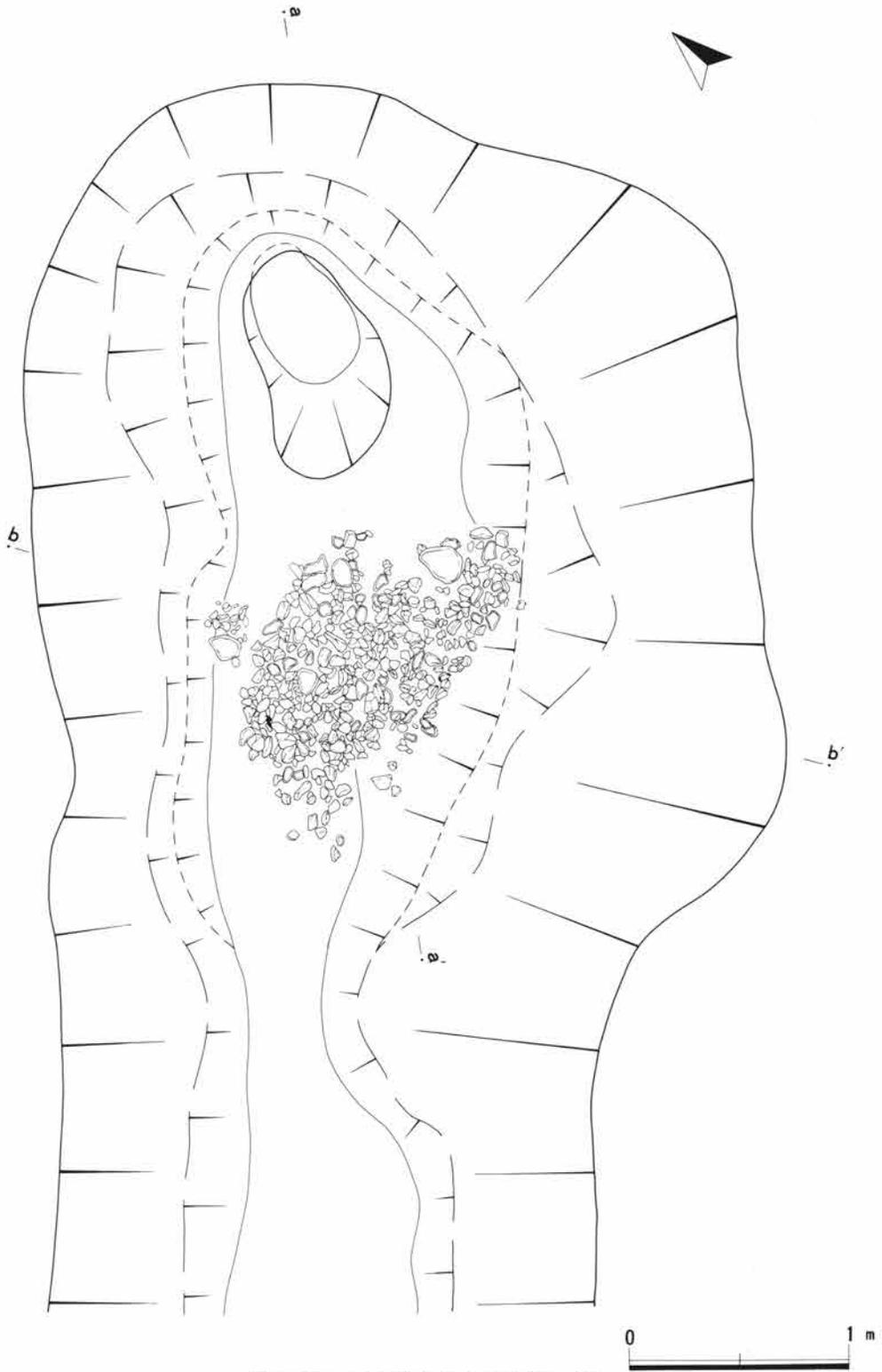
遺物は前述の通り石敷部に集中しており、土師器の甕・小型甕・鉢・杯・椀・高杯等多量に出土している。出土遺物は大きく二時期に分けることが可能であり、石敷部・溝部の状況とも一致する。当特殊井戸は、FA降下を挟み使用されたものである。



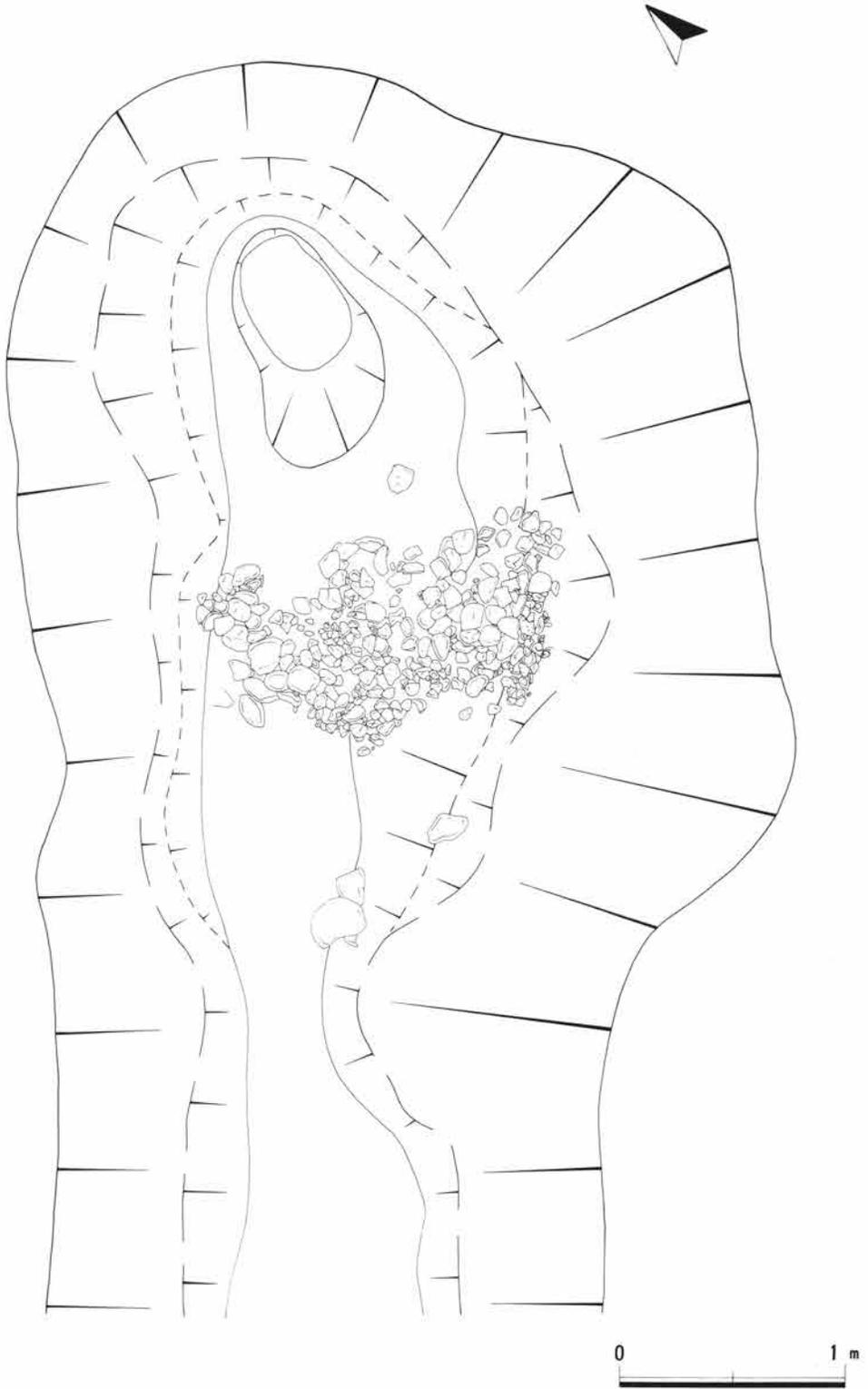
第209図 1・2号特殊井戸全体図1



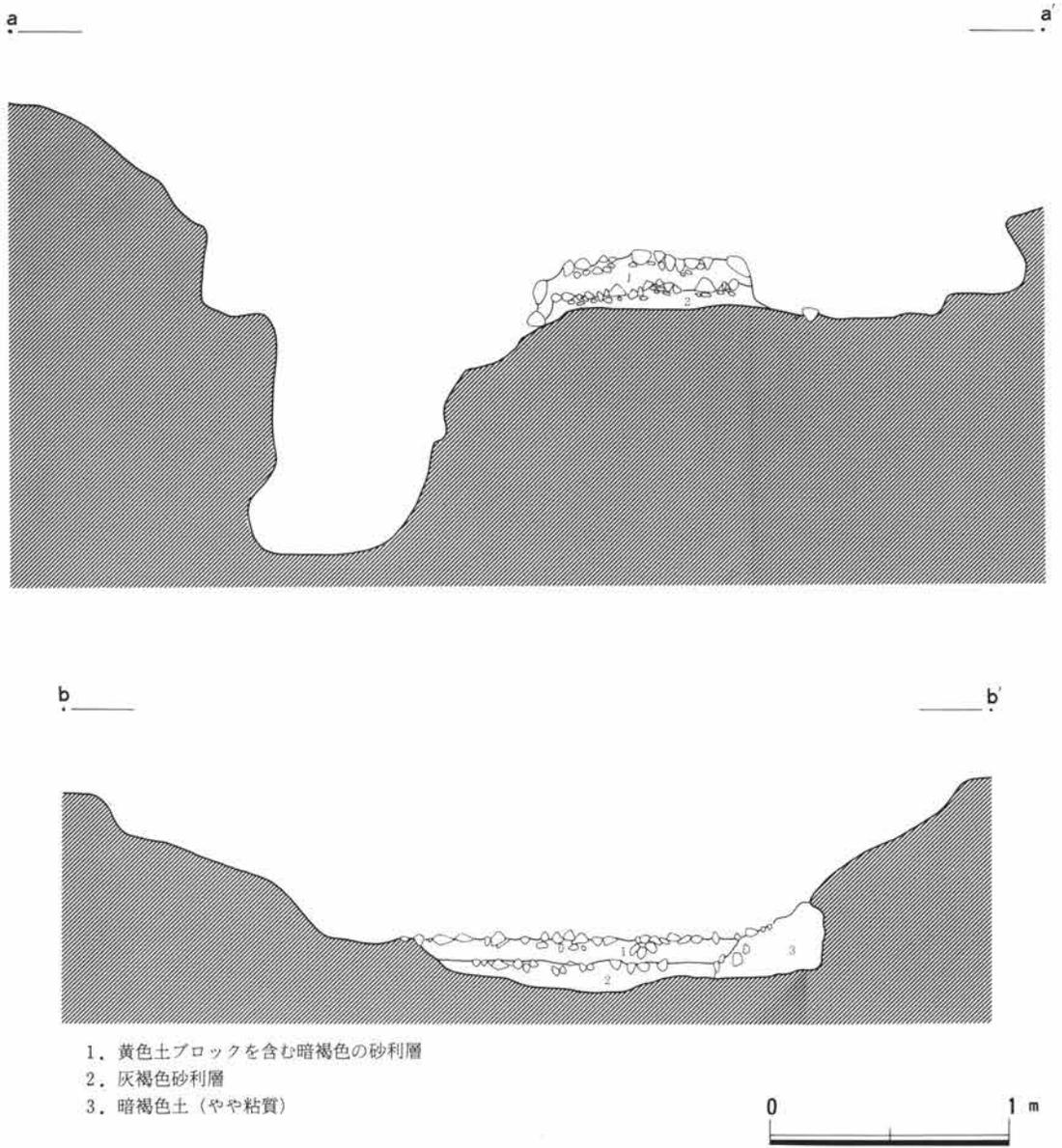
第211図 1号特殊井戸断面図



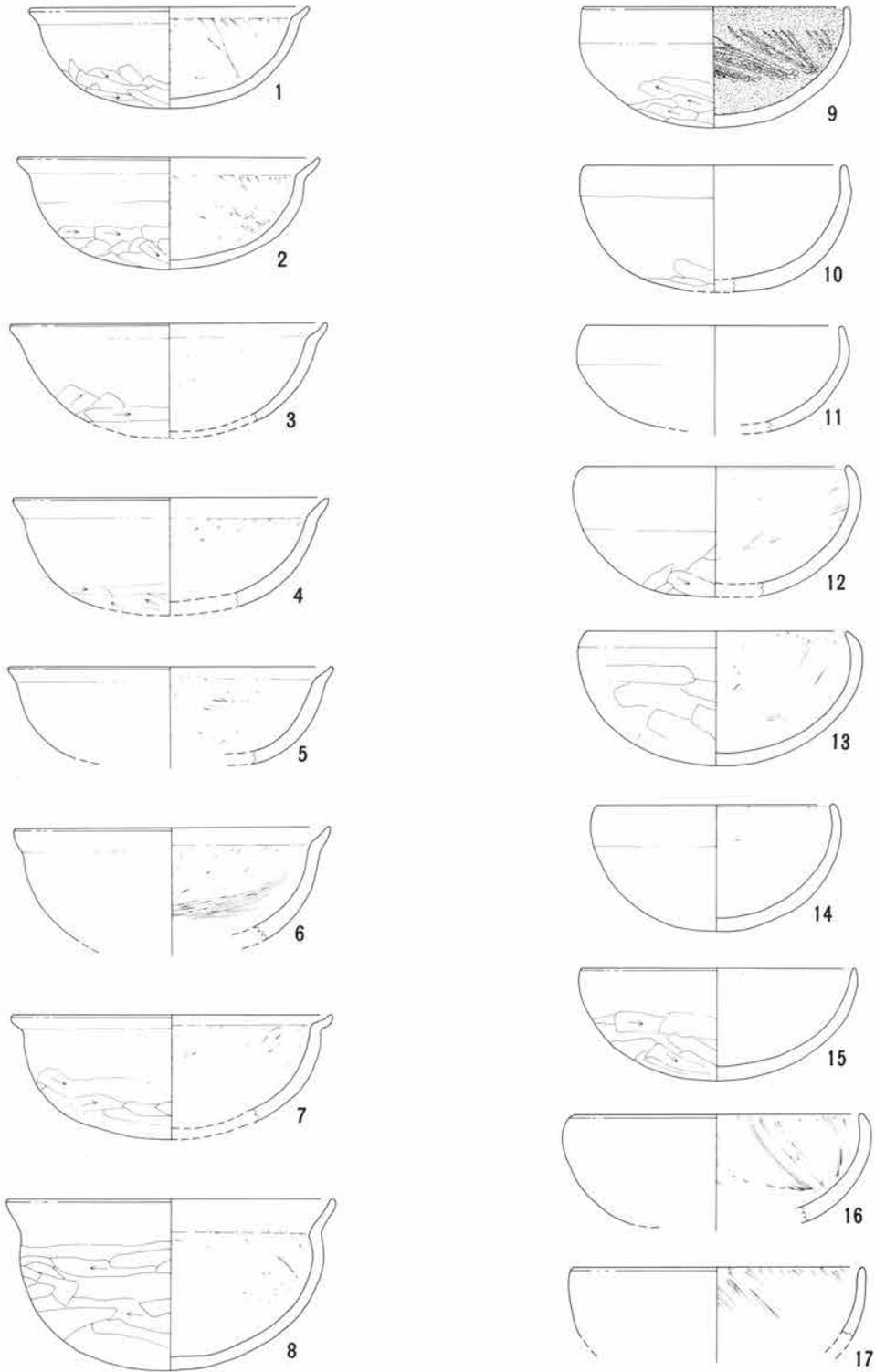
第212図 1号特殊井戸石組部下層図



第213図 1号特殊井戸石組部上層図



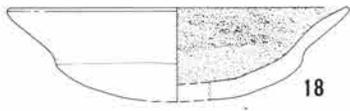
第214図 1号特殊井戸石組部断面図



第215図 1号特殊井戸出土遺物 ①



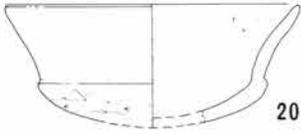
第II章 検出された遺構と遺物



18



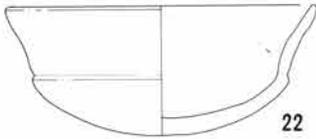
19



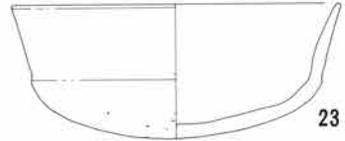
20



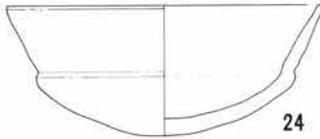
21



22



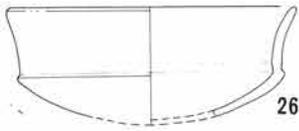
23



24



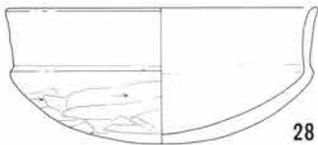
25



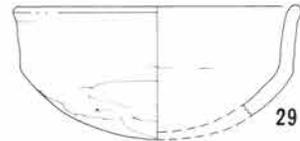
26



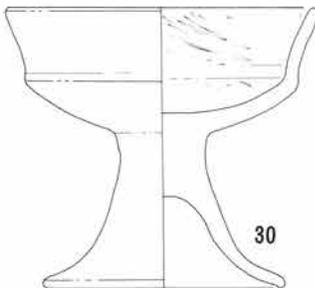
27



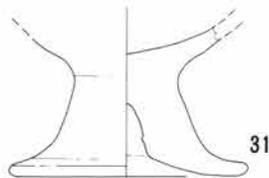
28



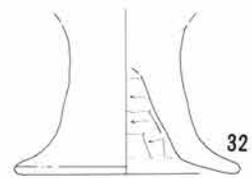
29



30



31

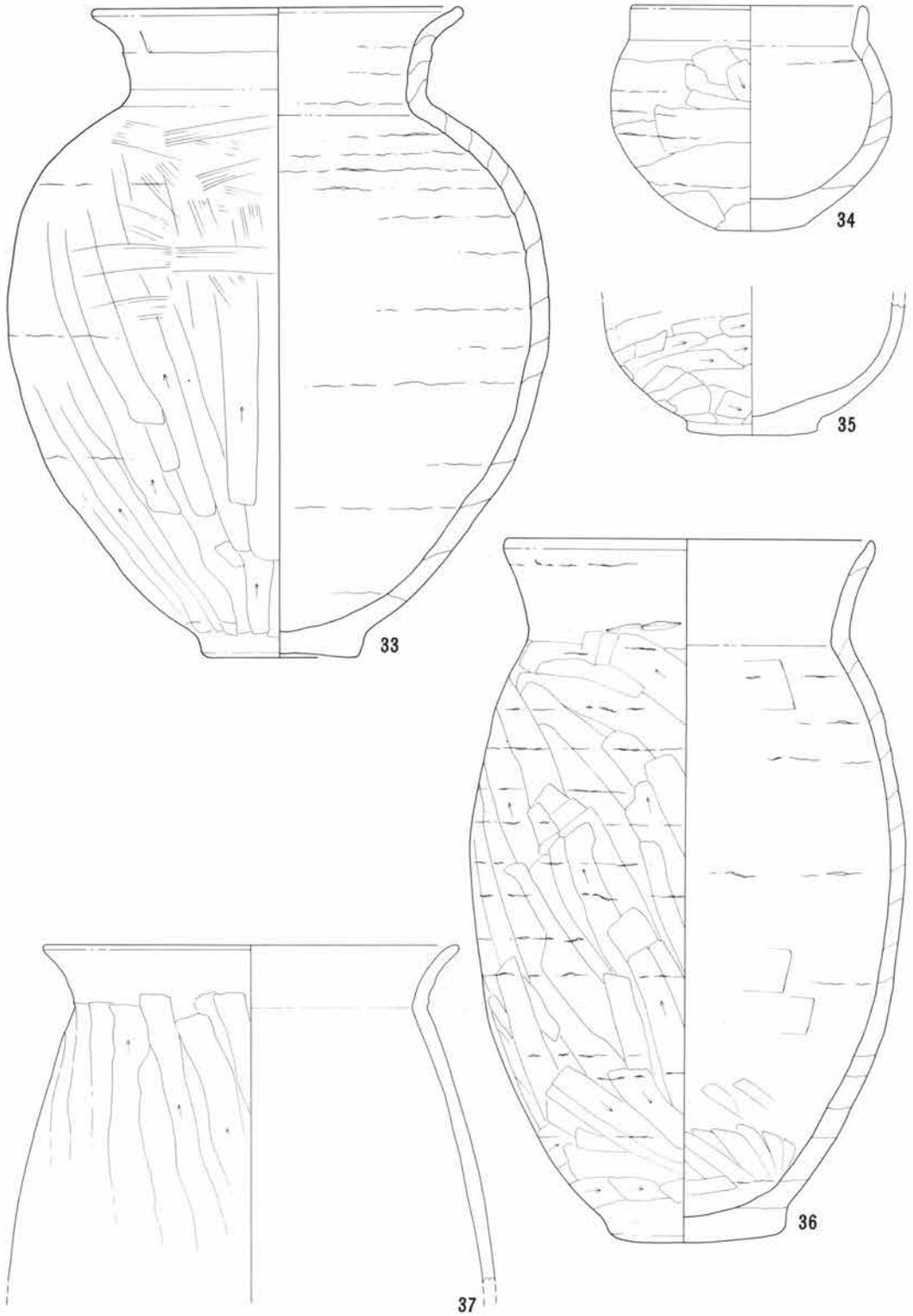


32

第216図 1号特殊井戸出土遺物②

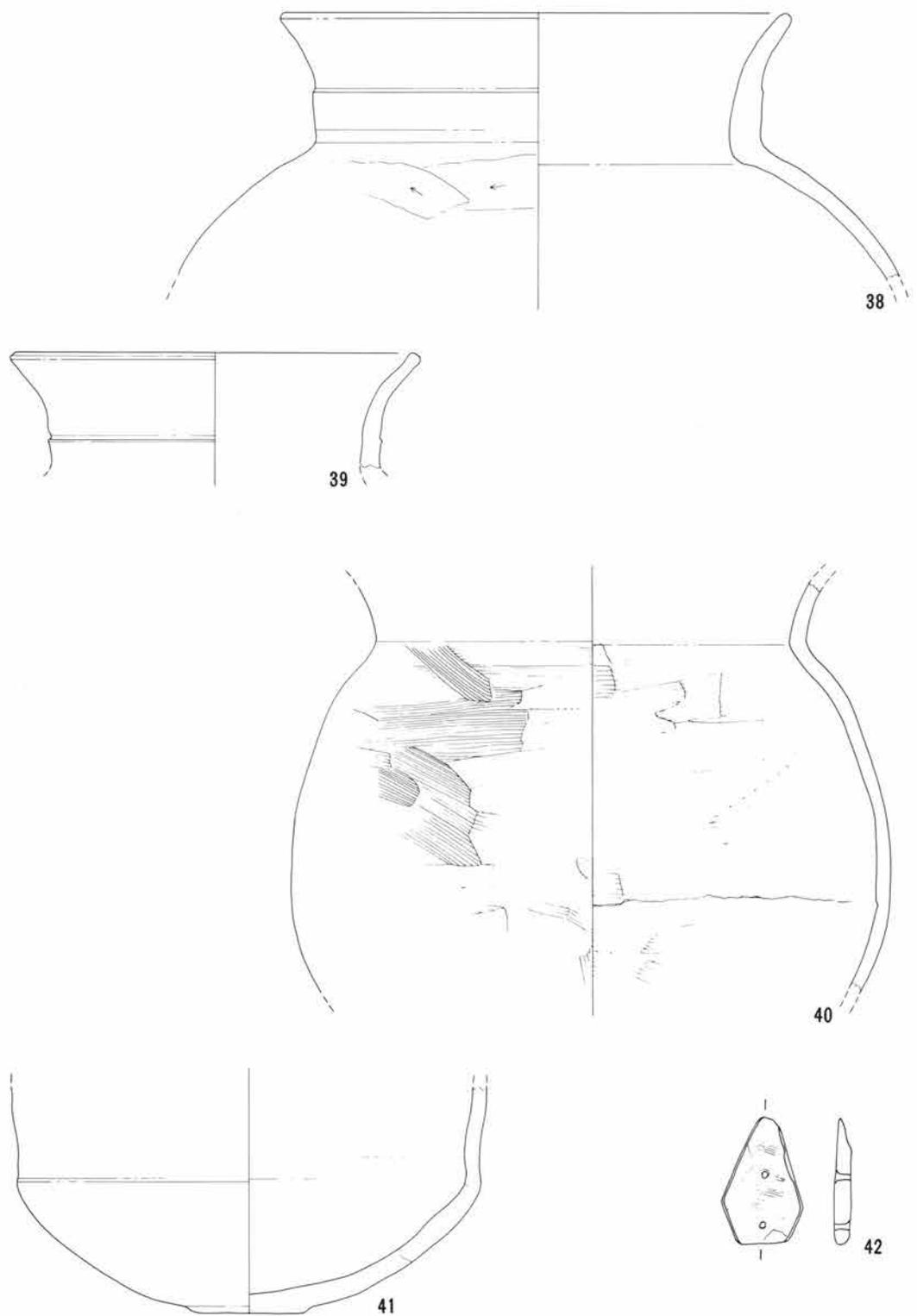


第8節 特殊井戸



第217図 1号特殊井戸出土遺物③





第218図 1号特殊井戸出土遺物④

0 10cm

第8節 特殊井戸

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(㎝)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	覆土 完形	1	口径 12.4 器高 4.6	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面底部～体部ヘラケズリ。体部上端～口縁部横ナデ。内面底部ナデ。体部ミガキ、暗文斜行。口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 1/2残存	2	口径 13.5 器高 5.0	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面底部～体部下半ヘラケズリ、体部上半～口縁部横ナデ内面底部ナデ、体部ヘラミガキ、暗文斜行、口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。橙色。
椀 土師器	覆土 1/2残	3	口径 14.0 器高 5.0	丸底(側)、底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部はやや内湾する。	外面底部～体部ヘラケズリ。体部上端～口縁部横ナデ。内面底部ナデ。体部ミガキ。暗文斜行。口縁部横ナデ。	砂粒多く含む。焼成良好。硬質。橙色。
椀 土師器	覆土 1/2弱残	4	口径 14.0	丸底(側)、体部は双曲線的な丸みをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面底部～体部ヘラケズリ、体部ナデ、口縁部横ナデ、内面底部ナデ、体部ミガキ、暗文斜行、口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。橙色。
椀 土師器	覆土 口縁～体部小片	5	口径 14.0	丸底(側)。底部～体部は双曲線的な丸みをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面底部～体部ヘラケズリ＋ナデ、体部上端～口縁部横ナデ。内面底部～体部ミガキ。暗文斜行。口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 1/2弱残存	6	口径 14.0	丸底。体部は双曲線的な丸みをもち、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面体部ヘラケズリ、体部上端～口縁部横ナデ、内面体部ミガキ、暗文斜行、口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。橙色。外面底部黒色。
椀 土師器	覆土 口縁～体部1/2残存	7	口径 14.0 器高 5.5	丸底(側)。底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部はやや内湾する。	外面底部～体部ヘラケズリ。体部上端～口縁部横ナデ。内面体部ミガキ、暗文斜行、口縁部横ナデ。	砂粒多く含む。焼成良好硬質。明赤褐色。
椀 土師器	覆土 1/2残存	8	口径 14.6 器高 7.4	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部はやや内湾する。	外面底部～体部ヘラケズリ。体部上端～口縁部横ナデ。内面底部ナデ。体部ミガキ、暗文斜行。口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。橙色。
椀 土師器	覆土 1/2残存	9	口径 11.8 器高 5.0	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもち、口縁部は直立する。	外面底部～体部下半ヘラケズリ、体部上半～口縁部横ナデ内面底部～体部ミガキ、暗文斜行、口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。外面明赤褐色。内面黒色。
椀 土師器	覆土 1/2弱残存	10	口径 11.6 器高 5.5	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもち、口縁部はやや内湾する。	外面底部～体部ヘラケズリ、口縁部横ナデ、外面底部～体部ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好硬質。明赤褐色外面底部、内面黒斑あり。

第II章 検出された遺構と遺物

杯 土師器	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$ 残 存	11	口径 11.0	丸底。底部～体部は双曲線の丸みをもち、口縁部はやや内湾する。	外面底部～体部へラケズリ、口縁部横ナデ。内面ミガキ、暗文斜行。	砂粒含む。焼成良好硬質。橙色。
椀 土師器	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	12	口径 11.8 器高 5.7	丸底。底部～体部は双曲線の丸みをもち、口縁部は内湾する。	外面底部～体部下半へラケズリ、体部上半～口縁部横ナデ内面底部ナデ。体部～口縁部ミガキ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良好硬質。橙色。外面底部黒色。
椀	覆土 $\frac{1}{4}$ 弱残	13	口径 11.5 器高 5.8	丸底。底部～体部は双曲線の丸みをもち、口縁部は内湾する。	外面底部～体部へラケズリ、口縁部横ナデ、内面底部ナデ体部～口縁部ミガキ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良好硬質。外面明赤褐色。口唇部黒色。内面黒色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	14	口径 10.5 器高 5.7	丸底。底部～体部は双曲線の丸みをもち、口縁部は内湾する。	外面底部～体部へラケズリ。体部上端～口縁部横ナデ。内面ミガキ、暗文斜行。	砂粒含む。焼成良好硬質、明赤褐色
杯 土師器	覆土 ほぼ完形	15	口径 12.4 器高 5.0	丸底。底部～体部は双曲線の丸みをもち、口唇部は直立する。	外面底部～体部へラケズリ、口唇部横ナデ、内面底部～体部下半ナデ。体部上半～口縁部ミガキ、暗文斜行。	砂粒多く含む。焼成良好、硬質、橙色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	16	口径 12.5 器高 5.0	丸底。底部～体部は双曲線の丸みをもつ。口縁部は内湾する。	外面体部へラケズリ。口縁部横ナデ。外面体部～口縁部ミガキ、暗文斜行。	砂粒含む。焼成良好。硬質。明赤褐色。外面底部黒色。
杯 土師器	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$ 残	17	口径 13.0	丸底。体部～口縁部は緩やかな丸みをもつ。	外面体部へラケズリ+ナデ。口縁部横ナデ。内面体部～口縁部ミガキ。暗文斜行。	砂粒含む。焼成良好。硬質。明赤褐色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{4}$ 残存	18	口径 14.0	丸底。底部～口縁部は緩やかな丸みをもつ。体部～口縁部の間に段あり。	外面底部～体部へラケズリ+ナデ。口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ。口縁部ミガキ暗文あり。	砂粒含む。焼成良好。硬質。外面橙色。黒斑あり。内面黒色。
杯 土師器	覆土 口縁部小片	19	口径 13.0	丸底。体部は緩やかな丸みをもつ。体部と口縁部の間に段があり、逆「く」の字状に屈折する。	外面体部へラケズリ+ナデ、口縁部横ナデ。内面体部上端～口縁部ミガキ、暗文横。	砂粒少量含む。焼成良好。硬質。外面橙色。内面明赤褐色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{2}$ 弱残	20	口径 11.0 器高 5.0	丸底。底部～体部は緩やかな丸みをもつ。体部と口縁部の間に段をもち、口縁部は直立し、口唇部は外反する。	外面底部～体部へラケズリ、口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ。口縁部横ナデ+ミガキ。暗文斜行	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{2}$ 弱残	21	口径 14.0 器高 4.3	丸底。底部は緩やかな丸みをもつ。体部と口縁部の間に段があり口縁部は直立しつつやや外反。	外面底部～体部へラケズリ。口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ、体部上端～口縁部ミガキ、暗文斜行。	砂粒含む。焼成良好。硬質。内外面橙色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{2}$ 弱残	22	口径 12.5 器高 5.5	丸底。底部～体部は双曲線の丸みをもつ、体部と口縁部の境に段をもち、口縁部は直立し、口唇部はやや外反する。	外面底部～体部へラケズリ、口縁部横ナデ。内面口縁部～体部ナデ。体部上端～口縁部へラミガキ。風化している。	砂粒含む。焼成良好。硬質。明赤褐色。

第8節 特殊井戸

杯 土師器	覆土 ほぼ完形	23	口径 13.1 器高 5.3	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。体部と口縁部の間に段をもち、口縁部は直立する。	外面底部～体部ヘラケズリ、体部上端～口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ、口縁部横ナデ。	砂粒多く含む。焼成良好、硬質。橙色。
杯 土師器	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	24	口径 12.6 器高 5.1	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。体部と口縁部の間に段をもち、口縁部はやや外反しつつ直立する。	外面底部～体部ヘラズリ、口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ。口縁部横ナデ、風化が激しい。	砂粒含む。焼成良好、硬質。明赤褐色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{5}$ 残	25	口径 14.4 器高 4.5	丸底。底部～体部は緩やかな丸みをもつ。体部と口縁部の間に段があり、口縁部は直立しつつやや外反する。	外面底部～体部ヘラケズリ。口縁部横ナデ、内面ていねいなナデ。	砂粒含む。焼成良好、硬質。外面明赤褐色。内面黒色。
杯 土師器	覆土 口縁～体部 $\frac{1}{4}$ 残	26	口径 12.0	丸底 ㊤ 。体部は緩やかな丸みをもつ。口縁部は直立し、口唇部はやや外反する。	外面体部ヘラケズリ+ナデ。口縁部横ナデ。内面体部～口縁部横ナデ。	砂粒少量含む。焼成普通、やや軟質。橙色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{4}$ 弱残	27	口径 13.5 器高 5.0	丸底 ㊤ 。体部は緩やかな丸みをもつ、体部と口縁部の間に段があり口縁部は直立する。	外面体部ヘラケズリ、口縁部横ナデ。内面体部ナデ、口縁部横ナデ。	砂粒多く含む。焼成良好。硬質。にぶい橙色。
杯 土師器	覆土 $\frac{1}{4}$ 弱残	28	口径 15.6	丸底。底部～体部は緩やかな丸みをもつ。体部と口縁部の間に段があり、口縁部は直立し、口唇部はやや外反する。	外面底部～体部ヘラケズリ、口縁部は横ナデ。内面底部～体部下半ナデ。体部上半～口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好、硬質。外面橙色。内面にぶい橙色。
椀 土師器	覆土 $\frac{1}{5}$ 弱残	29	口径 11.5 器高 5.0	丸底。底部～体部は緩やかな丸みをもつ。口縁部は直立し口唇部はやや外反する。	器壁やや厚。外面底部～体部ヘラケズリ、口縁部横ナデ、内面底部～体部ナデ、口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。
高 杯 土師器	覆土 杯部 $\frac{1}{2}$ 欠	30	口径 12.6 底径 9.6 器高 11.3	杯部、体部は緩やかな丸みをもち、口縁部は直立する。脚部はロート状に広がる。	外面杯部の体部ナデ、口縁部横ナデ。脚部横ナデ。内面杯部底面～体部ナデ。体部上端～口縁部ミガキ、暗文斜行。脚部ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。
高 杯 土師器	覆土 脚部～杯部小片	31	底部 9.5	脚部は短かく、ラップ状に広がる。	内外面ていねいなナデ。	砂粒少量含む。焼成良好。硬質。橙色。
高 杯 土師器	覆土 脚部 $\frac{1}{4}$ 残	32	底径 9.0	脚部は短かく、ラップ状に広がる。	外面及び内面端部はていねいな横ナデ。内面ヘラケズリ。	砂粒少量含む。焼成良好。硬質。橙色。
甕 土師器	覆土 $\frac{1}{2}$ 残	33	口径 17.5 最大径25.0 底径 7.2 器高 29.8	胴部は緩やかな丸みをもち、口縁はコの字状に外反する。	輪積痕、外面胴部ヘラケズリ、頸部～口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ。口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良好。硬質。橙色。外面黒斑あり。

第II章 検出された遺構と遺物

甕 土 師 器	覆土 $\frac{1}{2}$ 残	34	口径 11.2 最大径13.5 底径 4.0 器高 10.4	胴部は内形に近い丸みをもち 口縁部は直立する。	輪積痕。外面胴部ヘラケズリ。 胴部上端～口縁部横ナデ。内 面底部～胴部ナデ。口縁部横 ナデ。胴部中央で胎土が変え てある。	砂粒多く含む。焼成普通。やや軟質。 上半橙色。下半浅 黄橙色。
甕 土 師 器	覆土 底部含小	35	底径 6.0	胴部は双曲線的な丸みをもち つつ立ちあがる。	外面胴部ヘラケズリ、内面底 部～胴部ナデ。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。明赤褐色。
甕 土 師 器	覆土 $\frac{1}{2}$ 残	36	口径 17.0 最大径20.5 底径 8.5 器径 32.5	胴部の膨らみは少なくやや胴 長、口縁部は「く」の字状に 外反する。	輪積痕。胴部ヘラケズリ、頸 部～口縁部横ナデ。底部ヘラ ケズリ。胴部ナデ。口縁部横 ナデ。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。外面黄 橙色。内面橙色。
甕 土 師 器	覆土 口縁～体 部小片	37		胴部は直線的であり、口縁部 は「く」の字状に外反する。	外面胴部ヘラケズリ、口縁部 横ナデ。内面胴部ナデ。口縁 部横ナデ。	砂粒多く含む。焼 成良好。やや軟質。 淡黄色。
甕 土 師 器	覆土 口縁～肩 部 $\frac{1}{2}$ 残	38		胴部は緩やかな丸みをもち、 口縁部は「く」の字状に外反す る。口縁部中央に段あり。	輪積痕。外面胴部ヘラケズリ。 胴部上端～口縁部横ナデ。内 面ナデ、風化が激しい。	砂粒多く含む。焼 成普通。やや軟質。 外面にふい橙色。 内面浅黄橙色。
甕 土 師 器	覆土 口縁小片	39		口縁部に段あり	内段面口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。外面浅 黄橙色、内面橙色。
甕 土 師 器	覆土 頸部～胴 部 $\frac{1}{2}$ 残	40		胴部は緩やかな丸みをもち、 口縁部は「く」の字状に外反 する。	胴部内外面ハケメ、口縁部横 ナデ。	砂粒含む。焼成良 好硬質。明赤褐色。 内外面黒斑あり。
鉢 土 師 器	覆土 体部 $\frac{1}{2}$ 残	41	底径 7.0	体部は緩やかな丸みをもつ。 体部と口縁部の間に段あり。 口縁部は直立する。	外面体部ヘラケズリ+ナデ、 口縁部横ナデ、内面底部～体 部はミガキ、口縁部横ナデ。	砂粒含む。焼成良 好。硬質。明赤褐 色、黒斑あり。

1号特殊井戸出土土器観察表

1号特殊井戸出土滑石製模造品（第218図42）

溝部覆土中より検出された。長さ3.8cm、最大幅2.4cm、厚さ4mmで完形である。表面はよく研磨されており、なめらかである。中央部に直径約2mmの穿孔が存在する。灰白色。

2号特殊井戸（1区）〔第209・210・219～227図・図版49・51（遺構）・図版105（遺物）〕

第3層C軽石を含む黒褐色土面で確認された。本遺構は1・2号源泉部、溝部、源泉部西側張り出し部、溝部東側張り出し部よりなっており、溝部において1号特殊井戸・27号溝の埋没部分を一部切っている。なお溝部は西側調査区域外へと延びている。

1号源泉部は2号源泉部よりも新しく、2号源泉部は西側より1号源泉部近くまで続く河原石（角閃石安山岩）の石敷により覆われていた。1号源泉部は、約2.5m×2.5mほど東側へ掘り込まれており、底面は最も近い溝部の延長上より約25cm高くなっている。1号源泉部には、井筒状の掘り込みは無く東側壁面において、ローム層とその下層の黄白色粘土層との間に砂質層があり、

上面のロームが水で侵蝕されたような複雑な凹みが存在するため、この砂質層から湧水したものと考えられる。

1号源泉部西側には、大小の河原石、角閃石安山岩による石敷部が存在する。源泉部近くの角閃石安山岩は、後からの流れ込みの可能性が強いので、第210図では破線で示したが、敷石は北側に密集し、南側にいくにしたがい疎らになっている。また北側では厚くなっているが、南側にいくにしたがいしだいに薄くなり、石敷上面は北側から南側へと傾斜している。敷石最北端においては、その高さが本遺構確認面である第3層よりもやや突出している部分もあり、この敷石は本特殊井戸使用時には、地表面から連続しており、1号源泉部へ達するための足場であった可能性が強い。

2号源泉部は、深さ115cm、底径60cmである。掘り方は、80cmまでは傾斜をもっているが、それ以下は垂直となっている。なお、この井筒の南側には、厚さ4cm、長さ70cm、深さ15cmの板痕が検出された。

1・2号源泉部の西側には、隅丸方形の張り出し部が存在する。確認面からの深さは約20cmで、底面は軟弱である。張り出し部中央やや北寄りには、不整隅丸台形をした掘り込みがあり、さらに2～40cm深くなっている。

溝部は、確認面からの深さ70～110cm、北側が深く南側へいくにしたがいしだいに浅くなる。溝部中段付近においては、水流により侵蝕されたような形跡が溝中央やや北寄り存在する。

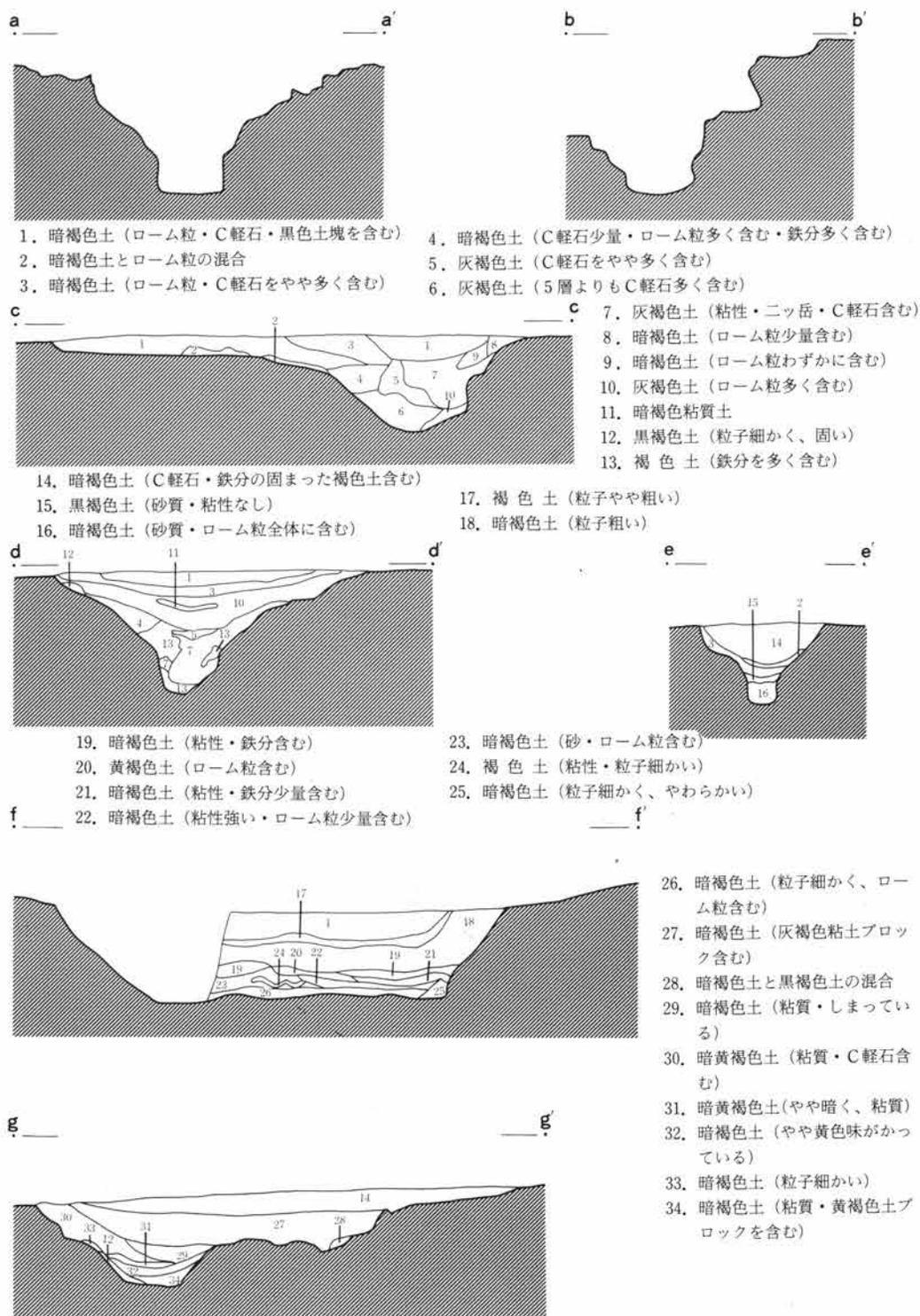
溝部東側張り出し部は、6m×4mの隅丸方形で深さ80cm、急傾斜で掘り込まれている。この張り出し部東側に、幅約1m、深さ20cmの浅く内側に傾斜した掘り込みがめぐっている(本来はこれを含めて張り出し部として扱うべきかもしれない)。この張り出し部は灌漑用水の貯留、冷たい井戸水を暖めるといった機能を有していたものと考えられよう。なお、張り出し部南端の出水口と推定される部分は、精査したが杭跡は発見出来なかった。この部分は板状のものをあてるだけであったのだろうか。

張り出し部南側には、溝部とほぼ平行して深さ約20cm、幅60cm～150cmの浅く緩かに蛇行する溝がある。張り出し部南端に堰を設けることによって、南側に存在する水田へと分水したのであろう。この部分は粘性の強い黒褐色土となっており、特に南端部においては水田土壌に近似する。

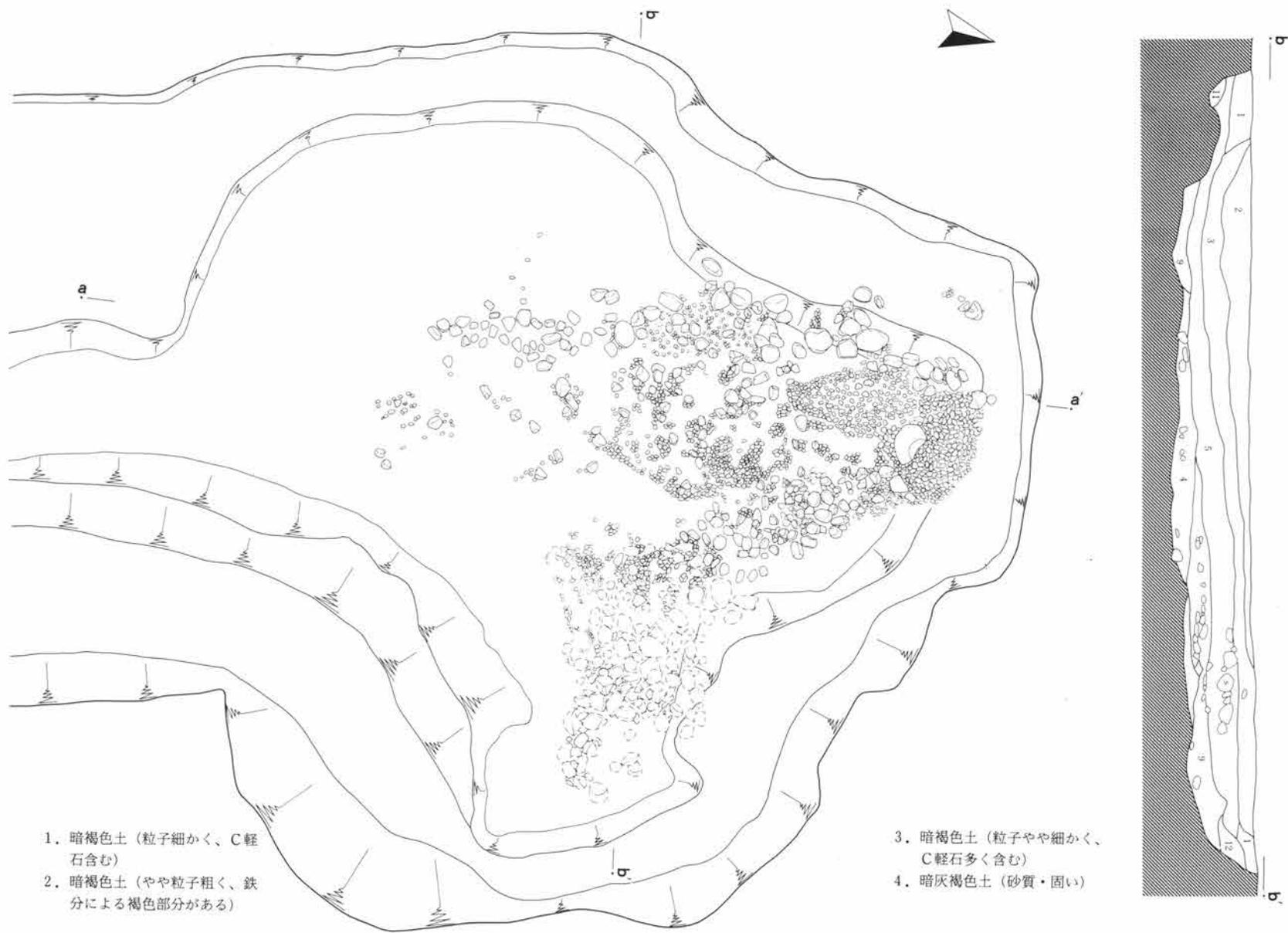
なお、最南端部に幅約80cm、深さ約20cmの南北に走る浅い溝がある。この溝は、張り出し部南端より出ている蛇行する浅い溝が調査区域外へ入る付近で重複しているが、この部分の土層断面による観察では、これとの新旧関係は確認出来なかった。

出土遺物は非常に多い。石敷下2号源泉部付近より土師器杯(1)が出土しているが、それ以外のほとんどは石敷上(2号源泉部使用時)のものである。出土位置は全般にわたっているが、石敷部付近、溝部北半部の中層、溝部東側張り出し部に特に多い。土器の破片総数は約5500片で、このうち土師器片が全体の%を占める。本書に掲載したもの以外で、器種が判明出来た土師器は、杯が445片、甕が532片であった。

第II章 検出された遺構と遺物

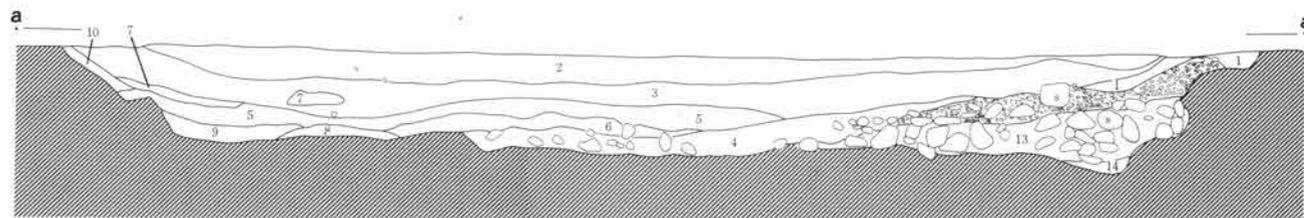


第219図 2号特殊井戸断面図



1. 暗褐色土 (粒子細かく、C軽石含む)
2. 暗褐色土 (やや粒子粗く、鉄分による褐色部分がある)

3. 暗褐色土 (粒子やや細かく、C軽石多く含む)
4. 暗灰褐色土 (砂質・固い)

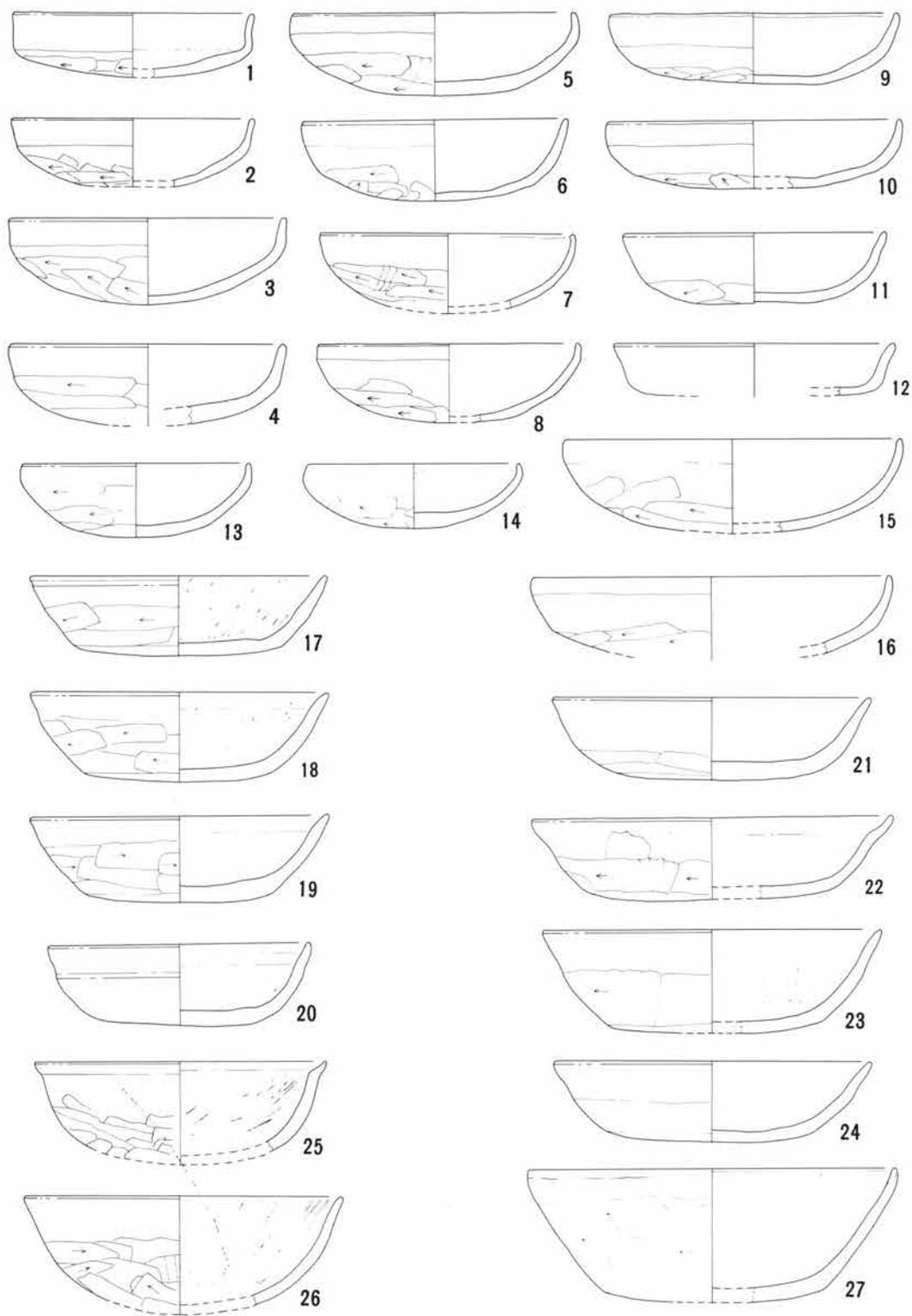


5. 暗褐色土 (C軽石・鉄分の固ったものを含む・砂質)
6. ローム (暗褐色土少量混合)
7. 暗褐色土 (粒子やや粗く、C軽石含み、やや黒っぽい)
8. 暗灰褐色土 (ロームブロックを多く含む)
9. 暗灰褐色土 (ロームブロックを少量含む)
10. 暗褐色土 (しまっている・C軽石含む)
11. 暗褐色土 (粘質・粒子細かい)
12. 暗褐色土 (ローム粒・黒褐色土含む)
13. 黄褐色土 (砂質)
14. 青灰色砂層 (ローム粒・礫を含む)



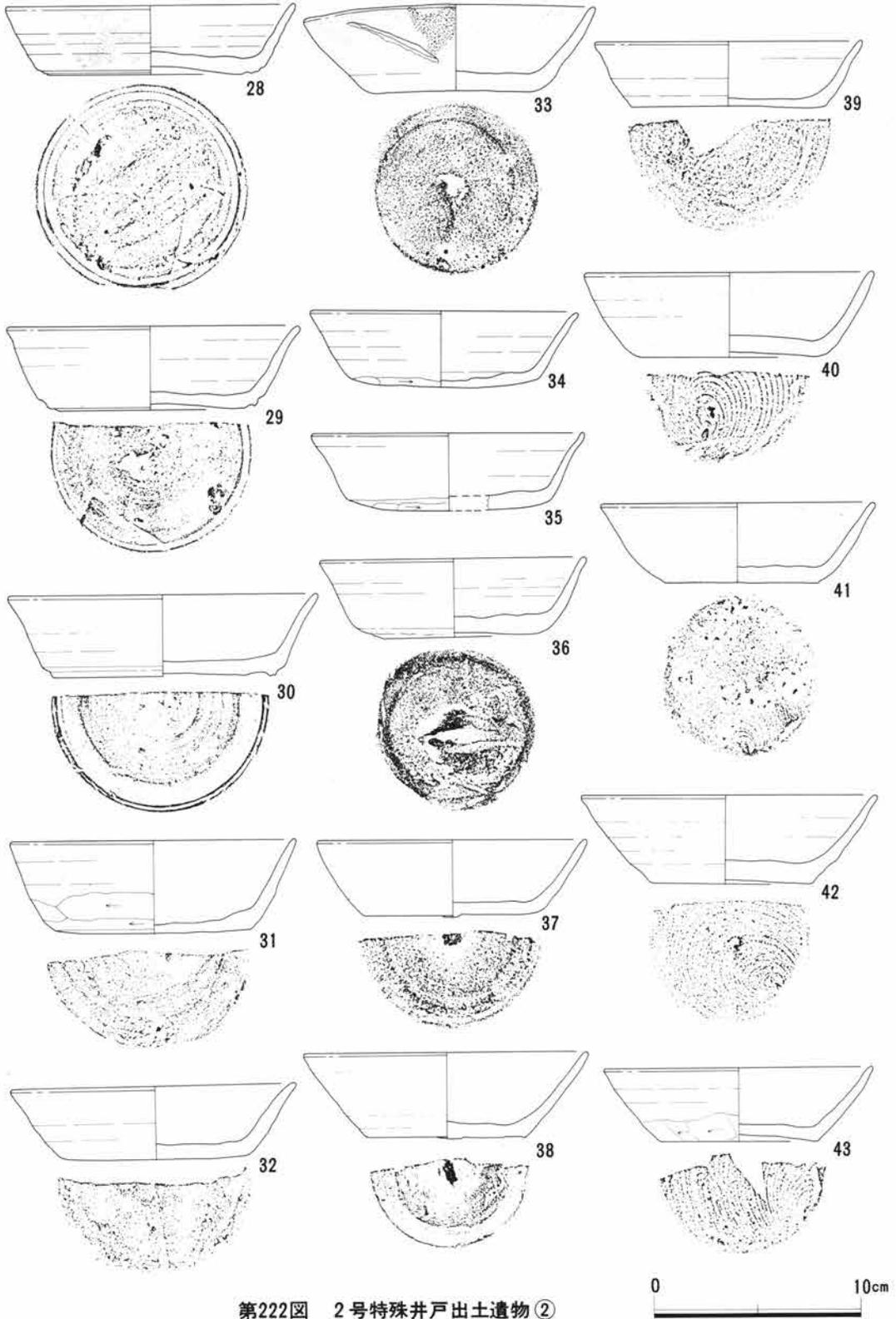
第220図 2号特殊井戸

第8節 特殊井戸

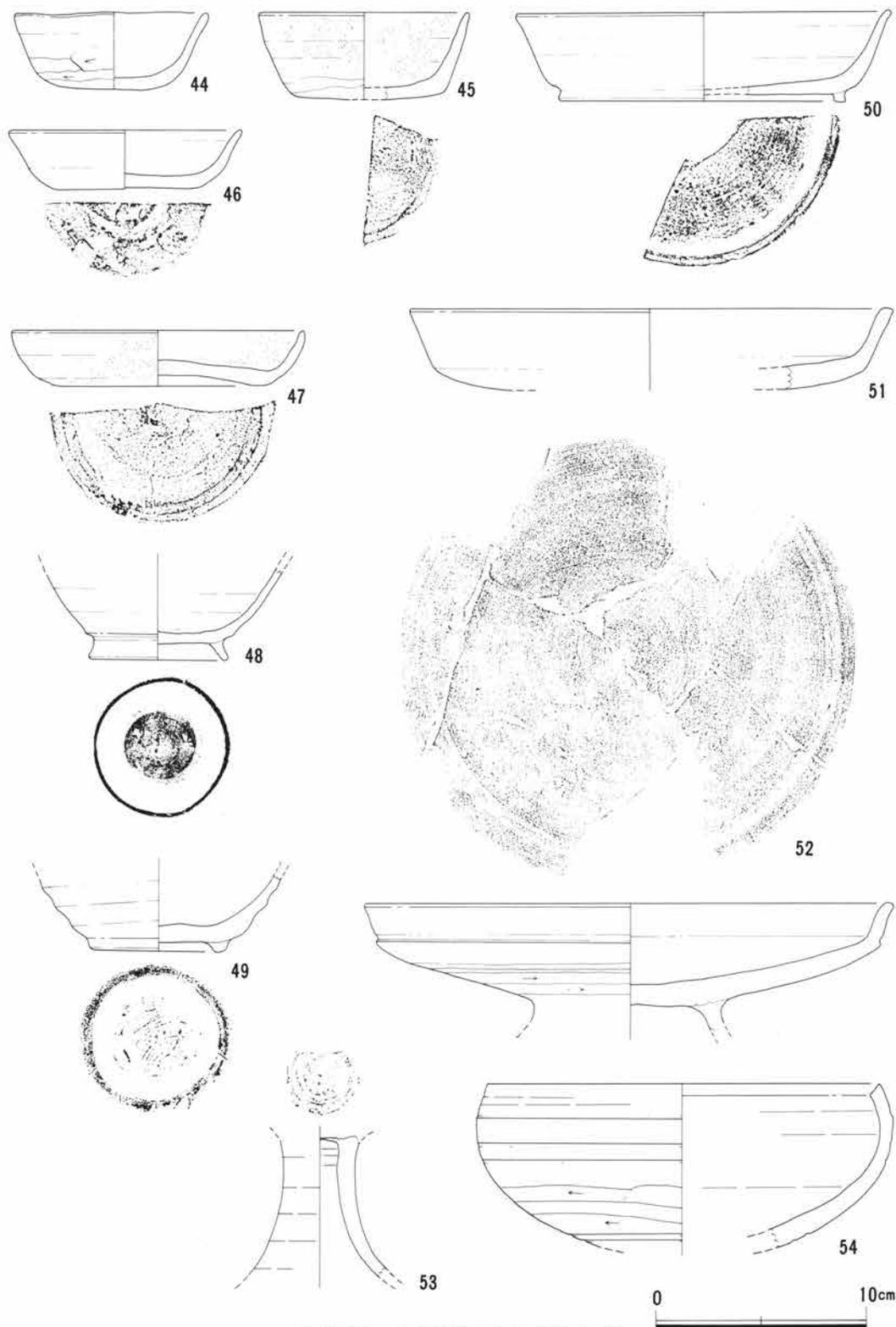


第221図 2号特殊井戸出土遺物①



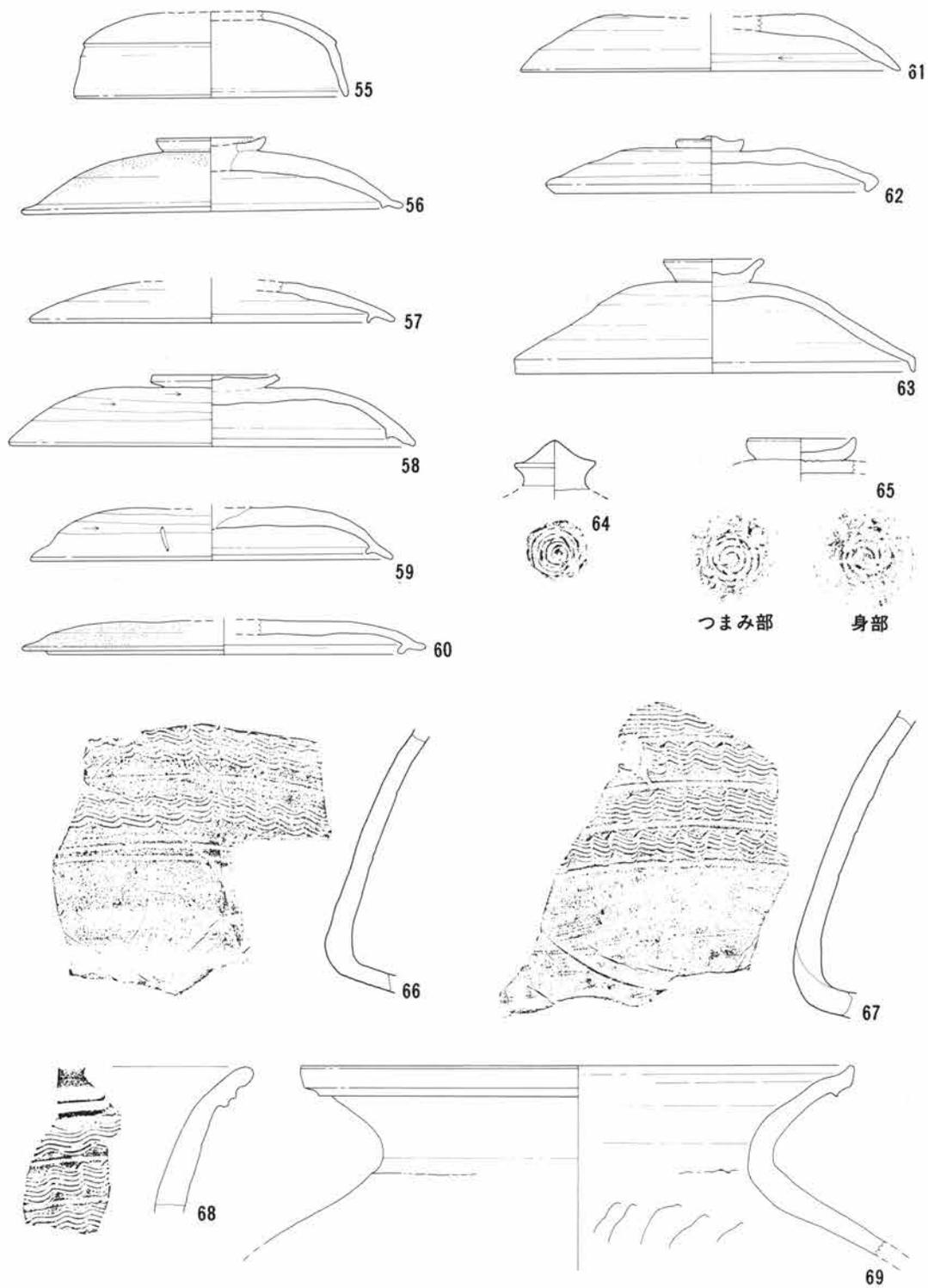


第222図 2号特殊井戸出土遺物②



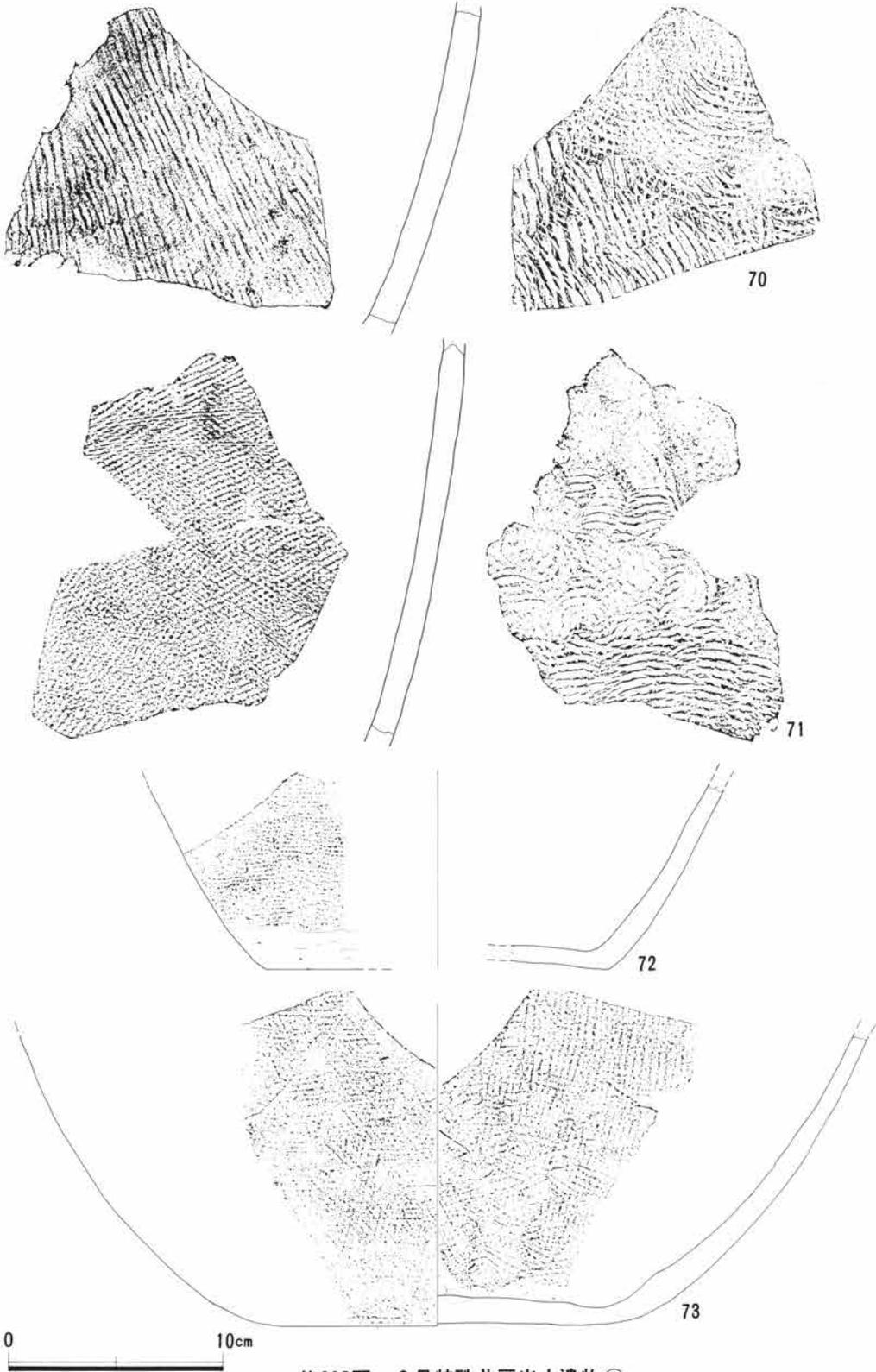
第223図 2号特殊井戸出土遺物 ③

第II章 検出された遺構と遺物



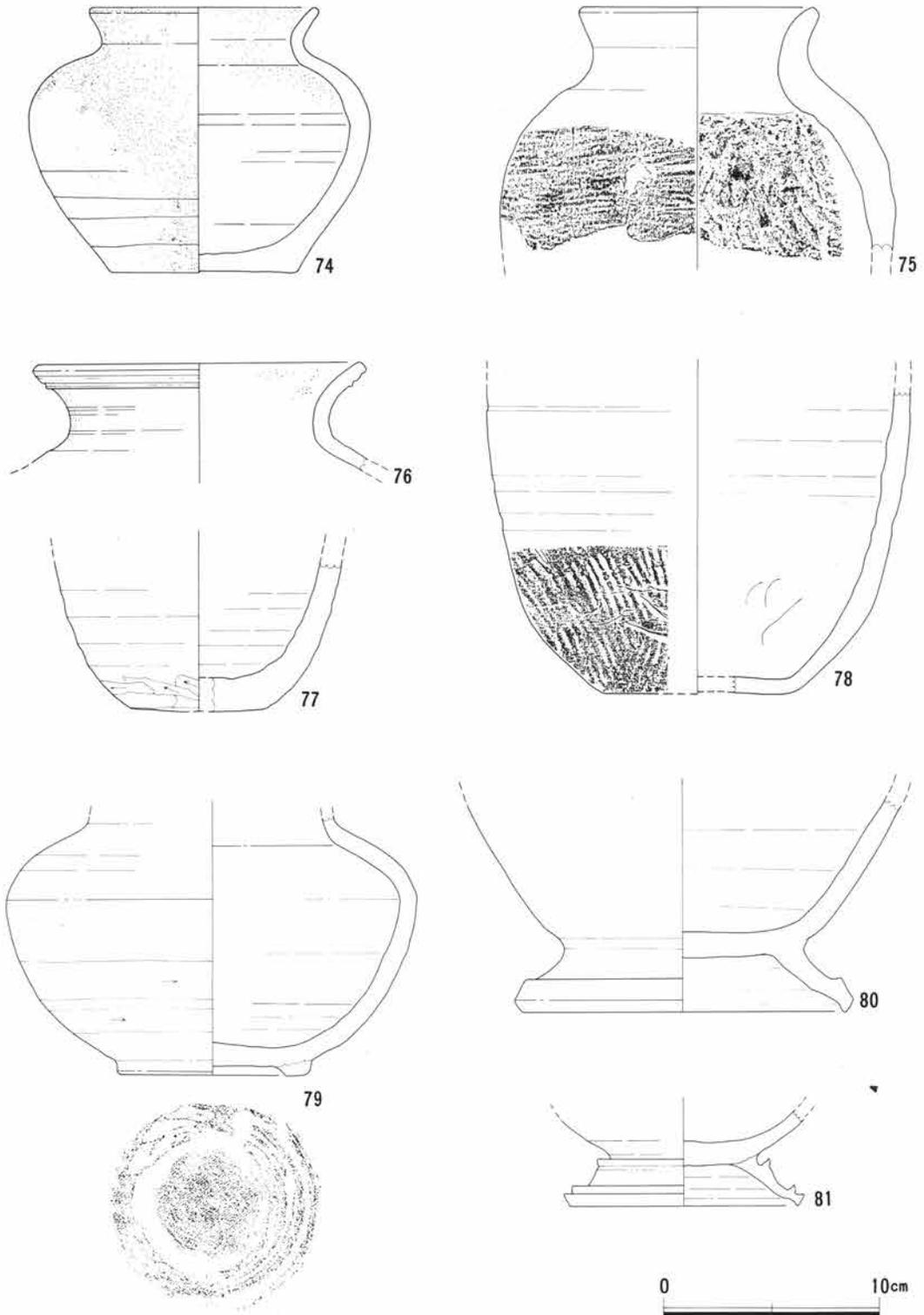
第224図 2号特殊井戸出土遺物④



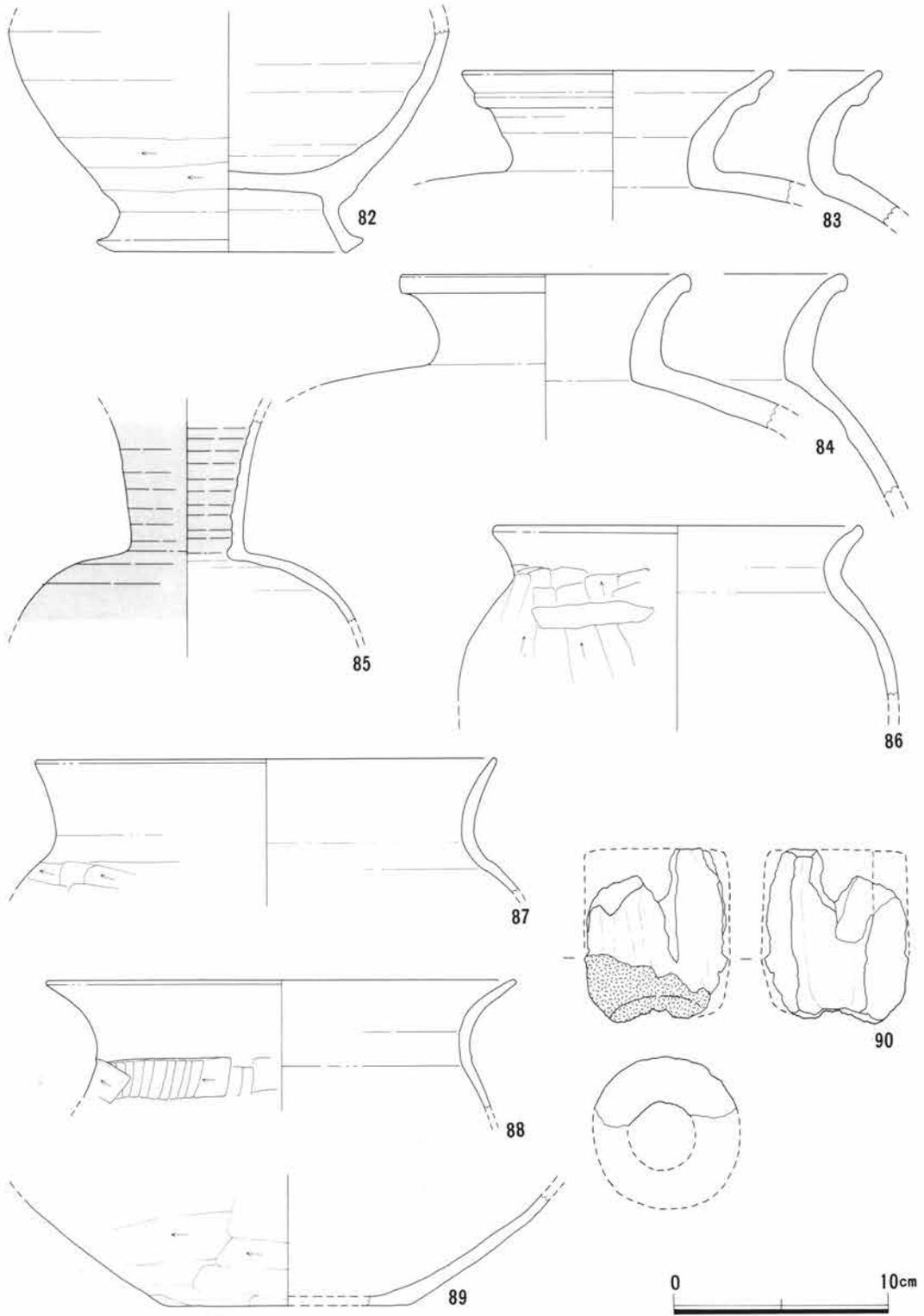


第225図 2号特殊井戸出土遺物⑤

第II章 検出された遺構と遺物



第226図 2号特殊井戸出土遺物⑥



第227図 2号特殊井戸出土遺物⑦

第II章 検出された遺構と遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(m)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
杯 土師器	西張石下 1/2残存	1	口径 11.4	口縁部凹んで直立。稜もって 平底状。扁平で歪む。	口縁部内外面横ナデ。底部不 定ヘラズリ。内面指頭痕有。	砂粒含む。酸化硬 質。にぶい橙色。
杯 土師器	覆土 1/2残存	2	口径 11.4	口縁部やや外傾して直立。緩 い稜で底部丸底状。	口縁部内外面横ナデ。体部ナ デ。底部ヘラケズリ。	砂粒気泡含む。酸 化硬質。にぶい橙。
杯 土師器	西張出 1/2残存	3	口径 13.0 器高 4.0	口縁部直立。緩い稜もって 体部へ続き底部丸底。	口縁部内外面横ナデ。体部底 部ヘラケズリ。	砂粒気泡含む。酸 化硬質。にぶい橙 色。
杯 土師器	覆土 1/2残存	4	口径 13.0	口縁部僅か外傾して直立。緩 い稜もって体部へ。丸底。厚。	口縁部内外面横ナデ。体部横 ヘラケズリ。底部黒斑。	砂粒含む。酸化や や硬質。にぶい橙。
杯 土師器	西張出 ほぼ完形	5	口径 13.6 器高 3.8	口縁部やや内傾ぎみに直立。 丸底。	口縁部内外面横ナデ。体部底 部ヘラケズリ。内面指頭痕。	砂粒含む。酸化硬 質。にぶい橙色。
杯 土師器	西張石下	6	口径 12.7 器高 3.8	口縁部内反ぎみや外傾。稜 なく丸底。	口縁部内外面横ナデ。体部指 頭痕。底部不定ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化硬 質。にぶい褐色。
杯 土師器	西張出 1/2残存	7	口径 12.0	口縁部緩く直立し口唇部内 反。稜なく丸底。	口縁部内外面横ナデ。体部 へ底部不定ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化や や硬質。橙色。
杯 土師器	西張出 1/2残存	8	口径 12.3 器高 3.7	口縁部短く直立。歪む。	口縁部内外面横ナデ。体部指 頭痕。底部不定ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化硬 質。にぶい褐色。
杯 土師器	覆土 ほぼ完形	9	口径 13.6 器高 3.2	口縁部緩く外傾し、口唇部内 反稜なく底部扁平。歪む。	口縁部内外面横ナデ。体部指 頭痕。底部不定ヘラケズリ。	砂粒含む。酸化硬 質。にぶい褐色。
杯 土師器	西張出 1/2残存	10	口径 13.8	口縁短かく直立。口縁～体部 に緩い稜。歪む。	口縁内外面輪積後横ナデ。体 部底部指頭痕後底部ヘラ削り。	砂粒気泡含む。酸 化硬質。鈍い褐色。
杯 土師器	覆土 1/2残存	11	口径 12.4 器高 3.2	口縁外傾。稜なく底部上げ底 ぎみ。平底。	口縁内外面輪積後横ナデ。体 部底部不定ヘラ削り。内面指痕	砂粒含む。酸化や や軟質。橙色。
杯 土師器	覆土 1/2残存	12	器高 2.4	口縁外傾。稜なく底部平底。 扁平。	口縁内外面横ナデ。体部指頭 痕。底部軽いヘラ削り後ナデ。	砂粒含む。酸化や や硬質。鈍い橙色。
杯 土師器	覆土 1/2残存	13	口径 10.7 器高 3.5	口縁短かく内反ぎみに直立。 稜顕著で体部底部半球形。	口縁部内外面横ナデ。体部・ 底部一定ヘラ削り。	砂粒含む。酸化硬 質。橙色。
杯 土師器	西張出 1/2残存	14	口径 10.0 器高 3.0	口縁短かく内反。口縁～体部 に緩い稜。丸底。	口縁内外面横ナデ。体部指頭 痕。底部縦横ヘラ削り。	砂粒含む。酸化や や軟質。にぶい褐 色。黒斑。鉄付着。
杯 土師器	西張出 1/2残存	15	口径 16.0 器高 4.4	口縁短かく内反ぎみに直立。 稜なく丸底状。	口縁内外面横ナデ。体部外面 指頭痕。底部一定ヘラ削り。	砂粒含む。酸化硬 質。橙色。
杯 土師器	西張出	16	口径 17.0	口縁短かく内反ぎみに直立。 体部に顕著な稜、底部丸底状。	口縁内外面横ナデ。体部、底 部一定ヘラ削り。	砂粒含む。酸化硬 質。橙色。
杯 土師器	覆土 1/2残存	17	口径 14.0 底径 10.0 器高 3.8	外面口縁下浅い沈線。口縁体 部緩い稜で外傾、体部～底部 に顕著な稜、底部平底。	口縁内外面輪積後回転横ナデ 体部外面横、底部縦横ヘラ削 り、内面放射状に研磨暗文。	砂粒少い。酸化硬 質。にぶい橙色。

第8節 特殊井戸

杯 土 師 器	覆土 3/4残存	18	口径 14.0 底径 8.7 器高 4.2	口縁短かく外反。稜なく体部内反。体部～底部稜顯著で底部やや丸底ぎみ。	口縁内外面輪積後回転横ナデ体部→底部一定ヘラ削り。内面放射状研磨暗文。	砂粒小石含む。酸化やや硬質。橙色。
杯 土 師 器	西張出附近3/4残存	19	口径 14.0 底径 8.0 器高 4.0	口縁体部稜なく内反ぎみに外傾。体部～底部稜顯著で平底。器壁やや厚い。	口縁内外面回転横ナデ。体部外面→底部不定ヘラ削り。	砂粒含む。還元後酸化硬質。鉄分付着。
杯 土 師 器	西張出ほぼ完存	20	口径 12.4 底径 7.0 器高 3.8	口縁内反ぎみに外傾、浅い凹帯稜をもって体部内反。体部～底部稜緩く底部平底。	口縁内外面輪積後回転ナデ、体部外面指頭痕。底部ヘラ削り磨滅。内面放射状研磨暗文。	砂粒少い。酸化やや硬質。橙色。
杯 土 師 器	覆土 3/4残存	21	口径 15.0 器高 3.8	口縁体部稜なく直線状に外傾体部底部稜なく底部平底状、底部器壁厚い。	口縁内外面回転横ナデ。体部横底部不定ヘラ削り。内面放射状研磨暗文。磨滅。	砂粒少石含む。酸化やや軟質。黄橙色。
杯 土 師 器	2張出3/4残存	22	口径 17.0 底径 12.0 器高 3.8	口唇歪んで直立ぎみ。口縁外反。稜なく体部外傾。体部～底部稜緩く、底部平底状。	口縁内外面指頭痕、横ナデ。体部横底部不定ヘラ削り。	砂粒酸化鉄粒含む酸化やや軟質。橙色。黒斑。
杯 土 師 器	西張出3/4残存	23	口径 16.0 底径 10.2 器高 4.8	口縁緩く外反。緩い稜をもって体部直線状に外傾。体部～底部稜顯著で底部平底状。	口縁内外面横ナデ。体部外面横底部不定ヘラ削り、磨滅。内面放射状研磨暗文、磨滅。	砂粒含む。酸化軟質。黄橙色。
杯 土 師 器	西張出小片	24	口径 15.0 器高 3.8	口唇やや内反ぎみ。口縁～体部。体部～底部緩い稜。平底。	口縁内外面横ナデ。体部横底部不定ヘラ削り。磨滅。	砂粒含む。酸化軟質。橙色。
椀 土 師 器	覆土 口縁小片	25	口径 13.7	口縁短かく内反ぎみに強く外傾。内面稜をもって体部半球形状。	口縁内外面横ナデ。体部横ヘラ削り。内面放射状研磨暗文。	砂粒含む。酸化硬質。明赤褐色。
椀 土 師 器	西張出3/4残存	26	口径 14.9 器高 5.5	口縁わずかに外反ぎみに外傾。稜なく底部丸底。	口縁内外面輪積後横ナデ。体部→底部不定ヘラ削り。内面放射状研磨暗文。	砂粒含む。酸化やや硬質。にぶい橙色。黒斑。
椀 土 師 器	西張出底面直上3/4残存	27	口径 17.3 底径約10.5	口縁短かく直立。体部直線状に外傾。緩い稜をもって底部平底ぎみ。	口縁内外面輪積後横ナデ。体部→底部不定ヘラ削り。内面放射状研磨暗文。	砂粒含む。酸化やや軟質。にぶい橙色。
杯 須 恵 器	覆土 3/4残存	28	口径 14.0 底径 10.3 器高 3.4	口縁体部直線状に外傾。稜部に断面凹形の擬高台。底部やや上げ底。	口縁体部内外面回転横ナデ。底部回転ヘラ削りで擬高台作り後中央部手持ヘラ削り。	雲母気泡含む。還元硬質。灰色。外面自然釉。
杯 須 恵 器	西張出1/2残存	29	口径 14.1 底径 10.0 器高 3.8	口縁部やや外反し、体部内反ぎみに外傾。稜部に擬高台。底部やや上げ底。	口縁体部内外面回転横ナデ。底部右回転ヘラ削り調整。擬高台削り出し。底部内指頭痕。	砂粒気泡含む。還元硬質。灰色。
杯 須 恵 器	西張出1/2残存	30	口径 15.0 底径 10.8 器高 3.9	口縁部僅かに外反し、体部直線状に外傾、稜をもって断面凹形の擬高台。底部平底。	口縁体部内外面回転横ナデ。底部回転ヘラ削り調整。擬高台削り出し。	砂粒少く気泡含む。還元硬質。灰色。
杯 須 恵 器	西張出1/2残存	31	口径 13.9 底径 9.5 器高 4.4	口縁体部ほぼ直線状に外傾。顕著な稜をもち底部平底。	口縁体部内外面回転横ナデ。体部外面下位。底部右回転ヘラ削り調整。	砂粒気泡含む。還元硬質。灰色。

第II章 検出された遺構と遺物

杯 須 恵 器	西張出底 より40cm ½残存	32	口径 13.8 底径 9.4 器高 3.5	口縁体部僅か波打ち直線状に 外傾。緩い稜をもって底部平 底。	口縁体部内外面回転横ナデ。 底部回転ヘラ切り後ナデ調 整。	砂粒石英含む。還元 やや硬質。灰白 色。
杯 須 恵 器	覆土 ほぼ完存	33	口径 14.1 底径 8.6 器高 4.1	口縁やや内反ぎみ。体部外傾。 口縁片側大きく歪み片口状。 底部稜なく平底。	口縁体部内外面右回転横ナ デ。底部回転ヘラ削り調整後 ナデ。体部外面斜めに重ね焼 き痕。	砂粒含む。還元硬 質。灰色。外面自 然釉。
杯 須 恵 器	ほぼ完存	34	口径 13.0 底径 9.2 器高 3.6	口縁僅かに外反、体部直線状 に外傾。底部平底で稜明瞭。	内外面右回転横ナデ。底部回 転ヘラ切り後手持ちヘラ削り 調整。	砂粒含む。還元硬 質。灰色。
杯 須 恵 器	覆土 ½残存	35	口径 13.3 底径 10.0 器高 3.7	口縁内反ぎみに外傾。体部直 線状に外傾。稜緩く底部丸底 状。	口縁体部内外面回転横ナデ。 底部手持ちヘラ削り調整。	砂粒少い。酸化後 還元硬質。灰色。
杯 須 恵 器	西張出 ¾残存	36	口径 13.0 底径約 7.0 器高 3.7	口縁僅かに外反。体部直線状 に外傾。体部下位内反。緩い 稜で底部平底。	口縁部体部内外面右回転横ナ デ。底部右回転ヘラ切り後周 縁含め粗いヘラナデ。	砂粒少く気泡含む 還元やや硬質。灰 白色。
杯 須 恵 器	西張出 ½残存	37	口径 13.0 底径 8.4 器高 3.7	口縁体部緩く内反ぎみに外 傾。底部平底で稜やや緩い。	口縁体部内外面回転横ナデ。 底部右回転ヘラ切り後無調整。	砂粒少石含む。還 元硬質。灰色。
杯 須 恵 器	覆土 ½残存	38	口径 13.5 底径 7.7 器高 4.1	口縁部僅か内反ぎみで直線状 に外傾。顕著な稜をもって底 部平底。	口縁体部内外面回転横ナデ。 底部回転ヘラ切り後ヘラナデ 調整。	砂粒気泡含む。還 元硬質。灰白色。
杯 須 恵 器	西張出 ¾残存	39	口径 13.0 底径 9.4 器高 3.1	口縁僅かに外反し、体部直線 状に外傾、下位浅い凹線。顕 著な稜をもって底部平底。	口縁体部内外面回転横ナデ。 底部回転糸切り後ナデ調整。	小石雲母気泡含 む。還元硬質、灰 白色。鉄分付着。
杯 須 恵 器	西張出 ½残存	40	口径 14.0 底径 9.0 器高 4.1	口縁体部内反ぎみで直線状に 外傾。緩い稜をもって底部や や上げ底。	口縁体部内外面回転横ナデ。 底部右回転糸切り後、口縁軽 いヘラナデ。	砂粒気泡含む。還 元やや硬質。灰色。 内外面自然釉。
杯 須 恵 器	西張出 ほぼ完存	41	口径 13.2 底径 7.4 器高 3.9	口縁体部直線状に外傾、底部 との境内反し丸み。底部平底。	内外面回転横ナデ。底部右回 転糸切り後無調整。口縁内面 重ね焼き痕。	雲母粒含む。還元 硬質。灰色。内外 面自然釉。
杯 須 恵 器	覆土 ½残存	42	口径 14.3 底径 7.8 器高 4.3	口縁僅かに外反。体部内反ぎ みに外傾。底部平底で稜明瞭。	口縁体部内外面右回転横ナ デ。底部右回転糸切り後無調 整。	雲母粒含む。還元 硬質。灰色。
杯 須 恵 器	西張出 ½残存	43	口径 13.0 底径 8.0 器高 3.6	口縁体部直線状に外傾。顕著 な稜をもち底部やや上げ底ぎ み。	口縁体部内外面右回転横ナ デ。体部外面下位一手持ちヘ ラ削り。底部右回転糸切後無 調整。	砂粒石英含む。還 元硬質。灰色。
小形杯 須 恵 器	西張出 完存	44	口径 9.2 器高 3.6	口縁僅かに外反し体部直線状 外傾。稜なく平底。口縁歪む。	口縁体部内外面回転横ナデ。 体部下位底部手持ちヘラ削 り。	砂粒含む。還元硬 質。灰色。

第8節 特殊井戸

小形杯 須恵器	覆土 1/2残存	45	口径 10.0 底径 6.2 器高 4.1	口縁体部直線状に外傾。稜なく底部平底。	口縁体部内外面回転横ナデ。底部ヘラナデ。口縁手持ちヘラ削り調整。	砂粒少ない。還元硬質。灰色。内外面自然釉。
皿 須恵器	西張出 1/2残存	46	口径 13.0 底径 6.6 器高 2.7	口縁僅かに外反し、体部直線状に外傾。下位内反。緩い稜をもって底部平底器壁厚い。	口縁体部内外面回転横ナデ。底部回転ヘラ切り後ヘラナデ調整。	小石含む。還元硬質。灰色。
皿 須恵器	西張出 1/2残存	47	口径 14.0 底径 10.0 器高 2.6	口縁直立。体部大きく内反。底部上げ底で稜なし。	口縁体部内外面回転横ナデ。底部右回転ヘラ削り調整。	砂粒石英含む。酸化後還元硬質。灰色。外面自然釉。
壺 須恵器	覆土 底部のみ	48	底径 6.6	体部内反ぎみに立ち上がる。高台断面三角形状で外面外反し体部下位稜。器壁薄い。	体部内外面回転横ナデ。底部回転ヘラ削り調整後高台貼付。	砂粒含む。還元硬質。赤灰色～灰色。
碗 須恵器	西張出 1/2残存	49	底径 6.5	体部波打って外傾。高台断面台形状で接地面外傾。厚い。	体部内外面右回転横ナデ。底部右回転糸切り後高台貼付。	砂粒小石含む。還元やや硬質。灰色。
碗 須恵器	西張出 底面直上 1/2残存	50	口径 18.0 底径 13.8 器高 4.1	口縁体部直線状外傾。体部下位内反。高台断面方形で接地面やや内傾。平底。中央薄い。	口縁体部内外面回転横ナデ。底部右回転ヘラ削り調整。高台削り出し。底部内面ナデ。	雲母多く含み還元硬質。灰色。内面浅黄色。鉄分付着。
盤 須恵器	覆土 小片	51	口径 22.8	口唇水平ぎみ。口縁体部直線状に外傾。緩い稜で底部内反。	口縁体部内外面回転横ナデ。底部右回転ヘラ削り。	砂粒多い。還元やや硬質。灰色。
脚付盤 須恵器	西張出 1区北表土 1/2残存	52	口径 25.1 脚径 8.9	口唇僅か外反し口縁直線状に外傾。沈線稜をもって体部内反ぎみに内傾。脚部外反傾向。	口縁内外面回転横ナデ。体部輪積後外面右回転ヘラ削り内面カキ目調整。外面脚部貼付。	砂粒小石含む。還元硬質。灰色。
高杯 須恵器	覆土 脚部1/2	53	接合口径 3.7	緩く外反して垂下し、下方で大きく広がる。	沈線の接合痕。輪積後内外面回転横ナデ。	砂粒含む。中性後還元硬質。灰色。
鉄鉢 須恵器	覆土 1/2残存	54	口径 18.6 胴径 19.8	口唇内傾面取り。口縁内傾。体部大きく内反。最大径上位。	輪積後内外面回転横ナデ。体部下位右回転ヘラ削り。	砂粒含む。中性後還元やや硬質。灰色。
蓋 須恵器	覆土 1/2残存	55	口径 14.0	体部内反し稜をもって端部やや波打ち外傾。器壁薄い。	頂部左回転ヘラ削り調整。端部内外面回転横ナデ。	石英多い。酸化後還元硬質。灰色。
蓋 須恵器	覆土 1/2残存	56	鈕径 4.0 口径 17.9 器高 3.4	鈕扁平傾向。頂部水平。端部近くで内稜。端部鋭い。内面断面三角形状身受け凸帯。	内外面回転横ナデ。鈕貼付。身受け削り出し。	砂粒少く気泡含む。還元硬質。灰色。外面自然釉。
蓋 須恵器	覆土 1/2残存	57	口径 17.1	頂部丸い。稜なく端部やや尖る。身受け断面三角形で鋭い。	内外面回転横ナデ。身受け削り出し。	砂粒少ない。酸化後還元硬質。暗灰色。
蓋 須恵器	西張出 1/2残存	58	鈕径 5.8 口径 19.0 器高 3.3	鈕扁平で側部外傾。頂部水平。端部丸い。内面断面三角形状身受け凸帯。	内外面回転横ナデ後、頂部右回転ヘラ削り調整後、鈕貼付。身受け削り出し後ナデ調整。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
蓋 須恵器	不明 1/2残存	59	口径 17.0	頂部水平。緩く内反後端部丸い。身受け断面半円形横向き。	内面回転横ナデ。頂部回転ヘラ削り後ナデ。身受け削る。	砂粒少ない。還元硬質。灰白色。

第II章 検出された遺構と遺物

蓋 須恵器	西張出 1/2残存	60	口径 19.0	頂点水平で全体に扁平。端部稜なくやや尖る。身受け断面半円形で横向き。	内外面回転横ナデ。身受け削り出し。	砂粒小石含む。還元硬質。灰色。外面自然釉。
蓋 須恵器	西張出 1/2残存	61	口径 17.6	頂部やや内傾。端部丸い。内面僅かな稜、身受けか。厚い。	内外面回転横ナデ。頂部接合後ナデ。身受け回転ヘラ削り。	砂粒少い。酸化後還元。灰色。
蓋 須恵器	西張出石 下 1/2残存	62	鈕径 3.2 口径 14.7 器高 2.7	鈕ボタン状で中心尖る。頂部水平。稜をもって端部内傾。断面三角形で身受けになる。	内外面回転横ナデ。鈕貼付。	砂粒含む。中性後還元硬質。灰色。外面自然釉。
蓋 須恵器	西張出 1/2残存	63	鈕径 4.6 口径 18.8 器高 5.2	鈕凹形で側面外傾。頂部内反。体部直線状。端部外面に稜をもち断面三角形で身受けとする。	内外面回転横ナデ後頂部右回転ヘラ削り調整後鈕接合。	砂粒少い。酸化後還元やや硬質。灰白色。
蓋 須恵器	覆土 鈕のみ	64	鈕径 3.9	中央部山形に高く、端部顕著な稜。下部外反。	裏面右回転ラセン文凸型の接合痕。上面自然釉。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
蓋 須恵器	鈕部のみ	65	鈕径 5.2	扁平凹形で大きい。側面稜なし。	頂部に貼付後、上面回転横ナデ。接合面左回りラセン沈線。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
甕 須恵器	西張出 頸部小片	66		やや外反き直線状に外傾。2条の櫛描波状文帯と沈線。	輪積後内外面回転横ナデ。頸部内面アテ痕後接合痕。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
甕 須恵器	覆土 頸部小片	67		大きく外反。器壁厚い。4条の櫛描波状文帯と沈線。	輪積後内外面横ナデ。頸部接合痕。	砂粒含む。中性後還元硬質。灰色。
甕 須恵器	西張出 口縁小片	68		口縁外面2本の凸帯。全体に大きく外反。器壁厚い。	内外面回転横ナデ後、頸部外面3帯以上の櫛描波状文。	砂粒含む。中性後還元硬質。灰色。
甕 須恵器	覆土	69	口径 26.0	口唇直立。口縁下凸線帯で口縁「く」の字状に外反。	口縁内外面回転横ナデ。頸部接合痕。胴内面三日月アテ痕。	砂粒多く含む。還元硬質。暗灰色。
甕 須恵器	西張出 胴部小片	70		器壁厚く緩く外反。	輪積後外面平行叩キ痕。内面青海波状アテ痕。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
甕 須恵器	覆土 胴部小片	71		器壁厚く緩く外反。	輪積後外面布目状叩キ痕。内面青海波状アテ痕。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
甕 須恵器	西張出 底部1/2	72	底径 17.0	胴部直線状に外傾。	輪積後叩キ成形。胴部下位手持ちへ削り。内面ナデ。	砂粒石英含む。還元硬質。灰色。
甕 須恵器	西張出 底部1/2	73	底径約17.0	胴部緩く内反きみに外傾。稜なく底部上げ底。底部自然釉。	輪積後全外面布目状叩キ痕。全内面格子状アテ痕。	砂粒含む。中性後還元硬質。灰色。
短頸壺 須恵器	西張出 1/2残存	74	口径 10.4 胴径 15.9 底径 8.7 器高 12.1	口縁部短かく外反。肩部大きく張り出す。平底。器壁厚い。	内外面回転横ナデ、口縁へ胴部自然釉。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
短頸壺 須恵器	覆土 1/2残存	75	口径 10.8 胴径 18.4	口唇に稜。口縁短かく外反。肩部大きく内反。器壁厚い。	口縁内外面回転横ナデ。胴部輪積後叩キ成形。回転横ナデ調整。内面三日月形アテ痕。	砂粒石英多く含む。還元硬質。暗灰色。外面自然釉。

第8節 特殊井戸

短頸壺 須恵器	西張出付 近口縁 $\frac{1}{4}$	76		口唇面取り外傾。口縁外面沈線と凸線帯。頸部く字状外反。	内外面回転横ナデ。沈線。凸線へラ描。口縁内面自然釉。	砂粒含む。還元硬質。灰白色。
壺 須恵器	覆土 底部 $\frac{1}{4}$	77	底径 6.4	胴部大きく内反。稜緩い。器壁厚い。	輪積後内外面回転横ナデ。胴部下位手持ちへラ削り。	砂粒小石含む。還元硬質。灰色。
壺 須恵器	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	78	底径 8.8	胴部直線状垂下後大きく内反。稜緩く底部やや丸底ぎみ。	輪積後上位回転横ナデ。下位叩キ、下位内面ナデ調整。	砂粒少い。酸化後還元硬質。黒灰色。
短頸壺 須恵器	覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	79	胴径 19.0 底径 8.8	肩部緩い稜。胴部大きく内反し、高台断面方形で扁平。	輪積後回転横ナデ。下位回転へラ削り。沈線の高台接合痕。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
台付壺 須恵器	覆土 下位 $\frac{1}{2}$	80	底径 15.0	胴部内反ぎみに上がる。台部ハの字状に開き、端部段と稜。	内外面回転横ナデ調整。胴外面一部回転へラ削り。接合痕。	砂粒含む。還元硬質。灰色。鉄分。
台付壺 須恵器	西張出 底部 $\frac{1}{2}$	81	底径 10.6	胴部内反傾向。台部2段の断面三角形凸帯。接地面外傾。	内外面回転横ナデ。沈線の台部接合痕。凸帯削り出し。	砂粒少い。還元硬質。灰色。
台付壺 須恵器	覆土 下位 $\frac{1}{2}$	82	底径 11.5	胴部内反ぎみに上がる。台部稜。端部内傾。自然釉塊付着。	内外面輪積後回転横ナデ。胴部下位左回転へラ削り調整。	石英粒多い。中性後還元硬質。灰色。
横瓶 須恵器	西張出 口縁 $\frac{1}{2}$	83	口径 14.0	口縁稜なく外傾。断面半円形凸帯。頸部外反。胴部横長。	口縁内外面輪積後回転横ナデ。頸部接合痕。胴部外面ナデ。	砂粒多い。還元硬質。灰色。
横瓶 須恵器	東張出 口縁 $\frac{1}{2}$	84	口径 13.3	口縁稜緩く短かく直立。頸部短かく外反。胴部横方向長い。	口縁内外面回転横ナデ。頸部内面接合痕。胴部内面指頭痕。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
長頸壺 灰釉	東張出 頸部 $\frac{1}{2}$	85	頸径 5.3	頸部長く外反ぎみに上がる。肩部大きく内反。器壁薄い。	内外面輪積後回転横ナデ。頸部接合痕。頸部肩部施釉。	雲母粒多い。還元硬質。灰色。
壺 土師器	覆土 口縁 $\frac{1}{2}$	86	口径 17.0	口縁やや厚く外反。胴部大きく内反して膨らむ。	口縁内外面横ナデ。胴部へラ削り後頸部軽いナデ。黒斑。	砂粒含む。酸化硬質。にぶい褐色。
壺 土師器	西張出 口縁 $\frac{1}{4}$	87	口径 21.4	口縁直線状外傾。頸部強く外反。胴部膨らみ傾向。薄い。	口縁頸部内外面横ナデ。胴部へラ削り。	砂粒含む。酸化硬質。外面明赤褐色。内面暗赤褐色。
壺 土師器	西張出 口縁小片	88	口径 21.8	口縁大きく外傾。頸部外反ぎみに直立。稜もって胴部下がる。器壁薄い。	口縁頸部輪積後内外面横ナデ。頸部へラ削り。	微砂粒多く含む。酸化やや軟質。明褐色。
壺 土師器	覆土 底部 $\frac{1}{4}$	89	底径 11.3	胴部強く直線状外傾。底部小さな平底。底部中央器壁薄い。	胴部外面へ底部不定へラ削り。内面輪積痕、へラナデ調整。	砂粒小石多い。酸化やや硬質。褐色。
羽口 土師質	覆土 端部 $\frac{1}{2}$	90	端径 6.8 孔径 3.2	器壁厚く、やや尖頭ぎみ円筒形状。中心に円孔。	外面へラ削り調整。内面ナデ調整。端部使用により釉化。	砂粒気泡多い。酸化硬質。にぶい橙。

2号特殊井戸出土土器観察表

第9節 井 戸

1号井戸（4区）〔第228・234図・図版54（遺構）・図版110（遺物）〕

第4層黒褐色土面で確認。上面は長軸約2.1m・短軸約1.7mの規模で、楕円形を呈する井戸である。確認面からの深さは約1.4mと浅く、ロート状をしている。覆土には底面近くまで浅間C軽石が混入している。遺物は土師器の杯・甕等が覆土中より少量出土している。

2号井戸（4区）〔第228図〕

第4層黒褐色土面で確認された。上面の確認面で直径約90cm、底面で約50cmの不整円形を呈する。円筒状に掘り込まれているが、底部は上部よりも径がやや小さくなっている。出土遺物は皆無である。時期は明確ではないが、覆土にB軽石を含んでいないことから、B軽石降下以前に埋没していた井戸であると考えることが出来る。

3号井戸（3区）〔第228・234図〕

第4層黒褐色土面で確認された。直径約0.8mの円形を呈する。確認面からの深さ約1.8mで円筒状である。覆土は全般的に浅間B軽石を含むが、上層ほど混入が多く、下層は少ない。遺物はほとんど出土していないが、覆土に浅間B軽石を含むことから浅間B軽石降下以後に掘られた井戸であることがわかる。

4号井戸（2区）〔第228図・図版54（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。確認面では直径約1m、深さ85cm、底径約65cmである。壁は傾斜をもって掘り込まれており、底面より上方30cm以下では、袋状を呈している。覆土には全体的にC軽石が含まれており、またB軽石が含まれていないことから、本井戸はC軽石降下以後に掘られ、B軽石降下以前に埋没したものと考えられる。

なお遺物の出土は全くなかった。

5号井戸（2区）〔第229・234図・図版111（遺物）〕

第4層黒褐色土面で確認された。直径約1.6mの不整円形を呈する。掘り方は底面より上方80cmまでは比較的大きな傾斜をもって掘り込まれているが、それより下方はやや袋状を呈している。出土遺物としては、覆土中より土師器および須恵器の小片が若干ある。

6号井戸（2区）〔第229・234図・図版54（遺構）〕

第4層下層のローム層漸移層面で確認された。確認面ではやや歪んだ円形を呈し、底面は楕円形になる。断面形はほぼ円筒形状であるが、中位部分で、やや凹凸が見られる。確認面からの深さは、1.15mを測る。

覆土は、概ね粘質土のレンズ状堆積をしているが、中位下層では炭化粒子混入層がある。

遺物は、覆土中より弥生土器壺・甕・高杯の破片が出土した。

7号井戸（2区）〔第229図・図版55（遺構）・図版110（遺物）〕

第4層下位のローム層漸移層面で確認された。

平面形は、確認面で長軸2.1m、短軸1.75m、底部で長軸1.2m、短軸0.9mの楕円形で、中位にテラス状部分を持つ。確認面からの深さは1.1mである。

覆土中層には、2層の焼土及び炭化粒子混在層がある。そしてこれらの層より上の暗褐色粘質土中より、かなり多量の弥生土器が出土した。大形の壺・甕、小形の壺・甕、台付甕、高坏、小形鉢などが、いずれも上から流れこんで密集した状態で出土している。

本遺構は、形状より考えて井戸としたものであるが、少くも底部の機能が廃絶した時に焼土及び土器の流入が起きている。この流入は自然に起こったと考えるにはやや規模が大きく、いずれも人為的所産によるものであろう。ただ周辺には何の遺構も近接しないことから、本遺構の本来の機能とは別に起きたものと考えられる。

8号井戸（3区）〔第229図・図版55（遺構）〕

本井戸は、4号溝に切られている。底径1.2×1mの楕円形を呈し、確認面からの深さは約1mを測る。立ち上がりはほぼ垂直である。覆土は、暗褐色粘質土が主体であり、遺物の出土は全くなかった。

9号井戸（2区）〔第230図〕

第4層黒褐色土面で確認された。上面で直径約1.2mである。壁はやや傾斜をもって掘り込まれているが、掘り方は一様ではない。確認面より約70cm下方で、約40cmと径が急に小さくなり、下に行くにしたがい更に径は小さくなる。なお上面より1m75cm下方で発掘が不可能となり、中断した。

井戸中層にはコブシ大から人頭大の軽石が密集していた。出土遺物として土師器椀、須恵器杯、須恵器蓋等があるが、いずれも小破片である。

10号井戸（3区）〔第230図〕

本井戸は、4号溝に切られている。底径0.8mの不整円形を示し、確認面からの深さは、0.9mほどになる。立ち上がりはほぼ垂直で、遺物の出土は全くなかった。

11号井戸（1区）〔第230図・図版55（遺構）〕

第4層黒褐色土中において確認。直径東西1.6m、南北1.5m、深さ1.9mの規模をもつ。確認面より下方90cmまでは、傾斜をもって掘り込まれ、以下底面までの1m間はほぼ垂直に掘り込まれている。埋没土の堆積状況から、埋没は漸移的におこなわれ、また第1層にB軽石を含み、下層には全く含まれていないことから、B軽石降下時にはほぼ埋没していたものと考えられる。覆土第5層より、高杯の小破片が出土している。

12号井戸（2区）〔第230図〕

44号住床下の茶褐色粘質土面で確認された。44号住居址の張り床が上層にあるため、本井戸の方が古い。

第II章 検出された遺構と遺物

平面は径1.1mの円形で、確認面からの深さ0.8mを測る。断面形は円筒状で、遺物は全く出土していない。

13号井戸（1区）〔第230図・図版56（遺構）〕

直径東西1.7m、南北1.6m、深さ2.3mの規模をもつ。やや内側に傾斜をもって掘り込まれ、底面には皿状に一段深く掘り込まれた部分が存在する。覆土は浅間B軽石を多量に含み、特に最下層の第6層はB軽石の純層に近い。また最上層の第1層もB軽石が主体である。このことから、本井戸はB軽石降下前に掘られ、B軽石の降下とともに、人為的にB軽石をもって埋められたものと考えられよう。なお、出土遺物は皆無である。

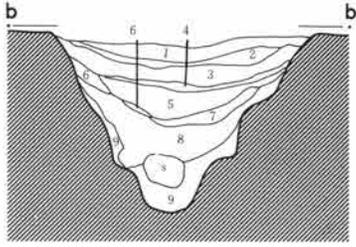
14号井戸（1区）〔第231図・図版56（遺構）〕

直径1.5m、深さ2.75mの規模をもつ。壁は傾斜をもって掘り込まれており、確認面より60cmまでは傾斜がやや大きい、それ以下は小さくなっている。底面は直径50cmで、平坦である。

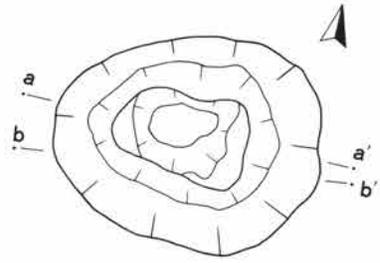
覆土は、ほぼ中間の第12層を境として上層には浅間B軽石を含んでいるが、下層には全く含まれていない。このことから、本井戸は浅間B軽石降下前に廃棄されていたものと考えることが出来る。なお出土遺物は皆無である。

15号井戸（3区）〔第231・233図・図版56（遺構）・図版110（遺物）〕

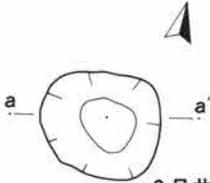
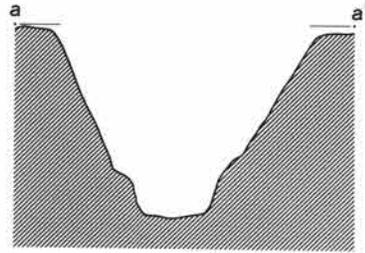
第4層黒褐色土面で確認された。16号溝と重複しており、本井戸の上部西半分は16号溝によって切られている。規模は上面で直径約1.2m、底面40cm、深さ1.15mである。傾斜をもって掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。覆土中（第4層）より甕上半部、覆土下層より甕の頸部の一部が出土している。なお本井戸の覆土には、浅間C軽石およびそれ以降の火山灰は全く含まれていない。このことから、本井戸はC軽石降下前に埋没していたものと考えられ、埋没時期は覆土中出土遺物の時期に近いものと考えられる。



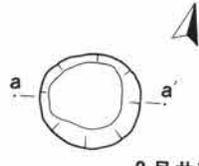
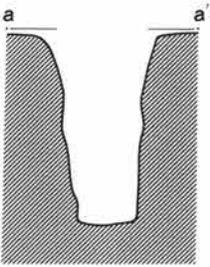
1. 黒褐色土 (C軽石を多量に含む)
2. 黒褐色土 (C軽石を少量含む)
3. 黒褐色土 (C軽石をやや多く含む)
4. 黒褐色土 (C軽石をわずかに含む)
5. 黒褐色土 (C軽石を含む)
6. 暗褐色土 (ロームを少量含む)
7. 暗褐色土 (ローム・C軽石を少量含む)
8. 黄褐色土・黒褐色土のラミナ状堆積
9. 黒褐色土 (灰色土を含む)



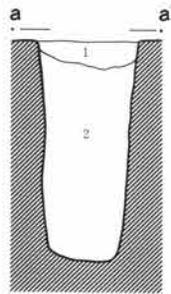
1号井戸



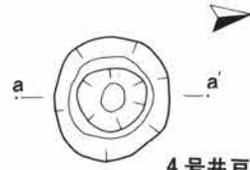
2号井戸



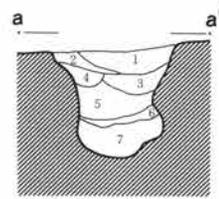
3号井戸



1. 暗褐色土 (B軽石を多量に含む)
2. 暗褐色土 (B軽石・ローム小ブロック・暗褐色土ブロックをやや多く含む)



4号井戸

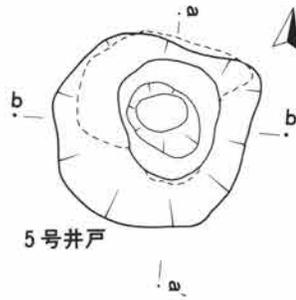
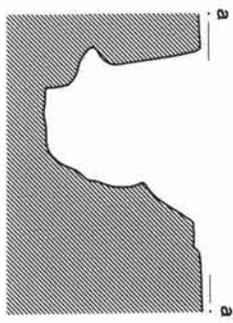


1. 暗褐色土 (C軽石を全体に含む)
2. 暗褐色土 (粘質・C軽石少量含む)
3. 暗褐色土 (粘質土ブロックを全体に含む)
4. 暗褐色土 (やわらかい)
5. 第2層に同じ
6. 暗褐色土
7. 暗褐色土 (粘質・C軽石少量含む)

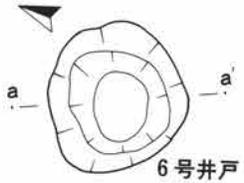


第228図 1・2・3・4号井戸

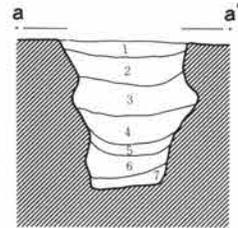
第II章 検出された遺構と遺物



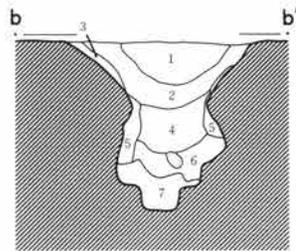
5号井戸



6号井戸

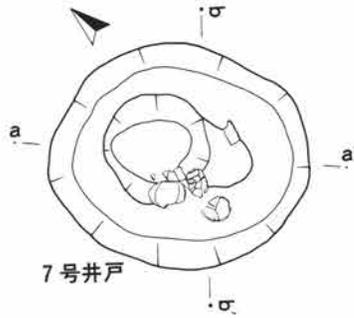
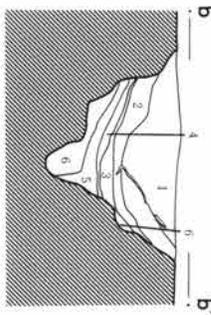


1. 暗褐色土 (粒子粗く、焼土・炭化物・C軽石を含む)
2. 暗褐色土 (粘性・C軽石含む)
3. 褐色土 (粘性・粒子細かい)
4. 暗褐色土 (粘性・C軽石含む)
5. 明黄褐色土 (粒子粗い)
6. 黒色土 (粒子細かい)
7. 灰色土 (黄褐色土をブロック状に含む)

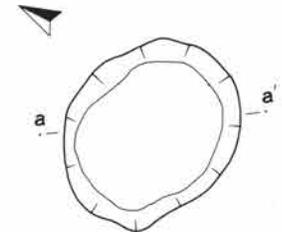


7号井戸

1. 暗褐色土 (ローム粒少量含む)
2. 暗褐色土 (粘性・含有物なし)
3. 暗褐色土 (ローム粒含む)
4. 暗褐色土 (粘性・ローム粒含む)
5. 暗褐色土 (炭化粒子を含む)
6. 暗褐色土 (ローム粒少量含む)
7. 淡褐色土 (粒子粗く鉄分を含む)

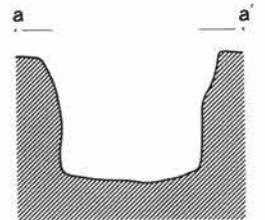
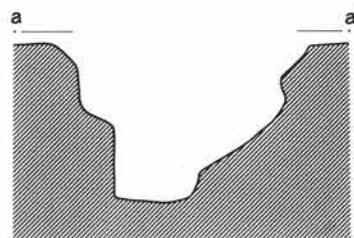


7号井戸



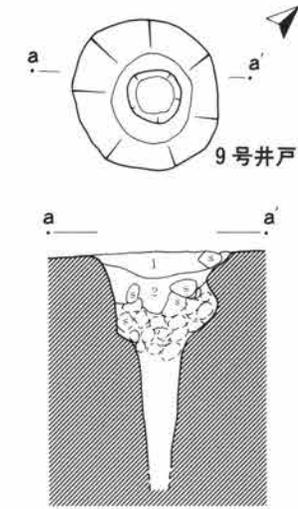
8号井戸

1. 暗褐色土 (粘性・含有物なし)
2. 暗褐色土 (粘性・白色小粒子含む)
3. 青褐色土 (炭化物と焼土の混合層)
4. 褐色土 (粘性・粒子細かい)
5. 焼土と炭化物がラミナ状
6. 黄褐色土 (ローム粒混合)

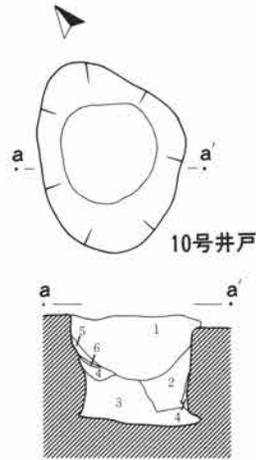


第229図 5・6・7・8号井戸

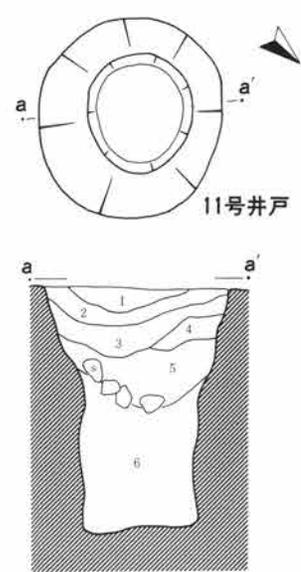
第9節 井戸



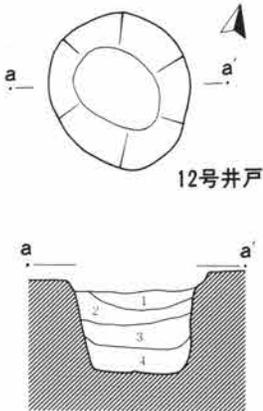
1. 暗褐色土 (粒子粗く、C軽石を含む)
2. 暗褐色土 (粒子細かく、粘性あり)



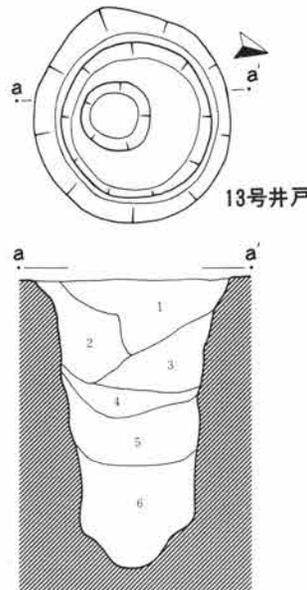
1. 暗褐色土 (粘質・粒子細かい)
2. 暗褐色土 (粘質・ローム粒含む)
3. 暗褐色土 (ローム粒をやや多く含む)
4. ローム主体・暗褐色土少量混合
5. 黄褐色土 (粘質)
6. 黒褐色土 (粘質)



1. 灰黄褐色土 (砂質・B軽石を少量含む)
2. 灰黄褐色土 (やや粘性・黄白色粘土塊を含む)
3. 暗褐色土 (砂質・粘性・含有物なし)
4. 暗褐色土 (砂質・暗褐色粘質土塊を含む)
5. 暗褐色土 (砂質・鉄分粒子を含む)
6. 褐色土 (粘性・ローム粒を含む)



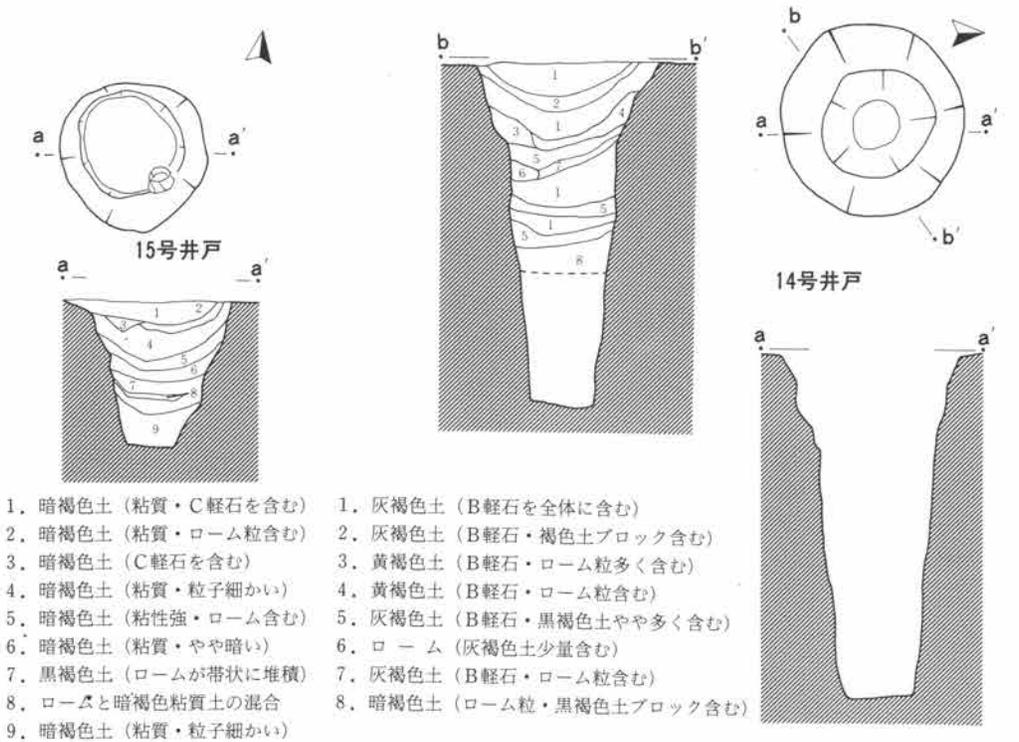
1. 褐色土 (粘性・ローム粒含む)
2. 暗褐色土 (粘性・含有物なし)
3. 黄褐色土 (粘性・ローム粒含む)
4. 黄褐色土 (粘性・ロームブロックを多く含む)



1. B軽石 (暗褐色土・ローム粒少量混入)
2. B軽石と暗褐色土・ロームブロックの混合
3. B軽石 (暗褐色土少量混入)
4. B軽石 (ローム小ブロックをやや多く含む)
5. B軽石 (ローム粒少量混入)
6. B軽石 (含有物ほとんどなし)

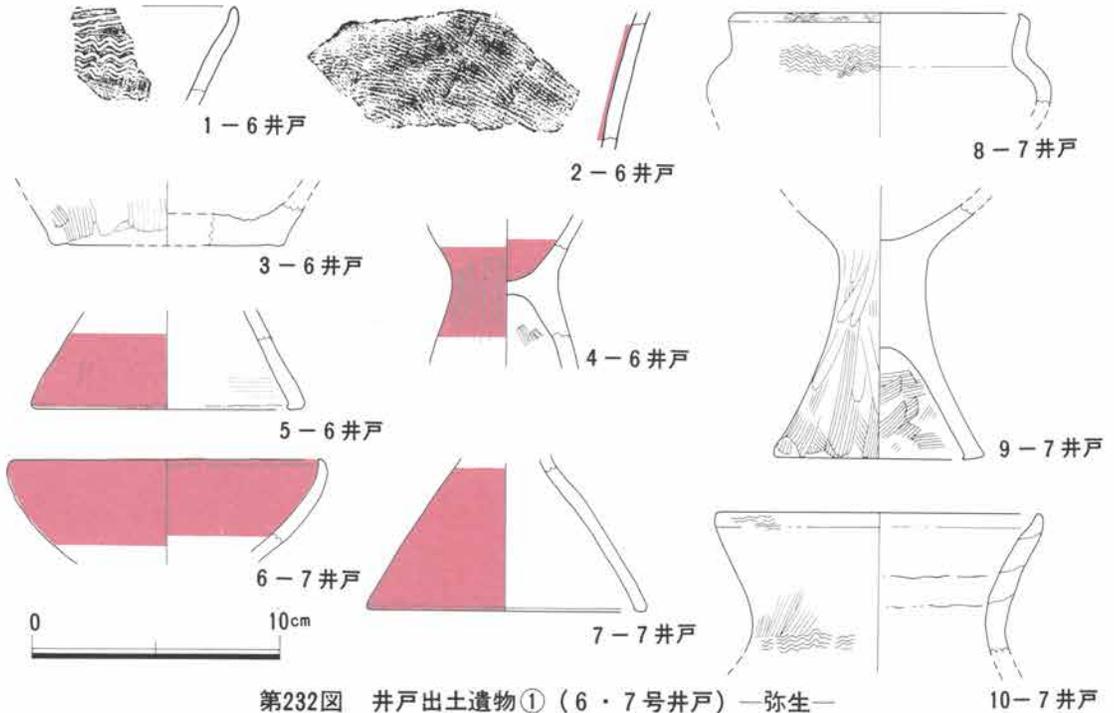


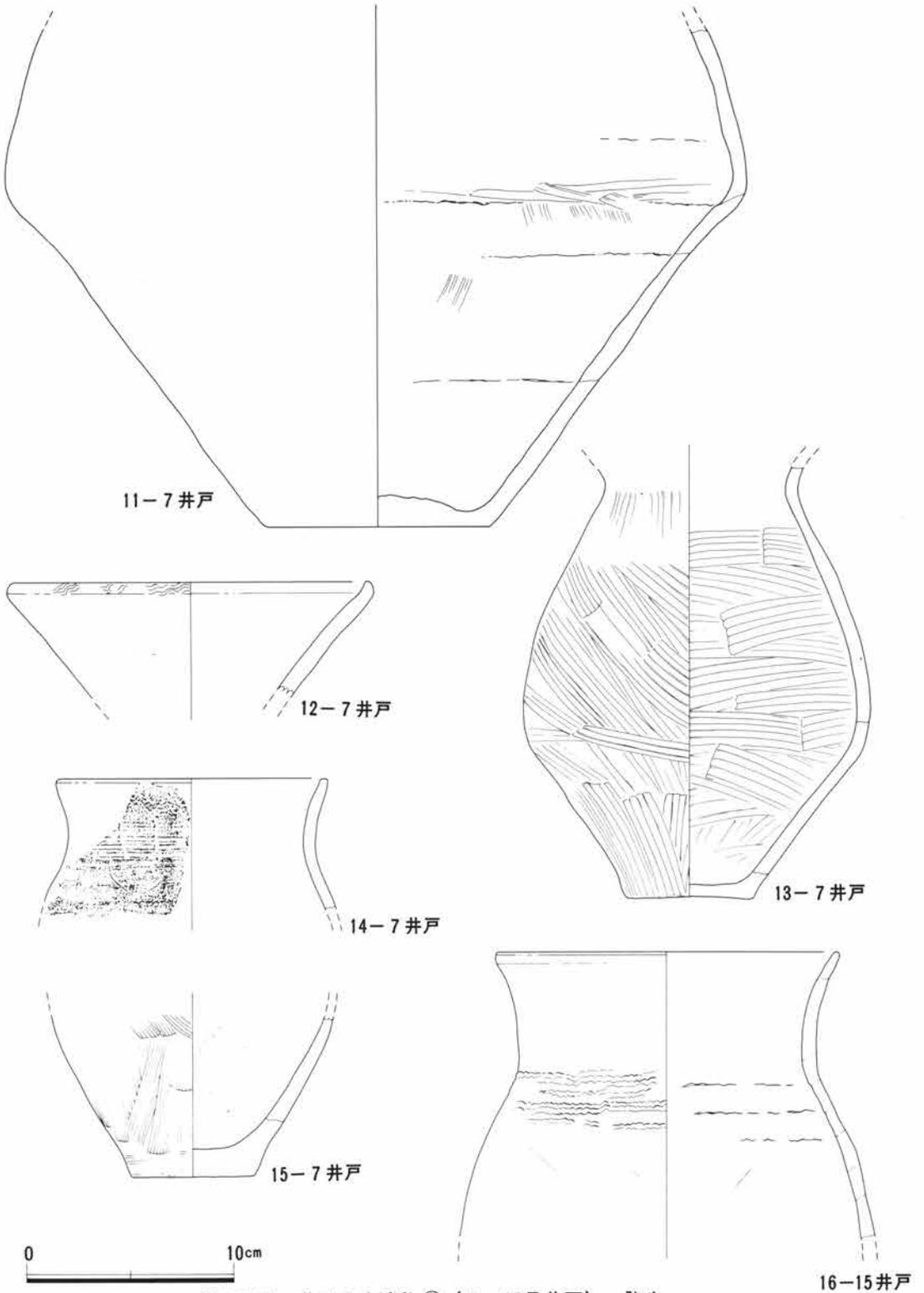
第230図 9・10・11・12・13号井戸



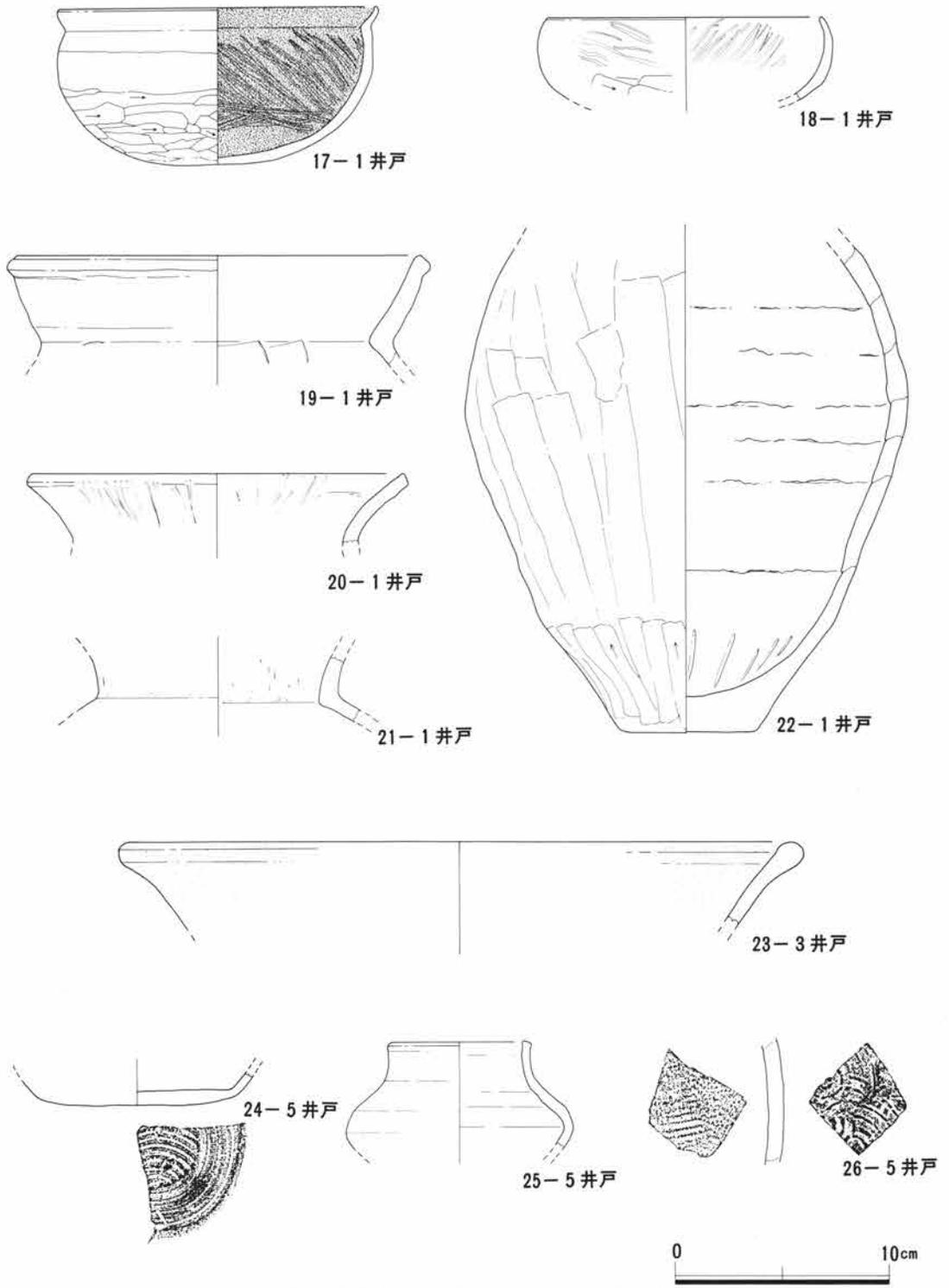
0 2 m

第231図 14・15号井戸

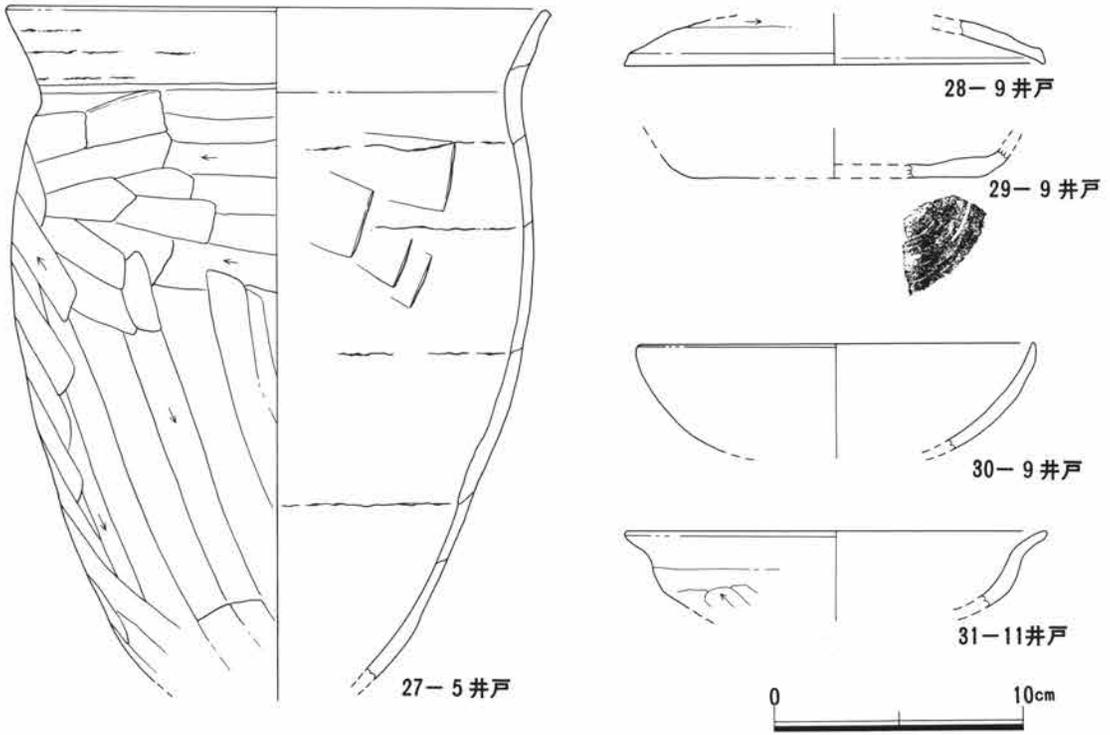




第II章 検出された遺構と遺物



第234図 井戸出土遺物③ (1・3・5号井戸) —古墳・古代—



第235図 井戸出土遺物④（5・9・11号井戸）—古代—

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備考
甕	6井覆土	1			外面ヨコハケ後5本単位の波状文。 内面ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成不良。にぶい赤褐色。スス付着。
壺	6井覆土	2		口縁部外反。	成形不明。外面ナナメハケメ。内面赤彩後ヨコヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。にぶい橙色。内面赤色。黒斑有。
壺	6井覆土 底部 $\frac{1}{2}$	3	底径 9.2		成形不明。外面タテハケメ。内面ヨコハケメ。	砂粒を含む。焼成良好、にぶい褐色底部外面黒斑。
高杯	6井覆土	4			成形不明。外面赤彩後タテヘラミガキ。杯部内面赤彩後ヘラミガキ。脚部内面指ナデ後タテハケメ。	砂粒含む。焼成良好。外面赤色。
高杯	6井覆土 脚部 $\frac{1}{2}$	5	底径 11.0	「ハ」の字状に開く。	成形不明。外面タテハケ後赤彩。内面ヨコハケメ。	砂・小石含む。焼成普通。外面赤色。
鉢	7井覆土 $\frac{1}{2}$	6	口径 12.4	内湾しながら開き、口唇部内傾。	成形不明。内外面赤彩後、ヨコヘラミガキ。	細砂粒少量含む。焼成良好。赤色。

第II章 検出された遺構と遺物

高 杯	7井覆土 脚部 $\frac{3}{4}$	7	底径 11.0	脚部「ハ」の字状に開く。	外面赤彩後タテヘラミガキ。内面ヨコ指ナデ。	粒子粗く砂粒少量含む。焼成良好。外面赤色。内面橙
小 型 甕	7井覆土 口縁 $\frac{1}{2}$	8	口径 12.2	胴最大径頸部直下、口縁部短い。	成形不明。外面ヨコ指ナデ後、頸部・口唇部波状文。	砂粒を含む。焼成良好。橙色。
台 付 甕	7井覆土 台部のみ	9	底径 8.5	台部「ハ」の字状に開く。	成形不明。外面ハケ調整後、タテヘラミガキ、内面ヨコハケ後、一部指ナデ。	砂粒少量含む。焼成良好。橙色。胴下部外面スス附着。
甕	7井覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$	10	口径 13.2		内面輪積痕。外面タテハケ後、口唇部・頸部波状文。内面ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成普通。灰褐色。外面タール附着。
壺	7井 35cm上 $\frac{1}{2}$	11	胴径 35.5 底径 10.5	胴下半直線的につぼまる。	内外面輪積痕。胴上半と下半の接合痕。内外面磨滅、調整不明。	砂・小石含む。焼成不良。明赤褐色。胴上半黒斑あり。
壺	7井覆土	12	口径 17.1	口唇部内傾。	成形不明。外面指ナデ後、口唇部波状文。	小砂粒を含む。焼成良好。灰白色。
壺	7井 47cm上 胴部のみ	13	胴径 16.5 底径 6.2	胴下半やや外反しながら中央部にいたる。	外面輪積痕。外面胴下半タテハケ・上半ナナメハケ後、頸部タテヘラミガキ。内面ヨコハケメ。	砂粒含む。焼成良好。にぶい橙色。
甕	7井覆土 口縁 $\frac{1}{2}$	14	口径 13.0	頸部ゆるやかにくびれる。	成形不明。外面指ナデ後、右まわり簾状文。内面ヨコヘラミガキ。	小石を含む。焼成良好。にぶい黄褐色。外面スス附着。
甕	7井覆土 胴下半 $\frac{1}{2}$	15	底径 6.0		成形不明。外面胴下半タテハケ後、中央付近ナナメハケメ。底部内外面指ナデ。胴部内面ヘラミガキ。	砂粒含む。焼成良好。赤褐色。外面スス附着。
甕	15井覆土 上半分	16	口径 16.5	頸部ゆるやかにくびれる。	内面輪積痕、胴部外面ナナメハケメ後、ヨコ指ナデ。頸部に波状文。内面ヨコ指ナデ。	砂粒少量含む。焼成良好。にぶい橙色。外面スス附着。

6・7・15井戸出土弥生土器観察表

器 種	出土位置 遺存状態	番号	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	成形・調整手法の特徴	備 考
椀 土 師 器	1井覆土 $\frac{3}{4}$	17	口径 14.8 器高 7.5	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反。口唇部やや内湾。	外面体部上半～口縁部横ナデ 底部～体部下半ヘラケズリ。 外面口縁部横ナデ。体部ヘラミガキ、暗文斜行。底部ナデ。	砂粒少量含む。焼成良好比較的硬質 外面明赤褐色。内面黒色。
杯 土 師 器	1井覆土 口縁小片	18		口縁部は内湾。	外面体部上半～口縁部横ナデ+ヘラミガキ、暗文斜行。 体部下半ヘラケズリ。内面体部～口縁部横ナデ+ヘラミガキ、暗文斜行。	砂粒少量含む。焼成良好硬質。橙色。

第9節 井 戸

甕 土師器	1井覆土 口縁部 $\frac{1}{2}$	19		口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部直下に段がある。	外面口縁部横ナデ。内面口縁部横ナデ。頸部ヘラケズリ。	砂粒を含む。焼成良好硬質。橙色。
甕 土師器	1井覆土 口縁小片	20		口縁部は強く外反。	内外面口縁部は横ナデ+ミガキ、暗文直行。	砂粒を含む。焼成良好。比較的硬質。橙色。
壺 土師器	1井覆土 頸部小片	21		口縁部「く」の字状に外反。	内外面口縁部横ナデ+ミガキ暗文斜行。	砂粒を含む。焼成良好硬質。橙色。
甕 土師器	1井覆土 体部～底部	22	底径 7.0	底部からゆるやかに外反。胴部上半で内湾する。	輪積痕。外面胴部ヘラケズリ内面粗いナデ。	砂粒を多く含む。焼成良好硬質。橙色。外面に黒斑。
鉢 山茶碗	3井覆土 口縁小片	23		口唇丸みを持ち、内面に弱い稜。強く外傾する口縁から直線状の体部に滑らかに移る。	外面口縁・頸部ヨコナデ。内面ヨコナデ。内外面とも自然釉。	雲母・砂粒多く含み気泡あり。硬質還元。灰色。
杯 須恵器	5井覆土 底部 $\frac{1}{4}$	24		平底。稜なく体部外傾。	底部右回転糸切り後、周縁右回転ヘラ削り調整。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
小型 須恵器	5井覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	25	口径 6.6 胴径 10.6	口縁短かく直立。頸部大きく外反し胴中位強く張る。	内外面回転横ナデ。	砂粒少い。還元やや硬質。灰色。
甕 須恵器	5井覆土 胴部小片	26		全体に緩く内反。	外面格子状叩キ痕。内面青海波状アテ痕。	砂粒含む。還元やや硬質。灰色。
甕 土師器	5井底面 $\frac{1}{2}$ 残存	27	口径約21.6 胴径約21.0	口縁僅かに外傾。頸部直立ぎみ。胴部緩く内反し直線状垂下。口径歪む。器壁薄い。	口縁内外面横ナデ。頸部ヘラナデ。胴上位・下位ヘラ削り。内面輪積痕後ナデ。	砂粒含む。酸化やや硬質。にぶい橙内外面スス付着。
蓋 須恵器	9井覆土 端部小片	28	口径 16.0	端部緩い稜をもって外傾し、内面で身受けになる。	内外面回転横ナデ。頸部回転ヘラ削り。	砂粒含む。還元硬質。灰色。
杯 須恵器	9井覆土 底部小片	29	底径 11.5	平底。稜緩く体部外傾。	底部体部右回転ヘラ削り調整。	砂粒含む。酸化後還元硬質。灰色。
碗 土師器	9井覆土 口縁小片	30		口縁短かく内反ぎみに直立。体部大きく内反し深い。	口縁内外面横ナデ。体部外面ナデ。	砂粒含む。中性後酸化やや硬質。にぶい橙色。
高杯 土師器	11井覆土 口縁小片	31		口縁部は「く」の字状に外反する。	外面体部下半ヘラケズリ。体部上半～口縁部横ナデ。内面体部～口縁部横ナデ。	砂粒含み硬質。焼成良好。橙色。

第10節 土 坑

1号土坑（4区）〔第236図・図版57（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は長径15m、短径1.15mの長円形を呈する。確認面からの深さは約20cm、壁は傾斜をもって掘り込まれている。出土遺物はないが、覆土にC軽石をわずかに含み、またB軽石を含んでいないことから、C軽石降下後につくられ、B軽石降下前に埋没したものと考えられる。

2・3号土坑（4区）〔第236・244図・図版112（遺物）〕

第4層黒褐色土面で確認された。ともに風倒木痕と考えられる落ち込みの埋没面上に半分ほど重複してつくられている。重複部分では、平面的に本土坑を確認することは困難であった。

2号土坑は直径約1m、深さ30cmの円形で、掘り方は皿状を呈している。覆土中に浅間C軽石を含んでいることから、C軽石降下後につくられたと考えることが出来る。なお覆土中より弥生土器の小破片が少量出土している。

3号土坑は長径2.05m、短径1.35mの楕円形を呈する。深さは約25cmで、底面にはやや凹凸がある。覆土中より、壺形土器の胴下半部が出土している。本土坑も2号土坑同様、覆土中に浅間C軽石を含んでいることから、C軽石降下後の遺構であると考えることが出来る。

5号土坑（4区）〔第236図〕

第4層黒褐色土下面で確認された。規模は長辺2.5m、短辺65cmで、平面形は長方形を呈する。確認面からの深さは約30cmで、覆土にはロームブロックを含んでいる。遺物は出土していない。

6号土坑（4区）〔第236図〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は長径75cm、短径50cmで、平面形は楕円形を呈する。確認面からの深さは約25cmで、底面は平坦である。遺物は出土していない。覆土中に浅間C軽石およびそれ以後の軽石を含んでいないことから、C軽石降下以前の遺構であると考えられる。

7号土坑（4区）〔第236図〕

第4層下面のローム漸移層で確認された。11号住居址と重複しているが、覆土の相違により、本土坑の方が新しい。しかし時間差はほとんどないものと考えられる。

規模は長径1.75m、短径1.5mで楕円形である。確認面からの深さは約15cmで、底面は皿状を呈している。遺物は出土していないが、覆土に少量の浅間C軽石を含んでおり、C軽石降下後の遺構であると考えられる。

8号土坑（4区）〔第236図〕

13号住居址の覆土中で確認された。覆土の相違により、本土坑の方が新しい。規模は長辺1.8m、短辺85cmで、長方形を呈する。確認面からの深さは35cm、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。覆土は斑状にローム粒子を含んだ黄灰色土の単一層で、遺物は含まれていない。

9号土坑（4区）〔第237図・図版57（遺構）〕

13号住居址の覆土中で確認された。13号住居址より新しいが、10号溝との新旧関係は不明である。

10号溝の調査が先行したため、図のような半円形の形状しか判明しなかったが、直径1.1mほどの円形が当初のプランと思われる。確認面からの深さは、約35cmあり、急傾斜な立ち上がりを見せる。底面は比較的平坦である。

覆土は暗褐色粘質土が主体で、遺物の出土はなかったが、10号溝とそれほど離れない時期のものと思われる。

11号土坑（3区）〔第237・247～249図・図版57（遺構）・図版114（遺物）〕

20号住居址の覆土中で確認。覆土の相違により、本土坑の方が新しい。規模は径2.0m～2.4mで、不整形円形を呈する。確認面からの深さは約40cm、底面は皿状を呈し、部分的に凹凸もある。本土坑南東部分で短径95cmの楕円形を呈し、底面がさらに40cm深くなった部分がある。

出土遺物として、覆土中より須恵器短頸壺、須恵器杯、瓦片があるが、大部分覆土第1層中からの出土である。

13号土坑（2区）〔第237図〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は長辺2.65m、短辺0.85mで、長方形を呈する。確認面からの深さは約15cmで、壁はやや傾斜をもって掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。覆土に浅間B軽石を含んでいることから、B軽石降下以後の遺構であろう。本土坑に伴うと考えられる出土遺物はない。

14号土坑（2区）〔第237図〕

第4層黒褐色土下面で確認された。直径約80cmの円形を呈する。確認面からの深さは約10cm、底面は平坦である。覆土には浅間B軽石が含まれており、B軽石降下後の遺構である。遺物は全く出土しなかった。

15号土坑（2区）〔第237図〕

第4層黒褐色土面で確認された。36号住居址、48号住居址と重複する。新旧関係は覆土の相違により、本土坑の方が新しいが、大きな時間差はないものと考えられる。

規模は長辺約1.9m、短辺約1.5mで、平面形は中央はやや括れた隅丸長方形を呈するが、南東部分はやや深くなっている。確認面からの深さは西側で約15cm、東側で約50cmである。覆土に浅間C軽石を含んでいることから、C軽石降下後の遺構である。遺物は出土していない。

16号土坑（2区）〔第237図〕

第4層黒褐色土面で確認された。34号住居址を一部切っている。規模は直径約80cm、深さ40cmで、平面形は不整形円形を呈する。出土遺物は無く、時期は不明である。

17号土坑（2区）〔第237図・図版58（遺構）〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は直径90cm～95cm、確認面からの深さは42cmである。平

第II章 検出された遺構と遺物

面形は円形を呈する。壁はやや傾斜をもって掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。本土坑に伴なうと考えられる遺物はない。覆土に浅間C軽石が含まれていることから、C軽石降下後の遺構である。

18号土坑（2区）〔第238・250図〕

第4層黒褐色土面で確認された。36号住居址と重複するが、新旧関係は覆土の相違により、本土坑の方が新しい。規模は長辺約2m、短辺約0.7mで、平面形は隅丸長方形乃至長円形を呈する。確認面からの深さは約5cmであり、上面は大部分壊されているものと推定している。遺物は、覆土中より土師器杯、甕の破片が出土している。

19号土坑（2区）〔第238・250図〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は一辺が約1.2mで、平面形は隅丸方形を呈する。確認面からの深さは約10cmであり、上面は大部分が壊されているものと推定している。遺物は、土師器杯片が覆土中より出土している。

20号土坑（3区）〔第238・244図・図版58（遺構）〕

21号住居址の床面付近で確認された。21号住居址の柱穴を切ってつくられている。確認面での規模は直径約90cm、深さ70cmで、ほぼ円形を呈する。掘り方は底面から40cm上方までは、皿状の傾斜をもって掘り込まれているが、それより下は垂直に近い掘り方となり、底面は平坦である。

覆土中より弥生土器小片が発見されており、覆土中に浅間C軽石が含まれていないことから、C軽石降下以前に埋没したものと考えられる。

22号土坑（2区）〔第238・244・245図・図版58（遺構）・図版112（遺物）〕

第4層下面において確認された。規模は直径90～95cm、深さ80cmで、やや袋状を呈する部分もある。底面より約10cm上方で弥生壺形土器片多数が確認された。なお本土坑は井戸である可能性がある。

23号土坑（2区）〔第238図〕

本土坑は、第4層黒褐色土面で確認された。3号掘立と重複するが新旧関係は不明である。

平面は、65×65cmの方形状で、底には底径8cmのピットがある。確認面からの深さは30cmである。覆土は、浅間B軽石混じりの褐色土で、遺物は出土していない。

25号土坑（2区）〔第238・25図・図版59（遺構）・図版116（遺物）〕

第4層黒褐色土下のローム漸移層で確認された。規模は直径約30cm、深さ85cmで、確認面より約20cmまでは垂直に掘り込まれており、それより下は袋状を呈している。覆土中からは、多くの榛名山ニツ岳軽石とともに、土師器甕、杯の小片が若干発見されている。

27号土坑（2区）〔第239・245図・図版59〕

第4層黒褐色土面で確認された。34号住居址、35号住居址が本土坑の埋没面上につくられている。規模は推定で長径2.7m、短径2m、深さ約10cmで、不整楕円形を呈している。遺物は、覆土中より弥生土器の小破片が出土している。

28号土坑（1区）〔第239図〕

第4層黒褐色土中において確認。50号住居址の埋没面上に存在し、壁・床面の一部を切っている。長辺2.15m、短辺0.95m、深さ15cmの規模をもつ。壁は傾斜をもって立ちあがり、底面はほぼ平坦である。

出土遺物は皆無である。覆土はすべてB軽石と暗褐色粘質土の混合であり、B軽石降下後に掘られたものと考えられる。

29・30号土坑（1区）〔第239図〕

29号土坑は直径約90cm、深さ15cm、30号土坑は直径約80cm、深さ10cmの規模をもつ。共に浅い皿状を呈す。確認面においては、互に壁を接するという状況であるが、本来は重複していたものと考えられる。新旧関係については、確認面での重複関係が存在しないため不明である。

埋没土は、29号土坑は浅間B軽石は主体として暗褐色土が若干混合、30号土坑はB軽石と暗褐色土ブロックが混合している。底面との間にB軽石を含まない間層が存在しないことから、B軽石降下後の遺構と考えられる。なお出土遺物は皆無である。

31号土坑（1区）〔第239・250図・図版59（遺構）・図版116（遺物）〕

長径1.5m、短径1.05m、深さ10cmの規模をもち、隅丸長方形を呈する。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、底面は平坦である。覆土はB軽石が主体で、暗褐色土が30%程度混合する。

覆土中より常滑焼大甕の破片が出土している。胴下半部の破片で約30%、底面より6cm以上上方に不規則に散乱している。本土坑は、暗褐色土を含んだB軽石と底面との間に、B軽石を含まない間層が存在しないことから、B軽石降下後に掘られたものと考えられる。

32号土坑（1区）〔第239図〕

直径東西1m、南北90cm、深さ20cmの規模をもつ。壁は傾斜をもって掘り込まれ、底面は平坦である。暗褐色土が若干混入したB軽石により埋没している。B軽石と底面との間に間層が存在しないことから、B軽石降下後に掘られたものと考えられる。

33号土坑（1区）〔第239図〕

1辺約1.75mの不整隅丸方形を呈する。壁は傾斜をもって立ちあがる。底面は傾斜しており、東壁付近で深さ10cm、西壁付近で深さ20cmとなる。

底面には、約5cmの厚さで焼土・炭化物・灰を含んだ黒褐色土が堆積している。しかし、その性格については明らかにし得なかった。出土遺物として、覆土中より土師器細片がわずかに出土しているが、時期不明。覆土中に浅間B軽石を含まないことから、B軽石降下前の遺構であると考えられる。

34号土坑（1区）〔第239図〕

直径東西1.25m、南北1.35m、深さ25cmの不整円形である。壁は傾斜をもって立ち上がっているが、その角度については一様ではない。底面にはやや凹凸がある。出土遺物は皆無である。覆土中にB軽石を含まないことから、B軽石降下前の遺構であると考えられる。

第II章 検出された遺構と遺物

35号土坑（1区）〔第239・245図〕

第4層黒褐色土面で確認された。2号特殊井戸と重複し、確認時の覆土状態により、本土坑が古い。

平面は、2.2m×1.6mの長方形で、確認面からの深さは20cm、底面はやや凹凸がある。

覆土中より弥生土器甕が出土している。

36号土坑（1区）〔第239図〕

第4層黒褐色土面で確認された。

平面1.8m×1.0mの長方形である。確認面からの深さは20cmで、底面はやや凹凸がある。遺物は、土師器小片が覆土中に見られただけである。

37号土坑（1区）〔第240・245図〕

第4層黒褐色土面で確認された。

平面0.9m×0.8mの楕円形状で、確認面からの深さは25cmである。覆土上層の暗褐色粘質土の下には、炭化粒子、焼土混在層が見られる。

遺物は、弥生土器壺・高杯が覆土中より出土した。

38号土坑（1区）〔第240図〕

第4層黒褐色土面で確認された。6号掘立と重複するが、本土坑底面で6号掘立柱穴が確認されたため、本土坑が新しい。また39号土坑が南側に近接する。

平面1.5m×0.6mの長方形で、確認面からの深さは20cmである。覆土は浅間B軽石まじりの暗褐色砂質土で、遺物は出土していない。

39号土坑（1区）〔第240・246図〕

6号掘立と同面で確認された。6号掘立と重複し、同掘立欄既述のように、本土坑が古いと思われる。

底径1.1mの円形を呈し、確認面からの深さは15cmである。底面は均一である。

遺物は、覆土中より弥生土器甕が出土している。

40号土坑（1区）〔第240図〕

第4層黒褐色土中において確認。直径約1.4m、深さ約30cmの規模をもつ。壁はやや傾斜をもって立ちあがっているが、一様ではない。底面には凹凸がある。時期を決定するにあたり、出土遺物は皆無であるが、覆土に浅間C軽石を含み、またB軽石は含まれていないことから、C軽石降下後で、B軽石降下前の遺構であると考えられる。

41号土坑（1区）〔第240図〕

第3層C軽石を含む黒褐色土中において確認。直径約1m、深さ30cmの規模をもつ。壁はわずかに傾斜をもって立ちあがり、底面は平坦である。土坑内は、暗褐色土を若干含むB軽石の単純層であり、出土遺物は皆無である。B軽石と底面との間に、B軽石を含まない間層が存在しないことから、B軽石降下以降に掘られたものと考えられる。

42号土坑（1区）〔第240図〕

第4層黒褐色土中において確認。直径約1.1m、深さ15cmの不整円形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、西側がわずかに低くなっている。土坑内は、暗褐色土を若干含むB軽石の単純層であり、出土遺物は皆無である。B軽石と底面との間に、B軽石を含まない間層が存在しないことから、B軽石降下以降に掘られたものと考えられる。

43号土坑（1区）〔第240図・図版60（遺構）〕

第4層黒褐色土中において確認。直径90cm、深さ20cmの規模をもつ。壁はわずかに傾斜をもって立ち上がり、底面はやや凹凸がある。土坑内は、暗褐色土を若干含むB軽石の単純層であり、出土遺物は皆無である。B軽石と底面との間に、B軽石を含まない間層が存在しないことから、B軽石降下以降に掘られたものと考えられる。

44号土坑（1区）〔第240図〕

第3層C軽石を含む黒褐色土中において確認。西側の一部は調査区域外である。規模は直径約1m、深さ10cmである。壁はわずかに傾斜をもって立ち上がり、底面は平坦である。土坑内は、暗褐色土を若干含むB軽石の単純層であり、出土遺物は皆無である。B軽石と底面との間に、B軽石を含まない間層が存在しないことから、B軽石降下以降に掘られたものと考えられる。

45号土坑（1区）〔第240図〕

直径約75cm、深さ35cmの規模をもつ。壁は傾斜をもって立ち上がっているが、上方にいくにしたがい垂直に近くなる。出土遺物は皆無である。覆土に浅間B軽石を含んでいないことから、B軽石降下前の遺構と考えられる。

50号土坑（1区）〔第241図〕

直径約80cm、深さ13cmの規模をもつ。壁はやや傾斜をもって立ち上がり、底面は平坦である。出土遺物はない。

51号土坑（1区）〔第241図〕

第4層下位のローム層漸移層面で確認された。

平面は径1.1mの円形で、確認面からの深さ20cmを測り、底面は平坦である。覆土は、浅間C軽石まじりの黒褐色土で、遺物は全く出土していない。

52号土坑（1区）〔第241図・図版60（遺構）〕

第4層黒褐色土面にて確認された。規模は直径約1.2m、深さ70cmで、円形を呈する。掘り方は一様ではない。出土遺物は無く時期は不明であるが、覆土中に浅間B軽石が含まれていないことから、B軽石降下前と考えられる。

53号土坑（1区）〔第241図〕

第4層黒褐色土面にて確認された。規模は長径80cm、短径40cm、確認面からの深さ18cmで、不整楕円形を呈している。ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。出土遺物はない。

54号土坑（1区）〔第241図・図版60（遺構）〕

第II章 検出された遺構と遺物

第4層黒褐色土面で確認された。規模は長辺1m、短辺0.8m、深さ30cmである。壁は傾斜をもって掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。覆土中に浅間C軽石が含まれていることから、C軽石降下後の遺構である。遺物は全く発見されなかった。

55号土坑（1区）〔第241図〕

第4層黒褐色土面にて確認された。長辺1.1m、短辺0.6m、深さ約20cmで、不整隅丸長方形を呈する。壁は傾斜をもって掘り込まれ、底面は平坦である。出土遺物はない。

57号土坑（2区）〔第241図〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は直径77cm～80cm、深さ25cmで、不整円形（5角形状）を呈している。遺物は出土していない。

58号土坑（2区）〔第241図〕

第4層黒褐色土中にて確認された。規模は長辺1.2m、短辺0.85m、深さ45cmで、不整形を呈する。出土遺物はない。

59号土坑（2区）〔第241図・図版61（遺構）〕

規模は直径1.1m、深さ約30cmで、円形を呈する。出土遺物は皆無である。

60号土坑（2区）〔第242図〕

第4層黒褐色土面で確認された。規模は長辺1.7m、短辺0.55m、深さ10cmで、不整長方形を呈する。壁はやや傾斜をもって掘り込まれ、底面は平坦である。出土遺物はない。

61号土坑（2区）〔第242図・図版61（遺構）〕

長径約80cm、短径60cmの不整形を呈す。深さ約20cm、壁はやや傾斜をもって立ちあがり、底面は中央部がくぼんでいる。出土遺物は皆無である。覆土第2層に浅間C軽石を多く含むが、最下層の第3層にはC軽石は全く含まれていないことから、C軽石降下以前に掘られたと考えられる。

63号土坑（3区）〔第242図〕

第4層黒褐色土面にて確認された。16号溝と近接または重複するが、新旧関係は不明である。確認面からの深さ約10cm、不整形を呈している。出土遺物はない。

64・65号土坑（3区）〔第242図・図版61（遺構）〕

第4層黒褐色土中において確認。重複関係にあると推定されるものの、覆土による層位の状態では新旧関係不明。64号土坑は短辺が0.7mであるが、長辺は不明、65号土坑は短辺1m、長辺2.4mである。覆土はともにB軽石を全体に含み、分層は不可能で第1層の表土層に類似する。出土遺物は皆無である。

66号土坑（2区）〔第242図〕

第4層黒褐色土面にて確認された。東側部分は攪乱のために消滅している。規模は短辺50cm、深さ約10cmで、隅丸長方形を呈すると考えられる。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。遺物は出土していない。

68号土坑（4区）〔第242・246図・図版62（遺構）〕

規模は直径1m～1.2m、深さ18cmで、円形を呈する。覆土に多量の炭化物を含んでいる。覆土中より弥生土器片出土。

69号土坑（4区）〔第243・246図・図版62（遺構）〕

規模は直径1.3m～1.5m、深さ約15cmで、円形を呈する。遺物は、底面で甕、高杯の破片が確認され、その上に灰と炭化物で全面覆われていた。

70号土坑（4区）〔第243・246図・図版62（遺構）・図版113（遺物）〕

規模は直径1m、深さ15cmで、円形を呈する。遺物は、中央部底面よりほぼ完形の壺が横に倒れた状態で出土し、土器の下面で焼土を確認した。

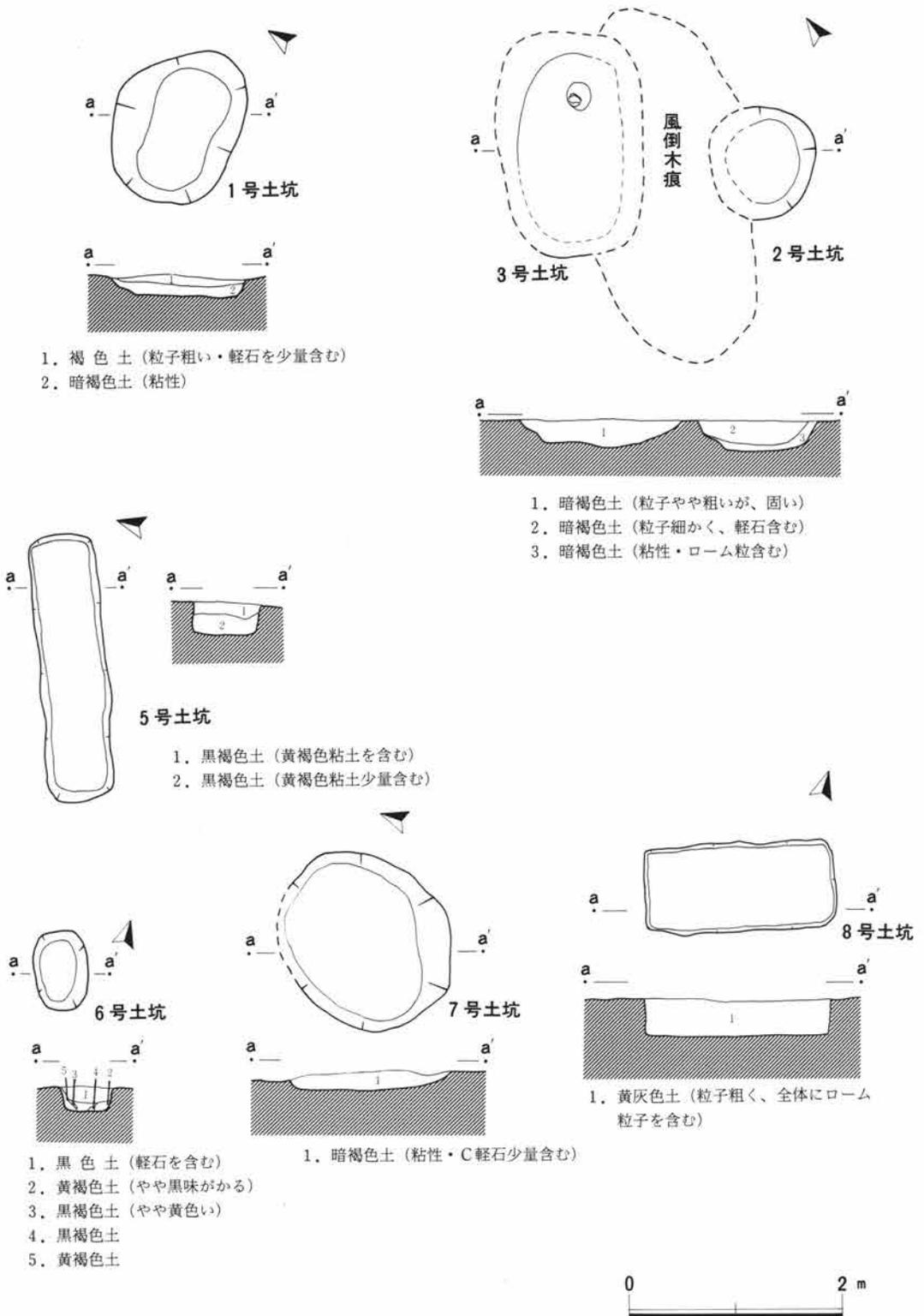
71号土坑（4区）〔第243・246図〕

第4層黒褐色土面で確認された。遺物が確認面より上方に存在したため、土坑の掘り込みは更に上方からであると考えられる。規模は直径68cm～70cm、深さは約12cmで、円形プランを呈する。壁は緩かな傾斜をもち、底面はほぼ平坦である。覆土中より弥生甕形土器が出土している。

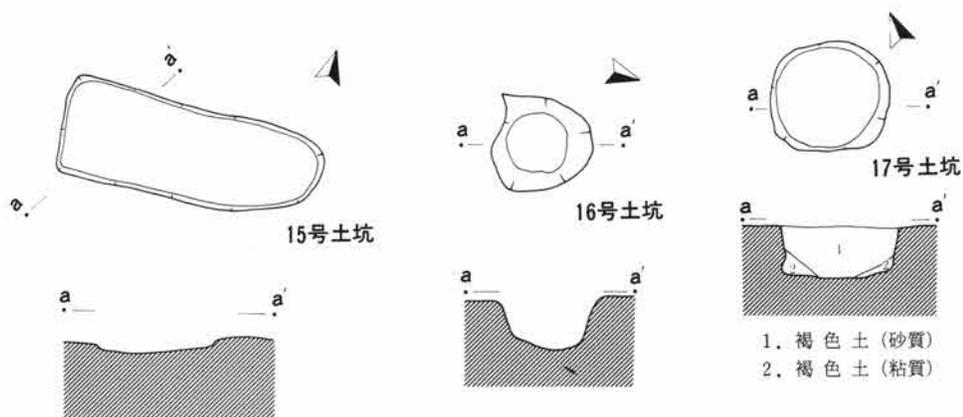
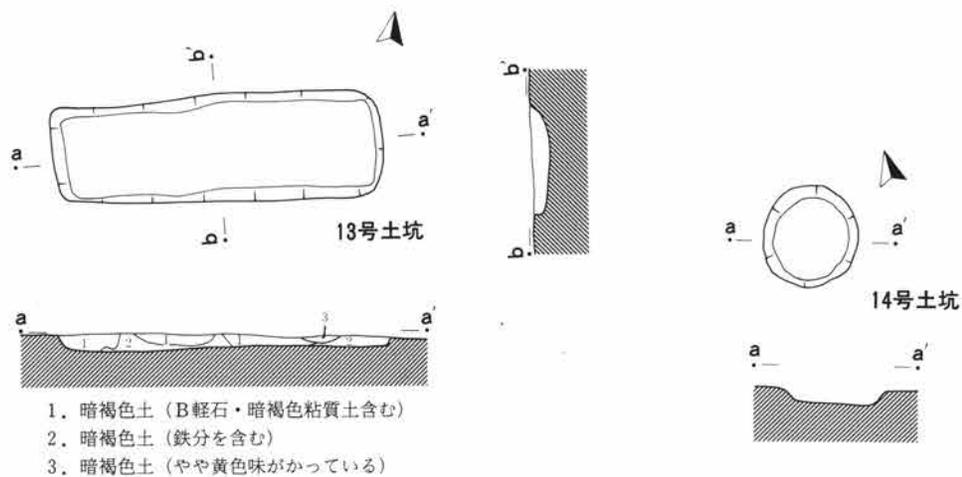
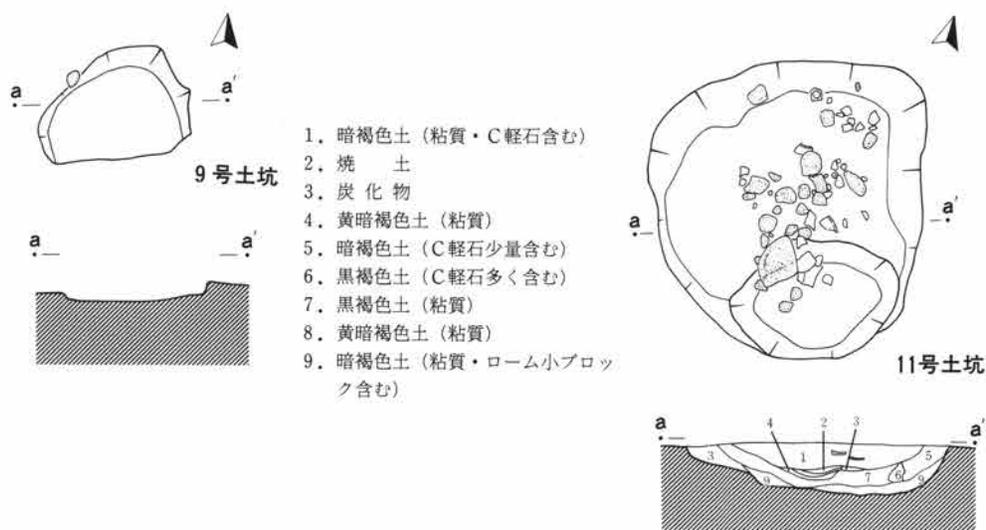
72号土坑（4区）〔第243図〕

第4層黒褐色土中で71号土坑と近接して検出された。規模は直径1.0m～1.2m、深さ約25cmで、円形を呈する。壁は直立に近く、底面はほぼ平坦である。遺物は全く出土していない。

第II章 検出された遺構と遺物



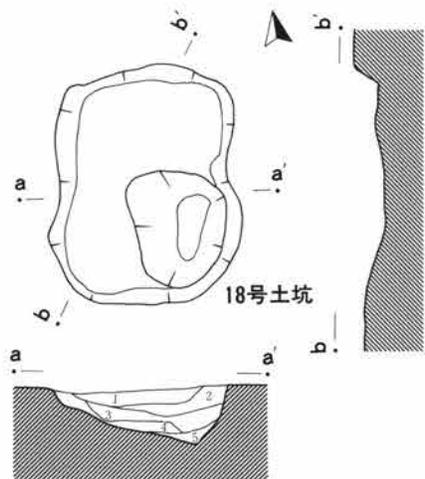
第236図 1・2・3・5・6・7・8号土坑



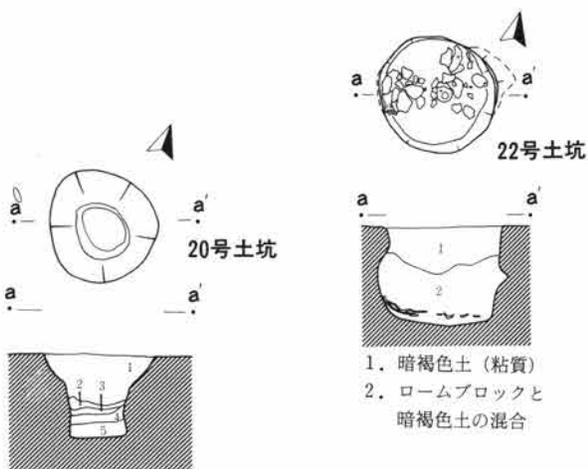
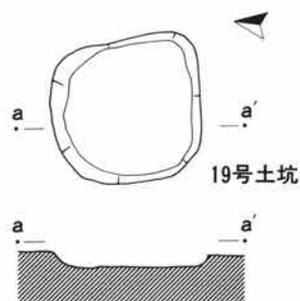
第237図 9・11・13・14・15・16・17号土坑



第II章 検出された遺構と遺物

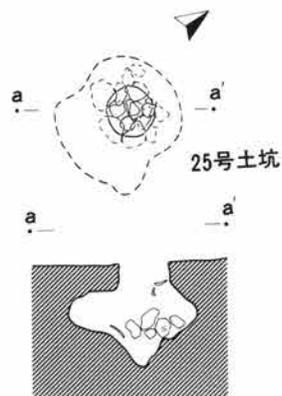
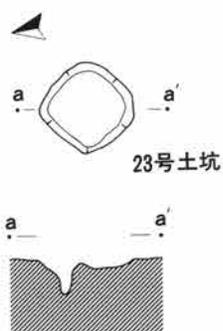


1. 褐色土 (C軽石・焼土粒含む)
2. 褐色土 (C軽石を少量含む)
3. 褐色土 (大粒のC軽石・少量の炭化物・焼土粒を含む)
4. 褐色土 (黄色土混合)
5. 褐色土 (大粒のC軽石・黄色土ブロック含む)

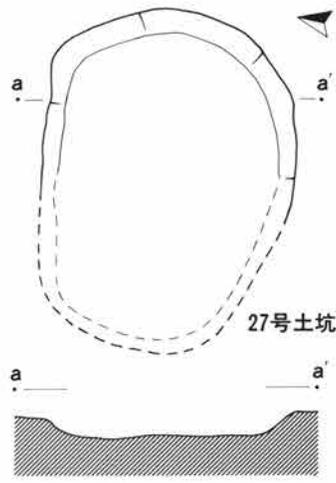


1. 暗褐色土 (粘質・C軽石を少量含む)
2. 灰層
3. 暗褐色土 (粘質・ローム粒を含む)
4. 褐色土 (粘質・しまっている)
5. 暗褐色土 (粘質・しまっている)

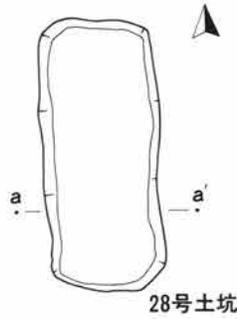
1. 暗褐色土 (粘質)
2. ロームブロックと暗褐色土の混合



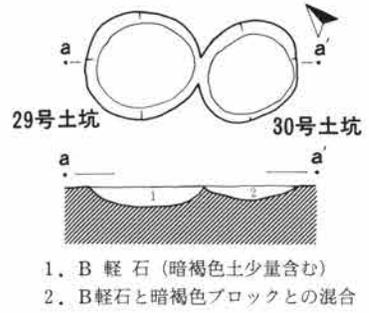
第238図 18・19・20・22・23・25号土坑



27号土坑



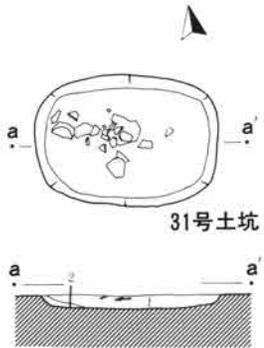
28号土坑



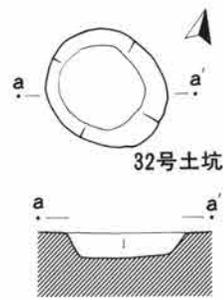
29号土坑

30号土坑

1. B 軽石 (暗褐色土少量含む)
2. B 軽石と暗褐色ブロックとの混合

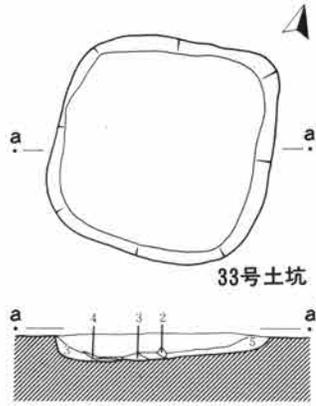


31号土坑



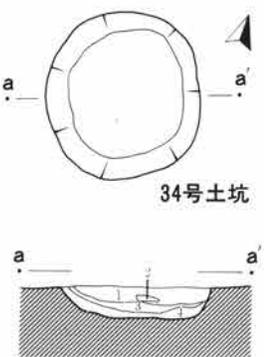
32号土坑

1. B 軽石 (暗褐色土少量含む)

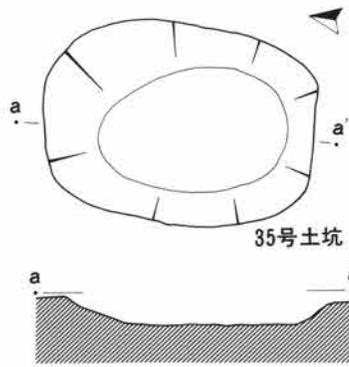


33号土坑

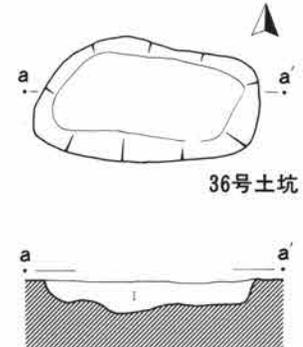
1. 暗褐色土 (粘質・ローム粒含む)
2. ロームブロック
3. 暗黄褐色土 (ローム粒全体に混合)
4. 灰 層
5. 黒褐色土 (焼土・炭化物・灰を含む)



34号土坑



35号土坑



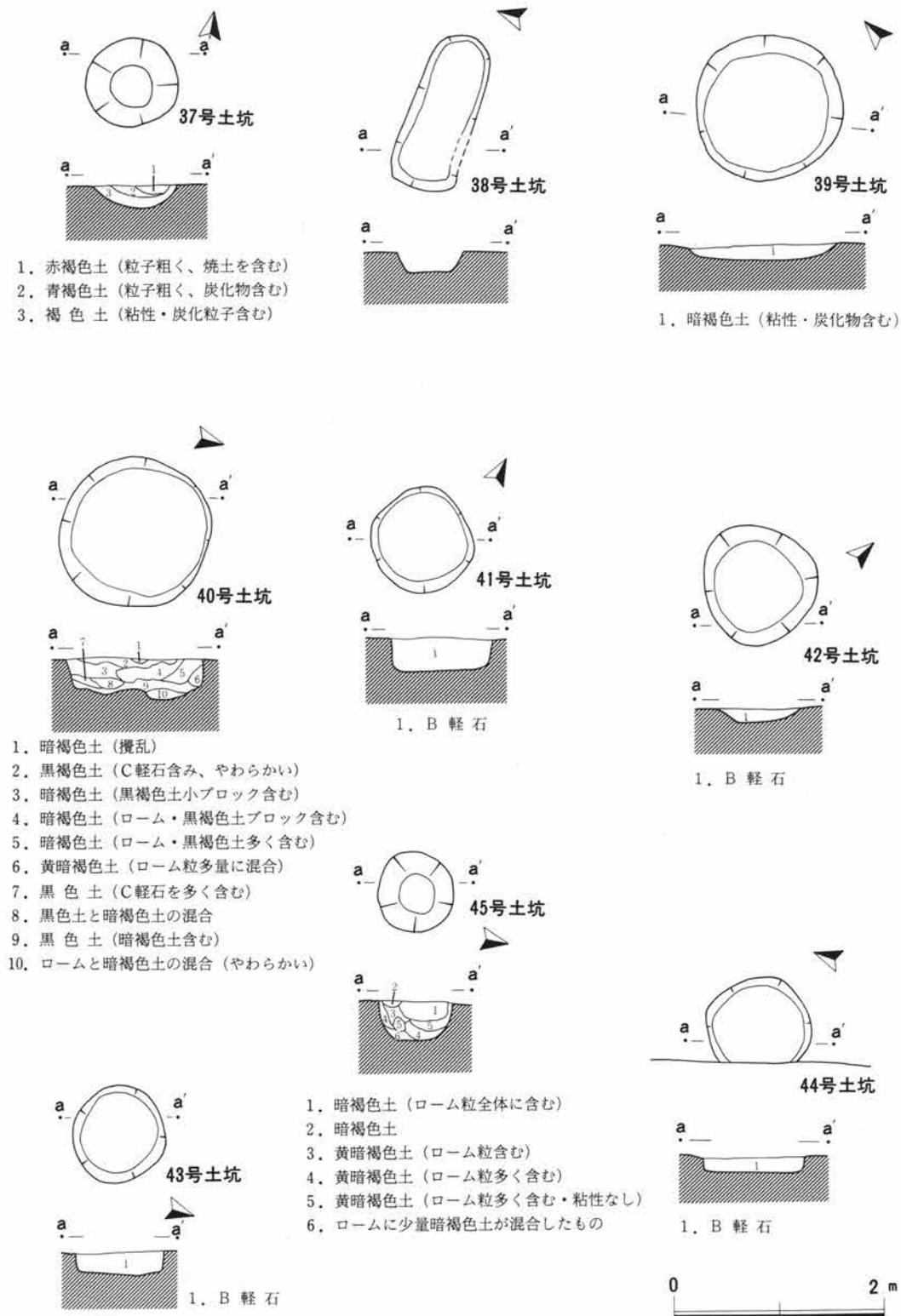
36号土坑

1. 暗褐色土 (粘性・ローム粒含む)
2. 暗黄褐色土 (ローム粒含む)
3. 暗黄褐色土 (ローム粒多く含む)
4. 暗褐色土 (黒褐色土含む)



第239図 27・28・30・31・32・33・34・35・36号土坑

第II章 検出された遺構と遺物



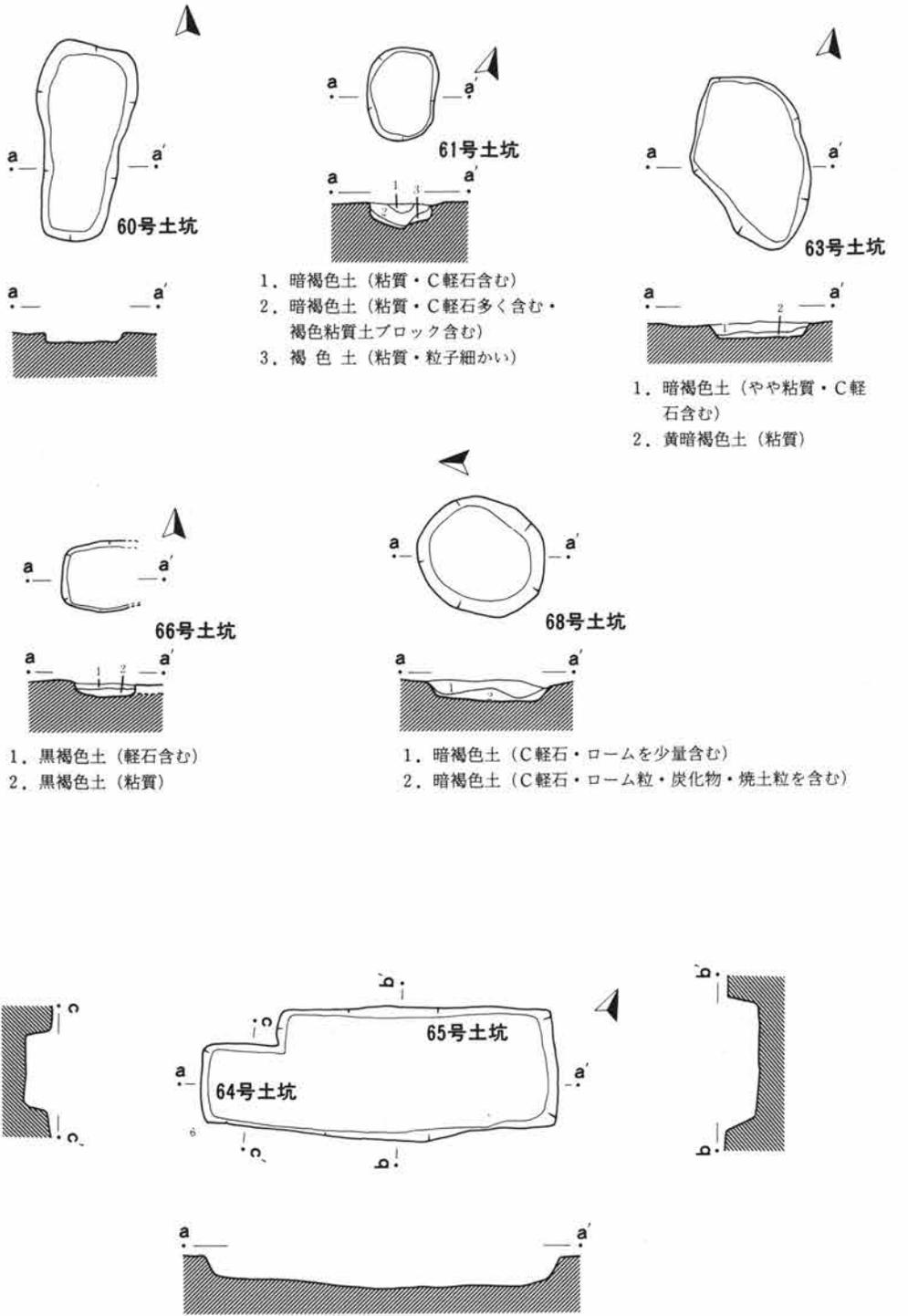
第240図 37・38・39・40・41・42・43・44・45号土坑

第10節 土 坑



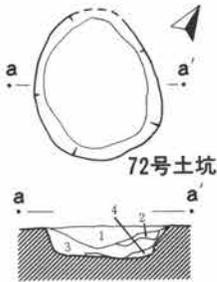
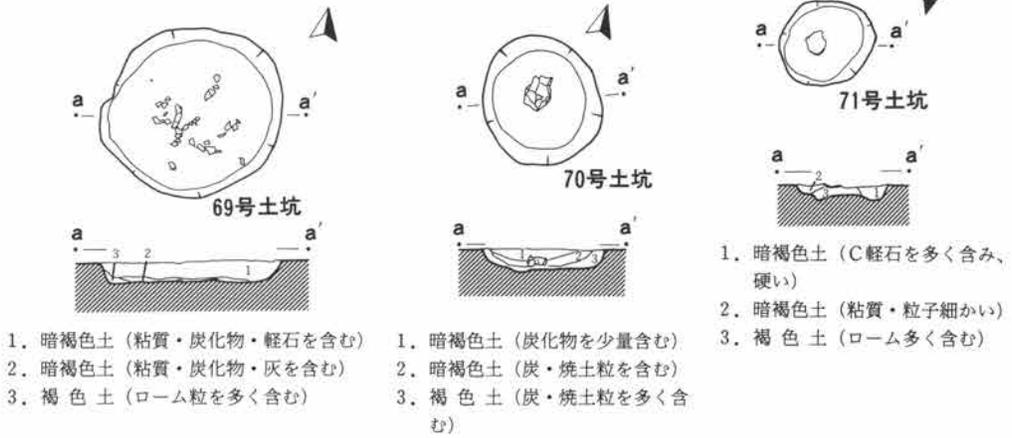
第241図 50・51・52・53・54・55・57・58・59号土坑

第II章 検出された遺構と遺物

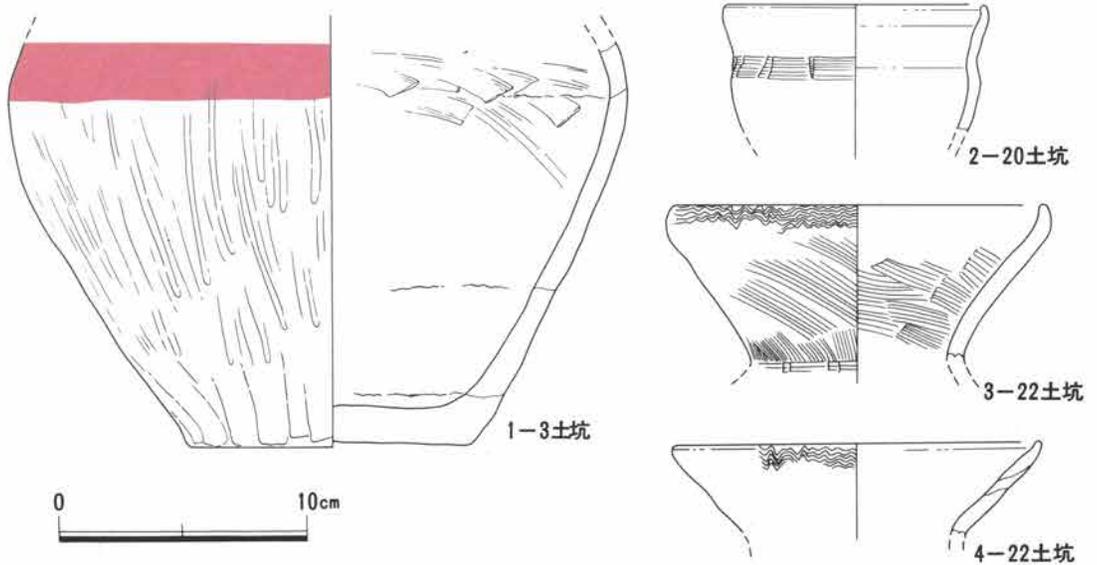


第242図 60・61・63・64・65・66・68号土坑

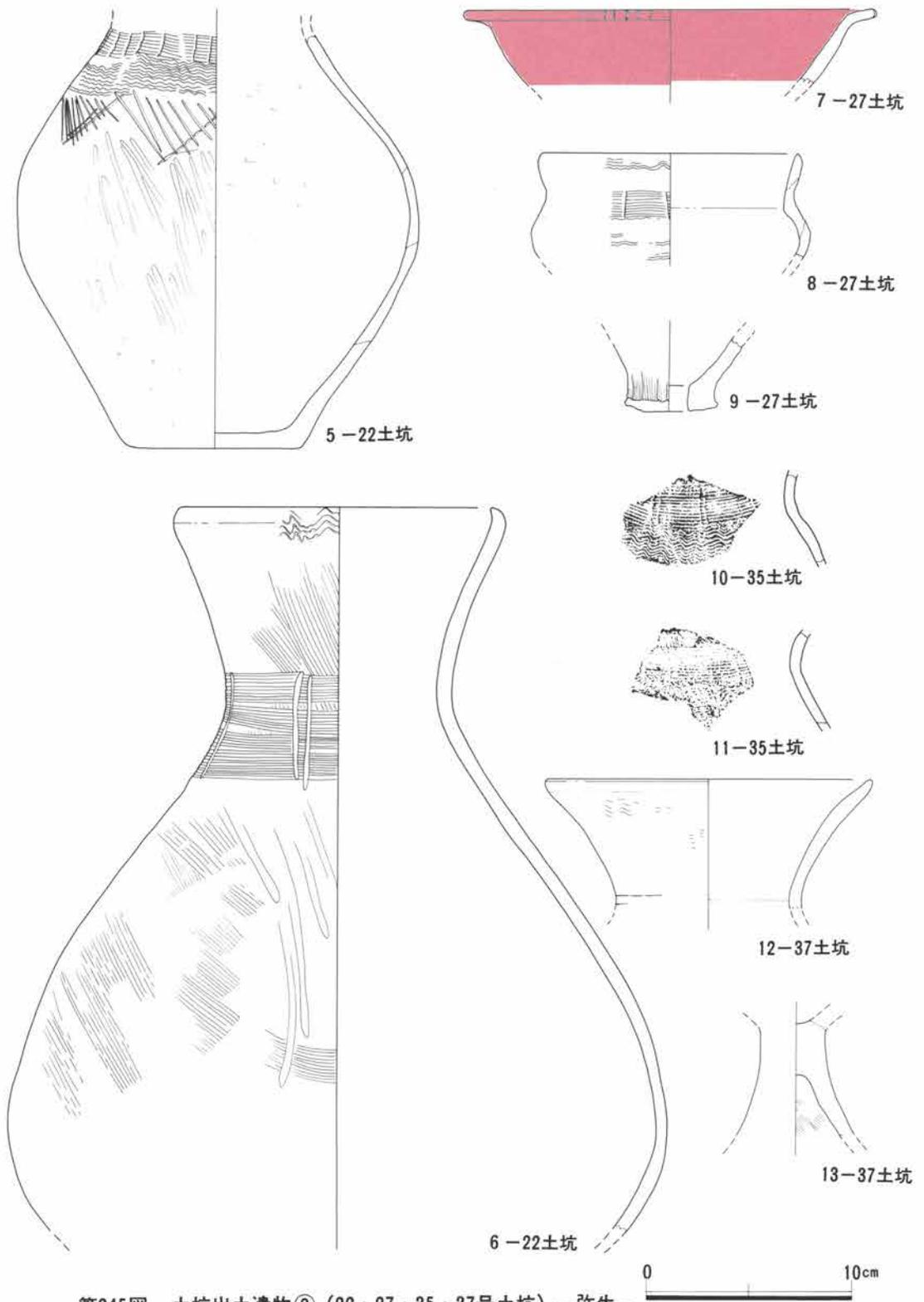
第10節 土 坑



第243図 69・70・71・72土坑

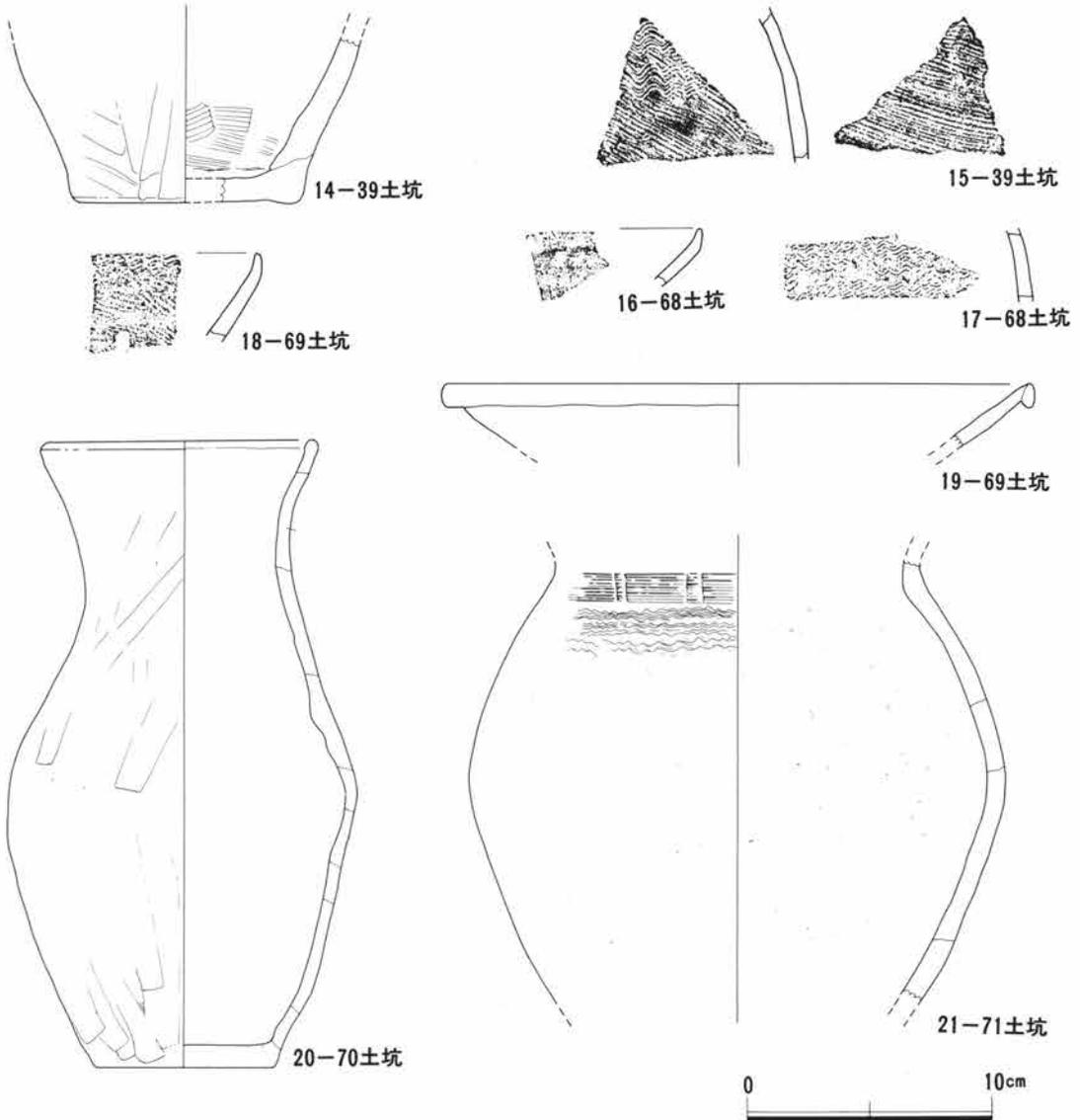


第244図 土坑出土遺物① (3・20・22号土坑) —弥生—



第245図 土坑出土遺物② (22・27・35・37号土坑) —弥生—

第10節 土 坑



第246図 土坑出土遺物③ (39・68・69・70・71号土坑) —弥生—

器 種	出土位置 遺存状態	番号	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	成 形 ・ 調 整 手 法 ・ 文 様 の 特 徴	備 考
壺	3坑覆土	1	胴径 24.7 底径 11.2	底部やや大きく、ほぼ直線的に胴部にいたる。	内面輪積痕。外面タテヘラミガキ。内面ヨコ指ナデ。胴中位赤彩痕。	砂粒を含む。焼成不良。にぶい褐色
甕	20坑覆土 口縁一部	2	口径 10.4	頸部ゆるやかにくびれる。最大径口縁部。	内面輪積痕。外面指ナデ後、頸部簾状文。内面ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。
壺	22坑底面 口縁のみ	3	口径 15.6	口唇部内湾。	外面ナナメハケ後、口唇部波状文・頸部簾状文。内面ヨコハケ後、口唇部ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。橙色。

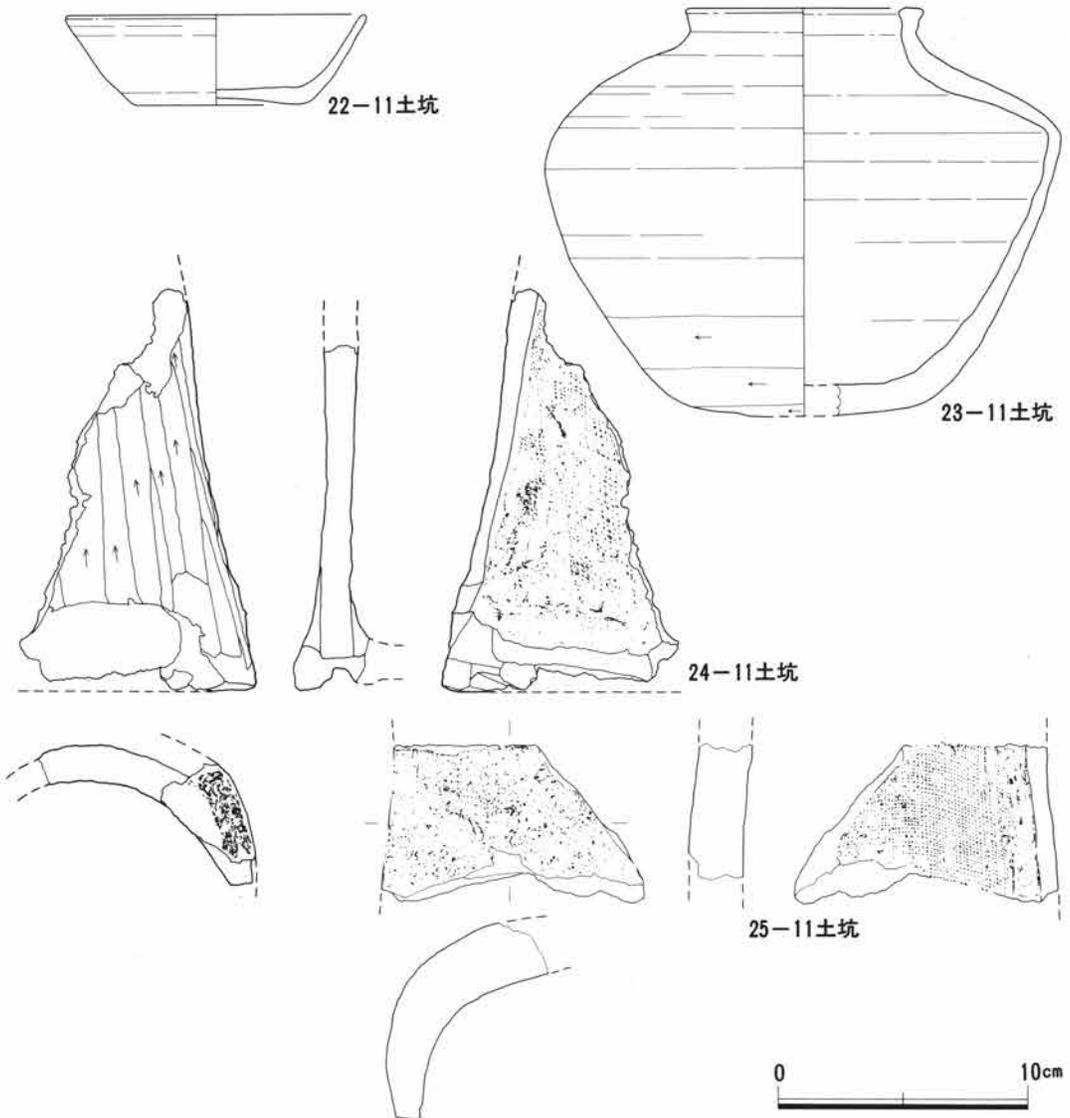
第II章 検出された遺構と遺物

壺	22坑底面 口縁 $\frac{1}{2}$	4	口径 14.8	「ハ」の字状に開き、 口唇部立ち上がる。	断面輪積痕。外面指ナデ後、口唇部 波状文。内面ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成 良好。にぶい橙色
壺	22坑覆土 口縁部欠	5	胴最大径 19.3 底径 8.5	最大径胴中位。	成形不明。外面タテヘラミガキ。内 面ヨコヘラミガキ。頸部右まわり簾 状文。胴上部波状文、鋸歯文の順。	砂・小石含む。焼 成良好。にぶい橙 色。胴下半黒斑。
壺	22坑覆土 $\frac{1}{2}$	6	口径 16.2 胴最大径 32.0	最大径胴下半。口唇部 内湾。	内面輪積痕。外面タテヘラミガキ。 内面ヨコハケメ。頸部に7本単位の 櫛描平行線文4段、2本のタテ沈線 による7区割。	砂・小石含む。焼 成良好。橙色。外 面黒斑。
高 杯	27坑覆土 口縁一部	7	口径 20.0	口唇部外反。	成形不明。内外面赤彩後ヨコヘラミ ガキ。	砂粒含む。焼成良 好。赤色。
甕	27坑覆土 口縁一部	8	口径 12.5 胴径 13.5	最大径胴上部。口縁部 やや外反。	輪積痕。外面波状文施文後、頸部簾 状文、内面ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成 良好。赤色。
甕	27坑覆土 底部のみ	9	底径 4.5	焼成前穿孔。	ケズリ成形、外面タテハケメ。内面 ヨコ指ナデ。	砂粒・石粒含む。 焼成良好。黒褐色。
甕	35坑覆土	10		頸部ゆるやかにくびれ る。	成形不明。外面口縁部タテハケメ。 胴部波状文施文後、右回り簾状文。	砂粒を含む。焼成 良好。灰色。
甕	35坑覆土	11		頸部ゆるやかにくびれ る。	成形不明。外面頸部右回り簾状文、 波状文。内面ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成 良好。にぶい橙色。
壺	37坑覆土 口縁一部	12	口径 16.0	口縁部大きく外反。	成形不明。内外面ヨコ指ナデ。外面 一部波状文。	砂粒を含む。焼成 良好。橙色。
高 杯	37坑覆土 脚部のみ	13			成形不明。外面タテヘラミガキ。内 面ナナメハケメ。	砂粒を含む。焼成 良好。にぶい橙色。
壺	39坑覆土	14	底径 9.0		輪積痕。外面ヘラケズリ。内面ヨコ ハケメ。	砂粒・石粒多く含 む。焼成良好。浅 黄橙色。
甕	39坑覆土	15			外面ナナメハケ後、波状文。内面ヨ コハケメ。	砂粒を含む。焼成 良好。にぶい黄橙。
鉢	68坑覆土 口縁一部	16			内外面ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成 良好。にぶい褐色。
甕	68坑覆土 胴の一部	17			外面波状文。内面ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成 良好。にぶい黄橙。
甕	69坑底面 小破片	18		口唇部内傾。	外面ナナメハケ後、口唇部波状文。 内面ヨコハケメ。	石粒含む。焼成良 好。にぶい黄橙色。
高 杯	69坑底面 小破片	19	口径 24.0	杯部大きく開き、口唇 部折り返し。	成形不明。外面タテヘラミガキ後、 ヨコ指ナデ。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒・石粒含む。 焼成良好。灰白色。

第10節 土 坑

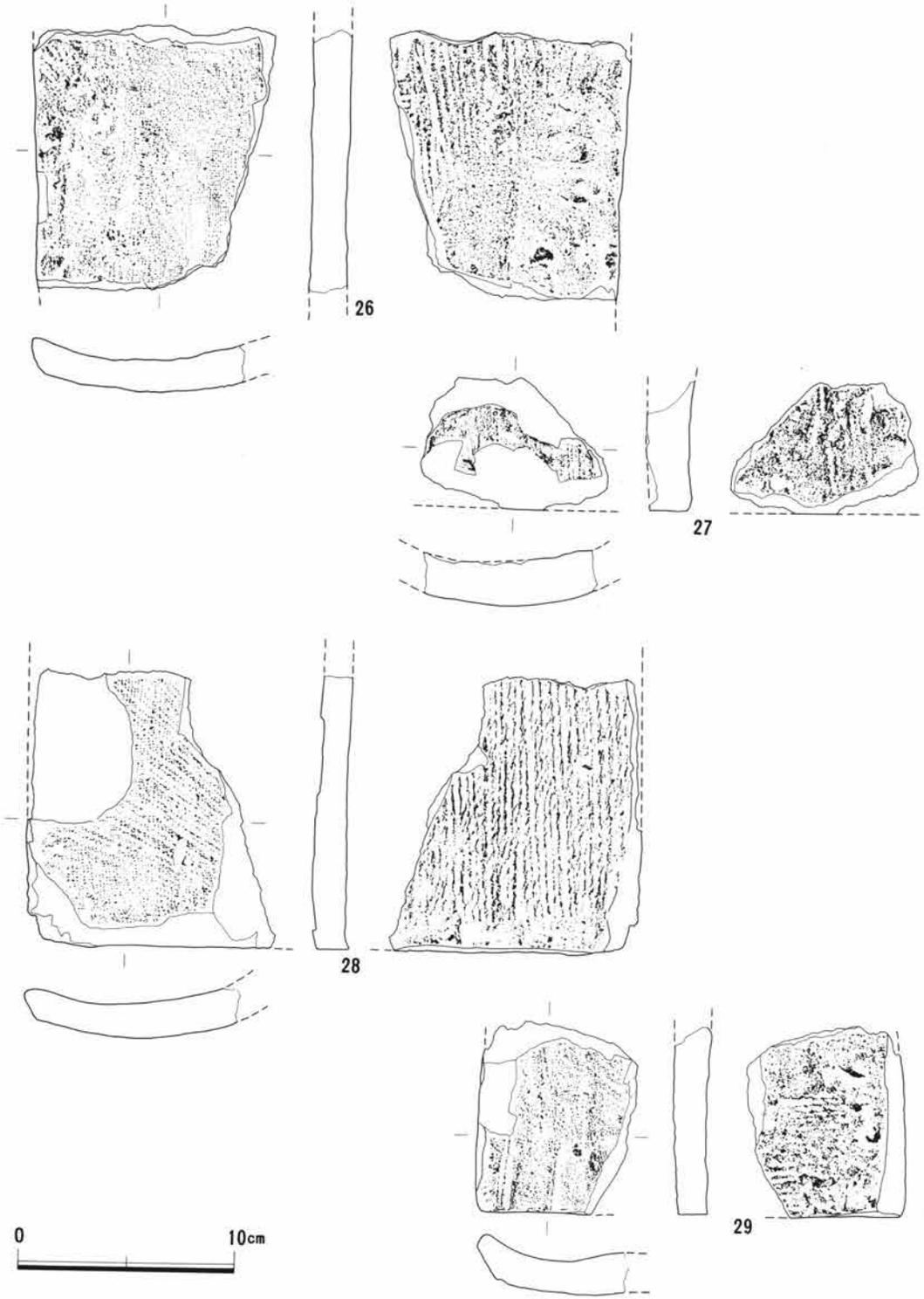
壺	70坑底面 ほぼ完形	20	口径 11.2 胴径 14.0 底径 7.4 器高 25.3	不均整。胴最大径ほぼ 中位、頸部ゆるやかに くびれる。	内面輪積痕。外面タテハケ後、一部 指ナデ。内面ヨコ指ナデ。	砂粒含む。焼成普 通。明褐灰色。胴 下部スス附着。底 部黒斑。
甕	71坑覆土	21	胴径 43.5	最大径胴中位。頸部緩 かにくびれる。	輪積痕。外面タテヘラミガキ後、頸 部右回り簾状文、波状文。内面ヨコ ヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成 良好。にぶい黄橙 色。

3・20・22・27・35・37・39・68・69・70・71土坑出土弥生土器観察表

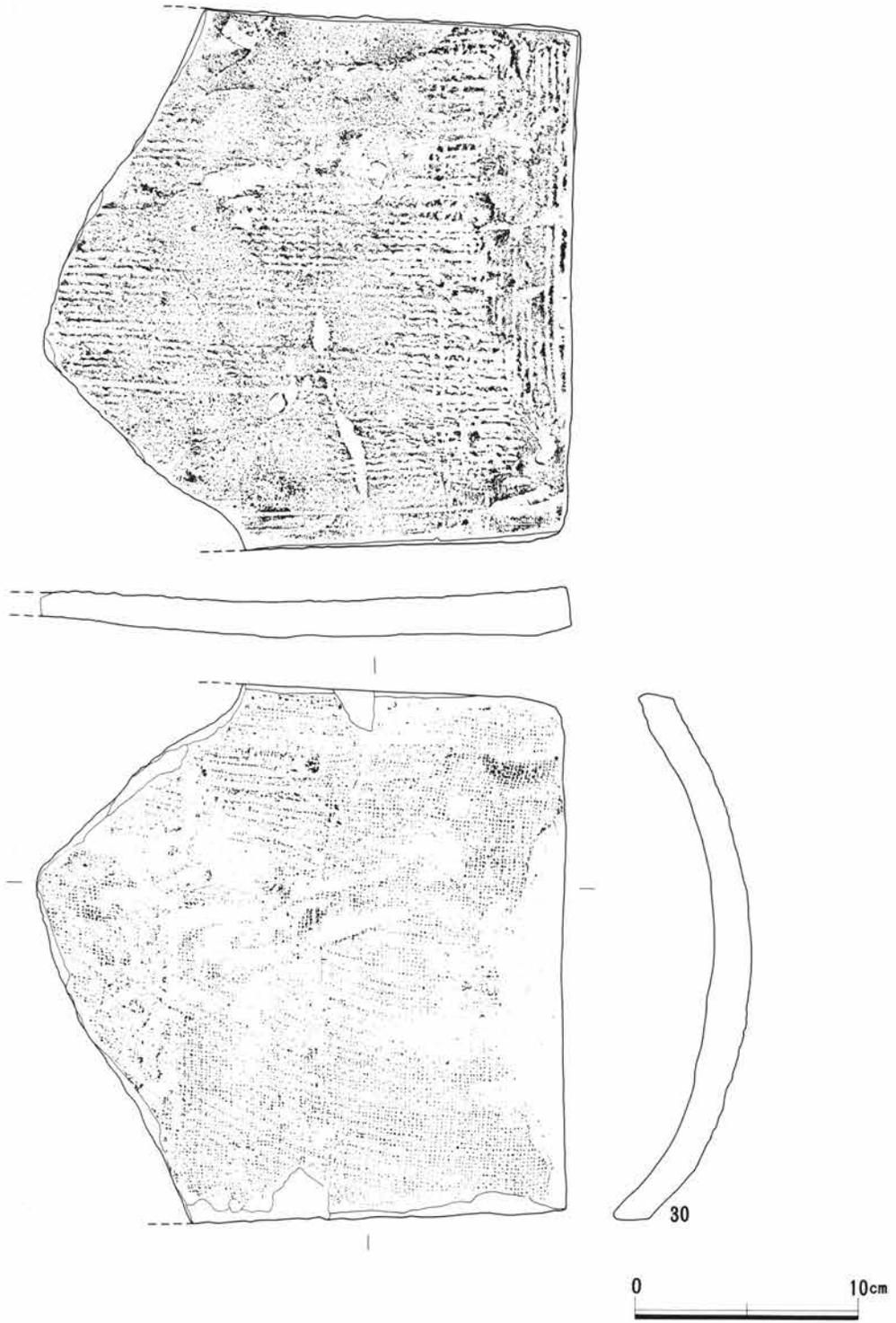


第247図 土坑出土遺物④(11号土坑) —古代—

第II章 検出された遺構と遺物

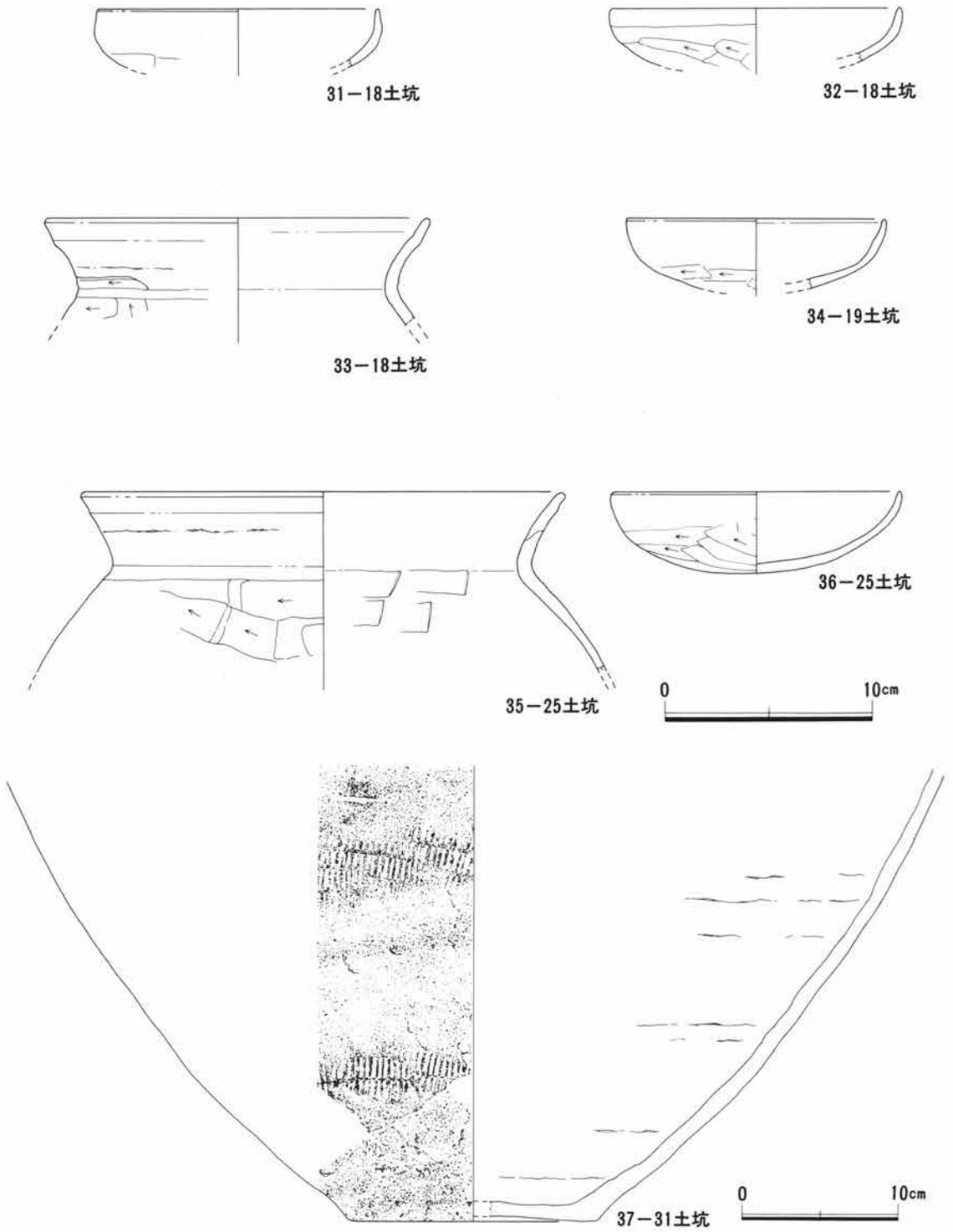


第248図 土坑出土遺物⑤ (11号土坑) —古代—



第249図 土坑出土遺物⑥ (11号土坑) —古代—

第II章 検出された遺構と遺物



第250図 土坑出土遺物⑦ (18・19・25・31土坑) —古代・中世—

第10節 土 坑

器 種	出土位置 遺存状態	番号	法 量(cm)	形 態 の 特 徴	成形・調整手法の特徴	備 考
杯 須恵器	11坑 10cm上	22	口径 12.1 底径 6.6 器高 3.6	口縁へ体部僅かに内反ぎみの直線状。底部近くに軽い沈線底部やや上げ底。	口縁体部内外面回転横ナデ。底部回転糸切り後無調整。	砂粒雲母含む。還元硬質。外面灰色。内面灰白色。投棄後スス付着。
短頸壺 須恵器	11坑 20cm上	23	口径 9.6 最大径20.8 器高 15.2	口唇水平に面取り、口縁僅かに内傾して直立。頸部軽い内稜肩部緩く内反。肩部張り出しは非対称。胴部内反ぎみ。底部稜なく丸底。	内外面輪積成形後、回転横ナデ調整、外面下位回転ヘラ削り調整。	砂粒気泡含む。還元硬質。灰色。投棄後スス付着。
軒丸瓦	11坑 32cm上	24		瓦当部周縁帯断面方形・肉厚丸瓦部側面不均一で薄く、稜一部のみ見られる。	上面：瓦当部との接合痕。幅広のヘラ削り。接合部ヘラナデ。下面：布目痕・接合部指ナデ。周縁ヘラナデ。側面：ヘラナデ。	砂粒小石気泡含む。還元硬質。灰色。
丸瓦	11坑 19cm上	25		断面半円形。上部肉厚。側面の稜極めて明瞭。平滑、上下面に対し直角。	上面：ナデ。下面：布目痕。縁部ヘラ削り。側面：金属製ヘラ削り。	砂粒気泡含む。還元→酸化→還元。硬質。灰色。
平瓦	11坑 9cm上	26		側面の稜は不鮮明。	上面：布目痕。下面：縄目痕後、縁部ヘラナデ。側面：ヘラナデ。	砂粒小石含む。還元。硬質。灰色。
平瓦	11坑覆土 端部小片	27		側面平滑。	上面：布目痕後一部指ナデ。下面：縄目痕。側面：金属製ヘラ削り。	砂粒気泡含む。還元。やや硬質。灰白色。
平瓦	11坑 64cm上	28		側面の稜。鋭く明瞭。側面平滑。	上面：布目痕後一部平行叩き目。縁部ヘラナデ。下面：縄目痕。側面：金属製ヘラ削り。	砂粒小石含む。還元。硬質。灰色。
平瓦	11坑 31cm上	29		側面平滑。器肉ほぼ均等の厚さ。	上面：布目痕。下面：横方向の縄目痕後一部指ナデ。側面：金属製ヘラ削り後一部ナデ。	砂粒気泡含む。還元。硬質。灰色。
平瓦	11坑 62cm上	30	幅 23.2	断面皿状に外反。側端・下端厚く、上方中央やや薄い。端部下稜顕著で上稜やや緩い。	上面：布目痕後下端ヘラナデ 下面：中央縦下端横縄目痕後側面ヘラナデ。端部金属製ヘラ削り。	微小砂粒多く含む。還元。硬質。灰色。
杯 土師器	18坑覆土 口縁小片	31		口縁短かく直立。稜なく体部強く内反。	口縁内外面横ナデ。体部外面ナデ。	砂粒含む。酸化やや軟質。橙色。
杯 土師器	18坑覆土 口縁ノ	32	口径 14.0	口縁短かく直立。稜なく体部強く内反。	口縁内外面横ナデ。体部外面横ヘラ削り。	砂粒含む。酸化やや硬質。にぶい橙。
甕 土師器	18坑覆土 口縁小片	33		口縁外面緩い稜もって外傾。頸部直立ぎみ。やや器壁厚い。	口縁内外面輪積後横ナデ。頸部→ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒含む。酸化やや硬質。橙色。

第II章 検出された遺構と遺物

杯 土師器	19坑覆土 口縁 $\frac{1}{2}$	34	口径 12.6	口縁短かく外傾ぎみ直立。外面浅い沈線。稜なく体部内反。	口縁内外面横ナデ。体部ナデ。底部不定ヘラ削り。	砂粒雲母含む。酸化やや硬質。橙色。
甕 土師器	25坑覆土 口縁 $\frac{1}{2}$	35		口縁直線状外傾。上位に緩い稜。頸部より緩い稜もって胴部球形状内反。	口縁輪積後内外面横ナデ。肩部へヘラ削り後頸部ヘラナデ。頸部内面接合痕。ヘラ調整痕。	砂粒含む。酸化やや硬質。橙色。
杯 土師器	25坑覆土 $\frac{1}{2}$ 残存	36	口径 14.0 器高 3.8	口縁短かく内反ぎみ直立。稜なく底部丸底。	口縁内外面横ナデ。体部指頭痕。底部不定ヘラ削り。	砂粒含む。酸化やや軟質。橙色。
大 常 滑	31坑覆土 胴部 $\frac{1}{2}$	37	底径15.9 胴残存最大 径約60.0	径大きい胴部よりやや内反ぎみに内傾し、稜もって底部平底で径は小さい。	輪積後叩き成形。外面水平に格子状叩き痕帯。内面ナデ。胴下位ヘラナデ。	砂粒小石多い。酸化硬質。にぶい褐色。

11・18・19・25・31土坑出土古代・中世土器観察表

第11節 遺構外出土の遺物

縄文時代

出土土器 (第251～255図)

縄文時代の土器は、前期から後期までが検出されているが、その内でも中期・後期が主体である。これらを大別すると第1群土器から第4群土器に分けられる。

- 第1群土器 前期後半
- 第2群土器 中期後半
- 第3群土器 後期前半
- 第4群土器 後期後半

第1群土器 (第251図1～13)

本群は、縄文時代前期後半の諸磯式を一括した。

器形は、2～5は口縁部破片で逆「く」の字状に屈曲して内反し、他は胴部破片でやや外反する。

1は半截竹管により、幅の広い平行沈線文を横位に施し、その沈線文間に爪形文を連続施文する。地文は無文である。2～4は波状口縁で、逆「く」の字状に屈曲して内反し、2・4は3本を1単位、3は4本を1単位とした平行沈線文を口縁に沿って施し、下端に横位、斜位を施し三角形を区画する。地文はRL縄文を施文する。5は平縁で逆「く」の字状に屈曲して内反し、口

縁部に櫛歯状工具による刺突文を横位に5条施し、下端に2本を1単位とした沈線文を横位、斜位に施文する。地文は無文である。6は逆「く」の字状に屈曲して内反する口縁部直下で波状を呈する。4本を1単位とする沈線文を斜位、横位に曲線的に施す。地文はRL縄文を施文する。7～11は沈線文を主体とし、地文に無文あるいは縄文を施す一群で、7～9は4本を1単位、10は上位に4本を1単位、下位は2本を1単位、11は4本を1単位とした平行沈線文を横位に施し、7～10は施文にRL縄文を施し、11は無文である。12は3本を1単位とする沈線文を斜位に曲線的に施す。地文は無文である。13は縦位に溝の深い沈線文を施し、上位にボタン状貼付文を施文する。

色調は、1・2は黒褐色、4・12・13はにぶい黄橙色、他は褐色である。

1～12は諸磯b式、13は諸磯c式に比定される。

第2群土器（第251図14～23、第252図、第253図～65）

本群は縄文時代中期後半の加曾利E式期に属するものを一括した。

第251図14～20は、幅の広い沈線による楕円区画等で文様を構成する一群で、14～18は口縁部片、19・20は口縁直下である。18は口唇下に一条の沈線を廻らす。15・18はLR縄文、他はRL縄文を施文している。21～23は波状を呈する口縁部片で、21・22は沈線により渦巻文を構成する土器で、21は右巻、22は左巻である。23は口唇下に幅の広い沈線を1条施し、沈線により楕円区面を有する土器でRL縄文を施文している。

第252図24～29は沈線により懸垂文を表出し、その間を磨消す胴部片である。25・27は懸垂文間の磨消部の幅が広い。25はLR縄文、他はRL縄文を施文している。30～32は沈線による懸垂文と蛇行懸垂文を表出する胴部片で、沈線間を磨消し、縄文施文内に1本の蛇行懸垂文を施す。31はやや外反し、幅の広い沈線により蛇行懸垂文を強調している。ともにRL縄文を施文する。33～35は口縁無文帯下に沈線を廻らせる口縁部片で、33・34は口縁無文帯を広く持ち、幅の広い沈線を施すが、35は口縁無文帯が狭く、幅の狭い沈線を施す。ともにRL縄文を施文している。36～42は口唇下に幅の広い無文帯を持ち、1条の微隆起線を廻らせて胴部を区画する土器である。36～39は口縁部片で、36・37は垂下する隆起線と口縁の横走隆起が接して「T」の字状を呈し磨消文を有する。41・42はその直下の胴部片で、41は垂下する微隆起線により磨消部を有し、42は垂下する微隆起線文が蛇行する。40・42はRL縄文、他はLR縄文を施文している。

第253図43～46は、細い沈線区画により文様を区画する胴部片で、43～45は曲線的な区画を施すもので区画内に縄文施文部を持つ。46は縦に懸垂文と横に楕円区画を施し、区画内に縄文施文部を持つ。43・44はRL縄文、45・46はLR縄文を施文している。47・48は縄文施文内に曲線の沈線文を有する。47はLR縄文、48はRL縄文を施文している。49・50は懸垂文間磨消部に「U」の字状の沈線を上下に施す。ともにRL縄文を施文している。51は沈線区画間の磨消部に蕨手状懸垂文を施す胴部片で、RL縄文を施文している。52～62は櫛歯状工具により条線文を施文した土

第II章 検出された遺構と遺物

器である。52は口縁無文帯下に幅の広い沈線が廻り、直下に縦位の条線文を施す。53は口縁部片でやや内反し、口縁無文帯を持ち、直下に縦位の条線文を施文する。54～58は縦位の条線文のみを施文する胴部片である。59は口縁部片でやや内反し、口縁無文帯下に幅の広い沈線を廻らせ、直下に波状の条線文を施文する。60は胴部片で波状の条線文を斜方向に施文している。61・62は溝の深い縦位の条線文中に沈線で連弧文を施文する。63は棒状工具により沈線文を施文している。64・65は底部片で無文である。64は径12cm、65は径14cmを計る。64は外に開いて立ち上がり、65はそれほど開かず立ち上がる。

色調は、23・48・49・50は赤橙色、24・25・36・42は灰褐色、他はにぶい黄橙色である。

以上、本土器群は加曾利EⅢ・EⅣ式に比定される。

第3群土器（第254図、第255図）

本群は後期前半の土器を一括する。以下3類に分かれる。

1 類（第254図66～79）

本類は称名寺式土器を一括する。器形は、口縁部が外反し、頸部が括れて胴部が張り出す深鉢形を呈する。

66～70は把手部を有する口縁部片であり、すべて橋状を呈する把手である。66は口縁部を除く3面に孔、刺突および沈線により「8」の字状の文様を施文する。67は中央部に孔をあけ、周囲に刺突と沈線により「8」の字状の文様を施す。68～70は破損していたが同じ文様構成をすればと思われる。69・70は口縁部に斜位の沈線区画をし、ともにLR縄文を施文している。

71～75は沈線間に縄文を施文する一群で、71は口縁部片でやや内反し、口縁部無文帯下にT字状文を構成する。他はすべて胴部片でT字状文を構成する。71・73はLR縄文、72はLR・RL縄文、74・75はRL縄文を施文している。

76は沈線間に刺突文を施文する口縁部片である。口縁部がやや外反し、口唇部で「く」の字状に内反し孔を有する。

77～79は沈線のみで文様を構成する胴部片である。77・78は沈線が直線的であるのに対して79は曲線的な文様を描いている。

色調は、66～68・77は赤橙色、70・72・76・78は褐色、他はにぶい黄橙色である。

2 類（第254図80～87、第255図88～108）

本類は堀之内式土器を一括する。器形は、口縁部が外反し、頸部が「く」の字状に屈曲する深鉢形を呈する。

80～87は口縁部に無文帯を持ち、口唇部に文様を構成する口縁部片である。80～83・86は波状口縁で口唇部に刺突と沈線により渦巻文を施文している。80・82・83・86は口縁部に無文帯を持つが81は口縁部に斜位の沈線を施文する。84・87は波頂部に円形の孔を有し、周囲に刺突と沈線により「8」の字状の文様を施文している。

88～95は貼付文により「8」の字状の文様を構成する。88は波状口縁部片で、貼付文に刺突や刻みにより「8」の字状文を施文する。89は口縁部片で貼付文と刺突と沈線の組合せにより文様を構成する。90・91は胴部片で貼付文と沈線との組合せにより渦巻文を構成し、「8」の字状文を施文する。92～95は頸部片で「く」の字状に屈曲する部分に「8」の字状の貼付文を施し、文様は沈線により構成される。

96～99は口唇部に無文帯を持つ口縁部片である。96・97・99は口縁部が外反し、口唇部が「く」の字状に内反する。96は口縁部に沈線を1条、97は3条を横位に施文している。98は口縁部がやや外反し、裏面に1条の沈線が廻り、文様は横位と斜位の沈線により構成されている。

100は口縁部片で、裏面に1条の沈線を廻らされる。口縁部には無文帯を持ち、2条の幅の狭い隆線が施され、等間隔に刺突文を施文している。

101～108は胴部片で、沈線により三角形の区画文を構成し、沈線間に縄文を施文する。101～106は直線的であるのに対して、107・108は曲線的な文様を描いている。縄文は全てLR縄文を施文している。

色調は、89・89は赤橙色、86・93・95・96・100は褐色、他は全てにぶい黄橙色である。

80～99は堀之内Ⅰ式、100～108は堀之内Ⅱ式に比定される。

3 類 (第255図109～114)

本類は加曾利B式土器を一括する。

109は胴部片で、沈線により横位間に「8」の字状文を施し、沈線間にLR縄文を施文する。

110～114は口縁部片で、裏面に1条の沈線を廻らされる。口縁部には押圧を施した隆帯が廻り、器面には削痕を残す。114は4本を1単位とした平行沈線文が施文されている。

色調は、109はにぶい黄橙色、他は褐色である。

以上、本類は加曾利BⅠ式に比定される。

第4群土器 (第255図115～119)

本群は後期後半の土器を一括する。

115は口縁部片で口縁に小突起を有し、それを中心として両側の隆帯上に刻みを施する。下位はLR縄文を施文している。116・117は小突起を有する口縁部片で、沈線で文様を構成する。116は口縁文様帯に刺突文を施し、沈線間にLR縄文を施文する。117は口縁に無文帯を持ち、沈線間にLR縄文を施文している。118・119は波状を呈する口縁部片で、口唇部裏面に稜線を有する。微隆起線文により口縁部と胴部の文様を区画し、斜位の沈線間にLR縄文を施文する。

色調は、全てにぶい黄橙色である。

第II章 検出された遺構と遺物

出土石器 (第256～258図)

すべて包含層から検出されている。石器出土の内訳は石鏃、搔器、敲石、磨製石斧、打製石斧、多孔石、凹石、磨石である。

石 鏃 (第256図1～6)

1～6は平面形が二等辺三角形を呈し、基部に強弱の差がある抉り部を持ち、脚を有する。

1は丁寧に細部調整したもので両側辺がややふくらみを持ち、基部の抉りは片寄って浅く施されている。2は丁寧に細部調整したもので基部の抉りは浅く施されている。3は両側辺がややふくらみを持ち、基部の抉りは片寄って浅く施されている。4は基部、片側面に両面の細部調整を行ない、他辺には何ら加工を施していない。両側辺がややふくらみを持ち、基部の抉りは片寄って浅く施されている。5は両側辺がややふくらみを持ち、基部の抉りは深く施されている。6は両側辺がややふくらみを持ち、片側辺の一部が欠損している。基部の抉りは弧状に施されている。

1～5までは黒曜石製、6は安山岩製である。

搔 器 (第256図7～14)

7・8は横長剝片を素材とし、両面加工により刃部作出するものと、9～14は片面に自然面を残し、片面加工により刃部作出し、打撃面と打撃点を残すものとに大別される。

7は横長剝片を素材にし、弱い弧状に刃部加工を施し、他側辺にも細部加工を施している。8は横長剝片を素材にし、強い弧状に刃部加工を施す。両面の稜線に擦痕が残っている。9は自然面側からの片面加工により刃部を作出。10は自然面側からの片面加工により、刃部を作出し、断面は三角を呈する。11は石器の素材を作った打撃点を残し、大きく剝離し弧状に刃部加工を施す。打撃点の脇に自然面を残す。12は横長剝片を素材にし、片面加工により弧状の刃部を作出し、基部に打撃点を残す。13は打撃面と打撃点を残し、自然面側からの片面加工により刃部を作出し、断面は三角を呈する。14は大形剝片を素材とし、両側からの粗い加工により、刃部を作出している。打撃点の脇と片面に自然面を多く残す。

敲 石 (第256図15)

円形の河原石を素材とし、縁辺を粗く剝離調整し、その後割れ口で敲いたり、擦ったりして使用している。上部突端においても敲いている痕跡を残す。

磨製石斧 (第256図16)

先端部を欠損した基部片で、楕円形錐状を呈した所謂乳棒状石器である。基部端は敲いた使用痕を残す。

打製石斧 (第257図17～29)

17～22は短冊形、23は分銅形、24～29は撥形を呈する。

17は片面に自然面を残し、両側辺は直線的で刃部加工は粗い調整を若干行っている程度である。18は周辺部を粗雑な剝離加工を加えて全体的に短冊形を呈しているが、側辺部両側に左右位置がいずれも弱い抉り部を有する。また、刃部は丸く作出されている。19は片面に自然面を残し、周

辺部を粗雑な剥離加工し、刃部は片面加工により丸く作出されている。20は基部欠損品、刃部は丸く作出され、周辺部に細部加工を施している。21は基部欠損品、片面に自然面を多く残し、刃部は丸く作出されており、刃部に磨滅痕を有する。22は基部欠損品、片面に自然面を残し、周辺部に細部加工を施し、刃部は丸く作出されている。23は分銅形を呈し、刃部と基部は弧状に仕上げられているが主軸に対して斜めである。側辺の抉れはほぼ左右対称であり、抉れと両面の稜線に擦痕が残っている。24は片面に自然面を多く残し、幅広で丸みのある刃部を作出するとともに側辺に抉りをもたせ、やや細みの基部を形成している。25は基部欠損品、周辺に細部加工を施し、幅広の刃部を作出する。刃部には磨滅痕を有する。26は基部欠損品、片面に自然面を残し、周辺に細部加工を施す。刃部は幅広で主軸に対して斜めである。刃部に磨滅痕を有する。27は基部欠損品、片面に自然面を多く残し、幅広で丸みを持つ刃部を作出する。28は基部欠損品、周辺を細部加工し、幅広の刃部を作出する。29は基部と刃部の一部を欠損している。周辺を細部加工し、幅広で主軸に対して斜めの刃部を作出する。

多孔石 (第258図30~32)

30は不定形で両側面に多量の孔を施し、裏面は中央部に凹み部を持ち石皿に転用している。31・32は不定形の破損品で表裏面に多量の孔を施している。

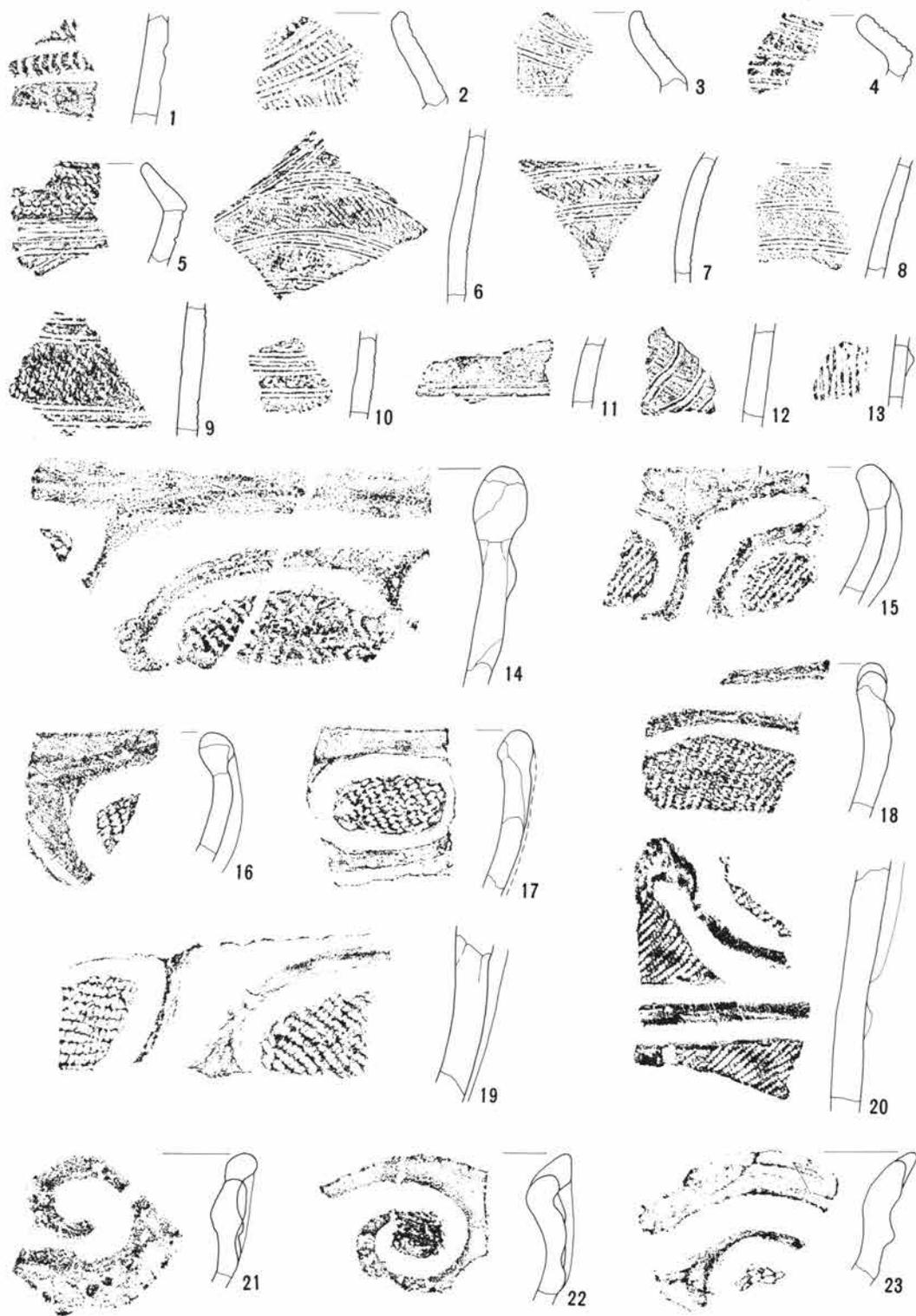
凹石 (第258図33~35)

33は長楕円形を呈し、両面に凹部を有する。34は破損品、両面に凹部を有し、表裏面を磨っている。35はやや大振りな楕円形を呈する。表面に凹部を有し、表裏面を磨っている。また、側辺部では敲いている痕跡がある。

磨石 (第258図36)

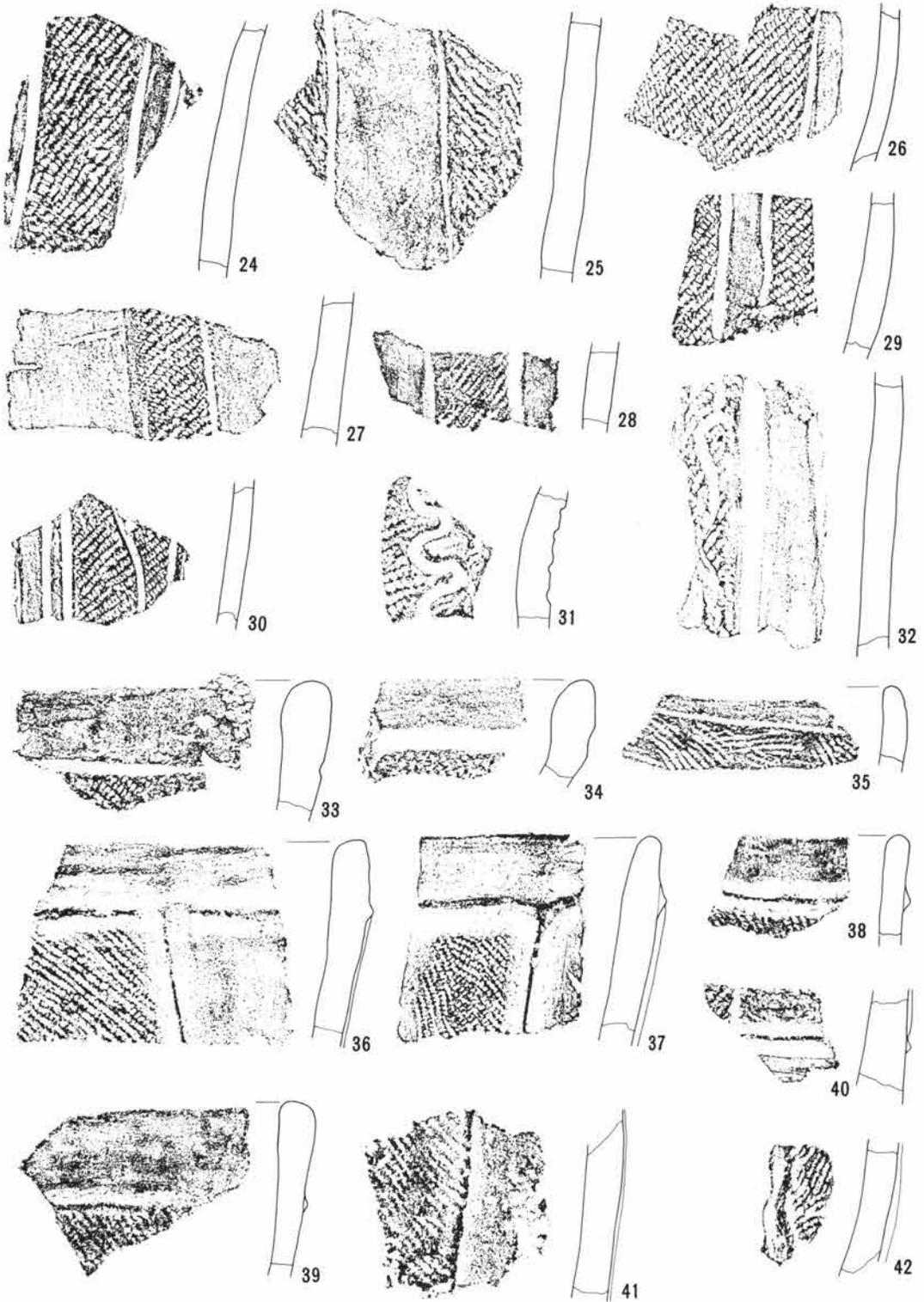
36は円形を呈し、表裏面を磨っている。

第II章 検出された遺構と遺物



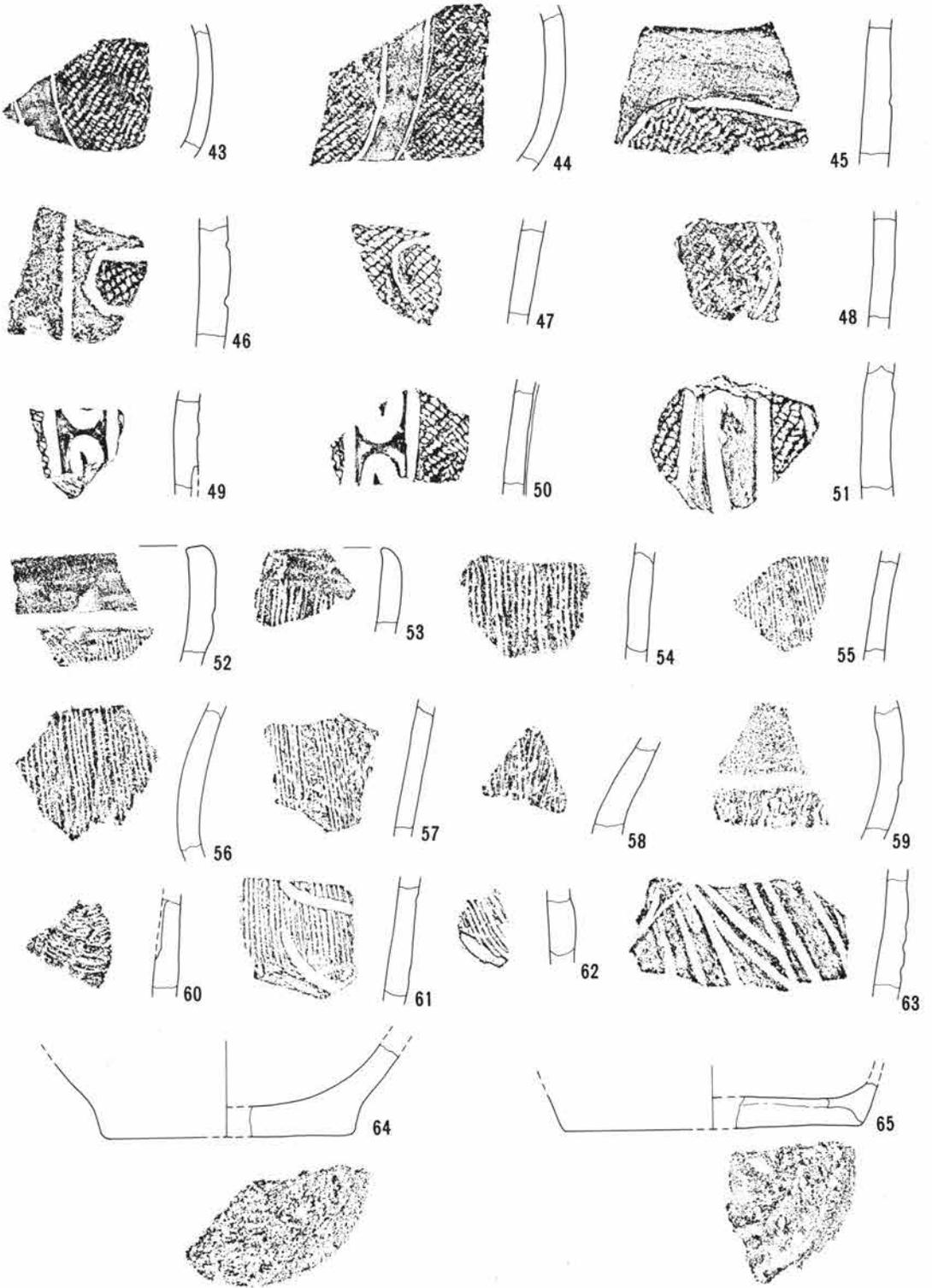
第251図 遺構外出土遺物①—繩文—





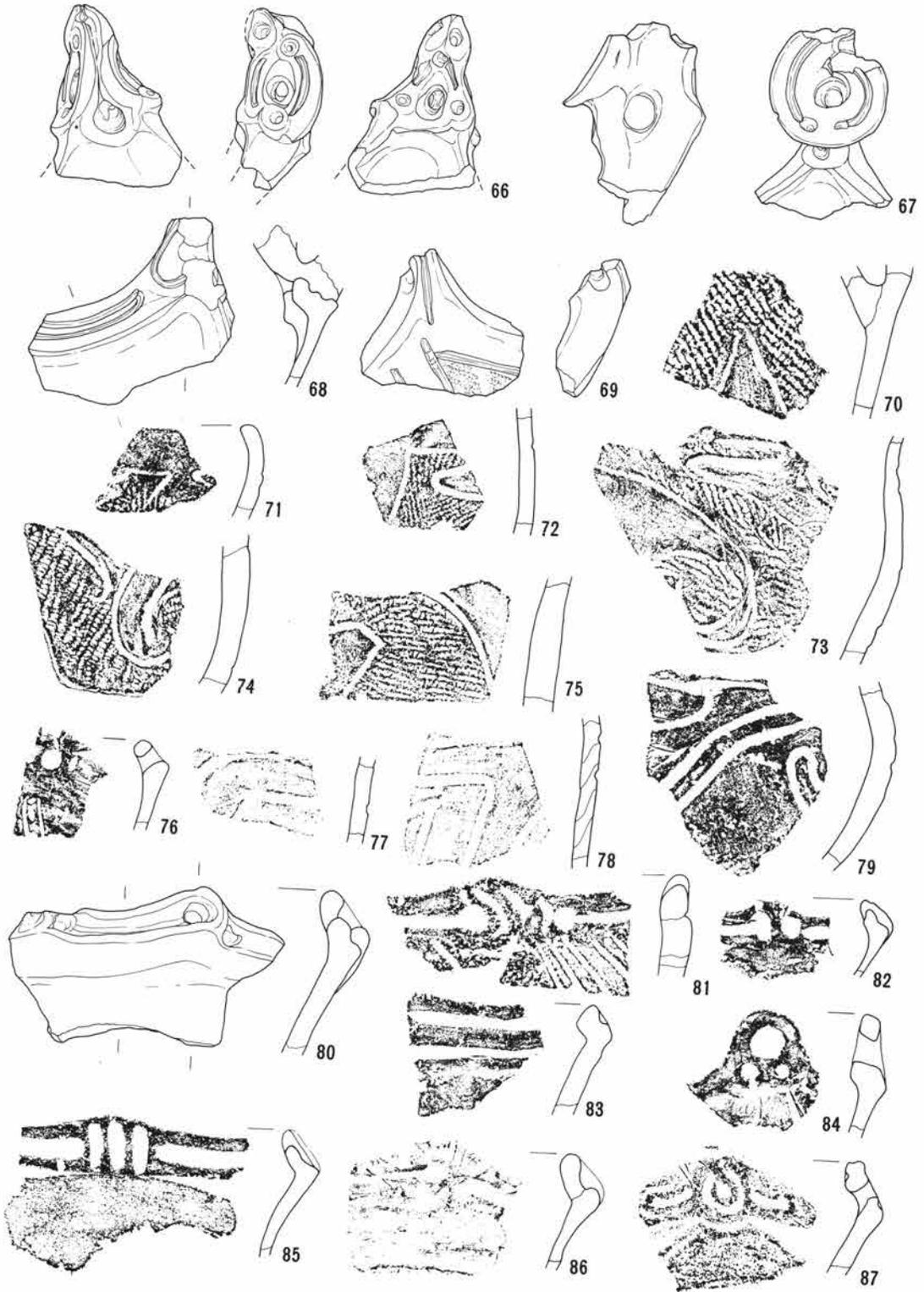
第252図 遺構外出土遺物②—繩文—





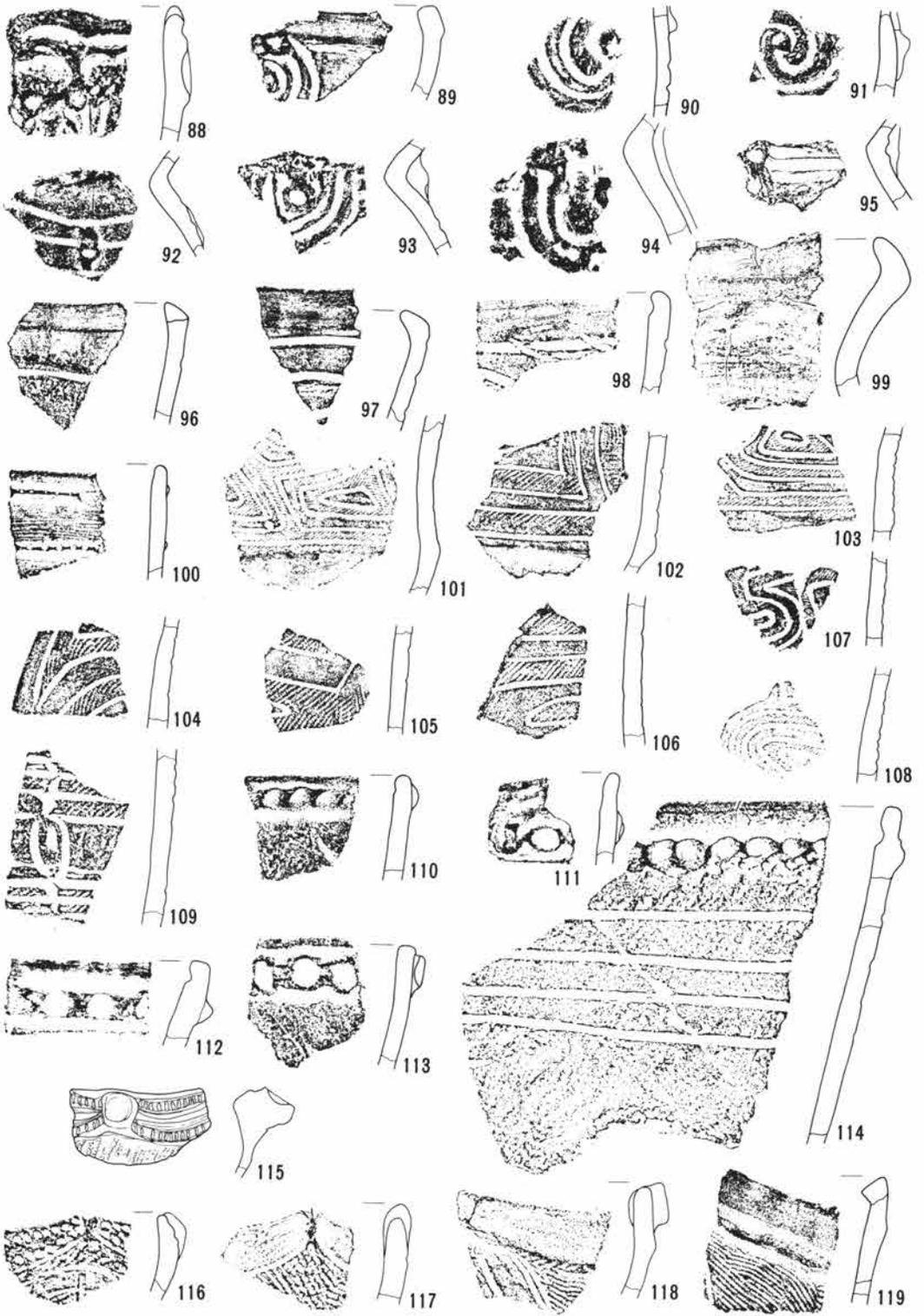
第253図 遺構外出土遺物③—縄文—

0 10cm



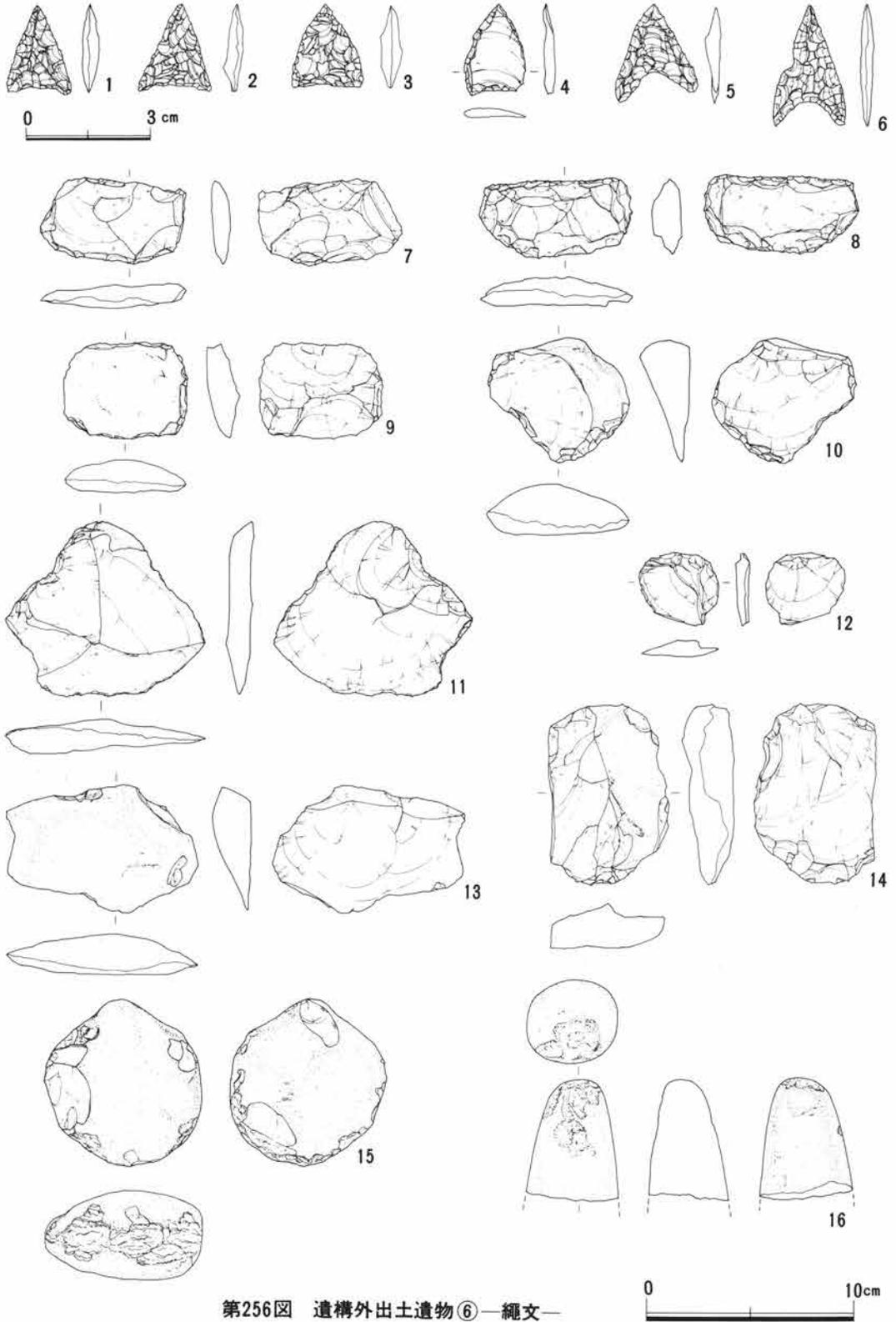
第254図 遺構外出土遺物④—繩文—





第255図 遺構外出土遺物⑤—繩文—

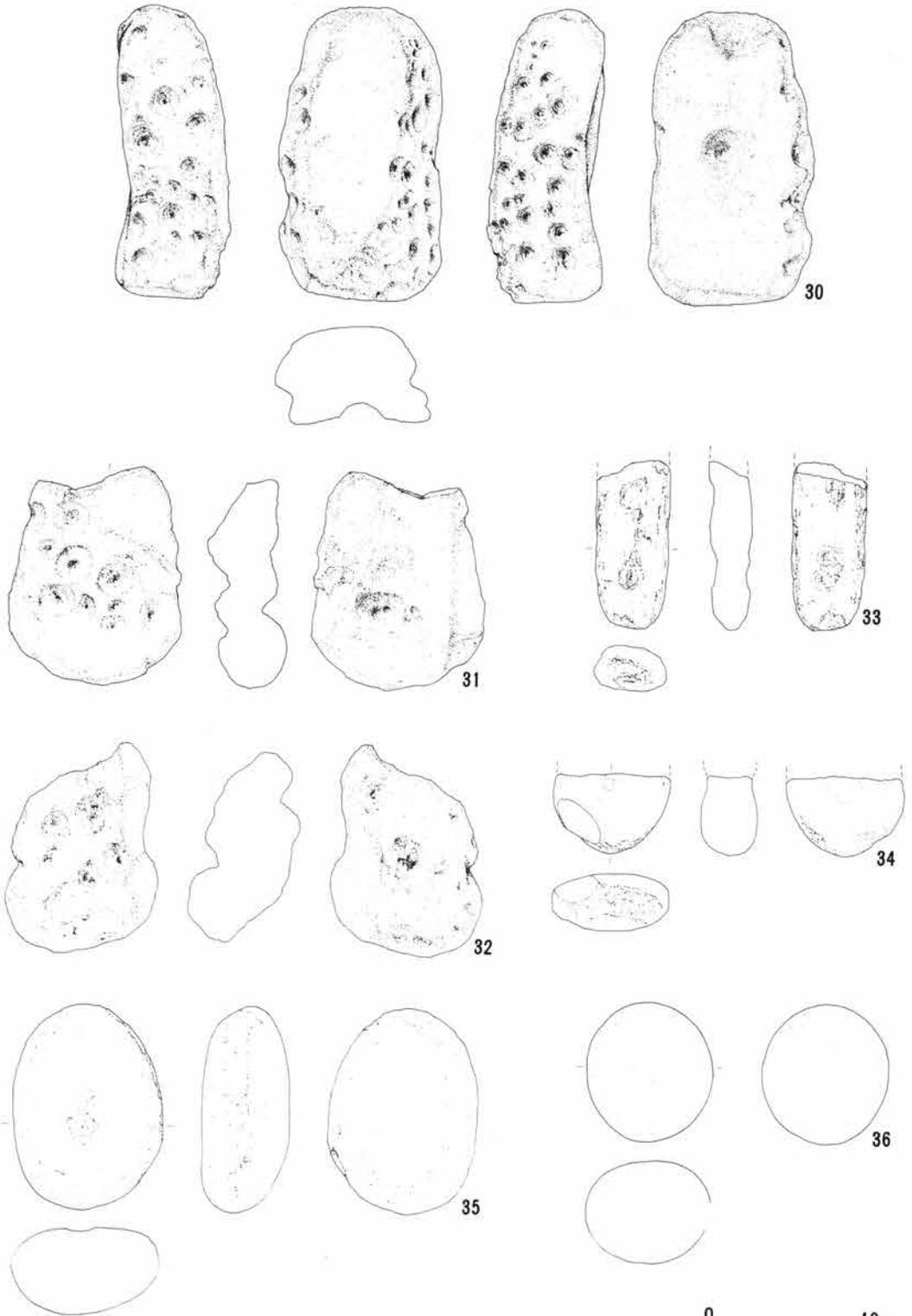




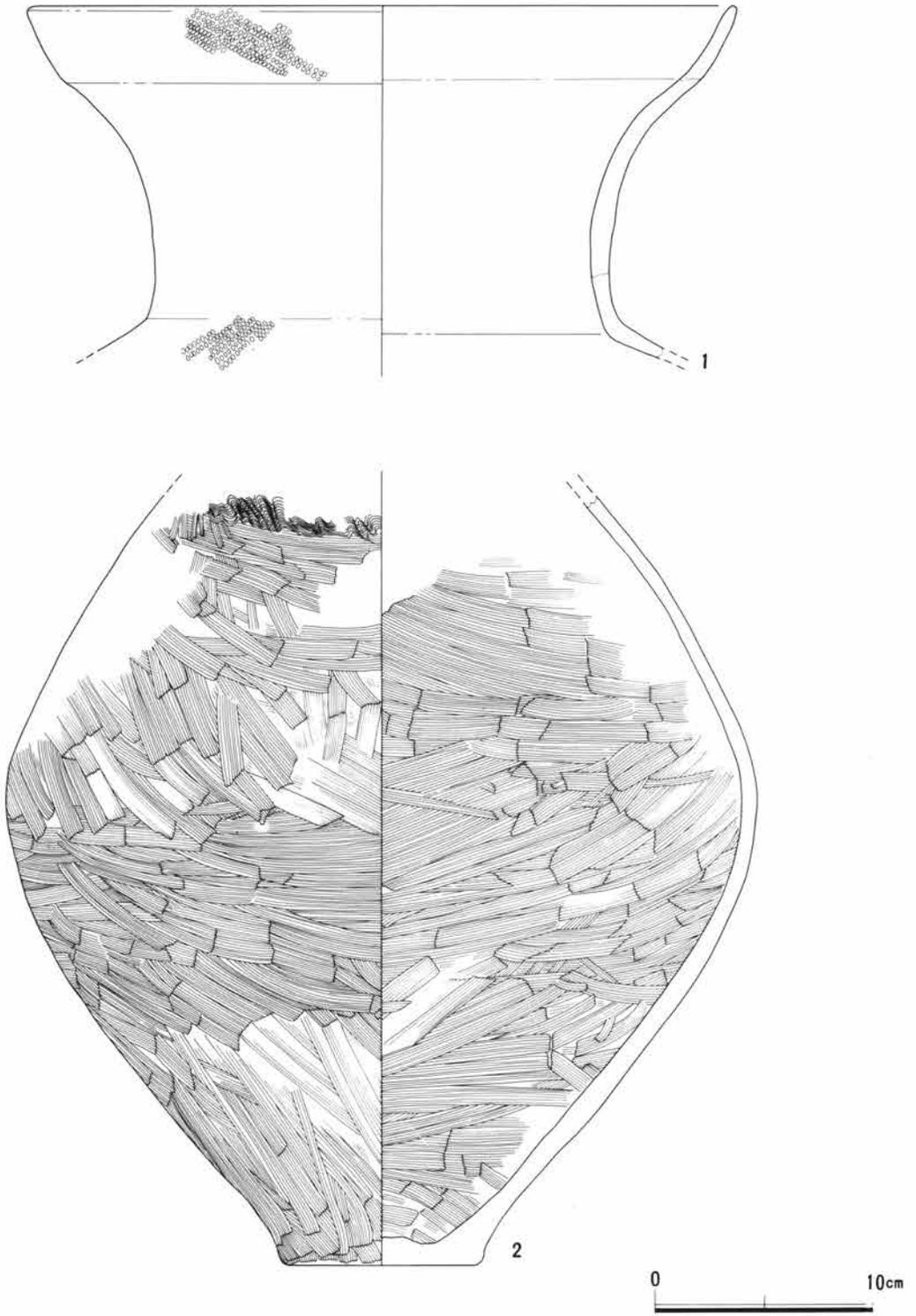
第256図 遺構外出土遺物⑥—縄文—



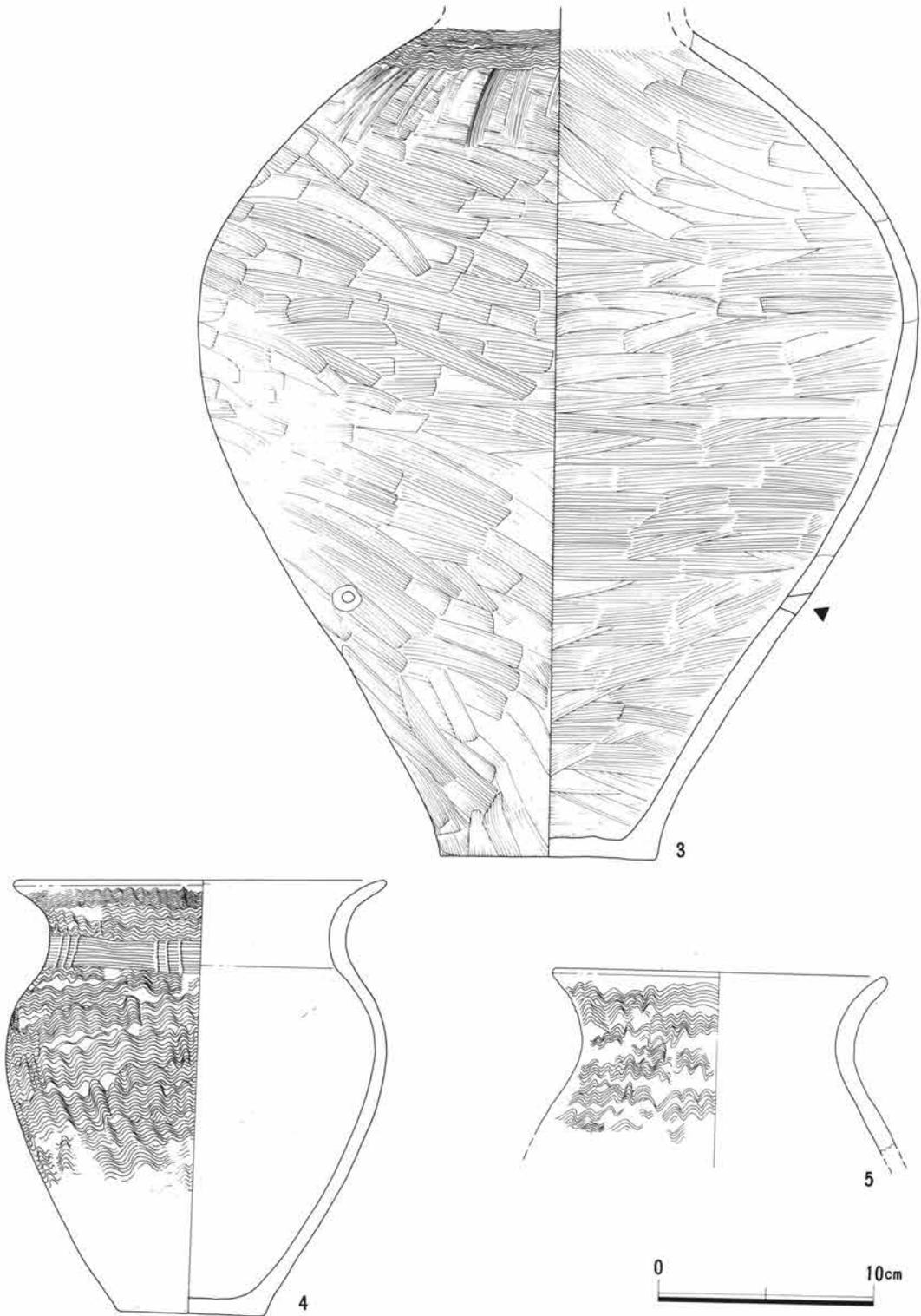
第257図 遺構外出土遺物⑦—縄文—



第258図 遺構外出土遺物⑧—繩文—

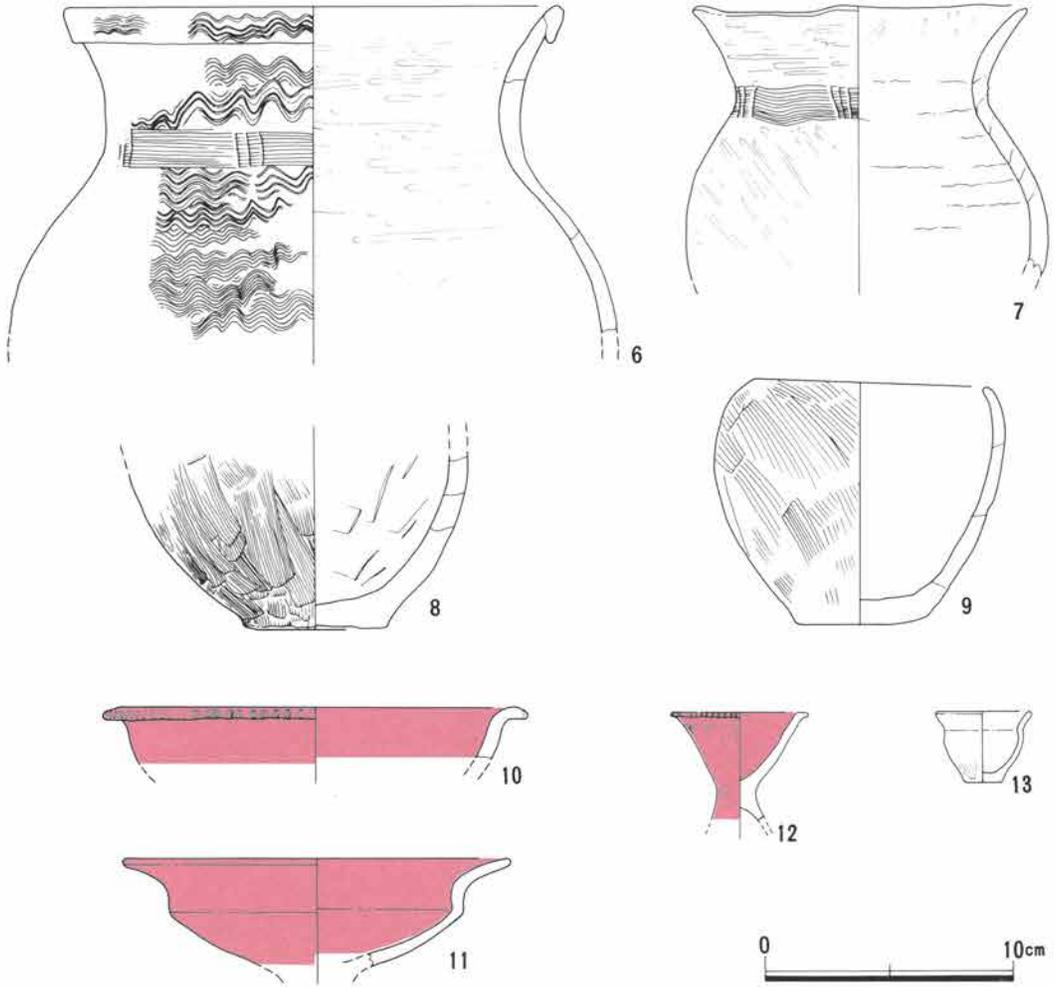


第259図 遺構外出土遺物⑨—弥生—



第260図 遺構外出土遺物⑩—弥生—

第II章 検出された遺構と遺物



第261図 遺構外出土遺物⑪—弥生—

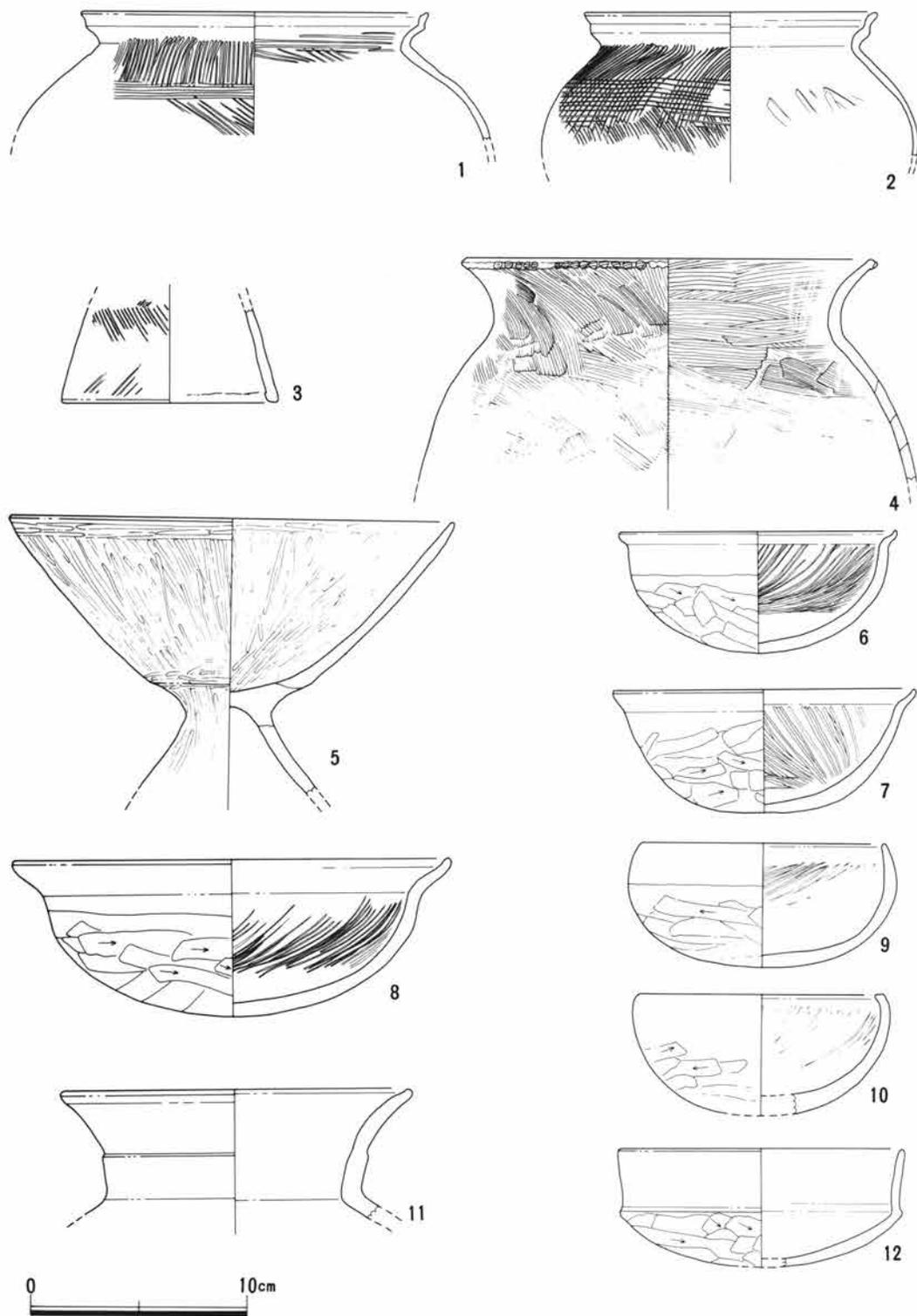
器種	出土位置 遺存状態	番号	法 量cm	形態の特徴	成形・調整手法・文様の特徴	備 考
壺	4区南第 3層 口縁 $\frac{1}{4}$	1	口径 32.4	頸部直立気味に立ちあがり、口縁部ゆるやかに外反、内外面に綾をもつ。	内面輪積痕。外面指ナデ後、縄文施文。内面ヨコ指ナデ。	砂粒を多く含む。焼成良好。軟質。橙色。内面スス付着。
壺	4区南第 4層 胴部 $\frac{1}{2}$	2	胴径 34.3 底径 9.0	胴最大径上部。胴下半ほぼ直線的につぼまる。	内面輪積痕。外面ナメハケ後、胴上部波状文。内面ヨコハケメ。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい橙色。

第11節 遺構外出土の遺物

壺	4区南第4層 胴部のみ	3	胴径 33.3 底径 10.0	胴最大径上部。胴下半は直線的につぼまる。	内面輪積痕。外面ナナメハケ後、胴上部タテハケメ、最後に胴上部波状文。胴下半直径1.4cmの焼成後穿孔内面ヨコハケメ。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい橙色。外面胴下部黒斑。
甕	4区南第4層 ほぼ完形	4	口径 17.3 胴径 17.5 底径 6.9 器高 20.1	胴最大径上部。頸部緩かにくびれ、口縁部大きく外反。	成形不明。外面タテヘラミガキ後、波状文、最後に右回り簾状文。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒少量含む。焼成良好。にぶい橙色。外面スス付着。
甕	4区南第4層 胴上部 $\frac{1}{2}$	5	口径 15.5	頸部緩かにくびれる。	内面輪積痕。外面波状文。内面ヨコヘラミガキ。内面胴部ヘラケズリ。	砂粒含む。焼成良好。黄褐色。
甕	4区南第4層 胴上部 $\frac{1}{2}$	6	口径 20.0	胴上部緩かに頸部に至り、口縁部緩かに外反。口唇部折り返し。	内面輪積痕、外面波状文施文後、頸部簾状文。内面ヨコヘラミガキ。	砂粒少量含む。焼成良好。にぶい褐色。
甕	4区南第4層 胴下部欠	7	口径 13.1 胴径 14.5	胴部球形、頸部「く」の字状にくびれる。	内面輪積痕、内外面ヨコヘラミガキ。頸部右回り簾状文。	砂粒を含む。焼成良好。赤褐色。外面黒斑。内面スス付着。
壺	4区南第4層 胴下半部	8	底径 5.7	胴下部球形。	外面輪積痕。外面タテハケメ。内面ヨコ・タテヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成良好。橙色。
鉢	4区南第4層 ほぼ完形	9	口径 9.6 底径 5.4 器高 9.7	最大径上部。口縁部内傾。	外面輪積痕、外面ナナメハケ後。ナナメ指ナデ。内面ヨコ指ナデ。	砂粒・石粒含む。焼成良好。にぶい黄褐色。
高杯	4区北第4層 口縁一部	10	口径 17.0	口唇部きざみ目。	成形不明。内外面赤彩後、ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成良好。赤色。
高杯	4区南第4層 杯部 $\frac{1}{2}$	11	口径 15.0	杯部有段。	成形不明。内外面赤彩後、ヨコヘラミガキ。	砂粒を含む。焼成良好。赤色。
小形高杯	4区南第4層 杯部のみ	12	口径 5.5	杯部直線的に開き、口唇部水平に外反。	手づくね。外面赤彩後タテヘラミガキ。内面赤彩後、ヨコ指ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。赤色。
小形甕	4区北第4層 口縁 $\frac{3}{4}$ 欠	13	口径 3.8 胴径 3.2 底径 1.5 器高 2.9	最大径胴上部。口縁部「く」の字状に外反。	手づくね。内外面指ナデ。	砂粒を含む。焼成良好。にぶい橙色。

遺構外出土弥生時代土器観察表

第II章 検出された遺構と遺物

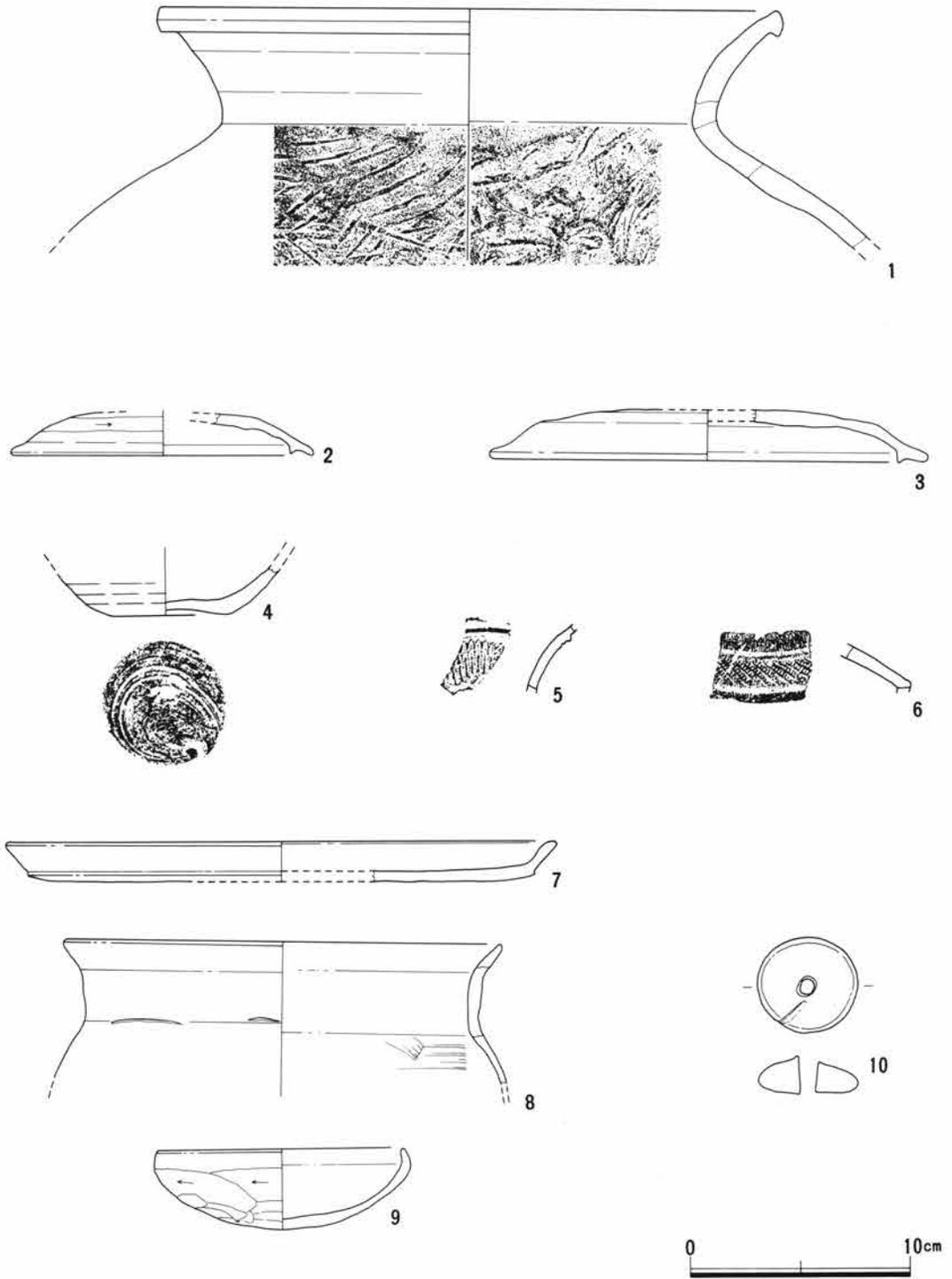


第262図 遺構外出土遺物⑫—古墳—

第11節 遺構外出土の遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量cm	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
台付甕 土師器	1区第4層 (5畝下) 胴上部 $\frac{1}{2}$	1	口径	口縁部外反し、「S」字状を呈する。	外面櫛状工具によるタテ・ナナメナケ後、横線文。内面頸部ナナメ・ヨコハケ目。口縁部内外面ヨコ指ナデ。	砂粒含み硬質。焼成良好。にぶい黄橙色。
台付甕 土師器	1区4層 (5畝下) 口縁～体部小片	2	口径 13.5	胴部は緩やかな丸みをもつ。口縁部は外反し、「S」字状を呈する。	外面胴部～頸部、櫛状工具による粗い櫛目文、口縁部横ナデ。内面胴部～頸部ヘラによる粗いナデ。口縁部横ナデ。	砂粒含み硬質。焼成良好。にぶい黄橙。内面に黒斑。
台付甕 土師器	1区4層 台部 $\frac{1}{2}$ 残	3	底径 10		外面櫛目状工具の痕あり。端部は内側に折り返している。	砂粒含み硬質。焼成良好。橙色。
台付甕 土師器	1区4層 胴上部 $\frac{1}{2}$	4	口径 19.2	口縁部緩やかに外反。	外面輪積痕。外面ナナメハケメ。内面ヨコハケメ。	砂粒含み硬質。焼成良好。橙色。
高杯 土師器	16住東拡 第2層	5	口径 20.5	杯部わずかに内湾しながら大きく開く。脚部「ハ」の字状にひらく。	内外面ヘラミガキ。	砂粒含み硬質。焼成良好。にぶい橙色。外面黒斑あり。
杯 土師器	1区表土 $\frac{1}{2}$ 残存	6	口径 13 器高 4.5	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反。口唇部は内湾。	外面体部上半～口縁部横ナデ。底部～体部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。体部はミガキ暗文が斜行。	砂粒を含み硬質。焼成良好。橙色。
杯 土師器	一区表土 $\frac{1}{2}$ 残存	7	口径 14 器高 5	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みをもつ。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部はやや内湾。	外面口縁部横ナデ。底部～体部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。体部はミガキ。暗文が斜行。	砂粒を含み硬質。焼成良好。橙色。
杯 土師器	3住覆土 2・3住覆土 2片結合 (3cm上)	8	器高 7 口径 20	丸底。底部～体部は双曲線的な丸みを持つ。口縁部は「く」の字状に外反し、口縁部は内湾する。	外面縁部は横ナデ。底部～体部はヘラ削り。内面縁部は横ナデ。体部は磨き、暗文が斜行する。	やや多量の砂粒を含む。比較的硬質酸化。橙色。底部黒色部分有り。
杯 土師器	第2層 $\frac{1}{2}$ 残存	9	口径 12 器高 5.5	丸底。底部～口縁部は双曲線的な丸みをもち、口縁部はやや内湾。	外面体部上半～口縁部横ナデ。底部～体部下半ヘラケズリ。内面ヘラミガキ。暗文が斜行。	砂粒含み硬質。焼成良好。橙色。底部黒色。
杯 土師器	第2層 $\frac{1}{2}$ 残存	10	口径 12 器高 5	口縁部は内湾し、口唇部は平らに切られている。	外面体部上半～口縁部横ナデ。体部下半～底部ヘラケズリ。内面口縁部横ナデ。体部ミガキ。暗文が斜行。	砂粒含み硬質。焼成良好。にぶい橙色。
壺 土師器	第2層 口縁小片	11		口縁部は「く」の字状に外反。口縁部中央に段を有する。	外面頸部～口縁部横ナデ。外面口縁部横ナデ。胴部～頸部ナデ。	砂粒含み硬質。焼成良好。橙色。
杯 土師器	第2層	12	口径 12.5 器高 5.5	丸底。底部～体部はゆるやかな丸みをもつ。体部と口縁部の間に段を有し、口縁部は直立。	外面底部～体部ヘラケズリ。口縁部横ナデ。内面底部～体部ナデ。	砂粒含み硬質。焼成良好。明赤褐色。

第II章 検出された遺構と遺物



第263図 遺構外出土遺物⑬—古代—

第11節 遺構外出土の遺物

器種	出土位置 遺存状態	番号	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整手法の特徴	備考
甕 須恵器	1区表土 口縁頸部 1/5	1		口唇中央に軽く稜をなして面取り。口縁緩く外反。頸部「く」字状に強く、肩部内反ぎみに外傾。頸部内面緩い稜。	口縁内外面輪積後、回転横ナデ。自然釉。肩部外面平行状叩き痕。内面青海波状アテ痕。	砂粒小石含む。還元。硬質。釉：黒褐色。素地：灰色。
蓋 須恵器	第2層 1/5以下	2		頂部水平傾向。端部稜なく丸い。内面断面三角形の身受け凸帯。両側段差。	内外面回転ナデ。頂部回転ヘラ削り調整。身受け削り出し。	砂粒少ない。還元。硬質。灰色。
甕 須恵器	4区北第 2層 1/5以下	3		頂部緩く内反。端部稜なく丸い。内面断面三角形の身受け凸帯。両側段差大きい。	内外面回転ナデ後、頂部回転ヘラ削り、ナデ調整。身受け削り出し後ナデ調整。	砂粒少ない。還元。硬質。灰色。
杯 土師質 土器	2区第2 層 底部のみ	4	底径 5.7	体部内反傾向。稜やや緩く底部上げ底。	体部輪積後内外面粗いナデ。底部右回転糸切り後無調整。	砂粒小石多い。酸化やや軟質。橙色。内面黒褐色。
甕 須恵器	1区北第 2層 口縁小片	5		外面上部に断面三角形の凸帯	外面櫛描波状文。内外面自然釉。	砂粒少ない。還元。硬質。釉オリブ黒色。素地灰色。
壺 須恵器	第2層 肩部小片	6		僅かに内反ぎみに下がり、胴部は稜をもって垂直に下がる。	外面はヘラ描の浅い凹線の下、12本単位櫛描斜行刺突文。内面回転横ナデ。	砂粒少ない。還元。硬質。灰色。
盤 須恵器	2区南第 2層 1/5	7	器高 1.4	口縁・体部大きく外傾、部分的に外反。口唇内面に軽い稜。底部・体部の境に稜。底部は平底だが歪む。	外面は口唇体部回転横ナデ。底部左回転ヘラ削り調整。内面回転ヨコナデ。	砂粒少ない。還元。硬質。外面灰色。内面灰白色。
甕 土師器	1区表土 口縁1/5	8		口縁外反後直立ぎみに内反。頸部直立。体部内反ぎみに拡がる。	外面は口縁・頸部横ナデ。体部上端接合痕。横ヘラ削り。内面は口縁・頸部横ナデ。体部→ヘラナデ。	砂粒少ない。酸化。硬質。にぶい橙色。
杯 土師器	完存 3区南 ピット内	9	口径 11.2 器高 3.6	口縁内反ぎみ直立。口縁・体部緩い稜。底部丸底。	口縁内反、横ナデ。体部横・底部不定ヘラ削り。	砂粒気泡含む。酸化。やや軟質。橙色。
土製 紡錘車	4区第2 層 完存	10	最大径 4.6 厚さ 1.7	不整形円で中央に径0.7cmの孔。表面・側面に段。	粘土円盤を棒状工具で穿孔後焼成、段はヘラによる。	砂粒多い。酸化。軟質。にぶい橙色。

遺構外出土古代土器観察表

第Ⅲ章 調査の成果と問題点

第1節 縄文時代の成果とまとめ

本遺跡は、井野川と唐沢川にはさまれた台地中央部に立地する。周辺遺跡には東側に高崎市大八木町箱田池遺跡^(注1)があり、中期加曾利E式期の住居址2軒と土坑数基が検出されている。^(注2)また南側では、同台地上に中期阿玉台式期の住居址4軒と土坑数基、後期堀之内式期の住居址1軒が検出され、さらに同台地北側の三ツ寺II遺跡^(注3)では、前期黒浜式・諸磯a式期の住居址5軒と土坑数基が検出されている。これらはいずれも平野部に移行する傾斜変換地点に乗っており、これを境に平野部である南側では縄文時代の遺構は確認されておらず、これが縄文時代の立地する南限として捕らえる事が出来る。

これらの周辺遺跡を見ると、南側の一段低い遺跡では中期から後期が中心であるのに対し、台地の北側では前期が主体で遺跡の分布があり、全体として時代の下降につれ遺跡立地に変化がうかがえる。

本遺跡は、両遺跡に挟まれた台地中央部に位置し、前期諸磯b式期の住居址1軒が検出され、また、包含層より中期後半加曾利EⅢ・EⅣ式から後期前半称名寺式、堀之内Ⅰ・Ⅱ式、加曾利BⅠ式期にわたる土器・石器片を多量に出土した。

以上本遺跡は、両遺跡の関連をつなぐ上で重要な位置を占める遺跡であると言えよう。しかし調査範囲が狭く遺構が少ない為、今後の調査を待ちたい。

注1 大八木町箱田池遺跡 高崎市教育委員会 1983年3月

注2 熊野堂遺跡Ⅲ地区・雨壺遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1984

注3 三ツ寺遺跡説明会資料 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1981年12月

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の遺構・遺物について

この時期の遺構は、住居20軒、溝2条、井戸5基、土坑13基である（井戸と土坑については、この他に可能性のあるものもある）。出土遺物により、後期初頭以降と考えられるが、古墳時代に入ると推定される住居址もあり、古墳時代は古墳時代移行期としてとらえた。

遺構が広範囲に分布しているため、住居址を中心として検出位置により便宜上4グループに分けて考える。

Aグループは、4区道路北側に存在する。4号と7号の2軒であるが、ともに中央付近より東

第2節 弥生時代および古墳時代移行期の遺構・遺物について

側は調査区域外となっており、全容は明らかではない。4号住居址からは後期初頭、7号住居址からは後期中葉前後の遺物が出土している。

Bグループは、4区道路南から3区北端部にかけて存在する。8号・9号・10号・11号・12号・13号・14号・15号・16号・18号・19号の11軒である。大形住居址が1軒と、床面プランが正方形ないしは正方形に近い住居址のグループであり、重複している住居址もある。2時期以上に分類出来ると考えられるが、明確ではない。このグループで、出土遺物により古い時期と考えられるのは、大形である16号住居址とその西南方向に位置する18号・19号住居址、および8号住居址である。いずれも後期中葉前後の土器を出土している。なお、19号住居址はプランが明確ではなく、18号住居址の南壁は16号住居址の南壁の延長線上にあるとみることにも出来よう。このグループの中で、新しい様相（後期後半から古墳時代初頭）をもつのが、9号・10号・12号・13号・15号住居址である。いずれも床面は正方形に近いやや隅丸の長方形である。13号住居址出土の小形壺と高杯は、土師器と考えられよう。13号住居址出土の甕形土器には、斜行する刷毛目文があるが、同様な手法をもつ甕形土器は、15号住居址からも発見されており、両者は近接した時期であることを示している。また、9号・12号住居址出土の波状文は、13号・15号住居址出土土器と同様に不規則である。なお10号住居址出土土器は、やや古い様相をもっている。また11号・14号住居址については、土器が少量および皆無であり不明である。

Cグループは、3区南端部に存在する21号住居址と22号住居址である。ともに床面は長方形を呈するが、22号住居址は短辺と長辺の比が大きい。21号住居址出土土器は、後期初頭の様相をもっている。また、22号住居址は、出土土器から後期中葉頃と考えられる。

Dグループは、2区中央やや北寄りに存在する。36号・37号・39号・48号・67号住居址の5軒である。67号住居址は、西側調査区域外へと延びており、全容は明らかではない。36号と48号住居址は重複している。このグループは、2時期に大別出来る。37号・39号住居址出土土器は、Cグループの21号住居址と同様に後期初頭の様相をもっている。36号・48号・67号住居址は、後期中葉頃と考えられよう。重複関係およびプランの相違を考えた場合、住居が営まれた時期はさらに分かれるかもしれない。

以上の事実から、本調査地区における弥生時代から古墳時代移行期の住居址は、3期に大別することが可能である。I期は、後期初頭前後である。Aグループの4号住居址とCグループの21号住居址、それにDグループの37号・39号住居址の4軒である。床面プランの全容が不明な4号住居址を除いて、やや隅丸の長方形であるが、長辺と短辺の比は小さい。柱穴はすべてに認められるが、やや不揃いである。Cグループの21号住居址と、Dグループの37・39住居址は、49m離れているが、同一の集落を構成していたものと考えたい。

II期は、後期中葉前後である。Aグループの7号住居址と、Bグループの8号・16号・18号・19号・Cグループの22号、それにDグループの36号・48号・67号住居址がこれにあたる。この時期の床面プランは正方形に近い隅丸長方形・長方形・隅丸方形の3種に区分されるので、住居が

第三章 調査の成果と問題点

つくられた時期はさらに分かれよう。8号住居址出土土器は、すべて小破片で量も少ないことから明確な判断は難かしいが、II期の中では最も古く、あるいはI期に溯るかもしれない。また、16号・18号・19号住居址は、土器様相が近似していることから、同時に営まれていた住居と思われる。

III期は、後期後葉から古墳時代移行期である。Bグループの9号・10号・12号・13号・15号住居址がこれにあたる。床面プランは、長辺と短辺の比が小さい長方形である。

住居址以外については、遺物量が少なく、また廃棄時を確実におさえられる出土状態のものが少いという事情から、不明な部分が多い。ほぼ確実なものとして22号土坑があり、I期に位置づけられる。

熊野堂遺跡第I地区の主な調査成果としては、次の3点があげられる。

その第1点は、中部地方以北⁽¹⁾にあつては発見例の無い弥生時代の井戸が検出されたことである。本遺跡は榛名山の南面に形成された扇状地形の末端にあり、地下水水位が高く⁽²⁾、湧出水を得やすいという自然環境下での弥生時代後期農耕集落の利水のあり方を示すものと思われる。

第2点は、前橋台地の北部では、これまで明確ではなかった弥生時代後期初頭の住居群と土器類が検出されたことである。この土器類は、中部高地千曲川流域で型式設定された“吉田式土器”⁽³⁾の範疇に入るものであるが、本遺跡でその一様式(型式)として把握される資料が確認されたことは、“吉田式土器”の型式設定に対する疑問を解決するだけでなく、北関東西部での弥生時代後期⁽⁴⁾櫛形文土器全般を樽式土器という概念のもとで把握しようとする考え方があつたのに対する、弥生時代後期土器の様式(型式)編年の検討に重要な初期の段階の資料を明らかにし得たということでもある。

第3点としては、9号・10号・13号・15号・16号の各住居址から赤色顔料が検出されたことである。いずれの住居址においても床面に散布していたが、なかでも13号住居址では片口形土器内から、また16号住居址では貯蔵穴内からも発見された。この赤色顔料の分析によると、本調査地区出土の赤色塗彩土器の顔料と同一であり、このことは土器の製作工程から判断して、赤色塗彩土器の生産も本遺跡では多くの住居址でおこなわれていたことを示している。⁽⁶⁾しかし本遺跡が、赤色塗彩土器の供給者的な性格をもつ遺跡であつたのか否かは、資料の増加を待ちたい。

注

- 1 宇野隆夫「井戸考」『史林』第65巻第5号 1982
- 2 本報告書第三章第7節
- 3 笹沢 浩「箱清水式土器発生に関する一試論」『信濃』第22巻第11号 1970
- 4 森嶋 稔「弥生時代」『更級埴科地方誌』2 1978
太田文雄「北信濃の後期弥生編年について」『信濃』第32巻4号 1980
- 5 外山和夫「群馬県吉井町祝神の弥生土器」『信濃』第34巻第4号 1982
- 6 本報告書第四章第3節

第3節 古墳時代の遺構・遺物について

1 古墳時代の概要

古墳時代の遺構は住居址の他、畠址・特殊井戸が注目され、隣接する熊野堂遺跡第II地区からは同時代の住居址の他、水田址・前方後方墳が発見されている。^(注1)当遺跡から発見された生活跡としての住居址、生産跡としての畠址、それらを結び付ける特殊井戸は、当時の生活空間を考える一端となるであろう。また、当遺跡の北方約1kmには古墳時代の豪族の館址と推定されている三ツ寺I遺跡^(注2)、同時代の住居址が多数発見されている三ツ寺II遺跡^(注3)・三ツ寺III遺跡^(注4)、更に井野川の西岸には同時代の水田址・畠址が発見されている御布呂遺跡^(注5)・芦田貝戸遺跡^(注6)がある。それらの遺跡を総合して、より拡がった生活空間を考えることも可能であろう。

2 古墳時代の住居址と遺物

当遺跡から検出できた古墳時代の住居址は16軒である。住居址は調査区域の北端（5軒）と南端（10軒）に集中しており、中間に古墳時代の住居址はない。北端の住居址群は東方に拡がると推定でき、南端の住居址群は熊野堂遺跡第II地区の住居址群と合わせて考える必要がある。^(注7)また南端の住居址群の北には特殊井戸があり、それが南端住居址群の北の境界と推定できる。当遺跡の中間は北端・南端と比較してローム層が下がっており、小さな谷地形が入り込んでいたのではないかと推測している。この事が古墳時代の居住区域を分ける一つの理由になるのではないであろうか。

古墳時代の住居址は3つの時期に分けることが可能である。I類は52号住居址・53号住居址・61号住居址であり、調査区域の南端部に集中している。住居址の規模は51号住居址が約3.5m×4m、52号住居址が約3m×3.5mと比較的小型であり、壁内に柱穴はない。61号住居址は全体は不明であるが、南北約5mと大型であり、柱穴と推定できるピットが検出されている。3軒ともカマドは東壁に構築されて、壁外への張り出しはほとんどない。

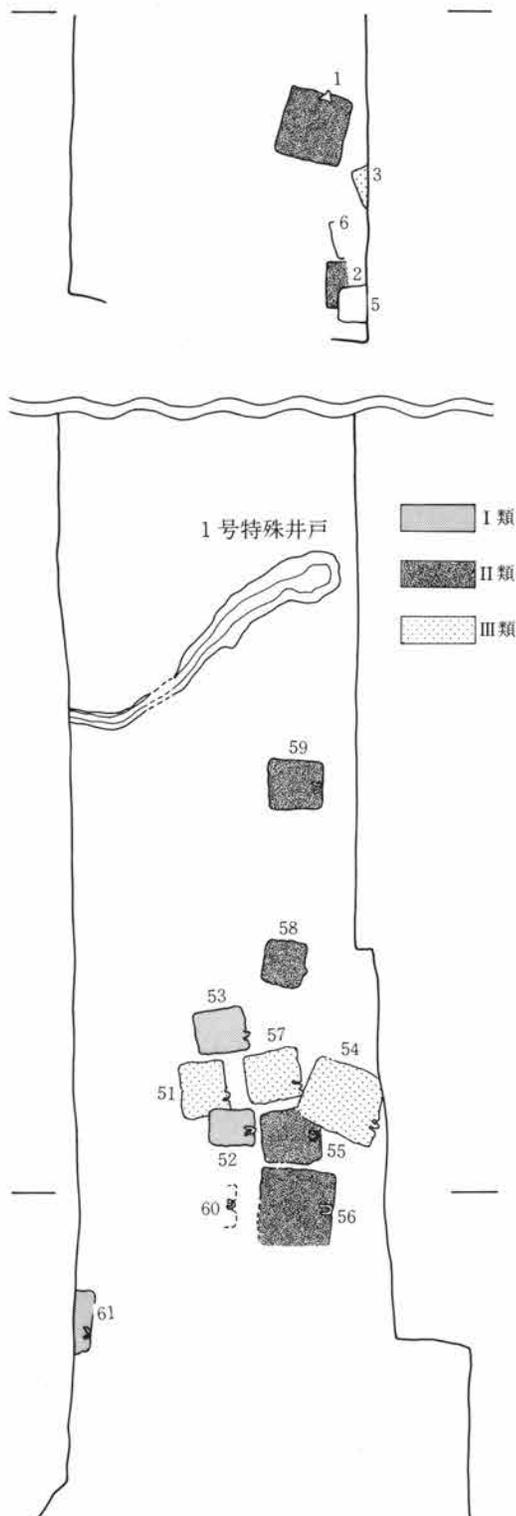
遺物は壺・小形甕・鉢・杯・高杯などが出土している。壺で全体が識別できるものは出土していないが、口縁部の中間に段を有し、同部分の下半にハケ目があるもの（61住-5）と、折り返し口縁のもの（61住-7）がある。小形甕は平底で胴部上半に最大径を有し、口縁部が「く」の字状に外反するもの（61住-1）と、丸底で最大径を胴部下半に有し、口縁部は直立し、口縁端部がやや外反するもの（53住-5）がある。技法は外面胴部がヘラ削りであり、口縁部は横ナデである。杯はA種とB種があり、A種（53住-1）は丸底であり、底部～体部にかけて大きく湾曲し、口縁端部がやや内湾するものである。技法は外面の底面～体部下半はヘラ削りであり、外

第III節 調査の成果と問題点

面の体部上半～口縁部と内面は磨きが施されており、暗文になっている。B種（52住－2）は平底であり、体部は直線的に拡がり、口縁部が直立するものである。器壁は外面の底部を除き、内外面共にナデであるが、内面体部は磨かれており、暗文になっている。高杯（52住－3・52住－8・61住－4）の完形品はないが、杯部は底面が平坦であり、体部～口縁部は直線的に拡がり、器壁は内外面共に磨かれており、暗文になっている。脚部は厚くであり、裾部がラッパ状に拡がり、外面の器壁はヘラ削りである。鉢（61住－3）は平底であり、体部～口縁部はゆるやかな曲線を持ちつつ拡がる。器壁は内外面共にヘラ削りである。これらを総合的に考えてみると、I類の土器は所謂「和泉期」の後半に比定できるであろう。

II類の住居址は1号住居址・2号住居址・55号住居址・56号住居址・58号住居址・59号住居址があり、調査区域の北端と南端に集中している。規模は約3m×3.2m～一辺約6mと、小型の住居址から大型の住居址がある。大型の住居址（55号住居址・56号住居址）は4本の支柱穴を有するが、小型の住居址（2号住居址・58号住居址・59号住居址）は壁内に柱穴がない。しかし、1号住居址は一辺約5mと比較的大型であるが、壁内に柱穴を持たない。カマドの検出できた住居址では、それは東壁に設置されているが、1号住居址だけは北壁に設置されている。II類に属する住居址のなかで、1号住居址だけは特異な存在である。

遺物は甕・杯・高杯・椀などが出土している。甕はA種とB種があり、A種（56住－1）は最大径を胴部下半に持ち、口縁部はゆるやかに外反する。器壁の外面胴部はヘラ削りであり、口縁部は横ナデ、内面はナデである。B種（1住－6）は口縁部が「コ」の字状に近い形をしている。杯もA種とB種があり、



第264図 住居址分類図

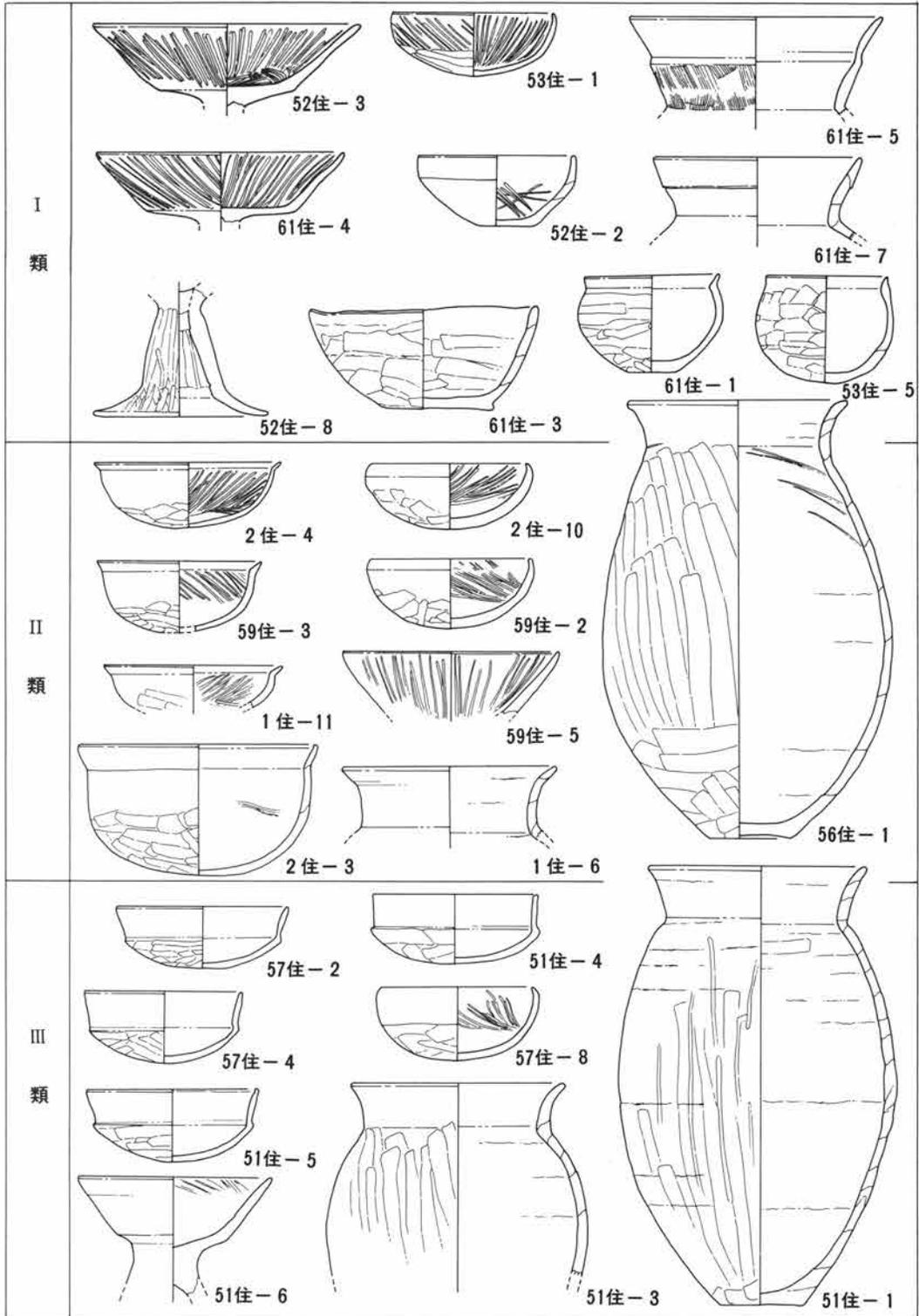
600分の1

A種（1住-11・2住-4・59住-3）である。器形は丸底であり、体部は双曲線的な丸みを持ち、口縁部が「く」の字状に外反する、所謂内斜口縁を持つものである。器壁の外表面付近はヘラ削りであり、体部～口縁部は横ナデである。内面の体部は磨かれており、暗文になっている。B種（2住-10・59住-2）は、やはり丸底で体部は双曲線的な丸みを持つものであるが、口縁部が内湾するものである。器壁はA種と同じく、外面の底面付近はヘラ削りであり、体部～口縁部は横ナデ、内面の体部～口縁部は磨かれており、暗文になっている。椀（2住-3）の器形は内斜口縁を持つ杯A種と相似しており、技法もほぼ同様であるが、口縁部の屈曲がゆるやかである。高杯（59住-5）は杯部の上半だけであるが、体部～口縁部にかけて直線的に拡がり、内面・外面共に磨きが施され、暗文になっている。II類の土師器は所謂「鬼高I」であるが、須恵器模倣杯は共伴していない。「鬼高I」の前半に当たるものと推測している⁽⁸⁾。

III類の住居址は3号住居址・51号住居址・54号住居址・57号住居址である。II類と同様に調査区域の北端と南端に集中している。北端から検出できたIII類の住居址は一軒のみであるが、住居群は東方に拡がっているものと推定している。規模は約3m×4m～約5m×6mであり、II類と同様に小型の住居址と大型の住居址があり、大型の住居址は4本の主柱穴を持つが、小型の住居址は壁内に柱穴を持たない。カマドを確認できたものはすべて東壁に設置されている。

遺物は甕・杯・高杯等が出土している。甕はA種とB種があり、A種（51住-1）は最大径を胴部中央に持ち、口縁部がゆるやかに外反するものである。器壁は外面胴部がヘラ削り、口縁部が横ナデ、内面の胴部はナデ、口縁部は横ナデである。B種（51住-3）は最大径を胴部上半に持ち、口縁部は「コ」の字状に近い形をしている。器の外面は胴部がヘラ削りであり、口縁部が横ナデである。杯もA種とB種があり、A種（51住-4・51住-5・57住-2・57住-4）は、丸底であり、口縁部が直立するかやや外反するものである。器壁の外面は、底面～体部がヘラ削り、口縁部が横ナデであり、内面は大部分が横ナデである。B種（57住-8）は、丸底であり、全体的に双曲線的な丸みを持ち、口縁部がやや内湾するものである。器壁は外面の底面～体部がヘラ削りであり、口縁部が横ナデである。内面の体部～口縁部は磨かれており、暗文になっている。高杯（51住-6）の杯部底面は傾斜しており、体部～口縁部は拡がる。器壁は内面の口縁部付近に磨きを施し、暗文になっている。III類の土師器は、須恵器模倣杯が多くなり、内斜口縁の杯が少なくなる。これも「鬼高I」であるが、後半に当たるものと推測している⁽⁹⁾。

I類からIII類の土器分類は詳細に分析したものではなく大まかであり、細かい点は検討しなければならない点も多い。特に、当遺跡では良好なセット関係が捉えられる一括遺物がなく、甕・甗などは検討できてない。また、2号特殊井戸から出土している土師器は、明らかにII類・III類に渡っている。2号特殊井戸出土の土師器は、堆積している榛名山の火山灰であるFAとの関係も考慮しつつ検討する必要がある。更に、住居址出土の遺物と総合する必要がある。当地域の須恵器模倣杯はFA降下前後⁽¹⁰⁾に出現するものではないか。



第265図 住居址出土土器分類表 1/6

3 畠址について

当遺跡からは畠址と推定している遺構が6面検出できた。古い方からⅢ区・Ⅳ区より検出した浅間山C軽石の純層で埋没している3号畠址・5号畠址、Ⅰ区より検出した榛名山の噴出物であるFPの二次堆積層で埋没している6号畠址、Ⅲ区・Ⅳ区より検出した浅間山B軽石が多量に混入している褐色土で埋没している1号畠址・2号畠址・4号畠址である。本稿はそのなかでも古墳時代の畠址を中心に（二次堆積FP下の畠址の残存状態は非常に悪いので、特に浅間山C軽石下の畠址を中心に）考えてみたい。

当遺跡で畠址と推定している遺構と同じ遺構は、当遺跡と井野川を挟んだ南西側の対岸に位置する芦田貝戸遺跡からも検出されている。芦田貝戸遺跡のⅢ区一Dから検出され、畝状遺構と名付けられている遺構であり、榛名山の火山灰であるFAで埋没しており、同じFA下の水田址とセットで検出されている⁽¹¹⁾。最近では渋川市の有馬遺跡⁽¹²⁾や前橋市の荒砥上ノ坊遺跡⁽¹³⁾などからも検出されている。有馬遺跡の畠址は、浅間山C軽石で埋没しているものがあり、荒砥上ノ坊遺跡の畠址は、浅間山C軽石で埋没している⁽¹⁴⁾。最近の発見例を考えると、或る程度普遍性を持つものと推測可能であろう。

検出された浅間山C軽石で埋没している3号畠址・5号畠址は弥生時代後期の住居址の上面を切って構築されており、時期は弥生時代末期から古墳時代初期に限定することができる。調査区域が上越新幹線の路線幅のため全体の規模は不明であるが、3号畠址は南北約25m・東西は22m以上である。検出されたサクは幅が約50cm、確認面からの深さが約30cm、サク間が平均で約80cm⁽¹⁶⁾あり、有馬遺跡から検出されている同時期の畠址と類似点が多い。

畠址だとすれば問題になるのは、当時その畠で何が栽培されていたかと言う事であろう。3号畠址・4号畠址では花粉分析⁽¹⁷⁾とプラント・オパール分析⁽¹⁸⁾を実施した。花粉分析は2地点を選び、畝部分を層位ごとに上下3ヶ所の土を採集して分析をした。分析の結果、木本ではマツ属・スギ科の針葉樹、ハンノキ属・クリ属・クリカシ属・ブナ属・アカガシ亜属・コナラ亜属・ケヤキ属・シナノキ属の広葉樹であるが、資料No.4でスギ属が比較的多く検出されただけで、全体的に少なかった。全体的に多く検出されたのが草本類である。各分析資料により検出量は増減するがナデシコ科・アカザ科・キク亜科・ヨモギ属・タンポポ亜科・イネ科が検出され、特に各分析資料からイネ科が検出されたのは注目すべきである。

花粉分析では科・属までしか判定できず、イネ科は大変種が多い科であり、一つの種の同定は困難である。また、花粉は移動性であることは事実である。これら問題点の解決に向って一步前進するために、プラント・オパール分析を実施した。資料はサクの部分を中心に、表土層を除いた各層位から採集した。分析結果はイネ(Oryza)が検出され、サクの部分に小さなピークが認められた。この結果、畠址では陸稲が栽培されていた可能性が大きくなってきている。

畠址で陸稲が栽培されていたとすれば、大きな問題が出てくる。当遺跡の南に隣接し、連続す

第Ⅲ節 調査の成果と問題点

る遺跡である本遺跡第Ⅱ地区では同じ浅間山C軽石で埋没している水田址が検出されており更に(19)井野川を挟んだすぐ対岸の融通寺遺跡からも同じ時期の水田址が検出されている。僅か1kmも離れていない場所に水田があり、稲が栽培されているのに、何故陸稲を栽培しなければならないか(20)である。現在確認することができる古墳時代初頭の集落は、本遺跡第Ⅱ地区と雨壺遺跡(21)に存在するが、一つの集落だけで水田で稲を栽培する他、畠でも陸稲を栽培しなければならない程(陸稲は単位面積当りの収穫が低い)人口が存在したのであろうか。当時の栽培技術の問題や交易の問題も検討せず、しかも周辺の集落全体を把握していない段階では憶測にしかすぎないが、井野川の氾濫原を利用した水田耕作は氾濫等で不安定であり、その不安定さを補うために陸稲が栽培されていたのではないだろうか。陸稲が水稲の補助であり、常時栽培されていたのではないとすれば、陸稲の他に畠で栽培されていた物は何なのであろうか。確実に栽培されていた植物が検出されたわけではないが、花粉分析でキク科の植物、特にヨモギ属が検出されたのは注目すべきである。多くの種を有するキク科には食用になる植物が多く、特にヨモギ属は食用植物が多いからである。水稲栽培を補うための陸稲栽培からキク科植物の栽培と、仮説の域を逸脱して空想の域に入ってしまったのかもしれない。しかし、FA下であり、時期は少し下るが、芦田貝戸遺跡(22)からも水田址と畠址がセットで検出されていることは興味深い。

当遺跡の畠址は居住区と生産区との関係、周辺の集落との関係、栽培植物や耕作技術の問題など多くの課題が残り、今後検討を続けなければならないであろう。

註

- 飯塚卓二・関晴彦・女屋和志雄・井川達雄『熊野堂遺跡・第Ⅱ地区』「年報2」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 清水和夫他『熊野堂遺跡』「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ」群馬県教育委員会 1975
- 細野雅男他『熊野堂遺跡』「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ」群馬県教育委員会 1979
- 細野雅男他『熊野堂遺跡』「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ」群馬県教育委員会 1980
- 下城正・女屋和志雄・小安和順『三ツ寺Ⅰ遺跡』「年報1」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 下城正『三ツ寺Ⅰ遺跡』「年報2」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 長谷部達雄・細野雅男・飯塚卓二・下城正・関晴彦・女屋和志雄・坂井隆・小安和順「年報1」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 都丸肇他『三ツ寺Ⅲ遺跡』「上越新幹線地域埋蔵文化財調査概報Ⅵ」群馬県教育委員会 1980
- 神戸聖語・関口修・高橋政子「御布呂遺跡—高崎市文化財調査報告書18集」高崎市教育委員会 1980
- 田村孝・小野和之・金井潤子「芦田貝戸遺跡Ⅱ—高崎市文化財調査報告書19集」高崎市教育委員会 1980
- 註1に同じ
- 岡田淳子他「八王子中田遺跡」八王子中田遺跡調査会 1968
- 註1に同じ
- 石川正之助・井上唯雄・梅沢重昭・松本浩一編「特集・火山堆積物と遺跡」『考古学ジャーナル』No157 1979
- 註6に同じ
- 佐藤明人・山口逸弘・友廣哲也『有馬遺跡』「年報2」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 鹿田雄三・小島敦子・齊藤利昭『荒砥上ノ坊遺跡』「年報2」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 註9に同じ
- 註10に同じ
- 註9に同じ
- バリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 宮崎大学農学部、藤原宏志先生に依頼した。
- 註1に同じ
- 飯塚卓二・女屋和志雄・井川達雄『融通寺遺跡』「年報2」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 飯塚卓二・女屋和志雄・井川達雄『雨壺遺跡』「年報2」財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- 註6に同じ

第4節 古代の遺物・遺構について

返りを有する須恵器蓋の出現する時期から浅間山B軽石降下直後頃の時期までを古代として扱い、本遺跡第I地区における遺物・遺構の特徴をまとめたい。この期間の上限は、畿内宮都調査における飛鳥I期あるいは陶邑古窯跡群調査におけるIII期、即ち7世紀初頭以降である。^(注1) 下限は、^(注2) 浅間B軽石の降下を天仁元(1102)年とすれば、12世紀前半となる。この期間をさらに、ヘラ切り技法の須恵器杯の時期・糸切り技法の須恵器杯の時期・土師質土器の盛行の時期・B軽石降下以降の時期の四期の時間軸を前提にし、それぞれ古代I期～古代IV期に大別して考えることにする。

A 出土土器の分類〔第266図〕

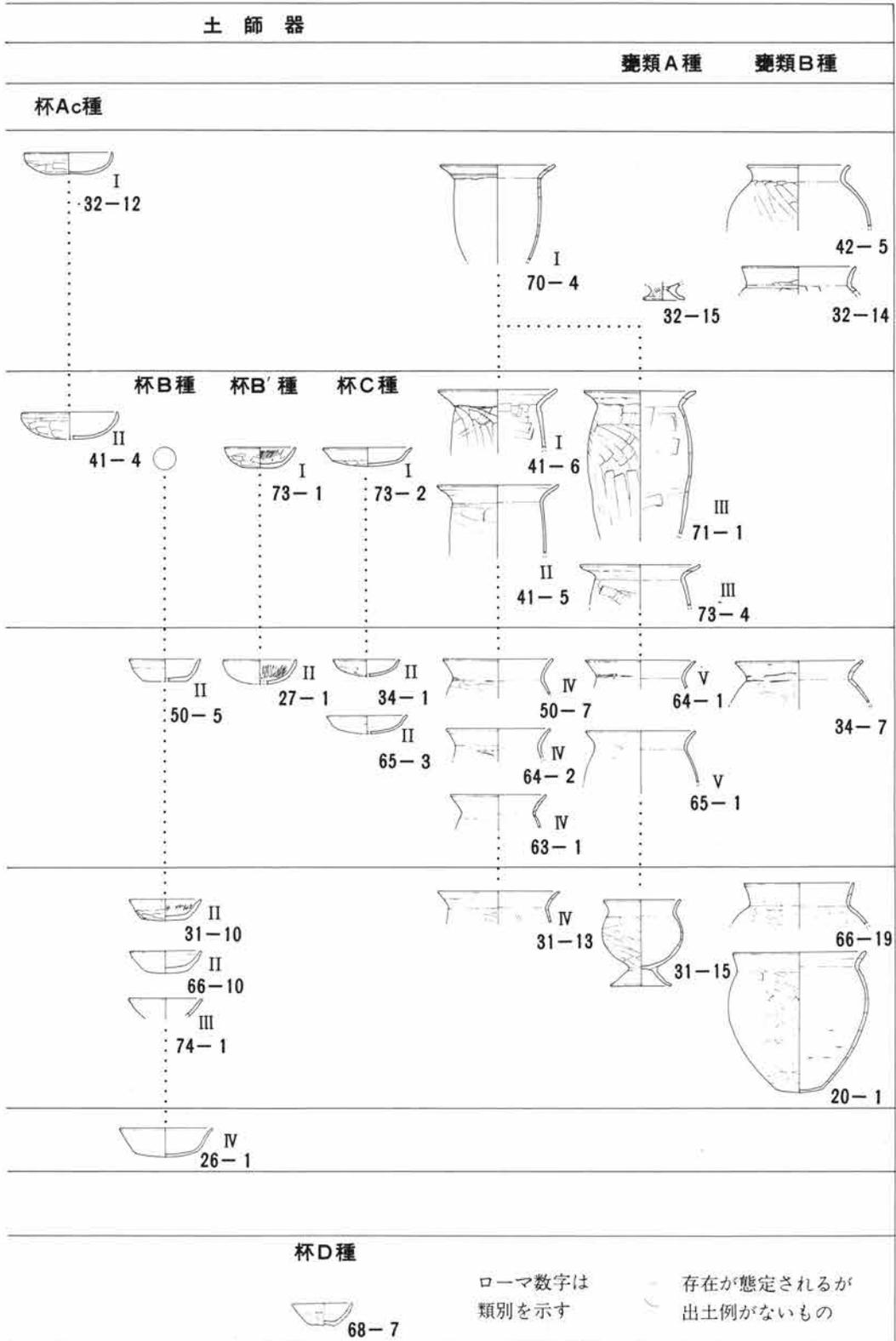
第I地区では、ほとんどの遺構からは古代III期以降の遺物は出土していない。特に住居址からの出土は、全く見られなかった。2号特殊井戸の石敷部とその周辺からは大量の土器片が出土したが、それは古代I期からII期に至る多種のものであった。この石敷部からは、前述のように堅穴住居址居住者の日常生活と密接な関係を想定できる椀・杯・蓋・壺・甕などの器種の須恵器・土師器が見られた。そのため本地区における古代I・II期の土器の全体像を把握するには最適であると考えられたため、まずこの2号特殊井戸出土の杯・蓋の分類を試みた。

須恵器杯類は、口径が器高の5倍以上で口径20cm以上を盤・以下を皿とし、5倍以下のものを実用的な高台を有するものを椀、それ以外を杯とした。椀・杯共に口径が12～15cmのものをA種、9～10cmのものをB種、17～20cmのものをC種とした。最も出土数の多い杯を見ると、底部切り離し・調整技法により、次の6類に区分できる。I類：回転ヘラ切り後回転ヘラ削り調整、II類：回転ヘラ切り後手持ちヘラ削り(ナデ)調整、III類：回転ヘラ切り後無調整、IV類：回転糸切り後全面調整(ヘラナデ)、V類：回転糸切り後周縁調整(回転ヘラ削り、ヘラナデ)、VI類：回転糸切り後無調整。I類には、体部下位に擬高台を有する器形のものが含まれる。技法の判明する杯全種69片の分類比は、I類24%・II類26%・III類20%・IV類6%・V類7%・VI類16%であった。ただしVI類の7片のうち3片は、溝部南側の出土である。椀は、8片のうち1片が同じく溝部南側出土のVI類のもので、他は全てI類である。^(注4) 椀・杯の法量分布は、大半がA種で器高は3.0～4.5cmであり、B種は2点、C種も2点しか見られなかった。

須恵器蓋は、古代以前の陶邑II期系統のものが1点石敷下より出土しているが、それを除けば口径(返り径)13～15cmのA種・17～19cmのB種共に、身受け形態により次の6類に区分できる。I類：返り断面三角形で両側段差なし、II類：返り断面三角形で両側段差あり、III類：返り断面横向き半円形、IV類：返り消滅し段差を身受けとする、V類：内反する端部を身受けとする、VI類：垂下する端部を身受けとする。身受け形態の判明する総数30片の比は、I類37%・II類30%・

器種 時期	須恵器					杯Aa種	杯Ab種
	杯A種	杯C種	椀C種	蓋A種	蓋B種		
I O期					2 特殊井戸-57		
I A期	 			 		 	
I B期	○		○			 	
I C期	○		○	○	○	 	
II A期	 			 		 	
II B期							
II C期		<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">椀A種</div>					
II D期		 					

第266図 (1) 古代土器編年表



第266図 (2) 古代土器編年表

第三章 調査の成果と問題点

III類10%・IV類3%・V類7%・VI類13%である。なおI類は、返り先端が鋭いものが4片に対し、短かい返りのものが7片である。

土師器杯類は、口径が器高の3倍以上のものを杯とし、以下のものを椀とした。椀は出土数が少い。杯は器形の特徴より、陶邑II期の須恵器杯を模倣した薄い丸底の模倣杯系統(A種)、南関東などの盤状杯からの技法的流れが考えられる厚手の盤状杯系統(平底B種・丸底B'種)、そして須恵器盤の模倣からの形態が見られる須恵器盤系統(C種)に大別できる。さらに2号特殊井戸からの出土はないが、清里陣馬III期の須恵器杯を模倣した形態(D種)が1点、68号住より出土している。

A種の杯は、口径の大きさより12~14cmのAa種、10cm前後のAb種、15cm前後のAc種に細別できる。これらは、口縁・体部の調整技法と形態により次の5類に区分できる。I類：体部横ヘラ削りを施し口縁と体部の間に稜を残し口縁長く直立。II類：体部横ヘラ削り弱く稜緩くなり口縁短かく内傾。III類：体部ナデにより稜消え、口縁やや長く直立か外傾、平底傾向。IV類：体部指オサエ調整、底部平底で体部・底部に稜。V類：口縁外反、体部強い指オサエ調整、平底。

B種とB'種の杯は、次の4類に区分できる。I類：口縁・体部厚く内反ぎみ、体部・底部に稜、口縁外面沈線、硬質焼成、内面に回転調整痕と暗文。II類：口縁・体部に緩い稜、口縁やや外反ぎみ、底部厚い、体部・底部稜弱く、硬質焼成、内面に回転調整痕と暗文。III類：口径大きく器高低く、体部・底部稜弱い、軟質焼成、内面に回転調整痕と暗文。IV類：口縁大きく外反、体部・底部稜弱く、軟質焼成、回転調整痕と、暗文消滅。I・II類とIII・IV類の差は大きく、B'種はI・II類しか見られない。B'種は、法量的に椀に近いものもあるが、より顕著なこの系統の椀は別に存在する。またA種にも椀がある。

C種の杯は、形態の特徴より次の2類に区分できる。I類：口径大きく、体部横ナデ、体部・底部に顕著な稜、硬質焼成。II類：口径大きく、口縁・体部低く、体部・底部稜緩く、軟質焼成。この系統のものは検出例が少く、2類間の差は大きい。D種の杯は、上記A・B・C各種とは全く無関係に、同時期の須恵器杯の模倣より作られたものだろう。

土師器甕類は、2号特殊井戸からの出土は極めて少い。そこで各住居址出土のものより分類してみた。口径が胴径と同じか大きいものをA種とし、胴径が大きいものをB種とする。A種は、形態と頸部の技法より次の6類に分類できる。I類：口縁強く外反し、頸部にヘラ削り成形痕の稜、肩部斜ヘラ削り調整、口径大。II類：口縁外反やや弱く、頸部横ナデ調整により稜なし、肩部横ヘラ削り調整。III類：口縁強く外反、頸部にヘラ削り成形痕の稜、肩部横ヘラ削り調整、口径は胴径と等しい。IV類：口縁緩く外傾、頸部強い指横ナデ調整、肩部横ヘラ削り調整。口径は胴径と等しい。V類：口縁緩く外傾、頸部にヘラ削り成形痕の稜、肩部横ヘラ削り。VI類：口縁短かく外傾、頸部直立し横指ナデにより「コ」字状。I類→II類→IV類の流れと、I類→III類→V類の流れがあり、VI類は前者の系例より生まれたと思われるが、IV類との間にはまだ中間的なものが存在するだろう。B種は、形態の差が大きく、出土例も多くない。A種はカマド内の出土が多く

煮沸器と考えられ、B種は貯蔵穴内の出土例があり貯蔵器と思われる。

B 住居址と土器の関係

以上のように、2号特殊井戸出土の土器をもって、須恵器杯を3種6類・須恵器蓋を2種6類・土師器杯を4系統7種5類に、そして住居址出土の甕を2種6類に分類した。この分類において、類別を生産地の地域・時間差とし、その住居址での出土状態より消費地での使用種別構成関係を考え本集落での時期変遷としたい。^(注5)なお層位的に確実な本時代の住居址の重複関係は、次の通りである。

旧		新		新	旧		新		新
20号住	→	11号井戸			40号住	?	41号住		
27号住	→	26号住	→	25号住	44号住	→	43号住		
28号住	?	29号住			65号住	?	66号住		
32号住	→	31号住			72号住	→	71号住		
35号住	→	34号住			72号住	→	73号住	→	74号住

古代I A期は、須恵器杯A種I・II類、同椀C種I類、同蓋A種IV類・B種II類、土師器杯Aa種I・II類・Ab種II類・Ac種I類・同甕A種I類を有する。須恵器杯蓋と土師器杯に法量差による多様化が見られる。須恵器蓋A種は、返りがほとんど消滅した段階である。2号特殊井戸の出土状況を見れば、それ以前の段階のものが存在するはずだが、確実な出土住居はない。小形の須恵器杯B種はこの時期に存在したと思われるが、やはり住居からの出土例はない。該当住居址は、28号住・32号住・35号住・42号住・45号住・70号住・72号住の7軒であり、大きく3群構成である。

古代I B期は、須恵器蓋A種IV類、土師器杯Aa種II類・Ac種II類・B'種I類・C種I類、同甕A種I～III類を有する。須恵器杯は、A種I・II類が前期同様存在したと思われるが、出土例はない。蓋も前期と差がない。本期を特徴づけるのは、土師器杯B'種とC種の出現である。いずれも前期からの系統が考えられずに突然現れる。A種の杯は前期と構成は変わらないが、II類になる。甕は、技法の異なるII・III類に分かれる。該当住居址は、30号住・33号住・38号住・41号住・44号住・71号住・73号住の7軒であり、北側の分布がなく2群を成す。

古代I C期は、土師器杯Aa種III類・B種II類・B'種II類・C種II類、同甕A種IV・V類を有する。須恵器杯・蓋は出土例はないが、前期同様の傾向が想定できる。土師器杯は、前期と同じく極めて多種にわたり盛行している。大形のAc種は、C種との競合により消滅したと思われる。本期の特徴として確実にB種が出現する。B・B'種はかなり普遍的に見られる。甕は、前期同様二系統の技法が併存するが、前期で頂点に達した口縁の強い張り出し形態がくずれてきている。該当住居址は、27号住・29号住・34号住・40号住・43号住・49号住・50号住・63号住・64号住・65号住の10軒であり、基本的な2群の他に南北方向の2群の計4群構成である。2号特殊井戸に

第三章 調査の成果と問題点

は、最も接近して南端の2軒がある。

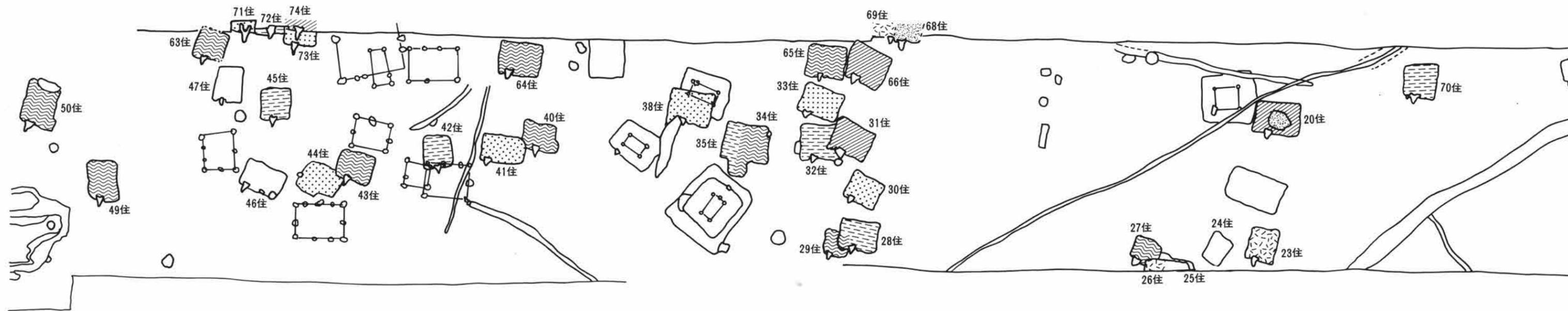
古代II A期は、須恵器杯A種II～V類、同椀C種V類、同蓋A種VI類・B種VI類、土師器杯Aa種III類・Ab種II類・B種II・III類・C種II類、同甕A種IV類を有する。須恵器杯は、本期の特徴である糸切りによるIV・V類が、ヘラ切りのII・III類と共に現われている。III類は、前期までにすでに登場していただろう。蓋も返りのないVI類が、大小二種確実に見られる。返りの消滅直後のV類は、前期に出現していたと思われ、VI類は極めて定形的に落ちついた器形になっている。大形のB種は、C種椀と一体のものだろう。土師器杯は、A・C種は前期と同様だが、B'種は見られずB種は軟質のIII類になる。I B・IC期に頂点を見た土師器杯の多様な器種構成は、ここではっきりした減少傾向が現われる。多量の須恵器杯が住居へ供給可能になったためであろう。糸切り須恵器の多量供給状態により、食器形態における土師器と須恵器の主客転倒の開始がここに見られる。甕は、I期全体を通して盛行した頸部有稜の特徴的系列が消えている。該当住居址は、20号住・31号住・66号住・74号住の4軒で、3群に分かれる。

古代II B期は、須恵器杯A種VI類、土師器杯Aa種V類・B種IV類、同甕A種VI類を有する。須恵器杯A種VI類の登場が本期の特徴である。残存状態の良い例が少ないが、須恵器杯は、完全に大量生産型のVI類になり、土師器杯Aa種は、IV類も規定できる。土師器杯は、Aa・Bの2種だけに減少する。土師器甕は、VI類のいわゆる「コ」字状甕が登場している。該当住居址は、23号住・26号住・69号住の3軒で、北側の2群構成である。2号特殊井戸は、この時期にはすでに埋没していた可能性がある。

古代II D期は、須恵器杯A種VI類、同椀A種VI類、土師器杯D種を有する。土師器杯D種の出現をもって本期の示標とする。須恵器椀杯はほぼ同じ底部小さく器高高い器形で、焼成はかなり軟質になっている。これらを模倣して土師器杯D種が現われている。該当住居址は、68号住1軒である。なおII B期との変化が大きいため、空白のII C期を設定した。11号土坑の須恵器杯は、このII C期のものと思われる。

C 小 結

以上のように本地区の古代住居址36軒（不明4軒）を、2号特殊井戸出土土器の分類と遺構の重複関係によりI A期からII D期までの7期に編年した。調査範囲内で確認された住居址の数から見れば、I A期からI C期までが最も本地区が栄えた時期と考えられる。ただし2号特殊井戸の出土土器には、I A期以前のI～III類の須恵器蓋などがかなり見られる。そのため須恵器杯I類と蓋I～III類の組み合わせによるI O期とも言うべき時期に、この遺構は造られたのだろう。なお第2源泉部の築造と石敷設置は、石敷下層出土土器より少くともI C期以後と考えられる。また4・5号掘立は、42号住以前のI O期以前と推定できる。次に本地区の南東側の本遺跡第III地区の古代遺構については、同様の時期区分をすれば、I A期が4号住、I B期が11号住・14号住・15号住・16号住・2号掘立、I C期が13号住・柱穴列となり、II D期が1号住・12号住であ



- IA期
- IB期
- IC期
- IIA期
- IIB期
- IIC-D期

第267图 古代住居址分類图

る。また第Ⅲ地区の唐沢川の対岸にあたる雨壺遺跡は、古代Ⅱ・Ⅲ期の大集落であるが、そのうち66号住・7号掘立・38号土坑がⅡA期、6号掘立がⅠC期と考えられる。^(注6)

これら各時期の年代観は、次のように考えられる。ⅡB期・ⅡC期・ⅡD期は、雨壺遺跡の時期区分でも使われた本遺跡北約7kmの距離の清里陣馬遺跡^(注7)の土器編年のⅠ～Ⅲ期にほぼ対応している。陣馬Ⅰ～Ⅲは、それぞれ9世紀前半・9世紀後半・10世紀前半の年代が与えられている。一方陣馬Ⅰの年代の根拠となった万年通宝(760年初鑄)を共伴した松井田町愛宕山遺跡^(注8)4号住では、Ⅵ類の須恵器が見られる。本県地域における須恵器糸切りの確実な初源は、笠懸窯跡群^(注9)でⅣ類の杯が国分寺創建瓦と共に出土している例である。それらを考えれば、ⅡA期は、8世紀第3四半期と想定できる。そして良好な資料の少なかったⅡB期は、第4四半期から9世紀前半頃までの時間幅を持たせたい。Ⅰ期は年代推定が極めて難しいが、畿内消費地の平城宮では、須恵器蓋の返りは西暦700年前後の平城Ⅰ期に消滅している。南関東地方における盤状杯は、^(注10)少くも8世紀第2四半期には出現していたとされている。北武蔵地方では、8世紀第1四半期に、返りのある蓋が消滅したとされている。^(注11)本地区では、ⅠB期において返りのある蓋は消滅しており、一応ⅠB期を8世紀第1四半期、ⅠC期を第2四半期と考えておく。ⅠA期及びⅠO期はさらに難しいが、以上より類推して7世紀後半としておきたい。今後、山ノ上碑建立の辛巳年(681年推定)にはすでに創建されて僧が住んでいた放光寺(山王廃寺)の調査整理の進行により、7世紀後半の土器の様相が判明するのを待ちたい。

- 注1 奈良国立文化財研究所：『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』、奈文研学報第三十一冊、1978
 2 新井房夫他：『火山堆積物と遺跡Ⅰ』、『考古学ジャーナル』№157、1979
 3 群馬県埋蔵文化財調査事業団：『清里・陣馬遺跡』、1981において、10世紀後半に須恵器工人在木器に影響されて作った酸化炎焼成を基本とし、ロクロ成形、窯体使用の土器群、と規定されている。
 4 ½以上残存しているものみの計測値による。
 5 平面・水平位置の記録のあるものとカマド内出土のものに限った。
 6 群馬県埋蔵文化財調査事業団：『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡』、1984
 7 注3文献
 8 注3文献による。
 9 注3文献による。
 10 相武古代研究会・東洋大学未来考古学研究会：『シンポジウム盤状杯』、1981
 11 金子真土：『北武蔵の須恵器——7・8世紀の様相について——』、『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第4号、1982

第5節 道路状遺構と推定東山道について

A 本遺跡発見の道路状遺構と周辺の遺構

3区北側では、農道に平行して路面幅2m以上の道路状遺構と大小9条の溝そして1箇所の畠址(5号)が検出された。これらの各遺構の出土遺物及び土層堆積状態より推定される時期は、次の通りである。(方位は、座標北よりの計測値。以下同。)

- 3号溝 遺物なし。覆土浅間B軽石混在土。浅間B軽石降下後埋没。走向N29°W。^(注1)
 4号溝 常滑系甕片。掘削2期。最上層浅間B軽石純層。3号溝より旧。浅間B軽

第III章 調査の成果と問題点

- 石降下時に完全埋没。走向N67°E。
- 5号溝 遺物なし。覆土浅間B軽石混在土。3号溝と重複。浅間B軽石降下後埋没。走向N64°E。
- 6号溝 同上。 走向N57°E。
- 7号溝 灰釉陶器椀片。覆土浅間B軽石混在土。浅間B軽石降下後埋没。走向N67°E。
- 11号溝 土師器杯・須恵器壺・土師質土器杯片。覆土浅間C軽石混在土。5号畠址より旧。古代I期～II期に埋没。走向N58°W。
- 18号溝 土師器杯甕・須恵器壺・平瓦片。覆土浅間C軽石混在土。道路状遺構・19号溝・20号溝より旧。古代I～II期に埋没。走向N66°E。
- 19号溝 須恵器甕・丸瓦片。覆土浅間B軽石混在土。浅間B軽石降下後埋没。走向N59°E。
- 20号溝 常滑大甕片。覆土浅間B軽石混在土。道路状遺構より新。常滑III期に埋没。走向N58°E。
- 道路状遺構 遺物なし。構築3もしくは4期。浅間B軽石降下後埋没。18号溝より新、20号溝より旧。走向N58°E。
- 5号畠址 遺物なし。覆土浅間B軽石混在土。浅間B軽石降下後埋没。走向N66°E。

以上の検出状況よりこれらの各遺構の存続は、次のように考えられる。

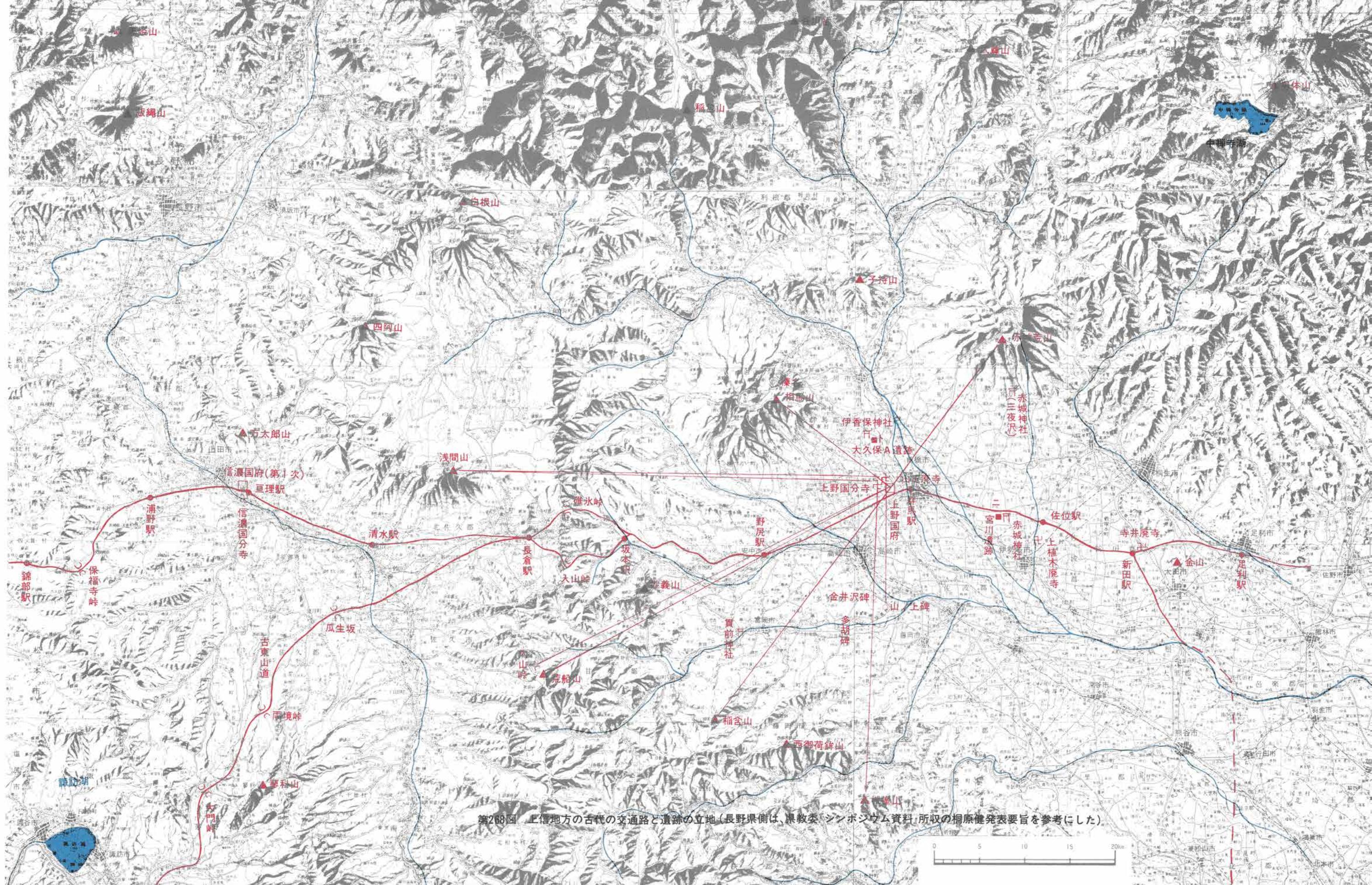
道路状遺構第1次路面構築以前 18号溝(11号溝)埋没。古代I～II期。

// 第2次路面構築以前 4号溝埋没。浅間B軽石降下。

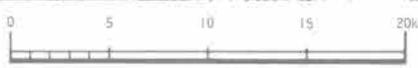
// 第4次路面廃絶以後 3・5・6・7・19・20号溝、5号畠址埋没。常滑III期。

まとめれば、古代I期以前に掘削された18及び11号溝の廃棄後の古代II期に道路状遺構が構築された。この時までにはすでに一回埋没していた4号溝は、再掘削されていたが浅間山の爆発によってB軽石で再埋没した。爆発中に第2次路面が構築されたが、再度軽石の降下により埋没し、爆発後に第3次路面が造られた。さらに時間を経てやや北寄りに第4次路面が構築されたと思われる。この第3・4次路面使用中に道路敷にほぼ平行もしくは直交する3・5・6・7・19号溝が造られた。19号溝は側溝であり、水が流れていた。3号溝との交点には、橋状に石が組まれる。3号溝は、19号溝に排水するための水路と思われるが、ほぼ平行する5・6・7号溝の3条の溝も水路と考えられなくもない。道路の北側では、5号畠址が作られる。第4次路面使用時に、北側溝の役割を持つ20号溝が掘られる。この時点で路面幅は、約1.5～2mになったのだろう。そしてこの第4次路面と両側溝は、常滑III期まで確実に存続していた。

第1次路面構築以前の18号溝埋没時までに、南側に60m離れて集落があった。しかし第1次路面構築時には、南側の集落は100m離れてしまう。北側ではいずれも集落は見られない。第1・2次



第268図 上信地方の古代の交通路と遺跡の立地 (長野県側は、県教委「シンボシウム資料」所収の桐原健発表要旨を参考にした)





第269図

群馬郡の東山道と関連遺跡

の路面は、北側溝は確実に持たず、路面幅は3m以上あった可能性も考えられる。第3次路面使用時以後、周辺は確実に開発されて路面幅も狭くなったが両側溝を備えた。

道路状遺構存続の絶対年代は、上限は8世紀後半、下限は少なくとも13世紀後半以降、と推定される。

B 群馬県内発見の他の道路状遺構

近年、群馬県内では利根川西部の旧群馬郡域を中心にして、道路状遺構の発見が相次いでいる。1983年6月に県教育委員会の主催で行われた『古道をさぐる』——古道の発掘と東山道——と題するシンポジウム資料及び管見の範囲内では、次の調査例がある。

イ、寺ノ内遺跡^(注3)（高崎市浜川町） 幅約4m。現農道走向推定N66°E。1978年調査。

ロ、御布呂I遺跡^(注4)（高崎市浜川町）上幅約4.6m、下幅約5.2m。両側溝。推定走向N61°E。1979年調査。

ハ、鳥羽遺跡^(注5)（前橋市鳥羽町） 幅4m。両側溝。推定走向N62°E。1979年調査。

ニ、宮川遺跡^(注6)（前橋市二ノ宮町） 幅約3m。両側溝。推定走向N85°E。1980年調査。

ホ、正観寺遺跡^(注7)（高崎市正観寺町） 幅約5m。両側溝。推定走向N75°E。1981年調査。

ヘ、雨壺遺跡^(注8)（高崎市大八木町） 幅約2m。推定走向N5°W。1982年調査。

ト、大久保A遺跡^(注9)（北群馬郡吉岡村大久保） 幅1～1.5m。約南北方向の孤状走向。1982年調査。寺ノ内例は、詳細な検出状況は不明だが、推定東山道の農道下で浅間B軽石に覆われている。

御布呂I例は、榛名二ツ岳軽石流堆積物層(FPF-2)以後構築され、浅間B軽石の降下により廃絶したが、南側に移動した可能性がある。人工的盛土はなく、両側の溝は0.8～1.0mの上幅を持つ。南側に推定東山道の農道が平行して走る。なお検出区画約80mは、ほぼ直線状である。

鳥羽例は、試掘調査による検出箇所はあまり良好な状況ではなく、詳細は本調査成果に期せられている。推定東山道の地境が付近を走っている。

宮川例は、浅間B軽石混在土で覆われており、両側溝は上幅約1mを持つ。明確な論拠は不明だが、調査担当者は時期を国分期と想定している。現道路の直下で発見されている。

正観寺例は、断面図より少なくとも浅間B軽石降下以前と以後の2面の路面が確認できる。側溝は北側のものが上幅約2.3m、南側のものが約1.2mあるが、南側の側溝は明らかにB軽石降下後の路面を切って掘られており、そこからこの側溝に伴う第3次路面の存在も想定できる。ただし覆土上層にB軽石に伴うピンク色灰層の堆積が一部見られるため、この堆積が1次的なものであれば南側溝に伴う第3次路面の存続期間はB軽石降下中の時間内に限られる。しかし北側の側溝の場合は、同一の溝と思われる本遺跡北側隣接地の菅谷遺跡3号溝の土層堆積状況より、B軽石降下後に作られ覆土中のB軽石層は2次堆積と考えられている。従って第3次路面の存続期間は上記時間内に限定されるかどうかは断言し難い。この溝の北側約30m離れた菅谷遺跡3号住居址からは、底部に「路」と墨書した土師器杯（本遺跡分類で古代II期）が出土している。なお道路状

第III章 調査の成果と問題点

遺構の直上が高崎市と群馬郡群馬町を分ける推定東山道の地境である。^(注10)

雨壺例は、古代II期の遺物を覆土中に含む平行な3条の溝の埋没後、西側2条の溝の間に浅間C軽石混在土を敷いて路面とし、さらにその上にB軽石2次堆積土による第2次路面も見られている。西側には近世の三国街道^(注15)が隣接している。しかし曲折する三国街道と部分的に重りながら、地図上では高崎市下小鳥町東より群馬町三ツ寺の石上寺の北まで約2.4kmの直線状の道路跡(C雨壺古道)を見出すことができる。なお雨壺遺跡では他に、浅間B軽石を版築して路面を構築した後^(注16)に両側を側溝で削られて上幅が60cmほどしか残らなくなった遺構(17号溝)がある。走向はN7°Eで、東側には農道があり、地図上では約600mほど前記道に平行して認められる。両遺構は74m離れている。

大久保A例は、浅間B軽石混在土を盛り土して構築しており、奈良・平安時代住居址を切断している。約70mの長さで検出されているが、西側にやや膨らんで南北方向を走っている。B軽石降下以降、近世文化年間までの間が最大存続期間とされている。周辺には鎌倉街道の伝承があるが、大正期の地籍図には何ら痕跡は見られない、と報告されている。^(注17)

以上各例以外に、高崎市日高遺跡^(注18)(F)では、浅間B軽石下の条里制水田の調査の中で幅約4mの直線的な道路の存在が想定されている。直接路面の検出はなされていないが、条里区画の復元の中で南北方向に直線的な余剰地が生まれてしまい、それが推定国府中軸線より南下し現状でもかなり残存している「国府道」(E)に一致している。なお現状での走向は、N1°Eである。

これら各調査例をまとめれば、浅間B軽石の降下を境にして構築及び使用時が古い例と新しい例に分けることができる。前者には、御布呂I・正観寺第1次路面・雨壺第1次路面そして本遺跡第1次路面が含まれ、後者には宮川・正観寺第3次路面・雨壺第2次路面・雨壺17号溝・大久保Aそして本遺跡第3・4次路面が分類される。またB軽石降下中^(注19)のものとして正観寺第2次路面・本遺跡第2次路面が考えられる。寺ノ内・鳥羽・日高各例は不明である。前者では御布呂Iだけが両側溝をもっており、後者では宮川・正観寺第3次路面・雨壺17号溝・本遺跡第4次路面が両側溝で、本遺跡第3次路面のみが片側溝である。

次に周辺の遺構分布を見ると、御布呂Iでは北側に約60m離れて中世の掘立群、そして平安時代住居址は300m離れている。また南側では200m以上離れて芦田貝戸遺跡^(注20)のB軽石下水田と平安時代住居址が見られる。寺ノ内では、農道の北側に隣接して中世館址があり、またこの館址に壊された古代II期集落までは約150m離れている。さらに北側で確認されたB軽石下水田までは、200mの距離がある。正観寺では、南側では集落まで40m以上離れるのに対し、北側では菅谷遺跡の古代II期集落まで30m離れる。雨壺では、道路状遺構の東西両側13mの位置からそれぞれ古代II期集落が始まり、17号溝は古代II・III期住居址を壊して作られている。宮川では、北側で平安時代集落まで少なくとも40m以上、B軽石下水田まで少なくとも80m以上離れる。大久保Aでは既述のように、奈良・平安時代住居址を壊している。日高は、東西両側にB軽石下条里水田が拡がっており、鳥羽は不明である。

このように概観すれば、B軽石降下以前の道路は、本遺跡例と同様に集落から離れている場合が、これまでの検出例では一般的である。その中で最も近接している正観寺の場合において、菅谷遺跡集落の住居址より「路」字墨書土器が出土しているものは、示唆的である。

C 東山道との関係

上野国における東山道の路線の推定は、これまで歴史地理学及び文献史学的な視点から多くの研究がなされてきており、^(注21) 県教委主催シンポジウム資料(以下『シンポジウム資料』)と県教委編：『東山道』(以下『東山道』)は近年の研究成果をまとめたものと言える。しかしながら、いまだに未確定・異論を持つ路線は多く、かつ存続期間についても推定の域を出ない。^(注22)

『東山道』では、プレ東山道(「大化の改新後のある時期から漸次整備」)、第二期東山道(「駅制が完成をみた時期で、奈良時代」)^(注23)そして第三期東山道(「王朝国家体制の期間」、771年より12世紀中頃まで)と区分している。また近世の文献に残された「あづま道」については、『シンポジウム資料』の須田発表要旨では、「東山道をさした呼称として用いられた可能性は考えられるが、経路については、長期間を経て変容した部分があり、そのまま古代の駅路とするわけにはいかない。」^(注24)としている。『東山道』における三期区分は、その年代観について疑問・不明の点も感じるが、^(注25)便宜的にこの三期区分に、中近世におけるポスト東山道としての「あづま道」を加えた四期の変化をもって、本遺跡と群馬県西部の古道を考えてみたい。

まずプレ東山道であるが、すでに旧石器時代から上信両地方の文化交流は活発であり、何らかの道は存在したであろう。弥生・古墳時代にはさらにその交流範囲は拡がっており、信濃から畿内を経て北九州に至る交通路や信濃から北陸を経て山陰に至る交通路も存在していたことは確かである。これらは広義のプレ東山道と考えられるが、律令駅制の直前段階として上野(上毛野)と畿内を結ぶ交通路として狭義に解せば、^(注26)畿内系文物が集中してもたらされた仏教寺院建立時、即ち上植木廃寺創建時(7世紀後半中頃)頃から確実に存在していたであろう。この時期の道路について確かなものは、現在までに確認されていない。ただし東山道とは関係ないが、放光寺と^(注27)考えられる山王廃寺と放光寺僧の建てた山上碑を結ぶ南北線(N1°E-5万分の1地形図より筆者計測、以下同)上に道が存在した可能性は十分に想定できる。なお『東山道』では、高崎市新保遺跡を「第1次群馬駅推定地」とし、^(注28)プレ東山道が新保遺跡を通過していたような記述が見られるが、何ら根拠が提示されておらず不可解である。

第二期即ち律令駅制下の東山道について、「古代の官道は計画的にルート設定がおこなわれ、それ故に官道が平野を通過する部分にあつては、多くのばあいその道筋は『直線』であったと考えている」との足利健亮氏の研究を引いた金坂清則氏は、野後駅家(安中市上野尻に比定)と上野国府(ト)を結ぶ路線の中で、安中市板鼻から前橋市元総社町(国府比定地)の間の直線的な^(注10)路線を提唱した。この群馬郡内の直線路線については多くの支持が得られたが、近藤義雄氏はその設計について上野国府と上信国境の荒船山の右端(頂上北端)を結ぶ線(B)をもってなされたと述べた。^(注29)本

第三章 調査の成果と問題点

遺跡を含めて寺の内・御布呂 I・正観寺・鳥羽の各調査例は、この推定線下に残る農道や地境の直下もしくは近傍から発見された。この推定線下の農道と国府南西界をなす染谷川を渡った日高からの国府道(E)の交点より荒船山北端の方向は約N64°Eであり、荒船山北端下の内山峠はN65°Eの方向(A)に当たる。前述の各調査地点はこのいずれかの線上にのっている^(注30)。御布呂 I・寺ノ内・鳥羽各検出例の走向は、この走向より3°以内の誤差で近似している。本遺跡の場合南に6°偏し、正観寺の例では北に10°偏している。これらは短区間の検出状態による計測誤差か地形変化に併せた小範囲の便法的工事変更と考えても良い。しかし本遺跡例で第1次路面下にあった18号溝の走向がN66°Eであることは興味深い。また正観寺例も、計測値は第3次路面に伴う両側溝によったものであり、あるいはそれ以前の路面の走向が異っていた可能性も考えられる。

走向の点では、日高を通る国府道、高崎市大八木町の大八木水田遺跡(リ)で検出された大畦畔の走向が共にN1°Eであり、前述の山王廃寺一山ノ上碑線と同じことにも注意せねばならない。この時期における計測の精度は、想像以上に良かったと考えざるをえない。国府道の北の延長上で推定国府中軸線上の総社神社旧地に比定される前橋市元総社町宮鍋様社地は、筆者の図上計測で^(注32)は赤城荒山山頂と稲含山山頂を結ぶ線上に榛名相馬岳から垂線を下ろした地に位置することもその証拠である。

第三期東山道については、前述のように『東山道』は、771年をもって上限としている。しかしこれまでの調査例では、本遺跡18号溝の存在以外に8世紀後半における路面変更を示す資料は得られていない。考古学的方法による制約もあるが、むしろ浅間B軽石降下の1108年に画期を考える方が自然である。御布呂 I例では、この天災により路線が移動した状況が見られ、本遺跡と正観寺例では側溝の掘削が降下後に行われた。その他にもいくつかの路線がこの時点で変動した可能性が十分に考えられる。B軽石下の雨壺道路状遺構より想定される南北方向の直線状古道(C)の走向はN5°Wで上記国府道などより西に6°偏している。B軽石降下以前にあるいはこの程度の変化があったかもしれない。しかしこの場合もあくまで直線的な道であり、律令駅制下に造られた道は、駅制の存続を別にすれば、B軽石降下時までほとんど変化なく存在しただろう。

ポスト東山道としての文献に残された「あづま道」の確実な調査例はない。しかし本遺跡第3・4次路面・正観寺第2・3次路面は、B軽石降下後の文字通りのポスト東山道と言える。本遺跡の場合13世紀後半まで使われていたことは確実であり、また現農道について他の「あづま道」地と同様に義経伝説も残っている。さらに寺ノ内・御布呂 I・本遺跡においては農道として、正観寺・鳥羽においては地境として今日まで残っていたことこそ、ポスト東山道の名にふさわしい。この点で注目すべきは、雨壺例である。県教委編『三国街道』を始めとするこれまでの三国街道路線の研究では、中世末以前に遡りえないとされてきた。しかし確実にB軽石降下以前に作られた道を改修して、近世の三国街道(D)は造られていた。今後この雨壺の古道は、さらに十分な研究がなされねばならないが、古代・中世・近世の道を考える上で重要な意味を持っている。

以上、本遺跡を中心とする道路状遺構検出例から考えれば、東山道には律令駅制による作道と

浅間B軽石降下による変動との二つの画期があり、路線的には三期に分けることができる。なおかつ律令駅制の確立とB軽石降下までの間（狭義の東山道）に細部的な路線の変化は見られた。
 (注33)
 本遺跡の場合は、8世紀後半頃にそれがあったと思われる。

- 注1 新井房夫他：『火山堆積物と遺跡Ⅰ』、『考古学ジャーナル』No.157、1979などにより浅間山B軽石の降下は、『中右記』記載の天仁元（1108）年の爆発によると考えられている。
- 2 前述の本遺跡古代Ⅱ期土器の年代観と、赤羽一郎・小野田勝一：『常滑・渥美』、日本陶磁全集8、中央公論社、1977の編年による。ただし須恵器壺の糸切り技法の出現時期の確定により上限は上がり、常滑壺編年の変動により下限は動く可能性がある。
- 3 高崎市教育委員会：『寺ノ内遺跡』、高崎市文化財調査報告書第13集、1979。推定走向は、座標北に対する角度を筆者が図上より計測した。（以下同）なお本報告書には、道路状遺構の図は収録されていない。
- 4 高崎市教育委員会：『矢島遺跡・御布呂遺跡』、高崎市文化財調査報告書第7集、1979。及び県教委シンポジウム資料
- 5 県教委シンポジウム資料。なお1979年調査は試掘で、本調査は1984年に行われる。
- 6 県教委シンポジウム資料。
- 7 高崎市教育委員会：『正観寺遺跡群（Ⅳ）』、高崎市文化財調査報告書第36集、及び県教委シンポジウム資料。
- 8 群馬県埋蔵文化財調査事業団：『熊野堂遺跡第Ⅲ地区・雨壺遺跡』、1984。
- 9 県教委シンポジウム資料。
- 10 金坂清則：『上野国府とその付近の東山道、および群馬、佐位駅家について』、『歴史地理学紀要』16、1974及び同氏：『上野国』、藤岡謙二郎編『古代日本の交通跡Ⅱ』、1978による。
- 11 県教委シンポジウム資料で調査担当者は、『石山みち』と呼ばれる古道とし、前掲金坂論文及び県教委シンポジウム資料所収の須田茂：『東山道のルートをさぐる——上野国新田駅周辺を中心として——』では、推定東山道には含めていない。しかし県教委：『東山道』、歴史の道調査報告書第16集、1983では、東山道の旧状をとどめている路線として扱っている。
- 12 発掘調査時に筆者は本例の検出状態を見学させてもらったが、路面の硬化状況と断面の層位的状況は、熊野堂Ⅰ検出の道路状遺構と極めて似ていた。
- 13 群馬郡群馬町教育委員会：『菅谷遺跡発掘調査報告』、群馬町埋蔵文化財調査報告書第2集、1980、菅谷遺跡と正観寺遺跡は同一の遺跡であり、道路状遺構直上の現行境界によって遺跡名が異っている。
- 14 他に『伴』・『合』など多数の墨書土器が出土している。
- 15 県教委：『三国街道』、歴史の道調査報告書第3集、1980年には、『慶長以前にはまだ高崎から金古を通して渋川に達する道は開かれていなかった……（中略）……中世末の古道に沿って整備された所』もあると記されている。しかしこの道路状遺構は、明らかに古代に作られた道である。
- 16 同報告では、この他に約2mの間隔で平行する2本の溝が、雨壺遺跡9・10号溝と熊野堂遺跡第Ⅲ地区8・9号溝の2か所で見られる。前者は古代Ⅱ・Ⅲ期の遺物を大量に含んでN10°Wの走向を持っており、後者は浅間B軽石純層堆積の溝を切断してN3°Eの走向で走り西側には農道がある。共に2本の溝の間の詳細な観察はなされていないが、道路状遺構の可能性が考えられる。
- 17 県教委：『鎌倉街道』、歴史の道調査報告書第17集、1983年。
- 18 高崎市教育委員会：『日高遺跡（Ⅱ）』、高崎市文化財調査報告書第17集、1980及び同：『日高遺跡発掘調査報告（Ⅲ）』、同第20集、1981。なお県教委：『鎌倉街道』、歴史の道調査報告書第17集、1983では、説明なしにこの道を鎌倉街道推定路線として図上に記している。
- 19 寺ノ内例は、御布呂Ⅰと同一台地上に位置し、ほぼ同一直線上に150mしか離れていないため、御布呂Ⅰと同様の状態であった可能性が考えられる。
- 20 高崎市教育委員会：『芦田貝戸遺跡Ⅱ』、高崎市文化財調査報告書第19集、1980
- 21 前掲10金坂論文の他に、近藤義雄：『上野国府をめぐる古代交通路』、『信濃』第33巻2号、1981が代表的である。
- 22 前掲11の宮川古道例など少くない。
- 23 続日本紀宝亀2年条の武蔵国の東山道より東海道編入に伴う路線変更記事による。
- 24 前掲11の須田発表要旨によれば、寛文11（1671）年の笠懸野御新田絵図及び元禄年間（1688～1703）の上野国絵図が現存の最古の資料である。
- 25 大化改新については実在性を含めて研究上の問題点になっており、書紀記事をそのまま使ってプレ東山道の開始時期とする点には疑問を抱かざるをえない。また第三期東山道の終末とあづま道の関係が述べられていないにもかかわらず、路線推定図には区別して図示してある点も無視できない。
- 26 大江正行：『瓦の変遷』、中之条町教育委員会：『天代瓦窯跡』、1982による。
- 27 前掲10金坂論文もこの線の存在を指摘して、国府造営に関係あるとしている。なお山王廃寺から浅間山山頂はN89°Wの方位角で山ノ上碑—山王廃寺—浅間山山頂はほぼ直角になる。また浅間山—国分寺—金井沢碑・城峰

第三章 調査の成果と問題点

山山頂も直角である。山王廃寺からは春秋分の日没は浅間山山頂で、南中線上に山上碑が来ることになる。この点において、上植木廃寺より榛名二ツ岳と稲含山がそれぞれ夏至日没線（N60°W）・冬至日没線（N60°E）にあたるのも興味深い。

- 28 この記述は「I 東山道の概観」欄に2か所見られるが、路線推定図や他の部分には見られない。
- 29 前掲21近藤論文
- 30 近藤義雄氏はこの線上に「上野国一之宮貫前神社があり、その手前が安中市の野尻駅家推定地付近になる。」としているが、後者は正しいが前者は全く誤りである。荒船山北端もしくは内山峠から貫前神社を結ぶ線上に位置するのは、山ノ上碑である。
- 31 高崎市教育委員会：『大八木水田遺跡』、高崎市文化財調査報告書第12集、1979
- 32 この点は、すでに故尾崎喜左雄氏が『前橋市史第一巻』などで指摘している。前掲21近藤論文もそれを引用しているが、国府推定地を上野国分寺と誤解している。また古代の測量法については、水谷慶一：『知られざる古代謎の北緯34度32分をゆく』、日本放送出版協会、1980が詳しい。同書の方法論は古代遺跡の立地について極めて示唆的である。国府地の設定にあたっては上記線より導き出し、かつ四神・風水説より武尊・子持山（玄武）、赤城荒山（青竜）、鳥川（朱雀）、榛名相馬山（白虎）を意識したと思われる。
- 33 『東山道』では、東山道沿いの文化財として本遺跡（旧称東下井出遺跡）を、調査直後に刊行された本事業団『年報1』、1982の記述を引用して紹介している。そのため止むをえないことであるが、本遺跡道路状遺構の存続期間は、『東山道』が述べているような奈良時代初期からB軽石降下時までではなく、既述のように8世紀後半から少くとも13世紀後半以降までである。

第6節 出土古瓦について

本遺跡から20点の古瓦が出土し、本書では遺構関連のすべての古瓦を掲げた。このうち軒丸瓦(第271図3)は安中市秋間古窯跡群中の八重巻支群から既出例があり、合わせて同范関係の知れる5遺跡例から欠損部分を同范復元したものである。このほか遺構外の出土瓦も検討対象とし、右の表を作成した。瓦の類別も右の表のとおりである。

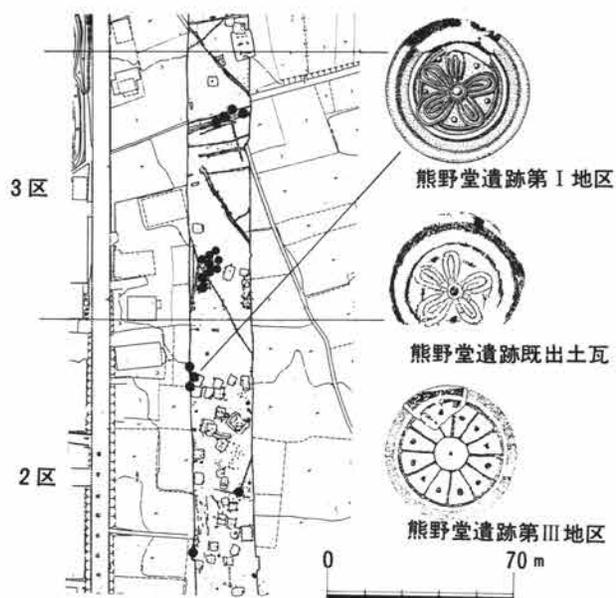
本遺跡における瓦の出土はI地区の総長400mにわたる範囲の中で2、3区に限定された出土傾向を見ることができ、多量に出土したのは、20号住居址を切って存在した11号土坑から平瓦5、丸瓦1、軒丸瓦1、計7点の出土がある。11号土坑は、不整形土坑で、何を目的として掘られた

瓦種	叩種	図番号	技法	出土遺構名
平	縄叩		桶巻作	————
		200-1・2 249-30	一枚作	H21西拡張(1)、11土坑(4)、2区北溝(1) 21溝(2)、2区北東表土(1)(平瓦2類)
		248-27	不明	11土坑(1)
瓦	素文	192-5~7	桶巻作	18号溝(2)、18溝(1)(平瓦1類)
			一枚作	————
			不明	————
	格子		桶巻作	なし
			1枚作	
丸瓦	縄叩	153-23	2区北表土(1)(丸瓦2類)	
	素文		68号住カマド(1)、19号溝(1)、11土坑(1)(丸瓦1類)	
不明		152 247-4	なし	
軒丸	素文		68号住カマド(1)、11号土坑(1)	
軒平			なし	

出土瓦一覧表 ()の数字は出土数を示す

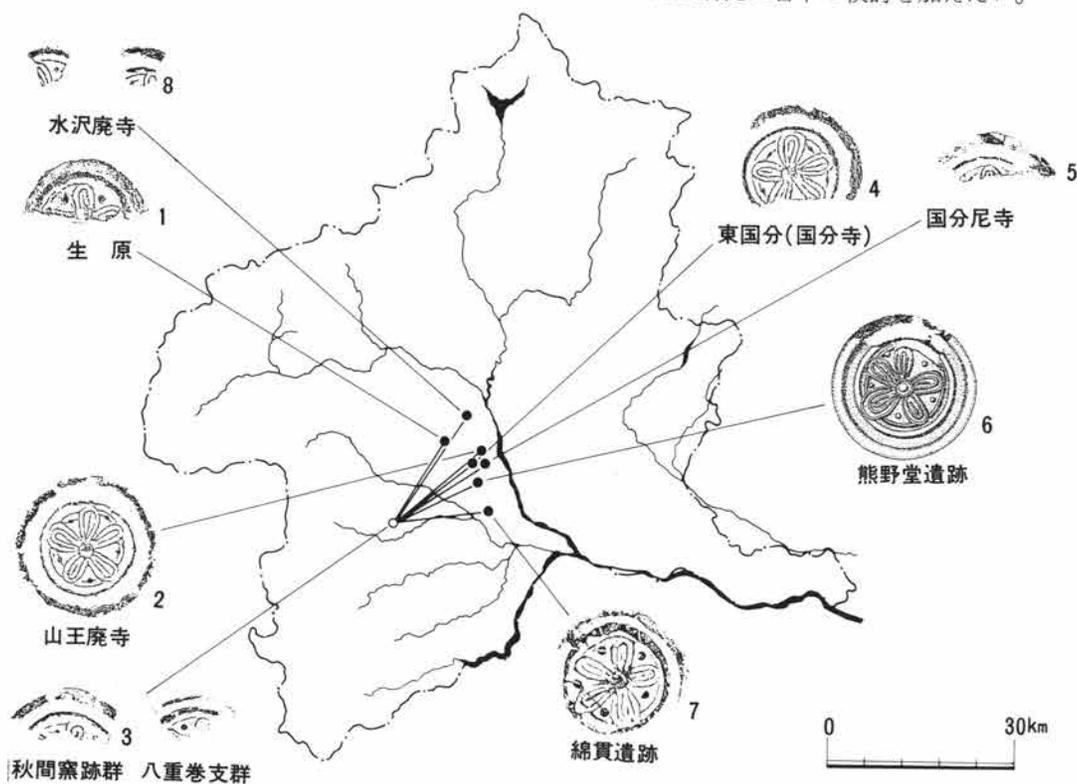
瓦分類表

平瓦	1類	裏面は撫整形による素文で、表面に模骨桶の寄木状圧痕があることを特徴とする。粘土板の剥取痕が認められる。一部に粘土板合せ目あり。
	2類	裏面は瓦の長軸と平行する長大な縄叩があり、狭端部に近接した位置に横打の叩が見られる。叩締の際、離れ砂を付着させる。この例は5点あり、表面には、横開の寄木状圧痕が見られず、断面が形顕著な凹面化を呈すことなどを特徴とする。瓦の大きさは、第249図30から長軸長23.8+2cm、狭端面の幅23.4cmである。
丸瓦	1類	表面は撫整形範による素文であることを特徴とする。
	2類	表面に縄叩痕があり、その後撫整形することを特徴とする。



第270図 出土瓦分布図

土坑であるのか判然としないが、出土遺物の在り方は廃棄物的な存在である。68号住居址からは、カマド材として軒丸瓦2、丸瓦1の出土があり、二次利用としての存在である。道路遺構に接して存在した18号溝から平瓦3の出土がある。その他の瓦片も二次的な在り方であり、瓦の持つ本来的な機能を損なった形で出土した。しかし瓦の存在は、周辺にそれを使用した建築物があったはずであり、その建物の存在の解釈あるいは使用瓦に伴う造瓦生産の形態など、その内容を把握する時、地域の古代史に大きく寄与する側面を持っているのである。ここではそうした意図を前提に若干の検討を加えたい。



第271図 単弁五葉軒丸瓦同范瓦関係図

1 出土瓦の製作年代および製作地

平瓦は13点認められた。平瓦1類は桶巻作り⁽¹⁾とされる寄木状痕が見られる。寄木状痕をとどめ例は上野国分寺で25%以上が認められ、それ以降、群馬県内における桶巻作は終息するので、平瓦1類は上野国分寺が建立された8世紀中頃以前の製作と類推される。平瓦1類の胎土中に黒色鉍物粒を多く含む胎土の特徴から安中市秋間古窯跡の焼造と見られる。⁽²⁾

平瓦2類は縄叩による平瓦である。縄叩の際、瓦の長軸に並行して長大な縦長の縄叩を施し、その後瓦上、下の端部を横叩する特徴を見ることができる。この特徴は秋間窯址群中の苜根支群瓦⁽⁴⁾に見ることができ、苜根支群は8世紀～9世紀前半の須恵器が散布しているため、平瓦2類は同窯址群において、その頃に焼造されたと考えられる。また平瓦2類が4点出土した11号土坑の共伴遺物は9世紀前半であるため、それ以前の年代があたえられる。

丸瓦については、撫による整形、縄叩後撫による整形など、県内では普遍的に見られ、窯跡群からの年代観は得がたい。ただ丸瓦1類は11号土坑に伴っており、共伴遺物から9世紀前半以前の年代があたえられる。

軒丸瓦(第270図)は、本遺跡からの既出瓦であり、他の2点の軒丸瓦片も胎土の共通性から単弁5葉の瓦当面であったと想像される。さらに同范瓦はこれを焼造した安中市秋間窯址群八重巻支群のほか群馬郡伊香保町水沢廃寺、同郡箕郷町唐松古瓦散布地、同郡群馬町上野国分寺、前橋市総社町上野国分尼寺、同市山王廃寺、高崎市綿貫遺跡など榛名山東麓に広く供給されている。秋間窯跡群の八重巻支群では8・9世紀前半の須恵器が散布している。第152図1は出土した68号住居址の共伴遺物から9世紀後半以前の年代があたえられるが、瓦当面文様が、上野国分寺系瓦の後出亜種⁽⁵⁾であることを考慮すれば9世紀前半の所産と類推される。

2 出土瓦の位置づけ

本遺跡における瓦は再利用を中心としたものであったが、南側約500mに存在する熊野堂遺跡第II地区からも瓦類が出土し、南東約400mに位置する熊野堂遺跡第III地区からも瓦(第270図)の出土が報告されている。その主体的な散布地は、東接する群馬町福島古瓦散布地にあるが、散布量はそれほど多くはない。これら広域に広がる古瓦散布地が一連の施設に用いられたとすれば、その施設の機能は本遺跡中に東山道と目される道路遺構があり、それと無関係ではなく、直接的に関連性を持った施設と考えられる。その瓦供給の形態は、かつて雨壺遺跡における瓦の観察所見から「造瓦の供給体制は秋間窯跡群からの単一的供給であり、それは民的な色彩が強い。」⁽⁶⁾としたが、今回の瓦の観察から得た所見も同様であった。

注1 佐原真：「平瓦桶巻作」『考古学雑誌 第58巻2号』、1972

2 井上唯雄・大江正行：「上野国分寺縁辺地域の調査」(群馬町教育委員会)、1975

3 花岡紘一：「瓦の胎土分析について」『山王廃寺跡第7次発掘調査報告書』(前橋市教育委員会)、1982に分析結果がある。SiO₂とFe₃O₄の混合物

4 (群馬歴史考古同人会)『土器部会資料1』、1983

5 大江正行・中沢悟：「シンポジウム9世紀代の瓦と須恵器」(立正大学)、1982

6 大江正行：「出土瓦について」『熊野堂遺跡第III地区・雨壺遺跡』、1984

第7節 特殊井戸について

特殊井戸には、生活用井戸としての側面と、灌漑用井戸としての側面の2面が存在する。ここでは、この井戸をめぐる若干の問題について考えてみたい。

1、当時の井野川と地下水位

現在の井野川は、本遺跡の存在する洪積台地より5～6m下方を流れている。しかしこの特殊井戸が掘られた当時は、井野川は現在よりも上方を流れていた。

本遺跡の調査によって明らかになった事実から推定すると、縄文時代中・後期前後には、井野川の流れは非常に高かったと考えられる。すなわち、本調査地区1区南端の古墳時代後期住居址群の存在する部分を除いて、第4層の中・下部は黒褐色粘質土であり、このうち新幹線本線と西側道部分は、東から西へと地形が緩かに傾斜し、斑状、暈管状の斑文がみられる地点が多くなっている。このことは第4層形成の段階で水位が上昇し、この部分は湿地帯となったことを示している。そしてその時期は、縄文前期住居址(17号)が廃棄され、弥生後期住居址群がこの黒褐色粘質土上に営まれるまでの間と考えられる。なお3、4区において、第4層に含まれるやや多くの縄文時代中・後期の土器片は、水位上昇期に東側のより高い部分から廃棄されたものであろう。

水位の変化と湿地化が、本遺跡だけの現象ではなく、井野川中流域における井野川河床の上昇および下降と密接な関連を有していることは、井野川に面して存在する本遺跡第Ⅱ地区の水田部分をはじめ、芦田貝戸⁽²⁾、御布呂⁽³⁾、同道遺跡⁽⁴⁾等の浅間C軽石層下の粘質土とその標高から容易に推定がつく。芦田貝戸遺跡は、本調査地区1区から井野川を直角に狭んで350mの対岸に位置し、浅間C軽石層は海拔108.5m付近に存在しているが、本遺跡1区傾斜部分においても、浅間C軽石の堆積は同様の数値を示している。また、1.25km上流に位置する同道遺跡では、浅間C軽石が海拔118m付近に堆積し、下流350mに位置する本遺跡第Ⅱ地区の水田部分では海拔107mに堆積しているが、この付近の井野川の河川勾配が0.8～0.9%であることを考えれば、これらの遺跡のC軽石層下の粘質土は、縄文時代中・後期前後に水位が上昇した本遺跡の傾斜部分の第4層に対応するものであり、それは井野川の氾濫原であるといえる。そして、浅間C軽石の降下時まで、堆積土量の場所による差異がほとんどなかったのであろう。⁽⁵⁾

その後、井野川による緩かな下向侵蝕がおこなわれ、本遺跡でも徐々に水位が低下する。弥生後期の井戸は、深さが1.0m前後であるが、古墳後期では1.5m前後となり、浅間B軽石降下頃では、2～2.5m前後となる。縄文時代当時の氾濫原は、本特殊井戸が掘られた頃には段丘化し、6世紀中葉頃の榛名山二ツ岳の活動による大量の軽石流以外には、井野川の氾濫による被害をほとんど被ることのない水田適地となっていたのである。⁽⁶⁾

2 生活用井戸としての特殊井戸

1号特殊井戸は古墳時代後期、2号特殊井戸は古墳時代後期から古代にかけて使用された。1

号特殊井戸を使用した集落は、59号住居址から第II地区へと続く古墳時代後期の住居群であろう。

2号特殊井戸は、石敷下から出土した土師器杯により、その掘られた時期は古墳時代後期に溯る。石敷部下の2号源泉部は、本特殊井戸が掘られた当初のものであろう。その後、この源泉部は石敷によって埋められ、東壁が奥へと掘り込まれて1号源泉部が設定された。1号源泉部は2号源泉部より約60cmほど高位置にある。2号源泉部から1号源泉部への転換は、おそらく東壁の崩壊等の偶然の出来ごとによって、この部分に存在していた水量の豊富な宙水の発見がその契機となったのであろう。

2号特殊井戸を使用した集落は、49・50号住居址を始めとする北側の古代（I・II期）の住居群であろう。石敷は、北側より1号源泉部へ降りて行けるような傾斜をもっていた。なお、本特殊井戸が掘られた当初の住居群が、どこに存在するのかは明確ではない。

1号および2号特殊井戸の水量は、当時どの程度であったのだろうか。1号特殊井戸については、溝部底面から約5cm上方に堆積する榛名山火山灰（FA）が、中央において約30cm切れているが、この状態から考えると、水量は豊富ではなかったらしい。また、2号特殊井戸は、溝部で中央やや北寄りの中段付近に水で侵蝕された形跡があり、水量の多い時もあったことがわかる。

本特殊井戸は、かつての「泉」に類似する。自噴泉であるか重力泉であるかを問わず、人為的な外力の加わっていないものを現在では泉と称するが、かつての泉の概念には、人為的な外力を加えたものも含まれていた⁽⁷⁾。地下から汲み上げるのではなく、地下水が眼前に湧出してくるのが泉であれば、本特殊井戸もかつての泉の範疇に含まれることになる。本特殊井戸から湧出した水が溝へと流れていたならば、正倉院御物の天平勝宝八歳欠定『東大寺堺四至図』に示された細流をもつ2つの井戸や、『扇面古写経』に描かれた細流が出ている井戸（泉）と同様の性格をもつものと考えられる。

3 灌漑施設としての特殊井戸

本特殊井戸は、西側調査区域外の傾斜地へと延びているが、この傾斜地部分には現地地形から判断して、南方90mで発見されている本遺跡第III地区の水田址⁽⁸⁾が連続していると推定される。

すでにみてきたように、西側傾斜地はかつての井野川の氾濫原であり、本特殊井戸が掘られた頃には推積段丘化していたものである。この部分に存在していたと推定される水田への灌漑が、当時どのようにおこなわれていたのかを現段階で明らかにすることはもとより不可能ではあるが、ここでは、現状で判明している2～3の点について検討していくなかで、本特殊井戸のもつ性格の一端を明らかにしてみたい。

まづ第1点は、井野川中流域の水田址において、井野川の氾濫による大きな被害の痕跡が、6世紀中葉頃の榛名山二ツ岳泥流によるもの以外には確認されていないことである。また水田面の黒褐色粘質土中に、井野川の氾濫を思わせるような大量の砂粒も包含されていない。このことは大量出水時において、井野川流路面と水田面との間に水量の大部分を許容し得る比高があったことを示すものであり、平常時においては、至近距離からの井野川河水の堰上げ引水は困難であつ

第三章 調査の成果と問題点

たとえられることである。

第2点として、江戸時代の井出村は、部落と井野川とに挟まれた井野川との比高の小さい「西たんぼ」を灌漑するにあたり、その用水を他の4ヶ村とともに榛名白川上流の祭戸堰から取水し、それを溜池（溜井）に貯留していた⁽⁹⁾。また一方では井野川上流域の保渡田付近からも取水し、二子山古墳周溝の一部を溜池としており、その他にも湧水による溜池が存在していた。ところで井野川はたびたび氾濫した河川であり⁽¹⁰⁾、江戸時代に入ってから堤防が築かれた。当時、隧道による堤防下・河川下の用水の横断は広くおこなわれていたが、至近距離の中流域から取水することなく、上流域や遠方の榛名白川から取水しそれを溜池に貯留していたという事実は、水流が比較的早く、しかも水量が豊富となる中流域での堰上げ技術の未熟さに加えて、たびたび起る氾濫を回避し、比較的高所に水田が営まれていた堤防築造以前当時の灌漑方法が、この地域においては伝統的に受け継がれていたことを示しており、それは本特殊井戸が掘られた当時においても同様であった可能性が強いといえる。

第3点は、井野川中流域が榛名山の軽石・泥流によって形成された扇状地形の末端に位置しており、当時地下水位が非常に高かったと考えられることである。台地縁辺からの湧水も最近に至るまで数ヶ所でみることが出来、井野川の河床が現在よりも高かった当時において、湧水が豊富であったことが推測できるのである。⁽¹²⁾

本特殊井戸は、水田適地を前面に控え、井野川からの至近距離による取水が難かしかつた反面、地下水には恵まれていたという自然条件下にその出現の背景をみてとることが出来る。さらに同道遺跡においては水源を井野川支流の沢水に求めていた⁽⁴⁾。しかし本遺跡においては東側台地から流下する小河川は皆無であり、井戸に頼るしか他には方法が無かつたのである。

ここで、本特殊井戸をめぐる若干の問題について考えておきたい。井戸とは、「地下水を貯めるために地下に掘り下げた設備⁽¹³⁾」である。「特に灌漑する目的をもって、雨水・溪流等を貯留するために特定地上に築造した狭義の池⁽¹⁴⁾」である溜池（溜井）とは構造的に異なる。灌漑用井戸には、自噴井（被圧帯水層から取水）や旱天時に水田面付近に掘られるものも多い。しかし本特殊井戸は、自由地下水を集め、それを溝に接続することによって水田へと導入するもので、地下水位が高く、しかも被圧度の比較的高い傾斜台地の末端付近につくられており、この点において前二者とは異なっている。このような井戸には、本遺跡第II地区の灌漑用井戸⁽¹⁵⁾や赤城山南麓天之宮遺跡⁽¹⁶⁾の灌漑用井戸（溜井）群がある。この灌漑用井戸（溜井）群の存在する部分は、山麓末端に近く、関東ロームを被覆した荒砥川と粕川の複合扇状地となっており、地下水位が高く、その立地は本遺跡に近似しているといえる。また、ともに古墳時代後期から奈良時代にかけてのものであり、その形態の類似から、この時期に広くおこなわれた耕地拡大にともなって地下水位の高い地域に流行した灌漑用井戸の一形態と考えられる。しかし地下水位の比較的高い場所であれば、堅穴住居や溝・貯蔵穴を掘る技術と井戸を掘る技術とは同じものであり、井戸と溝との結合が初期の灌漑農業と大きく関連するものであるならば⁽¹⁸⁾、地下水位の高い台地末端付近で、今後さらに古い

時期の類似した井戸が発見される可能性は大きいといえよう。

注

- (1) 細野雅男「高崎市熊野堂遺跡の水田址」『月刊文化財』第181号 第一法規出版 1978
 - (2) 「芦田貝戸遺跡Ⅱ—火山灰に埋没した古代水田址と畝状遺構の調査概報」高崎市教育委員会 1980
 - (3) 「御布呂遺跡—浜川運動公園建設に伴う古代水田址の調査概報」高崎市教育委員会 1980
 - (4) 「同道遺跡—県立高崎北高等学校新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
 - (5) この氾濫原の範囲は、中に井野川を挟んで幅350m～500mであると推定される。左岸においては、井出部落の存在する低い洪積台地の手前までであり、右岸については群馬町道場から高崎市浜川町の東側、そして上小島町・筑縄町に至るラインに地形の高まりが僅かに認められることから、この内側と考えられる。なお、これまでに発見されている井野川中流域の水田址は、すべてこの内側に存在する。
 - (6) 河床の上昇および下降現象がみられるのは、井野川中流域に限定される。ここでいう中流域とは、群馬町保渡田部落の南方から高崎市大八木町付近までである。この大八木町で、それまで東南流してきた井野川は急に向きを北東に変えたあと、さらに東方に向きを変え、約750mほど東流しているが、この東流部分を西に延長していけば、本遺跡第Ⅱ地区の水田部分に重なってくる。本遺跡第Ⅱ地区の水田部分は、井野川の旧流路上に営まれている(注16)が、第Ⅱ地区6次調査の所見によれば、井野川旧河床の最高レベルは海拔106m(現地表面は海拔108m)という異常な高さを示している。この付近の浅間C軽石は、海拔106.9m付近に堆積(注1)しており、旧河床とC軽石堆積面の差が僅かに90cmであることから、この最高河床面は、水位が上昇した縄文中・後期頃の河床である可能性が強い。縄文時代の井野川は、大八木町の低い洪積台地を横切る付近で土砂が堆積し、水位を上昇させたのであろう。なお、井野川の旧流路と推定される部分は、現状でも帯状にやや凹んでいる。大八木町の低い洪積台地を約750m東流した井野川は、大八木町と浜尻町の境界付近で東南流を再開する。この付近に位置する古墳時代初頭の井野川遺跡「高崎市井野川遺跡—小規模川井野川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報—」群馬県教育委員会 1970)は、周囲より一段低くなった井野川右岸の現流路面に存在していた。また、井野川遺跡の対岸に位置し、浅間B軽石層下の水田址が検出された小八木遺跡(「小八木遺跡(Ⅱ)」高崎市教育委員会 1980)は、海拔98～100mに位置しているが、遺跡の南側を流れる井野川の流路面(両岸の水田面)は海拔98～99mであり、標高差はほとんど無い。このことは、大八木町以北の中流域が古墳時代以降も河床が緩やかに低下しつづけていたと考えられるのに対し、この付近では、古墳時代初頭以降ほとんど河床の変化が無かったことを示している。(井野川流域の遺跡・地形については、群馬県立歴史博物館 梅沢重昭氏より多くの御教示をいただいた)
 - (7) 例えば、明月記に「元久二年八月二日、高陽院地月来所引己以引過了、七八尺掘地、其底立御所之間、昨日御臨幸被驚仰、忽又還土可上其屋、人類無物取喩歎、是以泉尻可為潺湲之由結構間、比事出来、西洞院河底己以高自庭土云々」とあり、当時有名であった高陽院の泉は、地表面へ湧出するほどではなく、その水位がかなり低いため、各所に手を加えていたことがうかがえる。
 - (8) 「熊野堂A調査区・雨壺遺跡」『年報—1—』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982
 - (9) 南雲栄治『榛名山東南麓における井出集落の歴史地理学的研究』群馬県高等学校教育研究会地理部会 1974
 - (10) 『群馬郡誌』群馬郡教育会 1925
 - (11) 『明治以前日本土木史』土木学会 1936
 - (12) 『上郊村誌』上郊村誌編纂委員会 1976
 - (13) 山本 博『井戸の研究』綜芸社 1970
 - (14) 竹山増次郎『溜池の研究』有斐閣 1958
 - (15) 江戸時代の関東地方において、溜池の多くは溜井と呼ばれた。それは徳川幕府により編纂された『新編武蔵風土記稿』や、当時の記録類から知ることができる。関東地方における近世史関係の論文においては、「溜井」という用語が溜池と同義の普通名詞として使用されている場合もある。また、赤城山南麓の天之宮遺跡(注17)では、灌漑用井戸が溜井として定義づけられている。
- 溜井とは、江戸時代初期の利根川中流域において、徳川幕府による利根川瀬替え工事の進展にともない、水量の少なくなった鹿川を堰によって締切り、水位を上昇させて支線水路に分水していくという方法に主として用いられた用語であった(「見沼代用水沿革史」見沼代用水土地改良区 1957・『風土—大地と人間の歴史—』平凡社 1974)。玉城 哲は、「利根川水系における伊奈氏の業積をみると、「溜井」という用水施設の形態が、きわだった技術的特色をなしているように思われるのであって、日本の用水施設の諸形態の中で、この溜井の特殊性の評価がぜひ必要なのである」として、これを「用水施設の一形式」として位置づけ、所謂「溜池」とは構造的・歴史的 성격の異なるものであることを明らかにしている(「徳川期における利根川流域水利開発の進展過程」『利根川流域における農業水利の展開と農業発展』農林省関東農政局 1965)。
- なお、「概念の混乱を避ける」という意味から、学術用語としては、溜池には「溜池」、灌漑用井戸には「灌漑用井戸」が適切であると筆者は考えている。
- (16) 「熊野堂遺跡・第Ⅱ地区」『年報—2—』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
 - (17) 能登 健・石坂 茂・小島敦子・徳江秀夫「赤城山南麓における遺跡群研究—農耕集落の変遷と溜井灌漑の出現—」『信濃』第35巻第4号 信濃史学会 1983
 - (18) 金子 良「群馬県下の水収支」『利根川水系における水収支』科学技術庁資源局資料第57号 科学技術庁資源局1964
 - (19) 黄 崇岳「水井起源初探—兼論「黄帝穿井」—」『農業考古』1982年第二期 農業出版社(北京)1982

原稿執筆分担

第I章 第1節・第2節	飯塚卓二
第3節	外山政子
第II章	
(遺構) 65・66・67・68号住居址 35・36・37号溝 59・60・66号土坑	…新井順二
15・16・18・19・20・21・24・25・26・27・49・50・61・70号住居址 6	
号畠址 1・2・14・15・16・17・22・25・27・28・29号溝 2号特殊井戸	
戸 2・11・13・14・15号井戸 1・2・3・11・20・27・28・29・30・	
31・32・33・34・40・41・42・43・44・45・50・61・63・64・65号土坑	…飯塚卓二
1・8・9・10・11・17・22・23・28・29・30・31・32・33・36・37・	
38・39・48・59号住居址 3・4・5号畠址 11・21号溝 1号特殊井戸	
1・3・4・5・9号井戸 5・6・7・13・15・17・18・19号土坑	…井川達雄
1・2号畠址 69・70号土坑	…女屋和志雄
2・3・4・5・6・7・12・13・14・40・41・42・43・44・45・46・	
47・62号住居址 1・2・3・4・5・6号掘立柱建物址 道路状遺構	
3・4・5・6・7・8・9・10・18・19・20・23・24号溝 6・7・8・	
10号井戸 8・9・35・36・37・38・39・51・52号土坑	…坂井隆
34・35・51・52・53・54・55・56・57・58・60号住居址	
9・14・16号土坑	…三浦京子
69・71・72・73・74号住居址 7・8・9号掘立柱建物址	
57・58号土坑	…宮下万喜子
(遺物)	
縄文時代	…新井順二
弥生時代	…飯塚卓二
古墳時代	…井川達雄
古代	…坂井隆
第III章	
第1節 縄文時代の成果とまとめ	…新井順二
第2節 弥生時代および古墳時代移行期の遺構・遺物について	…飯塚卓二
第3節 古墳時代の遺構・遺物について	…井川達雄
第4節 古代の遺物・遺構について	…坂井隆
第5節 道路状遺構と推定東山道について	…坂井隆
第6節 出土古瓦について	…大江正行
	〔財群馬県埋蔵文化財調査事業団主任調査研究員〕
第7節 特殊井戸について	…飯塚卓二

第IV章 遺構および出土遺物の自然科学的分析

第1節 群馬・熊野堂遺跡第I地区におけるブランド・オパール分析

宮崎大学 藤原宏志

群馬・前橋台地では、火山性堆積物の互層に挟まれた農耕遺跡が数多く発掘されている。

これらの遺跡群は噴出年代が判明している火山灰（主として、浅間山、榛名山起源）に覆われているため、その埋没時代の特定が可能である。他の地方における農耕遺跡（水田址・畑址など）では、遺構が検出されても遺物が少なく、その時代を特定する決めてに欠ける場合が少なくない。また、降下火山灰により埋没した遺構は、二次堆積物により埋没した遺構に比べ、保存状態が良く検出も容易である。関東地方における農耕遺跡の調査例が、この地方で最初に行なわれ、かつその数がもっとも多い理由は、調査体制の主体的努力とともに、恵まれた包蔵条件を挙げる必要がある。

先史時代の水田址発掘例は調査法の進歩もあり、九州から東北地方まで、すでに数十を数えるに至った。これらの調査結果により、弥生・古墳時代の水田様式に関する体系的な新しい知見が得られつつある。

このように、水田技術の解明には大きな進展がみられたものの、畑作技術の実証的把握という点では、水田技術のそれに比べ、大きく遅れているというほかない。これは、畑址が水田址に比べ、遺構の検出が難しいことによるものであり、必らずしも、古代における畑作比重の軽重を反映した結果ではないと思われる。

古代農耕の実像を把握するためには、古代畑址の調査が是非とも必要であり、そのための調査法、発掘技術の開拓が望まれるところである。

数年来、群馬県下の数遺跡で畑址とみられる畦状遺構が検出され、最近では仙台でも類似のものが発掘された。いよいよ、水田址だけでなく、畑址を含めた古代農耕解明の段階に入ろうとしている。

当該遺跡は、群馬県における畦状遺構をとまなう遺跡の一つであり、本報告では、この遺構の性格を分析的に明

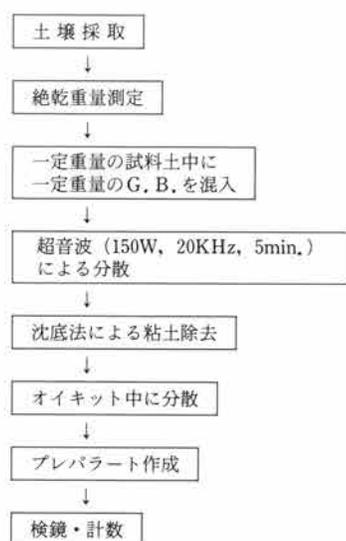


図1. ガラスビーズ法による
ブランド・オパール定量分析ダイアグラム

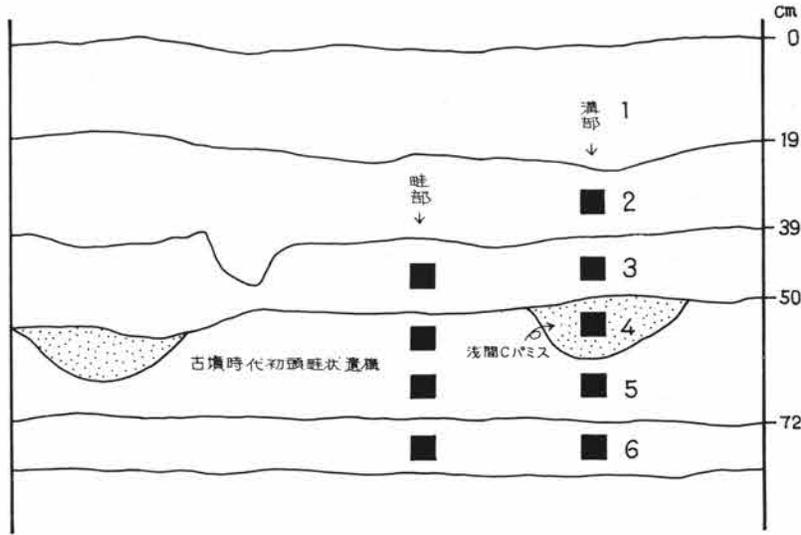


図2 熊野堂遺跡（第1地区）No.1地点における試料採取地点

らかにすることを試みた結果について述べる。

〔試料および分析法〕

1981年6月5日、畦状遺構の断面を二地点選び分析試料を採取した。試料採取は100cc採土管を用い、図2に示した点で行なわれた。採取地点は二地点であった

が、その分析結果は近似しているため、一地点についてのみ記述する。

分析法は、プラント・オパール定量分析法（図1）により行なった。

〔分析結果〕

畦部と溝部における分析結果を図3、図4に示した。

〔考察および結論〕

1. 1層は現耕作土で、試料採取時には除去されていた。2、3層は中世以降の遺物包含層であり、イネ (*O. sativa*) 機動細胞プラント・オパールが大量に検出された。立地条件を考慮すると、このイネは畑作に由来する可能性が高い。5層は古墳時代の畦状遺構であるが、3層により畦上部が削平されている。したがって、作物が直接栽培されたと考えられる面は、すでに存在しない。

2. 畦部上層5-1には、イネが相当量認められるものの、その直下3層に多量のイネがあり、5層のイネは3層からの落ち込みとも考えられる。もちろん、5層のイネが落ち込みではなく5層で生産された可能性もあるが、このデータだけでは断定できない。

3. 畦部における5層のイネが、この層で生産されたものであるかどうかを調べるため、溝部土壌の分析を試みた。溝部には浅間Cパミス（4層）が乱されない状態で堆積しており、4層に覆われた5層は溝底部として原形を残しているものと考えてよい。畦部でイネを栽培すれば、そこで生産されたプラント・オパールの一部は、溝底部にも流入するはずである。また、3層からの落ち込みがあるとすれば、4層にもイネが多量に存在しなければならない。溝部土壌の分析結果は、図に示すとうり、4層ではイネが全く検出されず、5層にイネの小さなピークが認められた。このことから、畦部5層で検出されたイネは、多少の落ち込みはあるにしても、5層で生産されたものが主であるとみてよいであろう。

第1節 群馬・熊野堂遺跡第1地区におけるブランドオパール分析

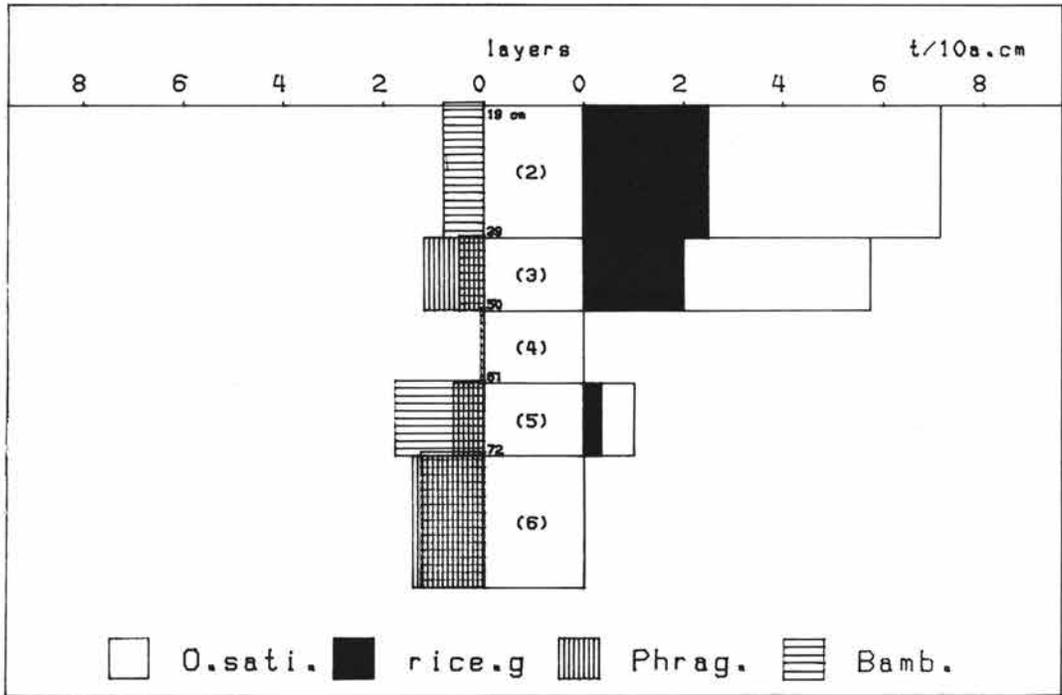


図3 熊野堂遺跡（第1地区）溝部におけるイネ科植物生産量

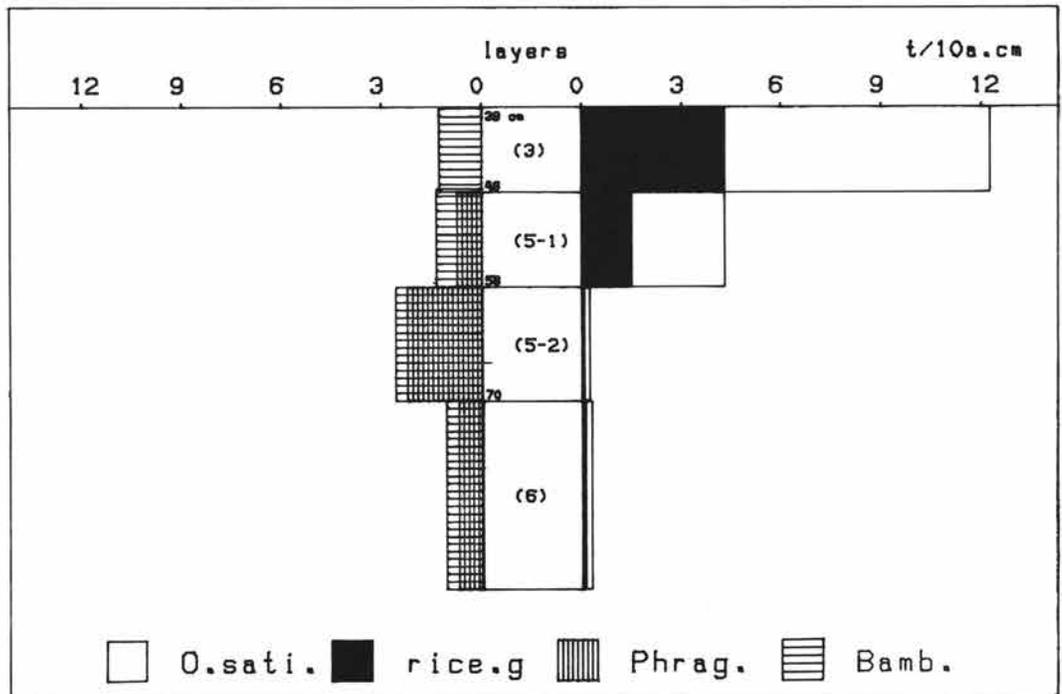


図4 熊野堂遺跡（第1地区）畦部におけるイネ科植物生産量

第IV章 遺構および出土遺物の自然科学的分析

4. 上述の結果から、この遺跡における畦状遺構は、栽培稲の生産址であると判断される。

前橋台地は最近まで陸稲の栽培が盛んに行なわれた地域であり、遺構の状況からみると4世紀前半からすでにイネの畑作がおこなわれていたことを示すものと思われる。

グラフの見方について

1. layers：採取地点の土層模式図、()内の数字は土層番号、左すみの小数字は表層からの深さをcmで表わしたものの。
2. O. sati.：Oryza sativa. 栽培稲の地上部乾物重。
rice. g：Oryza sativa の穎果（粳）乾物重。
Phrag.：Phragmites communis. ヨシの地上部乾物重。
Bamb.：Bambaceae. タケ亜科の地上部乾物重。
各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壤中から検出された各植物に由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。
3. 土柱模式図の右側に栽培植物、同左側に野、雑草を示している。単位 $t/10a \cdot cm$ はその土層の厚さ1cm、面積10a（1000m²）に包含されるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量をt（トン、 1×10^3 kg）で表わしたものである。例えば、その土層が10cmの厚みであると、グラフで示された値に10を乗じた量の植物体はその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意されたい。
4. 水田址・畑址が埋蔵されている土層では O. sati. の値がピークを形成する場合が多い。土層の堆積状況により一概にいえないが、水田址・畑址の層位はこのピークと一致するのが通例である。
5. Phrag.（ヨシ）、Bamb.（タケ）の乾物量変遷はその地点における土壤水分状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し、タケ（ササ）は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の消長をみると、その地点の乾湿変化を推定できる。

第2節 熊野堂遺跡第I地区花粉分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

分析試料は畝状の遺構より採取されたもので合計7点である。これらの試料について試料番号、土質、花粉、孢子化石産出傾向等について第1表にまとめて試料表とした。

第1表 試料表

試料番号	岩質	花粉・孢子化石産出傾向※
No.1.4区3 うね(2)	攪拌層	R
2 //	黒色土	R
3 //	褐色土	R
No.4.4区3 うね(1)	茶褐色土	A
5 //	//	R
6 //	//	RR
No.7.4区KII	褐色土	R

※ A：多い、R：少い、RR：極く少い

2. 分析結果

分析結果は、検出された花粉・孢子化石の総数を基数とする百分率で各試料における花粉・孢子化石の割合を算出し、付表-1として後掲した。その中で主なものについてはダイアグラムで表わし、付図-1として同様に後掲した。

更に写真図版(351・352 page)を作成したので参照されたい。

今回の分析によって、以下の花粉・孢子化石が検出された。

〈AP-1 (針葉樹花粉)〉

Pinus (マツ属)、*Taxodiaceae* (スギ科)、*Cryptomeria* (スギ属)

〈AP-2 (広葉樹花粉)〉

Alnus (ハンノキ属)、*Castanea* (クリ属)、*Castanopsis* (クリカシ属)、*Fagus* (ブナ属)、*Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属)、*Lepidobalanus* (コナラ亜属)、*Zelkova* (ケヤキ属)、*Tilia* (シナノキ属)

〈NAP (草本花粉)〉

Caryophyllaceae (ナデシコ科)、*Chenopodiaceae* (アカザ科)、*Carduoideae* (キク亜科)、*Artemisia* (ヨモギ属)、*Gramineae* (イネ科)、*Cichorioideae* (タンポポ亜科)

〈FP (形態分類花粉)〉

第IV章 遺構および出土遺物の自然科学的分析

Tricolpate pollen (三溝型花粉)、Inaperturate pollen (無口型花粉)

〈FS (羊歯類孢子)〉

Hymenophyllaceae (コケシノブ科)、Monolete spore (単条溝型孢子)、Trilete spore (三条溝型孢子)

〈その他〉

Pseudoschizaea (淡水生藻類)

次に各試料について、花粉・孢子化石の構成の特長について述べる。

[4区3うね (2) 地点]

○No.3 試料

検出された花粉は全て草本花粉で占められ、その主なものは、アカザ科が66.0%、イネ科が23.0%検出され優占した。

この他にキク亜科が5.0%、ナデシコ科、ヨモギ属がそれぞれ3.0%づつ検出された。

○No.2 試料

針葉樹花粉は非常に少なく、スギ科が3.0%、他にマツ属が僅かに検出されたのみである。

広葉樹花粉はクリカシ属、コナラ亜属が僅かながら検出された。

草本花粉は非常に多く合計で91.0%検出された。この中の $\frac{1}{2}$ 以上がイネ科であり、52.0%検出された。

これに次いでアカザ科が17.0%、ナデシコ科が12.0%、ヨモギ属が6.0%、キク亜科が4.0%検出された。

羊歯類孢子は、単条溝型孢子が僅かながら検出された。

○No.1 試料

針葉樹花粉は、スギ科が3.0%検出されたのみである。

広葉樹花粉はクリ属、アカガシ亜属、コナラ亜属が僅かに検出された。

草本花粉は合計で57.0%検出され多かった。主なものとしてヨモギ属が29.0%、イネ科が23.0%、更にキク亜科、アカザ科が3.0~4.0%の割合で検出された。

羊歯類孢子は合計で37.0%を占め比較的多く検出された。その大部分は単条溝型孢子であった。

[4区3うね (1) 地点]

○No.6 試料

この試料は、花粉・孢子化石が非常に少なく、合計で12個体検出されたのみであった。

検出された花粉はヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科等が多かった。

○No.5 試料

草本花粉が大部分を占め、ヨモギ属が44.0%、イネ科が16.0%、タンポポ亜科が12.0%、キク亜科が8.0%検出された。

草本花粉の他には単条溝型孢子が18.0%検出された。

○No.4 試料

この試料からは多くの花粉・孢子化石が検出された。

針葉樹花粉は合計で65.0%を占めて非常に多かった。その大部分はスギ科で占められ52.0%であった。この他にマツ属が9.5%、スギ属が3.5%検出された。

広葉樹花粉はコナラ亜属、ハンノキ属、ケヤキ属が若干検出されただけで少なかった。

草本花粉は合計で26.5%を占め、その主なものはイネ科が19.5%、タンポポ亜科が5.0%検出された他にキク亜科が僅かに検出された。

羊歯類孢子はコケシノブ科、単条溝型孢子等が僅かに検出されたのみであった。

[4区KII地点]

○No.7 試料

針葉樹花粉はマツ属、スギ科がそれぞれ6.0%づつ検出された。

広葉樹花粉は全く検出されなかった。

草本花粉は合計で48.0%を占め、主なものとしてイネ科が24.0%、ヨモギ属が20.0%、キク亜科が4.0%検出された。

羊歯類孢子は単条溝型孢子が20.0%、三条溝型孢子が6.0%検出された。

3. 考 察

各試料の花粉・孢子化石の特徴から古環境を推定すると次のようになる。

[4区3うね(2)地点]

下部のNo.3試料はアカザ科、イネ科を優占とし、キク亜科、ナデシコ科、ヨモギ属等が生育する草地在推定される。

No.2になるとアカザ科が急減し、イネ科をはじめ、ナデシコ科、ヨモギ属等が増加した草地在考えられる。

又、No.1になると、イネ科、ヨモギ属、キク亜科等の草本類や、羊歯類が優勢して生育する草地在への変化がうかがわれる。

[4区3うね(1)地点]

No.6は花粉・孢子化石が非常に少なかったので不明である。

No.5はヨモギ属を優占とし、イネ科、タンポポ亜科、更に羊歯類が良好に生育する草地在存在していたと考えられる。

No.4になるとスギ科やマツ属が優占することから、これらの針葉樹類の侵入がうかがわれる。

草本類としてはイネ科優占の生育が考えられる。

[4区KII地点]

イネ科、ヨモギ属、羊歯類が優勢して生育する草地在推定される。又、マツ属、スギ科等の針葉樹も僅かながら周囲に生育していたであろうと考えられる。

第IV章 遺構および出土遺物の自然科学的分析

今回の分析の結果、No. 4 を除いて、花粉・孢子化石が多いとは言えず、資料不足で十分なる考察が出来なかった。又、栽培植物と考えられる花粉はイネ科、とアカザ科が考えられるが、花粉の大きさ等を考慮するとイネ科は、アワ、ヒエ、ヨシ、ススキ等が考えられ、アカザ科はシロザ、アカザ、イノコヅチ、イヌビエ等が考えられ、雑草の可能性が大きい。このようなことから、この土地に何が栽培されていたかを考えた場合には、イネ科の可能性も考えられるが、花粉・孢子化石が少ないことから、花が咲いて実をつけるものではなく、葉、茎、根等を食べる根菜類の可能性も考えられる。

Explanation of plates

Photo No.	Sample No.	Polle and Spores
R L A T E 1		
1	No. 4	Pinus
2	No. 4	P.
3	No. 4	P.
4	No. 4	P.
5	No. 4	Taxodiaceae
6	No. 4	T.
7	No. 4	T.
8	No. 1	T.
9	No. 4	T.
10	No. 4	T.
11	No. 2	Castanopsis
12	No. 2	Caryophyllaceae
13	No. 3	Chenopodiaceae
14	No. 3	C.
15	No. 1	C.
16	No. 2	Carduoideae
17	No. 2	C.
18	No. 7	Artemisia
19	No. 3	Gramineae
20	No. 3	G.
21	No. 3	G.
22	No. 1	G.
23	No. 1	Monolete spore

Loc. 1 (①②③)

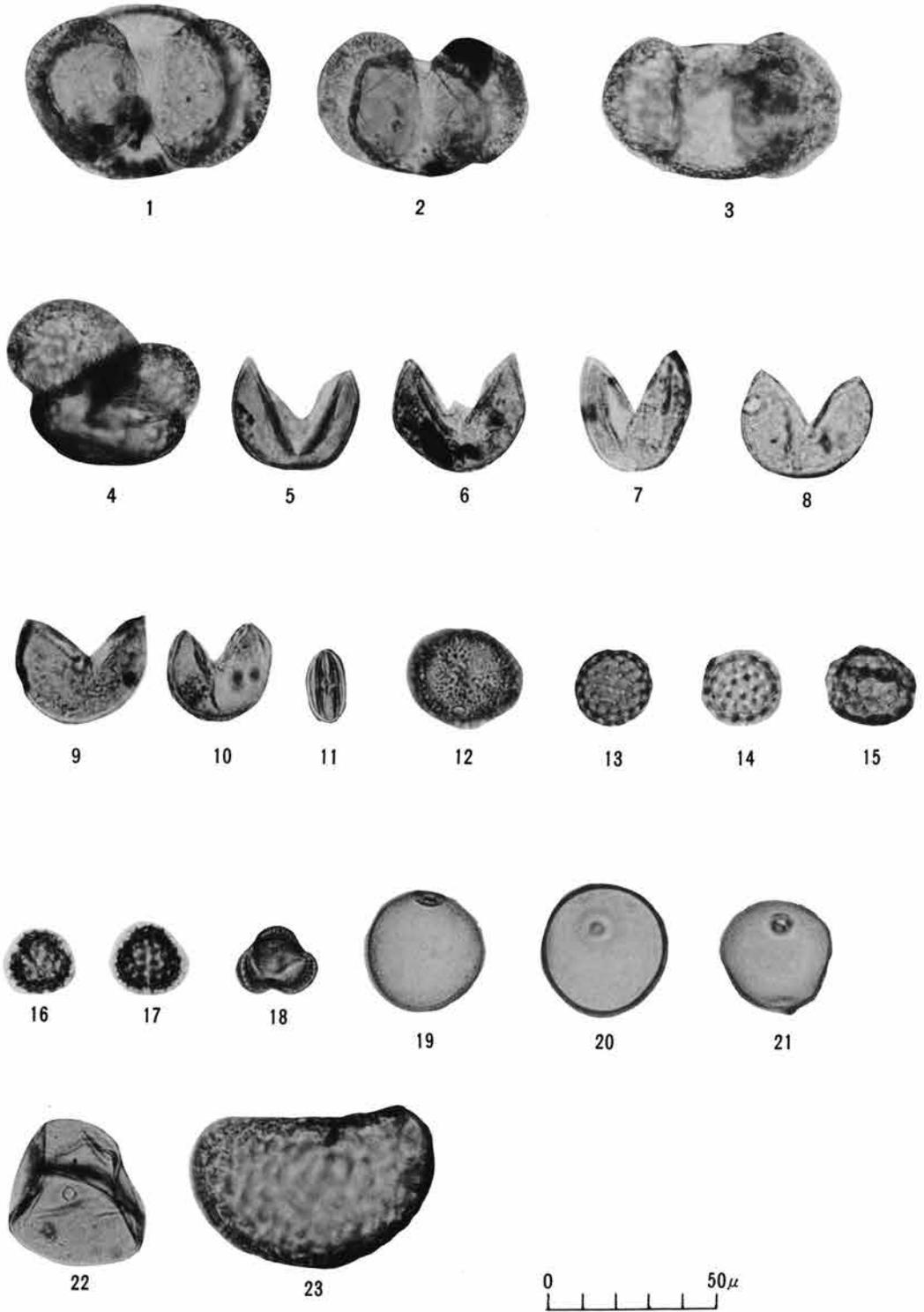


Loc. 2 (④⑤⑥)



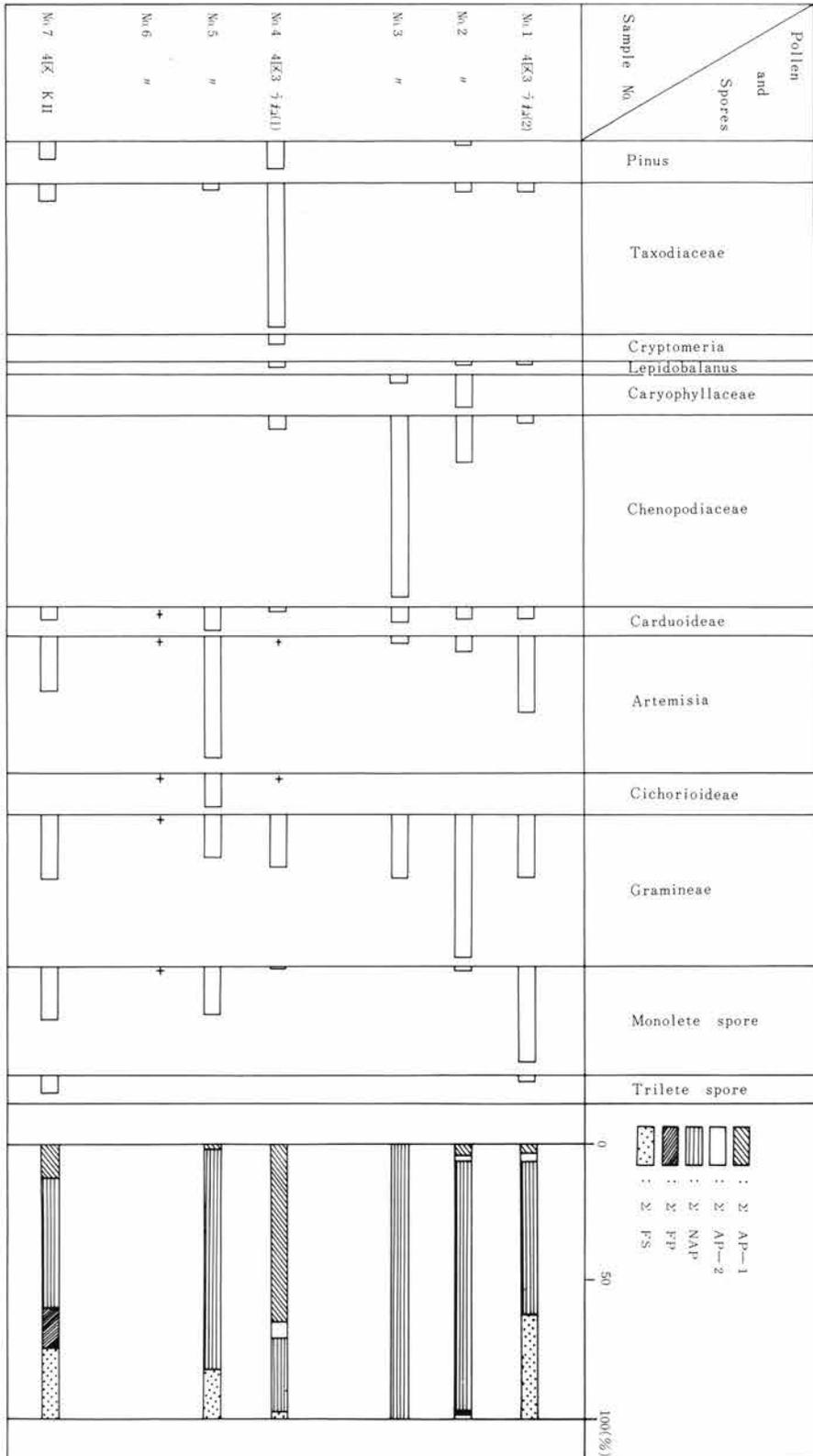
Loc. 3 (⑦)





第2節 熊野堂遺跡第I地区花粉分析報告

付図一 1 主要花粉孢子化石ダイアグラム



(分析担当: パトリノ・サーヴェイ株式会社)

第IV章 遺構および出土遺物の自然科学的分析

PALYNOSURVEY CO., Ltd.		DATE : 1981.06.02								NOTE :	
TITLE : 付表-1 花粉分析結果一覧表		DETERMINATION BY : 徳永 重元 河西 学 大嶋 秀明 吉川 昌伸 伊藤 良永								単位 : % ただしNo.6は 検出個体数で示す	
Pollen and Spores	Sample No.	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7			
		4 区 3 う ね (2)	"	"	"	"	"	4 区 K II			
Pinus			1.0		9.5			6.0			
Taxodiaceae		3.0	3.0		52.0	2.0		6.0			
Cryptomeria					3.5						
∑ AP-1 (N)		3	4	0	130	1	0	6			
(%)		3.0	4.0	0	65.0	2.0		12.0			
Alnus					1.5						
Castanea		1.0									
Castanopsis			1.0								
Fagus					0.5						
Cyclobalanopsis		1.0									
Lepidobalanus		1.0	1.0		2.5						
Zelkova					1.0						
Tilia					0.5						
∑ AP-2 (N)		3	2	0	12	0	0	0			
(%)		3.0	2.0	0	6.0	0		0			
∑ AP (N)		6	6	0	142	1	0	6			
(%)		6.0	6.0	0	71.0	2.0		12.0			
Caryophyllaceae			12.0	3.0							
Chenopodiaceae		3.0	17.0	66.0	5.0						
Carduoideae		4.0	4.0	5.0	1.0	8.0	1	4.0			
Artemisia		28.0	6.0	3.0	0.5	44.0	3	20.0			
Cichorioideae					0.5	12.0	1				
Gramineae		22.0	52.0	23.0	19.5	16.0	1	24.0			
∑ NAP (N)		55	91	100.0	53	40	6	24			
(%)		55.0	91.0	100.0	26.5	80.0		48.0			
Tricolpate Pollen			1.0								
Tricolporate pollen							2	4.0			
Inaperturate pollen								10.0			
∑ FP (N)		0	1	0	0	0	2	7			
(%)		0	1.0	0	0	0		14.0			
Hymenophyllaceae					1.0						
Monolete spore		35.0	2.0		1.0	18.0	4	20.0			
Trilete spore		2.0			0.5			6.0			
∑ FS (N)		37	2	0	5	9	4	13			
(%)		37.0	2.0	0	2.5	18.0		26.0			
∑ Pollen & Spores (N)		100	100	100.0	200	50	12	50			
Pseudoschizaea						4					

第3節 群馬県熊野堂遺跡第I地区及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料について

早稲田大学 中村忠晴

熊野堂遺跡第I地区及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料試料は群馬県埋蔵文化財調査事業団から早稲田大学系属校早稲田実業学校教諭市毛勲氏を通して提供を得たので、その試料について発光分光分析、X線回析 EPMA などにより測定を行ったので、その結果について報告する。

試料

提供の試料は、熊野堂遺跡第I地区出土の土状試料3の10試料及び清里・庚申塚遺跡住居址出土の土状試料1、塗彩土器試料9の10試料である。試料の詳細は〔表1〕に示す。

表1 試料採取場所

試料番号	試料採出場所	肉眼的色・その他
熊野堂遺跡第1地区	1 4区 9住 R-6	淡味のある赤茶色で鉍泥状・微鉍物粒岩石を混入
	2 4区 9住 R-12	赤茶色で泥状・微鉍物岩石を混入
	3 4区 10住 R-1	灰色を帯びた赤褐色で泥状・微鉍物岩石の混入やや多い
	4 4区 12住 P-4	赤褐色・塗彩土器片
	5 4区 15住 R-1	赤茶色で泥状・微鉍物岩石の混入やや少ない
	6 4区 16住 R-1	赤味のやや強い赤茶色・微鉍物岩石の混入やや少ない
	7 4区 16住 R-2	赤茶色で泥状・微鉍物岩石の混入やや多い
	8 4区 16住 R-3	赤味のやや強い赤茶色・微鉍物岩石を混入
	9 13住 P-1	赤茶色・塗彩土器片
	10 4区 南側表土土器片	赤茶色・塗彩土器片
清里・庚申塚遺跡	11 3号住居址	赤褐色・塗彩土器片
	12 3号住居址	赤褐色・塗彩土器片
	13 3号住居址	暗味を帯びた赤褐色・塗彩土器片
	14 3号住居址	暗味を帯びた赤褐色・塗彩土器片
	15 3号住居址	赤味の強い赤茶色・塗彩土器片
	16 3号住居址	暗味を帯びた赤褐色・塗彩土器片
	17 3号住居址	暗味を帯びた赤褐色・塗彩土器片
	18 3号住居址	赤味のやや強い赤茶色・塗彩土器片
	19 3号住居址	暗味を帯びた赤褐色・塗彩土器片
	20 18号住居址	暗赤褐色で泥状・微鉍物岩石の混入やや多い。

(註)塗彩土器の顔料中にも微鉍物岩石が混入している。

測定

〔表1〕の試料中で測定に必要な試料量が得られたものについて、つぎの測定を行った。

発光分光分析
20試料中で、No.4、No.12、No.14～No.19については測定に十分な試料量が得られなかったため、他の12試料について測定を行った。試料採取に当り、各試料をシリカゲルを用いたデシケーターにて一昼夜乾燥後、泥状試料については

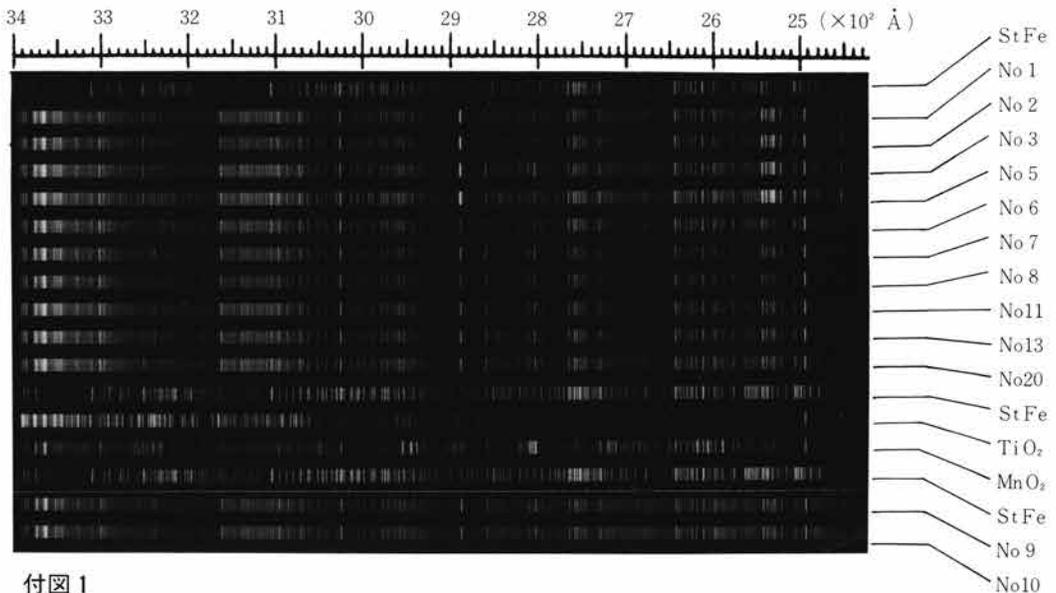
第IV章 遺構および出土遺物の自然科学的分析

実体顕微鏡（約20倍）下で微粒鉍物岩石の混入のないよう注意して採取した。測定波長域は2450 Å～3450 Åとして、次の測定条件にて写真乾板上に輝線として得た。

測定条件 分光器：JASCO-CT100MGRATING MONOCHROMETER、電源：JASCO LOW VOLTAGE A.C、ARC ROWER SUPPLY、電極：ナショナルカーボンスペシャルf 6.15 mm、試料穴：f 2 mm、・d 4 mm、励起電圧：300V、励起電流：6 A、励起時間：25秒、極間電圧：40～50 V、電極間隔：3 mm、スリット巾：0.005mm、結像法：スリット結像、集光法：シリンドリカルレンズ使用、写真乾板：KODAK SA-1、現像：KODAK D-19・20°C±1°C・3分、定着：フジフィッス6分。

また参考試料としてチタン、マンガン（いずれも純正化学製特級酸化物）も同条件で測定した。波長測定の標準試料として、ジョンソンマッセイ製純鉄を用いた。測定は各元素の輝線の強弱を島津製プロジェクターを用い、肉眼的観測により行なった。その結果は、写真乾板を〔図1〕に観測結果を〔表2〕に示した。この分析の結果を考察すると、珪素、アルミニウム、マグネシウム、マンガン、カルシウム、チタン等を確認したがこれ等は混入した岩石の成分と考えられる。また水銀、鉛は検出されていない。〔表2〕の結果から明らかに赤色顔料の主成分は鉄であることが確認できる。ただチタンの検出は主成分の鉄に関係するものと思われるが更に検討を必要とし、本実験では不明である。また熊野堂遺跡第I地区出土試料と清里・庚申塚遺跡出土試料とは、定性的ではあるがその組成は殆ど同じと思われる。

発光分光分析結果



付図1

表2 発光分光分析結果

元 素	試験番号	1	2	3	5	6	7	8	9	10	11	13	20
	波長(A)												
Hg	2536.52	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	3125.66	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	3131.83	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pb	2613.65	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2833.07	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	2873.32	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Fe	2522.85	S	S	M	2 S	S	M	M	M	M	S	S	S
	2772.11	M	M	M	S	S	M	M	M	M	M	M	M
	2983.57	2 S	2 S	2 S	3 S	2 S	2 S	S	S	S	2 S	2 S	S
Ti	3088.03	2 W	3 W	3 W	2 W	3 W	2 W	3 W	3 W	3 W	2 W	3 W	3 W
	3361.26	W	W	2 W	W	3 W	W	2 W	3 W	3 W	W	W	3 W
	3370.44	3 W	3 W	3 W	3 W	—	3 W	3 W	3 W	—	3 W	3 W	3 W
Mn	2593.73	2 W	2 W	W	3 W	2 W	W	2 W	2 W	2 W	W	2 W	2 W
	2940.39	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	2 W	3 W	2 W
Mg	2852.13	W	2 W	M	W	2 W	M	W	W	2 W	W	W	W
	2802.70	2 W	3 W	W	2 W	3 W	W	2 W	2 W	3 W	2 W	3 W	2 W
Si	2881.58	2 S	2 S	2 S	2 S	M	S	M	M	W	M	M	M
	2516.12	S	S	S	S	W	W	W	W	2 W	W	W	W
Ca	3179.33	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W	3 W
	3158.87	3 W	3 W	3 W	—	3 W	3 W	3 W	—	—	3 W	3 W	3 W
Al	3082.16	W	W	W	W	2 W	W	2 W	2 W	2 W	W	W	2 W
	3092.71	2 W	W	2 W	2 W	3 W	2 W	2 W	3 W	3 W	3 W	2 W	3 W

(注) 3 S 2 S S M W 2 W 3 W
 最強 中庸 最弱 を輝線の変化度とする。

X線回析

赤色顔料の鉱物種同定を目的として測定を行った。試料は発光分光分析に供した12試料について測定した。試料ホルダーは少量の試料が有るため、3mm×15mm×0.2mmの溝をスライドガラスに作製し使用した。測定条件は次に示す。

測定条件 理学電機製、ターゲット：鉄、発生X線：鉄 K α (マンガンフィルター使用) 印加電圧：30KV、フィラメント電流：15mA、時定数：1、ゴニオメーター回転速度：2 Q - 2°/分、チャート速度：1cm/分、スリット系：1°-0.3 μ m-1°、フルスケール：1×10³CPS(ただし参考試料は2×10³CPS)。なお参考試料として酸化鉄(III)(純正化学製特級試薬)・赤鉄鉱(赤谷鉱山産)を試料と同条件で測定した。測定結果はいずれも殆ど同様であり、相違するところは赤鉄鉱構造のシグナルの僅かな強度差及び混入している鉱物の多少による強度差の程度であった。し

第IV章 遺構および出土遺物の自然科学的分析

たがって、代表として熊野堂遺跡第I地区出土のNo.5（4区15住R-1泥状試料1、No.9（13住P-1原形の塗彩土器）と清里・庚申塚遺跡出土No.20（18号住居址泥状試料）の三試料のX線回析チャート及び参考試料のX線回析チャートを〔図2〕に示した。測定結果から考察すると、いずれの試料にも赤鉄鉱のシグナルが見られるが参考試料と比較すると赤鉄鉱構造を持っている量は比較的少なく褐鉄鉱（非晶質）の部分が多いと推察できる。また他のシグナルは石英や長石類で、肉眼的観察により微粒岩石の混入が見られていることと一致している。さらに赤色顔料の色差は赤鉄鉱の量が多いと褐色を増し、非晶質の褐鉄鉱或は石英が多いと赤色が強くなるように推察される。

EPMA 分析

試料量が十分採取できなかつた塗彩土器片試料について、塗布されている赤色顔料の組成分析を目的とし、電子線を用いて極微細部（約 $1\mu^3$ ）の非破壊分析器であるEPMAにより測定を行った。試料は塗彩土器片中から測定に適当な $5\text{mm}\times 5\text{mm}$ 程度に加工し安く、両遺跡に関連するよう選んだ。選択した試料は、熊野堂遺跡第I地区出土No.10（4区南側表土土器片）清里・庚申塚遺跡出土のNo.15、No.17（3号住居址土器片）の三試料について測定した。測定条件は次に示す。

測定条件 分析器：JEOL50A、取出角度： 35° 試料電流： $1.5\times 10^{-8}\text{A}$ （MgOに於て）、加速電圧：15KV、ビーム径： $f\ 1\mu$ 、蒸着膜厚： 300\AA （炭素）、分光結晶：PET、RAP、フルスケール：500CPS。

測定の結果は〔図3〕に示す。分析結果を考察すると、いずれの試料も各元素のシグナル強度は殆ど同じである。また発光分光分析の結果と殆ど一致している。したがって両遺跡出土土器に用いられた赤色顔料はほぼ同じ材質であると推察できる。硅素とアルミニウムのシグナル強度に多少の差違がある。これは赤色顔料中に微粒子の鉱物岩石が混入しており、石英や長石類などの分布が多少相違するものと考えられる。

熊野堂遺跡第I地区4区15住R-1（No.5）と清里・庚申塚遺跡18号住居址（No.20）について両試料は泥状で〔表1〕に示したように、色の相違が見られる。また試料量も比較的多量にあるので二、三の検討を試みた。

赤色顔料の回収

赤色顔料は顕微鏡観察により超微粒子であることが見られたので、水を用いて鉱物、岩石粒子を簡易に分離することを試みた。操作は約3gの試料を500mlのピーカーに取り、蒸留水を500ml加え、超音波を用いて30秒間攪拌し、約30秒間放置して懸濁液を集め、遠心分離によって微粒子を回収した。この操作は殆ど懸濁がなくなるまでくりかえした。この試料をNo.Dとし、放置時間約10秒の試料をNo.C、放置時間数秒のものをNo.B、残渣をNo.Aとした。実験結果を〔表3〕に示す。この粒度分別は簡易に行つたため粗雑ではあつたが、或る程度分別することができた。試料No.5-AとNo.20-Aは砂状で鉱物・岩石質を主とし、両試料の粒径は同様に肉眼的には差違は判別で

第3節 群馬県熊野堂遺跡第I地区及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料について

きない。しかし色の相違から試料No.5-Aには石英が多く試料No.20-Aには有色鉱物が多いものと観察した。したがって試料No.5-DとNo.20-Dの色の相違は石英や有色鉱物が微細粒子で混入し、その割合或いは量の違いにあると考えられる。そこで試料No.5-DとNo.20-Dについて、X線回析を前記と同じ条件で測定した。測定結果は〔図4〕に示す。X線回析チャートより、試料No.5-Dには比較的強度のある石英のシグナルが見られ、石英の極微粒子が混入しているのが判かる。試料No.20-Dには石英や長石類も少なく赤鉄鉱のシグナルも試料No.5-Dよりやや大きい。このことから色の相違は混入した鉱物種とその量に関係するものと考えられる。なお混入している鉱物岩石の粒径の様子を知るために粗粒の部分ではあるが、赤色顔料と殆ど分離できたNo.5-AとNo.20-Aの試料について粒度分布をしらべてみた。その結果〔表4〕に示す。この結果を考察すると、その分布は非常に類似しており、興味ある結果が得られた。また〔図2〕・〔図4〕のX線回析の結果から赤鉄鉱の含有量は少なく褐鉄鉱（非晶質）が多いと思われるのでNo.5-DとNo.20-Dの試料について灼熱減量を測定した。その結果はそれぞれ10.1%、12.3%の値を得た。これは褐鉄鉱が比較的多く存在していることを示すものと考えられる。この実験で有機物混入の影響を考慮せねばならぬがその混入については強熱の初期に臭、煙、試料の炭化の現象が観察されなかったので、分析値への影響は殆どないものと思われる。

総括

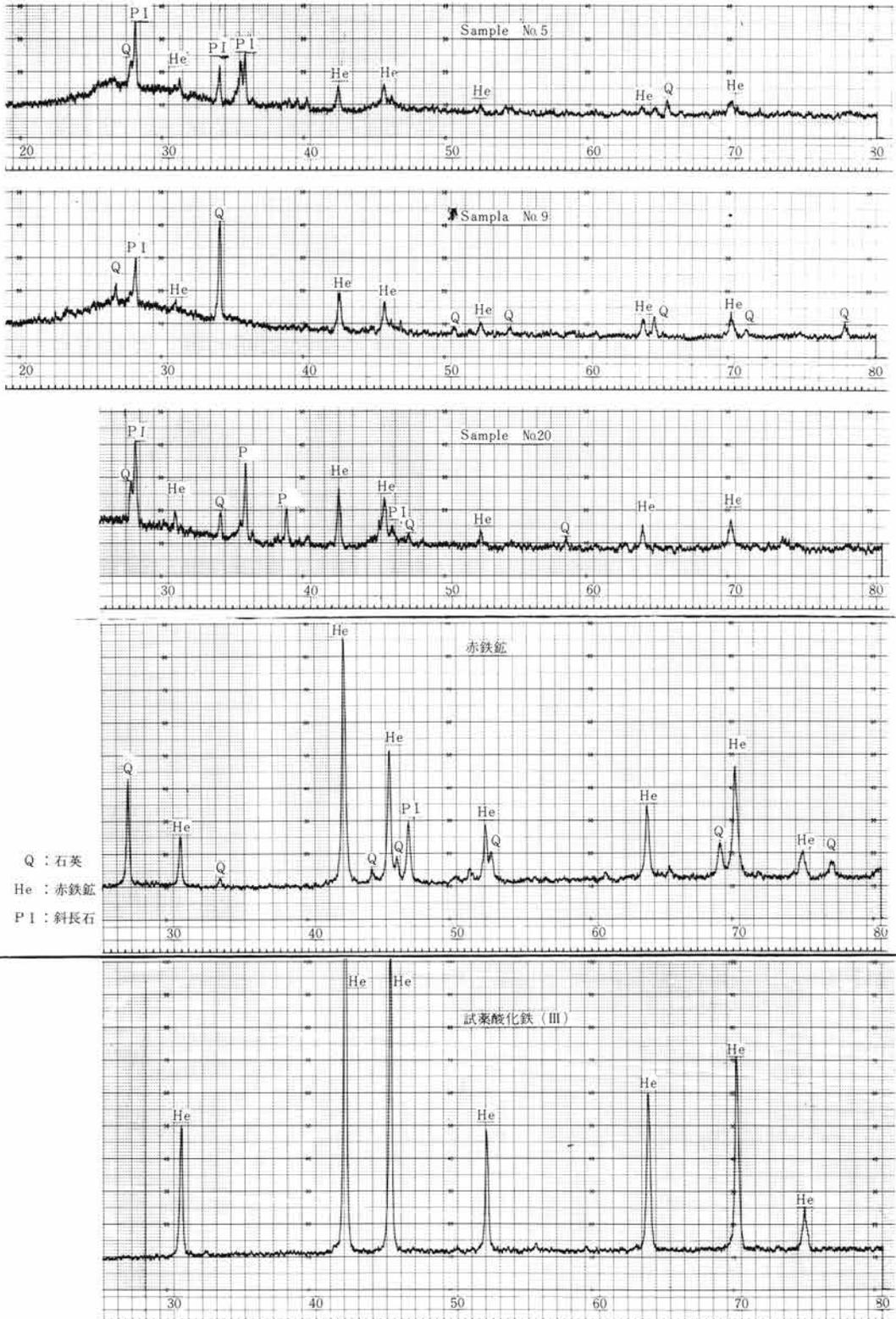
各測定結果を総じて考察する。

- 1 熊野遺跡第I地区及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料は、褐鉄鉱と赤鉄鉱の混合しているものであり、鉄丹であることが認められる。
- 2 塗彩土器の赤色顔料の色の相違は、混入する鉱物種の相違とその量に関係するものと推察する。
- 3 両遺跡出土の赤色顔料は、組成、混入する鉱物、岩石の粒度分布、結晶質と非結晶質の割合など非常に類似しており、関係の深いものと思われる。
- 4 鉄丹の場合、一般にチタンの顕著な検出が見られるので興味ある元素と思うが今後の検討に待つ。
- 5 赤色顔料は鉄丹と認められたが、原産地との関連は必要情報が誠に不十分で選定することは現時点では困難である。

本報告では十分な実験と検討ができず、推察の域を脱することを得なかった。今後も微力ながら追究を続け問題点の解決への一助となることを願っている。

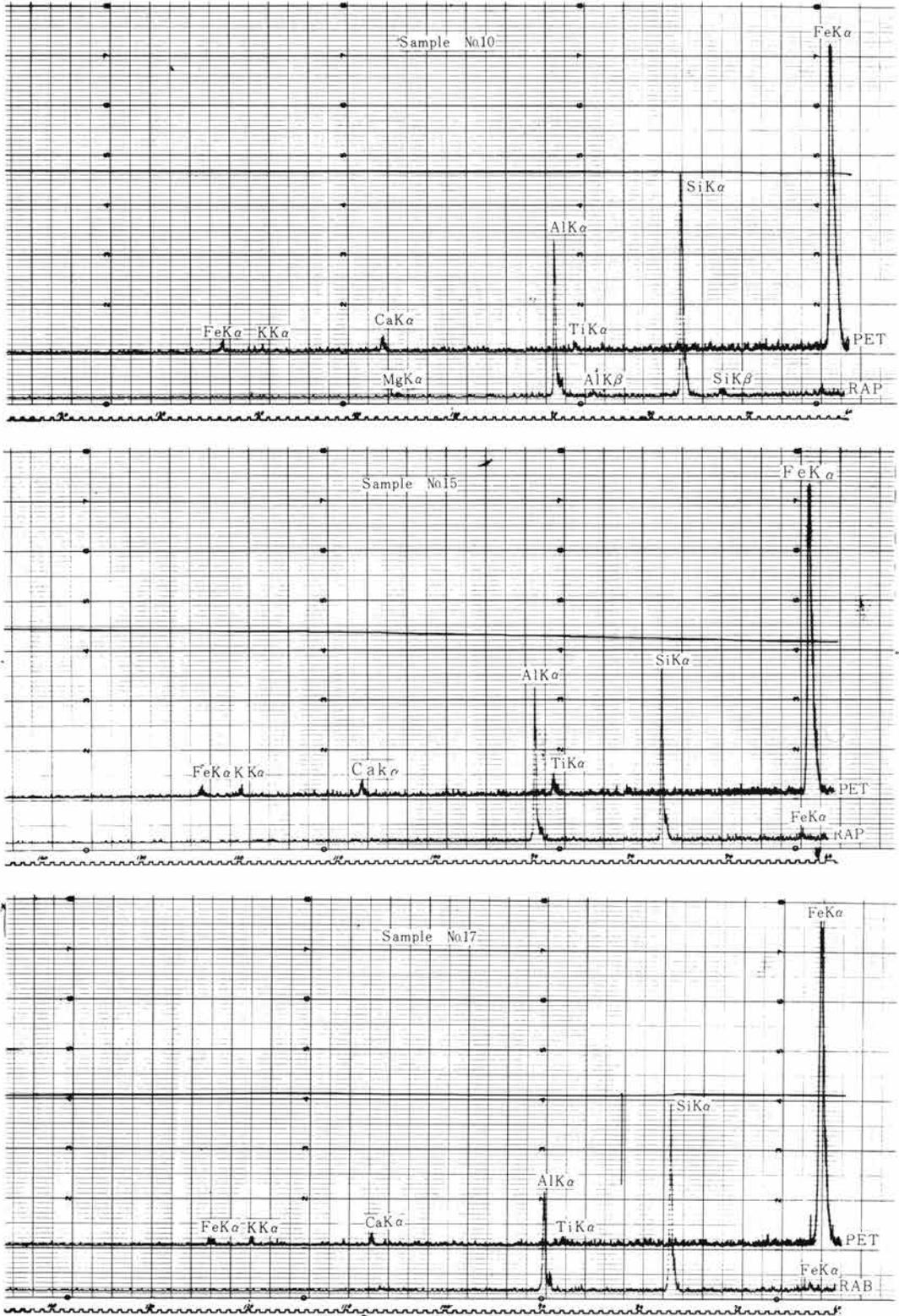
おわりに本報告のデーターを得るに当たり、測定に多大の援助を得た早稲田大学教育学部技術職員雨宮たつみ女史、同学部学理科学生藤本幸司君に深く感謝の意を表す。

第IV章 遺構および出土遺物の自然科学的分析

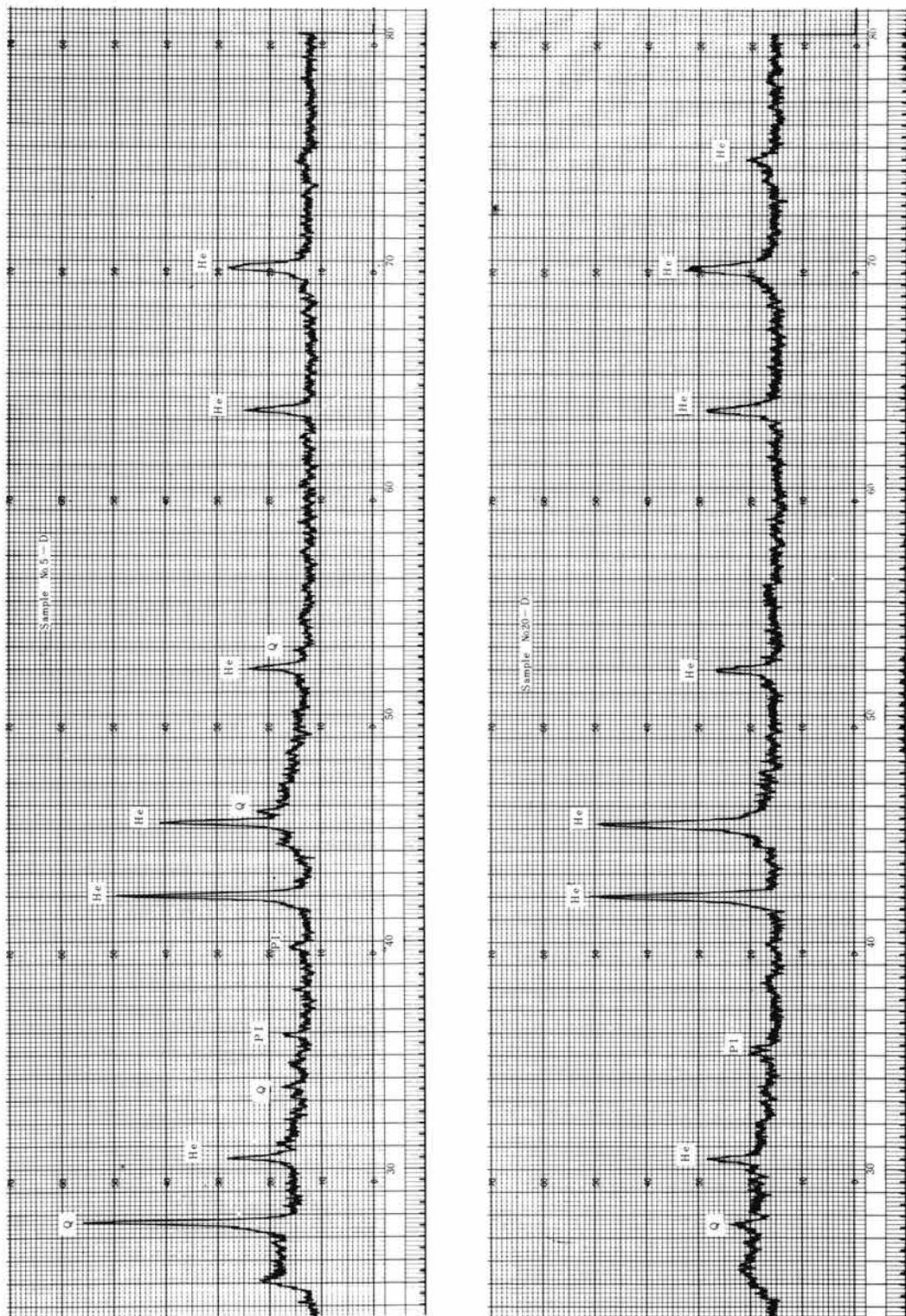


付図2 X線回析チャート

第3節 群馬県熊野堂遺跡第I地区及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料について



付図3 EPM分析チャート



付図4 X線回折チャート

表3 粒度分布別

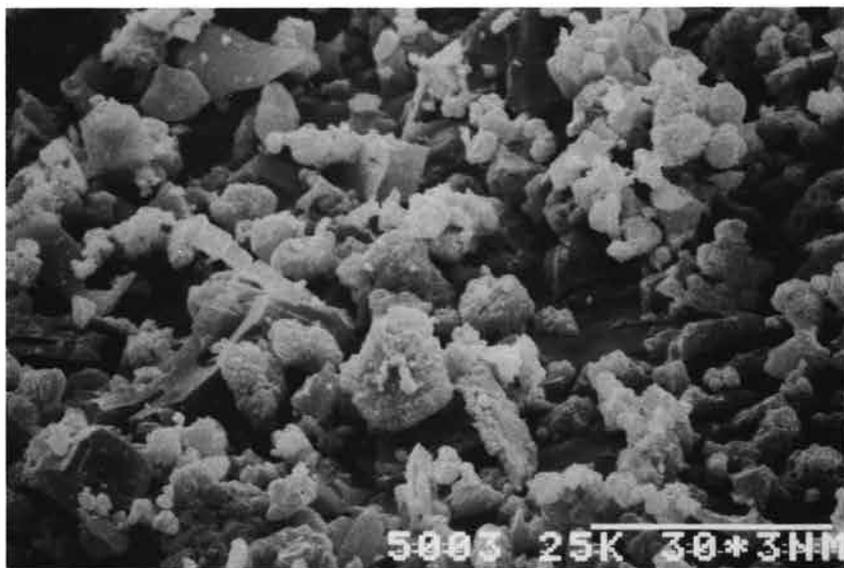
	No. 5		No.20	
	分離の重量%	肉眼的色	分離の重量%	肉眼的色
A	23.2	僅かに茶を帯びた白色	58.4	やや褐色を帯びた灰色
B	1.1	白茶色	0.4	灰褐色
C	36.4	白味を帯びた赤茶色	23.3	褐色
D	39.0	やや淡い赤茶色	17.4	やや暗い褐色

表4 粒度分布

粒度 mesh	No.5-A 重量%	No.20-A 重量%
32以上	7.3	5.8
32～42	2.7	5.7
42～65	8.3	12.2
65～80	7.6	8.5
80～100	7.3	7.4
100以下	66.8	60.4

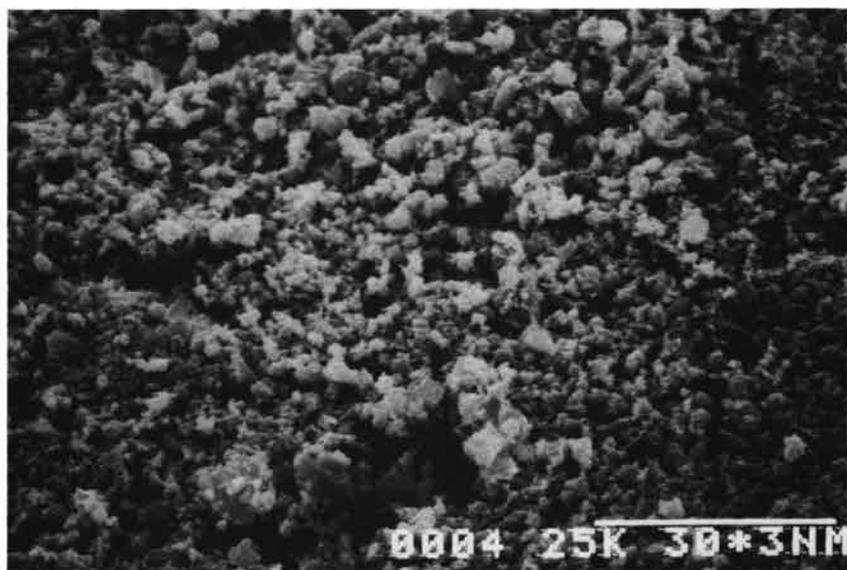
補 追

〔表3〕の試料No.5とNo.20の各CとDについて、粒子の状況を知るため走査型電子顕微鏡（日立製）により観察した。その結果を〔図5〕に示す。肉眼観察の色はCとDは余り差はないが、いずれも鉱物、岩石の細粒が見られる。このことは塗彩土器片のEPMA分析（赤色顔料塗布部を原形のまま、極微細部分の組成分析〔表3〕参考）の結果に示されている珪酸塩鉱物の所在と一致している。ここではその事実のみを示し、原因或はその理由については今後の検討を待つ。



No. 5 - C

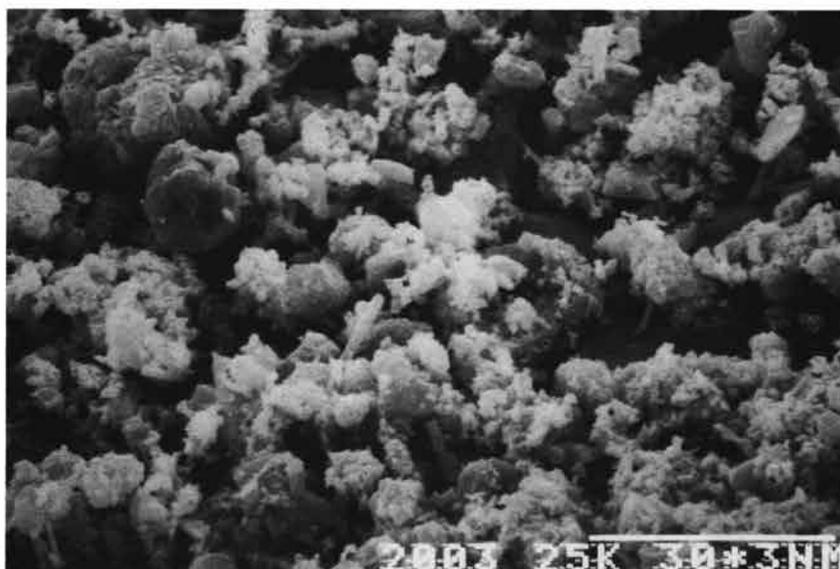
×1000



No. 5 - D

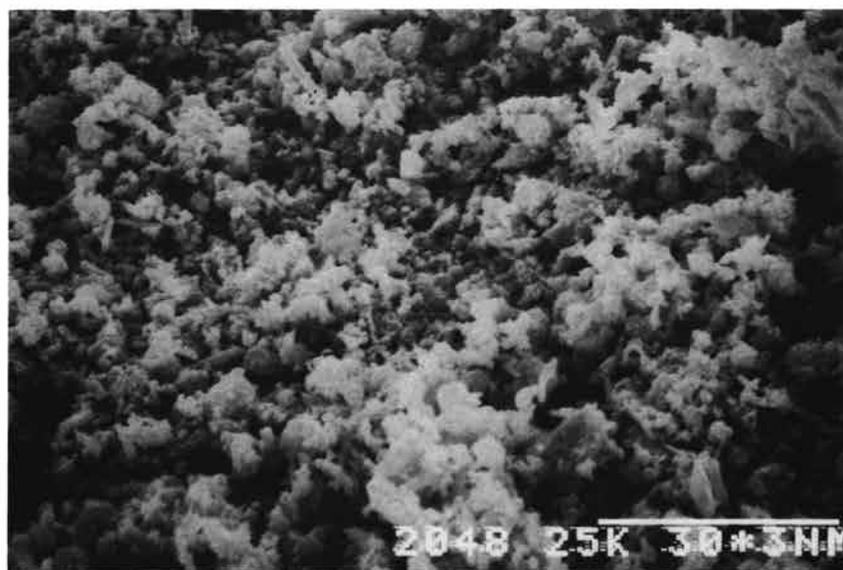
×1000

第3節 群馬県熊野堂遺跡第I地区及び清里・庚申塚遺跡出土の赤色顔料について



No.20—C

×1000



No.20—D

×1000

第4節 原子吸光分析還元気化法による赤色顔料の分析

群馬県工業試験場 花岡 紘一

熊野堂遺跡第I地区 (10億分の1)

発掘区出土資料	ppb
4区 南側表土	17ppb
4区 9号住居址R-1	40
// R-2	57
// R-3	64
// R-4	46
4区 12号住居址R-1	55
4区 15号住居址R-1	26
4区 13号住居址R-1	42
4区 16号住居址R-2	27
// R-3	37

清里・庚申塚 (10億分の1)

発掘区出土資料	ppb
2号 住 居 址	5 ppb
3号 //	7
11号 //	0
13号 //	0
14号 //	0
17号 //	0
18号 住 居 址 A	0
18号 住 居 址 B	0
18号 住 居 址 C	0
20号 住 居 址	0

注：1. ppb：10億分の1

2. 清里・庚申塚遺跡は土器片のため土器胎土とともに試料化した。18号住居址は土器片と顔料である。

3. 清里・庚申塚遺跡、熊野堂遺跡第I地区とも結果は、水銀含有量は微量であった。

写 真 图 版

遺跡近景
調査区南端より北を望む



遺跡近景
4区より南を望む



子備調査風景
(4区3号畠址)





4区南下層全景
(北より)

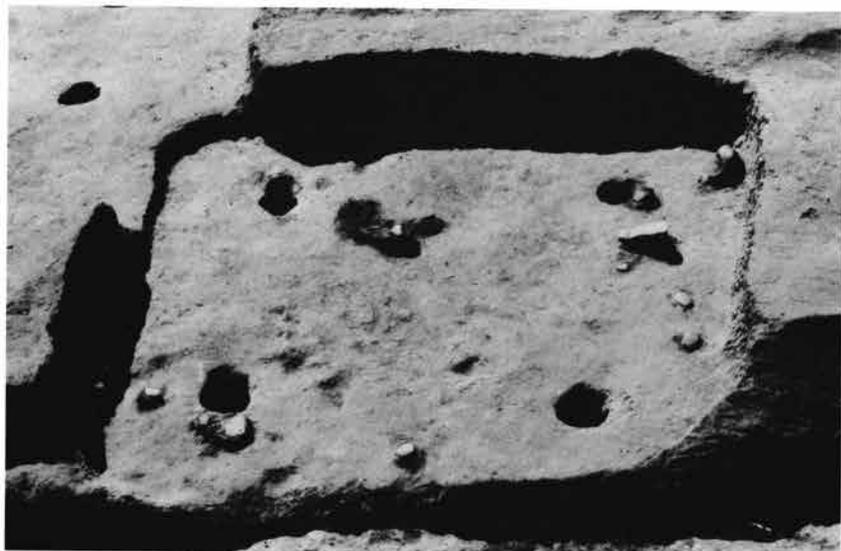


1区全景
(北より)

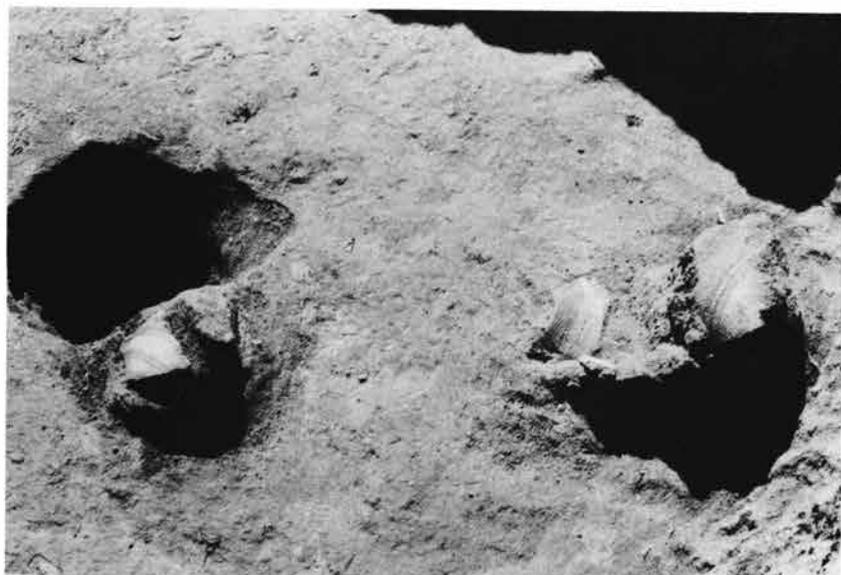


1区全景
(南より)

17号住居址
全景



17号住居址
遺物出土状態

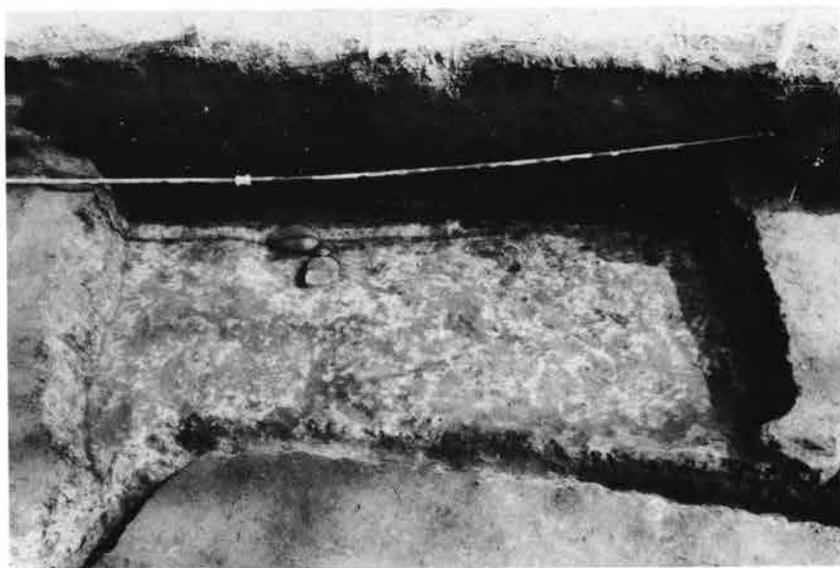


4号住居址
全景





4号住居址
遺物出土状態



7号住居址
全景



8号住居址
全景

9号住居址
全景



10号住居址
全景



10号住居址
遺物出土状態





11号住居址
全 景
(後方は7号土坑)



12号住居址
全 景

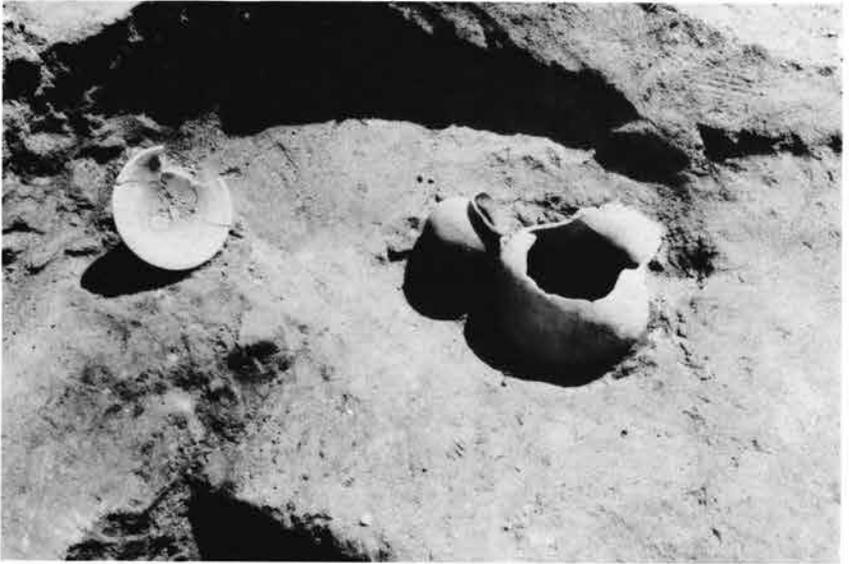


12号住居址
炉址内遺物出
土状態

13号住居址
全 景
(中央は 8 号
土坑)

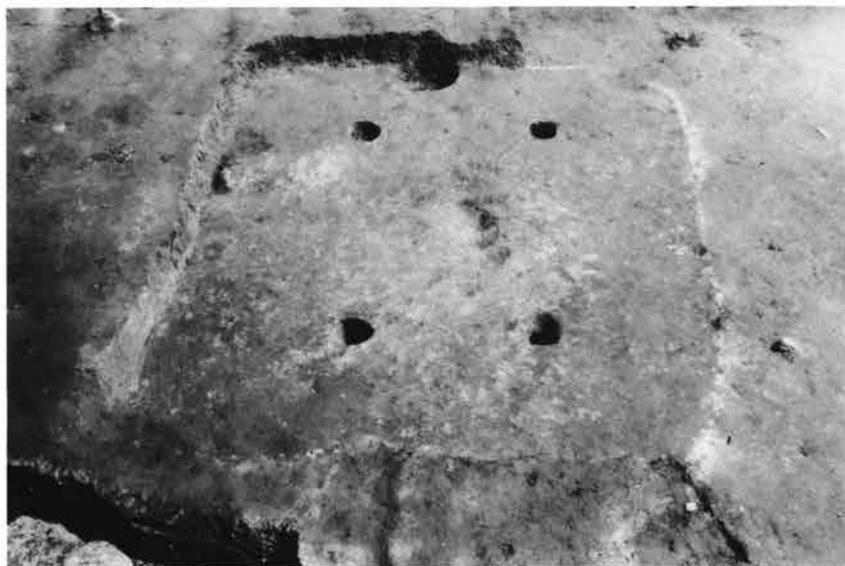


13号住居址
遺物出土状態



13号住居址
遺物出土状態
(土器の内部
は赤色顔料)





15号住居址
全 景



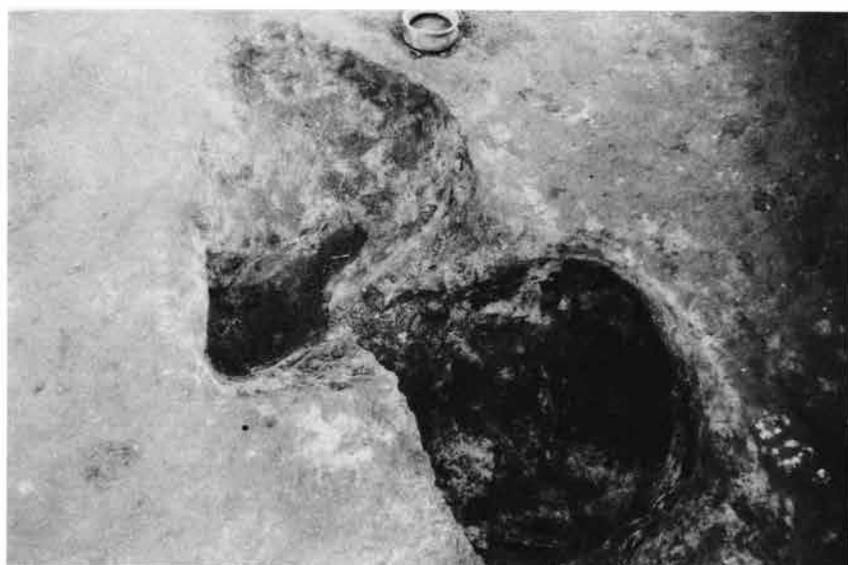
15号住居址
遺物出土状態



16号住居址
全 景



16号住居址
炉址断面



16号住居址
赤色顔料出土
の貯蔵穴



16号住居址
磨製石鏃出土
状態



16号住居址
遺物出土状態



16号住居址
遺物出土状態



18号住居址
全景

18号住居址
遺物出土狀態



19号住居址
炉址周边遺物
出土狀態



21号住居址
全景





22号住居址
全 景



22号住居址
遺物出土状態



36号住居址
全 景

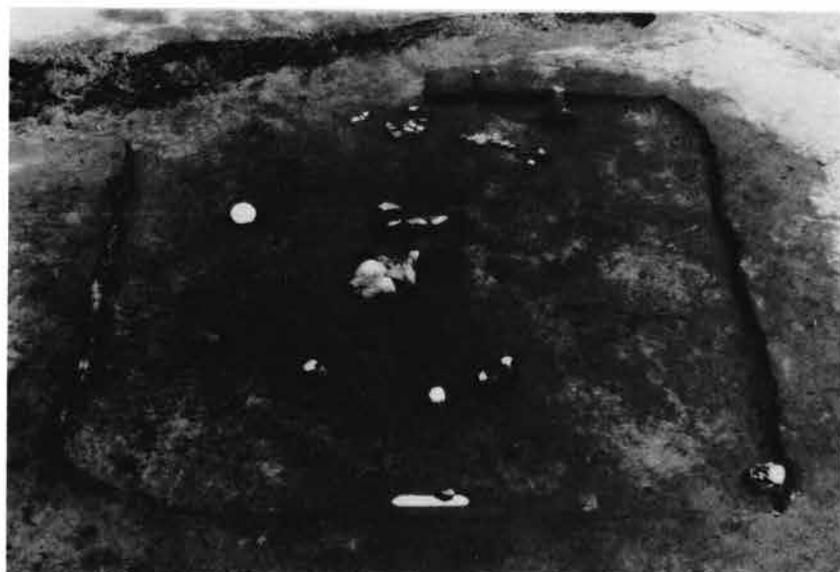
36号住居址
遺物出土状態



36号住居址
炉址断面



37号住居址
全景





48号住居址
全景



67号住居址
全景



67号住居址
遺物出土狀態



1号住居址
全景



1号住居址
遺物出土状態



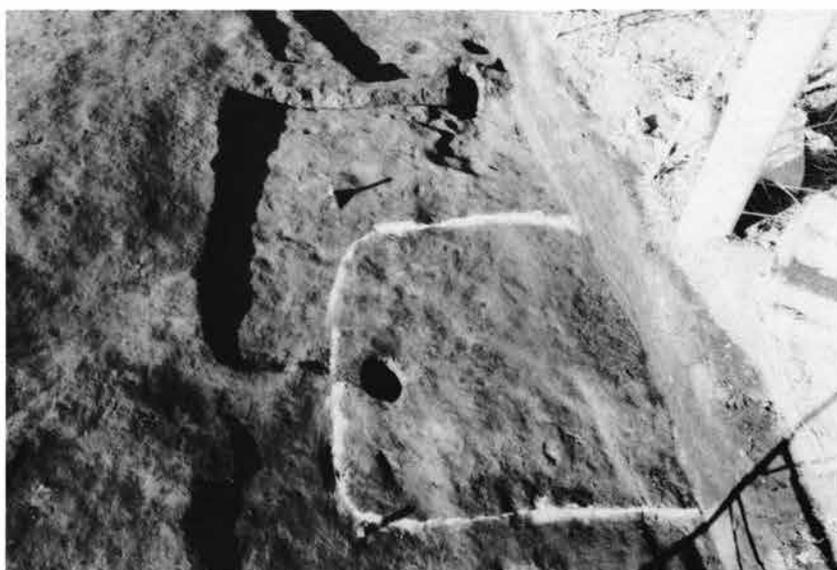
1号住居址
カマド断面



2号住居址
全 景



3号住居址
全 景



5号住居址
全 景
(後方は2号
住居址)

6号住居址
全 景
(右側の一部)

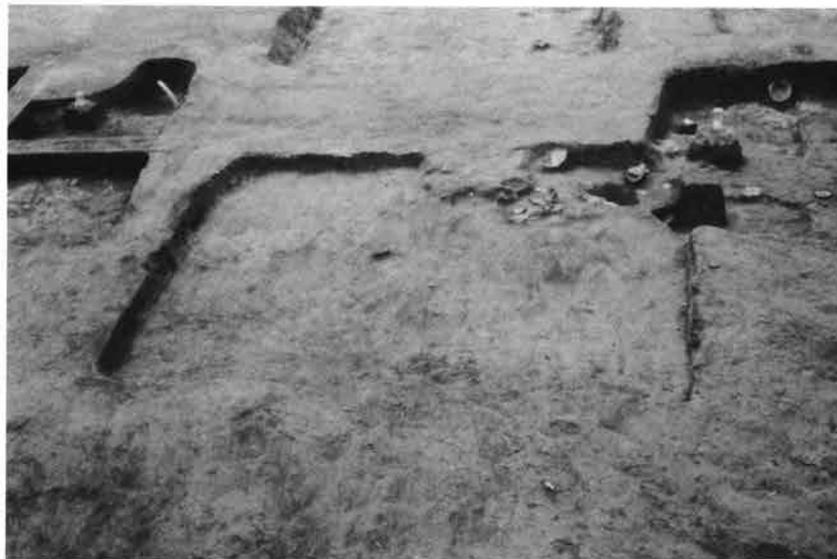


6号住居址
遺物出土状態



51・52号住居址
(前方が51号
住居址・後方
右側が52号住
居址)





51号住居址
全 景



51号住居址
遺物出土状態
(カマド右側)



51号住居址
カマド断面

52号住居址
カマド断面



53号住居址
全 景



53号住居址
カマド断面





54号住居址
全 景



54号住居址
カマド断面



55号住居址
全 景

56号住居址
全 景

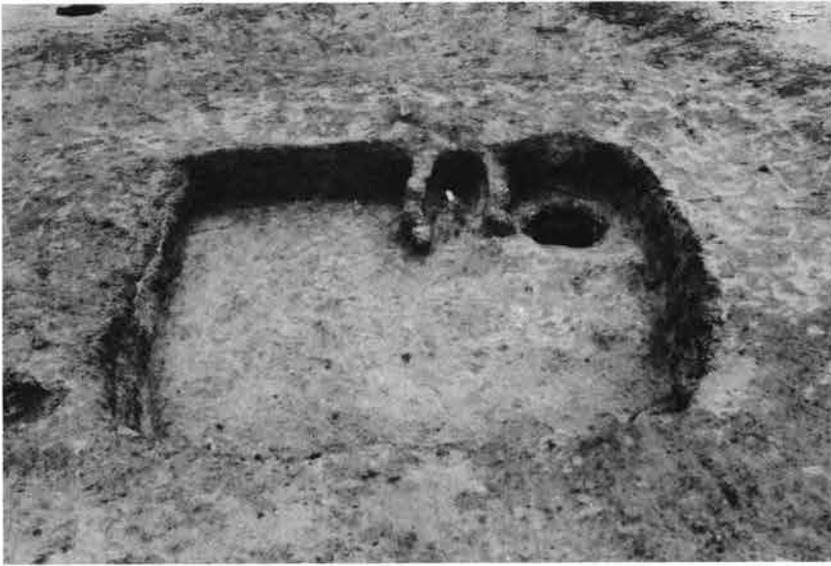


56号住居址
貯藏穴内遺物
出土状態

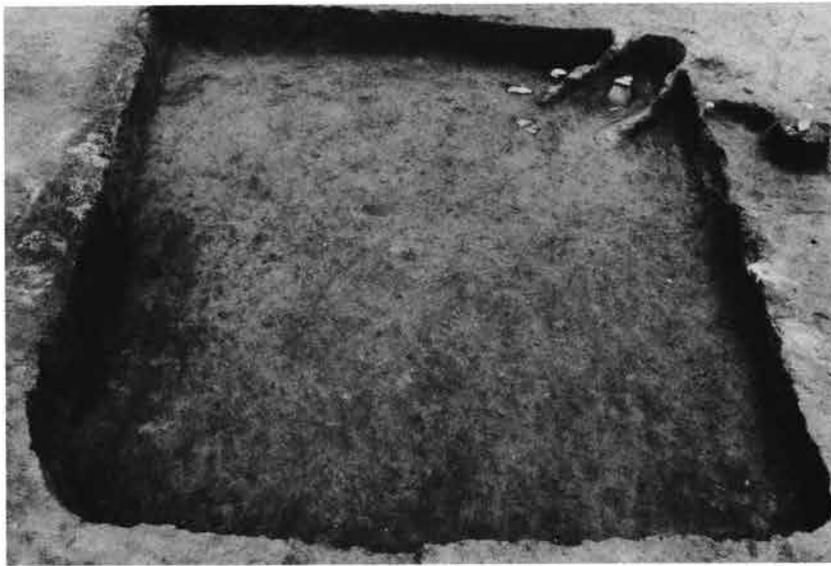


57号住居址
全 景





58号住居址
全 景



59号住居址
全 景



59号住居址
カマド



61号住居址
全 景



61号住居址
カマド断面



61号住居址
カマド



20号住居址
全 景
(中央は11号
土坑)



20号住居址
カマド



23号住居址
全 景



24号址
全 景



24号址
pit断面



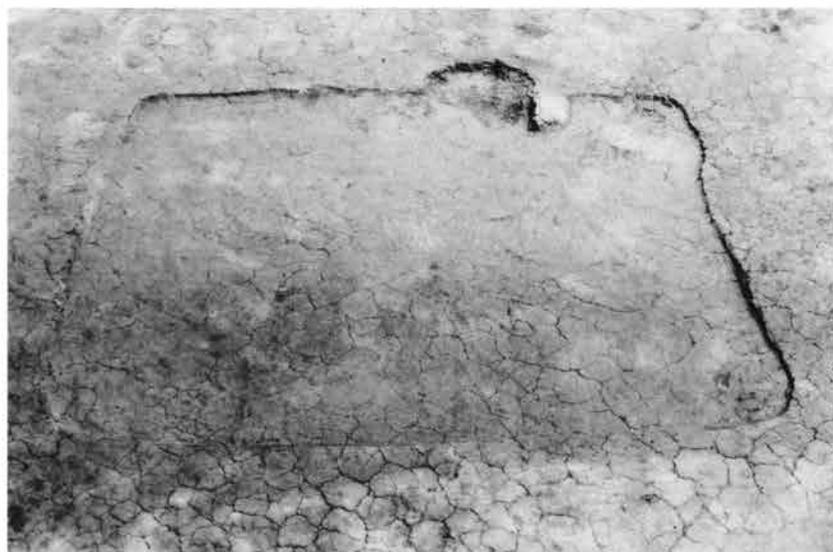
25·26·27号住
居址
全 景



28・29号住居址
全 景
(前方中央が
29号住居址)



28号住居址
遺物出土状態



30号住居址
全 景

31号住居址
全 景



31号住居址
遺物出土状態



31号住居址
カマド断面





32号住居址

全 景

(左側は31号
住居址、前方
は33号住居址)



33号住居址

全 景



34・35号住居址

全 景

(左側34号住
居址・右側35
号住居址)

34号住居址
遺物出土状態



38号住居址
全 景



39号住居址
全 景
(前方は38号
住居址)

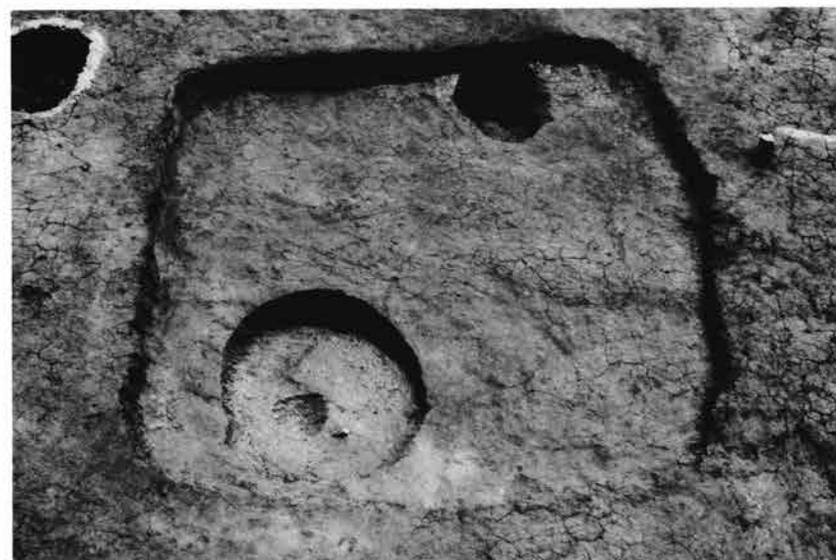




40号住居址
全景



41号住居址
全景



42号住居址
全景

43号住居址
全 景



43号住居址
カマド断面



44号住居址
全 景
(前方左側は
43号住居址)





45号住居址
カマド

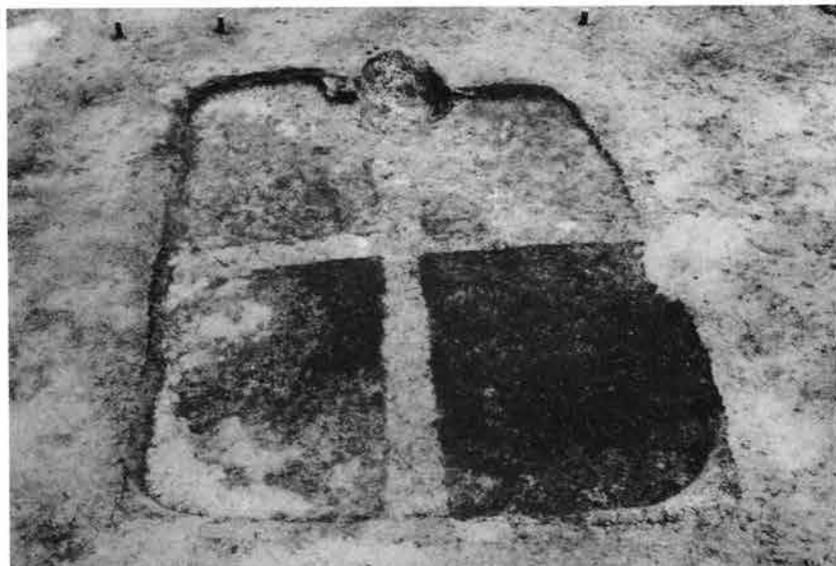


46号住居址
全 景



47号住居址

49号住居址
全 景

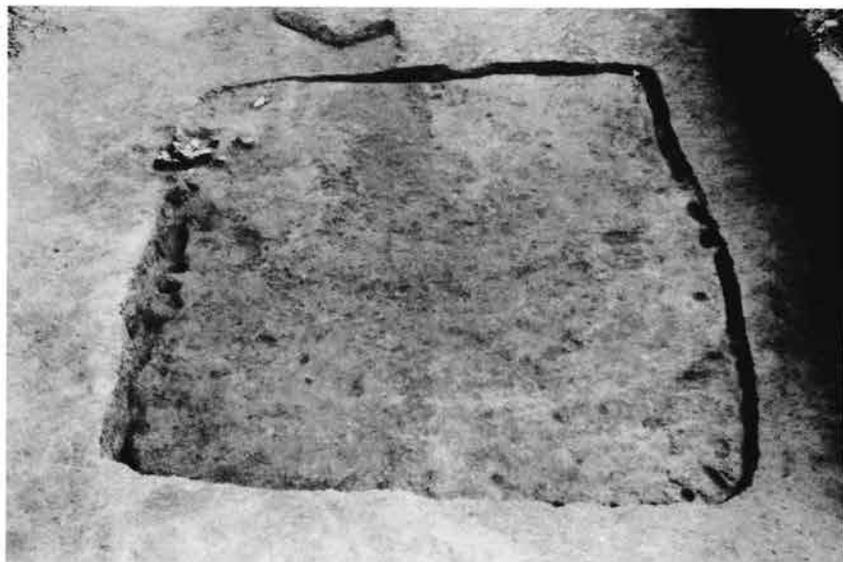


50号住居址
全 景
(右側は28号
土坑)



63号住居址
全 景





64号住居址
全 景



64号住居址
カマド内遺物
出土状態



65号住居址
全 景



66号住居址
全 景



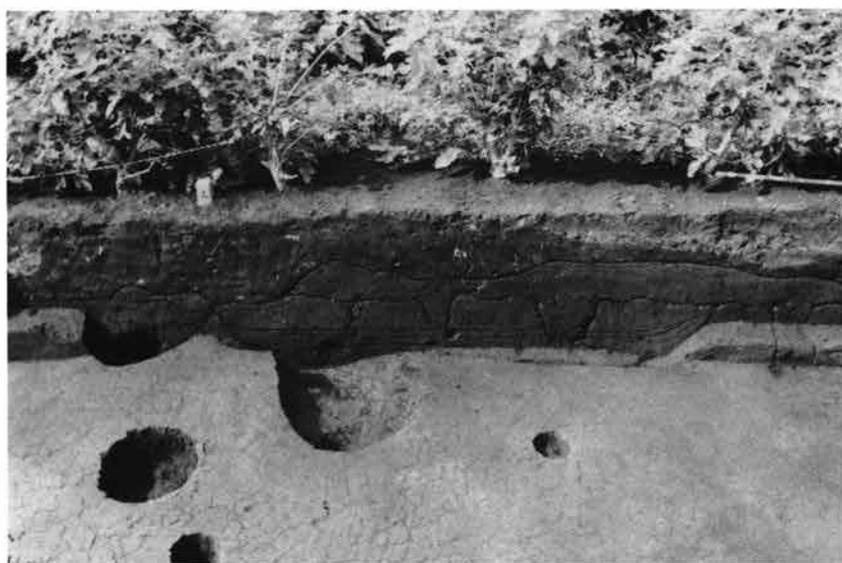
66号住居址
遺物出土状態



66号住居址
遺物出土状態



68号住居址
カマド



68・69号住居址
断面
(左側68号住
居址・右側69
号住居址)



70号住居址
遺物出土状態

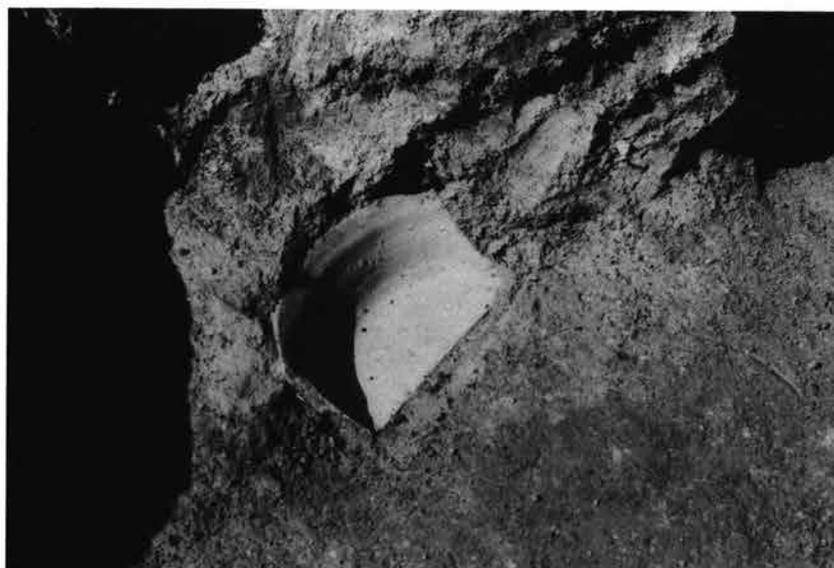
71号住居址
カマド



72号住居址



72号住居址
遺物出土状態

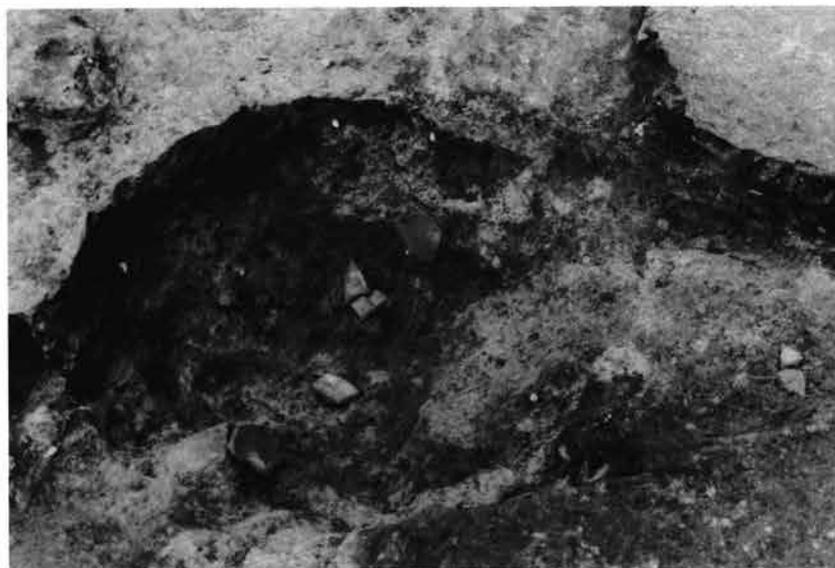




73号住居址
全 景

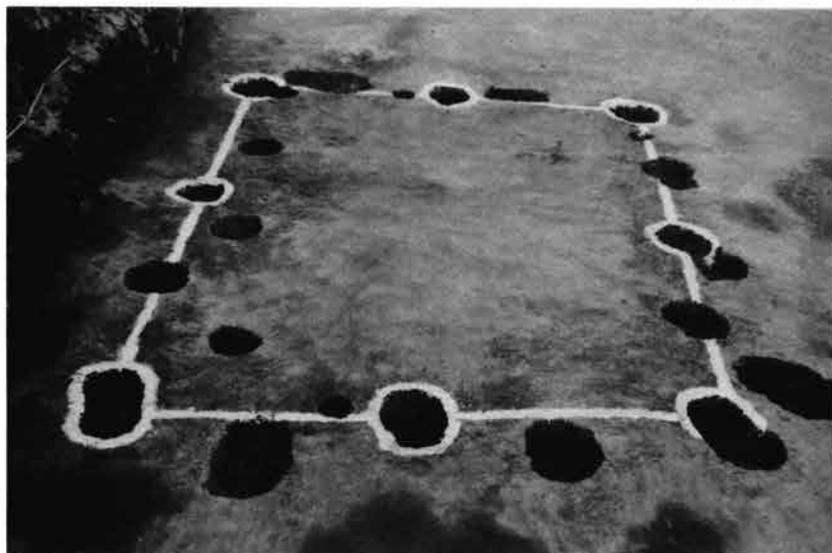


73号住居址
掘り方

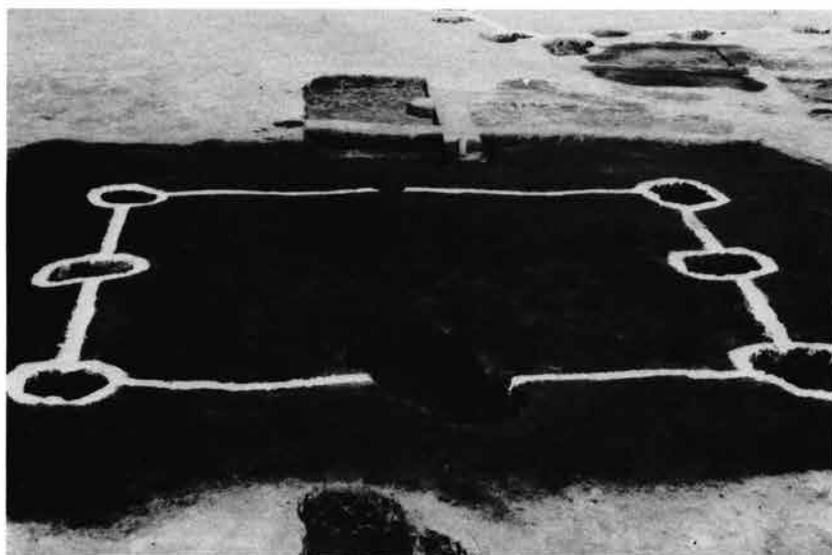


73号住居址
カマド内遺物
出土状態

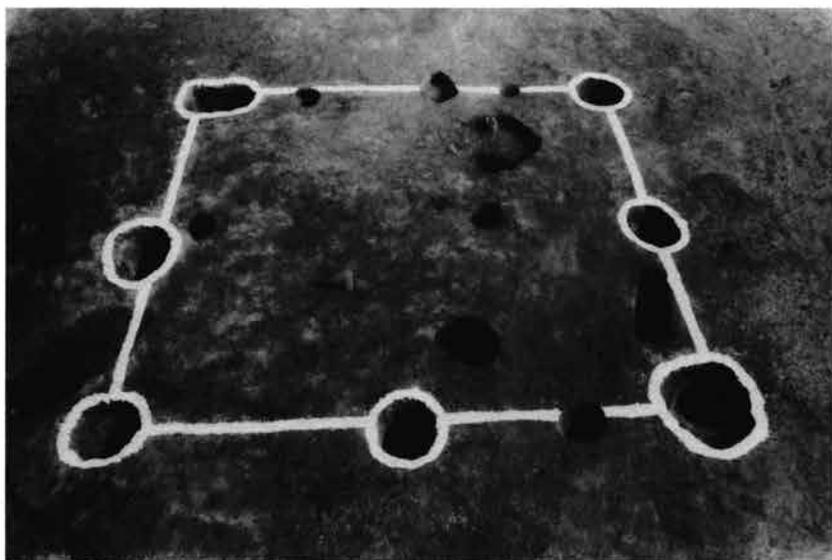
1号掘立柱建筑物
址



2号掘立柱建筑物
址

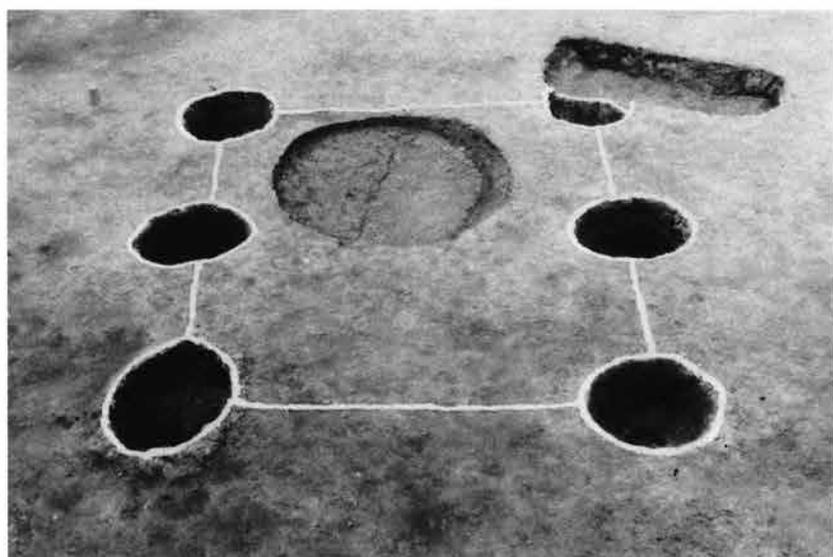


3号掘立柱建筑物
址

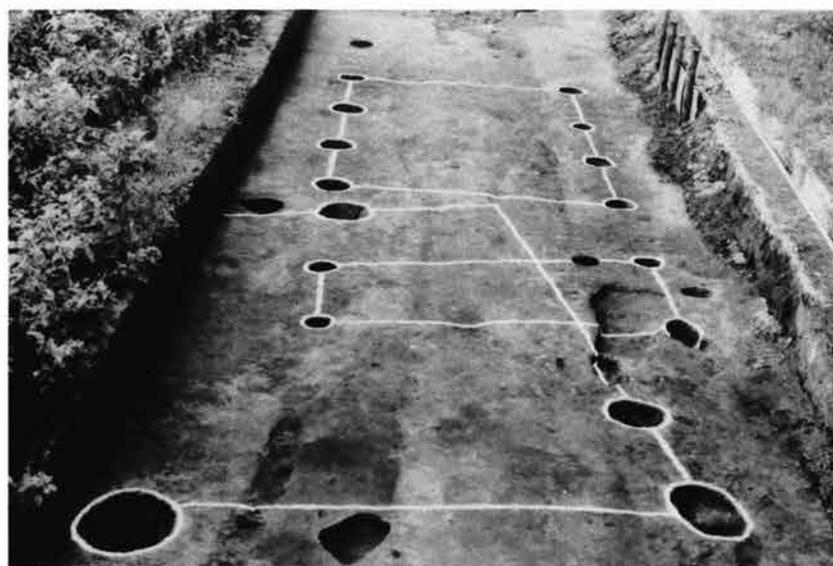




4・5号掘立柱
建物址



6号掘立柱建物
址



7号(後方)・8
号(前方)・9号
(中央)掘立柱建
物址

1・2号畠址
(前方が1号・
後方が2号)



3号畠址
(北より)



3号畠址
(東より)





3号窑址近景



3号窑址近景



3号窑址近景

3号畠址
サク断面



4・5号畠址
(後方カーブ
が5号・前方
は3号)



4・5号畠址近
景





9号溝
(北側より)



10号溝
(西側道部、東側より)



10号溝
東壁断面



11号溝
(東より)



道路状遺構
(西より)



道路状遺構
(東より)



道路状遺構断面
(東壁・上層か
ら表土・第3・
2・1次路面)



道路状遺構
第3次路面
(右端路面下
は18号溝)



18号溝
(東から)

4・5号溝
(東より)・右側
4号・左側5
号)



15号溝
(東より)



21号溝
(西より)





17号溝
(東より)



22号溝
(南より)



28・29号溝
(北より・左側28号・右側29号)

1・2号特殊井戸
戸
全 景



1号特殊井戸



1号特殊井戸
源泉部・石敷
部





1号特殊井戸
石敷部断面



1号特殊井戸
溝部埋没状態



1号特殊井戸
石敷除去後の
状態

2号特殊井戸
(北より)



2号特殊井戸
(西より)



2号特殊井戸
石敷北端部断面
面





2号特殊井戸
石敷状態



2号特殊井戸
石敷部遺物出土状態



2号特殊井戸
1号源泉部(左
上方)

2号特殊井戸
2号源泉部



2号特殊井戸
溝部の状態(北
より)



2号特殊井戸
溝部東側張り
出し





1号井戸
全景



4号井戸
全景



6号井戸
埋没状態

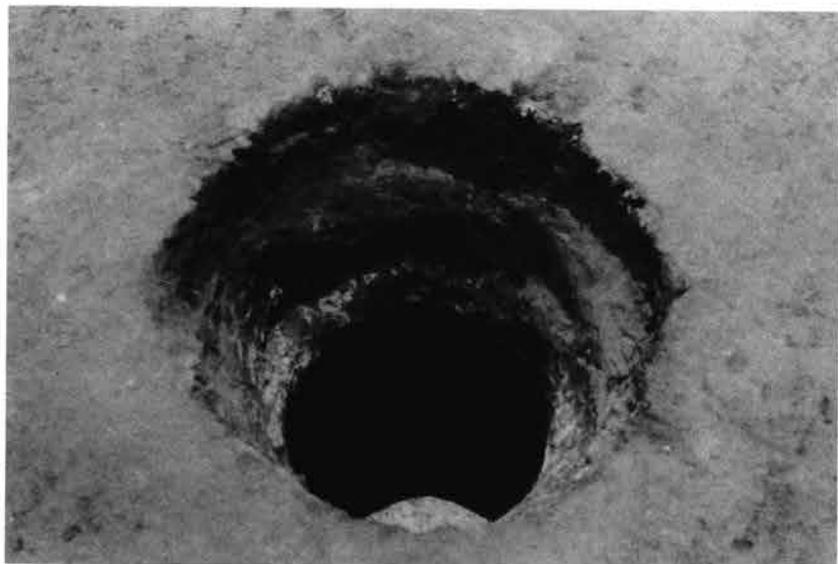
7号井戸
遺物出土状態



8号井戸
全景



11号井戸
全景





13号井戸
全 景



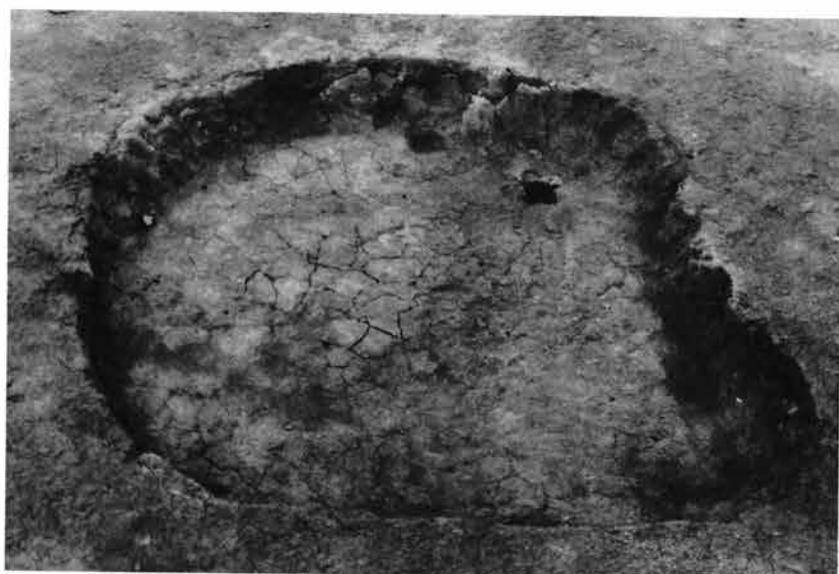
14号井戸
全 景



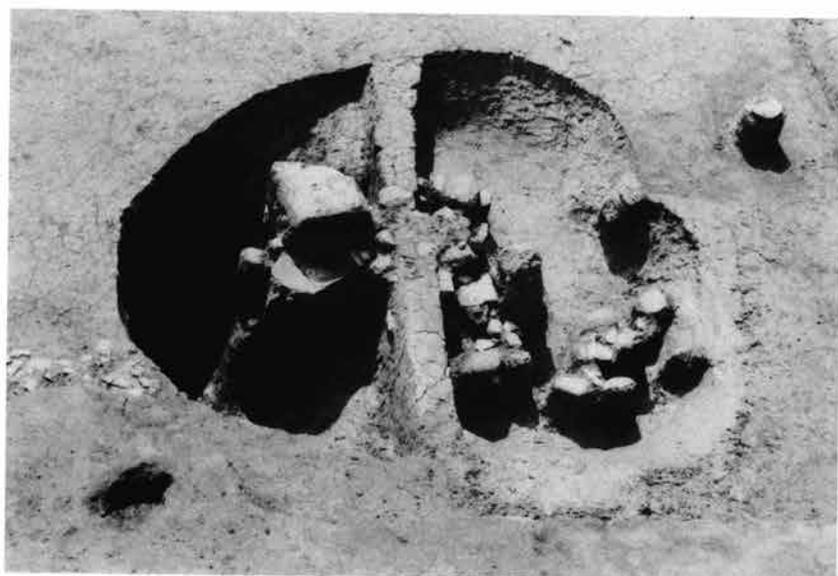
15号井戸
埋没および遺
物出土状態



1号土坑
全景



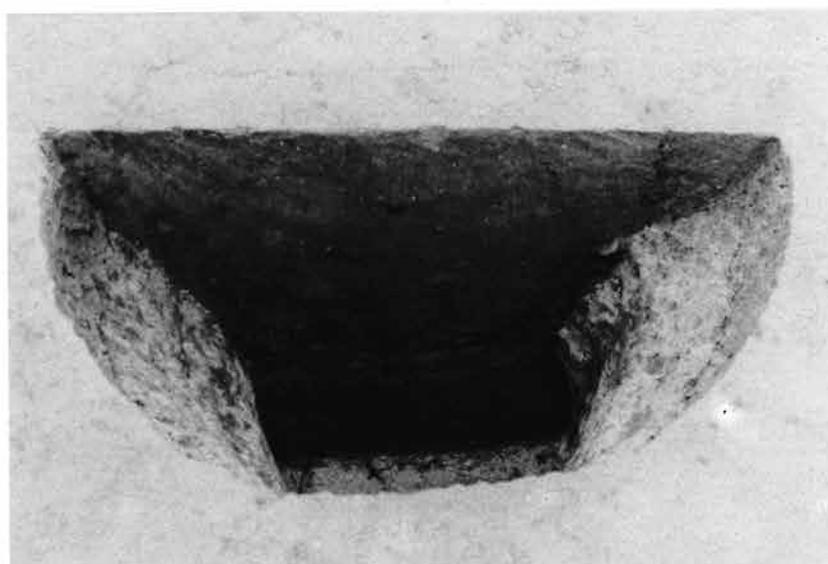
9号土坑
全景



11号土坑
遺物出土狀態



17号土坑
全景



20号土坑
埋没状态

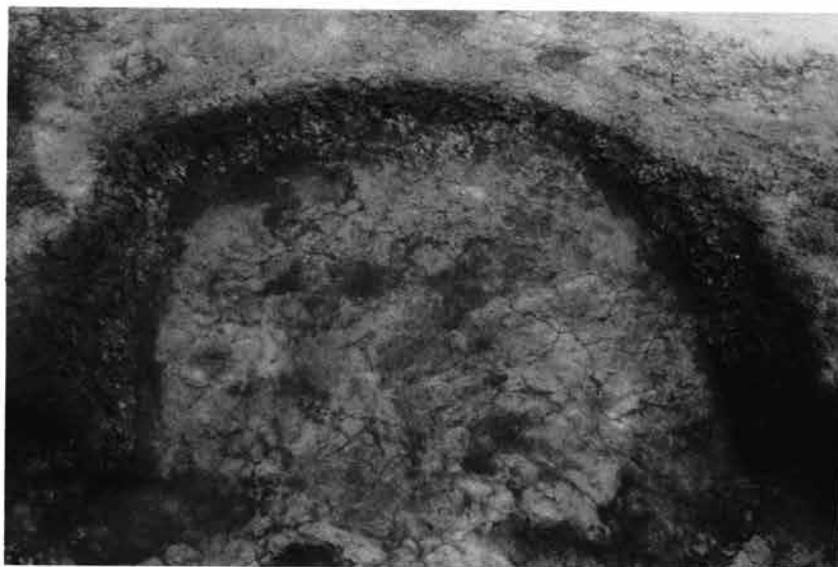


22号土坑
遺物出土状态

25号土坑
遺物出土状态

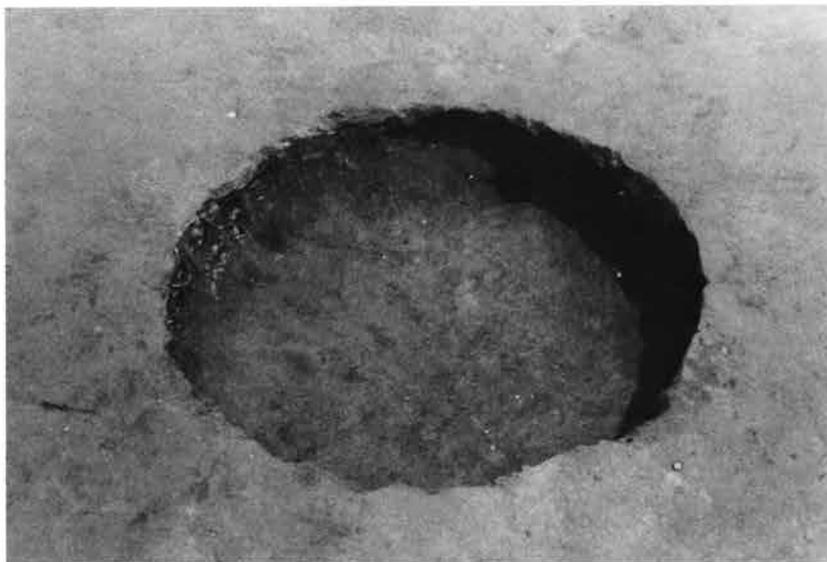


27号土坑
遺物出土状态



31号土坑
遺物出土状态





43号土坑
全景

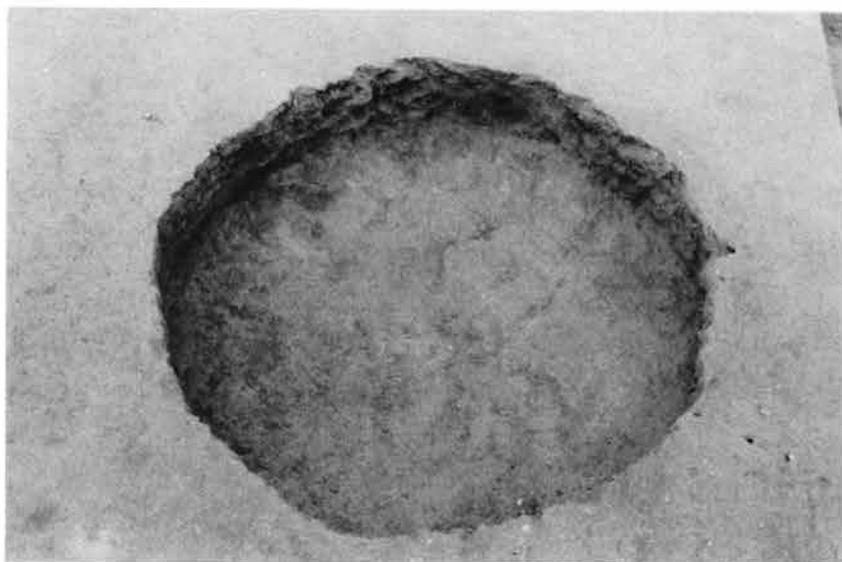


52号土坑
全景



54号土坑全景

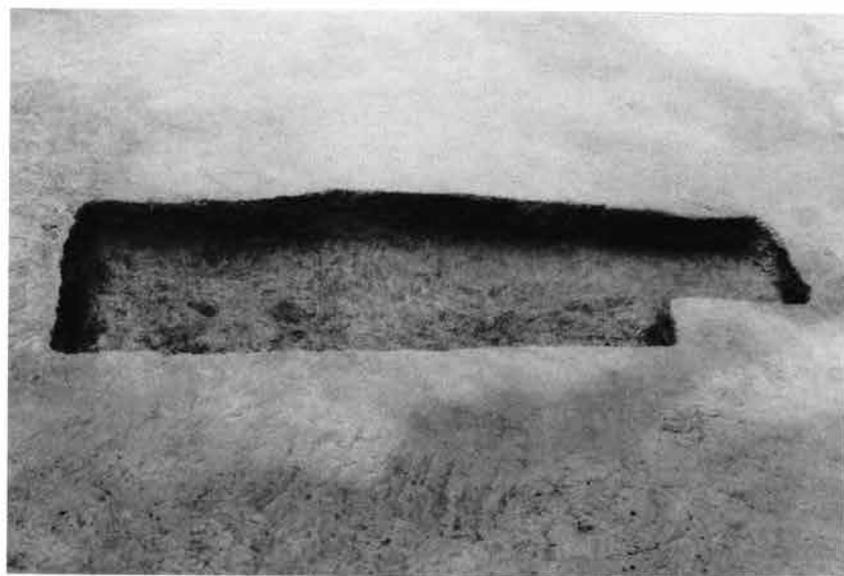
59号土坑
全景



61号土坑
全景



64·65号土坑
全景





68号土坑
全景



69号土坑
全景

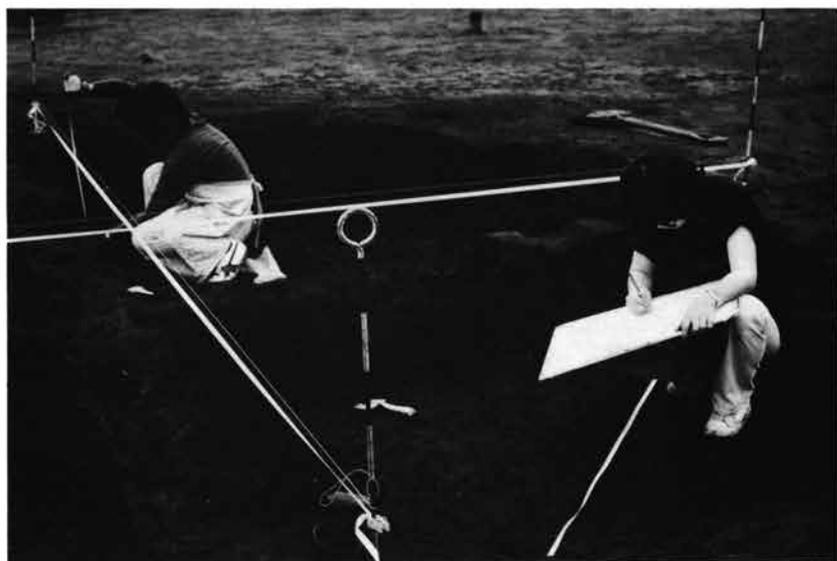


70号土坑
遺物出土狀態

調査風景
4 区

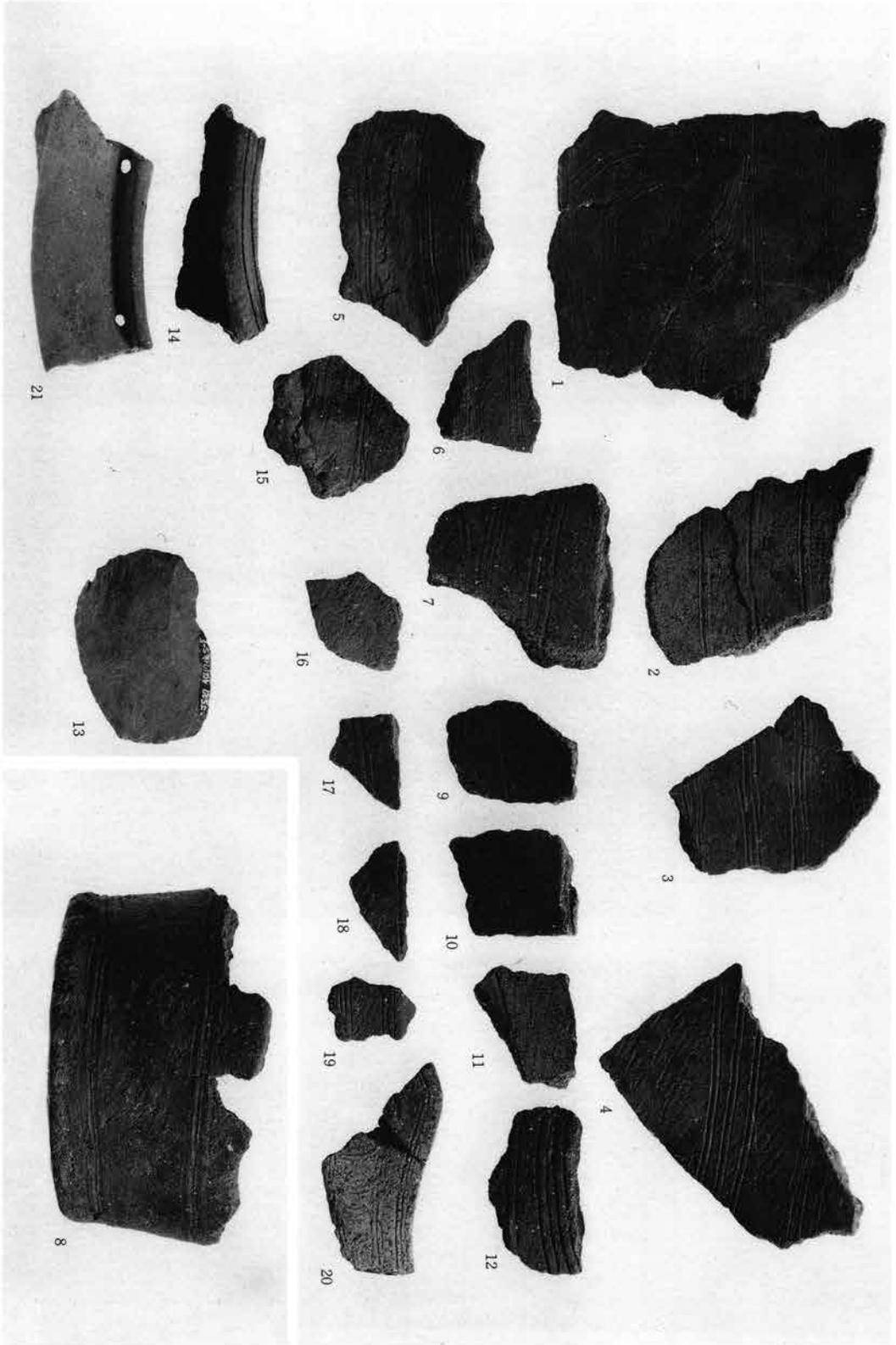


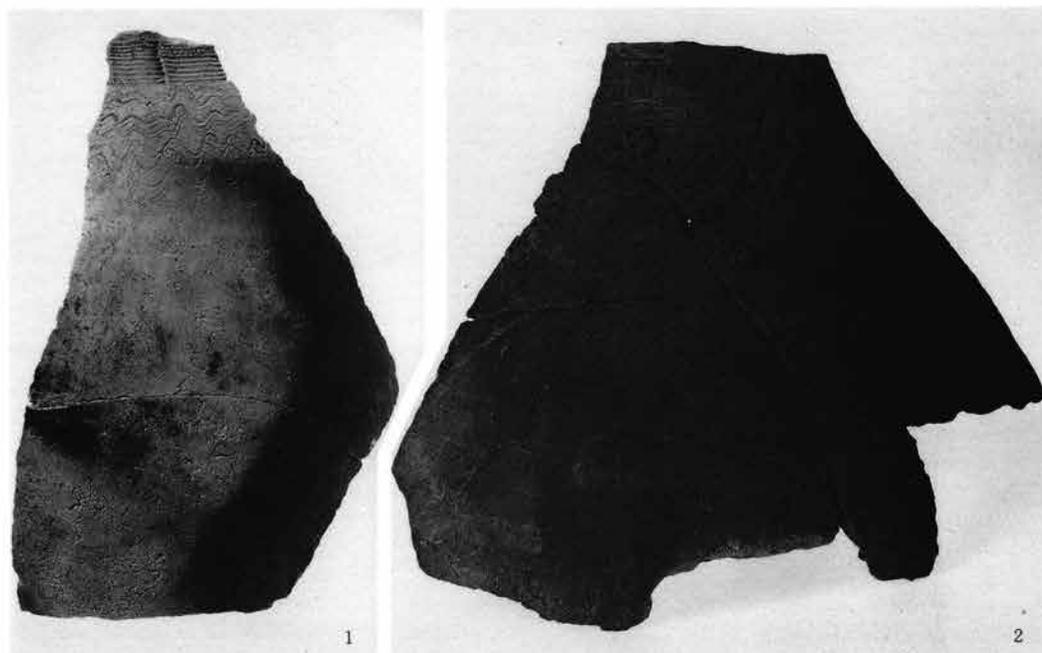
調査風景
住居址埋没状
態実測

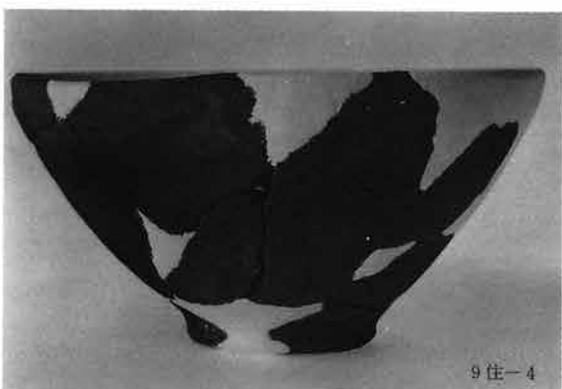
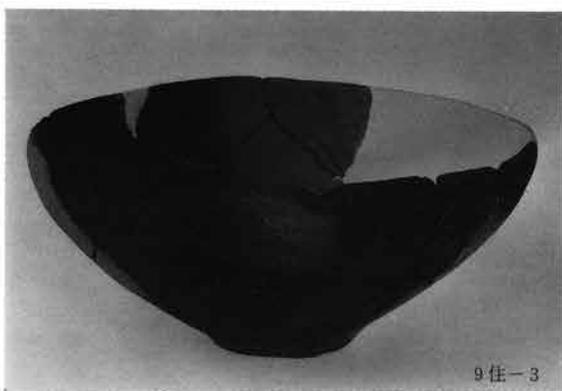
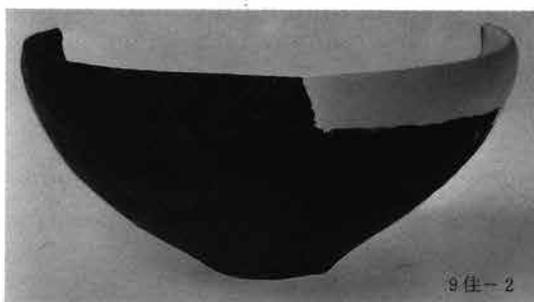
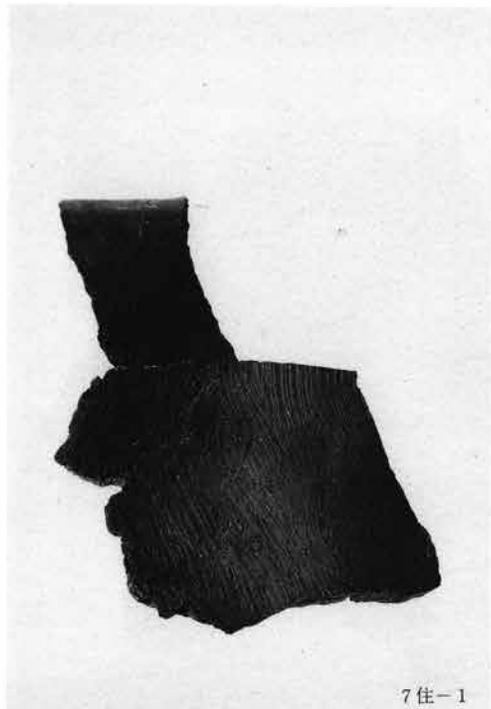


調査風景
写真撮影準備











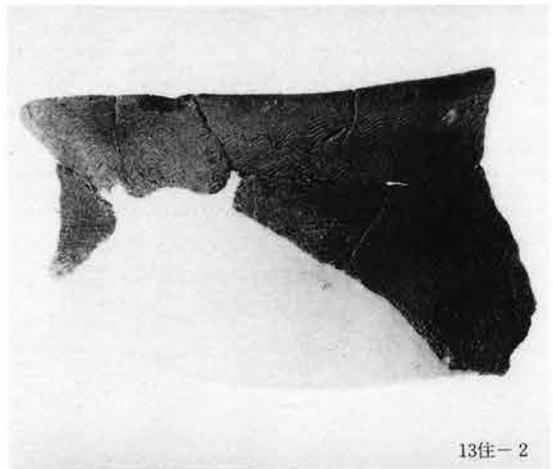
9号住居址



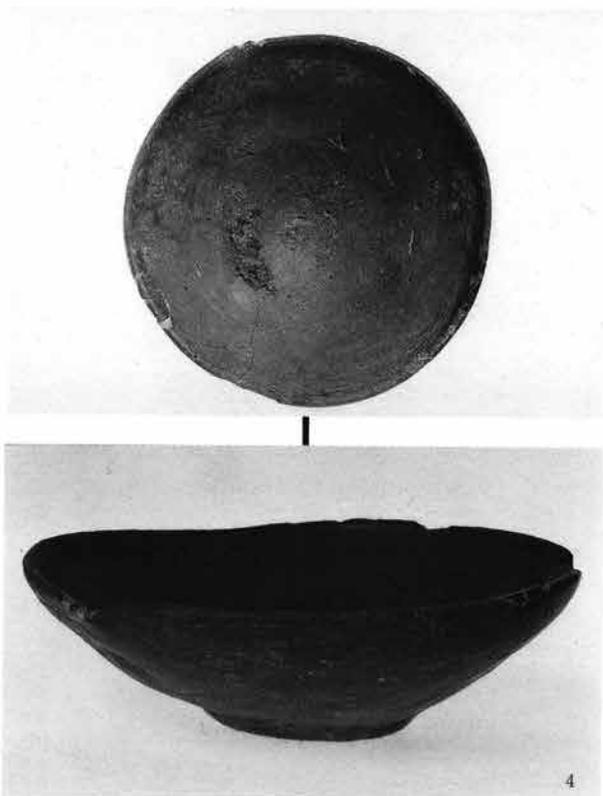
12住-1



13住-1



13住-2





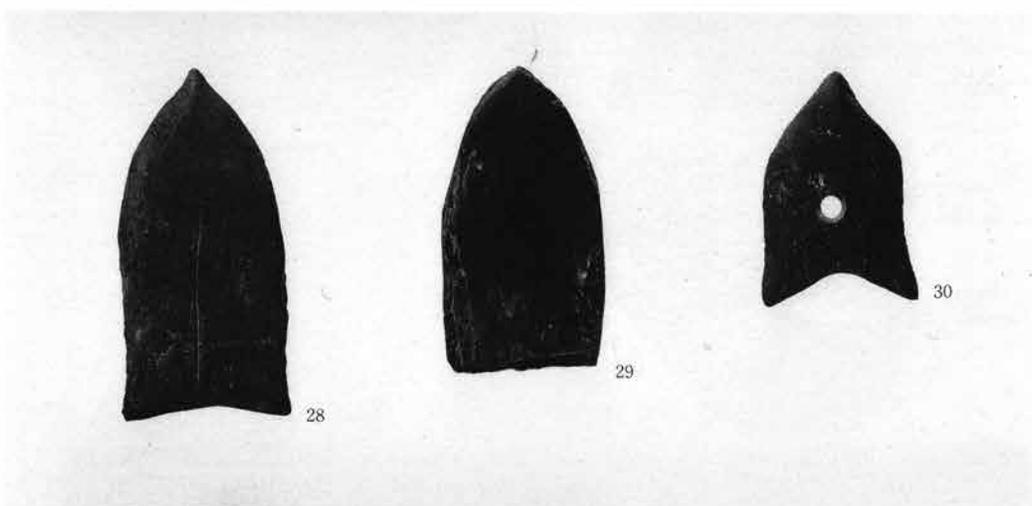
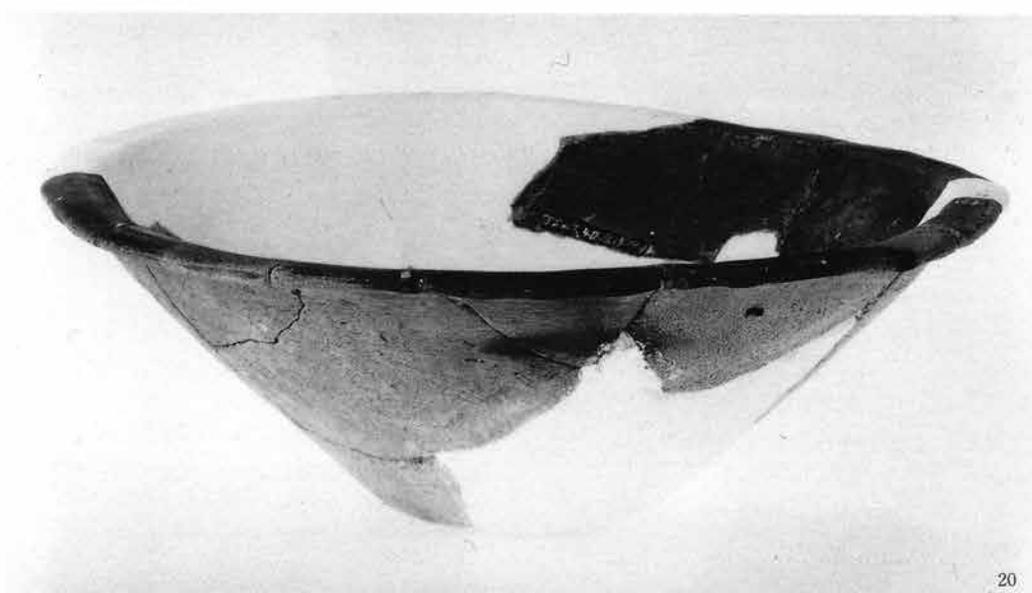


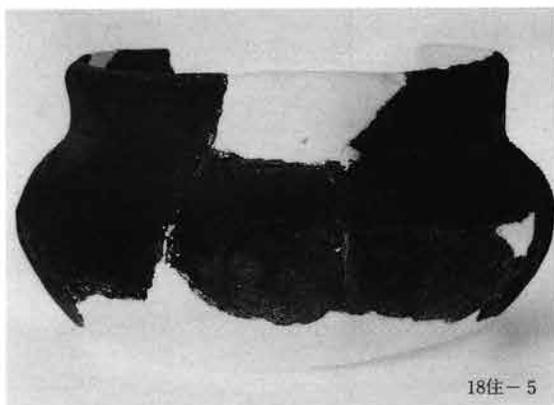
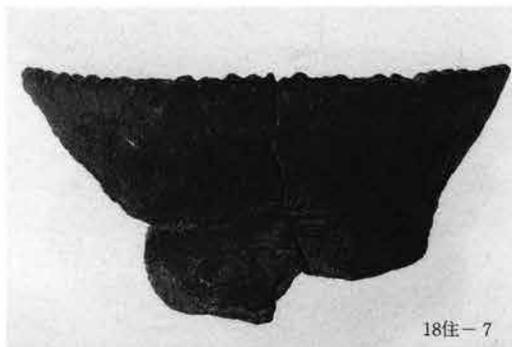
5



1









21住-5



19住-2



21住-1



21住-4



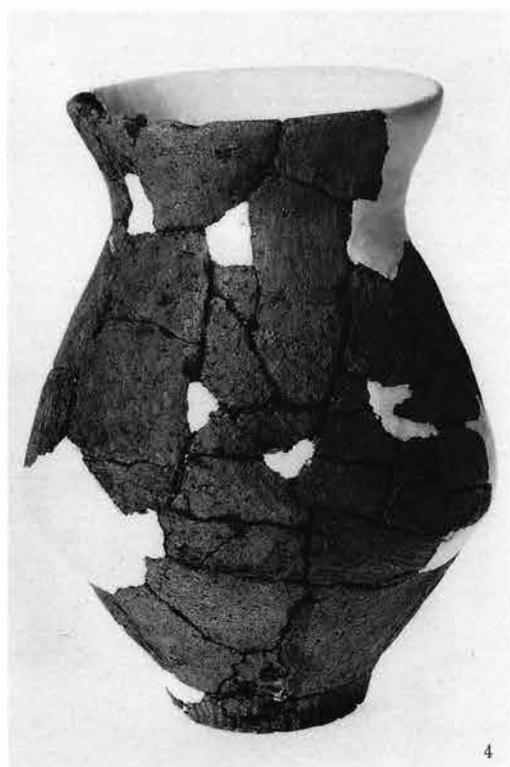
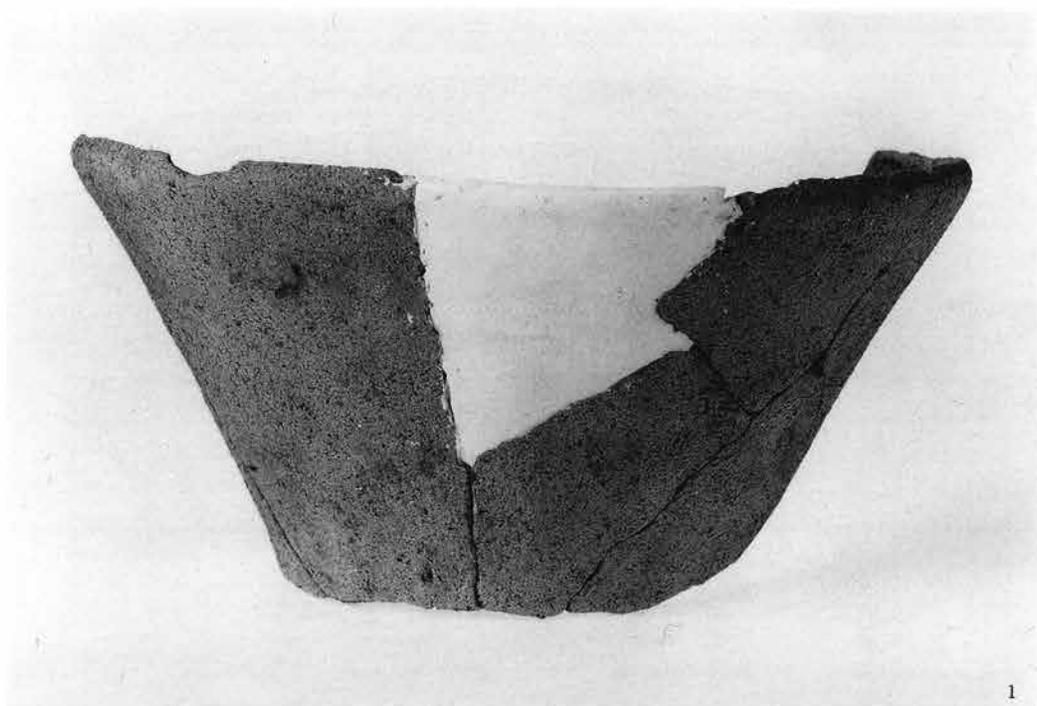
21住-7



22住-8

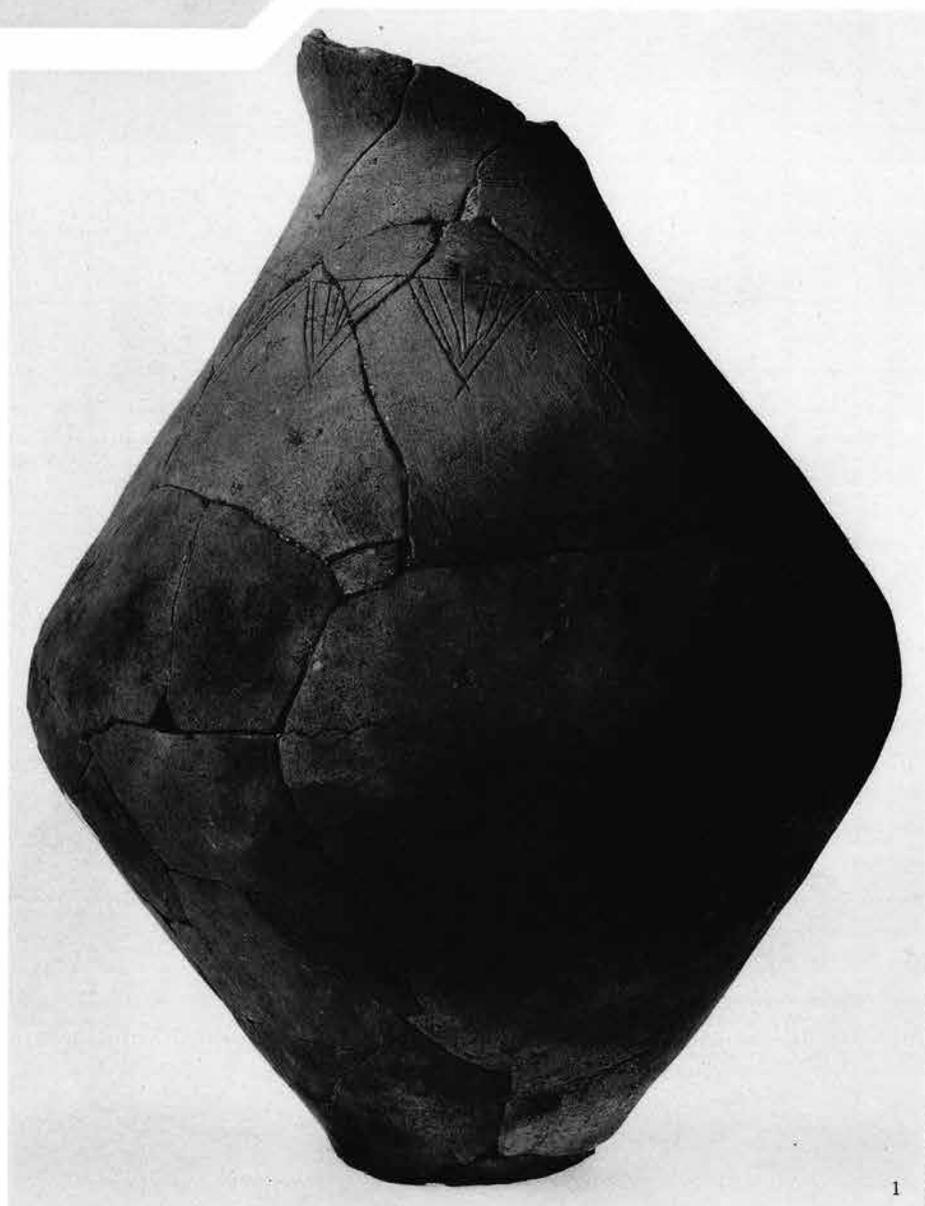


22住-10

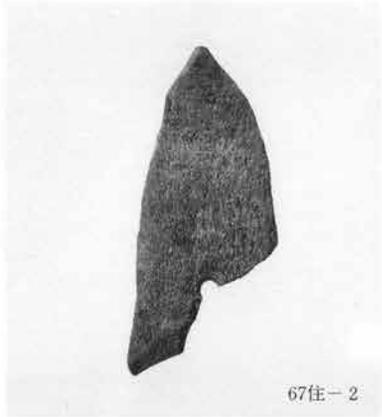


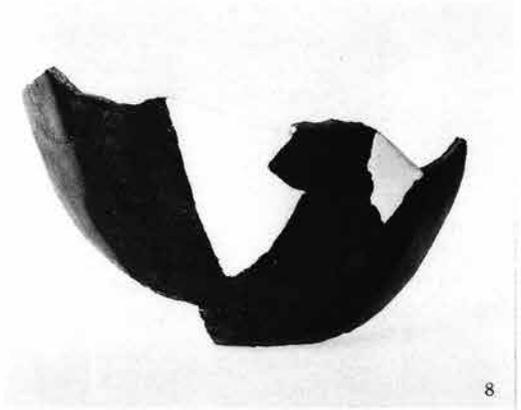
22号住居址



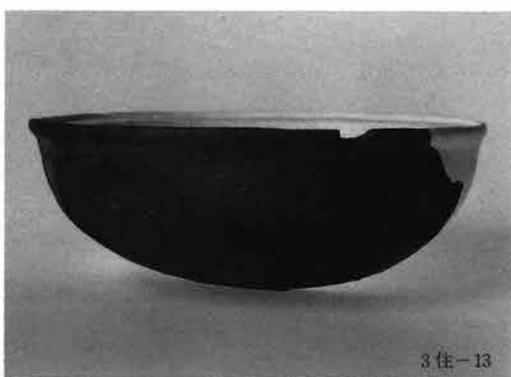
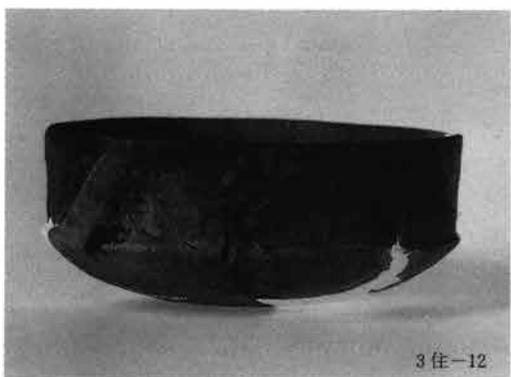
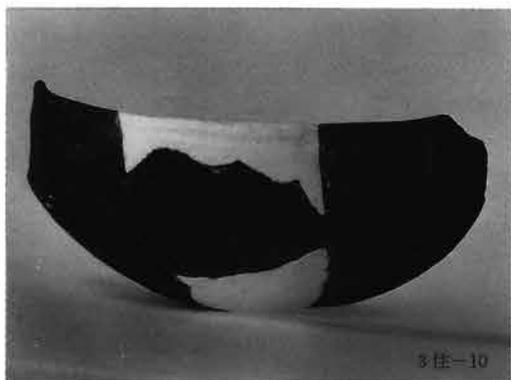
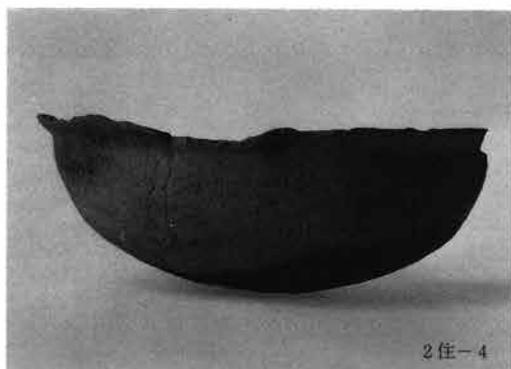
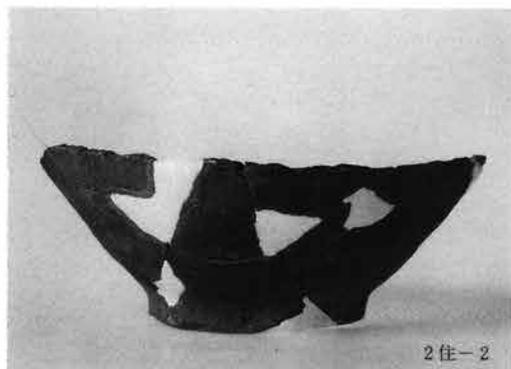


37号住居址





1号住居址





3号住居址





51号住居址





52住-6



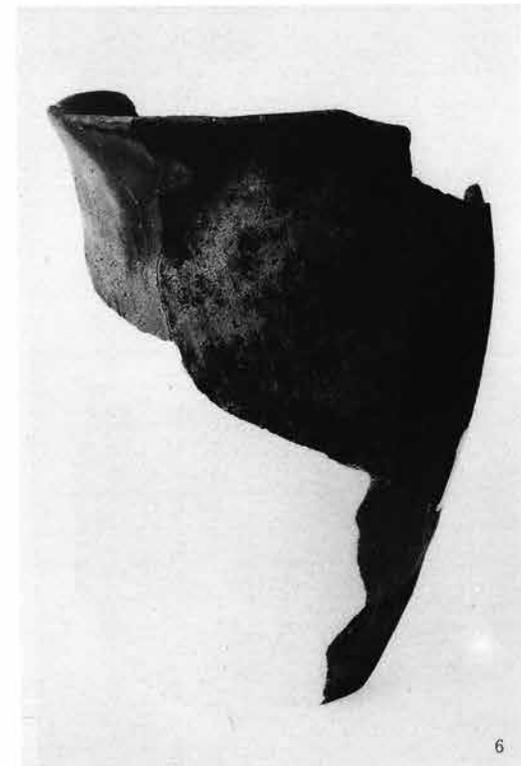
52住-8

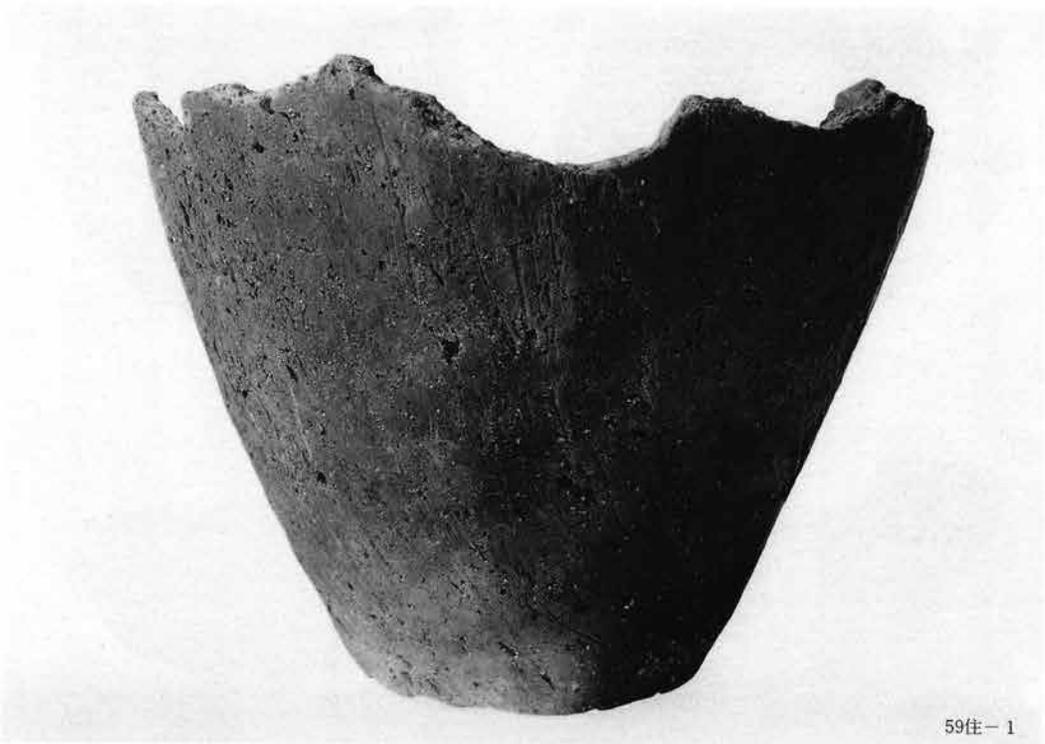
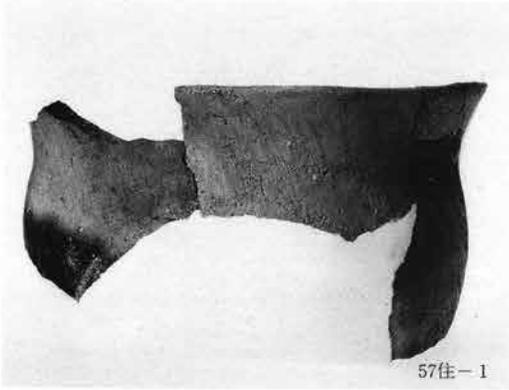


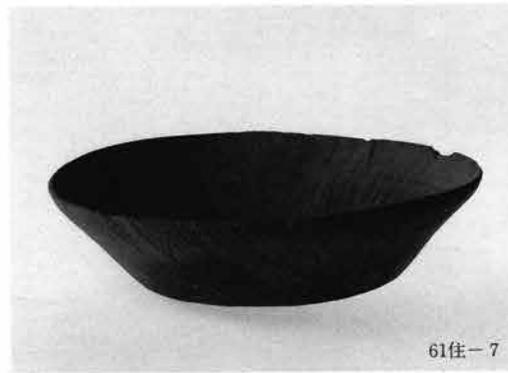
53住-2

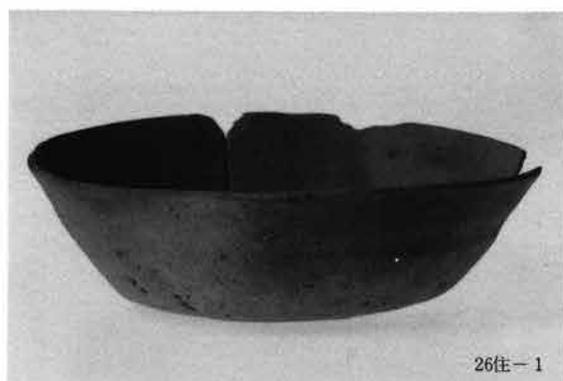
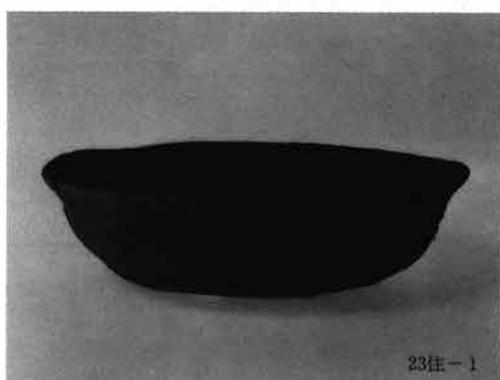
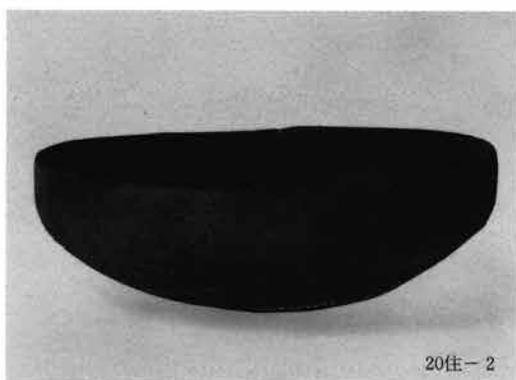
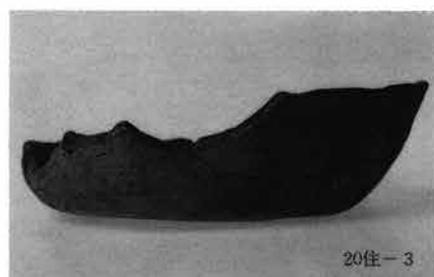


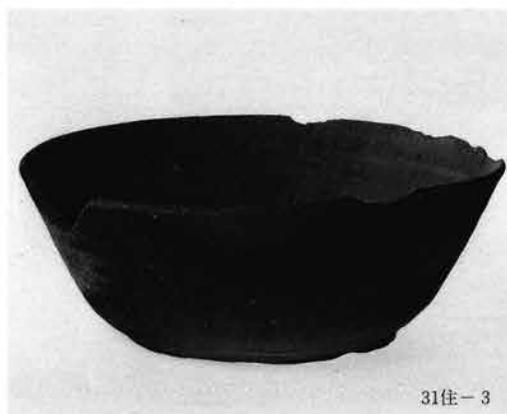
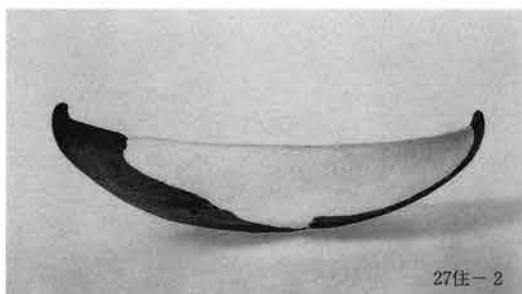
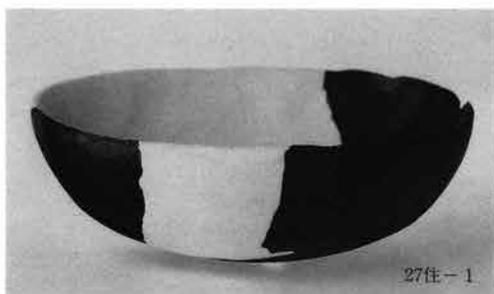
53住-3

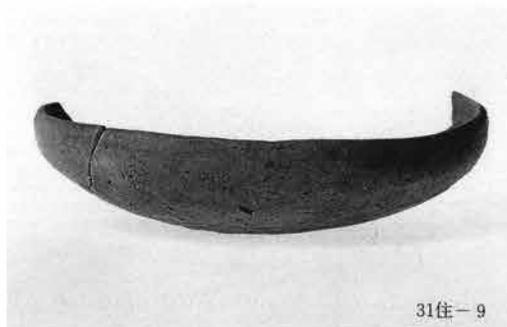












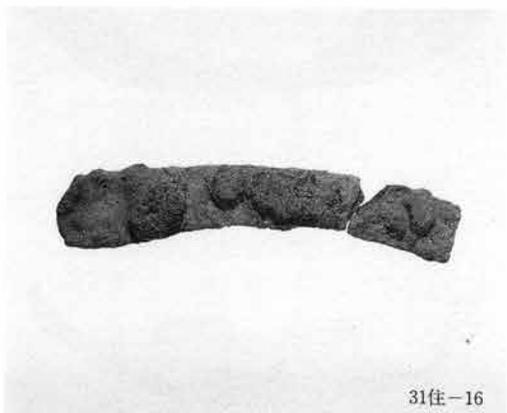
31住-9



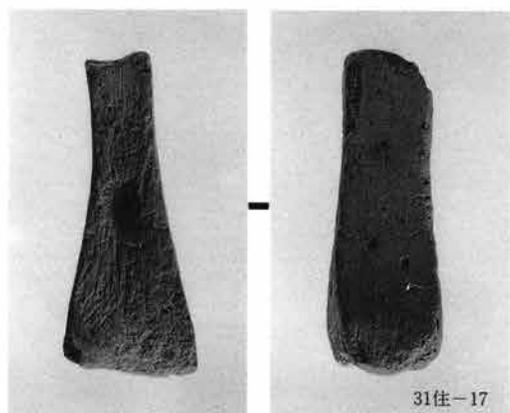
31住-10



31住-15



31住-16



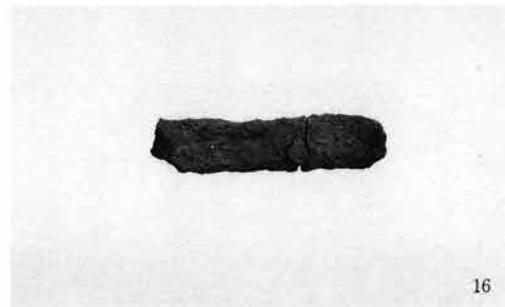
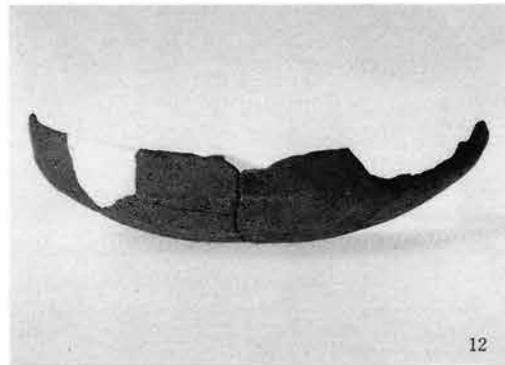
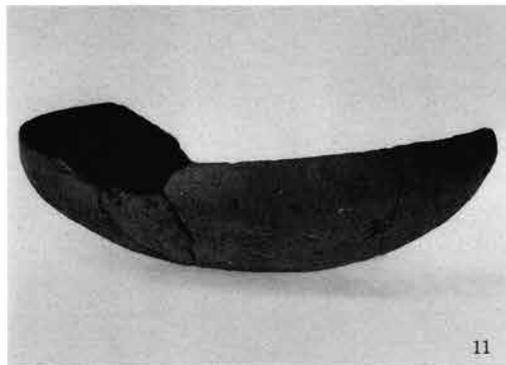
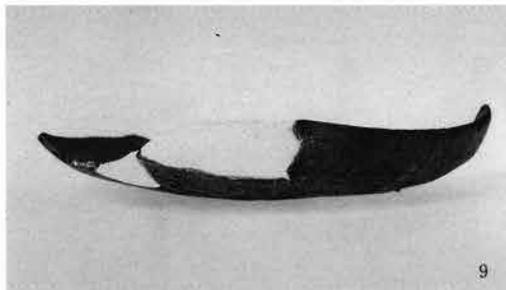
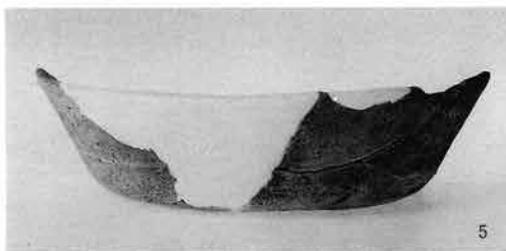
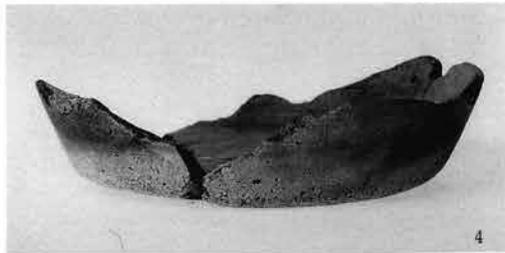
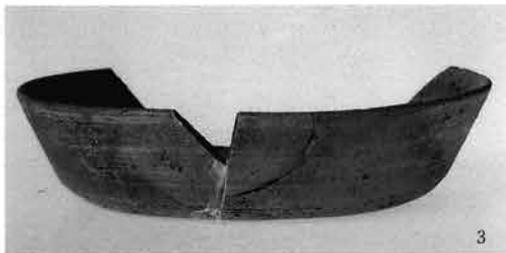
31住-17

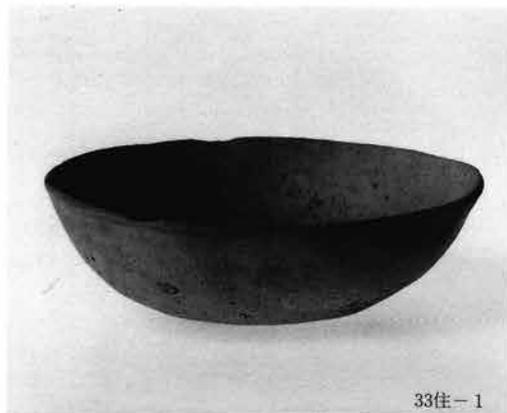


32住-1

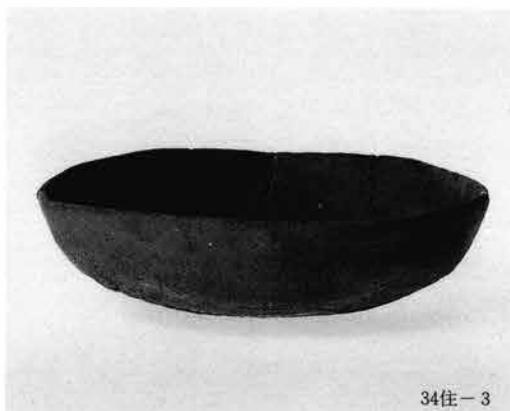


32住-2

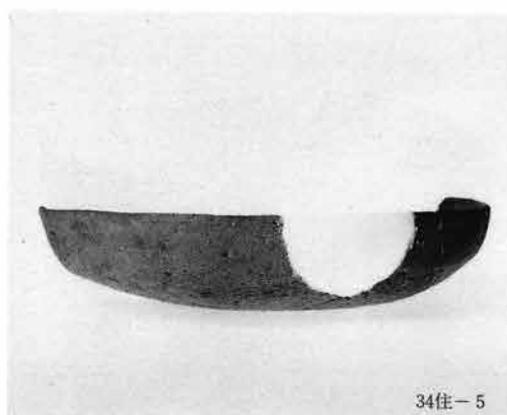




33住-1



34住-3



34住-5



34住-8



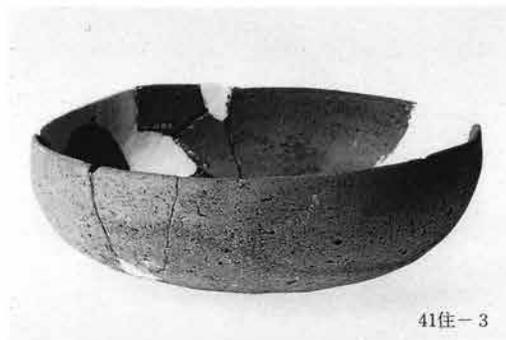
35住-1



38住-2



41住-1



41住-3



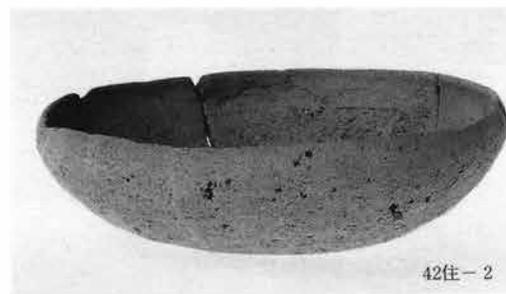
41住-5



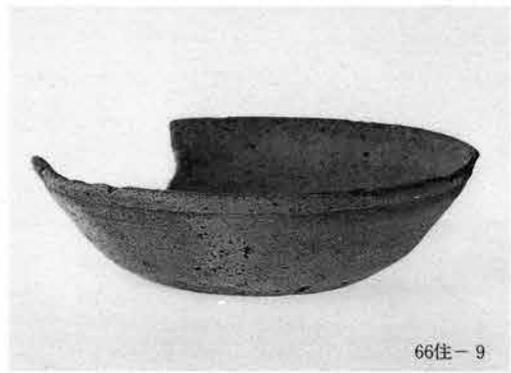
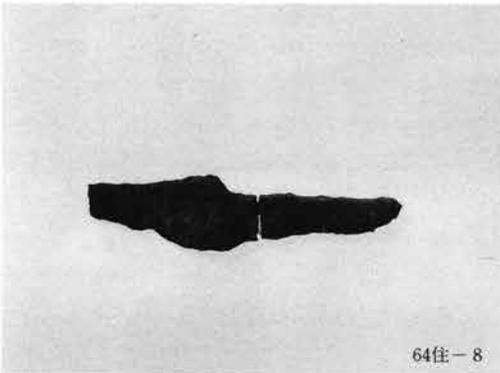
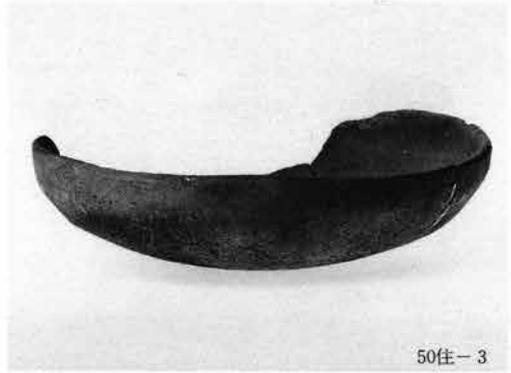
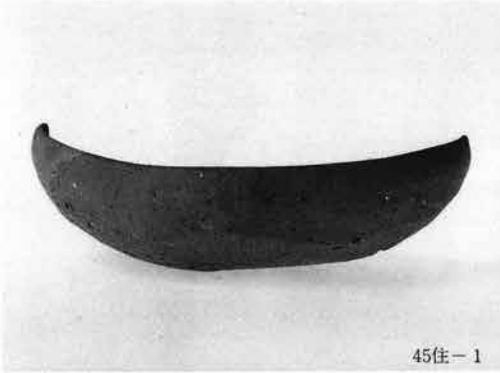
41住-6

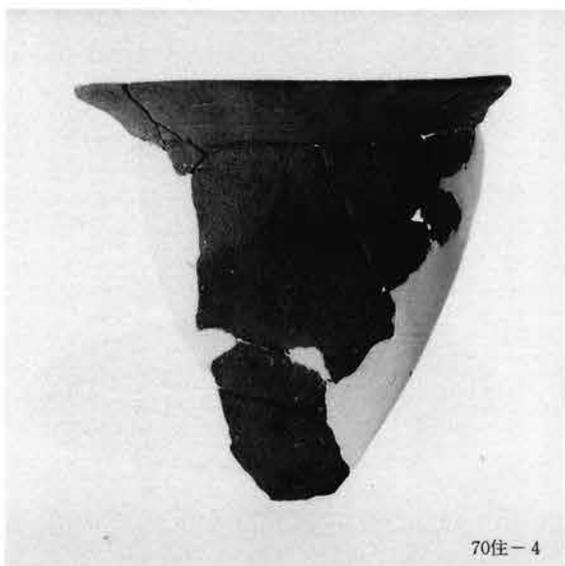
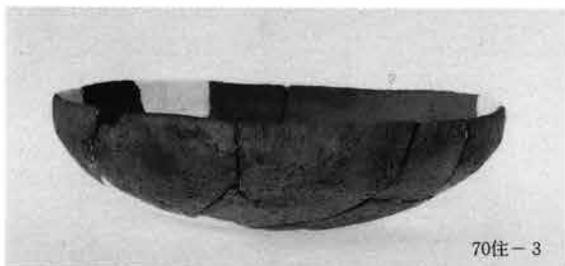


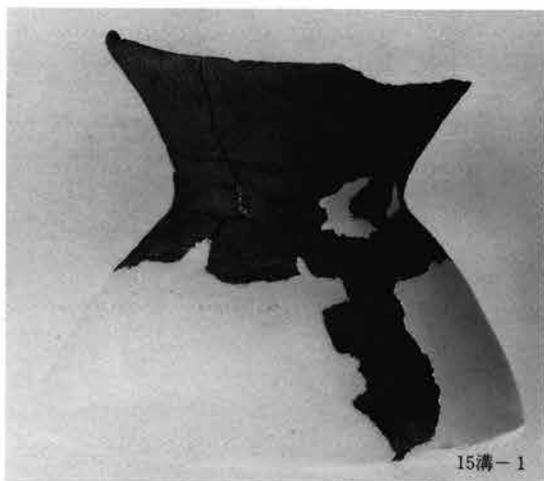
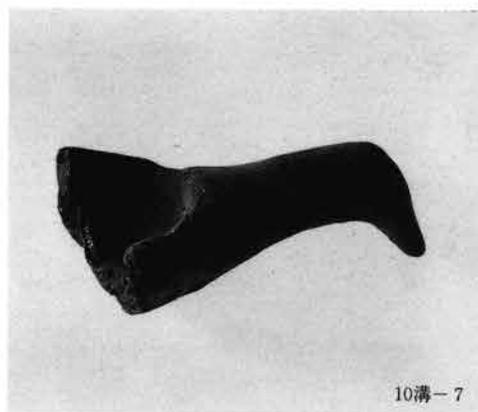
41住-8

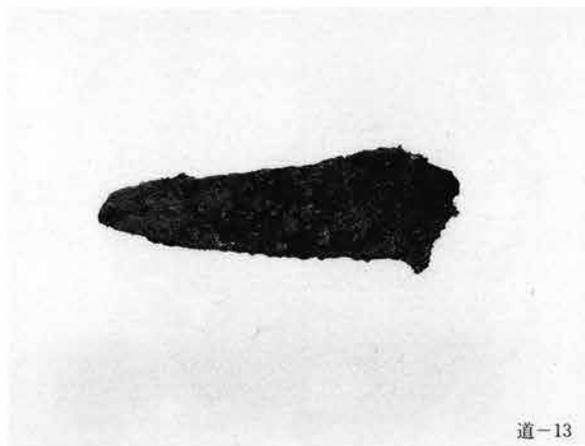


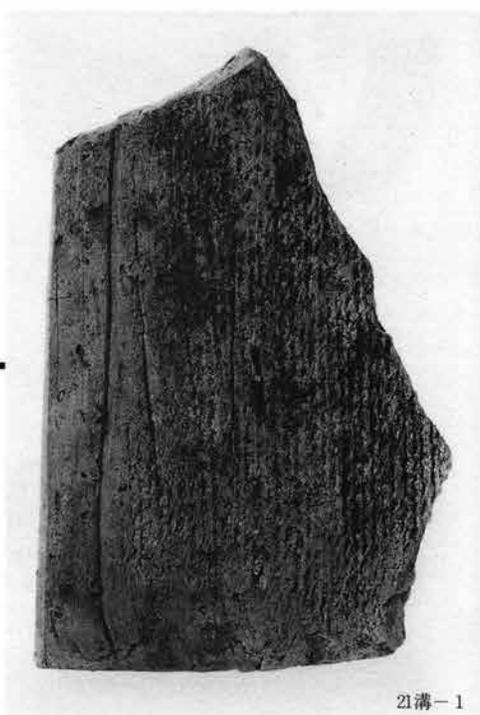
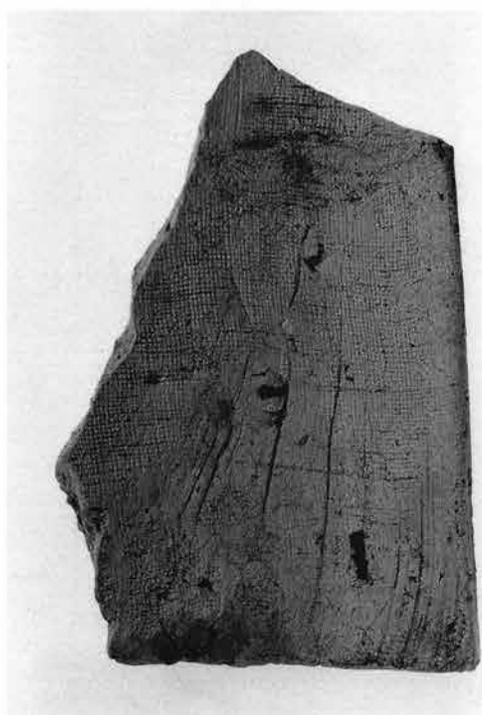
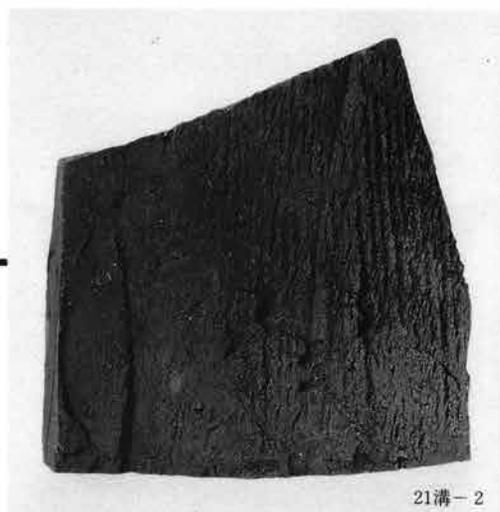
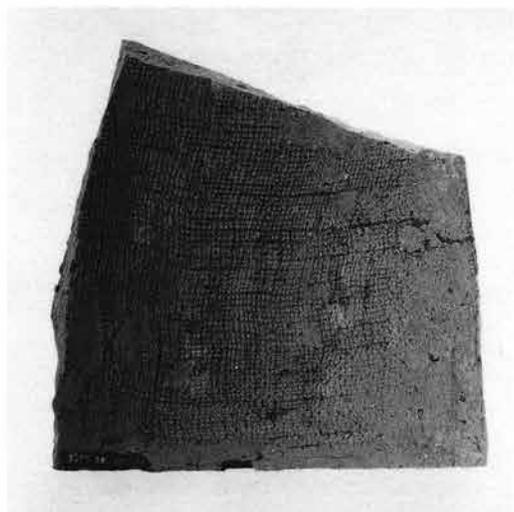
42住-2

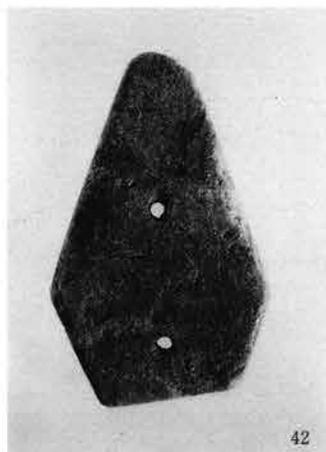
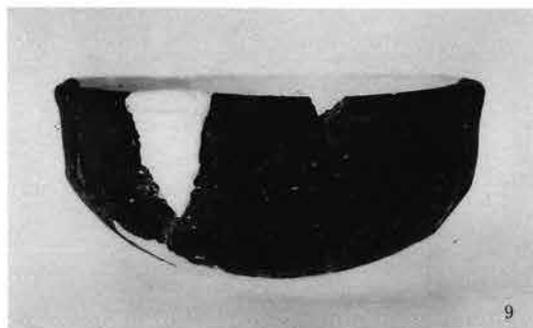
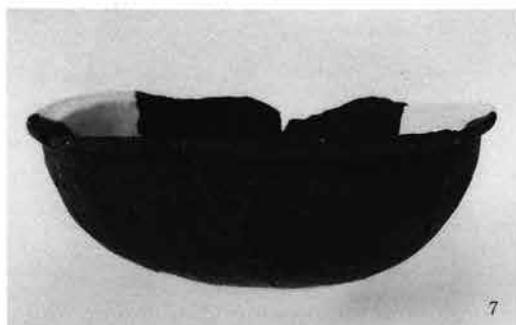
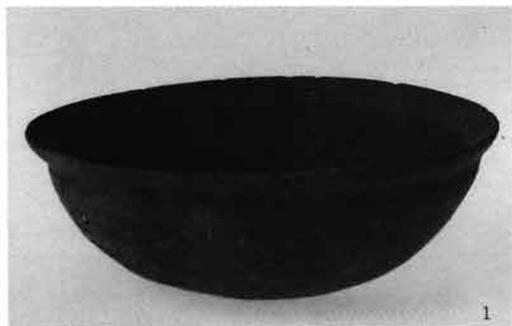






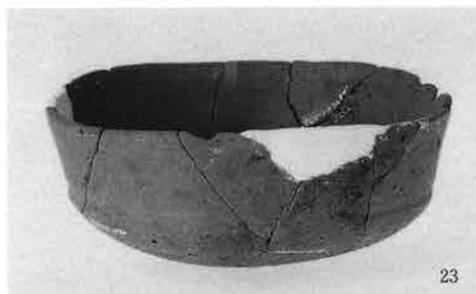




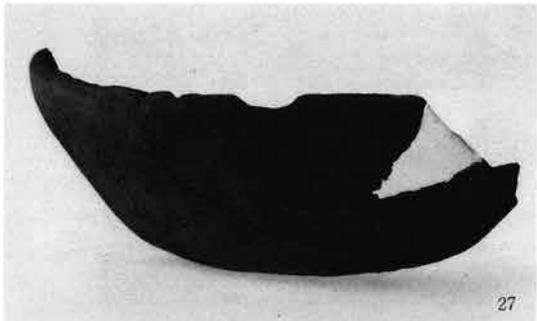
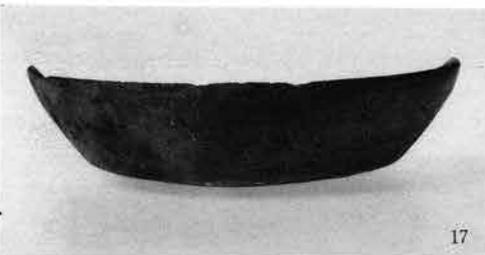
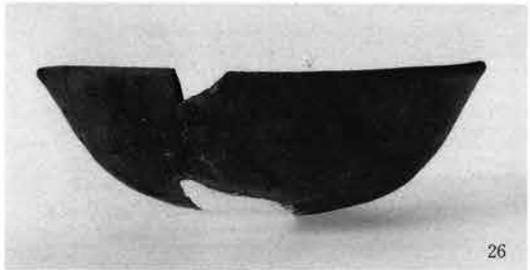
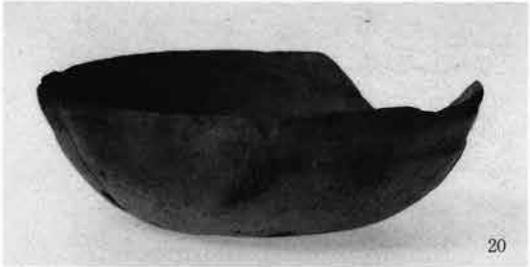
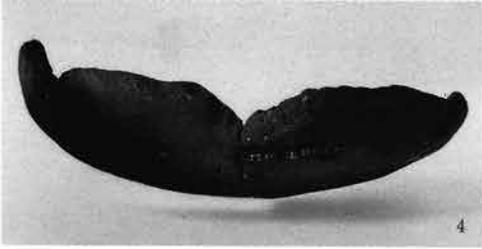
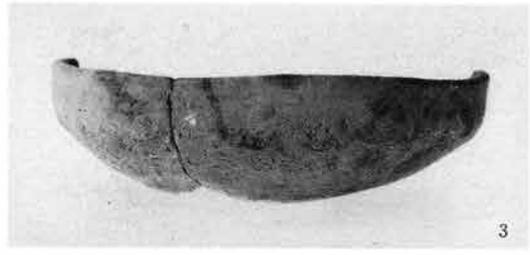




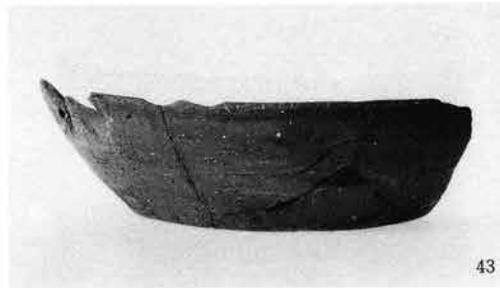
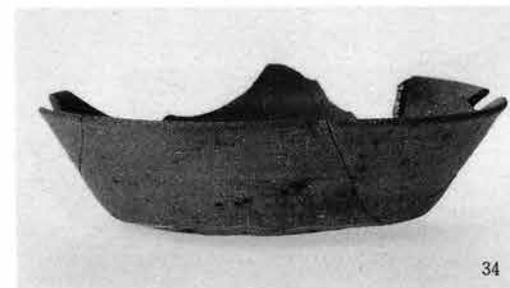
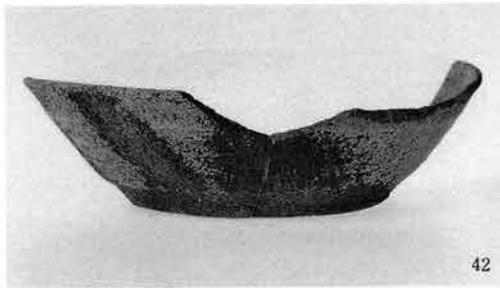
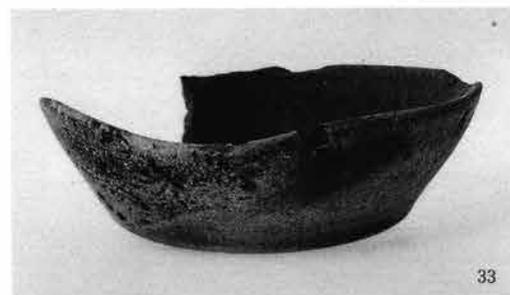
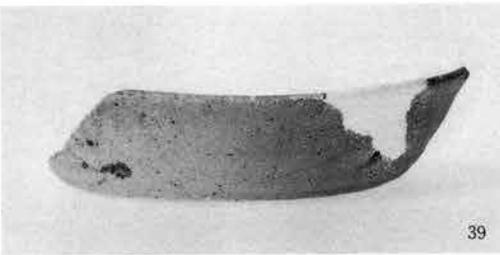
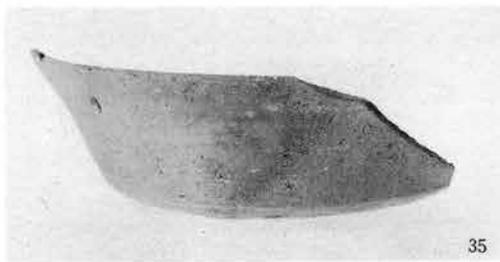
1号特殊井戸

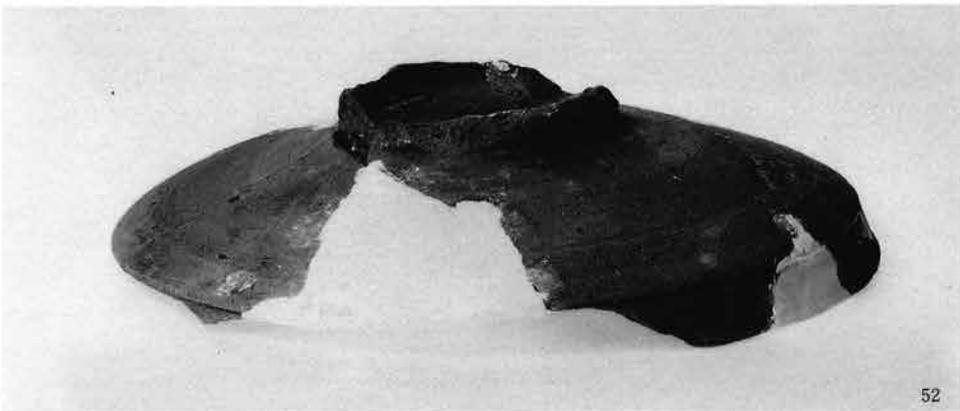
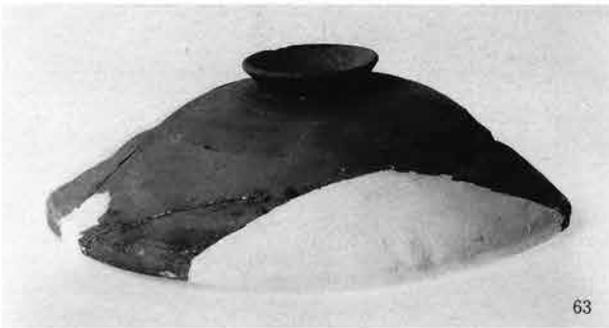
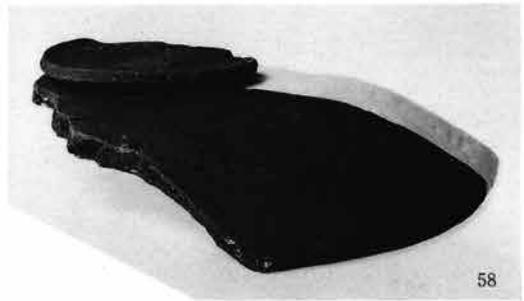
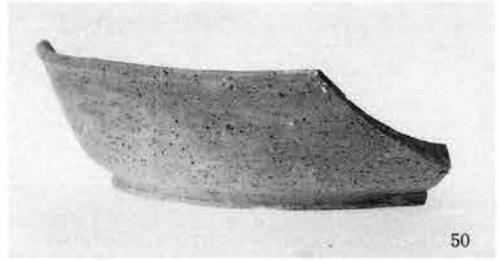
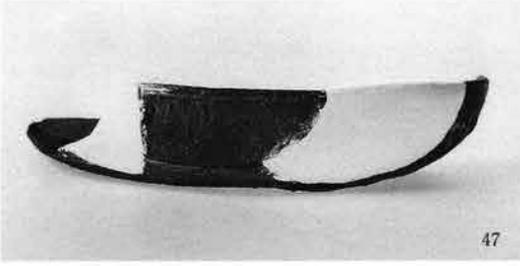


1号特殊井戸



2号特殊井戸



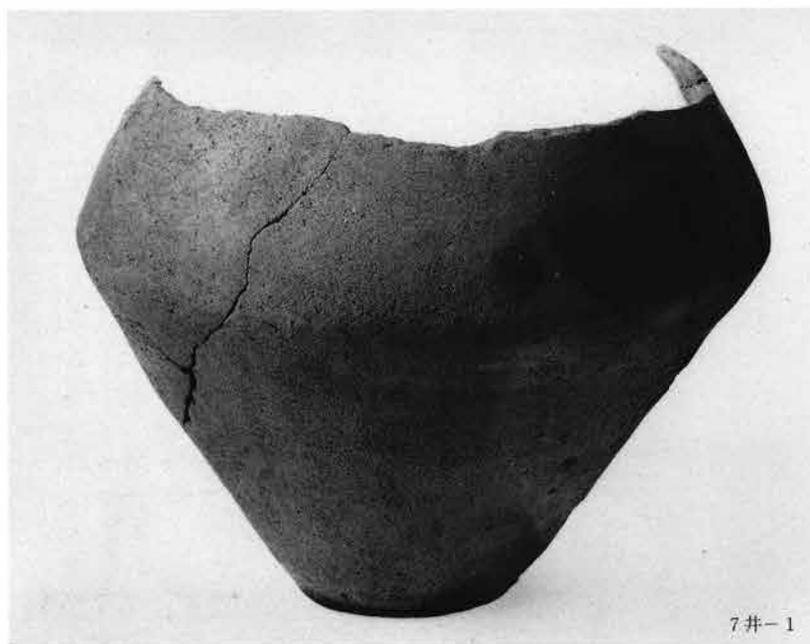


2号特殊井戸

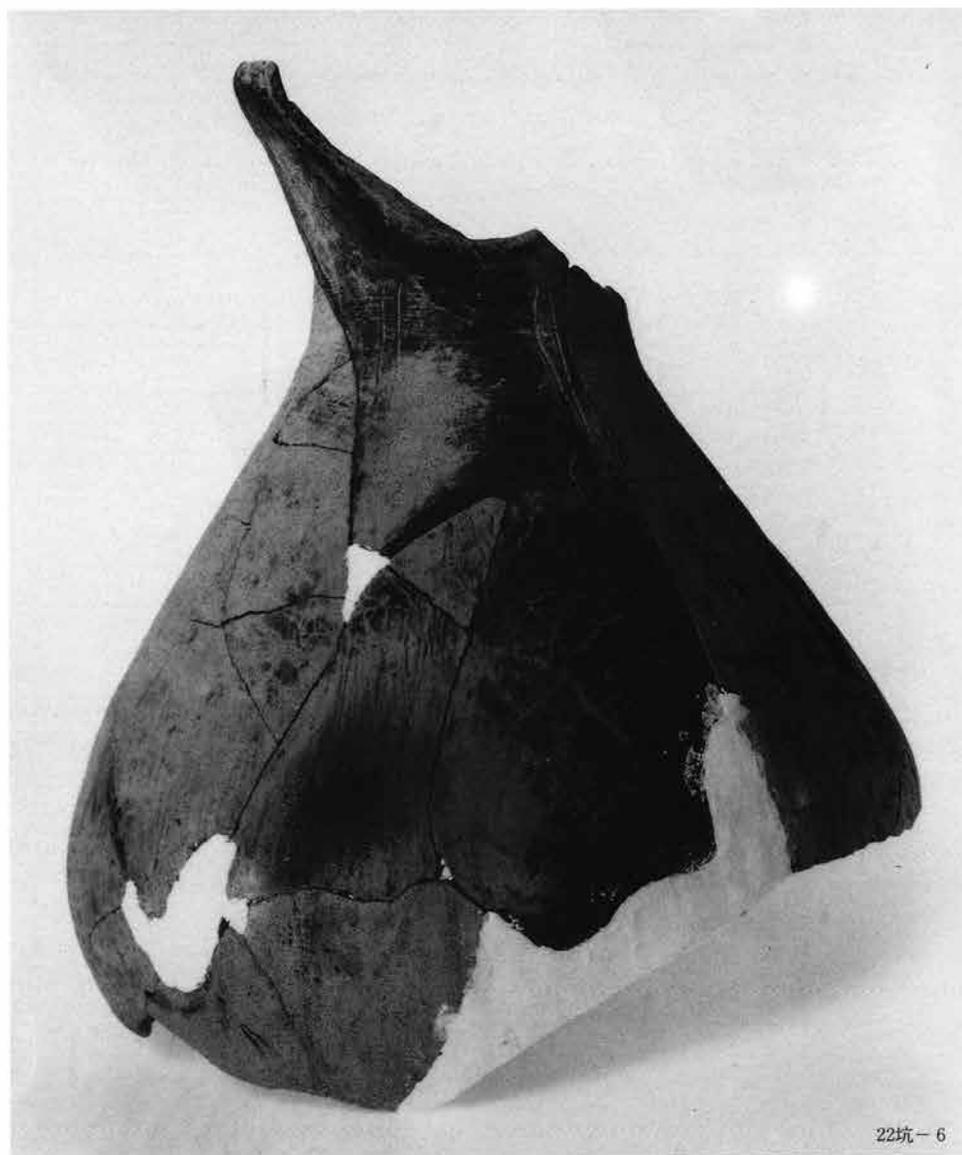


2号特殊井戸

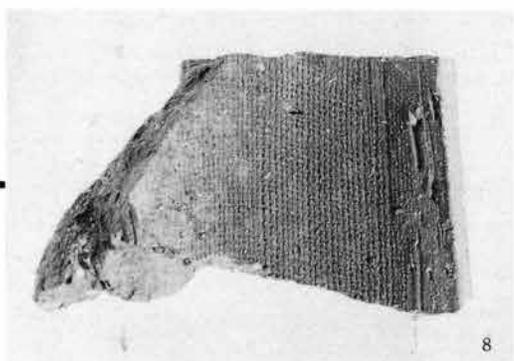
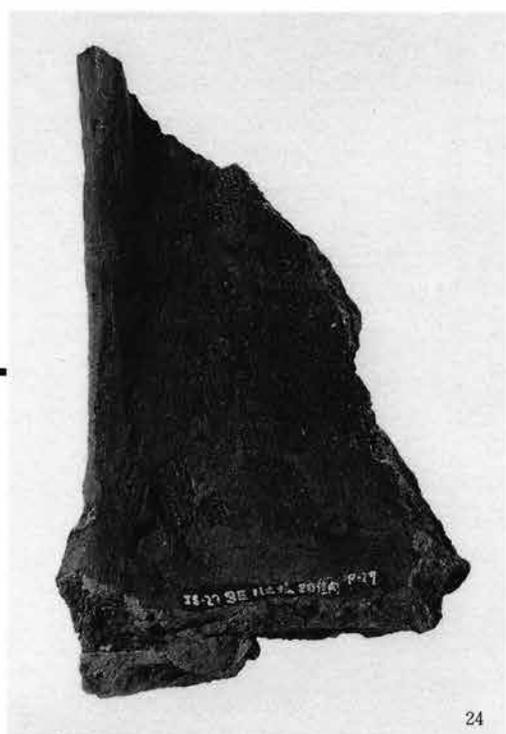
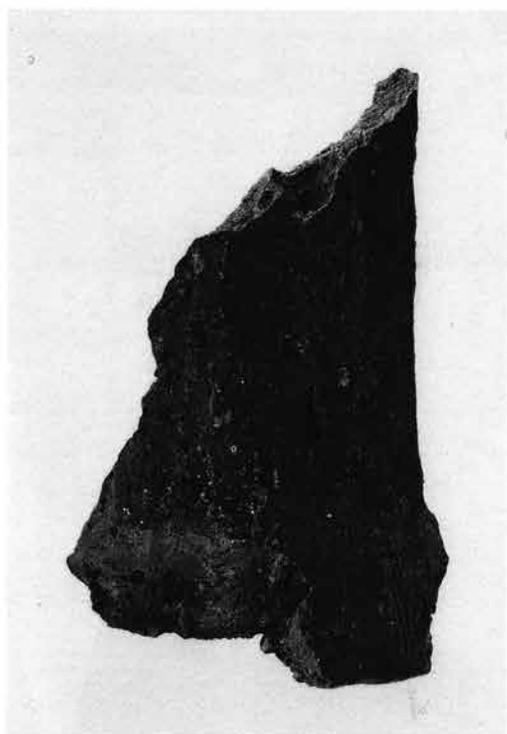
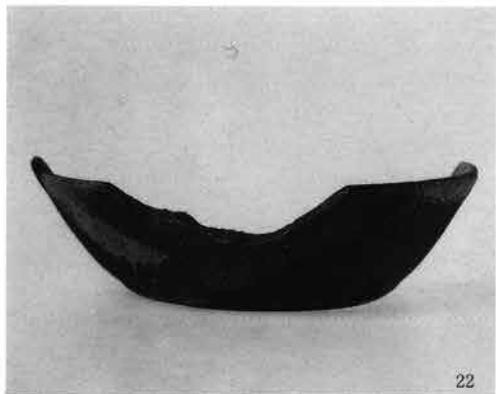


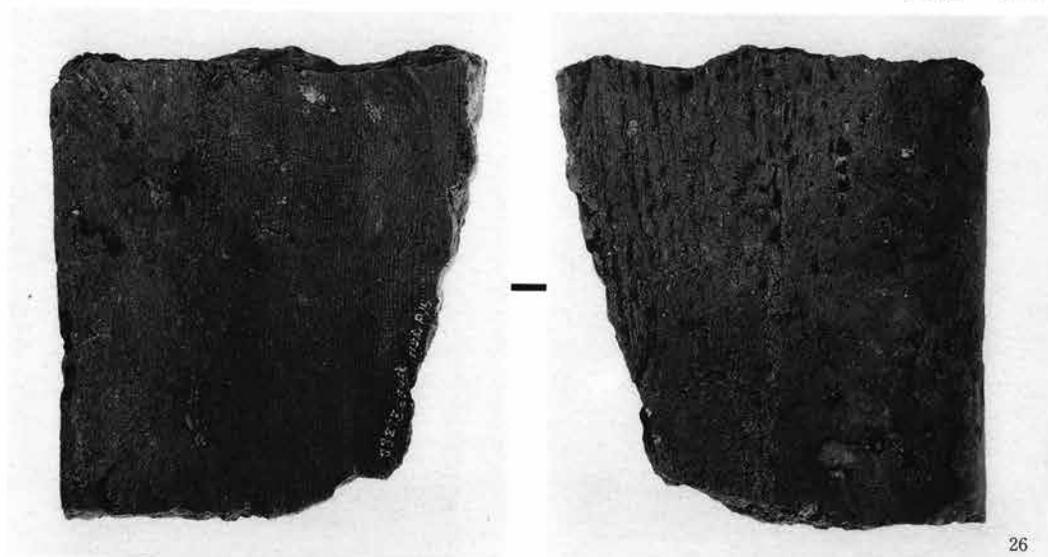




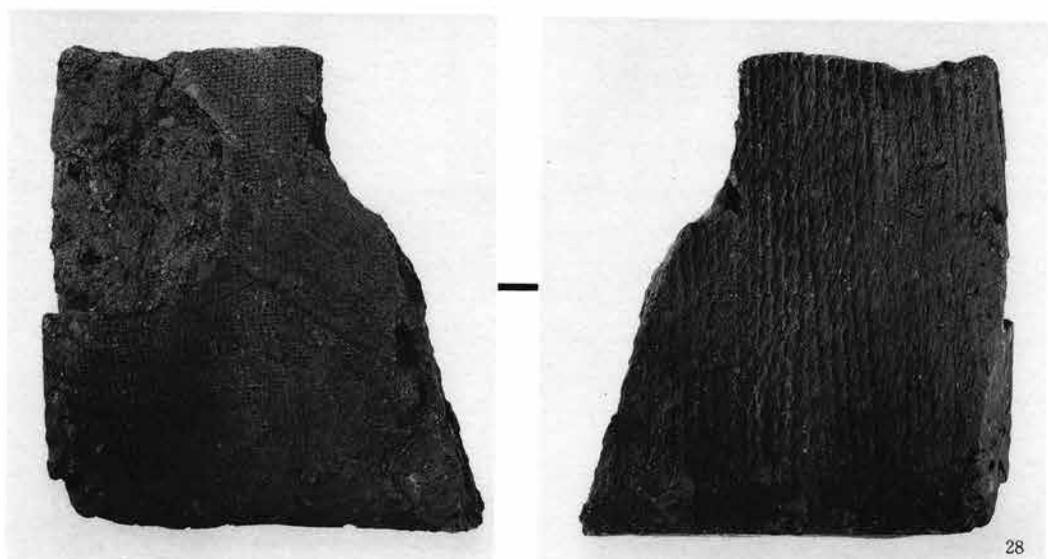




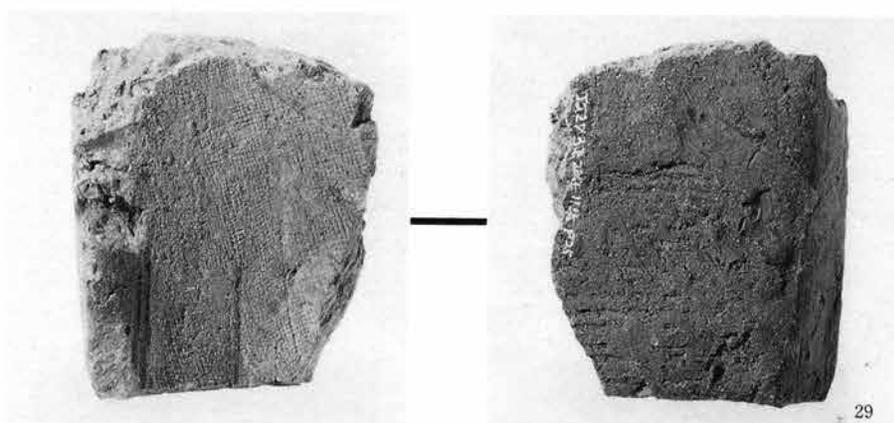




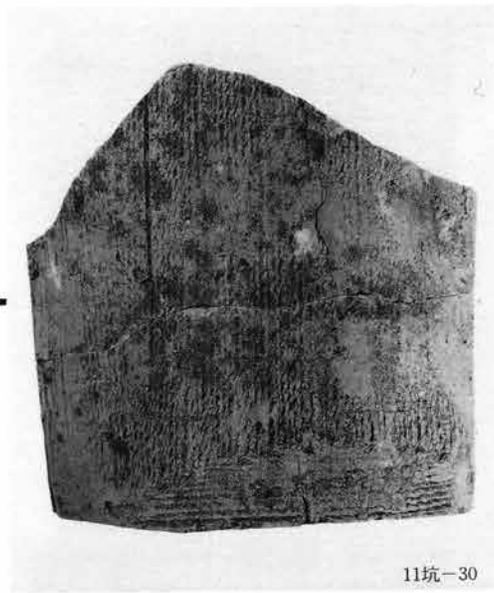
26



28



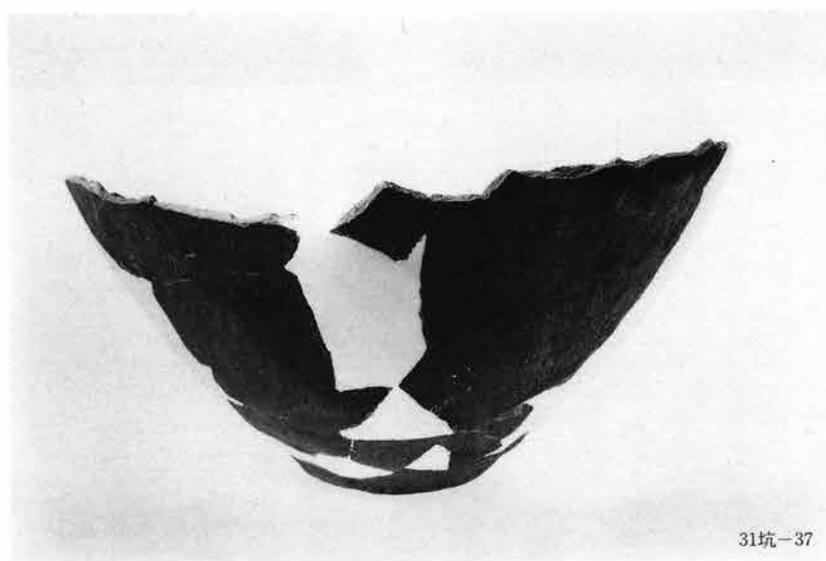
29



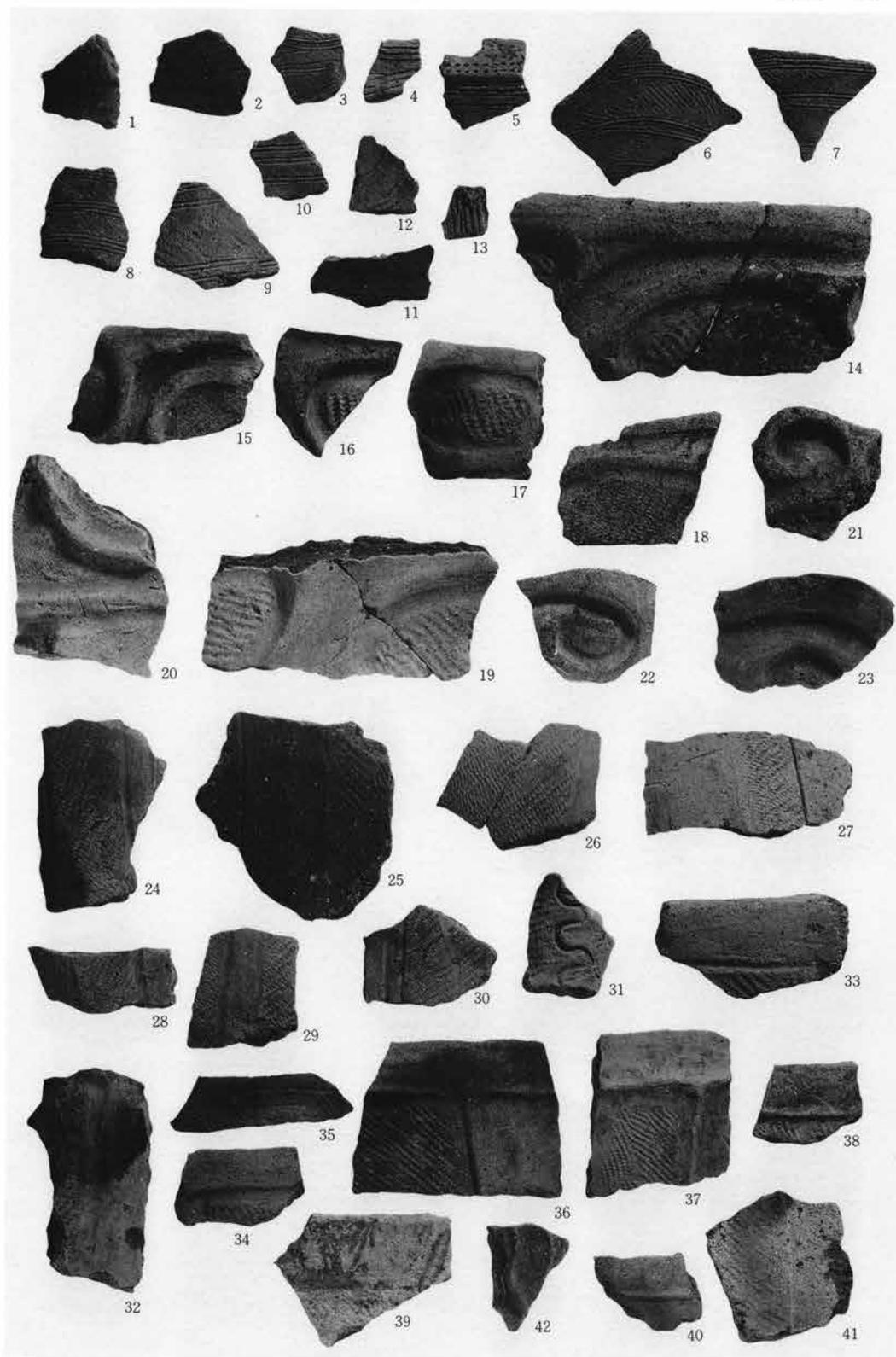
11坑-30



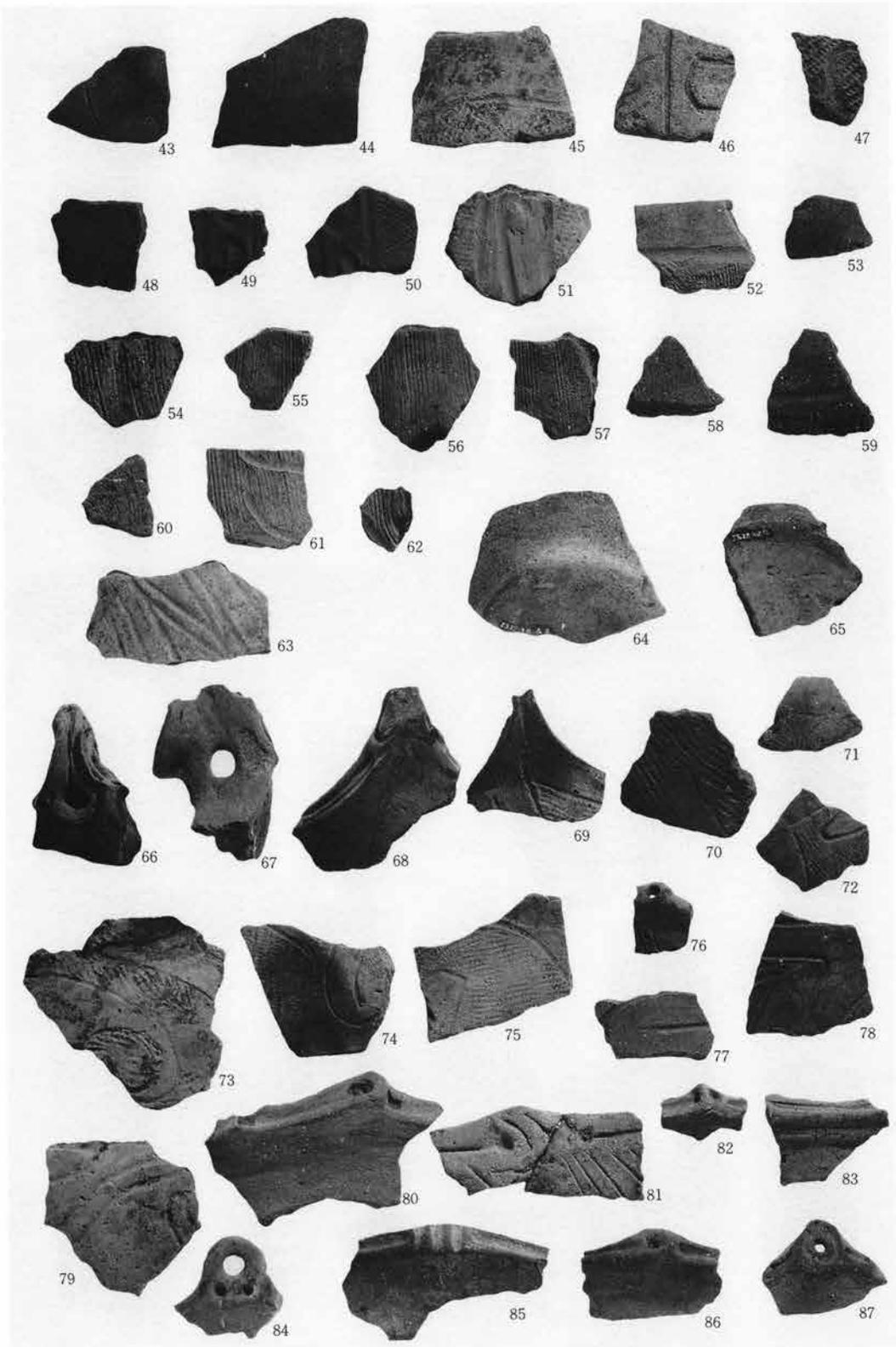
25坑-36



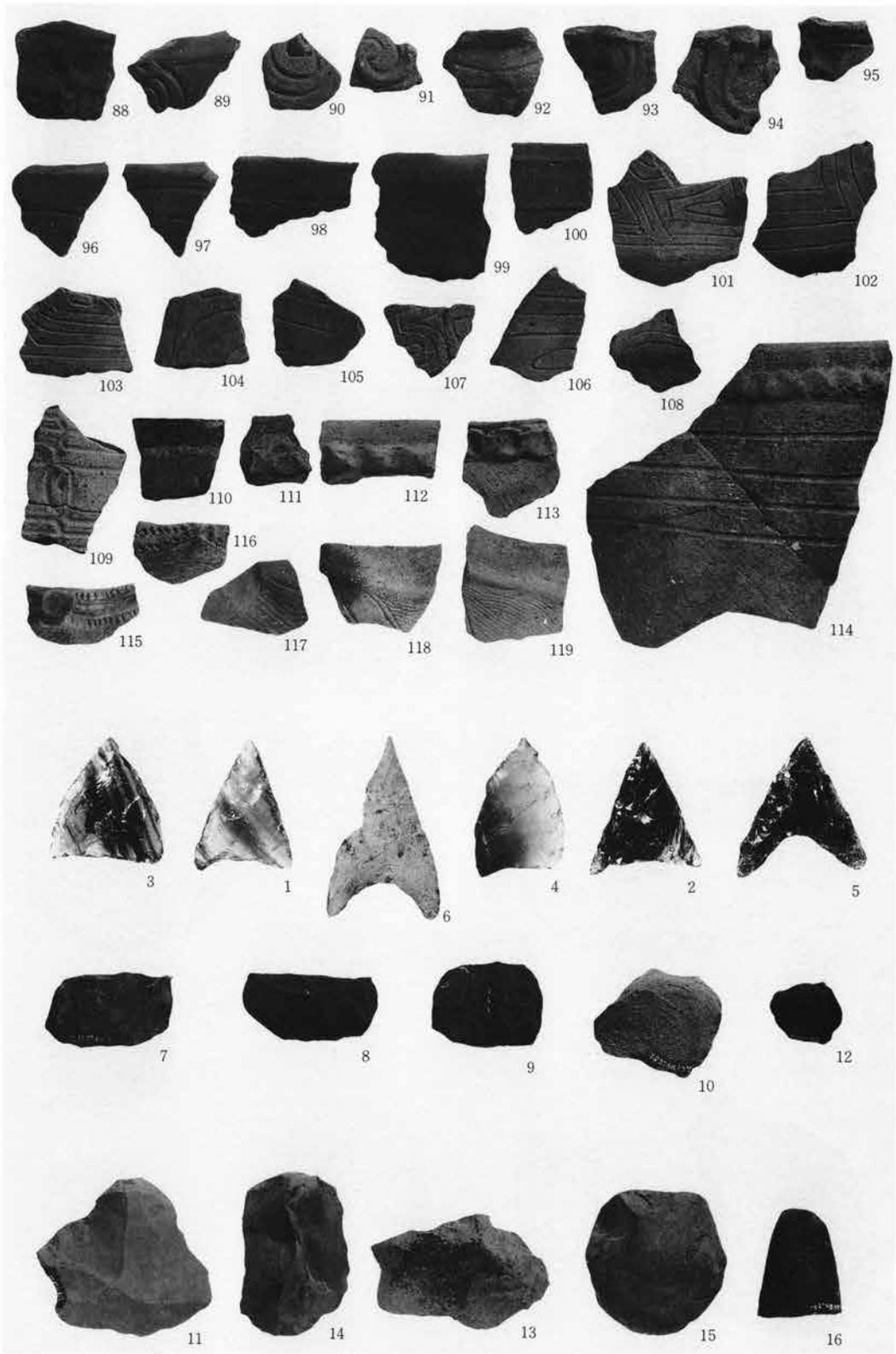
31坑-37



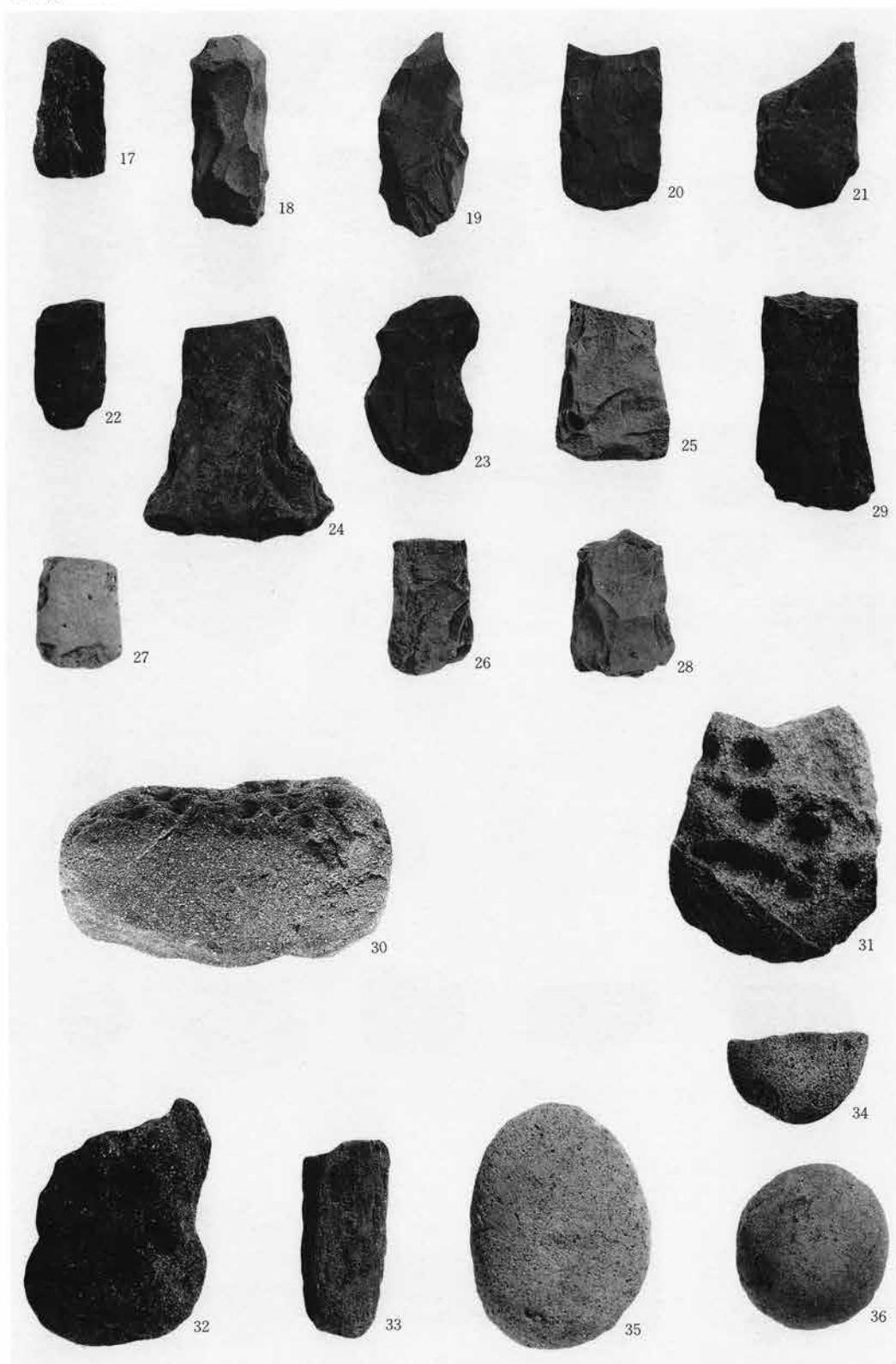
遺構外（縄文）



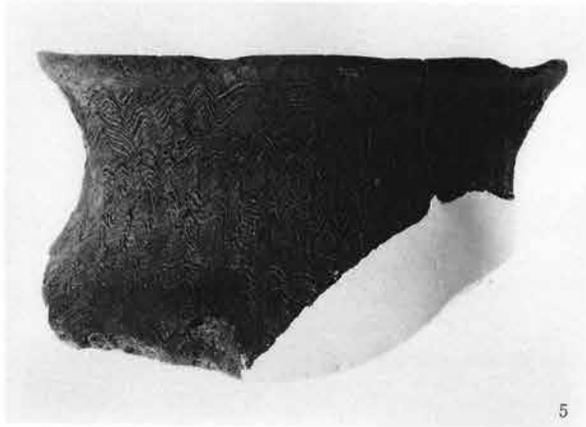
遺構外（繩文）



遺構外（縄文）



遺構外（縄文）



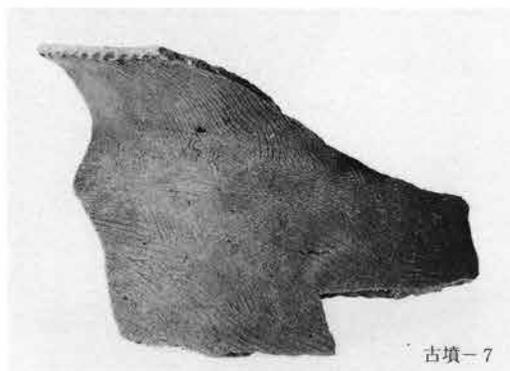
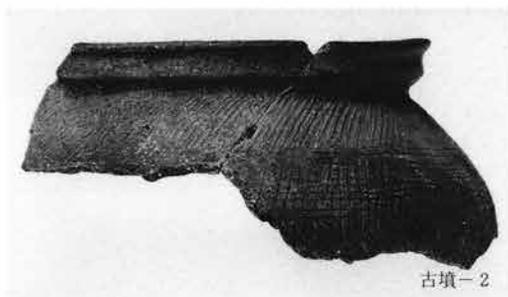
遺構外（弥生）



遺構外(弥生)



遺構外（弥生）



遺構外 (弥生・古墳)



遺構外（古墳・古代）

遺 構 索 引

(索引事項が連続して複数頁にわたる場合は、最初の頁のみを表示した)

豎 穴 住 居 址

	時 代	遺 構 図	本 文	遺 物 図	観 察 表	遺 構 写 真 図 版	遺 物 写 真 図 版
1号住居址	古墳時代	63	63	64	66	15	81
2号住居址	古墳時代	67	68	69	70	16	82
3号住居址	古墳時代	72	71	73	75	16	82
4号住居址	弥生時代	12	12	13	14	3	65
5号住居址	古墳時代	67	71	71	71	16	
6号住居址	古墳時代	72	76	76	76	17	
7号住居址	弥生時代	15	14	15	16	4	66
8号住居址	弥生時代	第13図	16	17	17	4	
9号住居址	弥生時代	18	19	19	19	5	66
10号住居址	弥生時代	20	21	21	21	5	66
11号住居址	弥生時代	22	22	23	23	6	
12号住居址	弥生時代	24	23	25	25	6	68
13号住居址	弥生～古墳	26	25	27	27	7	68
14号住居址	弥生時代	24	24				
15号住居址	弥生時代	29	28	30	31	8	70
16号住居址	弥生時代	第27図	32	33・38	36	8	71
17号住居址	縄文時代	9	9	10	11	3	64
18号住居址	弥生時代	39	38	40	41	10	74
19号住居址	弥生時代	42	43	43	43	11	74
20号住居址	古 代	103	104	104	104	24	91
21号住居址	弥生時代	44	45	45	46	11	75
22号住居址	弥生時代	48	48	49	50	12	76
23号住居址	古 代	105	106	106	106	24	91
24号址	古 代	107	107	107	108	25	
25号住居址	古 代	109	108			25	
26号住居址	古 代	109	108	110	110	25	91
27号住居址	古墳時代	109	108	110	110	25	92
28号住居址	古 代	111	111	112	112	26	92

	時 代	遺 構 図	本 文	遺 物 図	観 察 表	遺 構 写 真 図	遺 物 写 真 図
29号住居址	古 代	111	112	112	112	26	
30号住居址	古 代	113	113	113	113	26	
31号住居址	古 代	114	115	115	117	27	92
32号住居址	古 代	119	118	120	121	28	93
33号住居址	古 代	122	123	123	123	28	95
34号住居址	古 代	124	125	125	126	28	95
35号住居址	古 代	124	125	126	126	28	95
36号住居址	弥生時代	第42図	51	51	52	12	78
37号住居址	弥生時代	53	53	54	55	13	79
38号住居址	古 代	127	128	128	128	29	96
39号住居址	弥生時代	57	56	58	58	29	
40号住居址	古 代	129	130	130	130	30	
41号住居址	古 代	131	130	132	133	30	96
42号住居址	古 代	134	133	135	135	30	96
43号住居址	古 代	136	135	137	137	31	
44号住居址	古 代	138	137	139	139	31	
45号住居址	古 代	140	141	141	141	32	97
46号住居址	古 代	142	141	143	143	32	
47号住居址	古 代	144	143			32	
48号住居址	弥生時代	59	58	60	60	14	80
49号住居址	古 代	145	144	146	146	33	
50号住居址	古 代	147	146	148	148	33	97
51号住居址	古墳時代	77	78	79	78	17	84
52号住居址	古墳時代	80	81	81	82	17	86
53号住居址	古墳時代	83	84	84	84	19	87
54号住居址	古墳時代	85	86	86	86	20	
55号住居址	古墳時代	87	88	88	88	20	
56号住居址	古墳時代	89	88	90	91	21	88
57号住居址	古墳時代	92	92	93	94	21	89
58号住居址	古墳時代	95	94	96	96	22	89
59号住居址	古墳時代	97	96	98	98	22	89
60号住居址	古墳時代	99	99	99	99		90

	時 代	遺 構 図	本 文	遺 物 図	観 察 表	遺 真 構 図 写 版	遺 真 物 図 写 版
61号住居址	古 墳 時 代	100	99	101	102	23	90
62号住居址	古 代	149	149				
63号住居址	古 代	150	149	151	151	33	
64号住居址	古 代	152	151	154	155	34	97
65号住居址	古 代	156	155	157	157	34	
66号住居址	古 代	158	159	159	161	35	97
67号住居址	弥 生 時 代	61	62	62	62	14	80
68号住居址	古 代	162	163	163	165	36	98
69号住居址	古 代	162	165	165	166	36	
70号住居址	古 代	166	167	168	168	36	98
71号住居址	古 代	169	169	170	170	37	98
72号住居址	古 代	171	171	171	172	37	98
73号住居址	古 代	173	172	174	174	38	
74号住居址	古 代	173	172	175	175		

合計 74軒

掘立柱建物址

	時 代	遺 構 図	本 文	遺 物 図	観 察 表	遺 真 構 図 写 版	遺 真 物 図 写 版
1号掘立柱建物址	古 代	176	175			39	
2号掘立柱建物址	古 代	177	176			39	
3号掘立柱建物址	古 代	178	177			39	
4号掘立柱建物址	古 代	179	178			40	
5号掘立柱建物址	古 代	179	178			40	
6号掘立柱建物址	古 代	180	180			40	
7号掘立柱建物址	古 代	181	180			40	
8号掘立柱建物址	古 代	182	183			40	
9号掘立柱建物址	古 代	183	183			40	

合計 9棟

島 址

	時 代	遺構図	本 文	遺物図	観 察 表	遺 構 写 真 図 版	遺 物 写 真 図 版
1号島址	中～近世	185	184			41	
2号島址	中～近世	185	184			41	
3号島址	古墳時代	第175図	186			41	
4号島址	古代～中世	188	189			43	
5号島址	古墳時代	188	189			43	
6号島址	古墳時代		189				

合計 6面

道路状遺構

	時 代	遺構図	本 文	遺物図	観 察 表	遺 構 写 真 図 版	遺 物 写 真 図 版
	古 代	199	198	207	208	45	100

溝

	時 代	遺構図	本 文	遺物図	観 察 表	遺 構 写 真 図 版	遺 物 写 真 図 版
1号溝	古墳時代	190	190	191	192		
2号溝	古墳時代	190	190	193	193		99
3号溝	古 代	204	204				
4号溝	古 代	205	204	207	208	47	
5号溝	古 代	205	206			47	
6号溝	古 代	200	203				
7号溝	古 代	209	206	207	208		
8号溝	古墳(?)	190	190				
9号溝	古墳(?)	194	195	195	195	44	
10号溝	弥生時代	194	195	196	196	44	99
11号溝	古 代	197	197	197	198	45	
12・13号溝	欠 番						
14号溝	弥生～古墳	209	208				
15号溝	弥生時代	209	210	210	212	47	99・101

	時 代	遺 構 図	本 文	遺 物 図	観 察 表	遺 真 構 図 写 版	遺 真 物 図 写 版
16 号 溝	古 代	214	215	215	215		
17 号 溝	弥生～古墳	214	215			48	
18 号 溝	古墳～古代	202	202	206	207	46	100
19 号 溝	古 代	200	203	207	208		100
20 号 溝	古 代	200	203	207	208		100
21 号 溝	古 代	215	216	216	217	47	101
22 号 溝	不 明	218	217			48	
23 号 溝	古 代	219	217				
24 号 溝	古 代	220	219	220	220		
25・26号溝	欠 番						
27 号 溝	古墳時代	221	222	222	223		
28 号 溝	古墳時代	221	222	222	223	48	
29 号 溝	古墳時代	221	222			48	
30～33号溝	欠 番						
34 号 溝	不 明	224	223				
35 号 溝	不 明	224	223				
36 号 溝	不 明	224	223				
37 号 溝	不 明	225	223				
合計	29条						

特 殊 井 戸

	時 代	遺 構 図	本 文	遺 物 図	観 察 表	遺 真 構 図 写 版	遺 真 物 図 写 版
1号特殊井戸	古墳時代	第209図	226	231	235	49	102
2号特殊井戸	古 代	第209図 219	238	241	248	49・51	105
合計	2基						

井 戸

	時 代	遺 構 図	本 文	遺 物 図	観 察 表	遺 真 構 図 写 版	遺 真 物 図 写 版
1号井戸	古墳時代	257	254	262	264	54	110
2号井戸	古 代	257	254				
3号井戸	古 代	257	254	262	265		
4号井戸	古墳～古代	257	254			54	
5号井戸	古 代	258	254	262	265		111
6号井戸	弥生時代	258	254	260	263	54	
7号井戸	弥生時代	258	255	260	263	55	110
8号井戸	弥生(?)	258	255			55	
9号井戸	古 代	259	255	263	265		
10号井戸	弥生(?)	259	255				
11号井戸	古墳(?)	259	255	263	265	55	
12号井戸	不 明	259	255				
13号井戸	古 代	259	256			56	
14号井戸	古 代	260	256			56	
15号井戸	弥生時代	260	256	261	264	56	110
合計	15基						

土 坑

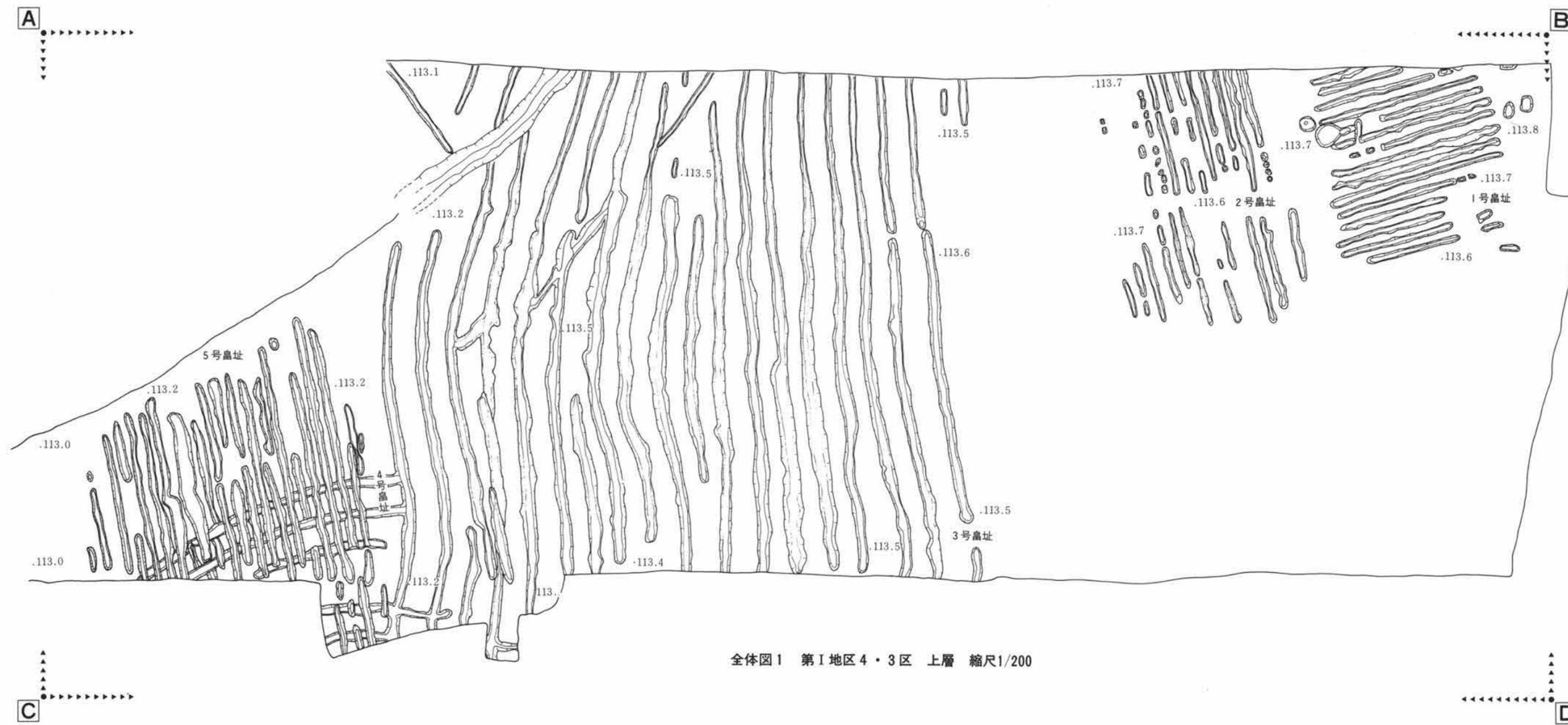
	時 代	遺 構 図	本 文	遺 物 図	観 察 表	遺 真 構 図 写 版	遺 真 物 図 写 版
1号土坑	古墳～古代	274	266			57	
2号土坑	古墳時代	274	266				
3号土坑	古墳時代	274	266	281	283		112
4号土坑	欠 番						
5号土坑	不 明	274	266				
6号土坑	不 明	274	266				
7号土坑	不 明	274	266				
8号土坑	不 明	274	266				

	時 代	遺 構 図	本 文	遺 物 図	観 察 表	遺 構 写 版 真 図	遺 物 写 版 真 図
9号土坑	弥生～古墳	275	267			57	
10号土坑	欠 番						
11号土坑	古 代	275	267	285	289	57	114
12号土坑	欠 番						
13号土坑	中世(?)	275	267				
14号土坑	中世(?)	275	267				
15号土坑	古墳～古代	275	267				
16号土坑	不 明	275	267				
17号土坑	不 明	275	267			58	
18号土坑	古墳時代	276	268	288	289		
19号土坑	古墳時代	276	268	288	290		
20号土坑	弥生(?)	276	268	281	283	58	
21号土坑	欠 番						
22号土坑	弥生時代	276	268	281	283	58	112
23号土坑	不 明	276	268				
24号土坑	欠 番						
25号土坑	古墳時代	276	268	288	290	59	116
26号土坑	欠 番						
27号土坑	弥生(?)	277	268	282	284	59	
28号土坑	不 明	277	269				
29号土坑	不 明	277	269				
30号土坑	不 明	277	269				
31号土坑	中 世	277	269	288	290	59	116
32号土坑	不 明	277	269				
33号土坑	古墳～古代	277	269				
34号土坑	不 明	277	269				
35号土坑	弥生時代	277	270	282	284		
36号土坑	不 明	277	270				
37号土坑	弥生時代	278	270	282	284		
38号土坑	不 明	278	270				
39号土坑	弥生時代	278	270	283	284		
40号土坑	古墳～古代	278	270				

熊野堂遺跡 (1) —上越新幹線関係埋蔵
文化財発掘調査報告第3集—

印刷 昭和59年3月26日
発行 昭和59年3月31日

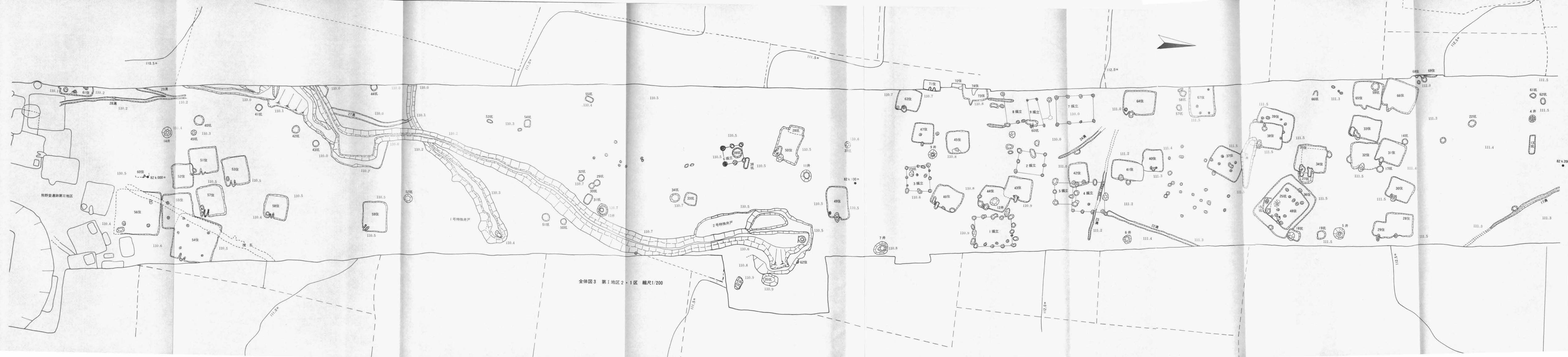
編集・発行 群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
(0279) 52-2511(代)
印刷 朝日印刷工業株式会社



全体图1 第I地区4·3区 上層 縮尺1/200



全体图2 第1地区4・3区 縮尺1/200



全体图3 第I地区2・1区 縮尺1/200

